

令和2年（西暦2020年）度

国際仏教学大学院大学

博士学位論文

Saddharmapuṇḍarīkasūtra 第2章 *Upāyakauśalya*

における *ābhimānika*（増上慢）の研究

指導教員 齋藤 明 教授

仏教学研究科 博士課程

学籍番号 14113 富永曜照

目次

目次	i
謝辞	v
凡例	vii
略号一覧	viii
序論	1
0.1 本研究の動機	1
0.2 SP 研究史および問題点	4
0.2.1 校訂本	4
0.2.2 サンスクリット写本ならびに漢訳	7
0.2.3 SP の成立史	13
0.2.4 SP における増上慢の検討	16
0.2.4.1 <i>abhimāna</i> (<i>adhimāna</i>) の語義解釈	17
0.2.4.2 第 2 章 <i>Upāyakausalya</i> にみられる増上慢引用箇所について	18
0.3 本論文の目的および構成	32
0.4 研究方法	33
第 1 章 「五千起去」長行ならびに関連する第 39 偈の検討	37
1.1 「五千起去」の内容: 長行箇所に関して	39
1.1.1 ネパール系写本	42
1.1.2 Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本	45
1.1.3 チベット語訳諸版本・写本	47
1.1.4 日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本	49
1.1.5 敦煌出土『法華経』写本	50
1.1.6 考察	51
1.2 「五千起去」の内容: 第 39 偈に関して	54
1.2.1 ネパール系写本	56
1.2.2 Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本	59
1.2.3 チベット語訳諸版本・写本	60
1.2.4 日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本	62

1.2.5	敦煌出土『法華經』写本	63
1.2.6	考察	64
1.3	小結	67
第2章	「五千起去」増上慢に関する中国註釈家の解釈	71
2.1	世親『法華論』における増上慢の解釈	72
2.1.1	仏説を聞いた際の驚怖に関する説明	73
2.1.2	三止三請の説明	76
2.1.3	増上慢の特徴に関する説明	76
2.1.4	授記の種類に関する説明	77
2.1.5	考察	79
2.2	道生『法花経疏』における不自見ならびに増上慢の解釈	80
2.2.1	五千起去の意義に関する説明	80
2.2.2	五千起去の偈頌に関する説明	81
2.2.3	得失に関する説明	81
2.2.4	考察	83
2.3	法雲『法華義記』における不自見ならびに増上慢の解釈	84
2.3.1	「方便品」五千起去に関する長行箇所を検討	84
2.3.2	「方便品」五千起去に関する偈頌の検討	86
2.3.3	「方便品」における増上慢の特徴	88
2.3.4	考察	93
2.4	智顛、吉蔵、基における不自見ならびに増上慢の解釈	94
2.4.1	「方便品」五千起去に関する長行箇所を検討	94
2.4.1.1	五千起去というエピソードの解釈	94
2.4.1.2	五千人が会座から去る理由の解釈	96
(1)	「罪根深重」の解釈	96
(2)	「増上慢」の解釈	98
(3)	「未得謂得, 未證謂證」の解釈	99
(4)	「有如此失」の解釈	100
(5)	「世尊默念而不制止」の解釈	101
2.4.1.3	考察	102
2.4.2	「方便品」五千起去に関する偈頌の検討	104

2.4.2.1	偈頌における五千起去の解釈	104
	(1) 「比丘比丘尼, 有懷増上慢. 優婆塞我慢. 優婆夷不信」の解釈	105
	(2) 「不自見其過」の解釈	107
	(3) 「於戒有缺漏」の解釈	108
	(4) 「護惜其瑕疵」の解釈	110
	(5) 「是小智已出」の解釈	112
	(6) 「衆中之糟糠, 佛威徳故去. 斯人尠福徳, 不堪受是法. 此衆無枝葉. 唯有諸貞實。」の解釈	112
2.4.2.2	考察	114
2.4.2.3	「方便品」における増上慢の特徴	116
	2.4.2.3.1 智顛の解釈	116
	2.4.2.3.2 吉蔵の解釈	120
	2.4.2.3.3 基の解釈	126
2.5	小結	129
第3章	アビダルマ論書における三種菩提の解釈	133
3.1	『婆沙論』における声聞菩提、ならびに仏菩提の検討	135
	3.1.1 名句文身（「多名身」）を理解する際の三種の覚慧に関して	136
	3.1.2 三乗の種子と三乗の菩提涅槃の関係、ならびに「仏と阿羅漢の解脱が異なる旨の解釈	137
	3.1.3 結跏趺坐にする検討	140
	3.1.4 色・無色界の諸煩惱を蓋と立てない理由の説明	141
	3.1.5 縁性を理解する際の「智」に関する説明	142
	3.1.6 出家を勧める理由に関して	145
	3.1.7 梵福を生じる所作に関して	145
	3.1.8 大悲の意義	147
	3.1.9 大善地法の1つである勤（精進）の説明	149
	3.1.10 四大種と四大種所造の色の説明	150
	3.1.11 道智（比丘が菩提を成ずると知る智慧）の説明	152
	3.1.12 考察	153
3.2	『婆沙論』以外のアビダルマ論書にみられる声聞菩提に関する説明について	155
	3.2.1 『施設論』に出る三種菩提について	155
	3.2.2 『俱舍論』『俱舍釈論』『順正理論』『阿毘達磨蔵頌宗論』に出る三種菩提について	156

3.2.3 考察	159
3.3 『俱舍論』における仏と二乗の相違について	160
3.4 小結	165
結論	167
参考文献	173
Appendix A The translation of the Kashgar ms.	1
Appendix B Some grammatical features of the Kashgar ms.	79
Appendix C Some distinctive features of the Kashgar ms.	101
Word Index to Sanskrit text (the Kashgar ms. and KN)	111

謝辞

まず初めに、この博士学位論文を書くに至り、仏教学を学ぶ楽しさと奥深さを教えて下さった全ての教授に深く感謝の念を伝えたい。

指導教授である斎藤明先生は、博士学位論文の第一歩ともいえる第1章のテーマ、すなわち、『法華経』「方便品」にでる増上慢がこの過失を見るのか、もしくは見ないのかという点を研究するきっかけを下さった。研究に対する深い洞察の基にご指導いただいた数年間の結果が、本論文である。幅田裕美先生は、Kashgar 写本に見られる特徴的な名詞・動詞の形をご教示下さった。幅田先生の写本解読に向き合う情熱と膨大な知識、そして楽しく熱心なご指導を通して本論文 Appendix A から C に取り組むことができた。Deleanu Florin 教授に教えて頂いた *Lectio difficilior potior* の言葉は、本論文完成まで私が諦めずにこのテーマに取り組むことができた支えである。

本論文第2章は2017年一般財団法人 仏教学術振興会研究助成、さらに Appendix A から C は、第8回 BDK 日本人留学生奨学金を得て取り組むことができた。ここに一般財団法人 仏教学術振興会、公益財団法人 仏教伝道協会に深く感謝したい。加えて、一般財団法人 仏教学術振興会研究助成を申し込むきっかけを下さった三友健容教授は、私が『法華経』を研究するきっかけを下さった恩師であり、博士学位論文完成までの間、特に大きなきっかけとなった留学も応援して下さいました。

2018年9月から2020年10月まで、本学と学生交流協定を結ぶ University of California Berkeley にて仏教学を勉強する機会を得た。このような素晴らしいチャンスを頂けたことは、本学関係者の皆様の深いサポートなしには成り得なかった。ここで、UC Berkeley でお世話になった全ての教授に感謝の念を伝えたい。特に2年に渡る留学中、さらに日本帰国後も勉強の機会を下さった Alexander von Rospatt 教授は、真摯な姿勢で学問に取り組む大切さを教えて下さった。さらに留学中、数えきれない勉強のチャンスを下さり、2年間の留学が実り多いものとなったのは、Alexander von Rospatt 教授のお蔭である。Sally J. Goldman 教授のサンスクリット授業は、私にサンスクリット語の楽しさと奥深さを教えてくれた。Sally J. Goldman 教授に出会い、その素晴らしい人間性と授業内容に出会ったことが、Appendix A から C に取り組んだきっかけである。Appendix A を始める第一歩となった、Kashgar 写本のカラー印刷を見る機会を下った Paul Harrison 教授にもこの場を借りて御礼申し上げたい。加えて、2019年の春学期、辛嶋静志教授の授業を受けたこと、留学中に幾度となく勉強だけでなく留学についてもアドバイスを頂けたことは、今でも私の宝である。“When you come back to Japan, please join our Brahmi Club, where we read Sanskrit manuscripts and fragments from Central Asia.” の言葉を支えに、Appendix A に取り組んだ。残念ながら辛嶋教授と写本を読む機会は得られなかったが、先生の言葉はこれからも私の支えとなるだろう。

次に、博士学位論文完成までの間、勉強面だけでなく精神的にも支えてくれた多くの友人に感謝の念を伝えたい。特に木村紫さんは第3章のテーマを研究中、多くのアドバイスを下さり、時には図書館で共に勉強して下さった。上杉優さんは留学中、必要な文献のPDFを日本から送ってくれるだけでなく、精神的に常に支えてくれた。更にまた、本論文第1章で扱った日本古写経に伝承される諸写本の閲覧は上杉智英さんのお蔭である。留学中、日本で開催された学会などの情報を共有してくれた中井本勝さんにも感謝の念を伝えたい。留学中、Berkeleyの授業で出会ったすべてのクラスメートには、この場を借りて心からの感謝を伝えたい。特に、常にユーモアを以て支えてくれた Nora Melnikova, 優しく励まし助けてくれた Chih-ying Wu, Alex Ciolac, Petra Lamberson, Paul Thomas には感謝しきれない。彼らに出会わなかったならば、博士学位論文を完成するという強い意志と熱意を持続することは出来なかつたらう。留学中に英語の添削をしてくれた Nikki Ellen, Appendix A から C までの校正でお世話になった Matthew Taylor 教授にも深く御礼申し上げる。加えて、留学に際し経済的支援をして下さった高橋孝治さんにもこの場を借りて御礼したい。

最後は私の家族への感謝である。仏教学を勉強する機会をくれた母、冨永恵生、留学を応援してくれた叔父、土田恵敬、両名の経済的・精神的サポートに深く感謝したい。

凡例

一、本文の表記は常用漢字、現代仮名遣いにて統一した。ただし引用文・固有名詞等はこの限りではない。

一、本文の暦年は西暦にて表記した。

一、書名・経典名等は『』を附し、章篇名、学術雑誌所収論文等には「」を附した。

一、引用文は、本文より二字下げて表示した。なお、漢文のみ適宜「」を付した。

一、典拠の表示は下記の通り表記する。

[例] T no. 1558, 29: 101a18-19 『大正新修大蔵経』第 29 卷、101 ページ、上段、18—19 行を意味する。

一、引用文における傍線、傍点、数字、『』、段落分けは註記のない限り私に附したものである。

一、呼称に関しては、文脈により適宜、変更した。

Vasubandhu 世親

仏陀 仏、如来、世尊

一、略号については次頁の通り表記する。

略号一覽

AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya</i> of Vasubandhu (ed. Pradhan 1975)
BHS	Buddhist Hybrid Sanskrit
BHSD	<i>Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary</i> (ed. Edgerton 1953)
BHSG	<i>Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar</i> (ed. Edgerton 1953)
Bibliotheca Buddhica 33	<i>Саддхармапундарика-сутра (Памятники письменности Востока 73-1, 1985)</i>
Bibliotheca Buddhica 34	<i>Саддхармапундарика-сутра (Памятники письменности Востока 73-2, 1990)</i>
CPD	<i>A Critical Pāli Dictionary</i> (eds. Trenckner et al. 1924-2011)
D	sDe dge Kanjur
Dictionary of Pāli	<i>A Dictionary of Pāli</i> (ed. Cone 2001-2020)
KN	<i>Saddharmapuṇḍarīka</i> (eds. Kern and Nanjio 1908-1912)
Mahāniddeśa	<i>Mahāniddeśa</i> (eds. La Vallée Poussin and Thomas 1916)
Monier-Williams	<i>A Sanskrit English Dictionary</i> (ed. Monier-Williams 1899)
P	Peking Kanjur
S	Stog Palace Kanjur
Skt.	Sanskrit
SP	<i>Saddharmapuṇḍarīka-sūtra</i>
St.Petersburg Journal of Oriental Studies	<i>Неизвестные санскритские Фрагменты из Центральной Азии</i> (ed. Темкин, Э.Н. 1994)
T	『大正新脩大藏經』
Vibhaṅga	<i>Vibhaṅga</i> (ed. Rhys Davids 1904)
WT	『改訂 梵文法華經』 ([編] 荻原・土田 1934-1935)
Z	Shelkar (London) Kanjur
安慧『唯識三十頌積』	<i>Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya</i> (ed. Buescher 2007)
『俱舍論』	『阿毘達磨俱舍論』
『俱舍積論』	『阿毘達磨俱舍釋論』
『国訳一切経 毗曇部 (8) 』	『國譯一切経 毗曇部 (印度撰述部 8) 』

- | | |
|--------------------|--|
| 『国訳一切経 毗曇部 (13)』 | 『國譯一切経 毗曇部 (印度撰述部 13)』 |
| 『国訳一切経 毗曇部 (26 下)』 | 『國譯一切経 毗曇部 (印度撰述部 26 下)』 |
| 『国訳一切経 法華部 (28)』 | 『國譯一切経 法華部全 (印度撰述部 28)』 |
| 『正法華』 | 『正法華経』 |
| 『昭和新纂國譯大藏経』 | 『昭和新纂國譯大藏経 經典部第一卷』 |
| 『順正理論』 | 『阿毘達磨順正理論』 |
| 『大乘五蘊論』 | <i>Vasubandhu's Pañcaskandhaka</i> (eds. Li and Steinkellner 2008) |
| 『婆沙論』 | 『阿毘達磨大毘婆沙論』 |
| 『法花経疏』 | 『妙法蓮花経疏』 |
| 『法華義記』 | 『法華経義記』 |
| 『法華玄義』 | 『妙法蓮華経玄義』 |
| 『法華玄賛』 | 『妙法蓮華経玄賛』 |
| 『法華文句』 | 『妙法蓮華経文句』 |
| 『法華論』 | 『妙法蓮華経憂波提舍』 |
| 『発智論』 | 『阿毘達磨発智論』 |
| 『妙法華』 | 『妙法蓮華経』 |
| 『諸橋大漢和』 | 諸橋轍次『大漢和辞典』 |

0 序論

0.1 本研究の動機

Saddharmapuṇḍarīka-sūtra (以下 SP と略す) は、大別してネパール系写本、Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、およびアフガニスタン出土の Schøyen 写本という、4 系統の写本を持つ。そしてこれら 4 系統の写本間で、中央アジア出土諸写本とネパール系・Gilgit 写本は異なる経路により伝播されていることが知られる。

この点に関して Apple (2015) は、初期大乘仏典が標準化されていない複数の異本 (異なる系統本) を持つことを考える必要がある、と述べる Ruegg と Schopen の立場を示す¹。なお、Ruegg (2004) は、Bechert が、SP の中央アジア写本が単なる “just another recension of the *Saddharmapuṇḍarīka*” でない、と述べる点を脚注に引用している²。

ところで、SP 各章の成立に関しては今なお議論の余地があるが、第 2 章 *Upāyakaṣālya* を古層であると考え、横超 (1969) ならびに平川 (1989) の先行研究から考えて妥当であろう³。この第

¹ Apple (2015, p. 99): Although critical textual study is invaluable for the study of the history of the *Lotus Sutra*, recent works by Ruegg (2004) and Schopen (2009) demonstrate that scholars may need to rethink the genealogical formation of Indian Buddhist textual traditions in that Mahāyāna sūtras in their early phases had multiple recensions with no fixed, standardized form. Cf. Ruegg (2004, p. 20): Certain Mahāyāna Sūtras have been transmitted in two (or more) distinct recensions which cannot, it appears, be regarded as deriving from mere (scribal or aural) variants or revisions of either a single unified oral composition (perhaps in Middle Indo-Aryan) or from a single written text (be it in Middle Indo-Aryan or in [Buddhist] Sanskrit).

² Bechert (1976, forward of the *Saddharma-Pundarika-Sutra* Kashgar manuscript edited by Lokesh Chandra, p. 6): The Central Asian manuscripts, on the other hand, do not represent just another recension of the *Saddharmapuṇḍarīka*, but an earlier stage of textual development. Cf. Ruegg (2004, p. 21, note 27): Bechert’s conclusion there (p. 6) is that the Central Asian manuscripts represent not ‘just another recension of the *Saddharmapuṇḍarīka*, but an earlier stage of textual development’, whilst ‘the Nepalese- Kashmiri recension is the result of the work done by an individual scholar who has carefully remodeled the text of the Sūtra. His work shows the impact of Sanskrit renaissance on the development of Mahāyāna literature.’ Cf. von Hinüber (2014, p. 136).

³ 横超 (1969, p. 406)、平川 (1989, p. 320).

2章はSPの主要な教義である一乗説⁴を扱っており、くわえて五千起去と呼ばれる内容もみられる。その内容とは、釈尊の会座にいる者の内、五千人の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷がその場から退座するというものである。退座の理由として同経は、獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐くという増上慢⁵であるため、釈尊がこれから説こうとされる教説（一乗説）を聞かずに退席したという。しかしその際、釈尊は黙然として許された。この、獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐くという増上慢の解釈はアビダルマ（論）において通説となっており、増上慢の一般的特性と見做されている⁶。

ここで、SPの主要な教義である一乗と三乗に関して触れたい。藤田(1969)が述べるように、三乗に定義される声聞乗と仏乗は仏弟子と仏の差別観を表し、部派仏教、特に北伝仏教において三乗の教説が整理されるに従い、声聞乗に進む弟子は、阿羅漢は得られるが仏乗に進み仏果を得ることはできないと確定された⁷。つまり、仏弟子は仏果を得られないとして、仏との間に決定的な差を生じた。しかしながら、SPはこの観念を払拭するために「一乗」思想を提起した。Kashgar写本が *bodhisatvasamādāpaka evāhaṃ śāradvatīputra*⁸（シャーラドバティープトラよ、私はただ菩薩を励ます/

⁴ 『法華経』「方便品」に一乗思想が説かれることは、『法華論』に「第二方便品有五分示現,破二明一。」(T no. 1519, 26: 10b22-23)とあることから伺える。藤田(1969, p. 352)は一乗が『法華経』の根本的立場であり、この立場が最も力強く主張されるのは「方便品」であると述べる。

⁵ 増上慢に関しては、『俱舍論』に「於未證得殊勝徳中, 謂已證得, 名増上慢」(未だ殊勝なる徳を證得せざる中において、已に證得せりと謂うを、増上慢と名づく) (T no. 1558, 29: 101a18-19)、AKBh (p. 285: 2-3): *aprāpte viśeṣādhigame prāpto mayety abhimānaḥ* (勝れたものに対する證得が得られていないのに、私は獲得した、というのが増上慢である)と記される。詳細は序論 0.2.4.1 を参照。

⁶ SPで増上慢の特性が記されるのはKN (pp. 38, 14-39, 1): *yathāpīdam abhimānākuśalamūlenāprāpte prāptasamjñino 'nadhigate 'dhigatasamjñinaḥ* | (すなわち、増上慢という不善根により、獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているからである)、『妙法華』「増上慢, 未得謂得, 未證謂證」(T no. 262, 9: 7a9-10)、『正法華』「慢無巧便, 未得想得, 未成謂成」(T no. 263, 9: 69b20-21)である。

⁷ 藤田(1969, pp. 388-389).

⁸ Mizufune (2013, folio 47a4). Cf. 『妙法華』「但教化菩薩」(T no. 262, 9: 7a29)、『正法華』「教諸菩薩」(T no. 263, 9: 69c8)、KN (p. 40, 11): *tathāgatajñānadarśanasamādāpaka evāhaṃ śāriputra* (シャーリプトラ

教化する者である)と述べように、SPは三乗という区別を取り払い、全ての者は菩薩であり、仏は菩薩を教化する存在であると表明する。ところが、先に挙げた増上慢たちはこの教説を聞く前に釈尊の会座から退出したのである。

興味深いことに、五千起去が記される長行とそれに対応する第39偈を対比して検討すると、先に挙げた増上慢の特性に関する解釈を反映してか、これまでに公にされた校訂テキスト間に異読が見られる。すなわち、五千起去が記される長行箇所と第39偈におけるサンスクリット本の校訂に関する問題である。

Saddharmapuṇḍarīka. Eds. by H. Kern and B. Nanjio, St.-Petersbourg 1908-1912 (以下 KN と略す) では、長行に *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* (彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで)とあり、対応する第39偈の冒頭箇所もまた *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ながら)とある⁹。

これに対して荻原雲来・土田勝弥校訂本『梵文法華經』*Saddharmapuṇḍarīka-sūtram* (以下 WT と略す)では、長行は KN と同じであるが、第39偈の冒頭箇所を *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ていない)と校訂している¹⁰。

すなわち、KN と WT の読みを比較した際に2つのことが明らかとなる。

- ① KN では「知る」「見る」と肯定の形で長行と偈頌が対応している。
- ② WT では偈頌において「見ていない」という否定形が採用されている。

WT は *apaśyanta* と読むに際し、「版本には、*sampraśyanta* とあるも、(妙)に『不自見其過』とあり、この箇所の長行を見るに、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* とあり。ここに於ても *jñātvā* は *ajñātvā* なるか、或は *ta* が *na* の誤りなるかの何れかなるべく、『自ら失ありと知らずして』の義なるべし。(妙)には『有如此失』とあり。若し然らざれば *savraṇaṃ* は *avraṇaṃ* の誤りなるべきか、即ち『自ら失なしと考えて』と翻ずべし。之と同様に今も『過を見ずして』の義と見て今の如く改む。古字形にて *sa* 若しくは *saṃ* と *a* と相似たり」¹¹と説明する。つまり、WT は漢訳の読みに従い *sampraśyanta* を *apaśyanta* と校訂したと述べ、この偈頌の読みを基に長行の読みに関しても校訂する必要性を述べる。しかしながら、『法華經』の成立に関して、長行と偈頌の前後関係を巡っては今

よ、私はただ如来の知見に向けて励ます者である)。Kashgar 写本に出る一文に関しては Appendix C, 2 を参照。

⁹ KN (p. 39, 1), (p. 44, 9).

¹⁰ WT (p. 41, 1).

¹¹ WT (p. 41, note 1).

なお議論が残されているため、長行の内容を根拠に偈頌のテキストを考える、あるいはその逆に、偈頌の内容を根拠に長行のテキストを考察することに関しては慎重を要する。

しかしながら、増上慢の特性を加味して SP を読むことで、「一乗」思想を受け入れずに、すなわち「この過失を見ずに」会座から去る行動は一般的に理解され易いであろう。その反面、KN の読みである「この過失を見て」は、「増上慢」という語義解釈に着目した際、その特性が反映され、経典の内容理解に少なからぬ矛盾が生じる可能性がある。

0.2 SP 研究史および問題点

SP 研究に際してまず考えるべきことは、どの校訂本を用いるかということであろう。その理由は、SP 写本はネパール系写本だけでも 20 本を超え、更に、Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、アフガニスタン写本が存在する。つまり、出土した地域がネパール、ギルギット、中央アジア、そしてアフガニスタンと多岐に渡っている。加えて、漢訳は現存するもので 3 種類あり、その中でも鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（以下『妙法華』と略す）は、とくに日本において重要視されている漢訳である。

更にまた、SP のどの章を研究するかも重要である。その理由は、SP の各章が一時期に成立したのか、もしくは段階的に成立したのかという問題が今なお、議論されているためである。

そこでまず、SP 研究における校訂本、サンスクリット写本、漢訳、ならびに成立史に関する研究の背景を整理したい。

0.2.1 校訂本

SP 研究でテキストを引用する際の基準として用いられるのが KN である。

まず、南条文雄が 6 種類のネパール写本と Foucaux が出版したテキスト、及び Wylie が北京で得た木版梵経典中の普門品を参照して校訂した。次いで、H. Kern がその当時発見されて間もないコータン出土の写本の読みを取り入れ再校訂した¹²。

¹² WT (序, pp. 4-5), 岩本 (1962, p. 412). Cf. KN (Preliminary Notice): A.: MS. of the Royal Asiatic Society, London. B.: MS. of the British Museum, London. Ca.: Add. MS. 1682 of University Library, Cambridge. Cb.: Add. MS. 1683 of University Library, Cambridge. K.: MS. in the possession of Mr. Ekai Kawaguchi, acquired in Nepāl. W.: MS. in the

その後、KNを基に河口慧海将来のネパール写本、チベット訳（主として sDe-dge 版）と漢訳（主として『妙法華』）も参照し、WTが1934年に出版された¹³。さらにまた、1953年に Nalinaksha Dutt¹⁴が、次いで1960年に P. L. Vaidya¹⁵がそれぞれ校訂本を出版した。N. Duttならびに P. L. Vaidyaの校訂本に関して、Bechertは、「KNとWTに比して何ら改善がなされていない」と述べる¹⁶。もっとも、WT, N. Duttならびに P. L. Vaidyaの3種類の校訂本に共通するのは、いずれもKNを基としていることである¹⁷。

以上の内容をまとめると、SP研究の際の基準となる校訂本はKNであり、これは、ネパール系

possession of Mr. Watters, formerly British Consul in Formosa. O.: Indicates readings found in sundry fragments of MSS., all from Kashgar, now in possession of Mr. N. F. Petrovskij, and deposited by him in the Asiatic Museum of the Imperial Academy of Sciences in St. Petersburg. P.: The lithographic text in Nāgarī published by Ph. Ed. Foucaux in his work *Parabole de l'Enfant égaré* (Paris, 1854). Yuyama (1970, pp. 11-19): R (KNがA.として用いた): MS. No.6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London, Paper. B.: MS. Or. No. 2204, British Museum, London, Palmleaves. Cb (KNがCa.として用いた): MS. Add. 1683, University of Cambridge Library, Cambridge, Palmleaves. Cc (KNがCb.として用いた): MS. Add. 1684, University of Cambridge Library, Cambridge, Palmleaves. Tg (KNがK.として用いた): MS. No.414, University of Tōkyō Library, Tōkyō, Paper. W.: MS. formerly in the possession of the late Mr. Watters, ex-British Consul in Taiwan. WT (序, p. 5) は、Kernが校合したのは2種類の Nepalese mss., すなわち Ca.: Add. MS. 1682 of University Library, Cambridge, Cb.: Add. MS. 1683 of University Library, Cambridge と Petrovskij所蔵の Kashgar で発見された写本断片数点を用いたことを記す。Yuyama (1970, p. 16)によれば、写本 A (Yuyama カタログでは R) は明確な筆写年代は不明だが近現代であると指摘する (Date: not exactly known (but modern) [obtained by Hodgson].)。

¹³ WT (pp. 24-26), 岩本 (1962, p. 413).

¹⁴ *Saddharmapuṇḍarīkasūtram: with N. D. Mironov's Readings from Central Asian MSS (Bibliotheca Indica: a collection of Oriental works, work no. 276)*. Revised by Nalinaksha DUTT. Calcutta: Asiatic Society, 1953.

¹⁵ *Saddharmapuṇḍarīkasūtra (Buddhist Sanskrit Texts, no. 6.)*. Ed. Paraśurāma Lakshmana Vaidya. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.

¹⁶ Bechert (1976, p. 3): Nalinaksha Dutt (1953) and P. L. Vaidya (1960) did not in any way substantially improve or alter the text they took over from the two earlier editions.

¹⁷ 坂本・岩本 (1962, p. 413), 石田 (2006, p. 9).

写本を primary source としながら、随所に Kashgar 写本の読みが取り入れられていることが分かる。加えて、WT は KN を基とした校訂本ではあるが、その校訂に際してチベット語訳と漢訳も考慮されている。

ここで、SP 研究の際に基準として用いる KN は、ネパール系写本と中央アジア写本という、2 種類の異なる系統の写本の読みが混在した校訂本であるという問題点について考えたい。

この点に関して Watanabe (1975) は、KN には Kashgar 写本が区別なく (without discrimination) 再校訂に組み込まれたことで、Nepalese 写本でも Kashgar 写本でもない校訂本になった、と述べる¹⁸。さらにまた、石田 (2006) は、底本とした MS. A. (Royal Asiatic Society) がその他の 5 種類の写本と系統が別であり、加えて、全く系統が異なる Kashgar 写本が注記せずに再校訂に取り込まれたことで、結果として全く存在しない形の『法華経』ができあがったと述べる¹⁹。Watanabe (1975) ならびに石田 (2006) が指摘するように、KN は異なる系統の写本が混在するという問題点があり、このことは、今なお、研究者の間で議論されている²⁰。

すなわち、KN は、ネパール系写本を基とした SP の校訂本であると雖も、ネパール系写本のみを反映した校訂本であるとは言えず、H. Kern によって Kashgar 写本の読みが取り入れられている点に注意を払う必要がある。もっとも、Watanabe (1975) が、without discrimination と述べる点は慎重に検討したい。

一方、KN をもとに校訂した WT に関しては、漢訳とチベット語訳が考慮された校訂本であるため、それぞれの影響が校訂に反映している点に注意を払う必要がある。

¹⁸ Watanabe (1975, p. ix): To make the matter worse, Kern very often altered the text prepared by Nanjio by introducing readings of Kashgar MSS (“O”). ... In other cases, appropriate or permissible words and forms in the Nepalese MSS were replaced with those in the Kashgar MSS, which Kern calls “more original” without giving his conclusive reasons. He did know that “it [= the Kashgar text] stands wholly apart from the texts in the Nepalese MSS,” and that “it is much more prolific,” but he mixed the two kinds of texts without discrimination, so that his edition represents neither the Nepalese nor the Kashgar recension.

¹⁹ 石田 (2006, p. 8) は、写本 A は他の 5 点のネパール系写本と異なるグループに分類されることを指摘する。

²⁰ 岩松 (2010), (2011) は「方便品」第 5-7, 29 偈に関して KN テキスト校訂の問題点を指摘する。

0.2.2 サンスクリット写本ならびに漢訳

現存する SP 写本は、ネパール系写本、Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、およびアフガニスタン出土の Schøyen 写本という大別して 4 系統に区別される²¹。以下に、それぞれの写本情報を列記する²²。なお、SP サンスクリット写本の発見、ならびに研究史概観に関しては石田 (2006)、Mochizuki (2020, pp. 1-3) に、各写本の情報は Tsukamoto et al. (1988), Yuyama (1970) に詳細にまとめられている²³。

(1) ネパール系写本

K: MS. held in the Tōyō Bunko, Tokyo, Palm-leaf, brought by Ekai Kawaguchi

Pk: MS. No. 0004, held in the Nationalities Culture Palace, Peking, Palm-leaf

C1: MS. Add. 1032, Cambridge University Library, Cambridge, Paper

C2: MS. Add. 1324, Cambridge University Library, Cambridge, Paper

C3: MS. Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

C4: MS. Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

C5: MS. Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

C6: MS. Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

B: MS. Or. 2204, British Museum, London, Palm-leaf

R: MS. No. 6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London, Paper

P1: MS. Nos. 138-139, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper

P2: MS. Nos. 140-141, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper

P3: MS. No. 2, Société Asiatique, Paris, Paper

²¹ 石田 (2006, p. 2).

²² Tsukamoto et al. (1988, p. 7-9). なお Tsukamoto et al. (1978) は N1 と N2 の記載が逆である点に注意を要する。

²³ SP に関する研究は多岐に渡るが、Mochizuki and Kim (2020) は 1844-2020 年に発表された研究一覧をまとめており、これは SP 研究史を知るのに有効である。

T2: MS. No. 408, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

T3: MS. No. 409, Tokyo University Library, Tokyo, Paper

T4: MS. No. 410, Tokyo University Library, Tokyo, Paper

T5: MS. No. 411, Tokyo University Library, Tokyo, Paper

T6: MS. No. 412, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

T7: MS. No. 413, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

T8: MS. No. 414, Tokyo University Library, Tokyo, Paper

T9: MS. No. 415, Tokyo University Library, Tokyo, Paper

A1: MS. No. G 4079, Asiatic Society, Calcutta, Paper

A2: MS. No. G 4199, Asiatic Society, Calcutta, Paper

A3: MS. No. B 7, Asiatic Society, Calcutta, Paper

N1: MS. No. 4/21, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf

N2: MS. No. 3/678, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf

N3: MS. No. 5/144, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf

Āśā: Āśā Archives, Kathmandu, Palm-leaf²⁴

Bendall: Cecil Bendall manuscripts collection, Durbar Library (Bir Library; National Archives), Kathmandu²⁵

Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region²⁶

²⁴ Toda (1997, p. 657).

²⁵ Toda and Matsuda (1991, p. 23): all ten folios, written in what we now call the Gilgit/ Bāmiyān Type I script, were of about the 6th century.

²⁶ 松田 (2011, pp. 175-180), Jiang (2006a), (2006b), (2006c).

以上のネパール系写本は、11-19世紀に筆写されたものである²⁷。なお、小槻(2008)が分類するネパール系写本の最古層(11-13世紀頃)²⁸の読みを保持する写本は、以下の通りである²⁹。

(1) グループ

C3 (MS. Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)

C4 (MS. Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)

Pk (MS. No. 0004, Held in the Nationalities Culture Palace, Peking, Palm-leaf)

N1 (MS. No. 4/21, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf)

(2) グループ

B: MS. Or. 2204, British Museum, London, Palm-leaf

C6: MS. Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

T6: MS. No. 412, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

T7: MS. No. 413, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

N2: MS. No. 3/678, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf

(3) グループ

C5: MS. Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf

(4) グループ

K: MS. held in the Tōyō Bunko, Tokyo, Palm-leaf, brought by Ekai Kawaguchi

(5) グループ

N3: MS. No. 5/144, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf

²⁷ 石田(2006, p. 3).

²⁸ 小槻(2008, p. xxxii)は、それぞれの写本をグループ分けし、(1)がネパール系写本の最古層の読みを比較的良く保存し、ギルギット写本との類似性が高く、チベット語訳との関連が指摘される写本、(2)は戸田が日常的に「B系」と呼んでいたグループに属する写本、(3)から(6)はそれらの帰属が最古層のグループや「B系」と完全に一致すると断言できない写本と述べる。

²⁹ 戸田(1984, p. 142, p. 179)は、C3, C4, K, N1がより古い形の本文を有する貝葉写本群とすることができる、と述べる。Vogel(1974, pp. 4-5)はC4を1039年、C5を1064/1065年、C6を1093年、そしてKを1070年と記す。Yuyama(1970, pp. 12-19)は、K'(=K)は1069/1070、C3, T2, T6, T7は11世紀、C5は1063/1064、C6は1091/1092、Bは11-13世紀と指摘する。

(6) グループ

T2: MS. No. 408, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf

(2) Gilgit 写本

Kashmir の Gilgit 近郊で発見された Gilgit 写本は、A, B, C, および K の 4 グループに分かれ、年代は 6 世紀初めといわれる³⁰。

(3) 中央アジア出土諸写本

Lüshun³¹: Lüshun Museum Collection, 5 世紀中頃-6 世紀

Khādaliq³²: Khādaliq (Khotan より 115km 東), 7-8 世紀ごろ

Farfād-Bég³³: Farfād-Bég, 9-10 世紀

Kashgar³⁴: Khotan 近郊 (正確な位置は不明), 9-10 世紀

³⁰ Watanabe (1975, p. xi). Cf. von Hinüber (1982, p. x): probably as old as the late sixth century.

³¹ Jiang (1997, 序言 p. 37).

³² Wille (2000, p. 4, p. 15), 石田 (2006, p. 6).

³³ Toda (1981, p. lv). Cf. 石田 (2006, p. 6) は 5-6 世紀とする説を挙げる。

³⁴ Toda (1981, pp. xi-xii), 石田 (2006, p. 5). Cf. von Hinüber (2014, p. 136): Even though the undated Kashgar (Khotan) Manuscript preserves a much older and more Middle Indic text than the Gilgit-Nepalese branch, it is difficult to date this manuscript, because the script used in this copy did not change over a certain period of time. Earlier scholars such as Nikolaj Dimitrievič Mironov (1880-1936) tried to date the Kashgar (Khotan) Manuscript to the 7th century. In contrast, R. E. Emmerick assumed that the language of the colophons, which are not written in Sanskrit, but in late Khotanese, would hardly allow for a date earlier than the ninth, probably even the tenth century rather. If correct, the Kashgar (Khotan) Manuscript would have been copied more or less at the same time as the oldest Nepalese manuscripts, which are dated to the 11th century. However, given the uncertainty of dating “late Khotanese”, a date during the eighth or early ninth century seems to be more likely for the Kashgar (Khotan) Manuscript.

上記の中央アジア出土諸写本は主に Khotan 近郊で発見されたものであり、筆写年代は遅くとも 9-10 世紀である。

ところで、Kashgar 写本は Lokesh Chandra (1976)の影印版（白黒）が発刊され、Toda (1981)によるローマ字本が出版された³⁵。この影印版は白黒印刷のため、文字の解読に際してしばしば難航するという問題があった。この問題は、2013 年創価大学から刊行された Mizufune (2013) のカラー印刷された影印版により、文字を鮮明に判読することが可能となった。

(4) アフガニスタン出土写本

Schøyen 写本はバーミヤン近辺で発見されたが厳密な位置は未確定であり、文字はギルギット・バーミヤン第一型文字（6-7 世紀）である³⁶。

以上の内容をまとめると、サンスクリット写本は大別して、11-19 世紀のものであるネパール系写本、6 世紀初めとされる Gilgit 写本、古いもので 5-6 世紀、しかし大半は 9-10 世紀の中央アジア出土諸写本、および 6-7 世紀とされるアフガニスタン出土 Schøyen 写本の 4 系統に分類できる。

なおこれら 4 系統の中で、中央アジア出土諸写本と、ネパール系写本および Gilgit 写本とはテキスト伝承に関する校訂内容にかなり異なる点があると知られている³⁷。

³⁵ Toda (1981, preface): In 1976 “Saddharma-Puṇḍarīka-Sūtra, Kashgar Manuscript” was edited in facsimile by Dr. Lokesh CHANDRA in India. I undertook the project of editing a romanized text of this manuscript and the fragments of the Central Asian manuscripts from 1977 to 1979 in several instalments.

³⁶ 松田 (2011, p. 154, pp. 161-162). Cf. 石田 (2006, p. 13) は、Schøyen 写本の筆写年代は 5 世紀前後に書写された可能性があるとは指摘する。

³⁷ Berchert (1976, preface of the *Saddharma-Puṇḍarīka-Sūtra* Kashgar manuscript edited by Lokesh Chandra, pp. 5-6): It is well known from the hitherto published Central Asian fragments of *Saddharmapuṇḍarīka* that these manuscripts represent a quite different recension of the textual tradition of the Sūtra as compared with the text found in the Nepalese and Gilgit manuscripts... The Central Asian texts differ conspicuously from the text of the Nepalese manuscripts whereas the ancient manuscript fragments discovered in Gilgit are in nearly complete agreement with the Nepalese tradition.

(5) 漢訳

東アジア、特に日本における『法華経』研究において、漢訳の存在を見過ごすことはできない。

現存する漢訳は、『正法華経』10巻竺法護訳(A.D. 286)、『妙法蓮華経』7巻鳩摩羅什訳(A.D. 406)、および『添品妙法蓮華経』7巻闍那崛多共笈多訳(A.D. 601)の3種である。この3種の漢訳の関係性については、『添品妙法蓮華経』の序文が示すように、『正法華経』(以下『正法華』と略す)と『妙法華』は各々、基としたサンスクリットテキストが異なり、さらにまた、『添品妙法蓮華経』は天竺の多羅葉本を参照したことがわかる³⁸。

ここで、サンスクリット写本ならびに漢訳の年代を古い順に記載すると以下の通りとなる。

『正法華』: A.D. 286

『妙法華』: A.D. 406

Gilgit 写本: 6世紀初め

アフガニスタン出土 Schøyen 写本: 6-7世紀

『添品妙法蓮華経』: A.D. 601

中央アジア出土諸写本: 9-10世紀(Lüshun は5-6世紀, Khādaliq は7-8世紀)

ネパール系写本: 11-19世紀(K, Pk, C3-6, B, N1-3, T2, T6, そしてT7は11-13世紀)

つまり、現存するサンスクリット写本ならびに漢訳の中では年代に着目すれば、『正法華』が最も古く、次いで『妙法華』, Lüshun 蔵大谷写本, Gilgit 写本, アフガニスタン出土 Schøyen 写本, 『添品妙法蓮華経』, Khādaliq 写本, Kashgar ならびに Farfād-Bég 写本、そしてネパール系写本となる。つまり、漢訳がサンスクリット写本に比して古い、という点が明らかとなる³⁹。

次にサンスクリット写本と漢訳の関係性について触れたい。まず初めに、漢訳がサンスクリット写本に比して古い、という観点のみから、漢訳の読みを採用することについては注意を要したい。

³⁸ 「考驗二譯, 定非一本. 護似多羅之葉. 什似龜茲之文 (略) 大隋仁壽元年辛酉之歲, 因普曜寺沙門上行所請, 遂共三藏崛多笈多二法師, 於大興善寺, 重勘天竺多羅葉本。」(T no. 264, 9: 134c4-5, 13-15).

³⁹ 布施(1934, pp. 9-20)は漢訳3本を比較し、各章の構成を比較した結果、「法華経の原本中、妙法華の原本が最古本なることである。」と結論する。

すなわち、漢訳はあくまでもサンスクリット写本から翻訳されたという事実を念頭に置く必要があらう。

Karashima (1992) はサンスクリット写本と漢訳の関係を統計的分析を用いて検討し、『正法華』と『妙法華』は中央アジア出土写本と類似し、その傾向は『妙法華』のほうが高く、加えて『添品妙法蓮華経』のオリジナルテキストは現行の Gilgit 写本と類似している可能性を示唆する⁴⁰。この研究結果に基づき、大別して4系統ある SP サンスクリット写本と漢訳の関係性が明らかになった。この事実は、仮に、漢訳とネパール系写本の間には異読が見られた際は、両者が異なる SP の読みを伝えている可能性を示すであろう。

0.2.3 SP の成立史

SP が、どのような編纂過程を経て成立したかは未だ明らかとされていない。段階成立論が広く議論されてきたが、勝呂 (2009) は同時成立説をとる⁴¹。なお、各学者が提唱する SP 各章の成立史

⁴⁰ Karashima (1992, pp. 253-261): In conclusion, we cannot deny the similarity between Z. and the Central Asia MSS. and therefore we may assume the tradition of the original text of Z. to have been comparatively similar to that of these MSS. ... These statistics show clearly the similarity between L. and the Central Asian MSS. Moreover, it is remarkable that, in most of the cases, the rate of agreement between L. and the Central Asian MSS. is much higher than that between Z. and these MSS. Probably, at least as far as O. and F. are concerned, it is possible to say that L. is more similar to them than to Z. ... In conclusion, the similarity between L. and the Central Asian MSS. is undeniable, and it can be assumed the tradition of the original text of L. may have been comparatively similar to that of these MSS. ... As the similarity between Ten. and the Gilgit MS. (D1) is undeniable, we may assume that the original text of Ten. must have been a very similar one to the present Gilgit MSS. Cf. 坂本・岩本 (1962, p. 425) は『添品妙法蓮華経』に関して、「この『添品法華』は『妙法華』の訳文に従いながら、その序に記すように、校勘本に従って、『妙法華』に欠除した部分を補い、提婆達多品を宝塔品の中に編入し、陀羅尼品および囑累品の位置を変更しているのであるが、その結果は現行のネパール所伝のサンスクリット語原典と一致している。このことは『添品法華』の訳出に際して用いた校勘本が現行の原典と同形式であったこと、従って現行原典の祖型は少なくともその訳出年次（西紀 601 年）より以前に遡ることが知られよう。」と述べる。

⁴¹ 勝呂 (2009, pp. 313-418).

に関しては、伊藤(2007)に詳細にまとめられている。ここでは、SP各章の成立史研究において重視される布施(1934)がまとめた各章の成立過程を以下に示す⁴²。

- ① 第1期: 第1章(序品)から第9章(授学無学人記品)と第18章(随喜功德品)の偈頌
- ② 第2期: 第1章(序品)から第9章(授学無学人記品)と第18章(随喜功德品)の長行
- ③ 第3期: 第10章(法師品), 11章(見寶塔品), 13章(勸持品), 14章(安樂行品), 15章(従地湧出品), 16章(如来壽量品), 17章(分別功德品), 19章(法師功德品), 20章(常不輕菩薩品), 21章(如来神力品)
- ④ 第4期: その他の章

第1期に挙げた章のうち、横超(1969)、平川(1989)は、第2章 *Upāyakauśalya* を古層とする説を述べる⁴³。

SPの成立に関して、布施(1934)、ならびに横超(1969)、平川(1989)が述べるように、第2章 *Upāyakauśalya* を古層であると考えすることは可能である。このことは、第2章 *Upāyakauśalya* を扱うことがSP研究の上で重要である可能性を示唆するだろう。

しかしながら、伊藤(2007)がSP成立史に関する研究史をまとめているように、成立に関しては様々な説がある。特に、長行と偈頌の前後関係を巡っては未だ議論が残されているため、偈頌の内容を根拠に長行のテキストを考察することに関しては慎重を要する。つまり、長行と偈頌に関しては、両者の読みを比較しその整合性を検討する必要があるだろう。

以上の内容をまとめ、SP研究史の問題点として、次の4点を挙げたい。

⁴² 布施(1934, p. 125, pp. 127-199). Cf. 岩本(1962, pp. 429-430). Karashima(2001, p. 171): Based on results of the research of our predecessors as well as my own, I have tentatively divided the process of formation of the Sutra into four stages as follows: (1) *Triṣṭubh-Jagatī* verses, found in chapters from the *Upāyakauśalya*- (II) to the *Vyākaraṇa-parivarta* (IX), (2) *Śloka* verses and prose, found in those chapters, (3) Chapters from the *Dharmabhāṇaka*- (X) to the *Tathāgatarddhyabhisamkāra-parivarta* (XX), as well as *Nidāna*- (I) and *Anuparīdanā-parivarta* (XXVII), (4) The other chapters (XXI-XXVI) and the latter half of the *Stūpasamdarśana-parivarta* (XI), i.e. the so-called *Devadatta-parivarta*.

⁴³ 横超(1969, p. 406), 平川(1989, p. 320). 横超(1969, p. 406)は「方便品」「譬喩品」を最古層と考える。松本(2009)は「方便品」散文が最古層であるという仮説を立てる。

- ① KNがネパール系写本を主とする校訂本であるとしても、Kashgar写本の読みが部分的に採用されていること、さらにまた、WTは漢訳とチベット語訳も考慮して校訂されているため、それぞれの校訂本を用いる際には注意を要する。
- ② 漢訳はサンスクリット写本に比して訳出年代が古いが、漢訳はサンスクリット写本から翻訳されたものである。加えてネパール系写本より、むしろ中央アジア出土諸写本の読みに近いことを念頭に置く必要がある。
- ③ 中央アジア出土諸写本とネパール・Gilgit写本は異なる系統であるため、両者の間には異読が見られる。その際、異読をどのように解釈するかが重要な問題となろう。
- ④ 長行と偈頌の前後関係は未だ議論の余地があり、どちらが古いかは判断し兼ねる。

ここで、①から④の問題点に対して若干の考察を加えたい。

第1に、KNはKashgar写本の読みが随所に取り入れられた校訂本であるとしても、大半はネパール系写本の読みを基準としている。そこで、KNとKashgar写本を比較し、仮に、H. Kernがネパール系写本の読みを独自の考えに基づいてKashgar写本の読みに変更、もしくは変更せずにネパール系写本の読みを保持しているならば、むしろ、その箇所こそ注目すべき点と考えられよう。なお、KNを再校訂したWTは漢訳ならびにチベット語訳も参照していることから、WTの読みも補助的に使用できるであろう。

第2に、漢訳はサンスクリット写本を基として翻訳されたという観点から、漢訳のみをSP研究に用いることは不十分に感じられる。しかしながら、漢訳は訳出年代の点から考えても重要なSP研究資料であるため、漢訳とサンスクリット写本の読みを併用するべきと考える。

第3に、中央アジア出土諸写本とネパール・Gilgit写本間には比較的大きな異読が存在する。その際、漢訳ならびにチベット訳は異読を解釈する手助けとなろう。加えて、『妙法華』の注釈書であるVasubandhu著『妙法蓮華經優波題舎』、ならびに中国註釈家が著した『法華經』註釈書（竺道生(369-434)『妙法蓮華經疏』,法雲(467-529)『法華經義記』,智顗(538-597)『妙法蓮華經文句』『妙法蓮華經玄義』,吉蔵(549-623)『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』,基(632-682)『妙法蓮華經玄讚』)も、SPの読みを考える際の有効な研究資料となろう。

最後に、長行と偈頌の関係に関しては、偈頌の方が古いという先入観を持ちSPを読むことには慎重さが求められる。長行の内容を偈頌で繰り返すという經典のスタイルから考え、両者の内容を比較検討することが重要であり、仮にどちらか一方の内容を採用して読む際には、十分な根拠が必要であろう。

0.2.4 SPにおける増上慢の検討

次に、SPにおける増上慢に関する研究史を確認する。

まず、伊藤(1992)(1993a)(1993b)(1994)(1995)(1996)は、SP全章を通して、常不輕菩薩と増上慢とを対比することで、増上慢の特性を検討している。なお、KNとWTが異なる読みを示す第39偈に関して、伊藤(1993a)は、WTに倣い *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* で読み「この(不信という真の)過失を観察しえず」と解釈する⁴⁴。さらに対応する長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* を「(したがって)自身に傷失(=自尊心を傷つけられた痛み)のあるの(み)を察知して、」と読んでいる⁴⁵。つまり、第39偈の *doṣa(h)* は「不信という過失」、対応する長行箇所の *savraṇa(h)* は「傷失(=自尊心を傷つけられた痛み)」と解釈している。

望月(1988)は『法華経』にあらわれる誹謗者の例を挙げ、「五千起去」した増上慢にも触れている⁴⁶。その際、『大法鼓経』に出る「五千起去」に類似した聴衆の退座の内容と比較し、『大法鼓経』では、「退座した者が、在家の者たちと声聞・縁覚・初業の菩薩の下劣な者」⁴⁷であることが分かるが、SPではこの点が明らかでない旨を指摘する。なお同ページにて望月(1988)は「五千起去」の長行箇所を挙げ、さらに第39偈の内容にも触れてはいるが、第39偈冒頭の読みには触れていない。

荻谷(1983)は、『宝積経 迦葉品』とSPの「五千起去」の内容を比較する⁴⁸。そして、SPの五千起去は排他性を示すのではなく、かつ、彼ら増上慢の本性的規定というよりも寧ろ、一過性の状態であると結論づける⁴⁹。なお、荻谷(1983)は、WTの解釈ならびに読みではなく、KNの読みを支持し、増上慢は「自ら欠点を知る」と解釈している⁵⁰。

⁴⁴ 伊藤(1993a, p. 656).

⁴⁵ 同上.

⁴⁶ 望月(1988, pp. 25-47).

⁴⁷ 望月(1988, pp. 26-27).

⁴⁸ 荻谷(1983, pp. 77-83).

⁴⁹ 荻谷(1983, pp. 80-81).

⁵⁰ 荻谷(1983, p. 78).

五島 (1981) は提婆達多の破僧事が大乘經典の中でどのように引き継がれているかを検討し、『迦葉品』に比較的忠実に内容が継承されていると述べる。そして SP「五千起去」も提婆達多の破僧事の挿話であるという。

0.2.4.1 *abhimāna* (*adhimāna*)の語義解釈

次に、本論文で扱う増上慢 *abhimāna* (*adhimāna*) の意味を確認する⁵¹。

abhimāna に関して、CPD (p. 366) に “Erroneous conception, pride, arrogance”, Monier-Williams (p. 67) に “Self-conceit, pride” とある。

abhimāna の定義に関しては以下の通りである。

- ① 『俱舍論』 「於未證得殊勝徳中, 謂已證得, 名増上慢。」 (未だ殊勝なる徳を證得せざる中において、已に證得せりと謂うを、増上慢と名づく) (T no. 1558, 29: 101a18-19)
- ② AKBh (p. 285, 2-3): *aprāpte viśeṣādhigame prāpto mayety abhimānaḥ* (勝れたものに対する證得が得られていないのに、私は獲得した、というのが増上慢である)
- ③ 『瑜伽師地論』 「於其殊勝所證法中, 未得謂得, 令心高擧, 名増上慢。」⁵² (T no. 1579, 30: 802c3-4)
- ④ 『大乘五蘊論』 「云何増上慢. 謂於未得増上殊勝所證法中, 謂我已得, 心高擧爲性。」⁵³ (T no. 1612, 31: 849a14-16)
- ⑤ 安慧 『唯識三十頌釈』 : *abhimānaḥ | aprāpta uttare viśeṣādhigame prāpto mayeti yā cittasyonnatīḥ so 'bhimānaḥ*⁵⁴ (増上慢。高度な優れた証得が得られていないのに、私は獲得した、と言う心の高ぶり、それが増上慢である)

⁵¹ より詳細な研究は水野 (1964, pp. 533-548) を参照。伊藤 (1993a, pp. 639-648) はアビダルマ仏教および唯識思想における慢を考察する。

⁵² Cf. D no. 4039, tshi194a1; P no. 5540, 'i222b5: *khyad par rtogs pa ma thob par bdag gis thob bo snyam pa 'i 'gying ba ni mngon pa 'i nga rgyal lo* ||

⁵³ Cf. 『大乘五蘊論』 : *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Eds. Li and Steinkellner (2008, p. 8, 13-14): *abhimānaḥ katamaḥ | aprāpta uttare viśeṣādhigame prāpto mayeti yā cittasyonnatīḥ |*

⁵⁴ 安慧 『唯識三十頌釈』 : *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya*, Ed. Buescher (2007, p. 88, 3-4).

次に、*adhimāna* に関して、CPD (p. 136) に“(cf. *ati-māna* & *sa. abhimāna*), arrogance, pride”, Monier-Williams (p. 21) に“*adhi-√man*, to esteem highly” とある。

adhimāna の定義に関しては以下の通りである。

- ① *Mahāniddeśa* (1916, p. 80) に *sattavidhena māno: māno atimāno mānātimāno omāno adhimāno asmimāno micchāmāno* (七種による慢とは、慢、過慢、慢過慢、卑慢、増上慢、我慢、邪慢である)
- ② *Vibhaṅga* (1904, p. 355) に *tattha katamo adhimāno? appatte pattasaññitā, akate katasaññitā, anadhigate adhigatasaññitā, asacchikate sacchikatasaññitā: yo evarūpo māno maññanā maññitattaṃ uṇṇati uṇṇāmo dhajo sampaggāho ketukamyatā cittassa: ayaṃ vuccati adhimāno* (さて、増上慢 [の定義] とは何か? 得ていないことに関して得たと想い、為していないことに関して為したと想い、證得していないことに対して證得したと想い、悟っていないことに関して悟ったと想う。そのようなことに関する慢、思惟、我の思惟、心の高ぶり、高慢、プライドを持つこと、心の慢である。これを増上慢という)

以上の内容をまとめると、増上慢という言葉は、パーリ語では *adhimāna*、サンスクリットでは *abhimāna* に相当することがわかる。増上慢の定義に関しては、先に挙げたテキスト全てに共通して、「得ていないことに関して得たと想い、證得していないことに対して證得したと想う」心の高ぶりと言える。つまり、増上慢が未だ得ていないものとは「殊勝なる徳」あるいは「殊勝なる所證法」(*viśeṣādhigama[-dharma]*) である。

0.2.4.2 第2章 *Upāyakauśalya* にみられる増上慢引用箇所について

『妙法華』中には増上慢 (*abhimāna* または *adhimāna*) に関する記述が、「序品」に1ヶ所、「方便品」7ヶ所、「藥草喻品」2ヶ所、「法師品」1ヶ所、「勸持品」3ヶ所、「安樂行品」2ヶ所、「分別功德品」2ヶ所、「常不輕菩薩品」3ヶ所、および「普賢菩薩勸發品」に1ヶ所の総計22ヶ所に出る⁵⁵。

⁵⁵ Ejima (1985-1993, p. 24, 81). 22ヶ所の増上慢の該当箇所は、内容に関しては増上慢の説明をしている点で一致している。しかしながら、増上慢の語句に注目すると、*abhimāna* ならびに *adhimāna* の両方が用いられている。さらに『妙法華』においても、「増上慢」ならびに「僣慢」という2種類の語がみられる。

全章を通した増上慢の検討は、既に伊藤(1992)(1993a)(1993b)(1994)(1995)(1996)によって、常不軽菩薩と増上慢の対比を中心に検討されている。

本論文は第2章 *Upāyakaūsalya* の第39偈の読み、すなわち、KNが *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ながら) と読み、同箇所を WTが *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ていない) と読むことに焦点を当て増上慢の検討を行う。しかしながら、第2章 *Upāyakaūsalya* における増上慢の位置づけを確認するため、ここでは、第2章に出る7ヶ所の増上慢に関連する内容を確認する。なお、KNの内容に該当する『妙法華』ならびにチベット大蔵経・カンギュル(デルゲ版・北京版、トクパレス写本、ロンドン写本)、『正法華』は脚注に記す(下線は筆者による)。

まず、当該箇所の文脈を理解するために、「方便品」冒頭から「五千起去」が起こるまでの内容を簡単に述べる。

「方便品」は、世尊が三昧から起き上がり、「舍利弗よ、諸々の如来・応供・正等覚者が覚られた仏陀の智慧は、甚深にして見難く、悟り難く、一切の声聞、独覚には知り難い。」(*gambhīraṃ śāriputra durdṛśaṃ duranubodhaṃ buddhajñānaṃ tathāgatair arhadbhiḥ samyak sambuddhaiḥ pratibuddhaṃ durvijñeyaṃ sarvaśrāvaka pratyekabuddhaiḥ*)⁵⁶と述べる所から始まる。そのように世尊が述べた内容は、その場にいた阿羅漢、声聞乗を願う比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、独覚乗にいそしむものたちにとっては初めて聞くことであった。そのため、その場にいたものたちは世尊が述べた内容を聞き、自分たちの在り方に関して心中に疑惑を生じることとなった。

そこで舍利弗が代表して、世尊が如来の甚深の法を称嘆される理由の説明を懇請する。舍利弗の1度目の懇請の後、世尊は説明することを断る。そこで舍利弗は2度目の懇請を行うが、それに対して世尊は再び断る。以下には、舍利弗の2度目の懇請に関する偈頌(第33偈)と、それに対する世尊の返答を記す。

① 仏陀の説法と増上慢の関係(1)

atha khalv āyusmāñ śāriputro bhagavantam anayā gāthayādhyabhāṣata^① ||

vispaṣṭu bhāṣasva jināna^② uttamā santīha paśyā sahasra prāṇinām |

śrāddhāḥ^③ prasannāḥ sugate sagauravā jñāsyanti ye dharmam udāhṛtaṃ te || 33 ||

atha khalu bhagavān dvaitīyakam apy āyusmantam śāriputram etad avocāt | alaṃ śāriputrānenārthena

⁵⁶ KN (p. 29, 2-3).

prakāśitenottrasiṣyati śāriputrāyaṃ sadevako loko 'sminn arthe vyākriyamāṇe 'bhimānaprāptās ca bhikṣavo mahāprapātaṃ prapatisyanti ||⁵⁷ (①WT gāthayā 'py abhāṣata, ②WT janāna, ③WT śraddhā-)

(その時、長老の舍利弗は世尊にこの偈をもって宣べた。「勝利者 (= 仏) の中の最高の方よ、人々の帝王 (仏) よ⁵⁸、分かりやすくお話し下さい。何千もの生類が大衆にいます。あなたが説かれた法を理解するであろう人々は、信を持ち、心が澄み、善逝 (仏) に対しておおいに敬意をもつ者たちです。」すると世尊は重ねてまた、長老の舍利弗にこのように説かれた。「舍利弗よ。この事は解説されるべきではない (このことは解説しないでの方がよい)。この事が解説されるならば、神々を含むこの世間は、舍利弗よ、怯えるだろう。増上慢を得ている比丘たちは、大いなる穴に墮ちるだろう。」)

⁵⁷ KN (pp. 36, 8-37, 2). 『妙法華』 「爾時, 舍利弗欲重宣此義, 而説偈言. 法王無上尊, 唯, 説. 願勿慮. 是會無量衆, 有能敬信者. 佛復止舍利弗. 若説是事, 一切世間天人阿修羅, 皆, 當驚疑. 増上慢比丘將墜於大坑」 (T no. 262, 9: 6c12-17). 『正法華』 「時, 舍利弗以偈頌曰. 願人中王, 哀恣意説. 此出家者, 衆庶億千, 恭肅安住, 欽信慧誼. 斯之等類, 必皆欣樂. 於時世尊, 歎舍利弗. 如是至三, 告曰勿重. 諸天世人悉懷慢恣, 比丘比丘尼墜大艱難。」 (T no. 263, 9: 69a23-28) *de nas de 'i tshe* (P om. *de 'i tshe*) *tshe dang ldan pa shā ri 'i bus tshigs* (P *chigs*) *su bcad pa 'di gsol to || srog chags stong mams 'khor na mchis pa dag || dad dga' bde bar gshegs la gus pa ste || khyod kyis* (P *kyi*) *chos bstan de dag 'tshal bar 'gyur || mi dbang rgyal po gsal bar bshad du gsol || de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri 'i bu la lan gnyis su yang 'di skad ces bka' stsal to || shā ri 'i bu don 'di bshad pas ci zhib bya |* (P, S, Z ||) *shā ri 'i bu don 'di bshad na lha dang bcas pa 'i 'jig rten 'di dngangs par 'gyur te ||* (P, S |) *dge slong lhag pa 'i nga rgyal can du gyur pa mams* (S, Z ||) *g-yang sa chen por lung bar 'gyur ro ||* (D no.113, ja15b3-5; P no.781, chu17b4-7; S no. 141, ma23b2-5; Z no.172, ma24b5-25a1).

⁵⁸ 当該箇所はチベット語では *mi dbang rgyal po* (D 15b4; P 17b5; S 23b3; Z 24b6) とあるため、Watanabe (1975, p. 24) の Gilgit 写本、Tsukamoto et al. (1988, p. 112) のネパール系写本の Pk, C1-C3, P3, T3, T6, T8, A2, A3, N1, ならびに Toda (1981, p. 22) の Kashgar 写本の *narendrarājā* を採用する。*narendrarājā* の訳は「人々の帝王 (= 仏) よ」となり、この訳は「正法華」の訳語である「人中王」に近いと言えようか。従って、この場合には、この偈は第 2, 3 韻脚が *indravamsā* (第 2 韻脚は --v --v v-- --v- であることから *prāṇinām* は *pāṇinām* と読む必要があるだろう)、第 1, 4 韻脚が *indravajrā* となる。なお、*narendrarājā* の読みを取る写本は、Gilgit 写本、Kashgar 写本、ネパール系写本の古いものに確認されることから、*jināna uttamā* (勝利者 (仏) の中の最高の方よ) の読みよりも古い可能性が考えられようか。

上記の内容に見られる「仏の法が解説されるならば、増上慢を得ている比丘たちは大いなる穴に墮ちるだろう (*mahāprapātam prapatiṣyanti*)」の一文から、仏陀の説法を聞くことが増上慢にとって不利益であることが分かる。

② 仏陀の説法と増上慢の関係 (2)

前述①で、2度目の舎利弗の懇請に対し世尊が法を説くことを断わるといふやり取りがなされる。世尊が2度目に説法を断った際の偈頌（第34偈）を以下に記す。

atha khalu bhagavāms tasyāṃ velāyāṃ imāṃ gāthāṃ abhāṣata ||

alam hi dharmenīha^① bhāṣitena sūkṣmaṃ^② idaṃ jñānam atarkikaṃ ca |

abhimānaprāptā bahu santi bālā nirdiṣṭadharmasmi kṣipe ajānakāḥ || 34 ||⁵⁹ (①WT dharmen'īha, ②WT sūkṣmām)

（それから、世尊は、その時にこの偈を宣べられた。「ここにおいて、法は説かれるべきではない（説かないで置く方がよい）。この智慧は微妙であり、思議を超えたものである。多くの増上慢を得ている愚かなものたちがいて、法が説かれた時に、無知なる彼らは捨てるだろう。」）

第34偈は、仏が説く法（＝智慧）は微妙であり思議を超えたものであるため、無知なる彼ら（＝増上慢）は捨てるだろう（*kṣipe*）と説く。なお同箇所を『妙法華』は「不敬信」⁶⁰と訳す。

⁵⁹ KN (p. 37, 3-5). 『妙法華』 「爾時、世尊重説偈言。止。止。不須説。我法妙難思。諸増上慢者、聞必不敬信」 (T no. 262, 9: 6c18-20). 『正法華』 「世尊以偈告舍利弗。且止。且止。用此爲問。斯慧微妙、衆所不了。假使吾説、易得之誼、愚癡闇塞、至懷慢恣。」 (T no. 263, 9: 69a29-69b3). *de nas bcom ldan 'das kyis de 'i tshes tshigs su bcaḍ pa 'di dag bka' stsal to || nga yi chos 'di bshad pas chog || ye shes 'di phra brtag mi nus || byis pa mang 'khod nga rgyal can || nga yis (S, Z yi) chos bshad mi shes spong (Z spongs) || (D no.113, ja15b5-6; P no.781, chu17b7-8; S no. 141ma23b5-7; Z no. 172, ma25a1-2).*

⁶⁰ 望月(1993, p. 70)は、「本来この部分には信の語は語られておらなかったのではないか、それなのに妙法華経が敬信の語を使って信に關説したのは、無知にして愚癡闇塞なるが故に、慢心におちいり、すて

③ 増上慢の特性 (1)

前述②に示した第 34 偈の後に、舎利弗は世尊に対して 3 度目の懇請を行う。すると世尊は舎利弗の 3 度目の懇請を受け、「それゆえに、舎利弗よ、聞きなさい。正しく、善く心に受け止めなさい。私はあなたに説きましょう。」 (*tena hi śāriputra śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru || bhāṣiṣye 'ham te* ⁶¹) と言う。この世尊の言葉を受けて、いわゆる「五千起去」が起こる。

samanantarabhāṣitā ceyaṃ bhagavatā vāg atha khalu tataḥ parśada ābhimānikānāṃ bhikṣūṇāṃ bhikṣuṇīnāṃ
upāsakānāṃ upāsikānāṃ pañcamātrāṇi sahasrāṇy utthāyāsanebhyo^① bhagavataḥ pādaḥ śirasābhivanditvā^②
tataḥ parśado 'pakrānti sma | yathāpīdam^③ ābhimānākuśalamūlenāprāpte
prāptasamjñino 'nadhigate 'dhigatasamjñinaḥ | ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntāḥ |
bhagavāṃś ca tūṣṇībhāvenādhivāsayati sma ⁶² (①WT utthāy' āsanebhyo, ②WT śirasā 'bhivanditvā, ③
WT yathā 'pīdam)

ようというのは、正なるもの真なるもの等を信ずるという素直な心がないところに起因すると考えたが故なのでは」という仮説を述べる。

⁶¹ KN (p. 38, 10-11).

⁶² KN (pp. 38, 12-39, 2). 『妙法華』 「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及増上慢、未得謂得、未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止」 (T no. 262, 9: 7a7-11). 『正法華』 「世尊適發此言、比丘比丘尼清信士清信女五千人等、至懷甚慢、即從坐起、稽首佛足、捨衆而退。所以者何。慢無巧便、未得想得、未成謂成。收屏蓋藏、衣服臥具、摩何而去。世尊默然亦不制止。」 (T no. 263, 9: 69b18-22). なお「收屏蓋藏、衣服臥具、」と *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の対応は異読の可能性もある。第 1 章脚注 9 参照。 *bcom ldan 'das kyis *de skad ces bka* (*P bka' de) stsal ma thag tu | 'khor de nas dge slong dang (S, Z |) dge slong ma dang (S, Z |) dge bsnyen dang (S, Z |) dge bsnyen ma lhag pa'i nga rgyal can lnga stong stan las lang te | bcom ldan 'das kyis (S, Z kyis) zhabs gnyis (D, S, Z om. gnyis) la mgo bos phyag 'tshal nas (S, Z te) 'khor de nas dong ngo || 'di ltar lhag pa'i nga rgyal gyis dge ba'i rtsa ba ma thob par ni thob par 'du shes || (S |, Z om. ||) khong du ma (D ma ma) chud par ni khong du chud par 'du (S, Z om. 'du) shes pa de dag rang gi skyon shes te | 'khor de nas dong ba la bcom ldan 'das kyis cang mi gsung bar gyur pas gnang ngo || (D no.113, ja16a5-7; P no.781, chu18b1-3; S no. 141ma24b3-5; Z no. 172ma25b5-26a1)*. なお、増上慢に関して、KN で不善根

(また、世尊がこの言説を語られるやいなや、その時、その大衆の中から増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人は諸々の座より立ち上がって、世尊の両足に頭を以て礼拝して、その大衆から去った。すなわち、増上慢という不善根により、獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているからである。彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである。しかし、世尊は黙念としてお許しになった。)

上記の内容から、増上慢とは、「獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いている (*aprāpte prāptasamjñino 'nadhigate 'dhigatasamjñinah*) 」ことがわかる。なお、この増上慢の解釈は『俱舍論』などに見られる内容と一致する。

さらに、「彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである。」の一文より、増上慢とは、自らに傷(欠陥)があることを知っている (*jñāva*) ことが分かる。

④ 増上慢の特性 (2)

前述③で増上慢の四衆が大衆から去った後に、世尊が舍利弗に述べる内容が以下の通りである。

atha khalu bhagavān āyusmantam śāriputram āmantrayate sma | niṣpalāvā me śāriputra parṣad
apagataphalguḥ śraddhāsāre pratiṣṭhitā | sādhu śāriputraiteṣām ābhimānikānām ato 'pakramaṇam | tena hi
śāriputra bhāṣiṣya etam artham ⁶³

(*akuśala*) とする箇所はチベット大蔵経・カンギユルでは善根 (*dge ba'i rtsa ba*) とある。『妙法華』が「罪根深重」と訳している点から考え、増上慢は不善根という解釈になろう。Cf. 第1章脚注11参照。

⁶³ KN (p. 39, 3-5). 『妙法華』 「爾時、佛告舍利弗。我今此衆無復枝葉，純有貞實。舍利弗，如是増上慢人，退亦佳矣。汝，今善聽。當爲汝說。」 (T no. 262, 9: 7a12-14). 『正法華』 「又舍利弗，衆會辟易有竊去者。離廣大誼聲味所拘。又舍利弗，斯甚慢者，退亦佳矣。」 (T no. 263, 9: 69b22-24). Cf. 『正法華』に「有竊去者」(竊かに去るものあり) とあるが、この内容はKN、『妙法華』、チベット大蔵経・カンギユルには見られない。

『正法華』が増上慢に対して「竊去者」(竊かに去るもの) と訳す点は興味深い。*de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri'i bu la 'di skad ces bka' stsal to || shā ri'i bu nga'i 'khor shin *te ma* (S, Z tu mu) med*

(その時、世尊は長老の舍利弗に告げられた。「舍利弗よ、私の大衆は粃殻がなく、価値のないものは除かれ、信の核芯に定住した。舍利弗よ、これら増上慢のものたちの、ここからの退去は善いことである。それゆえ実に舍利弗よ、この目的を語ろう。」)

増上慢の四衆が大衆から去ったことに対して、世尊が「私の大衆は粃殻がなく、価値のないものは除かれ、信の核芯に定住した」と述べる。これはつまり、増上慢とは、粃殻に喩えられる価値のないものであり、信の核芯 (*śraddhāsāra*) に定住していないものと意味づけられていることが分かる。

⑤ 増上慢の特性 (3)

増上慢の四衆が大衆から去った後、前述④で「それゆえ実に舍利弗よ、この目的を語ろう。」とあるように、世尊は会座に残ったものたちに対して四仏知見を説く。これは要するに、諸仏はただ1つの目的 (一大事因縁) のために世に出現するのであり、その目的とは、ただ1つの乗り物 (一乗) を説くことである。『法華経』の一乗思想を表明する「舍利弗よ、私はただ1つの乗り物に関して、諸々の衆生に法を説く。すなわち、これは仏乗である。舍利弗よ、いかなる第2、あるいは第3の乗り物も存在しないのである。」 (*ekam evāhaṃ śāriputra yānam ārabhya sattvānāṃ dharmam deśayāmi yad idaṃ buddhayānam | na kiṃcic chāriputra dvitīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānam samvidyate*)⁶⁴ という主張は、如来がこの世に出現するただ1つの目的を示す内容である。

世尊が以上の内容を語った後に、一仏乗に導こうとする如来の所作を理解しない増上慢に関して言及する箇所を以下に記す。

evaṃrūpeṣu śāriputra kalpasamkṣobhakaṣāyeṣu bahusattveṣu lubdheṣv alpakuśalamūleṣu tadā śāriputra
tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā upāyakausālyena tad evaikam buddhayānam triyānanirdeśena
nirdiśanti | tatra śāriputra ye śrāvakā arhantaḥ pratyekabuddhā vemāṃ kriyāṃ tathāgatasya

par gyur te | (P ||) *shā ri 'i bu snying po ma yin pa med par gyur la* (S, Z |) *dad pa 'i snying po la gnas te* (S, Z |) *lhag pa 'i nga rgyal can de* (P om. *de*) *dag dong ba yang legs so* || *shā ri 'i bu de lta bas na de 'i don bshad do* || (D no.113, ja16a7-16b1; P no.781, chu18b3-5; S no. 141, ma24b5-7; Z no. 172, ma26a1-3).

⁶⁴ KN (p. 40, 13-15).

buddhayānasamādapanām^① na śṛṇvanti nāvataranti nāvabudhyanti na te śāriputra tathāgatasya śrāvakā
veditavyā nāpy arhanto nāpi pratyekabuddhā veditavyāḥ || api tu khalu punaḥ śāriputra yaḥ kaścīd bhikṣur
vā bhikṣuṇī vārhattvaṃ^② pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksambodhau praṇidhānam aparigṛhyocchinno 'smi
buddhayānād iti vaded etāvan me samucchrayasya paścimakam parinirvāṇam vaded ābhimānikam taṃ
śāriputra prajānīyāḥ | tat kasya hetoḥ | asthānam etac chāriputrānavakāśo yad bhikṣur arhan kṣīṇāsravaḥ
samṃukhībḥhūte tathāgata imam dharmam śrutvā na śraddadhīyāt sthāpayitvā parinirvṛtasya tathāgatasya | tat
kasya hetoḥ | na hi te śāriputra śrāvakās tasmin kāle tasmin samaye parinirvṛte tathāgata eteṣāṃ
evamrūpāṇām sūtrāntānām dhārakā vā deśakā vā bhaviṣyanti | anyeṣu punaḥ śāriputra tathāgateṣv arhatsu
samyaksambuddheṣu niḥsaṃsayā bhaviṣyanti |⁶⁵ (①WT samādāpanām, ②WT vā 'rhattvaṃ)

⁶⁵ KN (pp. 43, 5-44, 3). 『妙法華』 「舍利弗，劫濁亂時，衆生垢重，慳貪嫉妬，成就諸不善根故，諸佛以方便力，於一佛乘分別說三。舍利弗，若我弟子，自謂阿羅漢辟支佛者，不聞不知諸佛如來但教化菩薩事，此非佛弟子，非阿羅漢，非辟支佛。又，舍利弗，是諸比丘比丘尼，自謂已得阿羅漢，是最後身，究竟涅槃，便不復志求阿耨多羅三藐三菩提，當知，此輩皆是增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢，若不信此法，無有是處。除佛滅度後現前無佛。所以者何。佛滅度後，如是等經受持讀誦解義者，是人難得。若遇餘佛，於此法中便得決了」 (T no. 262, 9: 7b24-7c7). 『正法華』 「爲此之黨本德淺薄慳貪多垢故，以善權現三乘教，勸化聲聞及緣覺者。若說佛乘終不聽受不入不解，無謂如來法有聲聞及緣覺道深遠諸難。若比丘比丘尼已得羅漢自己達足，而不肯受無上正真道教，定爲誹謗於佛乘矣。雖有是意佛平等訓，然後至于般泥洹時，諸甚慢者乃知之耳。所以者何。又諸比丘爲羅漢者，無所志求諸漏已盡，聞斯經典而不信樂。若滅度時，如來面現諸聲聞前大聖滅度不以斯行。令受持說方等頌經，尋於異佛至真等正覺決其狐疑。」 (T no. 263, 9: 69c21-70a2). *shā ri 'i bu 'di lta bur bskal pa dang* (S, Z |) *'khrul pa 'i snyigs ma dang* (S, Z |) *dri ma mang po dang* (S, Z |) *brkam pa 'i sems can dge ba 'i rtsa ba chung ba de 'i tshe | shā ri 'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa 'i sangs rgyas rnams thabs mkhas pas sangs rgyas kyi theg pa gcig po de las theg pa gsum du bshad de bstan to || shā ri 'i bu de ltar gang nyan thos sam* (S, Z |) *dgra bcom pa 'am |* (D om. |) *rang sangs rgyas rnams de bzhin gshegs pa 'i bya ba sangs rgyas kyi theg pa yang dag par 'dzin du 'jug pa la* (P om. la) *mi nyan mi 'jug* (S, Z ||) *khong du chud par mi byed pa de dag ni |* (S, Z om. |) *shā ri 'i bu de bzhin gshegs pa 'i nyan thos ma yin par *rig par* (**Z ra) bya 'o || dgra bcom pa yang ma yin* (S, Z |) *rang sangs rgyas kyang ma yin par rig par bya 'o || shā ri 'i bu yang dge slong ngam dge slong ma la la dgra bcom par khas 'che zhing | bla na med pa yang dag par rdzogs pa 'i byang chub tu smon* (Z slon) *lam yongs su mi 'dzin te | nga ni sangs rgyas kyi theg pa bcad pa 'o* (S, Z ||) *zhes zer zhing nga 'i lus 'di tha ma mya ngan las 'da' ba 'o zhes zer ba ni | shā ri 'i bu de lhap pa 'i nga rgyal can du shes par bya 'o || de ci 'i phyir zhe na | *shā ri 'i bu dge slong* dgra bcom pa zag pa zad*

(舎利弗よ、そのような劫が乱れ汚れた時、多くの衆生たちが慳貪にして善根が少ない時、舎利弗よ、その時に、諸々の如来・応供・正等覚者は、巧みな方便により、当にその1つの仏陀の乗り物を、3つの乗り物の説として説くのである。その場合、舎利弗よ、声聞たち、阿羅漢たち、また独覚たちで、佛乘に導く如来のこの所作を聞かず、入らず、理解しないものたち、舎利弗よ、彼らは如来の声聞でない¹と知るべきである。また、阿羅漢でもなく、また、独覚でもない²と知るべきである。しかしまた一方、舎利弗よ、比丘、あるいは比丘尼の誰であれ、また阿羅漢であると自認し、阿耨多羅三藐三菩提への誓願を持たず、「私は仏乗から絶たれている」と言い、「私の身体としての最後の涅槃はこのようなものだ」と言うだろう。舎利弗よ、彼を増上慢であると知りなさい。それは何故か³という⁴と、舎利弗よ、煩惱の尽きた阿羅漢である比丘が、如来が現前にいらっしゃるとき、この法を聞いて信じないであろうことは道理でなく、ありえないのである。如来が涅槃された時は除く。それは何故か⁵という⁶と、舎利弗よ、如来が滅度されたその時、その場合には、声聞たちは、これらのこのような經典を受持するものや、説くものとはならないであろう。しかしながら、舎利弗よ、彼らは他の諸々の如来・応供・正等覚者のもとで、疑惑無きものとなるであろう。)

前段では声聞・阿羅漢・独覚で如来の所作を知らず、一仏乗を理解しない彼ら二乗を、如来の声聞、阿羅漢、独覚ではないと総論的に述べている。その後、阿羅漢に焦点を絞り、阿耨多羅三藐三菩提を求めない阿羅漢に関する説明をしている。

増上慢への言及としては、KNに、「比丘、あるいは比丘尼の誰であれ、[自らを]阿羅漢であると考え、阿耨多羅三藐三菩提への誓願を持たず、『私は仏乗から絶たれている』⁷と⁸言い、『私の身体としての最後の涅槃はこのようなものだ』⁹と¹⁰言うだろう。舎利弗よ、彼を増上慢であると知りなさい。」とあり、その内容は『妙法華』、チベット大蔵経・カンギュルにもほぼ共通する。

pa de (P des) (**S, Z de bzhin gshegs pa) | de bzhin gshegs pa mngon sum du gyur te | (P om. |) chos 'di thos nas dad par mi 'gyur ba'i go skabs med cing gnas ma yin te | de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las 'das pa ni ma gtogs so || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las 'das pa de'i tshe | mdo sde (S, Z om. sde) 'di lta bu 'di 'dzin pa *'am* (P |, **S, Z dang |) 'chad pa'i nyan thos mi 'byung ste | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gzhan dag (D om. dag) la (D, S, Z las) chos 'di la the tshom (Z tshoms) med par 'gyur ro || (D no.113, ja19a2-19b1; P no.781, chu21b5-22a5; S no. 141, ma28b5-29a7; Z no. 172, ma31a2-b4).*

上記に挙げた内の「私は仏乗 (*buddhayāna*) から絶たれている」と言う際の「私」とは要するに、増上慢とは「仏乗」 (*buddhayāna*) を知りながらも、それを自らの乗り物 (道) とせず、仏乗の究極である阿耨多羅三藐三菩提を求めない人々と言えよう⁶⁶。

すなわち『法華経』「方便品」における増上慢とは、①比丘・比丘尼からなる阿羅漢であると自認するもの、②阿耨多羅三藐三菩提を求めないもの、③「私は仏乗から絶たれている」と言い、「私の身体としての最後の涅槃はこのようなものだ」と言うものとされている。

さらにまた、「煩惱の尽きた阿羅漢である比丘が、如来が現前にいらっしゃる時、この法を聞いて信じないであろう (*na śraddadhyāt*) ということは道理でなく、ありえないのである。」という内容から、この法を聞いて信じない (受け入れない) というのも増上慢の特性の1つと見做すことができるであろう。

なお、KNが「佛乗に導く如来のこの所作を」とする箇所は、『妙法華』では「諸佛如来但教化菩薩事」(諸の佛・如来は但だ菩薩のみを教化したもう事を) と訳す⁶⁷。

⁶⁶ 西(1975, p. 130, p. 161)は、「婆沙論中の三乗思想は、人に約して説く場合が目立つのである。而も同時に、この三乗種性の優劣を論ずるのがその中心課題である。」と述べ、その内容を詳細に検討している。その結果、「三乗の種々なる面から見ての優劣論が、斯くも念入りに大毘婆沙論中、殆んど至る所に存在するのは、決して説一切有部の教義が、声聞の阿羅漢となるのを最上の理想としていたのではなく、又、必ずしも二乗道をのみ勧めていないことを示すと思う」と述べ、「抑二乗揚仏の趣が見られる。」とまとめる。藤田(1969, p. 389)は当該箇所に関して、「阿羅漢果を得たということで満足したり、あるいは仏乗に進むことができないとしている部派教団の出家者たちに対する痛烈な批判が示されている」と述べる。横超(1969, p. 33)は、事実において三乗の差別を執し、自ら声聞乗を志す者があつたかという点に関して、「三乗の差別を固執し、自ら阿羅漢となることを志す仏教の一派があつた。それは説一切有部と名づけられる小乗の有力な一教団であつたのである。」と述べる。また平川(1980, p. 168)も、「大乘仏教で言う声聞乗とは説一切有部を指していたと考えてよいようである。」と記す。荻谷(1979, p. 515)は、「法華経の会座に列席しながら、いよいよこれから諸仏出世の本懐としてこの<仏乗>が説き明かされようとする直前に、それを聞こうともせずに会座より退出してしまったあの五千の四衆とは、この『如来に面と向かっていて』しかも『この教法を聞かない』声聞というものにまさしく合致しているのである。」と述べる。

⁶⁷ 荻谷(1979, p. 511)は、『妙法華』が「教化菩薩事」と訳す点について、「声聞も阿羅漢も独覺も本来からぼさつであることを、その当の声聞らに聞かせるということである。」と述べる。

⑥ 増上慢の特性 (4)

前述⑤の内容の後に、世尊は「舍利弗よ、あなたはこの仏陀の法に関して、私を信じ、信頼し、よく考えなさい」 (*imeṣu buddhadharmeṣu śraddadhādhvaṃ me śāriputra pattīyatāvakaḥ* |) ⁶⁸と述べ、更に意義を明らかにするため第 38 偈以下の偈頌を説く。以下は、五千起去が述べられる箇所であり、第 38 偈から第 41 偈までを記す。

athābhimānaprāptā ye bhikṣubhikṣuṇyupāsakāḥ |
upāsikāś ca aśrāddhāḥ sahasrāḥ pañcanūnakāḥ ^① || 38 || (①WT pañc' anūnakāḥ)
sampaśyanta ^① *imaṃ doṣaṃ chidraśikṣāsamanvitāḥ |*
vraṇāś ca parirakṣantaḥ prakrāntā bālabuddhayaḥ || 39 || (①WT apaśyanta)
parṣatkaṣaṭu tāñ ^① *jñātvā lokanātho 'smi dhvaṃsi tāñ* ^② |
tat teṣāṃ kuśalaṃ nāsti śṇuyur dharma ye imaṃ || 40 || (①WT kaṣāyatāñ, ②WT 'dhivāsai⁶⁹)
śuddhā ca niṣpalāvā ca susthitā pariṣan mama |
phalguvyapagatā sarvā sārā ceyaṃ pratiṣṭhitā || 41 ||⁷⁰

⁶⁸ KN (p. 44, 3).

⁶⁹ WT (p. 41, 3) は *loka-nātho 'dhivāsai* とし、脚注に「版本には'smi dhvaṃsi tāñ とあり。dhvaṃsi は dhvan 又は dhvas より来れりとするも意味通ぜず」と記す。そして対応する長行の *adhivāsai* (*adhi*√*vas*、耐える・受諾する、causative, present, 3, sg) と K'の *smi dhvaṃsai* とチベット語訳を総合して *adhivāsai* (aorist, 3, sg, Pkt) と校訂している。

⁷⁰ KN (p. 44, 7-14). 『妙法華』 「比丘比丘尼、有懷増上慢、優婆塞我慢、優婆夷不信。如是四衆等、其數有五千。不自見其過。於戒有缺漏、護惜其瑕疵。是小智已出。衆中之糟糠、佛威德故去。斯人尠福德、不堪受是法。此衆無枝葉、唯、有諸貞實」 (T no. 262, 9; 7c11-18). 『正法華』 「比丘比丘尼、心懷甚慢恣。諸清信士女、五千人不信。不自見瑕穢。奉誠有缺漏、多獲傾危事、而起愚駭意、反行求雜糅。悉無巧方便。諸佛最勝禪、緣此得聞法、供養清淨慧、衆會儼然住。一切受恩教、速志立見要。」 (T no. 263, 9: 70a5-12). *nga rgyal can gyi dge stong dang* || *dge stong ma dang dge bsnyen dang* || *dge bsnyen ma rnams ma dad pa* || *lga stong las ni mi nyung ba* || *bslab pa zhig ral* (P dral) *ldan pa rnams* || *nyes pa 'di* (P de) *dag mthong gyur nas* || *skyon rnams yongs su sbed pa 'i phyir* || *byis pa 'i blo can de dag dong* || *gang gyis chos 'di nyan par 'gyur ba yi* || (P ||) *de dag la ni dge ba de med* (P byed) *de* || *'khor gyi snyigs ma nyid du mkhyen nas su* || *jig rten mgon po ngas kyang *btsal ba* (P pa) *yin** (**S, Z *bsal ba yi*) || *nga*

(その時、信のない増上慢を得ている比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちは五千人より少なくなかった。

欠点のある学習を具えている人々は、この過失を見ながら、諸々の傷(欠陥)を隠しながら、愚かな考えを持っている人々は、退いた。

彼らを衆中の糟糠であると理解して、世間の主である私は彼らを失った⁷¹。彼らがこの法を聞いても彼らにとって善いことはない。

私の大衆は清浄で粗穀がなく安定した。全ての価値のないものは除かれ、この[大衆]は核芯のみが定住した。)

まず第38偈にみられるように、ここに言う増上慢は比丘・比丘尼である声聞だけでなく、優婆塞・優婆夷をも含めた四衆を指す。この内容は前述③で「その大衆の中から増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人は諸々の座より立ち上がって」とある点とも通じる。

次に第39偈に「欠点のある学習を具えている人々は、この過失を見ながら、諸々の傷(欠陥)を隠しながら、愚かな考えを持っている人々は、退いた。」とあることから、増上慢とは、欠点のある学習を具え、過失を見ながら傷(欠陥)を隠し退く、愚かな考えを持つ人々であることがわかる⁷²。

yi 'khor ni legs par 'khod || shin (D, S, Z shun) pa med cing dag pa ste || snying po ma yin kun med gyur (P 'gyur) || 'di dag snying po (S, Z por) rab tu gnas || (D no.113, ja19b2-5 ;P no.781, chu22a6-22b1; S no.141, ma29b2-5; Z no.172, ma30b6-31a2).

⁷¹ Tsukamoto et al (1988, p. 239): *lokanātho 'smi/ smi dhvaṃsi tān/ tāṃ*: KN, R, T9; *lokanātho smi/ sca/ smiṃ dhvaṃsayi /dhvansayi/ dhvansasayi*: K, Pk, C3-6, B, P1-2, T2-3,6-7, N1-3, D2. この箇所に関してチベット語では *jig rten mgon po ngas kyang *bstsal ba (P pa) yin** (S, Z *bsal ba yi*) (D 19b4; P 22a8; S 29b4; Z 31a1) とあり、サンスクリットテキストの *'smi* を *ngas* (私が) と読んでいる。従って訳としては① *asmi* を \sqrt{As} (present, 1, sg.) で解釈すると、私は世間の主であり、彼らを失った。② *asmi* を *idam* (BHS, Locative, sg.) で解釈すると、世間の主はここにおいて彼らを失った。以上の2種類が考えられるが、チベット語訳を参考にして訳す。

⁷² 伊藤 (1993a, p. 656) は、WT に倣い *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* で読み「この(不信という真の)過失を観察しえず」と解釈する。

最後に、第40偈では増上慢を「衆中の糟糠」、第41偈では「粃殻」「価値のないもの」と喩をもって呼んでいる。この点は前述④で、増上慢とは「粃殻に喩えられる価値のないものであり、信の核芯に定住していないものである」と言及している点と重なると言えよう。

⑦ 高慢な者の特徴

第38偈から続く偈頌では、仏の教えが本来、一乗のみであり、それにより衆生を救済するということが繰り返し説かれる。以下に示す131偈は、一乗を説く仏の教説を信じられない者に関して述べる箇所である。

なお、原語は①から⑥までに挙げてきた *abhimāna* ではなく *adhimāna*⁷³ であり、『妙法華』『正法華』ともに「僣慢」と漢訳する。なお、ここでは *adhimāna* を「高慢」と訳す。

duḥśraddadham etu bhaviṣyate 'dya nimittasaṃjñān^① iha bālabuddhinām |

adhimānāprāptāna avidvasūnām ime tu śroṣyanti hi bodhisattvāḥ || 131 ||⁷⁴ (①WT nimittasaṃjñān')

([対象の] 特徴 (相) を意識し、愚かな智慧で、高慢を得て、智慧の少ない者たちには、今、ここで、これは信じ難いであろう。しかし、これら菩薩たちは聞くだらう。)

KN、『妙法華』、チベット大蔵経・カンギュルに共通して見られるように、高慢のものは「仏が説く法を」信じることができないと分かる。

⁷³ Tsukamoto et al. (1988, p. 432) に記載される写本の内、T3 の *adhiprāna* を除く全ての写本が *adhimāna* である。

⁷⁴ KN (p. 57, 7-8). 『妙法華』 「舍利弗, 當知. 鈍根小智人, 著相僣慢者, 不能信是法. [今, 我喜無畏, 於諸菩薩中, 正直捨方便, 但說無上道] 菩薩聞是法 [疑網皆已除]」 (T no. 262, 9; 10a16-20). 『正法華』 「志懷愚癡, 起於妄想, 設吾說法, 少有信者, 僣慢自大, 不肯啓受. 如斯法者, 菩薩乃聽.」 (T no. 263, 9; 72c15-17). *mtshan mar 'du shes byis pa 'i blo dang ldan || mi mkhas lhag pa 'i nga rgyal ldan pa rnams || de ring 'di la dad par dka' 'gyur gyi || byang chub sems dpa' 'di dag nyan snyam ste ||* (D no.113, ja24a2-3; P no.781, chu27a6; S no. 141, ma35b4-5; Z no. 172, ma37a4-5).

「方便品」に出る7ヶ所の増上慢の用例を確認した結果、増上慢の特性を整理すると以下のようになる。なお、二重線で囲んだ箇所(3,4,6)は、五千起去する増上慢に直接、関係する説明である⁷⁵。

- 1 仏の法が解説されるならば、増上慢を得ている比丘たちは、大いなる穴に墮ちる。
- 2 無知なるもの(=増上慢)は仏が説く法(=微妙で思議を超えたもの)を捨てる。

- 3
 - ① 獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているという特性を持つ。
 - ② 自らの傷(欠陥)を知ったうえで(jñātvā)、法を聞かずに退く。
 - ③ 比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を指す。

- 4 粃殻に喩えられる価値のないものであり、信の核芯に定住していない。

- 5
 - ① 比丘・比丘尼からなり、阿羅漢であると自認する。
 - ② 阿耨多羅三藐三菩提への誓願を持たない。
 - ③ 「私は仏乗から絶たれている」、「私の身体としての最後の涅槃はこのようなものだ」と言う。

- 6
 - ① 比丘・比丘尼である声聞だけでなく、優婆塞・優婆夷をも含めた四衆を指す。
 - ② 欠点のある学習を具え、過失を見ながら諸々の傷(欠陥)を隠しながら、愚かな考えを持つものたちである。
 - ③ 仏が説く法を聞かずに会座より退く。
 - ④ 「衆中の糟糠」「粃殻」「価値のないもの」に喩えられる。

- 7 [仏が説く法を] 信じることができない。

⁷⁵ 1,2は五千起去する増上慢に直接関係する箇所ではないが、五千起去が起こる伏線となる、釈尊と舍利弗の三止三請のやり取りがなされる箇所である。従って1,2は五千起去に全く関係がないとは言えない。更に5も、五千起去の後に釈尊の会座に残った人々に対して、一仏乗に導こうとする如来の所作を理解しない増上慢に関して釈尊が説明する箇所であり、当然、五千起去した四衆を念頭においての言及と思われる。従って5も五千起去と関係ないとは言えない箇所である。同様に7に関しても、一乗を説く仏の教説を信じられない者に関する言及であることから、五千起去した四衆を想定したうえでの指摘と考えられる。

0.3 本論文の目的および構成

本論文の目的は、SP 第 2 章 *Upāyakaūśalya* 内で五千起去が記される長行 (KN, WT: *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) と第 39 偈の読みの不一致 (KN: *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ*, WT: *apaśyanta imaṃ doṣaṃ*)、ならびに第 39 偈の KN と WT の異読の解釈を通して、増上慢の解釈を検討することである。すなわち、増上慢に関するアビダルマ (論) の解釈が影響することにより、SP に 2 通りの読みが存在することに関して、それぞれの異読の根拠を明らかにする。具体的には、増上慢の伝統的解釈が影響する際の増上慢の特性、ならびに一乗説を説く SP との関係を通じた増上慢の特性を明らかにしたい。

本論文は全 3 章から成り、Appendix として関連テキストである Kashgar 写本と KN、加えてネパール写本の C3 を付す。以下にそれぞれの章の内容を簡単に記す。

[第 1 章]

SP 第 2 章 *Upāyakaūśalya* 内で五千起去が記される長行 (KN, WT: *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) と第 39 偈の読みの不一致 (KN: *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ*, WT: *apaśyanta imaṃ doṣaṃ*)、ならびに第 39 偈の KN と WT の異読の背景を明らかにするため、(1) 現存するサンスクリット諸写本、(2) チベット大蔵経・カンギュル、(3) 『妙法華』の諸版本ならびに日本古写経に伝承される諸写本、ならびに(4) 敦煌出土『法華経』写本の該当箇所を確認する。

[第 2 章]

SP には、伝統的なアビダルマ (論) における増上慢の解釈が記されるが、増上慢が見ない「過 (*doṣaḥ*)」の内容、ならびに第 39 偈に対応する長行に出る、増上慢が有する「失・瑕疵 (*vraṇam*)」の内容が明確にされていない。さらにまた、増上慢が「得ていないのに得たと謂っている」また「証していないのに証したと謂っている」内容も明らかではない。

そこで、WT が校訂する第 39 偈の読みである *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* に近似する Kashgar 写本の読み *svāni doṣāṇy apaśyantās* に対応する漢訳「不自見其過」、ならびに、KN、WT に共通する読みである長行 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* に対応する漢訳「有如此失」の内容を明らかにするため、『妙法華』の注釈書である Vasubandhu 著『妙法蓮華経優波題舎』、ならびに中国註釈家が著した『法華経』註釈書を用いて、増上慢が「得ていないのに得たと謂っている」また「証していないのに証したと謂っている」内容、「見ない過」、ならびに彼らが抱える「この失」の内容を確認する。

[第3章]

「方便品」で釈尊の会座から退出する増上慢は、「仏乗」 (*buddhayāna*) を知りながらもそれを自らの乗り物 (道) とせず、仏果である阿耨多羅三藐三菩提を求めない人々である。SP の一乗説の立場から、増上慢と同様に批判される説一切有部に代表される伝統教団の教理に着目し、三乗に関する伝統的理解を確認する。すなわち、仏と仏弟子である声聞の相違を検討する。

[Appendix A, B, C, Word Index]

Appendix A では、SP 第2章に出る増上慢、ならびに増上慢の理解にかかわる SP の主要な教義である一乗思想の内容を知るため、第2章冒頭から第41偈までの、SP 写本の中で異なる系統である Kashgar 写本の英訳を試みる。Kashgar 写本の内容に合わせ KN、ならびに C3 写本を列記し、漢訳 (『妙法華』、『正法華』) ならびにチベット大蔵経・カンギュル (デルゲ版、北京版、トクパレス写本、ロンドン写本) も記す。

Appendix B には、Kashgar 写本と KN を比較した際に見られる特徴ある動詞、ならびに名詞の一部を列記し、文法的解釈を試みる。

Appendix C では、Kashgar 写本と KN を比較した際に見られる特徴ある読みの一部を考察する。

Word Index には、Kashgar 写本に見られる、特に不明瞭な動詞と名詞の形を KN の該当箇所と共に記載する。

0.4 研究方法

SP 第2章 *Upāyakauśalya* 内で五千起去が記される長行 (KN, WT: *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) と、この箇所に関連する第39偈の読みの一一致 (KN: *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ*, WT: *apaśyanta imaṃ doṣaṃ*)、ならびに第39偈の KN と WT の異読の背景を明らかにするため、以下に挙げる資料を用いて検討する。

- ① 現存するサンスクリット諸写本 (梵文法華經研究会編『梵文法華經写本集成』所収の27点の写本と Āsā, Bendall, STTAR を合わせた32点のネパール系写本、ならびに Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本)
- ② チベット大蔵経・カンギュル (北京版、チヨネ版、デルゲ版、ウルガ版、ラサ版、ロンドン写本、ウランバートル写本、トクパレス写本、ナルタン版、プダク写本、Neyphug)

- ③『妙法華』の諸版本ならびに日本古写経に伝承される諸写本（七寺一切経, 興聖寺一切経, 房山石経, 應縣木塔遼代秘蔵, 高麗大蔵経（初雕版）, 福州版大蔵経（開元寺蔵）, 思溪版大蔵経, 趙城金蔵, 高麗大蔵経（再雕版）, 宋磧砂大蔵経, 磧砂大蔵経（北京版）, 洪武南蔵, 永楽北蔵, 乾隆大蔵経, 大正新脩大蔵経, 中華大蔵経）
- ④敦煌出土『法華経』写本（英國國家圖書館蔵敦煌遺書（S.）, 法蔵敦煌西域文獻（P.）, 俄蔵敦煌文獻（Φ）, 國家圖書館蔵敦煌遺書（BD）, 上海圖書館蔵敦煌吐魯番文獻（上圖）, 上海博物館蔵敦煌吐魯番文獻（上博）, 天津市藝術博物館蔵敦煌文獻（津藝）, 北京大學圖書館蔵敦煌文獻（北大）, 甘肅蔵敦煌文獻 1-2（敦研）, 甘肅蔵敦煌文獻 4-5（甘博）, 浙蔵敦煌文獻（浙江）, 敦煌卷子（中圖）, 敦煌秘笈 影片冊（羽）, 世界民間蔵中國敦煌文獻 1（CXZ）, 敦煌寶藏 散（散））

次に、漢訳『法華経』の読みに焦点をあて、Kashgar 写本にほぼ対応する読みが伝えられた中国において、『法華経』注釈者たちが「方便品」五千起去に出る「増上慢」の特徴をどのように理解したかについて、以下の3点を検討する。なお、インドにおける『法華経』の注釈書としては Vasubandhu 著『妙法蓮華経憂波提舍』を、中国における『法華経』の注釈書としては、竺道生 (369-434)『妙法蓮華経疏』、法雲 (467-529)『法華経義記』、智顛 (538-597)『妙法蓮華経文句』『妙法蓮華経玄義』、吉蔵 (549-623)『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』、基 (632-682)『妙法蓮華経玄讚』を用いる。

- ① 五千起去が記される長行箇所である「説此語時, 會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等, 即從座起禮佛而退. 所以者何. 此輩罪根深重及増上慢, 未得謂得, 未證謂證. 有如此失. 是以不住. 世尊默然而不制止。」に関しては、次の2点を確認する。第一に、増上慢の解釈である「未だ得ざるを得たりと謂い、未だ證せざるを證せりと謂えり。」の具体的内容を検討する。第二に、増上慢が有する「失」の内容について確認する。
- ② 第 39 偈の「比丘比丘尼, 有懷増上慢. 優婆塞我慢, 優婆夷不信. 如是四衆等, 其數有五千. 不自見其過. 於戒有缺漏, 護惜其瑕疵. 是小智已出. 衆中之糟糠, 佛威徳故去. 斯人尠福德, 不堪受是法. 此衆無枝葉, 唯, 有諸貞實。」については、次の2点を確認する。第一に、ネパール系写本ならびに Gilgit 写本と漢訳の間に見られる異読「不自見其過」に関して、増上慢が見ない「過」の内容を検討する。第二に、増上慢が護り惜しむ「瑕疵」の内容を確認する。

- ③ 五千人が去ったのちに、世尊が会座に残った者たちに真に阿羅漢である者と増上慢の違いについて解説する「舍利弗, 若我弟子, 自謂阿羅漢辟支佛者, 不聞不知諸佛如來但教化菩薩事, 此非佛弟子, 非阿羅漢, 非辟支佛. 又, 舍利弗, 是諸比丘比丘尼, 自謂已得阿羅漢, 是最後身, 究竟涅槃, 便不復志求阿耨多羅三藐三菩提, 當知, 此輩皆是増上慢人. 所以者何. 若有比丘實得阿羅漢, 若不信此法, 無有是處。」の内容理解を通し、増上慢の特性を検討する。

増上慢は「仏乗」 (*buddhayāna*) を知りながらもそれを自らの乗り物 (道) とせず、仏果である阿耨多羅三藐三菩提を求めない人々である。SP の一乗思想が批判の対象とする増上慢の特性を明らかにするため、同じく SP が批判の対象とする説一切有部系の部派教団における三乗観を明らかにし、増上慢が、一乗の教説を聞かずに会座から去る理由を考察するため、以下の2点を検討する。

- ① 『阿毘達磨大毘婆沙論』 『施設論』 『阿毘達磨俱舍論』 『阿毘達磨俱舍釋論』 『阿毘達磨順正理論』 『阿毘達磨藏頭宗論』 に出る三種菩提における声聞菩提、ならびに仏菩提の相違
- ② 『阿毘達磨俱舍論』 における仏と声聞の相違

第1章 「五千起去」長行ならびに関連する第39偈の検討

本章では、*Saddharmapuṇḍarīka-sūtra* (SP) 第2章 *Upāyakaūśalya* に出る五千起去の内容を検討する。

五千起去とは、釈尊の会座にいる者の内、五千人の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷がその場から退座するというものである。退座の理由として同経は、獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐くという増上慢¹であるため、釈尊がこれから説こうとされる教説（「一乗」説）を聞かずに退席したという。しかしその際、釈尊は黙然として許された。ここに出る、「獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐く」という増上慢の解釈は通説となっており、これが増上慢の一般的特性と見做されている²。

興味深いことに、五千起去が記される長行とそれに対応する第39偈を対比して検討すると、先に挙げた増上慢の特性に関する解釈の相違を反映してか、これまでに公にされた校訂テキスト間に異読が見られる³。すなわち、五千起去が記される長行箇所とそれに対応する第39偈におけるサン

¹ 増上慢に関しては、例えば、『俱舍論』に「於未證得殊勝徳中，謂已證得，名増上慢。」（未だ殊勝なる徳を證得せざる中において、已に證得せりと謂うを、増上慢と名づく。）（T no. 1558, 29: 101a18-19), AKBh (p. 285, 2-3): *apṛāpte viśeṣādhiḡame pṛāpto mayety abhimānaḡ*（勝れたものに対する證得が得られていないのに、私は獲得した、というのが増上慢である）と記される。増上慢の定義に関するアビダルマ（論）の詳細は序論 0.2.4.1 を参照。

² SP で増上慢の特性が記されるのは、KN (pp.38, 14- 39, 1): *yathāpīdam abhimānākuśalamūlenāpṛāpte pṛāptasaṃjñīno 'nadhigate 'dhiḡatasamjñīnaḡ* |（すなわち、増上慢という不善根により、獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているからである） Cf. 『妙法華』「増上慢，未得謂得，未證謂證。」 T no. 262, 9: 7a9-10), 『正法華』「慢無巧便，未得想得，未成謂成。」 (T no. 263, 9: 69b20-21).

³ 長行箇所 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) と第39偈 (*saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ*) の訳に関しては以下の通りである。

スクリット本の校訂内容にも関わる問題である。

KNでは、長行に *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*（彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで）とあり、対応する第39偈の冒頭箇所もまた *saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ*（この過失を見ながら）と

	長行箇所 (<i>ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā</i>)	第39偈 (<i>saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ</i>)
H. Kern ⁽¹⁾	Therefore, thinking themselves aggrieved,	Remarking this slight,
M. E. Burnouf ⁽²⁾	C'est pourquoi, se reconnaissant et faute,	Reconnaissant la faute [dont ils étaient coupables],
岩本裕 ⁽³⁾	かれらは自尊心を傷つけられたと思って、	この欠点を見ないで
松濤誠廉ほか ⁽⁴⁾	彼らは自分に欠陥のあることを知らないで	この欠陥には気づかないで
中村瑞隆 ⁽⁵⁾	彼らは自分に過失のあることを知って、	自らの過ちを見ることなく
	長行箇所 (有如此失是以不住)	第39偈(不自見其過)
坂本幸男 ⁽⁶⁾	かくの如き ^{どが} 失あり。ここを以て住せざるなり。	みずか ^{みずか} その過 ^{どが} を見ず
藤井教公 ⁽⁷⁾	かくの如き ^{どが} 失あり。是 ^{ここ} を以て住せず。	みずか ^{みずか} 其 ^そ の過 ^{どが} を見ず
国訳一切経 ⁽⁸⁾	此の如き ^{どが} 失あり、是 ^{ここ} を以て住せず。	みずか ^{みずか} 其 ^{どが} の過 ^{どが} を見ず
国訳大蔵経 ⁽⁹⁾	かくの如き ^{こと} 失 ^{どが} あり、是 ^{これ} を以て住 ^{もつ} せず。	みずか ^{みずか} 其 ^{その} 過 ^{どが} を見ず、

(1) Kern (1884, p. 39, p. 44). Kern は MS. Add. No.1682 と MS. Add. No.1683 を翻訳に際して使用した。Cf.

Kern (1884, p. xxxviii), Yuyama (1970, p. 12).

(2) Burnouf (1973, p. 25, p. 29). ビュルヌフはバリアジア協会蔵の紙写本 no. 2 を底本としてフランス語訳を完成した。Cf. 小槻 (2003, p. 251), 小槻 (2008, p. xxxi). Yuyama (2000, pp. 62-67).

(3) 岩本 (1962, p. 87, p. 103). KN を底本とし、特に注記はない。なお、岩本 (1997, p.103) では「この欠点をさとらず」となっている。

(4) 松濤 (1975, p. 50, p. 57). KN と WT の双方を底本とし、特に注記はない。

(5) 中村 (1995, p. 38, p. 44). 底本として KN と WT の双方を用いる。長行に関しては原文通りに訳し、一方、第39偈はペトロフスキー本に従った旨を注記する。

(6) 坂本 (1962, p. 86, p. 102).

(7) 田村・藤井 (1988, p. 134, p. 153).

(8) 『国訳一切経 法華部 (28)』 (1928, p. 40, p. 42).

(9) 『昭和最新纂國譯大蔵経』 (1929, p. 51, p. 54).

ある⁴。

これに対して WT では、長行は KN と同じであるが、第 39 偈の冒頭箇所を *apaśyanta imam doṣaṃ* (この過失を見ていない) と校訂している⁵。

すなわち、KN と WT の読みを比較した際に以下の 2 点が明らかとなる。

- ① KN では「知る」「見る」と肯定の形で長行と偈頌が対応している。
- ② WT では偈頌において「見ていない」という否定形が採用されている。

そこで本章では、KN と WT の間にみられる異読の背景を明らかにするため、現存するサンスクリット諸写本、チベット大蔵経・カンギユル、『妙法華』の諸版本ならびに日本古写経に伝承される諸写本、および敦煌出土『法華経』写本の当該箇所の読みを整理した上で、考察を加えたい。

1.1 「五千起去」の内容: 長行箇所に関して

まず初めに、「五千起去」の内容を記す。

SP 第 2 章 *Upāyakauśalya* では、世尊が三昧から起き上がり、「舍利弗よ、諸々の如来・応供・正等覚者が覚られた仏陀の智慧は、甚深にして見難く、悟り難く、一切の声聞、独覚には知り難い。」⁶と述べる所から始まる。このように世尊が述べた内容は、その場にいた阿羅漢、声聞乗を願う比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、独覚乗にいそしむものたちにとって、初めて聞くことであった。そのため、その場にいた者たちは世尊が述べた内容を聞き、自分たちの在り方に関して心中に疑惑を生じることとなった。

そこで舍利弗が代表して、世尊が如来の甚深の法を称嘆される理由の説明を懇請する。しかし世尊は舍利弗の懇請を 2 度、断る。そこで舍利弗は世尊に対して 3 度目の懇請を行う。すると世尊は舍利弗の 3 度目の懇請を受け、「それゆえに、舍利弗よ、聞きなさい。正しく、善く心に受け止めなさい。私はあなたに説きましょう。」⁷と言われる。この世尊の言葉を受けて、いわゆる「五千起去」が起こる。

⁴ KN (p. 39, 1) KN (p. 44, 9).

⁵ WT (p. 36, 10), WT (p. 41, 1).

⁶ KN (p. 29, 2-3): *gambhīraṃ śāriputra durdṛśaṃ duranubodhaṃ buddhajñānaṃ tathāgatair arhadbhiḥ samyaksambuddhaiḥ pratibuddhaṃ durvijñeyaṃ sarvaśrāvakapratyekabuddhaiḥ |*

⁷ KN (p. 38, 10-11): *tena hi śāriputra śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru || bhāṣiṣye 'ham te ||*

以下ではまず、五千起去が述べられる長行の箇所を記す（下線筆者、以下同じ）。以下、原文資料を挙げる際には、KN、『妙法華』（以下、（妙）と略す）、チベット語訳諸版本・写本（デルゲ版・北京版・トクパレス写本・ロンドン写本）（以下、（蔵）と略す）の順に記載する。『妙法華』に対応する『正法華』の該当箇所は脚注に記載する。

(KN) samanantarabhāṣitā ceyaṃ bhagavatā vāg atha khalu tataḥ parṣada ābhimānikānāṃ bhikṣuṇāṃ bhikṣuṇīnāṃ upāsakānāṃ upāsikānāṃ pañcamātrāṇi sahasrāṇy^① utthāyāsanebhyo^① bhagavataḥ pādau^② śirasābhivanditvā^② tataḥ parṣado 'pokrāṃanti sma |^③ yathāpīdam^③ abhimānākuśalamūlenāprāpte prāptasamjñino 'nadhigate 'dhigatasamjñīnaḥ | ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'pokrāntāḥ | bhagavāṃś ca tūṣṇībhāvenādhivāsayati sma ||⁸

(^①WT utthāy' āsanebhyo, ^②WT śirasā 'bhivanditvā, ^③WT yathā 'pīdam)

(訳) また、世尊がこの言説を語られるやいなや、その時、その大衆の中から増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人は諸々の座より立ち上がって、世尊の両足に頭を以て礼拝して、その大衆から去った。すなわち、増上慢という不善根により、獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているからである。彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである。しかし、世尊は黙念としてお許しになった。

(妙) 「説此語時，會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等，即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及増上慢，未得謂得，未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。」⁹

⁸ KN (pp. 38, 12-39, 2).

⁹ T no. 262, 9: 7a7-11. Cf. 『正法華』 「世尊適發此言，比丘比丘尼清信士清信女五千人等，至懷甚慢，即從坐起，稽首佛足，捨衆而退。所以者何。慢無巧便，未得想得，未成謂成。收屏蓋藏，衣服臥具，摩何而去。世尊默然亦不制止。」 (T no. 263, 9: 69b18-22). 「收屏蓋藏，衣服臥具」と *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の対応は異読の可能性があり、『妙法華』の当該箇所とも内容が異なることから、これはすなわち、増上慢の解釈に関して異なる内容が伝わっていたことを示唆する一例と考えられる。その理由としては、『正法華』と『妙法華』は、基としたサンスクリット本が異なる旨が『添品妙法蓮華經』の序文に記されている。つまり、『正法華』の読みを支持するサンスクリット本では、増上慢に関して、『妙法華』の読み支持するサンスクリット本とは異なる解釈に基づく内容が用いられていたであろう。Cf. 序文脚注 38 参照。Karashima (1992, pp. 46-47). なお、『正法華』中にある「摩何」に関する訳語は未詳。Karashima (1998, p.

(訳) 此の語を説きたもう時、會中に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人等ありて、即ち座より起ちて佛を禮して退けり。所以はいかん。此の輩は罪根深重及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ證せざるを證せりと謂えり。此の如き失あり。是を以て住せず。世尊は默然として制止したまわず。

(蔵) bcom ldan 'das kyis *de skad ces bka*' (*P bka' de) stsal ma thag tu | 'khor de nas dge slong dang (S, Z |) dge slong ma dang (S, Z |) dge bsnyen dang (S, Z |) dge bsnyen ma lhag pa'i nga rgyal can lnga stong stan las langs te | bcom ldan 'das kyis (S, Z kyis) zhabs gnyis (D, S om. gnyis) la mgo bos phyag 'tshal nas (S, Z te) 'khor de nas dong ngo || 'di ltar lhag pa'i nga rgyal gyis dge ba'i rtsa ba ma thob par ni thob par 'du shes || (S |, Z om. ||) khong du ma (D ma ma) chud par ni khong du chud par 'du (S, Z om. 'du) shes pa de dag rang gi skyon shes te | 'khor de nas dong ba la bcom ldan 'das kyis cang mi gsung bar gyur pas gnang ngo ||¹⁰

(訳) 世尊がこのように語られるやいなや、その大衆より増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人は座より立ち上がって、世尊の両足に頭を以て礼拝して、その大衆から去った。すなわち、増上慢により善根¹¹を獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐いている。彼らは自らの傷を知って、その(大)衆より去ったことについて、世尊は默念としてお許しになった。

上記に示した五千起去の箇所に関して下線部分を見ると、KNは、増上慢の四衆は「自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで」とある。ここで注目されるのは、サンスクリットの読みによれば、増上慢の四衆は自らに傷(欠陥)があることを「知っている」ということである。

294)は『正法華』の「摩何」の意味を“indifferently, unconcernedly”とし、その根拠は Karashima (1997, pp. 34-35) による。

¹⁰ D no.113, ja16a5-7; P no.781, chu18b1-3; S no.141ma24b3-5; Z no.172ma25b5-26a1.

¹¹ チベット大蔵経・カンギユルでは、善根 (*dge ba'i rtsa ba*) を獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐いている、と読む。つまり、増上慢が獲得していないのに獲得したという思いを懐いている対象とは「善根」を指すのであろうか。しかしながら、サンスクリット *abhimānākuśalamūlenāprāpte* では、*abhimānākuśalamūlena* は Instrumental である。チベット訳の基となった SP のサンスクリットが異なる、もしくは、チベット人訳者 (Ye shes sde & Surendrabodhi) の解釈が影響したのであろうか。

一方で、『妙法華』は当該箇所を「有如此失」と訳している。そのため、漢訳テキストでは、増上慢の四衆は自らに傷（欠陥）があることを「知っている」とは断定できないといえよう。

なお、チベット語訳はサンスクリット訳と同様に、増上慢の四衆は自らに傷（欠陥）があることを「知っている」とする。

1.1.1 ネパール系写本

次に、SP サンスクリット諸写本における長行箇所の読み *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntāḥ* の箇所を比較検討したい。

以下ではまず、梵文法華經研究会編『梵文法華經写本集成』¹²、Āśā、Bendall、ならびに STTAR 写本をもとに、32点のネパール系サンスクリット写本の読みを表にして記す。K から STTAR までの32点がネパール系写本であり、表中の注記は、Toda (1998)、小槻 (2003, 2007, 2010, 2014)、水船 (2011) が示す異読である。なお、表中の2重線で囲んだ箇所は、戸田 (1984)、小槻 (2008) が分類するネパール系写本の古層 (11-13世紀頃)¹³の読みを持つとされる写本である。

KN	<i>ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntāḥ </i>
K ¹⁴ (MS. Held in the Tōyō Bunko, Tokyo, Palm-leaf, Brought by Ekai Kawaguchi)	<i>ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntāḥ</i> * * Toda (1998, p. 50): 'pakrāntāḥ

¹² Tsukamoto et al. (1988, p. 140).

¹³ 戸田 (1984, p. 142, p. 179) は、「一応最初に提示した分類[I] (C3, C4 (fols. 1-107, 118-140), K, N1) が、より古い形の本文を有する貝葉写本群とすることが出来、その後種々の変遷を経て、紙写本に連なっていることが明らかになったと考える。」と述べる。小槻 (2008, p. xxxii) は C3, C4, Pe, N1 を1つのグループとし、このグループがネパール系写本の最古層の読みを比較的良く保存していると考えられる、という。さらに加えて、K に関して、「最古層のグループや「B系」と完全に一致すると断言できない写本である」と述べる。Cf. Vogel (1974, pp. 4-5).

¹⁴ K は K' であり、東洋文庫蔵の 3A であろう。Cf. Yuyama (1970, p. 14)、金子 (1977)、Kaneko, Matsunami, and Saito (1979, p. 161).

Pk (MS. No. 0004, Held in the Nationalities Culture Palace, Peking, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntā* *Toda (1998, p. 51): 'pakrāntā
C1 (MS. Add. 1032, Cambridge University Library, Cambridge, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntā
C2 (MS. Add. 1324, Cambridge University Library, Cambridge, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado prakrāntā
C3 (MS. Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntāḥ* *Toda (1998, p. 50): parśadā 'pakrāntāḥ
C4 (MS. Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	tata* ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntā *Toda (1998, p. 50): ta[ta]
C5 (MS. Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	tata ātmānaṃ savraṇa jñātvā tataḥ parśado pakrāntā ¹⁵
C6 (MS. Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ * *Toda (1998, p. 50): 'paśamkrāntāḥ
B (MS. Or. 2204, British Museum, London, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ jñātvā jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ ¹⁶
R (MS. No.6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado prakāntā* *Toda (1998, p. 50), 小槻 (2007, p. 21): prak(r)āntā
P1 (MS. Nos. 138-139, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper)	tata ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ
P2 (MS. Nos. 140-141, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper)	tata ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ
P3 (MS. No.2, Société Asiatique, Paris, Paper)	tataḥ ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ
T2 (MS. No.408, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	tata ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado paśamkrāntāḥ ¹⁷

¹⁵ Toda (1998, p. 50): ta[ta] ātmānaṃ savraṇa(m) jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntā. 小槻 (2010, p. 21): ta[ta] ātmānaṃ savraṇa(m) jñātvā tataḥ parśado 'pakrāntā.

¹⁶ Toda (1998, p. 50): ta ātmānaṃ (savraṇaṃ) jñātvā [jñātvā] tataḥ parśado 'paśamkrāntāḥ |, 水船 (2011, p. 26): ta ātmānaṃ (sarvaṇaṃ) jñātvā[jñātvā] tataḥ parśado 'paśamkrāntāḥ |

¹⁷ Toda (1998, p. 50) : ta[ta] ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'paśamkrāntāḥ |

T3 (MS. No.409, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntāḥ
T4 (MS. No.410, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	taṃ ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado prakrāntā
T5 (MS. No. 411, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado prakāntā
T6 (MS. No.412, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntāḥ * *Toda (1998, p. 50): 'pasamkrāntāḥ
T7 (MS. No.413, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntāḥ ¹⁸
T8 (MS. No.414, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tata pa[r̥ṣa]do pasamkrāntā ¹⁹
T9 (MS. No.415, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado prakāntā
A1 (MS. No. G 4079, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	tata ātmānāṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntā ²⁰
A2 (MS. No. G 4199, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntā
A3 (MS. No. B 7, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	ta ātmānaṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntā
N1 (MS. No. 4/21, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado pakrāntā* *Toda (1998, p. 51): 'pakrāntā
N2 (MS. No. 3/678, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf)	ta ātmānaṃ savraṇa jñātvā tataḥ parśado pasamkrāntāḥ ²¹
N3 (MS. No. 5/144, National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū, Palm-leaf)	lost

¹⁸ Toda (1998, p. 50) : ta ātmānaṃ sa[ṣ]vraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pasamkrāntāḥ |

¹⁹ Toda (1998, p. 51): ta ātmānaṃ sa[r̥]vraṇaṃ jñātvā tata(h) pa(r̥ṣa)do 'pasamkrāntā. 小槻 (2003, p. 21): ta ātmānaṃ sa[r̥]vraṇaṃ jñātvā tata(h) pa(r̥ṣa)do 'pasamkrāntā.

²⁰ Toda (1998, p. 51): ta[ta] ātmānāṃ sabrahmaṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pasamkrāntā, 小槻 (2014, p. 24): ta[ta] ātmānāṃ savra[hma]ṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pasamkrāntā.

²¹ Toda (1998, p. 51): ta ātmānaṃ savraṇa(m) jñātvā tataḥ parśado 'pasamkrāntāḥ.

Āśā ²²	lost
Bendall ²³	lost
STTAR ²⁴ (undated)	ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'p{r}akrāntā
STTAR ²⁵ (A. D. 1065)	tataḥ ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tata(h) {s}parśa(!ṣa)do 'pasamkrāntā
STTAR ²⁶ (A. D. 1067)	te ātmānaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'pakrāntāḥ

K から STTAR (A.D. 1067) までのネパール系写本を見ると、多少の異同があるものの、いずれも *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'pakrāntāḥ* (彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである) の読みをとっていることが分かる。

このように 32 点のネパール系写本は、当該箇所を欠く N3, Āśā, Bendall を除き、いずれの写本も「知ったうえで」 (*jñātvā*) の読みを採用している。

1.1.2 Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本

次に、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'pakrāntāḥ* の箇所に関する、Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本の読みを目を向けたい。表中の注記は、Watanabe (1975), Toda (1981) が示す異読である。

Gilgit A	ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ pariśadaḥ prakrāntāḥ [[]] ²⁷
Gilgit B	lost
Gilgit C	lost

²² Āśā Archives, Kathmandu, Palm-leaf. Cf. Toda (1997, p. 657).

²³ Cecil Bendall manuscripts collection, Durbar Library (Bir Library; National Archives), Kathmandu. Cf. Toda and Matsuda (1991, pp. 21-25).

²⁴ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006a, p. 24).

²⁵ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006b, p. 24).

²⁶ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006c, p. 23).

²⁷ Watanabe (1975, p. 25).

K ²⁸	lost
Lüshun ²⁹	lost
Khādaliq ³⁰	lost
Farfād-Bég ³¹	lost
Kashgar ³²	te ātmānaṃ saṃvraṇaṃ jñātvā sacchidraṃ te tataḥ pariśado pākṛāntā ³³
Mannerheim ³⁴	lost
Schøyen ³⁵	lost

まず Gilgit 写本は A, B, C, K の 4 つのグループに分かれるが、当該箇所を含むのはグループ A (以下、Gilgit A) のみである³⁶。Gilgit A ではネパール系写本に比較して冒頭の *ta* が欠如している点が異なるが、*jñātvā* の読みをとる点は一致している。

次に中央アジア (コータン) 出土の Kashgar 写本は *te ātmānaṃ saṃvraṇaṃ jñātvā sacchidraṃ te tataḥ*

²⁸ Srinagar fragment. Cf. von Hinüber (1982, p. xvii).

²⁹ Lüshun Museum Collection. Cf. Jiang (1997).

³⁰ Wille (2000, pp. 6-13).

³¹ Farhād-Bég Manuscript. Cf. Toda (1981, p. lv): The Farhād-Bég manuscript was found by A. Stein during his second expedition in Eastern Turkestan and is now held under F xii, 7 in the India Office Library. It is said that this was discovered in the sand-buried ruins of Farhād-Bég-Yailaki near Khadalik.

³² Kashgar Manuscript. Lokesh Chandra (1976) 以降に発見された Kashgar ms. に関しては、Bibliotheca Buddhica 33 (1985), Bibliotheca Buddhica 34 (1990), St.Petersburg Journal of Oriental Studies (1994), Kudo and Vorobyova-Desyatovskaya (2007) を確認したが、当該箇所は欠く。

³³ Mizufune (2013, 45a5-6). Cf. Toda (1981, p. 23): *te ātmānaṃ saṃvraṇaṃ jñātvā sacchidraṃ te tataḥ pariśado 'p* [*r*] *ākṛāntā*. Tsukamoto et al. (1988, p. 140): *te ātmānaṃ saṃvraṇaṃ jñātvā sacchidraṃ te tataḥ pariśado pākṛāntā*.

³⁴ Mannerheim collection. Cf. Wille (2001, p. 46).

³⁵ Schøyen Collection. Toda (2002, p. 69) が指摘するように 44 の断片が確認されているが当該箇所を伝える断片はない。

³⁶ Watanabe (1975) に含まれないグループ B, グループ C, fragment K の写本に関しては Toda (1979), (1988, pp. 1-19), von Hinüber (1982) を確認したが、当該箇所は欠く。

pariṣado pakrāntā（彼らは自らが傷（欠陥）があり欠点を持つことを知ったうえで、彼らはその大衆より去ったのである）³⁷の読みをとる。Kashgar 写本ではネパール系写本に比較して冒頭の *ta* が *te* であること、ならびに *sacchidraṃ te* が付加されているという2点が異なるが、*jñātvā* の読みをとる点は一致している。

なお、Lüshun, Khādaliq, Farfād-Bég, Fragment, Mannerheim, Schøyen は、当該箇所を欠く。

このように、Gilgit A ならびに Kashgar 写本ともに *jñātvā* の読みをとることが確認できる。

1.1.3 チベット語訳諸版本・写本

次に、チベット語訳諸版本・写本の読みを検討したい。

以下の表では、チベット語訳諸版本・写本をもとに、長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* のチベット語訳の読みを記す。なお、カンギュルのグループ分けは Eimer (1992, pp. xviii-xix) の分類を参考とする。

	<i>ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā</i>
Peking	de dag rang gi skyon shes te ³⁸
Co ne	de dag rang gi skyon shes te ³⁹
sDe dge	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁰
Urga	de dag rang gi skyon shes te ⁴¹
lHa sa	de dag rang gi skyon shes te ⁴²
Shelkar (London)	de dag rang gi skyon shes te ⁴³

³⁷ Cf. appendix A, p. 47: Having understood that they had their own flaw and defect, they left the assembly.

³⁸ P 18b3.

³⁹ C 19a5.

⁴⁰ D 16a7.

⁴¹ U 16a7.

⁴² H 25b4-5.

⁴³ Z 25b7.

Ulanbator	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁴
Stog Palace	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁵
sNar thang	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁶
Phug brag	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁷
Neyphug	de dag rang gi skyon shes te ⁴⁸

長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* については上記のいずれの写本・版本も *de dag rang gi skyon shes te* の読みをとることが確認される。このチベット語訳⁴⁹は、サンスクリット諸写本の長行にみられる *jñātvā* に対応することから、Gilgit 写本もしくはネパール系写本の読みに従ったことが推測できる⁵⁰。

⁴⁴ V 21b2.

⁴⁵ S 24b5.

⁴⁶ N 24b1.

⁴⁷ 69b8.

⁴⁸ Np No.016-001, ma24a6.

⁴⁹ 9c 初頭の *Ye shes sde* 他訳。Cf. Apple (2016, pp. 138-139): The officially sanctioned Tibetan translation of the *Lotus Sutra* was carried out by the translation team comprised of the Indian Surendrabodhi (Tib. *lha'i dbang po byang chub*) and the great Tibetan editor sNa-nam Ye-shes-sde...Surendrabodhi and sNe-nam Ye-shes-sde translated the *Lotus Sutra* from Sanskrit into Tibetan according to the revised dharma-language certified by the Emperor's authoritative decision...As Skilling has noted, Surendrabodhi, who may have been from Kashmir, often worked with Ye-shes-sde and they were most likely active sometime in the first decade of the ninth century (804 to 816 CE).

⁵⁰ チベット語訳諸版本・写本と Gilgit 写本、ネパール系写本との関係については、Watanabe (1975, p. xiv), 戸田 (1980, p. 107), 戸田 (1984, p. 142), Apple (2016, p. 139) を参照。

1.1.4 日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本

以下では、日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本をもとに、『妙法華』「方便品」に記される五千起去の長行箇所 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) の漢訳の読みを表にして記す⁵¹。

漢訳写本/版本の種類	「有如此失」に関して
七寺一切経	有如此失
興聖寺一切経	有如此失
房山石経	有如此失
應縣木塔遼代秘蔵	有如此失
高麗大蔵経（初雕版）	未収録
福州版大蔵経（開元寺蔵）	有如此失
思溪版大蔵経	有如此失
趙城金蔵	存目
高麗大蔵経（再雕版）	有如此失
宋磧砂大蔵経	有如此失
磧砂大蔵経（北京版）	有如此失。
洪武南蔵	未収録
永楽北蔵	有如此失
乾隆大蔵経	有如此失
大正新脩大蔵経	有如此失。
中華大蔵経	有如此失

『七寺一切経』ならびに『興聖寺一切経』は日本古写経に伝承される諸写本であり、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* は「有如此失」の読みをとることが確認できる。

諸版本に関し、未収録である『高麗大蔵経（初雕版）』、『洪武南蔵』、ならびに「序品」「方便品」を欠く『趙城金蔵』を除き、『房山石経』『應縣木塔遼代秘蔵』『思溪版大蔵経』『高麗大

⁵¹ 『正法華』は、長行箇所 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) を「收屏蓋藏衣服臥具」と漢訳し、サンスクリットテキストとの対応は異読の可能性があるので、『正法華』の長行箇所に関する記載は省略する。

藏經（再雕版）』『宋磧砂大藏經』『磧砂大藏經（北京版）』『永樂北藏』『乾隆大藏經』『大正新脩大藏經』『中華大藏經』は、「有如此失」と読んでいる。

ただし興味深いことに、『福州版大藏經（開元寺藏）』のみは *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* を「有知此失」と読んでいる。

このように、日本古写經に伝承される諸写本ならびに諸版本は、『妙法華』に関し、『福州版大藏經（開元寺藏）』の「有知此失」を除き、いずれも「有如此失」の読みをとる。

1.1.5 敦煌出土『法華經』写本

次に、敦煌出土『法華經』写本に関して、『妙法華』「方便品」に記される五千起去の長行箇所 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) の漢訳の読みを確認する。

敦煌出土写本	該当箇所の写本数	「有如此失」に関して
英國國家圖書館藏敦煌遺書 (S.)	81	有如此失
法藏敦煌西域文献 (P)	5	有如此失
俄藏敦煌文献 (Φ)	6	有如此失
國家圖書館藏敦煌遺書 (BD)	127	有如此失
上海圖書館藏敦煌吐魯番文献 (上圖)	2	有如此失
上海博物館藏敦煌吐魯番文献 (上博)	1	有如此失
天津市藝術博物館藏敦煌文献 (津藝)	6	有如此失
北京大學圖書館藏敦煌文献 (北大)	1	有如此失
甘肅藏敦煌文献 1-2 (敦研)	2	有如此失
甘肅藏敦煌文献 4-5 (甘博)	1	有如此失
浙藏敦煌文献 (浙江)	1	有如此失
敦煌卷子 (中圖)	4	有如此失
敦煌秘笈 影片冊 (羽)	8	有如此失
世界民間藏中國敦煌文献 1 (CXZ)	1	有如此失
敦煌寶藏 散 (散)	4	有如此失

『英國國家圖書館藏敦煌遺書』は、長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* を「有如此失」と読む。ただし、若干の異読として長行箇所を「有如是失」⁵²、「有此如失」⁵³と読むものもある。

『國家圖書館藏敦煌遺書』は「有如此失」と読み、異読として「有此失」⁵⁴が見られたが、これは書写の際に「如」を落としたのであろうか。

『法藏敦煌西域文獻』『俄藏敦煌文獻』『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』『北京大學圖書館藏敦煌文獻』『甘肅藏敦煌文獻 1-2』『甘肅藏敦煌文獻 4-5』『浙藏敦煌文獻』『敦煌卷子』『敦煌秘笈 影片冊』『世界民間藏中國敦煌文獻 1』『敦煌寶藏 散』は、いずれも「有如此失」と読んでいる。

1.1.6 考察

以上のように、32 点のネパール系写本における *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parṣado 'pakraṅtāḥ* のテキストを検討した結果、当該箇所を欠く N3, Āsā, Bendall を除き、いずれの写本も *jñātvā* の読みをとることが確認できる。

Gilgit 及び中央アジア出土諸写本の異読に関しては、Gilgit A では *ātmānaṃ* が冒頭にあり *ta* が欠落しているという点は他の写本と異なるが、*jñātvā* に関しては一致した読みをとる。さらに Kashgar 写本は冒頭の *ta* が *te* と出る点、並びに *sacchidraṃ te* が付加されている点に関しては他の写本と異なるが、*jñātvā* については一致した読みをとる。

上記のような *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の読みに関して、WT の脚注には「*savraṇaṃ jñātvā* には『自ら失あるを知りて』と翻すべきも、増上慢の人を称すとせば『自ら失無きものと考へて』なるか或は『自ら失あるを知らずして』なる意味を適當とす。随つて *savraṇaṃ ajñātvā* か或は *avraṇaṃ jñātvā* を適當とすべし。後の偈文（第 39 頌）を参照すべし」⁵⁵とある。しかしながら、この脚注が言及するような読みを支持するサンスクリット写本は見出せない。

チベット語訳諸版本・写本に関しては、*shes te*（知って）の読みをとることから、サンスクリット写本の読みである *jñātvā* に従ったことが推測できる。

⁵² S.6461.

⁵³ S.6913.

⁵⁴ BD.13820.

⁵⁵ WT (p. 36, 脚注).

日本古写経に伝承される諸写本、諸版本における長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* に対応する「有如此失」のテキストを確認した結果、後述の『福州版大蔵経（開元寺蔵）』、および未収録である『高麗大蔵経（初雕版）』、『洪武南蔵』、ならびに「序品」「方便品」を欠く『趙城金藏』を除き、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*（彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで）の対応訳文を「有如此失」としていることが確認できる。

これに対して、『福州版大蔵経（開元寺蔵）』にのみ見られる興味深い異読「有知此失」（此の失知ること有りて）は、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の漢訳として適当と思われる。本来 *jñātvā* は「知」と訳すことが好ましく、「有如此失」より「有知此失」の方がサンスクリットテキストの内容に一致するといえるであろう。つまり『福州版大蔵経（開元寺蔵）』にのみ確認される「有知此失」の「[有]知」はサンスクリットテキストの *jñātvā* にほぼ対応する。したがって「有知」は羅什が意図する文脈上の意識、あるいは「有知」の誤写であると考えられようか⁵⁶。しかしながら、こ

⁵⁶ 「有知」が「有知」の誤写である可能性に関しては、以下の4点が挙げられる。

- (1) 「如」と「知」の字体が類似していること。
- (2) 「如」と「知」が異読として扱われること。まず「知」の異読として「如」の読みが見られる例は、『大智度論』に「自然人法者, 聲聞人亦有覺, 亦有知, 而從他聞. 是弟子法. 是故說佛是自然人, 不從他聞.」(T no. 1509, 25: 552b10-12)とあり、下線を付した「有知」の異読に関して、Tの脚注には、「知=如（三、宮、聖）」とある。内容的には、「聲聞人も亦た覺あり、亦た知あり」の方が適していると考えられるため、「有知」の読みが相応しいであろう。次に、「如」の異読として「知」の読みが見られる例は、『妙法華』「勸持品」に「若世尊, 告勅我等持說此經者, 當如佛教, 廣宣斯法.」(T no. 262, 9: 36b11-13)とあり、下線を付した「如」の異読に関して、Tの脚注には「如=知（博）」とある。内容的には、「若し世尊にして、我等に此の經を持ち説けと告勅げたまわば、當に佛の教えの如く、廣く斯の法を宣ぶべし。」の読みが相応しいと思われる。したがって、「如」の読みが適していると考えられよう。
- (3) 「有知此失」という読みの用法に関して、羅什訳經典に「有知+目的語」の用法をもつ若干の例を見ることができる。その1例を示せば、『持世經』に「若有知此世間如實相, 爲說世間虛妄如幻.」(T no. 482, 14: 654b6-7)（若し此の世間の如實の相を知ること有らば、為に世間は幻の如く虚妄なりと説く。）とある。したがって、『福州版大蔵経（開元寺蔵）』に見られる「有知此失」という読みは、用法としても十分に可能と思われる。
- (4) *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* を直訳すれば、「彼等知自有失」もしくは「彼等自知有失」であろう。『大智度論』に1例、「自知有失」の読みを見ることができる(T no. 1509, 25: 687b12).

ここで『福州版大蔵経（開元寺蔵）』に関して若干、触れておきたい。周知のように、宋版三大蔵経の開板・補刻の時期は継続、平行しておこなわれた⁵⁷。宋版大蔵経の1つである『思溪版大蔵経』の長行箇所は「有如此失」であるため、『福州版大蔵経（開元寺蔵）』に確認された「有知此失」という異読に関しては慎重な検討が必要である。したがって、『福州版大蔵経（開元寺蔵）』に見られる「有知此失」の読みが本来的であるとは、必ずしも結論することはできないであろう。

敦煌出土写本に関しては、概ね長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* を「有如此失」と読むことが確認できる。

当該箇所の現代語訳を見ると、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の読みのもとに、Kern (1884)は “Therefore, thinking themselves aggrieved...” と訳したと考えられる。しかし *savraṇaṃ* の内容を themselves aggrieved としており、[仏陀によって] 不当に苦しめられた傷と解釈したのは、増上慢という特性を考慮した故であろうか。さらに冒頭の Therefore はネパール系写本 C4 に見られる *tata* の訳と思われる。これは Kern (1884) が C3 と C4 に依っており、ここでは C4 の *tata* を採用したのであろう⁵⁸。

さらに、岩本 (1962) は「かれらは自尊心を傷つけられたと思って」と訳すが、これは Kern (1884) の “Therefore, thinking themselves aggrieved...” に Therefore を除きほぼ一致する。この場合も *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の読みを採用すると見られる。

なお、松濤 (1975) の「彼らは自分に欠陥のあることを知らないで」という和訳は、WT の脚注中の *savraṇaṃ ajñātvā* に従ったものであろうか。

一方、中村 (1995) は、「写本集成を見るのに否定をもつものはない。什訳には『有如此失』と。原文どおりに訳した。」⁵⁹ と述べる。このことから中村 (1995) は *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の読みを採用するが、その内容理解については、Kern (1884)、岩本 (1962) とは異なり、原文どおり「彼らは自分に過失のあることを知って」と訳出している。

このように現存する写本の当該箇所を見るかぎりでは、「彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで」 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) が相応しいと考えられる。しかしながら、WT が脚注に述べるように、増上慢の特性を考えると、「彼らは自らに傷（欠陥）があることを知らず」と

⁵⁷ 野沢 (1999, p. 38).

⁵⁸ Cf. 前注 3 (1).

⁵⁹ 中村 (1995, p. 245).

否定形で読むことも一見して不当とは言えないようにも思われる⁶⁰。そこで次に、対応する第39偈に目を向けたい。

1.2 「五千起去」の内容: 第39偈に関して

次に、長行箇所に対応する第39偈に目を向けたい。

世尊は、「舍利弗よ、あなたはこの仏陀の法に関して、私を信じ、信頼し、よく考えなさい」⁶¹と述べ、長行で述べた意義を更に明らかにするため第38偈以下の偈頌を説く。以下では五千起去が述べられる箇所の内、先の長行箇所に対応する第38、39偈を記す（下線筆者）。⁶²

(KN) athābhimānaprāptā ye bhikṣubhikṣuṇyupāsakāḥ |
upāsikāś ca aśrāddhāḥ sahasrāḥ ①pañcanūnakāḥ① || 38 ||⁶³ (①WT pañc' anūnakāḥ)

⁶⁰ SP に出る *vraṇa* の使用例は、第2章 *Upāyakaṣāya* の長行で扱った当該箇所、それに対応する第39偈、そして第3章 *aupamyā* の133偈 (KN, p.96, 15: *vastrāṇi co vyādhaya bhonti tasya vraṇāna koṭīṇayutāśca kāye*) の3例のみである。その内、第3章133偈の *vraṇa* は腫物を意味する。ここでは、SP 第2章の長行に出る *vraṇa* の内容は、当該箇所 (*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) の直前の内容、「獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いている」 (*aprāpte prāptasamjñīno 'nadhigate 'dhigatasamjñīnaḥ*) を、「傷」という比喻を用いて示し、長行に対応する第39偈に出る *vraṇa* も同様の意味を指す可能性があるという理解に留まる。Cf. Ejima (1985-1993, p. 966, p. 1085).

⁶¹ KN (p. 44, 3): *imeṣu buddhadharmeṣu śraddadhādhvaṃ me śāriputra pattīyatāvakaḥ payata |*

⁶² 「五千起去」に関して言及される長行と偈頌の対応に関しては、長行箇所の「また、世尊がこの言説を語られるやいなや、その時、その大衆の中から増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五千人は」までが第38偈に対応する。したがって第39偈に対応する長行箇所は「諸々の座より立ち上がって、世尊の両足に頭を以て礼拝して、その大衆から去った。すなわち、増上慢という不善根により、獲得していないのに獲得したという思いを懐いており、達していないのに達したという思いを懐いているからである。彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである。」である。

(テキストは1.1「五千起去」の内容: 長行箇所に関して、を参照)

⁶³ KN (p. 44, 7-8).

①sampaśyanta① imaṃ doṣaṃ chidraśikṣāsamanvitāḥ |

vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ prakrāntā bālabuddhayaḥ || 39 ||⁶⁴ (①WT apaśyanta)

(訳) その時、信のない増上慢を得ている比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちは五千人より少なくなかった。欠点のある学習を具えている人々は、この過失を見ながら、諸々の傷(欠陥)を隠しながら、愚かな考えを持っている人々は、退いた。

(妙) 「比丘比丘尼, 有懷増上慢. 優婆塞我慢, 優婆夷不信. 如是四衆等, 其數有五千.

不自見其過. 於戒有缺漏, 護惜其瑕疵. 是小智已出。」⁶⁵

(訳) 比丘・比丘尼にして、増上慢を懐くものあり。優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なるあり。是の如き四衆等は、その數五千あり。自ら其の過を見ず。戒に於て缺漏ありて、其の瑕疵を護り惜しむ。是の小智のものは已に出でたり。

(藏) nga rgyal can gyi dge slong dang ||

dge slong ma dang dge bsnyen dang ||

dge bsnyen ma mams ma dad pa ||

lnga stong las ni mi nyung ba ||

bslab pa zhig ral (P dral) ldan pa mams ||

nyes pa 'di (P de) dag mthong gyur nas ||

skyon mams yongs su sbed pa'i phyir ||

byis pa'i blo can de dag dong ||⁶⁶

(訳) 増上慢を持つ比丘、比丘尼、優婆塞、および優婆夷たちは信がなく、五千よりは少なくなかった。欠点のある学習を具えている人々は、これらの過失を見ながら、諸々の傷を隠すために、愚かな考えを持つ彼らは退いた。

上記に示した五千起去の箇所に関して下線部分を見ると、KNで *sampaśyanta* とある箇所は、WTで *apaśyanta*⁶⁷と校訂されている。同本はその理由を、「版本には、*sampaśyanta* とあるも、(妙)に

⁶⁴ KN (p. 44, 9-10).

⁶⁵ T no. 262, 9: 7c11-15. Cf. 『正法華』 「比丘比丘尼, 心懷甚慢恣, 諸清信士女, 五千人不信. 不自見瑕疵. 奉誠有缺漏, 多獲傾危事, 而起愚駭意, 反行求雜糅。」 (T no. 263, 9: 70a5-9).

⁶⁶ D no.113, ja19b2-3; P no.781, chu22a6-8; S no.141ma29b2-3; Z no.172ma30b6-7.

⁶⁷ WT (p. 41, 1): *apaśyanta imaṃ doṣaṃ chidra-śikṣā-samanvitāḥ* |

『不自見其過』とあり、この箇所の長行(p. 36, l. 10)を見るに、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* とあり。ここにも於ても *jñātvā* は *ajñātvā* なるか、或は *ta* が *na* の誤りなるかの何れかなるべく、『自ら失ありと知らずして』の義なるべし。(妙)には『有如此失』とあり。若し然らざれば *savraṇaṃ* は *avraṇaṃ* の誤りなるべきか、即ち『自ら失なしと考えて』と翻ずべし。之と同様に今も『過を見ずして』の義と見て今の如く改む。古字形にて *sa* 若しくは *saṃ* と *a* と相似たり⁶⁸と説明する。

WTの脚注にある通り、漢訳『法華経』はいずれも「不自見」と訳していることから、*apaśyanta* と校訂することも一見して不当とは言えないようにも思われる。

そこで以下ではまず、サンスクリット諸写本をもとに、増上慢の四衆は「この過失を見る」(*saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ*)のか、もしくは「この過失を見ない」(*apaśyanta imaṃ doṣaṃ*)のかという点に絞り検討を加えたい。

1.2.1 ネパール系写本

ここではまず、梵文法華経研究会編『梵文法華経写本集成』⁶⁹、並びに Āśā、Bendall ならびに STTAR 写本をもとに、*saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ chidraśikṣāsamanvitāḥ* の箇所に関して、32点のネパール系サンスクリット写本の読みを表にして記す。なお表中の注記は、Toda (1996)、小槻 (2003, 2007, 2010, 2014)、水船 (2011) が示す異読である。

KN	<i>saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ chidra-śikṣā-samanvitāḥ</i> * *Toda (1996, p. 8): <i>cchidraśikṣāsamanvitāḥ</i>
K (MS. held in the Tōyō Bunko, Tokyo, Palm-leaf, brought by Ekai Kawaguchi)	<i>sampaśyante imaṃ doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitāḥ</i> * *Toda (1996, p. 9): <i>cchidrasikṣāsamanvitāḥ</i>
Pk (MS. No.0004, held in the Nationalities Culture Palace, Peking, Palm-leaf)	<i>saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitā</i> ⁷⁰

⁶⁸ WT (p. 41, 脚注 1).

⁶⁹ Tsukamoto et al. (1988, p. 237).

⁷⁰ Toda (1996, p. 9): *saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ cchidrasikṣāsamanvitā* |

C1 (MS. Add. 1032, Cambridge University Library, Cambridge, Paper)	sampaśyanta imam doṣa cchidraṃ śikṣā-samanvitā
C2 (MS. Add. 1324, Cambridge University Library, Cambridge, Paper)	sampaśyanta imam doṣa cchidraṃ śikṣā-samanvitā
C3 (MS. Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	sampasyantā imam doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitāḥ* *Toda (1996, p. 9): cchidrasikṣāsamanvitāḥ
C4 (MS. Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	sampasyamta imam doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitā * *Toda (1996, p. 9): cchidrasikṣāsamanvitā
C5 (MS. Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	sampasyantām iman doṣaṃ tīdra-śikṣā-samanvitāḥ ⁷¹
C6 (MS. Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge, Palm-leaf)	sampasyanta imam doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitāḥ * *Toda (1996, p. 9): cchidrasikṣāsamanvitāḥ
B (MS. Or. 2204, British Museum, London, Palm-leaf)	sampasyamta imam doṣaṃ cchidra-sikṣā-samanvitāḥ ⁷²
R (MS. No.6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London, Paper)	sampaśyanta imam doṣaṃ cchidra-śikṣā-samanvitā * *Toda (1996, p. 8), 小槻 (2007, p. 24): cchidraśikṣāsamanvitā
P1 (MS. Nos. 138-139, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper)	sapaśyamta imam doṣaṃ kṣipra-śikṣā-samanvitāḥ
P2 (MS. Nos. 140-141, Bibliothèque Nationale, Paris, Paper)	sapaśyanta imam doṣaṃ kṣipraṃ śikṣā-samanvitāḥ
P3 (MS. No.2, Société Asiatique, Paris, Paper)	sampaśyanta imam doṣaṃ cchidra-śikṣā-samanvitā
T2 (MS. No.408, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	sampasyanta imam doṣaṃ kṣipra-sikṣā-samanvitāḥ ⁷³
T3 (MS. No.409, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	sampasyanta imam doṣaṃ cchidra-śikṣā-samanvitāḥ

⁷¹ Toda (1996, p. 9), 小槻 (2010, p. 24): *sampasyantā-m-iman doṣaṃ tīvrasikṣāsamanvitāḥ* |

⁷² Toda (1996, p. 9): *sampasyamta i/imam doṣaṃ cchidrasikṣāsamandhitāḥ* ||, 水船 (2011, p. 30): *sampasyamta imam doṣaṃ cchidrasikṣāsamandhitāḥ* ||

⁷³ Toda (1996, p. 9): *sampaśyanta imam doṣaṃ kṣiprasikṣāsamanvitāḥ* |

T4 (MS. No.410, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitā
T5 (MS. No. 411, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	sam̐paśyam̐ta imam̐ doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitā
T6 (MS. No.412, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	sampasyanta ima doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitāḥ ⁷⁴
T7 (MS. No.413, Tokyo University Library, Tokyo, Palm-leaf)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitāḥ * *Toda (1996, p. 9): cchidraśikṣāsamanvitāḥ
T8 (MS. No.414, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitā * *Toda (1996, p. 9), 小槻 (2003, p. 24): cchidraśikṣāsamanvitā
T9 (MS. No.415, Tokyo University Library, Tokyo, Paper)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidra-kṣi[kṣa]kṣā-samanvitā
A1 (MS. No. G 4079, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	sam̐paśyantā imam̐ doṣam̐ kṣipra-śikṣā-samanvitā ⁷⁵
A2 (MS. No. G 4199, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidram̐ śikṣā-samanvitā
A3 (MS. No. B 7, Asiatic Society, Calcutta, Paper)	sam̐paśyanta imam̐ doṣam̐ cchidram̐-śikṣā-samanvitā
N1 (MS. No. 4/21, National Archives of Nepal, Kāthmāṇḍū, Palm-leaf)	sampasyanta imam̐ doṣa cchidra-śikṣā-samanvitāḥ ⁷⁶
N2 (MS. No. 3/678, National Archives of Nepal, Kāthmāṇḍū, Palm-leaf)	sapaśyanta ima doṣa cchidra-śikṣā-samanvitāḥ ⁷⁷
N3 (MS. No. 5/144, National Archives of Nepal, Kāthmāṇḍū, Palm-leaf)	sam̐paśyanta iman̐ doṣam̐ cchidra-śikṣā-samanvitāḥ * *Toda (1996, p. 9): cchidraśikṣāsamanvitāḥ
Āśā	lost
Bendall	lost
STTAR (undated) ⁷⁸	sam̐paśyanti imam̐ doṣam̐ cchidra[kṣā]samanvitā

⁷⁴ Toda (1996, p. 9): *sampasyanta iman̐ doṣam̐ cchidraśikṣāsamanvitāḥ |*

⁷⁵ Toda (1996, p. 9), 小槻 (2014, p. 28): *kṣiprasikṣāsamanvitā.*

⁷⁶ Toda (1996, p. 9): *sampasyanta imam̐ doṣa(m̐) cchidraśikṣāsamanvitāḥ*

⁷⁷ Toda (1996, p. 9): *sa(m̐)paśyanta ima(m̐) doṣa(m̐) cchidraśikṣāsamanvitāḥ ||*

⁷⁸ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006a, p. 28).

STTAR (A. D. 1065) ⁷⁹	parṣatā imaṃ doṣā(!ṣa)ṃ kṣipra{ṃ}śikṣā{ṃ}sama[nvitā
STTAR (A. D. 1067) ⁸⁰	sampasyatā imaṃ doṣaṃ cchidrasikṣāsamanvitāḥ

K から STTAR (A. D. 1067) までのネパール系写本を見ると、多少の異同はあるものの、異読を示す STTAR (A. D. 1065) を除き、いずれも「この過失を見て」 (*sampāsyanta imaṃ doṣaṃ*) の読みをとっていることが分かる。

このように 32 点のネパール系『法華経』サンスクリット写本は、当該箇所を欠落させる Āśa、および Bendall 両写本、異読を示す STTAR (A. D. 1065) を除き、いずれの写本も「見て」 (*sampāsyanta*) の読みを採用している。

1.2.2 Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本

次に *sampāsyanta imaṃ doṣaṃ chidrasikṣāsamanvitāḥ* の箇所に関する Gilgit 写本、中央アジア出土諸写本、Schøyen 写本の読みに目を向けたい。

Gilgit A	lost
Gilgit B	sampāsyantā imaṃ doṣaṃ cchidra-śikṣā-samanvitā ⁸¹
Gilgit C	lost
K	lost
Lüshun	lost
Khādaliq	lost
Farfād-Bég	lost

⁷⁹ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006b, p. 28).

⁸⁰ Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region. Cf. Jiang (2006c, p. 27).

⁸¹ Watanabe (1975, p. 188).

Kashgar ⁸²	svāni doṣāṇy apaśyantās chidraśīlā samantataḥ ⁸³
Mannerheim	lost
Schøyen	lost

まず Gilgit 写本は A, B, C, K の4つのグループに分かれるが、当該箇所を含むのは Group B（以下、Gilgit B）のみであり⁸⁴、Gilgit B はネパール系写本と同様に *sampaśyanta* の読みをとる。

次に Kashgar 写本は、「あまねく欠点を習いとしている人々は自らの諸々の過失を見ていない」(*svāni doṣāṇy apaśyantās chidraśīlā samantataḥ*) の読みをとる。Kashgar 写本はネパール系写本と比較して、①「見て」(*sampaśyanta*) の代わりに「見ない」(*apaśyanta*) の読みをとること、②「この過失を」(*imaṃ doṣaṃ*) の代わりに「自らの諸々の過失を」(*svāni doṣāṇy*) の読みをとること、③「学習」(*śikṣā**) の代わりに「習い」(*śīlā*) の読みをとること、④「具えている人々」(*samanvitāḥ*) の代わりに「あまねく」(*samantataḥ*) の読みをとるという4点に大きな違いがある。特に Kashgar 写本のみを確認される *apaśyantās* の読みはきわめて注目される。

なお、Lüshun, Khādaliq, Farfād-Bég, Mannerheim, Schøyen は、当該箇所を欠く。

従って、第39偈では Gilgit B はネパール系写本と同様に *sampaśyantā* (sic.) であるが、Kashgar 写本のみが *apaśyantās* の読みをとることが確認できる。ちなみに、いずれの読みも śloka (anuṣṭubh) 韻律上の問題はない。

1.2.3 チベット語訳諸版本・写本

次に、第39偈のチベット語訳諸版本・写本の読みを検討したい。以下の表では、チベット語訳諸版本・写本をもとに、第39偈 *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* のチベット語訳の読みを記す。

⁸² Tsukamoto et al. (1988, p. 237) には *svāni doṣāṇy apaśyantās chidra-śīlā samantataḥ* の読みを取る。Lokesh Chandra (1976) 以降に発見された Kashgar ms に関しては、Bibliotheca Buddhica 33 (1985)、Bibliotheca Buddhica 34 (1990)、St.Petersburg Journal of Oriental Studies (1994)を確認したが、当該箇所は欠落している。

⁸³ Mizufune (2013, 52b7- 53a1). Cf. Toda (1981, pp. 26-27): *svāni doṣāṇy apaśyantās chidraśīlā(h) samantataḥ*

⁸⁴ Watanabe (1975) に含まれない Group B, C の写本に関しては戸田 (1979), 戸田 (1988, pp. 1-19) を確認したが、当該箇所は欠落している。

	sampaśyanta imaṃ doṣaṃ
Peking	nyes pa de dag mthong gyur nas ⁸⁵
Co ne	nyes pa de dag mthong gyur nas ⁸⁶
sDe dge	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁸⁷
Urga	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁸⁸
lHa sa	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁸⁹
Shelkar (London)	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁹⁰
Ulanbator	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁹¹
Stog Palace	nyes pa 'di dag mthong gyur nas ⁹²
sNar thang	nyes pa de dag mthong gyur nas ⁹³
Phug brag	nyes pa de dag mthong gyur nas ⁹⁴
Neyphug	nyes pa de dag mthong gyur nas ⁹⁵

第 39 偈 *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* については、*nyes pa de dag mthong gyur nas* あるいは *nyes pa 'di dag mthong gyur nas* の 2 種類の読みが見られ、いずれも複数形で訳すが、共に過失に対する指示代名詞 *imaṃ* の訳語として問題はない。

以上のように、チベット語訳諸版本・写本における第 39 偈のテキストを検討した結果、*mthong*

⁸⁵ P 22a7.

⁸⁶ C 23a2.

⁸⁷ D 19b3.

⁸⁸ U 19b3.

⁸⁹ H 30b6.

⁹⁰ Z 30b7.

⁹¹ V 25b2.

⁹² S 29b3.

⁹³ N 29a4.

⁹⁴ 鈴木 (2008, p. 62).

⁹⁵ Np No.016-001, ma29a4.

gyur nas（見ながら）の読みをとることが確認される。このチベット語訳の読みは Gilgit 写本もしくはネパール系写本の読みである *sampaśyanta* に従ったことが推測できる。

1.2.4 日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本

ここでは、日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本をもとに、『妙法華』「方便品」に記される第39偈 (*sampaśyanta imaṃ doṣaṃ*) の漢訳の読みを表にして記す。なお、『正法華』の第39偈「不自見瑕穢」の読みは（）内に記す。

漢訳写本/版本の種類	「不自見其過」に関して （）内は『正法華』の記述
七寺一切経	不自見其過（未検）
興聖寺一切経	不自見其過（未検）
房山石経	不自見其過（未収録）
應縣木塔遼代秘蔵	不自見其過（未収録）
高麗大蔵経（初雕版）	未収録（不自見瑕穢）
福州版大蔵経（開元寺蔵）	不自見其過（不自見瑕穢）
思溪版大蔵経	不自見其過（未検）
趙城金蔵	存目（存目）
高麗大蔵経（再雕版）	不自見其過（不自見瑕穢）
宋磧砂大蔵経	不自見其過（不自見瑕穢）
磧砂大蔵経（北京版）	不自見其過（不自見瑕穢）
洪武南蔵	未収録（不自見瑕穢）
永楽北蔵	不自見其過（不自見瑕穢）
乾隆大蔵経	不自見其過（不自見瑕穢）
大正新脩大蔵経	不自見其過（不自見瑕穢）
中華大蔵経	不自見其過（不自見瑕穢）

『七寺一切経』並びに『興聖寺一切経』は日本古写経に伝承される諸写本であり、*sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* は「不自見其過」の読みをとることが確認できる。

諸版本に関しては、未収録である『高麗大蔵経（初雕版）』『洪武南蔵』、ならびに「序品」「方便品」を欠く『趙城金藏』を除き、「不自見其過」の読みをとる。

また『正法華』に記される第39偈「不自見瑕穢」に関し、未検である『七寺一切経』『興聖寺一切経』『思溪版大蔵経』、未収録である『房山石経』『應縣木塔遼代秘蔵』、ならびに「序品」「方便品」を欠く『趙城金藏』を除き、『高麗大蔵経（初雕版）』『福州版大蔵経（開元寺蔵）』『高麗大蔵経（再雕版）』『宋磧砂大蔵経』『磧砂大蔵経（北京版）』『永樂北蔵』『乾隆大蔵経』『大正新脩大蔵経』『中華大蔵経』は「不自見瑕穢」の読みをとっている。ただし『洪武南蔵』のみは「不自見毀穢」を伝えている。

このように、日本古写経に伝承される諸写本並びに諸版本は、漢訳『法華経』に関し、いずれも第39偈の冒頭箇所は「不自見」の読みをとる。

1.2.5 敦煌出土『法華経』写本

次に、敦煌出土『法華経』写本に関して、『妙法華』「方便品」に記される第39偈 (*sampaśyanta imaṃ doṣaṃ*) の漢訳の読みを目を向けたい。

敦煌出土仏典	該当箇所の写本数	「不自見其過」に関して
英國國家圖書館藏敦煌遺書 (S.)	86	不自見其過
法藏敦煌西域文献 (P.)	4	不自見其過
俄藏敦煌文献 (Φ)	9	皆自見其過
國家圖書館藏敦煌遺書 (BD)	128	不自見其過
上海圖書館藏敦煌吐魯番文献 (上圖)	2	不自見其過
上海博物館藏敦煌吐魯番文献 (上博)	1	不自見其過
天津市藝術博物館藏敦煌文献 (津藝)	6	不自見其過
北京大學圖書館藏敦煌文献 (北大)	1	不自見其過
甘肅藏敦煌文献 1-2 (敦研)	0	(未収録)
甘肅藏敦煌文献 4-5 (甘博)	1	不自見其過
浙藏敦煌文献 (浙江)	1	不自見其過
敦煌卷子 (中圖)	4	不自見其過
敦煌秘笈 影片冊 (羽)	8	不自見其過

世界民間藏中國敦煌文獻1 (CXZ)	1	不自見其過
敦煌寶藏 散 (散)	4	不自見其過

『英國國家圖書館藏敦煌遺書』『法藏敦煌西域文獻』『國家圖書館藏敦煌遺書』『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』『北京大學圖書館藏敦煌文獻』『甘肅藏敦煌文獻4-5』『浙藏敦煌文獻』『敦煌卷子』『敦煌秘笈 影片冊』『世界民間藏中國敦煌文獻1』『敦煌寶藏 散』は *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* をいずれも「不自見其過」と読んでいる。なお、『甘肅藏敦煌文獻1-2』は第39偈相当部分を欠いている。

興味深いことに、『俄藏敦煌文獻』は第39偈 *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* を「皆自見其過」⁹⁶と読む。

1.2.6 考察

以上のように、32点のネパール系サンスクリット写本における第39偈のテキストを検討した結果、当該箇所を欠落させる Āśā、および Bendall 両写本、ならびに異読を示す STTAR (A. D. 1065)を除き、いずれの写本も *sampaśyanta* の読みをとることが確認できる。

Gilgit 及び中央アジア出土写本の異読に関しては、Gilgit B ではネパール系写本と同様に *sampaśyantā* (sic.) の読みをとる。一方、Kashgar 写本は 1.2.2 に挙げたような4点の異読をもつが、とりわけ見逃せないのは「見て」(*sampaśyanta*) の代わりに「見ない」(*apaśyanta*) の読みをとることである。

また、先にあげたチベット訳は「これらの過失を見て...⁹⁷」という内容を持ち、ネパール系写本及び Gilgit B の読みに一致する。

日本古写経に伝承される諸写本、ならびに諸版本における、第39偈のテキストに関して、『妙法華』では、*sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ながら) の対応箇所に「不自見其過」の訳文を置いていることが確認できる。このことから、第39偈に関するかぎり、漢訳『法華経』は Kashgar 写本に見られる、*svāni doṣāny apaśyantās* の読みをとり「不自見其過」(『正法華』は「不自見瑕穢」)と訳出したことが推定される。

⁹⁶ Φ050.

⁹⁷ *nyes pa 'di (de) dag mthong gyur nas* || Cf. 1.2.3 を参照。

また、『洪武南蔵』は『正法華』の第39偈「不自見瑕穢」を「不自見毀穢」と読み、「瑕」の代わりに「毀」を用いている。*doṣaḥ* の訳としては「瑕穢」の方が相応しいと思われるが、「毀穢」とすることも、増上慢の特性を加味すれば可能であろうか。

敦煌出土『法華経』写本に関しては、第39偈 *saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ* を「不自見其過」と読むことが確認できる。

なお『俄藏敦煌文獻』に確認される第39偈「皆自見其過」 ([増上慢の四衆は]皆、自ら其の過を見て) は、他の写本と異なり冒頭が「不」の代わりに「皆」と出ており興味深い。

以上のように、Kashgar 写本にのみ見られる「自らの諸々の過失を見ていない」 (*svāni doṣāny apāśyantās*) という内容は、『妙法華』の「不自見其過」、『正法華』の「不自見瑕穢」に一致する。この点に関しては、『正法華』、『妙法華』が Gilgit・ネパール写本より中央アジア出土写本に一致する傾向が強いという周知の事実にも照らしても予想しうる結果と言えるであろう⁹⁸。

従って、漢訳『法華経』が「不自見」とする箇所は Kashgar 写本の *apāśyanta* と一致するとはいえ、ネパール系写本並びに Gilgit B が全て *saṃpaśyanta* (Gilgit B は *saṃpaśyantā*) であること、並びに、1.1.1 で既に検討した通り、対応する長行の内容、すなわち、すべての写本が *jñātvā* ([自らに傷(欠陥)があることを]知ったうえで) とあることに照らしても、増上慢の四衆は自らの過失を「見て」 (*saṃpaśyanta*) と理解することが十分に可能であると思われる。

羅什が長行で「有如此失」と訳出したことに関しては、第39偈の「不自見其過」を念頭に置き、敢えて *jñātvā* の直訳である「知」を用いることを避け、偈頌の読みを重んじたとも推測できようか。

一方、WT の脚注にあるような、漢訳『法華経』が「不自見」とあることに基づいて、*apāśyanta* と校訂することも一見して不当とは言えないように思われるが、それを支持する読みは Kashgar 写本のみである。

以上の結果について、成立年代から考えると、『正法華』の「不自見瑕穢」が最も古いことになる。したがって、この読みに対応する9-10世紀とされる Kashgar 写本の *svāni doṣāny apāśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) の読みは、6世紀とされる Gilgit 写本の *saṃpaśyantā imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ている) の読みよりも、内容的にはむしろ古い伝承を伝えるといえるかもしれない。あるいはまた、当該箇所を含む現存するサンスクリット諸写本の筆写年代の古さという観点からは、

⁹⁸ Karashima (1992, pp. 253-261) は、『正法華』と『妙法華』が中央アジア出土諸写本と近似することを述べている。Cf. 序論注 40 参照。辛嶋 (1997, p. 163).

Gilgit 写本の *sampaśyantā* がふさわしいと言えようか。

もっとも、中央アジア写本と Gilgit 写本とは異なる系統であると見なされており⁹⁹、それぞれの写本が異なる伝播をしている点を考慮すれば、Kashgar 写本と Gilgit 写本の読みが異なる可能性は十分に考えられる。したがって、『正法華』の読みと対応するからといって、Kashgar 写本のほうが Gilgit 写本よりも古い読みを伝承する、あるいはまた本来のテキストを伝えると結論するのは早計であろう。加えて、写本の筆写年代が古いことが、そのまま読みの正しさを裏づけると考えるのも早計であろう。

そこで第39偈「諸々の傷（欠陥）を隠しながら」(*vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ*)について言及したい。

この *parirakṣ* とは *conceal, keep secret* を意味することから、諸々の傷（欠陥）を隠すということは、増上慢は諸々の傷（欠陥）を知っていると解釈することが可能であろう。このことは、五千起去を記す長行部分に、「彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで」(*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*) とある点とも一致すると言えよう¹⁰⁰。

当該箇所現代語訳を見ると、Kern (1884) は *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* の読みをもとに“*Remarking this slight,*”と訳したと考えられる。しかし、*imaṃ doṣaṃ* の英訳を“*this slight*”としており、自分たちが侮蔑されたということに気づいて（＝知って）、と解釈するのは、長行の英訳と同じく、増上慢という特性を重視したためであろうか¹⁰¹。

一方また、岩本 (1962) は「この欠点を見ないで…」と、松濤 (1975) は「この欠陥には気づかない

⁹⁹ Karashima (1992, p. 12).

¹⁰⁰ 荊谷 (1983, p. 81) も同様の理解に立つ。

¹⁰¹ 第2章 *Upāyakauśalya* に出る *doṣa* の使用例は、第39偈と第57偈の2か所である。第57偈 (KN, p. 47,

3-4: *mātsaryadoṣo hi bhaveta mahyaṃ sprṣitva bodhiṃ virajāṃ viśiṣṭām |*

yadi hīnayānasmī pratiṣṭhāpeyam ekaṃ pi sattvaṃ na mametu sādhu ||) に出る *doṣa* の意味は、文脈から考える

と、衆生を小乗に安住させる (*hīnayānasmī pratiṣṭhāpeyam ekaṃ pi sattvaṃ*) 「物惜しみという過失

(*mātsaryadoṣaḥ*)」である。「物惜しみ」に関して AKBh (1967, p. 312, 16-17):

dharmāmiśakauśalapradānavirodhī cittāgraho mātsaryam | (物惜しみとは、教え・美しい物質・巧みさを与える

ことを妨げる心の執着である。) と説明する。第57偈の *doṣa* はしたがって、小煩惱地法の1つである

「物惜しみ」を指している。第57偈の *doṣa* が心所法を指しているならば、第39偈の *doṣa* は、長行と

の関連性から（増上）慢という心所法を指すと考えられようか。Cf. 前注 60 参照。

で…」と、中村(1995)は「自らの過ちを見ることなく…」と訳出する。前二者は WT の *apaśyanta imam doṣaṃ* に対応し、中村は Kashgar 写本の *svāni doṣāṇy apaśyantās* に従っている¹⁰²。

1.3 小結

以上のように、SP 第 2 章 *Upāyakauśalya* に説かれる五千起去に関する長行と第 39 偈に関して、校訂テキストと翻訳が一致していない点に着目し、特に第 39 偈の冒頭にある *sampaśyanta* (KN) と *apaśyanta* (WT) に関して、いずれが適切であるかを検討してきた。

その結果として以下の 6 点が明らかとなった。

- ① SP 第 2 章 *Upāyakauśalya* 五千起去に関する長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ paśado 'pakrāntāḥ* (彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである) に関しては、当該箇所を欠く写本を除き、Kashgar 写本をも含むいずれの写本も *jñātvā* (知ったうえで) の読みをとることが確認できた。したがって、同経のサンスクリット諸写本を見るかぎりでは、*ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* (彼らは自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで) がふさわしいと考えられる。
- ② 長行箇所に対応する第 39 偈 *sampaśyanta imam doṣaṃ chidraśikṣāsamanvitāḥ* (欠点のある学習を具えている人々は、この過失を見ながら) については、当該箇所を欠く写本、ならびに異読を示す STTAR (A. D. 1065) を除き、*sampaśyanta* (*sapaśyanta* など) の読みをとることが確認できた。Kashgar 写本にのみ見られる *svāni doṣāṇy apaśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) は、『妙法華』の「不自見其過」、『正法華』の「不自見瑕穢」に対応するが、漢訳『法華経』の「不自見」を支持する読みは、この Kashgar 写本のみであった。これに加えて同偈頌内の *vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ* (諸々の傷(欠陥)を隠しながら) という一文もまた、増上慢が自らに傷(欠陥)があることを知っているという理解に符合することから、第 39 偈の冒頭は *sampaśyanta* の読みがふさわしいと考えられる。この結論は、上の①に見たように、対応する長行のいずれの写本も *jñātvā* ([彼らは自らに傷(欠陥)があることを] 知ったうえで) とあることとも一致する。
- ③ チベット語訳諸版本・写本における長行箇所とそれに対応する第 39 偈のテキストについては、長行は *shes te* (知って)、第 39 偈は *mthong gyur nas* (見ながら) の読みをとることが確認

¹⁰² 前注 3 参照。

された。このチベット語訳は、長行の *jñātvā* ならびに第39偈の *sampraśyanta* に対応する。したがってチベット語訳諸版本・写本の読みもまた、Gilgit 写本もしくはネパール系写本と同様に、第39偈の冒頭については *sampraśyanta* の読みを支持することが判明した。

- ④ Kashgar 写本にのみ見られる「自らの諸々の過失を見ていない」(*svāni doṣāṇy apasāyantās*) という内容は、『妙法華』の「不自見其過」、『正法華』の「不自見瑕穢」に一致する。このことは、漢訳『法華経』が中央アジア出土写本に一致する傾向が強いとみなされている、という従来の研究結果を裏づけている。
- ⑤ 成立年代の古さに着目したばあいは、『正法華』の読みが一番古いこととなる。したがって、『正法華』の「不自見」に一致する Kashgar 写本の読みである *svāni doṣāṇy apasāyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) が、現在に伝わるサンスクリット写本の範囲内では、もっとも古い読みであり、解釈であるといえるであろう。しかしながら、諸写本が一致して伝える長行の *jñātvā* とともに、第39偈内の *vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ* (諸々の傷(欠陥)を隠しながら) という一句は、増上慢が自らに傷(欠陥)があることを知ったうえで去った、という理解を支持している。この理解はまた、第39偈の読みに関しても、*sampraśyanta* (見ながら) の読みと解釈に符合するものであり、この読みを伝える Gilgit およびネパール系写本の伝承の重要性を窺わせている。
- ⑥ 『福州版大蔵経(開元寺蔵)』にのみ、サンスクリット写本に見られる *jñātvā* に対応する「[有知]を確認することができた。このことは、「如」と「知」の読みには文字の類似性もあり、時に相互の異読が見られる可能性を示す1例と考えられようか。もしくは、羅什が第39偈の「不自見其過」を念頭に置き、敢えて *jñātvā* の直訳である「知」を用いることを避け、偈頌の読みを重んじたとも推測できようか。

以上の点をまとめると、① Kashgar 写本をも含む長行のすべての写本が *jñātvā*、ならびにチベット語訳も *shes te* ([彼らは自らの傷を]知って) であること、② 第39偈の冒頭はネパール系写本、ならびに Gilgit B が *sampraśyanta* (Gilgit B は *sampraśyantā*)、かつチベット語訳が *mthong gyur nas* ([これらの過失を]見ながら) であること、③ 第39偈にある *parirakṣ* の意味、すなわち、諸々の傷(欠陥)を隠すということは、増上慢が自らに傷(欠陥)があることを知っているとの解釈を裏づけること、④ Kashgar 写本のみ第39偈は *apasāyanta* の読みをとり、漢訳『法華経』の「不自見」がこれを反映していること、という以上の4点に集約される。そしてこれら4点を総合的に判断するとき、第39偈を *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ* と読むことも可能であると考えられる。

しかしながら、漢訳ならびにサンスクリット諸写本の成立年代の観点から考えたばあい、最も古い読みである『正法華』の「不自見」に一致する Kashgar 写本の読み、*svāni doṣāṇy apaśyantās*（自らの諸々の過失を見ていない）の読みの重要性が窺われる。その一方で、*sampaśyanta*（見ながら）の読みを伝える Gilgit およびネパール系写本の伝承の重要性も拭いきれない。

第2章 「五千起去」増上慢に関する中国註釈家の解釈

第1章で明らかとなったように、羅什が「不自見其過」と訳出した理由は、おそらく、Kashgar 写本の *svāni doṣāṇy apasāyantās* の読み、あるいはそれに近似するテキストに拠ったと推測できる。Kashgar 写本のみが *apasāyanta* という異読をとる理由は不明ではあるが、この異読の持つ解釈が古いということは、『正法華』『妙法華』の読みである「不自見」が対応しているという事実にも合う。

しかしながら、漢訳『法華経』の読みを支持するさいに注意すべき点は、伝統的なアビダルマ（論）における増上慢の解釈¹が影響することで、増上慢はこの過失を「見ない」という読みが妥当である、すなわち、増上慢という特性により、五千起去する四衆は自らこの「過失」を「知らない」²と推測されうる点である。

ところで、SP ならびに漢訳『法華経』の中では、伝統的なアビダルマにおける増上慢の解釈が記されるのみであり、増上慢が見ない「過 (*doṣa*)」の内容、ならびに第39偈に対応する長行に出る、増上慢が有する「失・瑕疵 (*vraṇa*)」の内容が明確にされていない。加えて、増上慢が「得ていないのに得たと謂っている」また「証していないのに証したと謂っている」内容も明らかではない。

そこで第2章では、漢訳『法華経』の読みに焦点をあて、Kashgar 写本にほぼ対応する読みが伝えられた中国において、『法華経』註釈者たちが「方便品」五千起去に出る「増上慢」の特徴をどのように理解したかについて、以下の3点を基に検討したい。

- ① 五千起去が記される長行箇所である「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及増上慢、未得謂得、未證謂證。有如此失。是以不住。

¹ 増上慢に関しては、たとえば、『俱舍論』に「於未證得殊勝徳中、謂已證得、名増上慢。」（未だ殊勝なる徳を證得せざる中において、已に證得せりと謂うを、増上慢と名づく）(T no. 1558, 29: 101a18-19)、AKBh (p. 285, 2-3): *aprāpte viśeṣādhigame prāpto mayety abhimānaḥ*（勝れたものに対する證得が得られていないのに、私は獲得した、というのが増上慢である）とある。詳細は序論 0.2.4.1 を参照。なお、横超 (1969, p. 220) は「増上慢とは小乗を固執する者のこと」と述べる。

² Mizufune (2013, 124a6): *atha tathāgato pi teṣāṃ satvānām indriyabalavīryavaimātratām viditvā*（そこで、如来もそれら衆生たちの根力と精進とに優劣があることを知って）を『妙法華』は「如來于時、觀是衆生諸根利鈍精進懈怠。」(T no. 262, 9: 19b16-17) と訳出している。ここで *viditvā* を「観」と漢訳していることから、羅什が「知る」と「観る」を近似した意味と理解していることがうかがえる。

世尊默然而不制止。」³に関しては、次の2点を確認したい。第一に、増上慢の解釈である「未だ得ざるを得たりと謂い、未だ證せざるを證せりと謂えり。」の具体的内容を検討する。第二に、増上慢が有する「失」の内容について確認する。

- ② 偈頌の「比丘比丘尼, 有懷増上慢. 優婆塞我慢, 優婆夷不信. 如是四衆等, 其數有五千. 不自見其過. 於戒有缺漏, 護惜其瑕疵. 是小智已出. 衆中之糟糠, 佛威德故去. 斯人尠福德, 不堪受是法. 此衆無枝葉, 唯, 有諸貞實。」⁴については、次の2点を確認したい。第一に、ネパール系写本ならびに Gilgit 写本と漢訳の間に見られる異読「不自見其過」に関して、増上慢が見ない「過」の内容を検討する。第二に、増上慢が護り惜しむ「瑕疵」の内容を確認する。
- ③ 五千人が去ったのちに、世尊が会座に残った者たちに増上慢の特徴を解説する「舍利弗, 若我弟子, 自謂阿羅漢辟支佛者, 不聞不知諸佛如來但教化菩薩事, 此非佛弟子, 非阿羅漢, 非辟支佛. 又, 舍利弗, 是諸比丘比丘尼, 自謂已得阿羅漢, 是最後身, 究竟涅槃, 便不復志求阿耨多羅三藐三菩提, 當知, 此輩皆是増上慢人. 所以者何. 若有比丘實得阿羅漢, 若不信此法, 無有是處。」⁵の内容理解を通し、増上慢の特性を検討する。

本章では以上の3点を考察するために、インドにおける『法華經』の註釈書としては世親の『妙法蓮華經憂波提舍』（以下『法華論』）を用いて検討する。中国における『法華經』の註釈書としては、竺道生(369-434)『妙法蓮華經疏』（以下『法花經疏』）、法雲(467-529)『法華經義記』（以下『法華義記』）、智顗(538-597)『妙法蓮華經文句』（以下『法華文句』）、『妙法蓮華經玄義』（以下『法華玄義』）、吉蔵(549-623)『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』、基(632-682)『妙法蓮華經玄讚』（以下『法華玄讚』）にみられる解釈の比較考察を手掛かりとし、『法華經』「方便品」五千起去における増上慢の解釈を検討したい。

2.1 世親『法華論』における増上慢の解釈

『法華論』⁶には「不自見其過」の解釈はみられないが、『法華論』の解釈を基に、増上慢の特性に関して検討したい。

³ T no. 262, 9: 7a7-11.

⁴ T no. 262, 9: 7c11-18.

⁵ T no. 262, 9: 7b27-7c5.

⁶ 僧詳『法華伝記』の中に僧肇『法華翻経後記』の記述があり、その中で羅什が『法華論』に関して述べる箇所がある。「予昔在天竺國時遍遊五竺, 尋討大乘. 從大師須利耶蘇摩, 浪稟理味. 慙慙付囑

『法華論』中には、増上慢に関する説明として以下の5点が見られる。

- ① 仏説を聞いた際の驚怖に関する説明
- ② 三止三請の説明
- ③ 増上慢の特徴に関する説明
- ④ 七つの譬喩を説く理由の説明
- ⑤ 授記の種類に関する説明

上記の④に関して世親は、『法華経』では七種の増上慢心を対治するために、七種の譬喩が説かれると解釈する⁷。ここに出る「増上慢心」は、「方便品」五千起去における増上慢とは趣旨が異なるため、④を除く4点に絞り世親の増上慢解釈を確認する。なお、『法華論』の注釈書である吉蔵『法華論疏』、ならびに円珍(814-891)『法華論記』も補助資料として用いる。

2.1.1 仏説を聞いた際の驚怖に関する説明

『法華経』の会座にいる諸の声聞、[漏を盡くした]阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、声聞・辟支仏の心を発する比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちは、『法華経』「方便品」の中で、仏が諸仏の法を称歎することを聞き心中に疑惑を生じる⁸。この疑問を払拭するために舎

梵本言. 佛日西入, 遺耀將及東北. 茲典有緣於東北. 汝愼傳弘. 昔, 婆藪槃豆論師製作優婆提舍. 是其正本. 莫取捨其句偈. 莫取捨其眞文.」(T no. 2068, 51: 54b7-12) (予は昔天竺國に在りし時遍く五竺に遊び、大乘を討尋す。須利耶蘇摩大師より、理の味を稟食す。愼懃にして梵本を付囑して言わく。佛の日は西に入り、遺る輝きは將に東北に及ぼんとす。茲典は東北に縁あり。汝は愼み弘く傳えん。昔、婆藪槃豆論師は優婆提舍を製作す。是れは其の正本なり。其の句偈を取捨すること莫れ。其の眞文を取捨すること莫れ。) この内容にしたがうと、世親と羅什が依拠したサンスクリット本は同じということになり、世親が見たサンスクリット本は『妙法華』の「不自見其過」に近い読みである *svāni doṣāṇy apaśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) を持つ可能性がうかがえる。しかしながら、大竹(2011, p. 122) は上記『法華翻経後記』の記述は疑わしい、と述べる。

⁷ 「次, 爲七種具足煩惱染性衆生, 説七種喩, 對治七種増上慢心.」(T no. 1519, 26: 8a25-26)

⁸ 「爾時大衆中, 有諸聲聞漏盡阿羅漢阿若憍陳如等千二百人, 及發聲聞辟支佛心比丘比丘尼優婆塞優婆夷, 各作是念. 今者世尊, 何故愼懃稱歎方便, 而作是言. 佛所得法甚深難解, 有所言説意趣難知. 一切

利弗が称歎する理由を尋ねた際、仏は「若しこの事を説けば、皆、驚疑するだろう」⁹と述べる。世親は会座にいる人々が発する驚怖を5種類に分類し、「如来は、[これら小乗の衆生、大乘の衆生、我見・我所見を懐く人、舍利弗など、ならびに増上慢声聞の人が懐くそれぞれの]驚怖を断ち、二種の人を利益しようという決定心を持つ」¹⁰と解釈する。以下に、5種類の驚怖の内容を示す。

驚怖の種類	驚怖を懐く人	驚怖の内容
損の驚怖 ¹¹	小乗の衆生	如来は阿羅漢果が究竟の涅槃であると説いたため、自分たちは阿羅漢果を目指し涅槃を得たと思っていたが、自分たち（羅漢）が涅槃に入っていないことに驚怖する。
多事の驚怖 ¹²	大乘の衆生	菩薩道は長遠であり種々の苦行であると聞くことで驚怖の心を生じ、異乗を取る心を起こす。
顛倒の驚怖 ¹³	我見・我所見を懐く人	有身見という不善法により驚怖する。
心の悔の驚怖 ¹⁴	舍利弗など	小乗の法を修證すべきではなかった、と後悔する。
誑の驚怖 ¹⁵	増上慢声聞	なぜ如来は自分たちを誑かすのか、と驚怖する。

聲聞辟支佛所不能及，佛說一解脫義，我等亦得此法到於涅槃。而今不知是義所趣。」(T no. 262, 9: 6a28-6b6)

⁹ 「若說是事，一切世間諸天及人，皆當驚疑。」(T no. 262, 9: 6c7-8)

¹⁰ 「云何決定心。已生驚怖者令斷驚怖，以爲利益二種人故，是故如來有決定心。此驚怖者五種應知。」(T no. 1519, 26: 6c7-9)

¹¹ 「一者損驚怖。謂，小乘衆生如所聞聲取以爲實，謗無大乘起如是心。如來說言阿羅漢果究竟涅槃。我畢竟取如是涅槃。是故羅漢不入涅槃如是驚怖。」(T no. 1519, 26: 6c10-13)

¹² 「二者多事驚怖。謂，大乘衆生聞菩薩道劫數長遠種種苦行起如是心。佛道長遠，我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦。如是念故生驚怖心，以是故起取異乘心如是驚怖。」(T no. 1519, 26: 6c14-18)

¹³ 「三者顛倒驚怖。謂，心分別有我我所種種身見諸不善法，如是驚怖。」(T no. 1519, 26: 6c19-20)

¹⁴ 「四者心悔驚怖。謂，大德舍利弗等起如是心言。我不應修證如是小乘之法。如是悔已心即自止。即此心悔名爲驚怖。此義應知。」(T no. 1519, 26: 6c21-23)

¹⁵ 「五者誑驚怖。謂，増上慢聲聞之人，起如是心。云何如來誑於我等。如是驚怖。」(T no. 1519, 26: 6c24-25)

上記の五種の驚怖の内、増上慢声聞は「方便品」において仏説を聞いた際に、「なぜ如来は自分たちを誑かすのか？」と驚怖することが分かる¹⁶。

水野(1964)は「誑」に関し詳細に検討し、誑とは、パーリならびに『舎利弗阿毘曇論』では、自己の悪を隠蔽して他を詭ることとされ、有部等では自ら徳なくしてあたかも有徳者であるかのように不實のことを誇示することである、と述べる¹⁷。つまり、増上慢は如来に対して、「如来が自らの悪を隠蔽し自分たちを詭る」、もしくは「如来が自らをあたかも有徳者であるかのように不實のことを誇示する」と思い驚怖するのであろう。世親は増上慢が抱く驚怖を上記のように考えたが、おそらく増上慢の特性を念頭に置いた分析と考えられよう。

次に吉蔵と円珍の解釈を確認したい。

	吉蔵『法華論疏』	円珍『法華論記』
損の驚怖	小乗の衆生 ¹⁸	声聞人にして一向増上慢 ¹⁹
誑の驚怖	増上慢声聞 ²⁰	〔「方便品」内で五千起去する〕増上慢 ²¹

円珍は驚怖を懐く人を「上慢四衆未得謂得」と説明しており、この内容は「方便品」内で五千起去する[増]上慢の四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）を指すと思われる。したがって世親と同様に、第五の「誑の驚怖」を懐く増上慢を「方便品」で五千起去する増上慢と考えているのであろう。

¹⁶ 「方便品」内に「誑」が出る箇所は第 57 偈であり、当該の内容は、「自證無上道大乘平等法, 若以小乘法乃至於一人, 我則墮慳貪. 此事爲不可. 若人信歸佛, 如來不欺誑。」(T no. 262, 9: 8a25-28)

(自ら無上道たる大乘平等の法を證りて、若し小乗をもって乃至一人を化せば、我すなわち慳貪に墮せん。此の事は爲めて不可なり。若し人佛に信歸せば、如來は欺誑せず。)である。この内容とは、如来は欺誑しない、という如来の意志表明である。

¹⁷ 水野(1964, pp. 731-735).

¹⁸ 「一者損驚怖, 謂小乗衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘。」(T no. 1818, 40: 809a16-17)

¹⁹ 「声聞人一向増上慢」(智全上 154a4-5)

²⁰ 「五者誑驚怖, 謂増上慢聲聞之人作如是心, 云何如來誑於我等. 如是驚怖故, 増上慢人謂佛説一乘是誑二人. 是故名誑相也. 此五驚怖即是上五人. 初是執小乘人, 即是五千之徒. 次是大乘人. 三是外道人. 四是悔取小乘人. 五是増上慢人。」(T no. 1818, 40: 809b12-17)

²¹ 「上慢四衆未得謂得, 而聞撥權佛誑我等。」(智全上 154b15)

ところで、吉蔵『法華論疏』では、第一の驚怖を抱く小乗の衆生に関して、聖語蔵にのみ見られる異読「〔初是執小乘人。〕即是五千之徒。」が記されている²²。この異読はすなわち、第一の「損の驚怖」を懐く小乗の衆生を「方便品」で五千起去する増上慢と解釈する可能性を示しており興味深い。

2.1.2 三止三請の説明

周知のように、舍利弗が佛に法を説くことを懇請するという三止三請のやりとりが「方便品」でなされる。舍利弗が仏に説法を初めて懇請した後、仏は「止止。不須復説。若説是事、一切世間諸天及人皆當驚疑。」²³と述べる。世親はこの「一切世間の諸の天および人は皆當に驚疑すべし」の一文に三種の意義があると説明し、その内の第三の意義の説明において、増上慢に触れる。当該の箇所は以下の通りである。

「三者、欲令諸増上慢聲聞之人、捨離法座而起去故。」（T no. 1519, 26: 7a2-3）

（三には、諸の増上慢聲聞の人をして、法座を捨離し而して起去せしめんと欲するが故なり。）

要するに、驚怖を生じさせることの意義の一つは、増上慢の者を法座から去らせることを期待しているのである。

2.1.3 増上慢の特徴に関する説明

増上慢の特徴とは第一に、『法華論』に「如來不爲増上慢人而説諸法」²⁴とあることから、如来は増上慢の人に諸法を説かないと分かる。

さらに、「方便品」に「又、舍利弗、是諸比丘比丘尼、自謂已得阿羅漢、是最後身、究竟涅槃、便不復志求阿耨多羅三藐三菩提、當知、此輩皆是増上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢、若不信此法、無有是處。」²⁵と述べる箇所があり、世親は、この一文に見られる「若し比丘の實に阿羅

²² 「初是執小乘人、即是五千之徒。」（T no. 1818, 40: 809b15-16）

²³ T no. 262, 9: 6c7-8.

²⁴ T no. 1519, 26: 7c16-17.

²⁵ T no. 262, 9: 7b29-7c5.

漢を得たる者ありて、若し此の法を信ぜざれば、是の處あること無し。」が、増上慢人の特徴であるとする²⁶。この内容はすなわち、「実際/本当に阿羅漢を得た者が、一乗を聞いて信じない（受け入れない）ということは道理（處）でない」ということである。この内容から推測するに、世親が考える増上慢の特徴とは、如来の教説を聞かない（信じない）ことを指すのであろう。

2.1.4 授記の種類に関する説明

次に『法華経』内にみられる6種の授記に関して、その内容を以下に示す²⁷。

授記する対象	説明
舍利弗・大迦葉	名号が同じでないために別に記を与える
富樓那などの五百人・千二百人	同一の名前のために俱時に記を与える
学・無学など	人々に知られていない [人の] ために同じ記を与える
提婆達多	如来に怨悪がないことを示すために記別する
比丘尼・諸の天女	女人・在家・出家は菩薩行を修して、みな仏果を証するために授記を与える
衆生	衆生はみな佛性が有るために、常不輕菩薩が「我、不輕汝、汝等皆、當得作佛」という

上記の内、5つは如来からの授記であり、最後の1つが菩薩からの授記²⁸である。

さらに世親は声聞を4種類に分類し、授記を受ける者と授ける者の関係を示す。

²⁶ 「云何知彼是増上慢。爲斷此疑，如經若有比丘實得阿羅漢者，若不信是法，無有是處，如是等故。」(T no. 1519, 26: 7c17-19) (云何が彼は是れ増上慢と知る。此の疑を斷ぜんが爲に、經に若し比丘の實に阿羅漢を得たる者ありて、若し是の法を信ぜざれば、是の處あること無し、是の如き等の故の如し。)

²⁷ 「五是佛記，一菩薩記。如来記者，謂舍利弗大迦葉等衆所知識，名號不同故別與記。富樓那等五百人千二百等，同一名故，俱時與記。學無學等，皆同一號。又復非是衆所知識故，同與記。如来與彼提婆達多授別記者，示現如来無怨惡故。與比丘尼及諸天女授佛記者，示現女人在家出家修菩薩行，皆證佛果故，與授記。」(T no. 1519, 26: 9a4-12)

²⁸ 「菩薩記者，如下不輕菩薩品中示現。應知。禮拜讚歎作如是言，我，不輕汝。汝等皆，當得作佛者，示現衆生皆有佛性故。」(T no. 1519, 26: 9a12-14) (菩薩の記するとは、下の不輕菩薩品の中に示現するが

「言聲聞人得授記者、聲聞有四種。一者決定聲聞。二者増上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。二種聲聞如來授記。謂應化者、退已還發菩提心者。若決定者増上慢者二種聲聞、根未熟故不與授記²⁹。菩薩與授記者、方便令發菩提心故。」(T no. 1519, 26: 9a15-20)

(聲聞人の授記を得と言うは、声聞に四種あり。一には決定聲聞なり。二には増上慢聲聞なり。三には退菩提心聲聞なり。四には應化聲聞なり。二種の声聞に如來は授記す。謂わく應化者と退し已りて還た菩提心を發す者なり。決定者と増上慢者の二種の聲聞の若きは、根未熟故に授記を與えず。菩薩の授記を與うるは、方便もて菩提心を發さしめんが故なり。)

上記の内容をまとめると、決定聲聞と増上慢聲聞は機根が未熟なため、如來は授記を与えないが、菩提心³⁰を發させるための方便として、菩薩が授記を与える³¹。

世親が述べる「菩薩の授記」とは、「常不輕菩薩品」の中で、常不輕菩薩が増上慢たちに

如く。應に知るべし。禮拜讚歎し是の如き言なる、我、汝を輕んぜず。汝等は皆、當に佛となることを得べしとは、衆生に皆佛性あるを示現せんが故なり。)

²⁹ 宋・元・明の三本は「應化聲聞是」を加えて読む。「應化聲聞是大菩薩。與授記者、方便令發菩提心故。」と読むのだろうか。

³⁰ 『法華論』では「小善成仏」に関して、「乃至童子、戲聚沙爲佛塔。如是諸人等皆、已成佛道者。謂、發菩提心行菩薩行者、所作善根能證菩提。非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得。」(T no. 1519, 26: 7c27-8a1)とある。この内容から、菩提心を發して菩薩行を行うことで菩提を証すると分かる。加えて、凡夫と決定聲聞は未だ菩提心を發していないために菩提を得られない、と世親は考えている。

³¹ 横超(1969, pp. 215-216)は「決定聲聞が成仏せぬというのは、決定聲聞は、現在菩提心を發していないからそのままでは成仏せぬという意味であって、将来もそれを發することができないという意味ではないと思われる。」と述べる。さらに三友(1980, p. 282)も「これら決定者(不時解脫阿羅漢)と増上慢(五千起去者)とは、根未熟であるから授記しないということであるから、根が成熟すれば、成仏ができるのであり、決して不可能ということではないようである」と述べる。大竹(2011, p. 139)は、「決定聲聞は仏種姓という機根が絶対に熟しないし、増上慢聲聞は仏種姓という機根が未だ熟していない(=後に熟す)」という基の解釈を挙げ、増上慢聲聞と決定聲聞が異なる点を述べる。他に、『法華論』の研究としては勝呂(1970, pp. 379-389)、増上慢聲聞が菩薩から授記されることに関する吉蔵の解釈は奥野(1987)を参照。

「當得作佛」（當に佛となることを得べし）と述べることを指すと考えられよう³²。確かに『法華經』「常不輕菩薩品」内にも増上慢は出るが、彼等が「方便品」で五千起去した増上慢と同じか否かは判断し難い³³。

2.1.5 考察

世親の増上慢への言及を通して、以下の4点が明らかとなった。

- ① 増上慢声聞は仏説を聞いた際に、仏から「誑かされる」と驚怖する。
- ② 驚怖を生じさせることの意義の一つは、「増上慢を去らせるため」である。
- ③ 増上慢は仏説を信じない。
- ④ 増上慢声聞は機根が未熟なために如来から授記されないが、菩提心を起こさせるための方便として菩薩から授記を与えられる。

以上の4点のうち、①と③の内容から推察すると、「方便品」で五千起去する増上慢は、仏が自分たちを「誑かす」と驚怖し、加えて仏説を信じない者たちであると言えよう。

³² 吉蔵『法華論疏』では菩薩が授記を与える理由に関して2点、すなわち、[すべての衆生は]佛性があること、ならびに菩提心を發さしめること、を挙げる。Cf. 「釋云. 佛就根熟未熟故與記不與記. 菩薩約二種義故. 所以與記. 一者如前明. 有佛性故得與授記. 二者方便令發菩提心故與提記也。」

(T no. 1818, 40: 819a6-9) (釋して云く。佛は根熟・未熟に就く故に與記・不與記なり。菩薩は二種の義に約する故に、ゆえに記を與う。一には前に明かすが如く、佛性ある故に授記を與うを得。二には方便もて菩提心を發さしむ故に[菩]提記を與うなり。)

³³ 円珍『法華論記』には、菩薩が授記を与えることに関する解釈の中に、「今日五千聞略開三. 預于遠記, 納當機種. 須以經旨望檢論文。」(智全上 228b10-12)とある。すなわち円珍の解釈によれば、菩薩が授記する増上慢には「方便品」で五千起去する増上慢も含まれているといえようか。伊藤(2009, p. 12)は、常不輕菩薩が増上慢声聞に授記することは、「方便品」で五千起去した増上慢の救護が含意されている、と述べる。

2.2 道生『法花經疏』における不自見ならびに増上慢の解釈

中国における現存最古の『妙法華』の註釈書である『法花經疏』には「不自見其過」の解釈を欠くが、五千起去に関する解釈がみられるため、当該箇所を確認する³⁴。

2.2.1 五千起去の意義に関する説明

『妙法華』では、舍利弗と世尊が三止三請した後に「五千起去」が起こる。道生は長行に記される「五千起去」以下の内容を五段に分けて説明している³⁵。そこで、その内の第一段、すなわち「五千起去」の意義に関する解釈を以下に記す。

「五千人退者, 此第一段辨真偽之別. 正言將奏, 真偽自判. 譬猶, 日月既耀皇阜分明. 所以示此迹者, 誠肅時情耳. 若増上慢人, 不預嘉會者, 時情慶至, 自鞭信悟矣」(『新纂大日本續藏經』27, 4c16-19)

(五千人は退けりとは、此れ第一段にして真偽の別を辨ず。正しく將に奏でんと言はば、真偽は自から判ず。譬えば猶、日月すでに耀かば皇阜は分明なり。此の迹を示す所以は、時情を誠肅するのみ。もし増上慢の人、嘉會に預らざれば、時情は慶に至り、自ら鞭く悟を信ずるなり)

道生の解釈によれば、「五千起去」とは仏弟子の真偽の違いを明らかにする挿話である。この「五千起去」のエピソードを示す理由とは、世尊の教えに対して、会座にいる仏弟子たちに、正しい心構えを準備させる(=世尊の教説を信じる)ためと道生は解釈する³⁶。

³⁴ Cf. 中国仏教思想研究会訳 (1976, pp. 139-203).

³⁵ 「自下凡五段明義. 一者辨真偽之別. 二者正明宗極一致之道. 三明三世諸佛軌則玄同. 四明所以說三乘者非聖欲爾, 出不獲已. 五明得失之人」(『新纂大日本續藏經』27, 4c14-16)

³⁶ Cf. Young-ho kim (1990, p. 192): The purpose of showing this trace is to guide the collective sentiment of the time to a hushed readiness [for the doctrine].

2.2.2 五千起去の偈頌に関する説明

次に「五千起去」の偈頌に関して道生の解釈を確認したい。

道生は、偈頌に関しても長行と同様に五段に分けて解釈する。そして、第一段の真偽を頌するに当たる箇所とは、『妙法華』の「比丘比丘尼, 有懷増上慢. 優婆塞我慢, 優婆夷不信. 如是四衆等, 其數有五千. 不自見其過. 於戒有缺漏, 護惜其瑕疵. 是小智已出. 衆中之糟糠, 佛威徳故去. 斯人歎福德, 不堪受是法. 此衆無枝葉, 唯, 有諸貞實。」³⁷であると解釈する³⁸。

この偈頌の中に見られる「不自見其過」の一文に関する道生の注釈は特にみられない。

しかしながら、ここで、長行と偈頌の対応関係に関して触れたい。道生は「偈言次第, 頌前五科。」として、偈部分について前(=長行箇所)の五科を頌す、と述べる。つまり、道生は、偈頌と長行箇所との対応を指摘していると言えよう³⁹。要するに長行に出る「五千起去」の内容と偈頌に出る「五千起去」の内容、厳密に言えば、38偈から41偈までは対応しているというのが道生の認識である。

2.2.3 得失に関する説明

次に、道生が解釈する増上慢の特徴について検討したい。

道生が長行箇所に出る「五千起去」以下の内容を五段に分けて説明する内の第五段に当たる箇所とは、『妙法華』の「舍利弗, 若我弟子, 自謂阿羅漢辟支佛者, 不聞不知諸佛如來但教化菩薩事, 此非佛弟子, 非阿羅漢, 非辟支佛. (略) 諸佛如來言無虚妄. 無有餘乘唯一佛乘。」(T no. 262, 9: 7b27-7c9)を指す。ここで、この一文の中に出る「舍利弗, 若我弟子, 自謂阿羅漢」に関する道生の解釈を以下に示す。

³⁷ T no. 262, 9: 7c11-18.

³⁸ 「偈言次第, 頌前五科. 初正四偈, 頌第一真偽. 次卅五偈, 頌第二一大事. 次七十五偈, 頌三世諸佛證. 次兩偈, 頌前第四段出不獲已說三乘. 最後五偈, 頌第五得失人」(『新纂大日本續藏經』27, 5b12-15)

³⁹ 菅野(1994: 74-75)は、道生の偈頌に関する解釈について、「偈頌の解釈の中心は、長行に付した分科との厳密な対応関係を指摘する事である」と述べる。

「舍利弗, 若我弟子自謂羅漢, 第五段辨人得失. 欲使道行天下, 豈容不辨得失. 誠人於捨失而從得. 若謂是羅漢, 而不知佛但為化菩薩者, 則非羅漢. 此是過失之人也. 能持此經, 謂之得」

(『新纂大日本續藏經』27, 5b6-9)

(「舍利弗よ、もし我が弟子にして自ら羅漢と謂いて」とは、第五段にして人の得失を辨ず。道をして天下に行ぜしめんと欲さば、あに得失を辨ぜざるを容さんや。人に失を捨て得に従うを誠む。「若し是れ羅漢なりと謂いて、しかも佛は但だ菩薩のみを化さんと為するを知らずんば、則ち羅漢に非ず。」此れは是れ過失の人なり。能く此の經を持たば、之れを得と謂う)

道生は仏弟子を「得」と「失(過失)」とに分類し、

- ① 「得」の人とは、『法華經』を持つ人
 - ② 「失(過失)」の人とは、自分が阿羅漢であると言い、佛が教化しようとする人はみな菩薩であるということを知らない者であり、こうした者たちは阿羅漢でもない。
- と解釈する。

要するに「過失の人」とは、世尊が方便として説いてきた三乗の別に固執し阿羅漢を目指している者たちであり、彼等は世尊が菩薩のみを教化すること⁴⁰(=教化の対象となる人々はみな阿耨多羅三藐三菩提を目指す菩薩であること)を理解していないために、阿耨多羅三藐三菩提を目指さないのである。すなわち、実際に阿羅漢ならば、『法華經』の一仏乗の立場においては声聞乗・辟支佛乗・菩薩乗という三乗の区別はなく、みな一佛乗によって阿耨多羅三藐三菩提を目指すという意味において、等しく菩薩であることを知らないわけではないため、『法華經』の立場からみれば、こうした人々は阿羅漢でもない、という趣旨である。それゆえ、真の意味での阿羅漢は、阿耨多羅三藐三菩提を目指すというのである。これが「失」でない「得」の人、すなわち、一仏乗によって阿耨多羅三藐三菩提を目指すことのできる人といえよう⁴¹。

ここで、三乗と一乗の関係に関する道生の考えを確認したい。道生は

⁴⁰ 『妙法華』が「但教化菩薩事」と漢訳する箇所は、Mizufune (2013, folio 47a4):

bodhisatvasamādāpaka evāhaṃ śāradvatīputra (シャーラドバティープトラよ、私はただ菩薩を励ます/教化する者である)と一致する。Cf. 『妙法華』「但教化菩薩」(T no.262, 9: 7a29), 『正法華』「教諸菩薩」(T no. 263, 9: 69c8), KN (p. 40, 11): *tathāgatajñānadarśanasamādāpaka evāhaṃ śāriputra* (シャーリプトラよ、私はただ如来の知見に向けて励ます者である)。

⁴¹ 偈頌における第五段に該当する箇所とは、『妙法華』の最後の五偈「當來世惡人, 聞佛說一乘, 迷惑不信受. 破法墮惡道. 有慚愧清淨, 志求佛道者, 當為如是等, 廣讚一乘道. 舍利弗, 當知諸佛法如是,

昔晦迹三乗, 群徒謂是. 今欲顯乎一實, 示以真正. 以非明是故標方便目品. 既指昔三乗為方便. 所以一顯, 茲處不言而自顯.]

(昔しばらく三乗を迹すに、群徒は是と謂う。今一實を顯さんと欲し、示すに真正を以てす。非を以て是を明かす故に方便を標して品を目く。すでに昔の三乗を指して方便となす。一の顯るる所以は、茲處に言わずして而も自ら顯る。) (『新纂大日本續藏經』27, 4a2-4)

として、佛が昔、三乗という迹の中に「真実を」隠したために、多くの人は三乗を正しいと思ったが、今「『法華經』「方便品」において」一つの真実を顕そうとして真正なものを示すと述べている。

周知のように、部派仏教において三乗のそれぞれに特有の教義が形成され、声聞乗と仏乗は明確に区別された。大乘經典はこうした部派仏教(説一切有部に代表される伝統教団)の三乗觀を批判する觀點に立っており、『法華經』も同様である。声聞として阿羅漢果を目指すことは、伝統教団の教理に従った声聞には当然のことである。しかしながら、『法華經』において一つの真実、すなわち一乗が示される。

道生の解釈によれば、説一切有部に代表される伝統教団の教理に従い、阿耨多羅三藐三菩提を目指さない者が「過失の人」である、と言えるであろうか。

2.2.4 考察

道生『法花經疏』には「不自見其過」の解釈を欠くが、長行に出る「五千起去」の意義、ならびに増上慢の特徴に関する道生の解釈を通して以下の3点が明らかとなった。

- ①「五千起去」とは仏弟子の真偽の違いを明らかにする挿話であり、これにより、世尊の教えに対して会座にいる仏弟子たちの心構えを整える。
- ②「方便品」で五千起去が述べられる長行箇所と偈頌(38偈から41偈)は対応関係にある。
- ③「過失の人(=増上慢)」とは、世尊が方便として説いてきた三乗の別に固執し阿羅漢を目指している者たちであり、彼等は世尊が菩薩のみを教化すること(=教化の対象となる人々はみな阿耨多羅三藐三菩提を目指す菩薩であること)を理解していないために、阿耨

以萬億方便, 隨宜而說法. 其不習學者, 不能曉了此. 汝等既已, 知諸佛世之師, 隨宜方便事, 無復諸疑惑, 心生大歡喜. 自知當作佛.] (T no. 262, 9: 10b11-20) を指す。

多羅三藐三菩提を目指さない。

特に③の増上慢の特徴に関する道生の解釈から、説一切有部に代表される伝統教団の教理に従い、阿耨多羅三藐三菩提を目指さない者が「過失の人」、すなわち「方便品」で五千起去する増上慢であると言えるであろう。

2.3 法雲『法華義記』における不自見ならびに増上慢の解釈

次に、後の『法華経』注釈書に大きな影響を与えた光宅寺法雲の『法華義記』⁴²を参考に、「方便品」五千起去に関する長行と偈頌の解釈、ならびに増上慢の特徴を確認する。

2.3.1 「方便品」五千起居に関する長行箇所を検討

『妙法華』で五千起去が説かれる長行箇所「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及増上慢、未得謂得、未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。」(T no. 262, 9: 7a7-11) に関する『法華義記』の解釈は以下の通りである。なお、表中の左側に『妙法華』の該当箇所、右側に法雲の解釈を記載する。

『妙法華』の該当箇所	『妙法華』の該当箇所に対する法雲の解釈
説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。(T no. 262, 9: 7a7-8)	「説此語時、會中有五千等禮佛而退」此れは是れ第三に詔づけて衆を簡ぶと爲す。佛の神力を以て、聞くに堪うる者は住し、聞くに堪えざるは去る。自ら四あり。第一に正しく五千人の佛を禮して退くを明かす。 ⁴³
所以者何。此輩罪根深重及増上慢(T no. 262, 9: 7a8-9)	第二に、「所以者何」の下は聴くに堪えざるを釋す。 ⁴⁴

⁴² 菅野(1994, p. 149)は「『法華義記』は、法雲の講義と弟子の筆録者の創意工夫の合作と言える」と述べる。『法華義記』の研究は菅野(1994, pp. 141-244)(1996)を参照。

⁴³ 「説此語時、會中有五千等禮佛而退、此是第三詔爲簡衆。以佛神力、堪聞者住、不堪聞去。自有四。第一正明五千人禮佛而退。」(T no. 1715, 33: 602b13-16)

⁴⁴ 「第二、所以者何不釋下堪聞。」(T no. 1715, 33: 602b16-17)。なお、この一文は「第二、所以者何下釋不堪聞。」という読みの誤写と思われる。『大正蔵』以外に『法華義記』の写本・版本は現存しないが、ここでは『大正蔵』の読みを「第二、所以者何下釋不堪聞」と改め読む。

未得謂得 (T no. 262, 9: 7a9)	「未得謂得」とは、是れ有爲果の盡・無生智なり ⁴⁵
未證謂證 (T no. 262, 9: 7a10)	「未證謂證」とは、無爲果の盡くる處を謂うなり。 ⁴⁶
有如此失. 是以不住. (T no. 262, 9: 7a10)	第三に、「有如此失」の下は堪えざるを結ぶなり。 ⁴⁷
世尊默然而不制止. (T no. 262, 9: 7a10-11)	第四に、「世尊默然」の下は堪えざるを證するなり。 ⁴⁸

まず、法雲は、五千起去とは仏の神力により [仏の説法を] 聞くに堪えられる者と、そうでない者を選ぶことであると総論的に述べている。

その後、五千起去の内容を4点に分け解釈する。

- ① 五千起去とは、五千人が仏に礼して去ることを明かす。
- ② [仏の説法を] 聞くことに堪えられない理由とは、「罪根深重」と「増上慢」である。増上慢の一般規定である「得ていないのに得たという」のは、有爲果の尽・無生智 [を得ていないのに得たということ] であり、「證していないのに證したという」のは、無爲果の尽きる処 [である有餘涅槃・無餘涅槃を證していないのに證したということ] である。
- ③ 「是を以て住せず」の一文は、[仏の説法を] 聞くことに堪えられないという結論を示す。
- ④ 「制止したまわず」の一文とは、[仏の説法を] 聞くことに堪えられないことを証明する。

ここで②に挙げた、増上慢が得ていないのに得たという尽・無生智と、證していないのに證したという無爲果の尽きる処に関して、『法華義記』に出る法雲の解釈を確認したい。

法雲は、三乘人が得る有爲果には、三界の因が尽きたことを照らす尽智と、後有（後の生）を受けないことを知る無生智があり、無爲果には、三界の因を尽くした有餘涅槃と、三界の果を尽くした無餘涅槃があると説明している⁴⁹。この内容から、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというものが、阿羅漢 [果] であることが分かる。

次に、五千起去の後に佛が舍利弗に語る、「爾時佛告舍利弗. 我今此衆無復枝葉, 純有貞實.

⁴⁵ 「未得謂得者, 是有爲果盡無生智也。」 (T no. 1715, 33: 602b17-18)

⁴⁶ 「未證謂證者, 謂無爲果盡處也。」 (T no. 1715, 33: 602b18)

⁴⁷ 「第三, 有如此失下結不堪也。」 (T no. 1715, 33: 602b19)

⁴⁸ 「第四, 世尊默然下證不堪也。」 (T no. 1715, 33: 602b19-20)

⁴⁹ 「今先解三乘人兩種果. 一者有爲果二者無爲果. 有爲果者即是盡智無生智. 照三界因盡是盡智, 不受後有是無生智. 二是無爲果, 三乘人三界因盡是有餘涅槃, 三界果盡は無餘涅槃。」 (T no. 1715, 33: 599c22-26)

舍利弗, 如是増上慢人, 退亦佳矣。」(T no. 262, 9: 7a12-13)の一文の内、増上慢への言及箇所である「如是増上慢人, 退亦佳矣。」に関しては、五千起去した四衆に機〔根〕がないことを明かすと解釈している⁵⁰。

さらに、如来は身口の二密があるにもかかわらず、なぜ会座にいる四衆が座より起ち去る必要があるのかという問いに対して、それは時衆（会座にいる仏弟子）を褒貶するためであると説明する。五千起去した四衆は法を聞く縁がないために座より去るが、これが「時衆を褒貶する」内の「貶」に当たると解釈している⁵¹。

以上に見てきた長行箇所に述べられる五千起去に関する法雲の解釈は、以下の3点にまとめられるであろう。

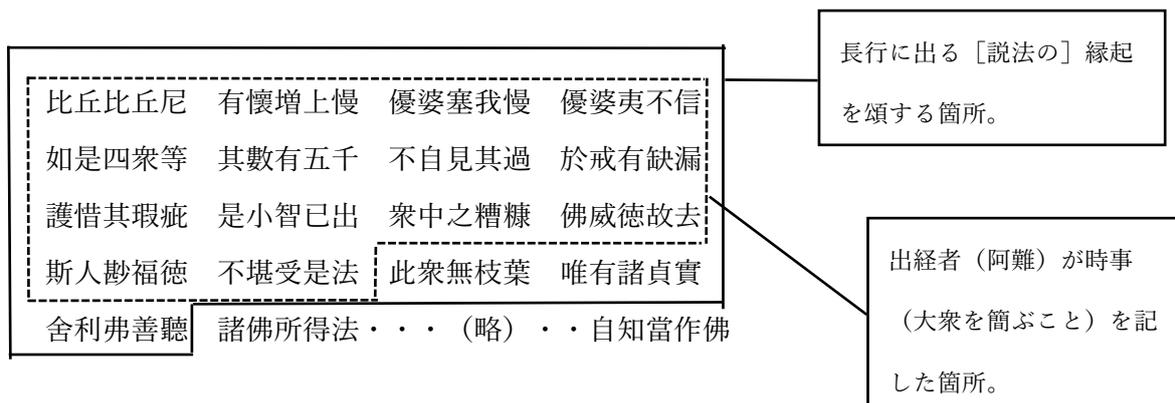
- ① 五千起去とは、仏の神力により〔仏の説法を〕聞くことに堪えられる者と、そうでない者を選ぶことであり、〔仏の説法を〕聞くことに堪えられない理由とは、罪根深重ならびに増上慢である。
- ② 五千起去した四衆が得ていないのに得たというのは、有為果の尽・無生智〔を得たということ〕である。さらに、證していないのに證したというのは、無為果の尽きる処〔である有餘涅槃・無餘涅槃を證したということ〕である。すなわち、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというものとは、阿羅漢〔果〕である。
- ③ 五千起去した四衆には〔法を聞く〕機〔根〕と法を聞く縁がない。

2.3.2 「方便品」五千起去に関する偈頌の検討

次に、法雲が偈頌に出る五千起去の内容と長行の内容をどのように対応させて解釈しているかを確認する。

⁵⁰ 「第二, 如是増上慢下明去者無機。」(T no. 1715, 33: 602b22-23)

⁵¹ 「問者言, 如來有身口二密. 終日在坐不觀眞容. 雖復在中自不聞說法. 何假從座而起拂席而去. 解釋者言. 此品中是時衆所應. 亦可, 是實持是佛神力, 將欲褒貶時衆. 爲令住者生欽重之心, 起願樂之意. 貶去者無聞法之縁. 是故拂席而去也。」(T no. 1715, 33: 602b24-29)



まず、実線で囲った「比丘比丘尼」から「舍利弗善聽」までの4行1句は、長行に出る縁起を頌する箇所に当たり⁵²、仏が「大衆に説法することを」許すことを頌した箇所である⁵³。

次に、点線で囲った「比丘比丘尼」から「不堪受是法」までの3行半の内容と、長行箇所ので五千起去が述べられる「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。（略）世尊默然而不制止。」の関係について、法雲は長行を頌した内容ではないと解釈する⁵⁴。その理由とは、長行箇所の五千起去が述べられる箇所は、『法華經』編纂者である阿難⁵⁵が時事（当時の出来事）を記したものであり、阿難の言葉であるために仏は頌しないが、偈頌に出る3行半の内容も長行と同様に時事を記しており、そのために長行と偈頌の内容が似ていると述べる⁵⁶。

最後に「此衆無枝葉、唯有諸貞實、舍利弗善聽。」の3句は、会座に残った大衆を褒め、「去つた者を」誡め、「説法することを」許す内容であり、この箇所は仏が頌していると考え⁵⁷。

次に、五千起去が記される偈頌の中の一文である、「於戒有缺漏、護惜其瑕疵。」に対する解釈を下記の表に記す。

⁵² 「初有四行一句偈、頌上長行中第一縁起。」(T no. 1715, 33: 605c11-12)

⁵³ 「今者四行一句、唯頌佛許、不頌舍利弗受旨也。」(T no. 1715, 33: 605c15-16)

⁵⁴ 「初有三行半偈、不頌長行」(T no. 1715, 33: 605c19)

⁵⁵ 「阿難是初果須陀洹位。忽登法座有所宣説、撫臆論心、未易可信。但不達之徒多以小廢道。如來既懸見末代有必然之事。是故誡勅阿難出經之時、先白四衆言如是、一部經我從佛邊聞、非自造。」(T no. 1715, 33: 577a7-11)

⁵⁶ 「何以得知不頌長行。上簡衆者、佛入涅槃後、出經者列于時事耳。云何今、佛頌經家語耶。若爾、何故相似耶。兩處俱出于時事。那得不相似耶。」(T no. 1715, 33: 605c21-25)

⁵⁷ 「此衆無枝葉至舍利弗善聽、三句是、第二正頌第四歎衆總結誡許也。」(T no. 1715, 33: 605c28-29)

『妙法華』の該当箇所	『妙法華』の該当箇所に対する法雲の解釈
於戒有缺漏 (T no, 262, 9: 7c14)	「於戒有缺漏」とは、若し一戒を犯さば、之を名づけて缺と爲す。[諸] 犯を具足するは即ち是れ漏なり。生死に漏入す。 ⁵⁸
護惜其瑕疵 (T no, 262, 9: 7c15)	「瑕疵」とは、瑕は其の外に據り、疵は其の内に據る。内に實に戒を犯すも、外に威儀を愼むが故に、「護惜」と言うなり。 ⁵⁹

まず「戒⁶⁰において缺漏あり」の一文に出る「缺」とは、一戒を犯すこと、「漏」は[諸]犯を具足することを指し、戒を犯しているために煩惱(漏)が生じ、その結果として三界という生死の世界に漏入すると述べる。

次に、「瑕」と「疵」をそれぞれ、仏弟子の体の外と内に拠るものと区分している。戒を犯すことを内(意)に持ちながら、外(身・口)には戒律を愼むように振る舞う有様を指して、「護り惜しむ」と解釈している。

以上の点をまとめると、偈頌に述べられる五千起去に関する法雲の解釈は、以下の2点に集約できる。

- ① 長行箇所と偈頌にみられる、五千起去が記される内容の中で「大衆を簡ぶ」に当たる箇所は、それぞれ阿難が釈尊在世当時の出来事を記したものである。
- ② 五千起去した四衆は、内に戒を犯しながら、外面的には戒律に従う様に振る舞う者である。

2.3.3 「方便品」における増上慢の特徴

次に、『妙法華』に出る「舍利弗, 若我弟子, 自謂阿羅漢辟支佛者, 不聞不知諸佛如來但教化菩薩事, 此非佛弟子, 非阿羅漢, 非辟支佛. 又, 舍利弗, 是諸比丘比丘尼, 自謂已得阿羅漢, 是最後身, 究竟涅槃, 便不復志求阿耨多羅三藐三菩提, 當知, 此輩皆是増上慢人. 所以者何. 若有比丘實得阿羅漢, 若不信此法, 無有是處. 除佛滅度後現前無佛. 所以者何. 佛滅度後, 如是等經受持讀誦解義

⁵⁸ 「於戒有缺漏者, 若犯一戒, 名之爲缺. 具足犯即是漏. 漏入生死。」 (T no. 1715, 33: 605c25-26)

⁵⁹ 「瑕疵者, 瑕據其外, 疵據其内. 内實犯戒, 外愼威儀故, 言護惜也。」 (T no. 1715, 33: 605c26-28)

⁶⁰ 羅什は Kashgar 写本の読みである *chidraśīlā samantataḥ* (あまねく欠点を習いとしている人々は) に拠り *śīlā* すなわち「戒」と漢訳したが、ネパール写本ならびに Gilgit 写本の読みは、*chidraśīksāsamanvitāḥ* (欠点のある学習を具えている人々は) である。Cf. 第1章 1.2.1, 1.2.2.

者,是人難得.若遇餘佛,於此法中便得決了。」(T no, 262, 9: 7b27-7c07) に関して、法雲の増上慢解釈を検討したい(漢文ならびに書下し文の中の数字、下線、および段落分けは筆者が便宜的に付したものである)。

舍利弗若我弟子自謂阿羅漢,此下是第四,簡眞偽敦物信心.所敦之者,已是外凡夫也.就此簡眞偽敦信中,自有兩段.①第一,正簡眞偽.②第二,從除佛滅後以下,正明敦物信心.此兩段中,各自有三重.

① 第一正簡眞偽有三重者, (①-1) 第一明非眞, (①-2) 第二明是偽, (①-3) 第三出眞羅漢形釋也.

(①-1) 今者第一, 若我弟子自謂得阿羅漢辟支佛者, 初此明非眞也.

(①-2) 又,舍利弗以下,第二正明此人是偽.何者,言非眞,今者,正明是偽.羅漢是増上果,而伊實自未得羅漢果,自謂言得.此則於増上法中生慢故,言増上慢.

(①-3) 所以者何.此下是第三出眞羅漢例釋上偽.若有實得羅漢,不信此開三顯一同歸之法,無有是處.當知.實得羅漢者,在五便中時,早已解方便善是同歸.而汝,上言得羅漢不解同歸者,當知,此人非眞羅漢.

② 除佛滅度後,此下是,第二正敦物生信.亦有三重者, (②-1) 第一正敦物生信, (②-2) 第二釋敦信之意, (②-3) 第三釋物疑心也.

(②-1) 第一言除佛滅度後.佛既滅度,前佛已過,後佛未出.於此中間,若有人只於無佛前生中修行得羅漢,百千時都無有佛,爲此羅漢說法華,道萬善同歸者,此人容可不解.正是敦物令信.言,佛若在世,可得爲汝說同歸之理.佛若滅度,誰當爲汝說此法華同歸之法.汝今可及佛在世,生信樂之心,受持同歸之法.此是就教爲說.若就理而談,不問有佛無佛,皆自然解也.于時物情於中由自不肯信,自言.佛雖滅度,佛弟子自解法華.於佛滅度後,自當爲我說此同歸之法.

(②-2) 是故第二從所以者何以下,佛即釋此執言.所以勸汝及佛在世信受者何.正言.佛滅度後惡世多難,如是法華有能受持讀誦者,是人難得.爲此義故,令汝今日信受也.但物情於中猶未肯信佛.若言滅度後,受持此經爲我說法甚難得者,我當自入無餘涅槃.

(②-3) 是故第三若遇餘佛以下,佛即釋此疑言.若遇餘佛於此法中便得決了.此意正言,若人得羅漢果,竟要聞如來說此法華,知萬善同歸,然後得入涅槃.若不聞說法華同歸,終不得入涅槃.若阿羅漢,不值今日釋迦說法華者,於未來世中要值遇餘佛,於此法華教中得聞萬善同歸,方得入涅槃.無有中間入涅槃者.物情只聞佛此語,仍信受.若如此我等即時信受.何假待餘佛方信受.使羅漢當自外凡中有不肯信者相與信受也.(T no. 1715, 33: 605a16-605c02)

(「舍利弗若我弟子自謂阿羅漢」、此の下は是れ第四に、眞偽を簡び物の信心を敦くす。敦くする所の者は、已に是れ外凡夫なり。此の眞偽を簡び信を敦くする中に就いて、自ら

兩段あり。① 第一に、正しく眞偽を簡ぶ。② 第二に、「除佛滅後」より以下は、正しく物の信心を敦くするを明かす。此の兩段の中に、おのおの自ら三重あり。

① 第一に正しく眞偽を簡ぶに三重ありとは、(①-1) 第一に眞に非ざるを明かし、(①-2) 第二に是れ偽なるを明かし、(①-3) 第三に眞に羅漢〔である〕形を出す釋なり。

(①-1) 今第一に、「若我弟子自謂得阿羅漢辟支佛」〔以下〕は、初めに此れは眞に非ざるを明かすなり。

(①-2) 「又、舍利弗」以下は、第二に正しく此の人は是れ偽なるを明かす。何となれば、眞に非ずと言ひ、今、正しく是れ偽なるを明かす。羅漢は是れ増上果にして、伊れ實に自ら未だ羅漢果を得ざれども、自ら謂いて得と言う。此れは則ち増上法の中において慢を生ずるが故に、増上慢と言う。

(①-3) 「所以者何。」此の下は是れ第三に眞に羅漢〔である〕の例を出して上の偽を釋す。若し實に羅漢を得て、此の開三顯一にして同歸の法を信ぜざること有らば、是の處有ること無し。當に知るべし。實に羅漢を得る者は、五便⁶¹の中に在る時、早くに已に方便の善は是れ同歸すと解す。而るに汝、上に羅漢を得て同歸を解せずと言わば、當に知るべし、此の人は眞に羅漢に非ず。

② 「除佛滅度後」此の下は是れ、第二に正しく物の信を生ずるを敦くす。亦た三重ありとは、(②-1) 第一に正しく物の信を生ずるを敦くし、(②-2) 第二に信を敦くすの意を釋し、(②-3) 第三に物の疑心を釋するなり。

(②-1) 第一に「除佛滅度後」と言う。佛既に滅度せば、前の佛すでに過ぎ、後の佛未だ出でず。此の中間において、若し人ありて只だ無佛の前の世の中において修行し羅漢を得、百千時すべてに佛あること無く、此の羅漢の爲に法華を説き、萬善同歸を道うも、此の人解せざるべし。正しく是れ物を敦び信ぜしむ。言わく、佛もし世に在らば、汝が爲に同歸の理を説くことを得べし。佛もし滅度せば、誰が當に汝が爲に此の法華同歸の法を説くべきや。汝いま佛の在世に及び、信樂の心を生じ、同歸の法を受持すべし。此れは是れ教に就いて説を爲す。若し理に就いて談ぜば、有佛無佛を問わずして、皆自然に解すなり。于時の物情は中において自ら肯て信せざるに由りて、自ら言わく。佛滅度すと雖も、佛弟子は自ら法華を解す。佛滅度の後において、自ら當に我が爲に此の同歸の法を説くべし、と。

(②-2) 是の故に第二に「所以者何」より以下は、佛即ち此の執を釋して言わく。汝が

⁶¹ 五方便の略称と思われる。Cf. 湛然『法華玄義釋籤』「五方便者、四念爲一并四善根。四念雖有總別不同、祇是四念、停心治障。」(T no. 1717, 33: 902a18-19)

佛の在世に及びて信受するを勧むる所以は何ん、と。正しく言わく。佛滅度の後は惡世にして難多く、是の如き法華を能く受持し讀誦すること有る者、是の人は得難し。此の義の爲の故に、汝をして今日信受せしむるなり。但だ物情は中において猶を未だ肯て佛を信ぜず。若し滅度の後、此の經を受持し我が爲に説法するもの甚だ得難しと言わば、我れ當に自ら無餘涅槃に入るべし。

(②-3) 是の故に第三に「若遇餘佛」以下は、佛即ち此の疑を釋して言わく。「若遇餘佛於此法中便得決了」と。此の意は正しく言わく、若し人羅漢果を得て、竟に要ず如來の此の法華を説くを聞き、萬善同歸を知らば、然る後に涅槃に入ることを得。若し法華同歸を説くを聞かずんば、終に涅槃に入ることを得ず。若し阿羅漢にして、今日の釋迦の法華を説くに値わずんば、未來世の中において要ず餘佛に値遇し、此の法華の教えの中において萬善同歸を聞くことを得、方に涅槃に入ることを得。中間に涅槃に入る者あること無し。物情は只だ佛の此の語を聞きて、仍りに信受す。若し此の如くんば我等は即時に信受す。何ぞ餘佛を待ちて方に信受するを假るや。羅漢の當に外凡の中より肯て信ぜざること有るべき者をして相い與に信受せしむるなり。)

まず、「舍利弗若我弟子自謂阿羅漢」以下の内容とは、「真に阿羅漢である者」と「偽の阿羅漢」を選ぶことと、衆生の信心を敦くするという2点を説明すると総論的に述べる。さらに法雲は、信を生じさせられる者とは既に外凡夫であると述べる。

次に、上記の2点に関して、それぞれ3つの観点を指摘する。すなわち、真に阿羅漢〔である者〕と偽の阿羅漢を選ぶことに関しては、①真に阿羅漢でない者を明かす、②彼等が偽の阿羅漢であることを明かす、③真に阿羅漢であるとはどのような者かを説明する、という三段構造から成り立つ。衆生の信心を敦くすることに関しては、①今、衆生が信を生じる必要性を述べる、②今、信を敦くすべき意義を説明する、③『法華經』を聞かなくても、自分たちは無餘涅槃に入れると思う心を解釈する、という三段構造から成り立つ。

第一の、真に阿羅漢である者と偽の阿羅漢を選ぶことについて指摘している3つのポイントを整理すれば、以下のようになる。

- ① 真に阿羅漢でない者とは、自ら阿羅漢・辟支佛と謂う者で、如來が但だ菩薩を教化するということを聞かず、知らない者である。
- ② 偽の阿羅漢とは、比丘・比丘尼の中で自ら已に阿羅漢を得た、最後身である、究竟の涅槃であると謂い、阿耨多羅三藐三菩提を求めない者であり、彼等は増上慢である。増上慢であ

る彼らは、増上果（高度な果）である阿羅漢果を未だ得ていないのに、自ら得たという。要するに、増上慢とは、増上法について慢を生じる者である。

- ③ 真に阿羅漢である者とは、五方便の段階で既に三乗方便の善は全て仏果に帰着することを理解する者である。すなわち、阿羅漢でありながらそれを信じられないならば、その人は真に阿羅漢ではない。

第二の、衆生の信心を敦くすることについて指摘している3点をまとめれば、以下のようになる。

- ① 仏の下で修業をして阿羅漢となった者が無仏の時に『法華経』を聞いても理解できず、さらに佛滅度の後は誰も『法華経』を説かない。そのために、仏の在世に信樂の心を生じて一乗の教えを受持する必要がある。
- ② 仏滅度は悪世のために『法華経』を受持し讀誦する者を得ることは難しい。そのため仏の在世において信受する必要がある。
- ③ もし無仏の時に『法華経』を説く者を得るのが難しいとしても、自分たちは無餘涅槃に入ると言うが、阿羅漢であっても、『法華経』を聞き一乗の教えを理解しなければ無餘涅槃には入れない。そのために「[今、釈尊が『法華経』を説く場に立ち会えない阿羅漢が]もし他の仏に会えば、[その仏の下で]『法華経』を聞き、涅槃に入ることができる」と仏が言われる。しかしながら、敢て他の仏を待ち信受する必要はないため、外凡の段階にいる者のなかで仏の説く一乗の教えを信じられない者を信受させる。

以上の法雲の解釈の中に出る増上慢の特徴に関して、以下の4点にまとめることができる。

- ① 真に阿羅漢でない者とは、自ら阿羅漢・辟支佛と謂う者で、如来が但だ菩薩を教化するということを聞かず、知らない者である。
- ② 偽の阿羅漢とは、比丘・比丘尼の中で自ら已に阿羅漢を得た、最後身である、究竟の涅槃であると謂い、阿耨多羅三藐三菩提を求めない者であり、彼等は増上慢である。増上慢である彼らは、未だ増上果である阿羅漢果を得ていないのに、自ら得たという。要するに、増上慢とは、増上法において慢を生じる者である。
- ③ 真に阿羅漢である者とは、五方便の段階（仏道に縁を得た時点）で、既に三乗方便の善は全て仏果に帰着すること（一乗の教え）を理解する者である。すなわち、阿羅漢でありながらそれを信じられないならば、その人は真に阿羅漢となった者ではない。

- ④ 阿羅漢であっても、『法華經』を聞き一乗の教えを理解しなければ無餘涅槃には入れない。そのため、今（「方便品」の会座において）『法華經』に説かれる一乗の教えを信受する必要がある。

以上の点をまとめると、法雲の解釈における増上慢とは、未だ「増上果としての阿羅漢果」を得ていないのに、増上法において慢を生じ、三乗の教法（乗）の1つである声聞乘に従い、すでに阿羅漢果を得たと自認する者と推測できよう。

2.3.4 考察

法雲『法華義記』には「不自見其過」の解釈を欠くが、五千起去に関する解釈を通して、増上慢の特性として以下の5点が明らかとなった。

- ① 五千起去した四衆が得ていないのに得たというのは、盡智と無生智 [を得たということ] である。さらに、證していないのに證したというのは、有餘涅槃と無餘涅槃 [を證したということ] である。したがって、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというのは、伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢 [果] である。
- ② 阿羅漢は二種類、すなわち「真 [に阿羅漢である者] 」と「偽」の阿羅漢に分けられる。その内の「偽」の阿羅漢とは、阿耨多羅三藐三菩提を求めず、三乗の教法（乗）の1つである声聞乘に従い、すでに阿羅漢果を得たと謂い増上果である阿羅漢果を求めない者である。
- ③ 五千起去した四衆は増上慢のために、[仏の説法を] 聞くことに堪えられない。
- ④ 五千起去した四衆には、[法を聞く] 機 [根] と法を聞く縁がない。加えて、彼等は内に戒を犯しながら、外面的には戒律に従う様に振る舞う者である。
- ⑤ 五千起去の説明として長行箇所に出る「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。(略) 世尊默然而不制止。」ならびに、偈頌の「比丘比丘尼、有懷増上慢。優婆塞我慢、優婆夷不信。如是四衆等、其數有五千。(略) 斯人尠福德、不堪受是法。」は大衆を簡ぶという内容が記されており、この箇所は阿難が釈尊在世当時の出来事を記したものである。

法雲の増上慢解釈から明らかなことは、釈尊の会座から去った五千人の増上慢が得ていないのに得たと思い、証していないのに証したと思っている対象は、伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢 [果] である。

2.4 智顛、吉蔵、基における不自見ならびに増上慢の解釈

次に、『妙法華』を随文解釈する智顛⁶²『法華文句』、吉蔵⁶³『法華義疏』『法華統略』、基『法華玄讚』を用いて、「方便品」五千起去に関する不自見ならびに増上慢の解釈を比較検討したい。

2.4.1 「方便品」五千起去に関する長行箇所を検討

初めに、五千起去が述べられる長行箇所「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及増上慢、未得謂得、未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。」(T no. 262, 9: 7a7-11)に関するそれぞれの解釈を比較検討する。

2.4.1.1 五千起去というエピソードの解釈

「方便品」では舍利弗が世尊に対して説法の懇請を行い、それに対して世尊が説法を断るといふやりとりがなされる。しかし舍利弗の三度目の懇請を受けて、世尊が、「汝は已に慇懃に三たび請えり。あに説かざることを得んや。汝よ、今、諦らかに聴き、善くこれを思念せよ。吾は當に汝がために分別し解説すべし」⁶⁴と言われる。この世尊の言葉を受けて、いわゆる「五千起去」が起こる。

そこでまず、「五千起去」というエピソードに関する注釈家たちの解釈を確認する。なお、吉蔵の解釈は上段に『法華義疏』を、下段に『法華統略』を記載する。

⁶² 『法華文句』と吉蔵『法華義疏』の関係に関しては平井(1985, pp. 521-563)、奥野(2005)を参照。

⁶³ 増上慢声聞の成仏不成仏に関する吉蔵の解釈については、末光(1990)(1991)、奥野(2000)(2002)を参照。

⁶⁴ 「爾時世尊告舍利弗。汝已慇懃三請。豈得不説。汝、今、諦聽、善思念之。吾當爲汝分別解説。」(no. 262, 9: 7a5-7)

智顛	「説是語時」、是れ揀衆許なり。五千座に在るが故に、如來は三たび止む。今將に許し説かんとして、威神もて遣去したもう、故に揀衆と名づく。 ⁶⁵
吉藏	「説此語時」の下は、第二に不淨衆を簡ぶなり。文に就いて亦た三あり。第一句（「會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等, 即從座起禮佛而退.」）は正しく罪人の退席を明かす。 ⁶⁶ 問う。何が故に一乘を説くに臨みて、五千は退席するや。答う。甘露まさに垂れんとするに、毒を壊きて席を避く。傷むべきの深きなり。 ⁶⁷
基	經、「説此語時」至「禮佛而退」。贊に曰く、下は惡人の退席なり。 ⁶⁸

五千起去のエピソードに関して、智顛は「揀衆許」、すなわち、舍利弗の懇請を許して説法しようとし、威神力をもって会座にいる五千人を去らせるため、衆生を選ぶ（揀衆）ことと解釈する。

吉藏は、五千起去とは不淨の衆生を簡ぶこと（罪人⁶⁹の退席）と解釈する。退席する理由とは、甘露（涅槃）が將に説かれようとする時には、毒を懷いた人々は席から去るためと述べる。

基は、惡人の退席と述べる。

智顛と吉藏の解釈はほぼ似ており、五千起去のエピソードとは、会座にいる五千人（吉藏は五千人を不淨の者と解釈する）を去らせ衆生を選ぶことである。吉藏と基は、会座を離れた五千人を惡人と解釈する点が類似している。

⁶⁵ 「説是語時, 是揀衆許. 五千在座故, 如來三止. 今將許説, 威神遣去, 故名揀衆.」(T no. 1718, 34: 48c23-25)

⁶⁶ 「説此語時下, 第二簡不淨衆也. 就文亦三. 第一句正明罪人退席.」(T no. 1721, 34: 493b15-16)

⁶⁷ 「問. 何故臨説一乘, 五千退席. 答. 甘露將垂, 壞毒避席. 可傷之深.」(『新纂大日本續藏經』27, 463c4-5)

⁶⁸ 「經, 説此語時至禮佛而退. 贊曰, 下惡人退席.」(T no. 1723, 34: 708b27-28)

⁶⁹ 吉藏『法華遊意』にも「常不輕菩薩, 見増上慢四衆惡人云, 我, 不輕汝等. 汝等行菩薩道, 必當作佛.」(T no. 1722, 34: 642a26-27)とあり、増上慢の四衆は惡人と解釈されている。

2.4.1.2 五千人が会座から去る理由の解釈

次に、五千人が会座から去る理由に当たる「所以者何。此輩罪根深重及増上慢，未得謂得，未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。」に関して、罪根深重・増上慢・未得謂得未證謂證・有如此失・世尊默然而不制止のそれぞれの語句ごとに解釈を確認する。

(1) 「罪根深重」の解釈	
智顛	五濁の障り多きを「罪重」と名づけ、小を執して大を翳すを「根深」と名づく。 ⁷⁰
吉蔵	<p>言う所の「罪」とは、定んで小乗を執し究竟たりと謂い、大乘の理に乖くが故に稱して「罪」と爲す。故に『涅槃經』に云く。「二乗を求むる者を名づけて不善と爲す」と。言う所の「根」とは、凡そ二義あり。一には過去に小乗を修習するが故に稱して「根」と爲し、二には此の小に執するに因て遂に大を謗ずるを生ずる故に名づけて「根」と爲す。言う所の「深重」とは、疑を釋せんが爲の故に來る。若し小乗を封執し遂に大を障隔せば、三根の聲聞も亦た小乗を執して應に大を隔つべし。何故に五千獨り去りて三根は住するや。是の故に釋して云く。五千は罪根深重にして、十方の諸佛拔濟すること能わず。是の故に退席す。三根の人小乗を習うと雖も、罪根輕淺の故に獨り住するなり。⁷¹</p> <p>又「罪根深重」とは、過去世の失を明かす。過去に於いて他の大乘を説くを聽くことを障するを以て、是の故に現在に正法を聞かず。⁷²</p> <p>「罪根深重」を釋す。直ちに小乗に保執し、一實の理に乖く故に「罪」と名づく。小に執し大を謗ずるを生ずる故に、「根」と名づく。久しく執情⁷³を習うを「深」と爲し、十方の佛拔くこと能わざるを「重」と爲す。⁷⁴</p>

⁷⁰ 「五濁障多名罪重，執小翳大名根深。」(T no. 1718, 34: 48c25-26)

⁷¹ 「所言罪者，定執小乘謂爲究竟，乖大乘理故稱爲罪。故涅槃經云。求二乘者名爲不善。所言根者，凡有二義。一者過去修習小乘故稱爲根，二者因此執小遂生謗大故名爲根。所言深重者，爲釋疑故來。若封執小乘遂障隔大者，三根聲聞亦執小乘應隔於大。何故五千獨去而三根住耶。是故釋云。五千罪根深重，十方諸佛不能拔濟。是故退席。三根之人雖習小乘，罪根輕淺故獨住也。」(T no. 1721, 34: 493b19-28)

⁷² 「又罪根深重者，明過去世失。以於過去障他聽說大乘，是故現在不聞正法。」(T no. 1721, 34: 493c1-3)

⁷³ 菅野(1998, p. 430, (102)): 執情「執著する迷いの心の意」。

⁷⁴ 「釋罪根深重。直保執小乘，乖一實之理故名罪。執小生於謗大故，名根。久習執情爲深，十方佛不能拔爲重。」(『新纂大日本續藏經』27, 463c6-8)

基	「罪根深重」の者は、匱しく法業を感ず、是れ罪根なるが故なり。現に法を聞かず、是れ罪の體なるが故なり。即ち第四の障 [である法障] ⁷⁵ なり。 ⁷⁶
---	--

智顛は、「罪根深重」を「罪重」と「根深」の2つに分け、「罪重」とは、五濁（劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁）の障りが多いこと、「根深」とは、小乘に固執し大乘を障害することと解釈する。

吉蔵は、五千人の退座の理由に「罪根深重」と「増上慢」の2点を挙げる⁷⁷。「罪根深重」に関しては、「罪」、「根」、「深」、「重」、「深重」ならびに「罪根深重」の6つの観点から解釈している。

- ①「罪」とは、小乘に固執しそれを究極だと思い大乘の教えに背くことである。
- ②「根」には2つの意味がある。第一は、過去に小乘を修習したことであり、第二は、修習した小乘に固執して大乘を謗ることである。
- ③「深」とは、執着する迷いの心を習慣とすることである。
- ④「重」とは、十方の佛が救う（抜く）ことができないことを意味する。
- ⑤増上慢が「深重」と言われる理由は、会座に残る者たちとの違いを示すためである。会座に残る上・中・下根の声聞も増上慢と同様に小乘を習い固執し大乘を隔てるが、「罪根軽淺」なために会座に残ることができる。一方で、十方の諸仏は「深重」である増上慢を救うことができないため彼らは退席する。
- ⑥「罪根深重」とは過去世の失であり、増上慢は過去世において、他の人が大乘を聞くことを妨げたために、現在（『法華經』が説かれる会座において）正法を聞くことができない。

要するに吉蔵は、「罪根深重」とは、「小乘を修習し、それに固執し究極と思い大乘に背く、もしくは大乘を謗ること」と、「過去世の失」という2つの失を指すと解釈している。

基も吉蔵と同様に、五千人の退座の理由に「罪根深重」と「増上慢」を挙げる⁷⁸。「罪根深

⁷⁵ 「依大般若, 重障有四. 一煩惱障. 二業障. 三異熟障. 四法障。」 (T no. 1723, 34: 708c22-23)

⁷⁶ 「罪根深重者, 感匱法業, 是罪根故. 現不聞法, 是罪體故. 即第四障也。」 (T no. 1723, 34: 709a14-15)

⁷⁷ 「所以者何下, 第二釋起去所由. 凡有二義. 一者罪根深重. 二者有増上慢. 又有二義. 一者大乘中有失. 二者小乘中有失。」 (T no. 1721, 34: 493b16-19)

⁷⁸ 「何故將說妙法避席而起去耶. 此去之所以者何謂也. 今釋有二意. 一罪根深重, 二有増上慢。」 (T no. 1723, 34: 708c4-6)

重」に関しては、「法障⁷⁹」、すなわち、過去世において他の人が善を作すことを妨げたために、現在『法華経』を聞けず、正法が不足すると説明する。

(2)「増上慢」の解釈	
智顛	未だ得ざるを得たりと謂うを上慢と名づく。 ⁸⁰
吉蔵	「及増上慢」とは、第二に、上には小に執し大を障るの失あることを明かせしが、此には小乗の内においても自ら復た失あることを明かす。實に未だ小乗の道果を得ざるに小乗の道果を得と謂う。故に名づけて失と爲す。 ⁸¹ 「及増上慢」とは、謂く現在の失なり。現在世において釋迦佛に値い、小乗を修習し、未だ小果を得ざるに小果を得たりと謂う。復た此の果を以て究竟と爲すと謂い、大法を受けず。故に名づけて失と爲す。又た此の失を以て諸の餘の聲聞を簡ぶ。諸の餘の聲聞は但だ小に執するの失のみ有りて、未だ小果を得ざるに小果を得たりと謂うこと有ること無し。是の故に餘の人は坐に在れども五千は退席す。 ⁸²
基	慢とは、『玉篇』には輕悔なり、不畏なり、倨るなり。或は嫚の字と爲す。切韻は欺を謾と爲す。緩にして慢を爲し、己を恃みて他を陵る。高擧を相と爲す。『瑜伽』等は慢に七種ありと説く。一に慢、二に過慢、三に慢過慢、四に我慢、五に増上慢、六に卑慢、七に邪慢なり。初めの慢とは劣において己の勝を計り、或は等に於いて己の等を計るを謂う。過慢とは等において己の勝を計り、或は勝において己の等を計るを謂う。慢過慢とは勝において己の勝を計るを謂う。我慢とは執する所の我を恃みて高擧を相と爲す。増上慢とは己れ實に少徳なるに己れ多徳なりと謂う。卑慢とは他の多分に己れに/より勝るを己れに少分に他に劣ると計るを謂う。邪慢とは己れ全く徳なきに己れは徳ありと謂う。 ⁸³

⁷⁹ 「法障者、謂於宿世障他作善、造匱法業、於此生中不得聞法、匱乏正法。謂五果中等流増上二果所攝。」(T no. 1723, 34: 709a11-13)。

⁸⁰ 「未得謂得名上慢。」(T no. 1718, 34: 48c26)

⁸¹ 「及増上慢者、第二、上明執小有障大之失、此明於小乘内自復有失。實未得小乘道果謂得小乘道果。故名爲失。」(T no. 1721, 34: 493b28-493c1)

⁸² 「及増上慢、謂現在之失。於現在世值釋迦佛、修習小乘、未得小果謂得小果。復謂此果以爲究竟、不受大法。故名爲失。又以此失簡諸餘聲聞。諸餘聲聞但有執小之失、無有未得小果謂得小果。是故餘人在坐五千退席。」(T no. 1721, 34: 493c3-8)

⁸³ 「慢者、玉篇輕悔也、不畏也、倨也。或爲嫚字。切韻欺爲謾。緩爲慢、恃己陵他。高擧爲相。瑜伽等説慢有七種。一慢、二過慢、三慢過慢、四我慢、五増上慢、六卑慢、七邪慢。初慢者謂於劣計己勝、或於等計己等。過慢者謂於等計己勝、或於勝計己等。慢過慢者謂於勝計己勝。我慢者恃所執我高擧爲相。増上慢者

「増上慢」⁸⁴の解釈について智顛は、未だ得ざるを得たりと謂うことである、と述べる。この解釈は『俱舍論』などにみられる増上慢の一般規定と同様である。

吉蔵は、増上慢に関して、①「小乗の中の失」、すなわち、未だ小乗の道果を得ずして小乗の道果を得たと謂うこと、②「現在の失」、すなわち、現在世において釈迦仏に会い、小乗を修習して未だ小乗の果を得ないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けないこと、という2点を挙げる。なお、会座に残る者と退席する増上慢の違いは、小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思うか否かの点である。

基は、梁の顧野王による『玉篇』に出る慢の説明、ならびに『瑜伽師地論』に出る七種の慢の説明を挙げる。『瑜伽師地論』に記される増上慢の説明とは、「増上慢とは己れ實に少徳なるに己れ多徳なりと謂う。」である。

(3) 「未得謂得，未證謂證」の解釈	
智顛	未だ三果を得ず、未だ無學を證せず。 ⁸⁵
吉蔵	未だ道諦を得ざるに道諦を得たりと謂い、未だ滅諦を證せざるに滅諦を證せりと謂う。故に「未得謂得未證謂證」と言う。則ち上の増上慢の義を釋するなり。 ⁸⁶
基	今の増上慢とは、即ち是れ第五の己 ⁸⁷ れ實に少徳なるに己れは多徳と謂う。世間の涅槃・禪定等を得るが故に、未だ多くを得ざるに多くを得 ⁸⁸ と謂い、未だ多くを證せざるに多くを證すと謂う。得は有爲の道を謂い、證は無爲の滅を謂う。此れは是れ増上慢の相なり。 ⁸⁹

己實少徳謂己多徳。卑慢者謂他多分勝己計己少分劣他。邪慢者己全無徳謂己有徳。」(T no. 1723, 34: 709a15-24)

⁸⁴ 智顛『法華玄義』には「是増上慢未入位。」(T no. 1716, 33: 809b22-23)とある。

⁸⁵ 「未得三果，未證無學。」(T no. 1718, 34: 48c26-27)

⁸⁶ 「未得道諦謂得道諦，未證滅諦謂證滅諦。故言未得謂得未證謂證。則釋上増上慢義。」(T no. 1721, 34: 493c8-10)。

⁸⁷ 『磧砂大藏經』に出る「己」に改め読む。

⁸⁸ 『磧砂大藏經』に出る「得」に改め読む。

⁸⁹ 「今増上慢，即是第五己實少徳謂己多徳。得世間涅槃禪定等故，未多得謂多徳，未多證謂多證。得謂有爲道，證謂無爲滅。此是増上慢相。」(T no. 1723, 34: 709a24-28)

増上慢が未だ得ていないものとは「三果（預流果・一來果・不還果）」であり、未だ證していないものとは無学（阿羅漢果）であるというのが、智顛の解釈である⁹⁰。

吉蔵は、未だ道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、未だ滅諦を證していないのに滅諦を證したと謂うことと解釈する。

基は、増上慢は世間の涅槃・禪定（第四静慮）を得ており⁹¹、未だ有為の道〔諦〕を得ていないのに得たと謂い、未だ無為の滅〔諦〕を證していないのに證したと謂うと解釈する。

(4) 「有如此失」の解釈	
智顛	「有如此失」とは、謂く、障・執・慢の三種の失なり。 ⁹²
吉蔵	「有如此失」とは、總じて上の二失を結するなり。 ⁹³
基	未検

智顛の解釈では、増上慢は3種の失を持つ。

- ① [五濁（劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁）の] 障 [りがあること]
- ② [小乗に固] 執 [すること]
- ③ [未だ得ざるを得たりと謂う] 慢 [を生じること]

吉蔵は、「罪根深重」ならびに「増上慢」の解釈の中に記した4つの過失が、増上慢が有する失の内容であると述べる。その内容を記せば下記のようなになる。

- ① 小乗に固執しそれを究極だと思い大乘の教えに背く失
- ② 「小乗の中の失」：未だ小乗の道果を得ずして小乗の道果を得たと謂う失
- ③ 「現在の失」：現在世において釈迦仏に会い、小乗を修習して未だ小乗の果を得ないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない失

⁹⁰ 智顛『法華玄義』には「未得謂得未證謂證，偏觀之失也。」(T no. 1716, 33: 686a16) とある。

⁹¹ 基は『妙法華』の「増上慢比丘將墜於大坑。」(T no. 262, 9: 6c17) の一文について、増上慢とは第四静慮（色界四禪の内の第四）を得て阿羅漢果〔を得た〕と謂うと解釈する。Cf. 「經，佛復止舍利弗至將墜於大坑。贊曰。下第三段。初止後請。止中有二。長行及頌。此初也。因不堪聞法者之退席也。恐増上慢得世第四静慮，便謂阿羅漢果，而生誹謗，當墮地獄，名墜大坑。」(T no. 1723, 34: 708a13-17). 吉蔵『法華玄論』「云何乃言爲増上慢人得世俗禪定。謂得涅槃破此人故，説化城譬耶。答。兩兼如前釋。問。説化城云何破此執耶。答。此人得世俗禪定。如釋論云此人得四禪時謂得四果。」(T no. 1720, 34: 402b29-402c3)

⁹² 「有如此失者，謂，障執慢三種之失也。」(T no. 1718, 34: 48c27-28)

⁹³ 「有如此失者，總結上二失也。」(T no. 1721, 34: 493c10-11)

- ④「過去世の失」：他の人が大乘を聞くことを妨げたために、現在（『法華經』が説かれる会座において）正法を聞くことができない失
 なお、基の「失」に関する解釈は未検である。

(5) 「世尊默念而不制止」の解釈	
智顛	「而不制止」とは、上に開三顯一を聞くも、言略にして義隱るれば、猶お未だ謗を生せず。繫珠の因縁と作るに足る。去れば則ち益あり。若し廣く開三顯一を聞かば、情に乖きて謗を起さん。住すれば則ち損あり。是の故に制止したまわざるなり。 ⁹⁴
吉蔵	「世尊默然而不制止」とは、第三句にして、住すれば即ち二損あるを以ての故に佛これを制したまわず。一には聞かば則ち謗を起し惡道に墮ちなん。二には未來に當に大乘を障隔するの因縁を作るべし。 ⁹⁵
基	經「世尊默然而不制止」。贊曰く、二に不止なり。默は靜なり。俗には默と作す。諸論皆云く、二の決定ありて佛力に非ず。一に受異熟決定、二に作業決定なり。罪根深重の者は受果定の類、増上慢者は作業定の類なり。此に由りて五千座より起つ。佛は神力ありと雖も亦た之を止めず。又た乍く去らしむ可きも大坑に墜さず。之を止めて重業を興さしむるべからざるが故に止めざるなり。彼もし發心せば定業は轉ず可きも、其の心易からざれば佛力に排ず。 ⁹⁶

会座を去る五千人を制止しない理由について、智顛は、増上慢が〔衣裏〕繫珠の因縁を作るためにも、会座に住することは損であるために去ることを制止しない、と解釈する。

吉蔵は、増上慢が会座にいると法を謗り惡道に墮ちること、加えて、未來において大乘を障り隔てる因縁を作るという2つの不利益があるため、仏は去ることを制止しないと述べる⁹⁷。

⁹⁴ 「而不制止者、上聞開三顯一、言略義隱、猶未生謗。足作繫珠因縁。去則有益。若聞廣開三顯一、乖情起謗。住則有損。是故不制止也。」(T no. 1718, 34: 48c28-49a2)

⁹⁵ 「世尊默然而不制止者、第三句、以住即有二損故佛不制之。一者聞則起謗墮惡道。二者未來當作障隔大乘因縁。」(T no. 1721, 34: 493c11-13)

⁹⁶ 「經、世尊默然而不制止。贊曰、二不止也。默靜也。俗作默。諸論皆云、有二決定佛力不非。一受異熟決定、二作業決定。罪根深重者受果定類、増上慢者作業定類。由此五千從座而起。佛雖神力亦不止之。又乍可令去不墜大坑。不可止之令興重業故不止也。彼若發心定業可轉、其心不易佛力不排。」(T no. 1723, 34: 709b8-15)

⁹⁷ 吉蔵『法華玄論』には「如經文所列五千人、直明起去不明是謗。取其不謗義則勝、不聞法義則劣。」(T no. 1720, 34: 422a4-6)とあり、五千起去した者たちは法を謗ることはない点では勝れているが、聞法の点からは劣るとされる。

基の解釈によると、五千人の増上慢を止めない理由とは、会座に留め重業を興させないためである。

2.4.1.3 考察

長行の増上慢の特性、すなわち、五千人が会座から去る理由に当たる「所以者何. 此輩罪根深重及増上慢, 未得謂得, 未證謂證. 有如此失. 是以不住. 世尊默然而不制止。」に関して、智顛・吉蔵・基のそれぞれの解釈をまとめると下記のようになる。

- (1) 智顛の解釈に拠ると、五千起去とは、「揀衆許」(舎利弗の懇請を許して説法しようとし、威神力をもって会座にいる五千人を去らせるため、衆生を選ぶ(揀衆)こと)である。会座から起去する五千人とは、五濁の障りが多く、小乗に固執して大乘を障害し、未だ三果(預流果・一來果・不還果)を得ていないのに得たと謂い、未だ無学(阿羅漢果)を證していないのに證したと謂う慢を生じる者である。彼らは以上に挙げた①[五濁の障りがあること]、②[小乗に固執すること]、③[未だ得ざるを得たりと謂う]慢[を生じること]という3つの失を有する者であり、開三顯一の内容を完全に聞くと法を謗り[衣裏]繫珠の因縁を作ることができず、会座に住することは損であるために、仏は彼らが去ることを制止しない。
- (2) 吉蔵の解釈に拠ると、五千起去とは不浄の衆生を簡ぶこと(罪人の退席)であり、彼らが会座から起去する理由とは「罪根深重」と「増上慢」によるものである。彼らは、①小乗を修習しそれに固執し究極と思ひ、大乘に背く、もしくは謗ること、②「小乗の中の失」(未だ小乗の道果を得ずして小乗の道果を得たと謂う)、③「現在の失」(現在世において釈迦仏に会い、小乗を修習して未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない)、④「過去世の失」(他の人が大乘を聞くことを妨げたために、現在(『法華經』が説かれる会座において)正法を聞くことができない)という4つの失を有する者である。その内、増上慢とは「小乗の中の失」と「現在の失」を意味するため、増上慢とは未だ道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、未だ滅諦を證していないのに滅諦を證したと謂う者を指す。彼らは、会座にいると法を謗り悪道に墮ちること、さらに、未来において大乘を障り隔てる因縁を作るという2つの不利益があるため、仏は彼らが去ることを制止しない。
- (3) 基の解釈に拠ると、五千起去とは悪人の退席であり、彼らが会座から起去する理由とは「罪根深重」と「増上慢」によるものである。会座から去る彼らは、「法障」(過去世に

において他の人が善を作すことを妨げたために、現在『法華経』を聞けず、正法が不足すること)を持つ者である。増上慢の語句に関しては、『瑜伽師地論』に出る七種の慢の説明に出る「増上慢とは己れ實に少徳なるに己れ多徳なりと謂う。」を挙げ説明している。さらにまた、会座から去った五千人が未だ得ていないのに得たと謂う云々に関する具体的な解釈としては、世間の涅槃・禪定は得ているが、未だ有為の道〔諦〕を多く得ていないのに多く得たと謂い、未だ無為の滅〔諦〕を多く證していないのに多く證したと謂う者とまとめる。このような増上慢とは作業決定の類であり、彼らを会座に留め重業を興させないために仏は去ることを制止しない。

ここで、増上慢が懐く慢の内容である「未だ得ていないのに得たと謂い、未だ證していないのに證したと謂う」ことと、増上慢が有する失について触れたい。

まず、増上慢が懐く慢の内容である「未だ得ていないのに得たと謂い、未だ證していないのに證したと謂う」ことに関しては、智顛が「未だ三果（預流果・一來果・不還果）を得ていないのに得たと謂い、未だ無学（阿羅漢果）を證していないのに證したと謂う」、吉蔵と基が「道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、滅諦を證していないのに滅諦を證したと謂う」解釈が3名の注釈者に共通する。加えて基のみが、増上慢が世間の涅槃・禪定を得ているという解釈も加える。

次に、増上慢が有する失については、概ね次の2点に集約されるといえよう。すなわち、
① 小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けないこと
② 他の人が大乘を聞くこと（基は善を為すことと解釈する）を妨げたために、現在（『法華経』が説かれる会座において）正法を聞くことができないこと

以上の2点である。①に関しては智顛と吉蔵に共通の解釈であり、②に関しては吉蔵と基に共通の解釈である。

以上の内容から考えて、増上慢とは、小乗に固執し、「道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、滅諦を證していないのに滅諦を證したと謂う」慢を生じ、大乘の法を受けない者である。ここに言うところの大乘の法を受けない理由は、慢心を生じるだけでなく、彼らの過去世における行為も関係すると言えようか。

ところで、長行箇所に出る五千起去の内容に関して3名の注釈者の解釈を比較した結果、智顛と吉蔵に共通の解釈は、

① 五千起去というエピソードは衆生を選ぶこと

② 五千人が有する失とは、小乗を修習して未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思
い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けないこと

以上の2点である。

次に、吉蔵と基に共通の解釈は、

① 五千起去というエピソードは悪人の退席であること

② 会座から去る理由とは、五千人が「罪根深重」と「増上慢」であること

③ 五千人が有する失とは、他の人が大乘を聞くこと（基は善を為すことと解釈する）を妨げた
ために、現在（『法華経』が説かれる会座において）正法を聞くことができないこと

以上の3点である。

さらにまた、3名に共通の解釈は

① 増上慢が懐く慢の内容である「未だ得ていないのに得たと謂い、未だ證していないのに證し
たと謂う」ことに関して、「道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、滅諦を證していないの
に滅諦を證したと謂う」こと

② 五千人が会座から去ることを仏が制止しない理由とは、〔開三頭一の内容を廣く聞くこと
で〕法を謗るという業（因縁）を作らせないためであること

以上の2点である。

周知のように、基の『法華玄讚』には吉蔵『法華義疏』の影響がある⁹⁸。このことに鑑みれ
ば、上記に挙げたように、吉蔵の解釈が『法華玄讚』に見られることは当然のことと言えよ
う。なお、『法華玄讚』には、五千起去する彼らは世間の涅槃・禪定は得ているという記述が
あり、吉蔵『法華玄論』にも同様の解釈が見られる。

2.4.2 「方便品」五千起去に関する偈頌の検討

2.4.2.1 偈頌における五千起去の解釈

次に、五千起去が述べられる偈頌に出る「比丘比丘尼，有懷増上慢。優婆塞我慢，優婆夷不信。
如是四衆等，其數有五千。不自見其過。於戒有缺漏，護惜其瑕疵。是小智已出。衆中之糟糠，佛威德
故去。斯人虧福德，不堪受是法。此衆無枝葉。唯，有諸貞實。」（T no. 262, 9: 7c11-18）に関する解
釈を比較検討する。

⁹⁸ 末光(1986)参照。Cf.『法華文句』と吉蔵『法華義疏』『法華玄論』の関係に関しては、平井
(1985, pp. 521-563)、奥野(2005)を参照。

(1) 「比丘比丘尼, 有懷増上慢, 優婆塞我慢, 優婆夷不信」の解釈	
智顛	上慢・我慢・不信は四衆に通じて有り。但だ出家の二衆のみは、多く道を修し禪を得、謬ちて聖果と謂い、偏えに上慢を起こす。在俗は矜高にして多く我慢を起こす。女人は智淺くして多く邪僻を生ず。 ⁹⁹
吉蔵	初の一行は、四衆を攝して三過と爲す。出家の二衆は同じく増上慢の過あり。然る所以は、出家の二衆は心に道果を専らにして、多く禪定を獲。故に四禪を得る時、四果を得と謂う。増上慢と名づくるは、有人の言わく。慢の中の増、慢の上を増上慢と名づく。今謂く、増上は是れ増勝の法なり。未だ増勝の法を得ざるに増勝の法を得と謂い、此れを恃んで自ら高うするを増上慢と名づく。問う、邪慢と何んが異なるや。答う、眞諦三藏の云く、都て未だ聖法を得ざるに、而も邪法を恃怙し以て慢を起こすを名づけて邪慢と爲す。若し小さく許の法を得て、四禪等を得るが如きも、是れ究竟なりと謂うを増上慢と名づく。問う、何が故に名づけて懷くこと有ると爲すや。答う、注經に云く、若し無心にして徳を進む者は、然る後に理に會するのみ。増上の道を懷くこと有らば、所以に慢と爲すなり、と。懷くこと有りとは、謂く心に懷く所あり。則ち是れ有所得なり。優婆塞の我慢なるとは、其の人または未だ得ざるを得たりと謂う。但だ既に是れ丈夫なれば、志を守りて移らざるが故に我慢と言う。注經に云く、無我を知ると雖も、而も無我を以て我と爲さば亦た慢なり。此の意、我れ能く無我を解すると謂うが故に我慢と名づくるなり。優婆夷の不信なるとは、然るに四衆は通じて是れ大乘を信ぜざれども、不信の中に就いて更に三と開く。出家の二衆は則ち増上慢あるが故に不信なり。優婆塞は既に是れ丈夫なれば、自ら雄幹なり、決斷して志を守り、我れ來より已に道理は羅漢究竟なりと信ず、今何ぞ志を改むべきやと謂う故に我慢と稱す。次に既に是れは女人なり。更に餘の義なければ直に不信と稱す。注經に云く、非有の言を信ずると雖も、而も非有を以て信と爲さば、是れを不信と曰う。肇公の云く、其の非有と言うは、其れ是れは有に非ざるを明かす。是れ非有なりと謂うに非ず。但だ女子は遂に非有に執するが故に不信と名づく。 ¹⁰⁰

⁹⁹ 「上慢我慢不信四衆通有。但出家二衆, 多修道得禪, 謬謂聖果, 偏起上慢。在俗矜高多起我慢。女人智淺多生邪僻。」 (T no. 1718, 34: 54b4-7)

¹⁰⁰ 「初一行, 攝四衆爲三過。出家二衆同有増上慢過。所以然者, 出家二衆專心道果, 多獲禪定。故得四禪時, 謂得四果。名増上慢, 有人言。慢中之, 増慢之上名増上慢。今謂, 増上は増勝之法。未得増勝之法謂得増勝之法, 恃此自高名増上慢。問, 與邪慢何異。答, 眞諦三藏云, 都未得聖法, 而恃怙邪法以起慢名爲邪慢。若得小許法, 如得四禪等, 謂是究竟名増上慢。問, 何故名爲有懷。答, 注經云, 若無心而進徳者, 然後會理耳。有懷於増上之道, 所以爲慢也。有懷者, 謂心有所懷。則是有所得也。優婆塞我慢者, 其人亦是未得謂得。但既是丈夫, 守志不移故言我慢。注經云, 雖知無我, 而以無我爲我亦慢也。此意, 謂我能解無我故名我慢也。優婆夷不信者, 然四衆通是不信大乘, 就不信中更開三。出家二衆則有増上慢故不信。優婆

	初に大小乗の解なきに、三種の過あり。文に列する所の如し。他は正觀を壞く。其の人、増上の毒を懷く故に、大乘を障る。又、他は増上法の中において、増上の解を懷く。今増上法の中において、憍慢の惑を懷く。偏えに慢を擧ぐる所以は、慢を懷き自らを恃まば、必ず道を重んじ人を尊ばざるを以ての故に、化すべからず。 ¹⁰¹
基	四の中の初の一頌は増上慢を頌し、後の三頌は罪根深重を頌す。四頌は次の如く慢・犯・覆・障にして、此には慢を頌するなり。出家の人は道證を首と爲し、少得なるに多得と謂い多く増上慢を起こす。在俗の男子は多く我に計著し自ら恃みて心を高くするが故に我慢を生ず。在俗の女人は多く卑慢を生じ勝道を恃むことなく、少しく我に計著し夫れ朋に隨順して亦た不信を懷く ¹⁰²

智顛は、「上慢」、「我慢」、「不信」は四衆に通じるが、特に、比丘・比丘尼は〔声聞の〕道を修め禪〔定〕を得ているが、それを謬って聖果（阿羅漢果）であるという上慢を起こす者、優婆塞は矜が高く我慢を起こす者、優婆塞は智が浅く邪僻を生じる者と解釈する。

吉蔵の解釈では、「増上」とは「増勝の法」であり、比丘・比丘尼は、四禪を得ているが、未だ増勝の法（四果）を得ていないのに増勝の法を得と謂い、この思いを信じて自らを高く思う者である¹⁰³。優婆塞に関しては、『注法華經』に出る、「我れ無我を能く理解するというた

塞既是丈夫，自謂雄幹，決斷守志，我從來已信道理羅漢究竟，今何容改志故稱我慢。次既是女人，更無餘義直稱不信。注經云，雖信非有之言，而以非有爲信，是日不信。肇公云，言其非有者，明其非是有。非謂是非有。但女子遂執非有故名不信。」（T no. 1721, 34: 499a14- 499b7）

¹⁰¹ 「初無大小乘解，有三種過。如文所列。他壞正觀。其人，懷増上之毒故，障大乘。又，他於増上法中，懷増上之解。今於増上法中，懷憍慢之惑。所以偏擧慢者，以懷慢自恃，必不重道尊人故，不可化。」（『新纂大日本續藏經』27, 467c18-21）

¹⁰² 「四中初一頌頌増上慢，後之三頌頌罪根深重。四頌如次慢犯覆障，此頌慢也。出家之人道證爲首，少得謂多多起増上慢。在俗男子多計著我自恃高心故生我慢。在俗女人多生卑慢無恃勝道，少計著我隨順夫朋亦懷不信。」（T no. 1723, 34: 720b27-720c4）

¹⁰³ 吉蔵『法華玄論』には「増上慢聲聞中復有二種。一者，得四禪時謂得四果。如釋論出之。得初禪時謂得初果，乃至得四禪時謂得第四果。二者，不必得禪，但偏修厭觀三毒不起，謂得羅漢也。」（T no. 1720, 34: 421c11-14）と出る。四禪を得た時に四果を得るという点は『法華義疏』と同様であるが、ここでは、厭觀を修して三毒が起こらないことで阿羅漢を得たと謂うという解釈も見られる。なお、四禪を得て阿羅漢果を得ると謂う内容は、『大智度論』「佛弟子中亦有一比丘，得四禪生増上慢謂得四道。得初禪時謂是須陀洹。第二禪時謂是斯陀含。第三禪時謂是阿那含。第四禪時謂得阿羅漢。」（T no. 1509, 25: 189a11-14）にみられる。『大智度論』と『法華經』の関係については、勝呂（1970, pp. 365-374）を参照。吉蔵『法華玄論』には「増上慢聲聞有三種人。一者亦得聞經亦得授記。如常不

めに我慢と名づける」という解釈とともに、阿羅漢は究竟であるという道理に関する志を守りその考えを変えないことを指して我慢を生じる者であるという解釈も提示している。優婆夷は女人であるために不信であるが、『注法華經』と僧肇の『涅槃無名論』に出る「非有」に執着する（信じる）ために不信と名づける点を挙げている。四衆はそれぞれが心に、三過である増上慢・我慢・不信を懐いており、これら三過により、みな大乘を信じない。

基の解釈は次の通りである。すなわち、比丘・比丘尼は道諦を證することを主とし、少し得たにもかかわらず多く得たと謂い増上慢を起し、優婆塞は我に執着し自らを信じて心を高くするために我慢を生じ、優婆夷は卑慢を生じ勝れた道を信じることなく、少しだけ我に執着するために不信を懐くと述べる。

以上の内容から、比丘・比丘尼は禪定（吉蔵の解釈では四禪）を得ているが、それを誤って聖果（吉蔵の解釈では四果）であると思ひ、究竟の果を得たという増上慢を心に懐く。吉蔵は「ある人」¹⁰⁴の説、すなわち「増上」は「増勝の法」を指すことを引用する。

(2) 「不自見其過」の解釈	
智顛	「不自見其過」とは、三失をもて心を覆い、疵を藏し徳を揚げ自ら省みると能わず。是れ無慚の人なり。若し自から過を見ば、是れ有羞の僧なり。 ¹⁰⁵
吉蔵	「不自見其過」とは、夫れ過あれども能く過を知らば、此れ智人と謂うなり。今封言の過ありて自ら知らざれば、愚人と謂うなり也。 ¹⁰⁶
基	未検

輕菩薩爲増上慢聲聞說法華經, 及爲授記. 此是未發心授記也. 二者不得聞經不得授記. 如釋論所出得四禪者, 此人命終墮無間獄也. 三者得髣髴聞而不得授記. 則五千之徒得聞略說而不得記也。」(T 34, 421c25-422a2) とあり、三種の増上慢の内、五千起去した者は『法華經』の略説を聞き、授記を受けない者である。ここでは、四禪を得て四果を得たと謂う者は、五千起去した者とは別に分類されている。末光(1990, p. 349) は、四禪を得て四果を得たと謂う増上慢比丘と、五千起去する増上慢とは別であると論じる。

¹⁰⁴ 法雲のことを指すのだろうか。Cf. 2.3.3.

¹⁰⁵ 「不自見其過者, 三失覆心, 藏疵揚徳不能自省. は無慚人也. 若自見過, 是有羞僧也。」(T no. 1718, 34: 54b7-9)

¹⁰⁶ 「不自見其過者, 夫有過而能知過, 此謂智人也. 今有封言之過而不自知, 謂愚人也。」(T no. 1721, 34: 499b8-10)

智顛は「自ら其の過を見ず」に関して、三失（〔五濁（劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁）の〕障〔りがあること〕、〔小乘に固〕執〔すること〕、〔未だ得ざるを得たりと謂う〕慢〔を生じること〕）により心が覆われ、〔三失により覆われた心である〕疵を隠し、自らの徳を揚げ、自らを省みないことと解釈する。そしてこの様な振る舞いの人を無慚の人と称し、過ちを見るならば有差の僧であるという。

吉蔵は、過があっても過を知れば智人であるが、五千人は文字にとらわれるという過失があり、自ら其の過を見ない愚人であると述べる。

基の解釈は未検である。

智顛と吉蔵の解釈は類似しており、自ら過を見れば有差の僧・智人であり、自ら過を見ない五千人は無慚の人・愚人と解釈している。五千人が見ない（省みない、知らない）過とは、智顛は、「三失により覆われた心を隠し自らの徳を揚げそのような有様を省みないこと」と述べ、吉蔵は「文字にとらわれる過失」と解釈する。

ここで注目すべきは、吉蔵が「不自見」を「不自知」と解釈している点である。

(3) 「於戒有缺漏」の解釈	
智顛	「於戒有缺漏」とは、律儀に失あるを缺と名づく。定共・道共に失あるを漏と名づく。 ¹⁰⁷
吉蔵	「於戒有缺漏」とは、上には小乗究竟の解なきに而も解ありと謂うを明かすも、今の一句は、小乗究竟の行なきに而も究竟の行ありと謂うを明かす。又、上には未だ小乗究竟の果を得ざるに已に究竟の果を得たりと謂いて、又た大を受けず。此の二惡を防ぐこと能わざるを以ての故に、戒において缺漏ありと名づく。此の戒を破するを以ての故に名づけて缺と爲し、而も信心を漏出するが故に稱して漏と爲す。又た戒は是れ堤塘なり。煩惱の水を防ぎ遮る。戒既に缺漏せば煩惱便ち出づるなり。 ¹⁰⁸
	「於戒有缺漏」とは、此れ大乘の行なきを明かすなり。破戒を「缺」と爲し、定水を失うを「漏」と爲す。前に解なきを明かす故に、慧命なく、戒定なし。是の

¹⁰⁷ 「於戒有缺漏者，律儀有失名缺。定共道共有失名漏。」（T no. 1718, 34: 54b9-10）

¹⁰⁸ 「於戒有缺漏者，上明無小乘究竟解而謂有解，今一句，明無小乘究竟行而謂有究竟行。又，上未得小乘究竟果而謂已得究竟果，又不受大。以不能防此二惡故，名於戒有缺漏。以破此戒故名爲缺，而信心漏出故稱爲漏。又戒是堤塘。防遮煩惱之水。戒既缺漏煩惱便出也。」（T no. 1721, 34: 499b10-16）

	故に行なし。五千の徒、具さに三學なし。又た戒は天徳の瓶の如し。瓶破れ又た漏るれば、則ち復た戒なきなり。 ¹⁰⁹
基	經、「如是四衆等」至「於戒有缺漏」。贊に曰く、下の三頌は罪根深重を頌す。犯戒・覆罪・法障の別の故に此には犯戒なり。少しく犯すを缺と爲し、多くを犯すを漏と爲す。毀責すべきが故なり。戒を壞するを缺と名づけ、見を壞すを漏と名づく。或いは煩惱の漏起り仍りて見覺せず自ら恃みて心を高す。戒の中には既に増上慢の自ら聖を得たりと稱するを除くと云い、方に重罪を犯すなり。故に此れ過尤し。是れ尸羅ならず清淨ならざるが故に三昧不現前の攝なり。今犯戒と言うは總相にして犯相を知らざるを説く ¹¹⁰

智顛は、「戒において缺漏あり」の一文に出る「缺」とは、戒律に失があること、「漏」とは、（禪定に入り自ら悪を離れ戒体を得る）定共戒と（見道以上の聖者が得る）道共戒に失があることと解釈する。

吉蔵は、①小乗の究竟の行がないにもかかわらず小乗の究竟の行があると謂うこと、②未だ小乗の究竟の果（阿羅漢果）を得ていないのに小乗の究竟の果（阿羅漢果）があると謂い大乘の教法を受けないという2つの悪を防ぐことができないことを「戒において缺漏あり」と述べる。「缺」とは戒を破ること、「漏」とは信心を漏出すること、もしくは禪定を失うことであり、加えて、戒は堤塘のため、戒が缺漏すれば煩惱が出ると説明する。更にまた、五千人は、戒定慧の三学がないとも説明する。

基は「戒において缺漏あり」とは「戒を犯す」ことの説明であると述べる。「缺」とは戒を少し犯すこと、もしくは戒を壞すことであり、「漏」とは戒を多く犯すこと、もしくは「[知]見」を壞すこと、あるいは、煩惱が漏れることで正しい見解を自覚せず自らを高くすることと解釈する。

三名の注釈者はみな、「戒において缺漏あり」の一文は、五千人が戒を犯すことであると述べる。具体的には、智顛は、律儀・定共・道共という戒律に失がある者であると述べる。吉蔵

¹⁰⁹ 「於戒有缺漏者, 此明無大乘行也. 破戒為缺, 而失定水為漏. 前明無解故, 無慧命, 無戒定. 是故無行. 五千之徒, 具無三學. 又戒如天徳瓶. 瓶破又漏, 則無復戒也。」（『新纂大日本續藏經』続藏 27, 467c22-468a1）

¹¹⁰ 「經, 如是四衆等至於戒有缺漏. 贊曰, 下三頌頌罪根深重. 犯戒覆罪法障別故此犯戒也. 少犯為缺, 多犯為漏. 可毀責故. 壞戒名缺, 壞見名漏. 或煩惱漏起仍不見覺自恃高心. 戒中既云除増上慢自稱得聖, 方犯重罪. 故此尤過. 不是尸羅不清淨故三昧不現前攝. 今言犯戒總相而說不知犯相。」（T no. 1723, 34: 720c5-12）. 基は増上慢が自ら聖を得たと言っても、それは[波羅夷罪から]除くという戒に関する旨を記している。Cf. 荊谷 (1983, p. 78)、佐藤 (1972, pp. 90-92)、平川 (1993, pp.300-304)。

と基は、五千人は煩惱が漏れることも指摘しており、基はさらに「[知]見」を壊し見覚せず
に自らを高くすると述べる。

(4) 「護惜其瑕疵」の解釈	
智顛	道定等なきが故に内に悪覺を起す。玉の瑕を含むが如し。律儀なき故に、外に身口を動かす。玉の瑕を露すが如し。罪を覆い自ら得るが故に護惜と名づく。 ¹¹¹
吉藏	「護惜其瑕疵」とは、此れ疑を釋す爲の故に來る。疑って云く、既に行・解なく又た自から其過を見ず。佛は大慈心ありて何ぞ之に示さずして其をして席を離れしめたもうや、と。是の故に釋して云く、自ら過を見ず瑕疵を護り惜しむ、化すべからざるなり、と。玉の内の病を瑕と爲す。意地の解なくして解ありと謂うを喩う。玉の外の病を疵と爲す。身口の行なくして行ありと謂うを喩う。又た過去の罪根深重なるを瑕と爲す。現在に増上慢あるは疵の如しなり。又た内心に小を執して捨てざるを瑕と爲す。外に大を説くを聞きて受けざるを疵と爲す。短を覆うを護と爲す。非を愷むを惜と爲すなり。 ¹¹²
	護惜とは、既に行・解なく、他道を喜ばざるを「護」と爲し、自ら過を除かざるを爲「惜」と爲す。 ¹¹³
基	經、「護惜其瑕疵」至「佛威德故去」。贊に曰く、罪を覆うなり。玉の内に病あるを瑕と爲し、玉の外に疾あるを疵と爲す。犯戒も亦た爾なり。世の譏嫌は疵の如く、内に過を起すは瑕の如し。身語の過は疵の如く即ち缺なり。内心の過は瑕の如く即ち前の漏なり。性罪を犯すを瑕と名づけ、遮罪を犯すを疵と名づく。其の玉の外 の病は應に疵の字と爲すべし。今疵と爲すは法内の人に煩惱の病あるを玉に瑕があるが如く、喩と法を合して説く。疵とは病なるが故に護惜して陳べず。已に失を覆藏す。 ¹¹⁴

¹¹¹ 「無道定等故内起惡覺。如玉含瑕。無律儀故，外動身口。如玉露瑕。覆罪自得故名護惜。」（T no. 1718, 34: 54b10-12）

¹¹² 「護惜其瑕疵者，此爲釋疑故來。疑云，既無行解，又不自見其過。佛大慈心何不示之而令其離席。是故釋云，不自見過護惜瑕疵，不可化也。玉内之病爲瑕。喩意地無解謂有解。玉外病爲疵。喩身口無行謂有行。又過去罪根深重爲瑕。現在有増上慢如疵也。又内心執小不捨爲瑕。外聞説大不受爲疵。覆短爲護。愷非爲惜也。」（T no. 1721, 34:499b16-23）

¹¹³ 「護惜者，既無行解，不喜他道爲護，自不除過爲惜。」（『新纂大日本續藏經』27, 468a1）

¹¹⁴ 「經，護惜其瑕疵至佛威德故去。贊曰，覆罪也。玉内有病爲瑕，玉外有疾爲疵。犯戒亦爾。世譏嫌如疵，内起過如瑕。身語過如疵即缺也。内心過如瑕即前漏也。犯性罪名瑕，犯遮罪名疵。其玉外病應爲疵字。今爲疵者法内之人有煩惱病如玉有瑕，喩法合説。疵者病故護惜不陳。覆藏已失。」（T no. 1723, 34: 720c13-20）

智顛は、定共戒・道共戒がないために内に悪覚を起こすことが「瑕」であり、その様子を、玉が瑕を内に含んでいると喩える。さらに、律儀がないために〔内面の瑕を〕外に行動として表してしまうことを、玉が〔内に含む〕悪覚を外面に表すことと喩える。すなわち、戒律に失があるために内に悪覚を持ち、それを行動として表す有様を指して、罪を覆い、自ら〔その罪を〕保持するために「護り惜しむ」と解釈している。

吉蔵は、「瑕」とは、①意において理解しないのに理解したと謂うこと、②過去の罪根深重、ならびに、③心の内で小乗に執着して小乗を捨てないこと、でありこれらを玉の内の病と述べる。「疵」は①身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、②現在に増上慢であること、ならびに、③大乘の教法を聞くも受けないこと、でありこれらを玉の外の病であると述べる。五千人はこのような短所を覆い/他の道（『法華経』の教え）を喜ばず（護り）、それを手放さない/自ら過を除かない（惜しむ）のである。

基の解釈では、「瑕」は①内に過を起こすこと、②本質的に罪悪である悪行為を犯すこと、③「漏」（煩惱が漏れることで自覚せずに自らを高くする）であり、玉の内に病があることに喩える。さらに、「疵」の代わりに「玼」という字を用いて解釈し、「玼」は身口の過、すなわち「缺」（戒を壊すこと）であり、さらに、遮罪を起こす可能性のある行為を犯すことでもあり、玉の外に病があることに喩える。『妙法華』が「疵」の字を用いる理由に関して、〔仏〕法が適応される内面を持つ人が煩惱の病を持つ有様を、喩をもって説明すると述べる。加えて、「疵」は病であるために護り惜み、罪を覆い隠すと言う。

3名とも玉の内外という喩を用いて説明するが、吉蔵と基は、「瑕」と「疵」を玉の内外に区分する。内にある「瑕」とは智顛によると悪覚であり、吉蔵によると意において理解しないのに理解したと謂うこと、過去の罪根深重、小乗に執着して小乗を捨てないことなどを指し、要するに基が述べる様に、内に過を懐くことと言えよう。外に出る「疵」は、智顛によると身口の行いとして悪覚を外面に表すこと、吉蔵は身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、現在に増上慢であること、ならびに大乘の教法を聞くも受けないこと、基は戒を壊すこと、遮罪を犯すことと解釈しており、要するに、内面にある思いにより外面に行動として表すことと言えよう。五千人は以上のような内面に懐く思い、ならびに外面に表す行動（罪）を覆い隠し、それを手放さない者である。

(5) 「是小智已出」の解釈	
智顛	小智の者とは、學・無學の智を得ずして、世間の小智を得。妄りに有漏を謂て以て無漏と爲す。小の中の小ゆえに、小智と言うなり。 ¹¹⁵
吉蔵	未検
基	未検

智顛は、世間の小智を得ているが学・無学の智を得ておらず、有漏をもって無漏とするために、小智の者という解釈する。

吉蔵と基の解釈は未検である。

(6) 「衆中之糟糠, 佛威徳故去. 斯人尠福徳, 不堪受是法. 此衆無枝葉. 唯, 有諸貞實。」の解釈	
智顛	糟糠とは、無漏の禪定の潤い無きが故に糟の如し。理の慧なきが故に糠の如し。是の五千等は世間の禪あるは糟の如く、文字の解あるは糠の如し。文に封じて詮を失す。糠に米なきが如し。又、糟糠は其れ大機なきを譬う。枝葉は其れ好器に非ずを譬う。悉く用うるに任えず。故に須らく之を遣るべし。 ¹¹⁶
吉蔵	「衆中之糟糠」とは、此の文は疑を釋すの故に來る。此の五千人は佛法の中に入りて何の得る所ありや、と。是の故に釋して云く。五千人は中道の眞味を失い但だ斷常の糟を得たるのみ。三乗の名は米の外の糠の如し。一乗の理は糠の内の米の如し。但だ三乗の名を得て三乗の義を知らざる故に糠と云うなり。又た淨衆は用うるに堪えり。譬うれば酒米に同じ。罪人は用うるに堪えず。喩うれば糟糠の如しなり。「佛威徳故去」とは、注經に云く、風起こらば則ち塵沙は自ら飛ぶ。日出づれば則ち黑白は自ら別る、と。此は遣に非ずして而も遣を爲すを謂うなり。「斯人尠福徳」とは、上の長行に罪根あるを明かし、今の頌には其れ福なしと顯すなり。前の偈には其れ小を執するが故に去るを明かし、今は其れ大乘を受くるに堪えずと辨ず。「此衆無枝葉」とは、第二に淨衆を頌するなり。 ¹¹⁷

¹¹⁵ 「小智者, 不得學無學智, 而有世間小智. 妄謂有漏以爲無漏. 小中之小故, 言小智也。」 (T no. 1718, 34: 54b12-14)

¹¹⁶ 「糟糠者, 無無漏禪定潤故如糟. 無理慧故如糠. 是五千等有世間禪如糟, 有文字解如糠. 封文失詮. 如糠無米. 又, 糟糠譬其無大機. 枝葉譬其非好器. 悉不任用. 故須遣之。」 (T no. 1718, 34: 54b14-18)

¹¹⁷ 「衆中之糟糠者, 此文釋疑故來. 此五千人入佛法中何所得耶. 是故釋云. 五千人失中道眞味但得斷常之糟耳. 三乘之名如米外之糠. 一乘之理如糠內之米. 但得三乘之名不知三乘之義故云糠也. 又淨衆堪用. 譬同酒米. 罪人不堪用. 喩如糟糠也. 佛威徳故去者, 注經云, 風起則塵沙自飛. 日出則黑白自別. 此謂非遣而爲遣也. 斯人尠福徳者, 上長行明有罪根, 今頌顯其無福也. 前偈明其執小故去, 今辨其不堪受大乘. 此衆無枝葉者, 第二頌淨衆也。」 (T no. 1721, 34: 499b23-499c5)

	<p>「糟」食うに堪えざるは、去る衆の現在に因を行ずるに堪えざるを喩う。「糠」轉じて食と成るに堪えざるは、去る衆の未朱に果を得ざるを喩う。又た酒は是れ果、米を因と為す。去る衆の未未に佛果を得ず、現在に佛因あることなし。住する衆は此の二を具するなり。又た「糟」は教を喩、米は理を譬う。直往および迴小の人、三乗の教に因りて、一乗の理を得。糠に因りて米を得るが如し。五千の徒、三乗の言を守るは糠を得るが如し。一乗の理を失うは、米を得ざるが如し。二人は中道真味を得、性を養い神を陶するは、酒を得るが如し。五千の徒、斷常に封執するを喩わば「糟」を得るが如し。¹¹⁸</p>
基	<p>酒滓を糟と曰う。極めて沈濁するが故なり。米糲を糠と名づく。軽くして用なきが故なり。但だ小智ならず、法に背き自ら行ずるに、佛威は之を拂いて塵を避けて去らしむ。妙法を聞き誹謗して罪を増すを恐れ、彼に益なきが故に威し之れに逼りて其をして起去せしむるなり。經、「斯人尠福德」至「唯有諸眞實」。贊に曰く、法障なり。夙に匱法業を造りて法障身に在り、法を聞くに堪えざるが故なり。尠は少なり。鮮と尠は俱に得なり。¹¹⁹</p>

智顛の解釈では、増上慢とは、世間の禪定はあるが無漏の禪定がなく、教法を文字として理解するが真に理解する智慧がない（文字にとらわれるために仏が言わんとする義を失う）者であり、加えて、大乘の機根がないために糟糠に譬えられる。

次に吉蔵の解釈は、五千人は断常の教法（糟）を得るのみで中道の真味を失っていること、三乗の名を得るだけで義を知らないこと、罪人であることを指して「糟糠」と喩えるという。「斯人尠福德」の一文に関しては、五千人が大乘の教法を受けるに堪えられないことを示すと解釈している。また、『法華統略』では、「糟糠」に喩えられる五千人は現在の仏因と未来の仏果がないと述べる。

基は、「糟」とは酒滓のように極めて沈殿し、「糠」とは米糲のように軽くて用がないものと述べる。佛は、五千人が妙法を聞くことで誹謗し更に罪を重ねることを恐れ会座から去らせるのであり、彼等は、法障を持つため、法を聞くことに堪えられない者であるとされる。

「糟糠」に喩えられる五千人について、智顛は、①世間の禪定は得ているが無漏の禪定がな

¹¹⁸ 「糟不堪食，喻去眾現在不堪行因。糠不堪轉成食，喻去眾未朱不得果。又酒是果，米為因。去眾未未不得佛果，現在無有佛因。住眾具此二也。又糟喩於教，米譬於理。直往及迴小之人，因三乘之教，得一乘理。如因糠得米。五千之徒，守三乘之言如得糠。失一乘之理，如不得米。二人得中道真味，養性陶神，如得酒。五千之徒，封執斷常喩如得糟。」（『新纂大日本續藏經』27, 468a6-13）

¹¹⁹ 「酒滓曰糟。極沈濁故。米糲名糠。輕無用故。不但小智，背法自行，佛威拂之令避塵去。恐聞妙法誹謗增罪，於彼無益故威逼之令其起去。經，斯人尠福德至唯有諸眞實。贊曰，法障也。夙造匱法業法障在身，不堪聞法故。尠少也。鮮尠俱得。」（T no. 1723, 34: 720c20-26）

い者、② 教法を文字として理解するが真の理解をする智慧がない（文字にとらわれるために仏が言わんとする義を失う）者、さらに③ 大乘 [の教法] を受ける機根がない者と述べる。吉蔵は、① 断常の教法を得るのみで中道の真味を失っている者、② 現在の仏因と未来の仏果がない者、加えて③ 智顛の三番目の解釈に近いが、大乘の教法を受けるに堪えられない者であると解釈する。基は、大乘の教法を聞くと誹謗する者、さらに法障を持つ者であると述べる。

2.4.2.2 考察

偈頌の解釈から増上慢の特性をまとめると、智顛・吉蔵・基の解釈は下記のようになる。

- (1) 智顛の解釈に拠ると、①「上慢」、「我慢」、「不信」は四衆に通じるが、比丘・比丘尼は特に、[声聞の] 道を修め禅 [定] を得ているが、それを謬って聖果（阿羅漢果）であるという上慢を起こす者である。② 五千人は世間の小智と世間の禅定は得ているが、学・無学の智と無漏の禅定は得ておらず、有漏を以て無漏とする者である。彼らは教法を文字として理解するが真の理解をする智慧がなく、大乘の機根がない。③ 五千人は [五濁の] 障 [りがあること]、[小乘に固] 執 [すること]、[未だ得ざるを得たりと謂う] 慢 [を生じること] という三種の失により心が覆われ、そのような疵を隠し自らの徳を揚げ、省みない無慚の人である。④ 律儀・定共戒・道共戒において失があるために、内に悪覚を起こし、それを外面に出す。すなわち、罪を覆い自ら [その罪を] 保持する「護り惜しむ」者である。
- (2) 吉蔵の解釈によると、① 比丘・比丘尼は、四禅を得ているが、未だ増勝の法（四果）を得ていないのに増勝の法を得たと謂い、この思いを信じて自らを高く思う者である。また、彼らは増上慢であるために大乘の法を信じない。② 彼らは断常の教法（糟）を得るのみで中道の真味を失っており、三乗の名を得るだけで義を知らず、大乘の教法を受けるに堪えられない。加えてまた、「糟糠」に喩えられる五千人は現在の仏因と未来の仏果がない。③ 戒を破り信心が漏出し禅定を失っているために煩惱が出ており、彼等は三学がない。そのために小乗の究竟の行がないにもかかわらず小乗の究竟の行があると謂い、さらに、未だ小乗の究竟の果（阿羅漢果）を得ていないのに小乗究竟の果（阿羅漢果）があると謂い、大乘の教法を受けないという2つの悪を防ぐことができない。④ 意において理解しないのに理解したと謂うこと、過去の罪根深重、心の内で小乗に執着して小乗を捨てないこと、身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、現在に増上慢であること、ならびに大乘の教法を聞くも受けないという「瑕・疵」を持つ。彼らはこのような短所を覆い

他の道（『法華経』の教え）を喜ばず（護り）、それを手放さない/自ら過を除かない（惜しむ）者である。⑤ 五千人は文字にとらわれるという過失があり、自ら其の過を見ない愚人である。

- (3) 基の解釈によると、① 四衆はみな慢を起こすが、比丘・比丘尼は道諦を證することを主とし、少し得るにもかかわらず多く得ると謂い増上慢を起こす。② 妙法を聞くことで誹謗し更に罪を重ねる恐れのある者であり、彼等は法障が身にあるために法を聞くことに堪えられない。③ 戒を犯す、もしくは「[知] 見」を壊す、あるいは、煩惱が漏れることで正しい見解を自覚せず自らを高くする者である。戒には、増上慢が自ら聖を得たと言ったとしても、それは[妄語罪から] 除くとの説明がある点を述べる。④ 「瑕玼」の解釈を通して、内に過を起こす、本質的に罪悪である悪行為を犯す、「漏」（煩惱が漏れることで見覚えずに自らを高くする）、戒を壊すという身口の過、さらに、性罪を起こす可能性のある行為を犯す者といえる。[仏] 法が適応される内面を持つ人が煩惱の病を持つ有様であり、病であるために護り惜み、罪を覆い隠す行動をする者である。

次に以上の内容をまとめ、増上慢が懐く慢の内容、彼らが見ない「過」と護り惜しむ「瑕玼」について触れたい。

まず、増上慢が懐く慢の内容としては、智顛と吉蔵は、「比丘・比丘尼は四禪を得て四果（阿羅漢果、吉蔵は増勝の法と述べる）を得たと謂う」こと、基は「比丘・比丘尼は道諦を證することを主とし、少し得るにもかかわらず多く得ると謂う」と解釈する。なお、このような慢を懐く理由として、3名ともに戒律を犯していることを理由にあげ、吉蔵と基は煩惱が漏れることも理由に加えている。なお、基のみは、戒において増上慢が自ら聖を得たと言ったとしても、それは[妄語罪から] 除くという説明を出す。

次に、『妙法華』に出る「不自見其過」についての注釈を確認する。智顛は、[五濁の] 障[りがあること]、[小乘に固] 執[すること]、[未だ得ざるを得たりと謂う] 慢[を生じること] という三種の失により心が覆われ、そのような玼を隠し自らの徳を揚げ、省みない無慚の人と解釈する。吉蔵は、五千人には文字にとらわれる過失があり、自ら其の過を見ない愚人であると述べる。文字にとらわれるとは、吉蔵が「糟糠」を解釈する中で、増上慢は断常の教法（糟）を得るのみで中道の真味を失っており、三乗の名を得るだけで義を知らないと解釈するその内容のことであろう。なお、基『法華玄讚』には「不自見其過」の解釈を欠く。したがって智顛と吉蔵の解釈に拠ると、五千人が見ない「其の過」とは、小乗の教法（断常の教法）に執し、文字にとらわれることで義を知らず（中道の真味を失う）、自らそうした過失を省みない/見ない人と言えよう。なお、吉蔵は「不自見」の「見」を「知」と解釈している。

最後に「護惜其瑕疵」に出る「瑕疵」の内容に関して、3名の注釈内容を確認する。智顛は内に悪覚を起し、それを外面に出すことと述べる。吉蔵は、意において理解しないのに理解したと謂うこと、過去の罪根深重、心の内で小乗に執着して小乗を捨てないこと、身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、現在に増上慢であること、ならびに大乘の教法を聞くも受けないという過ちを持つことを挙げている。基は、内に過を起すこと、本質的に罪悪である悪行為を犯すこと、「漏」（煩惱が漏れることで見覚せずに自らを高くする）、戒を壊すという身口の過、さらに、性罪を起す可能性のある行為を犯すことと述べる。

以上、3名の解釈を総合すると、内面において小乗に固執し増上慢を懐くという過を生じ、それ故に大乘の教法を聞いても受けないという行動を外面に表すことと言えよう。この内容は先に見た「其過」の内容とも類似する。すなわち、五千人が自ら見ない「過」、ならびに、彼らが護り惜しむ「瑕疵」¹²⁰とは、小乗の教法に執着し文字にとらわれ増上慢を懐くことである。

2.4.2.3 「方便品」における増上慢の特徴

ここで、『法華経』が想定する阿羅漢と増上慢の違いを説明する箇所、「若我弟子，自謂阿羅漢辟支佛者，不聞不知諸佛如來但教化菩薩事，此非佛弟子，非阿羅漢，非辟支佛。又，舍利弗，是諸比丘比丘尼，自謂已得阿羅漢，是最後身，究竟涅槃，便不復志求阿耨多羅三藐三菩提，當知，此輩皆是増上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢，若不信此法，無有是處。除佛滅度後現前無佛。所以者何。佛滅度後，如是等經受持讀誦解義者，是人難得。若遇餘佛，於此法中便得決了。」（T no. 262, 9: 7b27-7c07）に出る増上慢に関する智顛・吉蔵・基の解釈を順次、確認する（漢文ならびに書下し文の中の数字、下線、および段落分けは筆者が便宜的に付したものである）。

2.4.2.3.1 智顛の解釈

『法華文句』に出る智顛の解釈は以下の通りである。

從若我弟子自謂下，是第四揀偽敦眞。若佛弟子自能信解。若不信解非眞弟子，亦非羅漢。敦遍時衆令信受解。就文爲二。① 初揀眞偽。② 二開除釋疑。

¹²⁰ 「瑕」は「あやまち、過失」、「疵」は「缺點、あやまち」の意味を持つ。Cf. 『諸橋大漢和』7, p. 945, p. 1161.

① 揀又爲二。(①-1) 初若不聞不知非眞弟子，(①-2) 次聞不信受成増上慢。

(①-1) 如世弟子，隨順師法繼嗣傳燈。若不聞不知，則無法可順。何謂弟子。如來昔，說五濁開三。汝，隨順得涅槃，得聞，得知名爲弟子。今，五濁既除，爲汝說一。何意，不聞不知。不聞者即不聞教一。不知者即不知行一。非眞即非理一。非弟子即非人一也。

(①-2) 次又舍利下，第二明不信成増上慢者，此，敦其使信。何者汝自謂是後身，身尚無量實非後身。汝自謂究竟，猶餘二百由旬實非究竟。未得謂得，豈非増上慢耶。

眞羅漢者，濁除根利，知非究竟，信眞是法，未是後身不起上慢。知非究竟。信於究竟，即信理一。無増上慢即成行一。信則信教。是爲教一。是佛弟子則人一也。

②除佛滅下，第二開除釋疑者，(②-1) 先開除。除佛滅後，不成増上慢。次所以者何佛滅下，明好人難得，深經難解，亦不成上慢。若佛在世正說此經，不信不受，非眞羅漢成増上慢。若佛滅後方得羅漢者，偏執權經，不信圓法，聽許非増上慢。又佛雖入滅，此經尚在不信不受，應是上慢耶。即得開除。佛滅後，雖有此經，解其文義者，此人難遇。致令羅漢不信不解，亦聽許非増上慢。

(②-2) 次釋疑。若佛滅後解經人難遇，得羅漢者，即永入涅槃耶。即釋云，是人雖生滅度之想，捨命已後便生界外有餘之國，值遇餘佛得聞此經，即便決了。釋論第九十三釋畢定品云，羅漢受先世身身必應滅。住在何處而具足佛道。答，羅漢三界漏因緣盡，更不復生三界。出三界外，有淨佛土無煩惱名。於是國土佛所聞法華經具足佛道。即引法華云，有羅漢若不聞法華自謂得滅度，我於餘國爲說是事，汝皆作佛。論既引經爲證。今釋經還將論解。

南岳師云，餘佛者四依也。羅漢遇之聞經決了。又羅漢修念佛定見十方佛，爲說此經便得決了。又凡夫行人，苦到懺悔見十方佛，爲說亦得決了。

瑤師云，實羅漢必自知法華志求於大。利根則自知。中下根須聞而知。故言聞知。何容於佛滅後不聞法華，或聞而不信，遇餘佛方解耶。末法凡夫猶尚能信，況聖人乎。除佛滅後者指凡夫也。

有人言，凡夫未證法相。所見不明，執心不固，所以易信。羅漢證法相，所見分明執心牢固。忽聞異說未便信受。故云不信。其義必然。故身子云，將非魔作佛惱亂我心耶。若從此義，指羅漢不指凡夫云云。此直異解。不用此義也¹²¹。

(「從若我弟子自謂」の下は、是れ第四に偽を揀び眞を敦す。若し佛弟子ならば自ら能く信解せん。若し信解せずんば眞の弟子に非ず、亦た羅漢に非ず。時衆を敦逼して信受し解せしむ。文に就いて二と爲す。① 初めに眞偽を揀ぶ。② 二に開除して疑を釋す。

① 揀も又た二と爲す。(①-1) 初めに若し聞かず知らずんば眞の弟子に非ず、(①-2) 次に聞きて信受せざるは増上慢と成る。

¹²¹ T no. 1718, 34 : 53c1-54a23.

(①-1) 世の弟子、師の法に隨順し繼嗣いで燈を傳うるが如し。若し聞かず知らずんば、則ち法として順すべきなし。何をか弟子と謂う。如來は昔、五濁に三を開するを説きたもう。汝、隨順して涅槃を得、聞くことを得、知ることを得れば名づけて弟子と爲す。今、五濁既に除こり、汝が爲に一を説く。何の意ぞ、「不聞不知」ならん。「不聞」とは即ち教の一なるを聞かず。「不知」とは即ち行の一なるを知らざる。眞に非ずとは即ち理の一に非ず。弟子に非ずとは即ち人の一に非ざるなり。

(①-2) 「次、又舍利」の下、第二に信ぜざるは増上慢と成ることを明かすとは、此は、其を敦び信ぜしむ。何となれば汝は自らは是れ後身なりと謂うも、身は尚お無量にして實に後身に非ず。汝は自ら究竟と謂うも、猶お二百由旬を餘し實に究竟に非ず。未だ得えざるを得たりと謂う、豈に増上慢に非ずや。

眞に羅漢とは、濁除こり根利にして、究竟に非ずと知り、是の法は眞なりと信じ、未だ是れ後身ならざれば上慢を起こさず。究竟に非ずと知る。究竟を信ずるは、即ち理の一なるを信ず。増上慢なきは即ち行の一を成ず。信は則ち教を信ず。是を教の一と爲す。是れ佛弟子なるは則ち人の一なり。

②「除佛滅」の下、第二に開除して疑を釋すとは、(②-1) 先に開除す。佛の滅後、増上慢と成らざるを除く。次に「所以者何佛滅」の下、好人は得難く、深經は解し難く、亦た上慢と成らざることを明かす。若し佛世に在りて正しく此の經を説くに、信せず受けずんば、眞に羅漢に非ずして増上慢と成る。若し佛滅後に方さに羅漢を得る者、偏えに權經を執し、圓法を信ぜずんば、増上慢に非ずと聽許す。又た佛入滅すと雖も、此の經は尚在るに信せず受けずんば、應に是れ上慢なるべきや。即ち開除することを得。佛の滅度の後に、此經ありと雖も、其の文義を解す者、此の人には遇い難し。羅漢をして信せず解せざらしむるを致すも、亦た増上慢に非ずと聽許す。

(②-2) 次に疑を釋す。若し佛の滅後に經を解する人に遇い難くんば、羅漢を得る者は、即ち永く涅槃に入らんや。即ち釋して云く、是の人は滅度の想を生ずと雖も、命を捨てて已後は便ち界外有餘の國に生じ、餘佛に値遇し此經を聞くことを得、即便ち決了す、と。『釋論』第九十三「釋畢定品」に云く、羅漢は先世の身を受くれば身は必ず應に滅すべし。何處に住して佛道を具足するや。答う、羅漢は三界の漏の因縁盡きて、更に復た三界に生ぜず。三界の外に出て、淨佛土ありて煩惱の名なし。是の國土の佛の所において『法華經』を聞き佛道を具足す、と。即ち『法華』を引きて云く、羅漢ありて若し法華を聞かずして自ら滅度を得と謂わば、我れ餘國において爲に是の事を説き、汝皆作佛せん、と。論に既に經を引きて證と爲す。今は經を釋するに還て論の解を將う。

南岳師の云く、餘佛とは四依なり。羅漢は之に遇て經を聞きて決了す。又た羅漢は念佛定

を修し十方の佛を見たてまつり、爲に此の經を説きて便ち決了することを得。又た凡夫の行人は、苦到に懺悔して十方の佛を見たてまつり、爲に説きて亦た決了を得。

瑤師の云く、實に羅漢は必ず自ら法華を知り大を志求す。利根は則ち自ら知る。中下根は須らく聞きて知るべし。故に聞知と言う。何ぞ佛の滅後において法華を聞かず、或は聞くも信ぜず、餘佛に遇いたてまつりて方に解すべけんや。末法の凡夫も猶尚を能く信ず、況んや聖人をや。佛の滅後を除くとは凡夫を指すなり、と。有人の言く、凡夫は未だ法相を證せず。所見明かならず、執心は固からず、所以に信じ易し。羅漢は法相を證し、所見は分明にして執心は牢固なり。忽ち異説を聞きて未だ便ち信受せず。故に信ぜずと云う。其の義必らず然り。故に身子の云く、將に魔の作佛して我が心を惱亂するに非ずや、と。若し此の義に従わば、羅漢を指して凡夫を指さず云云。此れ直だ異解なるのみ。此の義を用いずなり。)

まず、智顛の解釈における仏弟子の定義を確認すると、仏の教法を聞き、そして知り、涅槃を得るから弟子というのである。一乗の教えを聞かず、一乗の行を知らない者は一乗の人（佛弟子）ではない。

次に智顛は、比丘・比丘尼が述べる「是れは最後身である」「究竟の涅槃である」という発言について解釈し、増上慢とはどのような者かを述べている。つまり、彼らは「是れは最後身である」というが、実は最後身ではなく、「究竟の涅槃」と言うが、[化城喩品の喩である]二百由旬をまだ残しているために、実は究竟ではない。したがって「未だ得ざるを得たりと謂う」増上慢である。真に羅漢とは、五濁が除かれ利根であり、究竟[の涅槃]（理一）を得ていないと知り、仏の説く一乗の教え（教一）は真実であると信じ、自分は最後身でないとして増上慢を起ささない（行一）。「理一」を信じ、「教一」を信じ、「行一」を成す人、すなわち佛弟子は「人一」であるとまとめる。

最後に、仏の在世と滅度の後における増上慢の解釈について智顛の見解を確認する。もし仏の在世に、仏が『法華經』を説くも信じることができず、受持しないならば、その人は真に阿羅漢ではなく増上慢である。しかしながら、仏は、仏滅度に阿羅漢となった者が仮の教えを信じ、圓滿なる一乗の教えを信じなくても増上慢ではないと許される。その理由とは、一乗の教えの義を理解する人に会うことは難しいからである。

智顛は「教一」¹²²「行一」¹²³「理一」¹²⁴「人一」¹²⁵という天台教学に依り、仏弟子、ならびに増上慢を解釈していることが分かる。智顛の解釈に拠ると、増上慢とは、「未だ得ざるを得たりと謂う」者であり、加えて、世間の相は常住であること（理一）と一乗の教え（教一）を信じず、仏は方便の教えを捨て但だ無上道を説くということ（行一）を成さず、菩薩であること（人一）に合致しない者であるといえよう。

2.4.2.3.2 吉蔵の解釈

『法華義疏』における吉蔵の解釈を以下に記す。

若我弟子自謂者，第三示得失門。上來明道理唯一，次明五濁方便有三。權實有無皎然可信，如其不信即是惡人。故次明得失。然能被之教不出實之與權。稟教之人亦唯有得之與失。斯事攝一化事竟矣。

就文爲二。前明失次明得。得失各有二人，合成四人也。

失中二人者，（失－①）第一是未得小乘謂已得小乘，不信法華。（失－②）第二，已得小乘果，而小乘果非究竟，自謂究竟不追求大。亦名爲失。（失－①）初是凡失，（失－②）後是聖失。此二總攝一切失事盡也。

（失－①）若我弟子自謂阿羅漢等者，上明一乘是眞實三乘是方便。今失此二意。蓋明執小是實迷三是權也。此明未得小乘究竟果謂得小乘究竟果。此叙小乘中之失。即五千之徒是也。

（失－②）不聞不知諸佛如來但教化菩薩者，此文辨不知同歸一乘即迷於一乘眞實也。是叙大

¹²² 「十方佛土中唯有一乘法無二亦無三，教一。」(T no. 1931, 46: 775b25) 教一とは、「方便品」に出る「十方佛土中，唯有一乘法，無二亦無三」(T no. 262, 9: 8a17-18.)の一文に拠り、「十方の仏土の中には唯一乗の法のみありて、二もなくまた三もない」を指す。

¹²³ 「正直捨方便但説無上道，行一。」(T no. 1931, 46: 775b26) 行一とは、「方便品」に出る「正直捨方便，但説無上道。」(T no. 262, 9: 10a19)の一文に拠り、「正直に方便を捨て、但だ無上道を説く」ことである。

¹²⁴ 「世間相常住，理一。」(T no. 1931, 46: 775b27) 理一とは、「方便品」に出る「世間相常住」(T no. 262, 9: 9b10.)の一文に拠り、「世間の相は常住である」ことである。

¹²⁵ 「但爲菩薩不爲小乘，人一。」(T no. 1931, 46: 775b26-7) 人一とは、「但爲菩薩。不爲小乘」(T no. 1931, 46: 775b26-27)の一文に拠り、「ただ菩薩のためにして、小乗のためにせず」を指す。Cf. 「信解品」には「但爲菩薩〔演其實事〕而不爲我。」(T no. 262, 9: 18b20-21)とある。

乘中之失也。不聞者不聞教也。不知者不知理也。

上五千人，不聞廣說一乘真實故，云不聞不知也。此非佛弟子下，前兩句牒謂情，今此文判得失也。（失一①）五千之徒未得小乘究竟謂得究竟，保執小乘則小乘不攝。（失一②）而不聞不知但教化菩薩，此人迷大則大乘不攝。故非佛弟子。以非佛弟子，明非內凡夫。下明非七聖人也。

（失一②）又舍利弗下第二明聖失也。亦有三句。初句明已得羅漢自保究竟，執三乘教不識權也。不進求下，第二明不識一乘真實也。當知此輩下，第三句判得失也。羅漢望大乘，實非究竟自謂究竟。自謂究竟故不進求佛道。當知，亦是增上慢人也。

問，今明增上慢。與前增上慢有何異。答，上已釋竟。今更明異者，初人有二種增上慢。（失一①）一者未得小究竟謂得小究竟。是小乘增上慢。（失一②）二者保此妄情復不進求大乘。謂大乘增上慢也。後人已得小果。但小果望大乘，非究竟謂究竟。但有大中增上慢，無小中慢也。問，何以得知有兩人耶。答，後文明人異於前人。是故知二人異也。（失一①）又前文判凡失。非佛弟子非阿羅漢辟支佛。故知，是凡夫失也。（失一②）後文判失，直云是增上慢也。其既是羅漢，不得非佛弟子及非羅漢。但自謂究竟不志求佛故，與其增上慢名也。

問，此的是何物人耶。答，（失一②）通說一切自謂究竟羅漢，而正主三根聲聞是也。故舍利弗云，爾時心自謂得至於滅度。乃至迦葉中根亦作此執，現信解品及化城品也。

問，凡夫人未得羅漢自謂究竟，聖人實得羅漢亦自謂究竟。兩人何異。答，兩人未聞法華，自謂略同。若聞法華，（失一①）則五千凡夫不生信受，（失一②）聖人則生信。故文云，若實得羅漢若不信此法無有是處也。

所以者何下，第二舉得釋失。即明得也。亦有二人。初明佛在世羅漢為得，次明佛滅度後羅漢為得。初佛在世羅漢得者凡有二義。（得一①=失一①）一者斥凡，（得一①=失一②）二者擊聖。

（失一①）言斥凡者，明若實得羅漢，聞一乘必信受。則知，第一人不信法華非羅漢也。故是舉得以斥初失。

（失一②）言擊聖者，明實得羅漢必信此法，如其不信便非羅漢。即用此文擊第二實得羅漢人，令捨小果進求大道也。

除佛滅度後現前無佛者，（得一②）第二明佛滅度後羅漢得。前亦是聞法華羅漢得，今是不聞法華羅漢得也。此文為釋疑故來。疑者云，叵有羅漢亦不聞不知但教化菩薩事以不。又有阿羅漢不信權實以不。因前二文生此二疑也。是故釋云，佛在世羅漢聞法華必信。唯除滅度後現前無佛。此之羅漢不信一乘。故法華論云，亦為釋疑。疑云，從佛聞法起謗心，云何佛不成不堪說法人。為斷此疑，除佛滅度後現前無佛故起謗耳。所以者何。釋上羅漢不信一乘義也。以佛滅度後法華經難聞難解，阿羅漢作佛此人難得。智度論云，法華明羅漢作佛義，最甚深。羅漢作佛唯佛能解，論者正可論其餘事。龍樹尚云不解。故知，唯佛能解。所以此人難得。以不值人法兩緣故，

此羅漢不信一乘。涅槃現病品云、如佛所説、阿羅漢一切皆當至涅槃。如此甚深佛行處、凡夫下愚不能知。故羅漢作佛最爲難解。唯佛知之故稱難得也。若遇餘佛於此法中便得決了者、此文亦爲釋疑故來。疑者云、此羅漢既不得值法華及解義人。何時當信一乘耶。是故釋云、此羅漢生三界外淨土中、更遇餘佛聞法華經方得決了。決了者、知三一有無及權實也。問、佛滅度後、羅漢不值解義人直聞法華經、亦得信解不。答、此事難明。設使遇經不值解義人者、亦不得了了分明解也。是故文云、若遇餘佛方乃決了。¹²⁶

（「若我弟子自謂」とは、第三に得失の門を示す。上來に道理は唯一なりと明かし、次に五濁なれば方便して三ありと明かせり。權實・有無皎然として信ずべく、如し其れ信ぜざんば即ち是れ惡人なり。故に次に得失を明かす。然も能彼の教は實と權とを出でず。之の教を稟くる人は亦た唯だ得と失とあり。斯の事に一化の事を攝し竟る。

文に就いて二と爲す。前に失を明かし次に得を明かす。得失に各二人あり、合して四人を成ずるなり。

失の中の二人とは、（失－①）第一には是れ未だ小乗を得ざるに已に小乗を得たりと謂い、『法華』を信ぜず。（失－②）第二には、已に小乗の果を得れども、小乗の果は究竟に非ざるに、自ら究竟と謂い大を追求せず。亦た名づけて失と爲す。（失－①）初は是れ凡の失、（失－②）後は是れ聖の失なり。此の二に總じて一切の失の事を攝し盡すなり。

（失－①）「若我弟子自謂阿羅漢等」とは、上には一乘は是れ眞實にして三乘は是れ方便なりと明かす。今此の二意を失す。蓋し小は是れ實なりと執して三は是れ權なるに迷うことを明かすなり。此は未だ小乗究竟の果を得ざるに小乗究竟の果を得たりと謂うを明かす。此は小乗の中の失を叙ぶ。即ち五千の徒是れなり。

（失－②）「不聞不知諸佛如來但教化菩薩」とは、此の文は同じく一乘に歸するを知らずして即ち一乘眞實に迷うことを辨ずるなり。是れ大乘の中の失を叙するなり。「不聞」とは教を聞かざるなり。「不知」とは理を知らざるなり。

上の五千人、廣く一乘眞實を説くを聞かざるが故に、「不聞不知」と云うなり。「此非佛弟子」の下は、前の兩句は情を牒すを謂い、今此の文は得失を判ずるなり。（失－①）五千の徒は未だ小乗究竟を得ざるに究竟を得たりと謂い、小乗を保執せば則ち小乗に攝せず。（失－②）但だ菩薩のみを教化したもうことを聞かず知らずして、此の人大に迷わば則ち大乘に攝せず。故に佛弟子に非ず。佛弟子に非ざるを以て、内凡夫に非ずと明かす。下は七聖人に非ずと明かすなり。

（失－②）「又舍利弗」の下は、第二に聖の失を明かすなり。亦た三句あり。初の句は已

¹²⁶ T no. 1721, 34: 497c16-498c12.

に羅漢を得て自ら究竟と保ち、三乗の教に執して權を知らざることを明かすなり。「不進求」の下は、第二に一乘眞實を識らざることを明かすなり。「當知此輩」の下は、第三に得失を判ざる句なり。羅漢の大乘に望むれば、實に究竟に非ざるに自らは究竟と謂えり。自ら究竟と謂えるが故に佛道を進求せず。當に知るべし、亦た是れも増上慢の人なり。問う、今増上慢を明かす。前の増上慢と何の異あるや。答う、上に已に釋し竟れり。今更に異を明かさば、初の人に二種の増上慢あり。(失-①)一には未だ小の究竟を得ざるに小の究竟を得たりと謂う。是れ小乗の増上慢なり。(失-②)二には此の妄情を保ちて復た大乘を進求せず。謂く大乘の増上慢なり。後の人は已に小果を得。但だ小果を大乘に望むれば、究竟に非ざれども究竟と謂う。但だ大の中の増上慢のみ有りて、小の中の慢なきなり。

問う、何を以てか兩人ありと知ることを得るや。答う、後の文に明かす人は前の人に異れり。是の故に二人は異ると知るなり。(失-①)又た前の文は凡の失を判ず。佛弟子に非ず、阿羅漢・辟支佛に非ず。故に知んぬ、是れ凡夫の失なり。(失-②)後の文に失を判ずるは、直に是れ増上慢なりと云うなり。其れ既に是れ羅漢ならば、佛弟子に非ず及び羅漢に非ずということを得ず。但だ自ら究竟と謂いて佛を志求せざるが故に、其に増上慢の名を與うるのみなり。

問う、此れ的に是れ何物の人や。答う、(失-②)通じて説かば一切の自ら究竟の羅漢と謂えるものなれども、而も正しく主たるは是れ三根の聲聞なり。故に舍利弗の云く、爾の時心に自ら滅度に至ることを得たりと謂いき、と。乃至、迦葉の中根なるも亦た此の執を作せること、「信解品」および「化城品」に現ぜるなり。

問う、凡夫の人は未だ羅漢を得ざるに自ら究竟なりと謂い、聖人は實に羅漢を得て亦た自ら究竟なりと謂う。兩人何んが異なるや。答う、兩人未だ『法華』を聞かざれば、自ら謂うこと略して同じ。若し『法華』を聞かば、(失-①)則ち五千の凡夫は信受を生せず、(失-②)聖人は則ち信を生ず。故に文に云く、「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」と。

「所以者何」の下は、第二に得を擧げ失を釋す。即ち得を明かすなり。亦た二人あり。初めに佛の在世に羅漢を得と爲すを明かし、次に佛滅度の後に羅漢を得と爲すを明かす。初の佛在世に羅漢を得とは凡そ二義あり。(得-①=失-①)一には凡を斥し、(得-①=失-②)二には聖を撃す。

(失-①)凡を斥すと言うは、若し實に羅漢を得ば、一乘を聞いて必ず信受すと明かす。則ち知んぬ、第一人は法華を信ぜざれば羅漢に非ざるなり。故に是れ得を擧げ以て初の失を斥す。

(失一②) 聖を撃すと言うは、實に羅漢を得ば必ず此の法を信じ、如し其れ信ぜざれば便ち羅漢に非ずと明かす。即ち此の文を用いて第二の實に羅漢を得たる人を撃し、小果を捨て大道を進求せしむるなり。

「除佛滅度後現前無佛」とは、(得一②) 第二に佛滅度の後の羅漢の得を明かす。前も亦た是れ『法華』を聞く羅漢の得なりしが、今は是れ『法華』を聞かざる羅漢の得なり。此の文は疑を釋すための故に來る。疑う者の云わく、叵に羅漢にして亦た但だ菩薩のみを教化したもうことを聞かず知らざる事ありや以不や。又た阿羅漢にして權實を信ぜざるものありや以不や。前の二文に因りて此の二疑を生ずるなり。是の故に釋して云く、佛在世の羅漢は『法華』を聞き必ず信ず。唯だ滅度の後に現前に佛なからんをば除く。此の羅漢は一乘を信ぜず。故に『法華論』に云く、亦た疑を釋せんが爲なり。「疑って云く、佛に従って法を聞き謗心を起こさば、云何ぞ佛は説法に堪えざる人を成ざらん。此の疑を斷ぜんが爲に、佛滅度の後に現前に佛きが故に謗を起すを除くのみ」と。所以は何ん。上の羅漢の一乘の義を信ぜざるを釋すなり。佛滅度の後には『法華經』を聞き難く解し難きを以て、阿羅漢の作佛すること此の人は得難し。『智度論』に云く、「法華に羅漢の作佛の義を明かすこと、最も甚深なり。羅漢の作佛は唯だ佛のみ能く解したまはば、論者は正しく其餘の事を論ずべし。」と。龍樹すら尚お解せずと云う。故に知んぬ、唯だ佛のみ能く解したまうということ。所以に此の人得難し。人法の兩縁に値わざるを以ての故に、此の羅漢は一乘を信ぜず。『涅槃』「現病品」に云く、「佛の所説の如くんば、阿羅漢は一切皆當に涅槃に至るべし。此の如く甚深なる佛の行處は、凡夫・下愚は知ることを能わず。」と。故に羅漢の作佛は最も難解と爲す。唯だ佛のみ之を知りたもうが故に得難しと稱するなり。「若遇餘佛於此法中便得決了」とは、此の文も亦た疑を釋せんが爲の故に來る。疑う者の云く、此の羅漢は既に『法華』と及び義を解す人にとに値うことを得ず。何れの時に當に一乘を信ずるや、と。是の故に釋して云く、此の羅漢は三界の外の淨土の中に生じ、更に餘佛に遇い『法華經』を聞き方に決了を得、と。決了とは、三一の有無及び權實とを知るなり。問う、佛滅度の後、羅漢は義を解す人に値わずして直に『法華經』を聞くも、亦た信解を得るや不や。答う、此の事明し難し。設使え經に遇うも義を解す人に値わずんば、亦た了了分明に解すること得わざるなり。是の故に文に云く、「若し餘佛に遇わば方に乃ち決了す」と。))

吉蔵は、「得」と「失」をそれぞれ2種ずつに分けて解釈する。ここでは、増上慢の特性が説明される2つの「失」について確認する。

第一の「失」とは、「未だ小乗究竟の果を得ざるに小乗究竟の果を得たりと謂い、『法華

經』を信じない」ことである。すなわち、この「失」とは、小乗は真実の教えであると執着し、三乗の教えは仮の教えにもかかわらず迷う「小乗の中の失」といえる。この「小乗の中の失」は五千起去した四衆の「失」であり、かれらは「小乗の増上慢」である。さらにまた、この「失」は「凡夫の失」でもある。「凡夫の失」と考える理由が2点記されている。第一の理由とは、彼らが小乗の究竟を得ていないのに究竟を得たということから、これは小乗にも摂していないこととなる。第二の理由とは、かれらが、[仏は]但だ菩薩を教化されることを聞かずに知らず、大乘[の教え]にも迷うことから、大乘にも摂していないこととなる¹²⁷。この2点から考えて、彼らが仏弟子でないこと、すなわち、内凡夫でないこととなる。更にまた、「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」の一文からは、『法華經』を信じない彼らが阿羅漢でないことも分かる。

第二の「失」とは、「すでに小乗の果（阿羅漢果）を得ているが、これは究竟でないのに自ら究竟といい、大[乗]を追求しない」ことである。要するに、彼らは三乗の教法に執着しており、それが仮の教えであることを知らず、加えて、一乘真実（理）を知らず一乗の教えを聞かないのである。阿羅漢は大乘に比較して究竟でないにもかかわらず、自らを究竟であるというために仏道を求めないことから、かれらも増上慢であるが、この「失」は「大乘の中の失」である。小乗の果を得ているために「小乗の増上慢」ではないが、大乘を求めないことから「大乘の増上慢」といえる。さらにまた、この「失」は「聖の失」である。彼らはすでに阿羅漢であるために、「仏弟子に非ず、阿羅漢に非ず」ということには合致せず、但だ自ら究竟と言ひ佛[道]を志求しないために増上慢なのである。そのような増上慢とは、三根の声聞である舍利弗や迦葉を指し、彼等もこうした「失」を持つのである。しかしながら舍利弗や迦葉は『法華經』の教えを聞き、信を生じた者たちである。このように聖人は信を生じる者であり、すなわち「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」の一文とも一致する¹²⁸。

吉蔵は、増上慢を「小乗の増上慢」と「大乘の増上慢」の2種に分け、その内の「小乗の増上慢」が五千起去した四衆であると述べる。吉蔵の解釈の中で注目すべきは、三根の声聞、すなわち、舍利弗や迦葉を「大乘の増上慢」と分類することである。自ら究竟の阿羅漢であると

¹²⁷ 吉蔵『法華玄論』では「五千多是變化人、第三人臨命終時生邪見謗無聖道。此人非但謗小亦謗大。前二人但謗大不謗小。據此義則前二人爲勝後人爲劣也。又第三人但墮一劫無間。」（T no. 1720, 34: 422a9-13）とある。五千起去した者たちが小乗ならびに大乘も謗するという同様の解釈がみられる。

¹²⁸ 吉蔵『法華玄論』にも「初云若實得羅漢不信此法無有是處。若不信、此増上慢人。非阿羅漢。此明羅漢必信一乘。」（T no. 1720, 34: 405c7-9）とあり、同様の解釈が見られる。

言う者の中で、『法華經』を聞き、信を生ずることができるか否かが「小乗の増上慢」と「大乘の増上慢」の分岐点なのである。その根拠とは、『妙法華』に出る「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」の一文を指す。

2.4.2.3.3 基の解釈

最後に基『法華玄贊』に出る解釈を確認する。

經, 舍利弗至非辟支佛. 贊曰. 自下釋第二疑. 第二疑云, 如來既不爲増上慢人說者, 云何知彼是増上慢. 文中有三. (疑②-1) 初顯非眞二乘聖相, (疑②-2) 次顯増上慢者相, (疑②-3) 後結成二眞聖相.

(疑②-1) 此初文也. 聲聞辟支眞聖趣寂, 若遇佛者多不愚法. 其不定姓可迴心者, 不問近遠必能聞知佛化菩薩事故, 名自謂是眞二聖而得遇佛, 都不聞知化菩薩事, 非佛聖弟子, 亦非眞二聖.

(疑②-2) 經, 又舍利弗至皆是増上慢人. 贊曰. 此顯増上慢者相. 凡夫得第四禪未離三界染, 自謂眞二聖是阿羅漢最後之身究竟涅槃, 不求正覺, 心不信向. 是増上慢.

(疑②-3) 經, 所以者何至無有是處. 贊曰. 此結成二聖相. 但是眞聖而遇我者趣寂, 多是不愚法人. 雖不能行, 聞之亦信. 不定種姓理信脩覺故眞二聖. 若不信者必無有是處. 彼非道理故. 其趣寂者不能證入. 初猶未信名損驚怖, 返道疑生後必信之成不愚法. 故此結云不信一乘無有是處.

(疑③-1) 經, 除佛滅後現前無佛. 贊曰. 自下釋第三疑, 云何堪說. 謂有疑云. 從佛聞法而起謗心. 云何如來不成不堪說法人. 此意, 說言, 亦有趣寂眞實二聖, 而愚法者聞法起謗, 亦不聞知但化菩薩事. 即是世尊不能得化. 何故佛不成不堪說法人, 既成不堪說法人. 翻結之曰. 如何世尊可堪爲衆生說法而稱種智也. 故佛答言, 除佛滅度後現前無佛. 雖眞趣寂而遇我者, 多不愚法, 皆, 定聞知化菩薩事. 若不遇我而趣寂者, 有愚於法即不能知但化菩薩. 此文有三. (疑③-1) 初標, (疑③-2) 次釋, (疑③-3) 後結成. 此初也.

(疑③-2) 經, 所以者何至是人難得. 贊曰. 此釋前標. 我滅度後以無良緣善方便誘, 諸趣寂中多愚於法, 於此等經受持解義, 乃爲難得. 不解意故. 故我滅後有眞二聖, 不聞不知但化菩薩.

(疑③-3) 經, 若遇餘佛至便得決了. 贊曰. 此結成前義. 此愚法者, 若我滅後更遇餘佛方便說化, 於此法中便得決了. 故亦能知但化菩薩. 不逢佛者即有不知. 是故我今非不堪說等. 故瑜

伽云、若已建立阿頼耶識、依無色界、亦入滅定。信有藏識不斷絶故。或復此疑非疑趣寂。即疑増上慢。既不化得、云何世尊不成不堪説法人。故此釋、言我在必化得、除我滅後等。¹²⁹

（經「舍利弗至非辟支佛。」）贊に曰く。下よりは第二に疑を釋す。第二に疑って云く、如來は既に増上慢の人の爲には説かずとは、云何が彼は是れ増上慢なるを知るや、と。文の中に三あり。（疑②-1）初に眞に二乗の聖に非ざる相を顯し、（疑②-2）次に増上慢の者の相を顯し、（疑②-3）後に二の眞に聖の相を結成す。

（疑②-1）此には初の文なり。聲聞・辟支の眞聖にして趣寂なるものは、若し佛に遇う者は多く不愚法なり。其の不定姓の迴心すべき者は、近遠を問わずして必らず能く佛の菩薩を化する事を聞知するが故に、自ら是れ眞に二聖と謂いて佛に遇うを得ても、都べて菩薩を化する事を聞知せざるは、佛の聖弟子に非ず、亦た眞に二聖に非ずと名づく。

（疑②-2）經「又舍利弗至皆是増上慢人」。贊に曰く。此には増上慢なる者の相を顯すなり。凡夫は第四禪を得て未だ三界の染を離れざるに、自ら眞に二聖是れ阿羅漢の最後身にして究竟の涅槃なりと謂いて、正覺を求めず、心を信に向けず。是れ増上慢なり。

（疑②-3）經「所以者何至無有是處」。贊に曰く。此には二聖の相を結成す。但だ是れ眞に聖にして我に遇う者は趣寂にして、多く是れ不愚法の人なり。行ずる能はずと雖も、之を聞き亦た信ず。不定種姓は理を信じ脩し覺るが故に眞に二聖なり。若し信ぜざれば必ず是れ處あることなし。彼は道理に非ざるが故なり。其の趣寂なる者は證入すること能はず。初に猶お未だ信ぜざるは損の驚怖と名づけ、道に返りて疑を生ずるも後に必ず之を信じ不愚法を成ず。故に此に結びて一乘を信ぜざれば是れ處あることなしと云う。

（疑③-1）經「除佛滅後現前無佛」。贊に曰く。下よりは第三に疑って云く、何が説くに堪うるを釋す。有るは疑を謂いて云く。佛より法を聞き謗心を起こす。云何が如來は説法に堪えざる人を成ぜざるや、と。此の意、説きて言はば、亦た趣寂なる眞實に二聖あるも、法に愚かなる者は法を聞いて謗を起こし、亦た但だ菩薩を化する事を聞知せず。即ち是れ世尊の化するを得る能はざるなり。何が故に佛は説法に堪えざる人を成ぜざるに、既に説法に堪えざる人を成ずるや。翻じて之れを結びて曰く。如何が世尊は衆生の爲に法を説きて種智を稱うるに堪うべきなり、と。故に佛答えて言く、佛滅度の後現前に佛なからんをば除く、と。眞に趣寂なりと雖も我に遇わば、多く不愚法にして、皆、定んで菩薩を化するの事を聞知す。若し我に遇わずして趣寂なる者は、法に愚かなるありて即ち但だ菩薩を化するを知る事能はざるなり。此の文に三あり。（疑③-1）初に標し、（疑③-2）次に釋し、（疑③-3）後に結成す。此れ初なり。

¹²⁹ T no. 1723, 34: 719c13-720b1.

(疑③-2) 經「所以者何至是人難得」。賛に曰く。此には前の標を釋す。我が滅度の後は良縁にして善方便の誘いなきを以て、諸の趣寂の中には多く法に愚かにして、此等の經を受持し義を解するもの、乃ち得難しと爲す。意を解せずが故なり。故に我が滅後には眞に二聖に、但だ菩薩を化するを聞かず知らざるあり。

(疑③-3) 經「若遇餘佛至便得決了」。賛に曰く。此れは前の義を結成す。此の法に愚かなる者は、若し我が滅後に更に餘佛の方便して化を説くに遇わば、此の法の中において便ち決了を得。故に亦た能く但だ菩薩のみを化するを知る。佛に逢わざれば即ち知らざること有らん。是の故に我れ今説くに堪えざるに非ず等なり。故に『瑜伽』に云く、「若し已に阿頼耶識を建立せば、無色界に抛りて、亦た滅定に入る」¹³⁰と。藏識ありて斷絶せざるを信ずる故なり。或は復た此に疑うは趣寂を疑うに非ず。即ち増上慢を疑うなり。既に化得ならざるに、云何が世尊は説法に堪えざる人を成ぜざるや。故に此に釋して、我れ在らば必ず化得なり、我が滅後を除く等と言う、と。)

増上慢であると分かる理由を説明するに当たり、基は、① 眞に二乗の聖でない特徴についての説明、② 増上慢の特徴についての説明、③ 二乗にして眞に聖の特徴をまとめる、という三段構造を用いている。

まず、趣寂の声聞・辟支仏で、もしも仏に会う者は「愚法（自らを究竟と思ひこんだ段階）から」不愚法（不愚於法）である。そのとき、彼らは不定性の廻心すべき者であり、師弟の近遠を問わず、必ず仏が菩薩を教化することを聞き知るのである。したがって、眞に二乗の聖であると言う者で、佛に会い佛が菩薩を教化することを聞かず知らない者は、仏の聖弟子／眞に二乗の聖でないとまとめる。

次に、増上慢の特徴については、第四禪を得ている凡夫であるにもかかわらず、自分は眞に二乗の聖であり、阿羅漢であり、最後身にして究竟の涅槃と言ひ、正しい覺りを求めず、心を信に向けない者であると説明する。

二乗の聖の特徴をまとめると、「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」の一文であると述べる。趣寂の二乗の聖は初め信じずに「損の驚怖」¹³¹を生

¹³⁰ 『瑜伽師地論』の該当箇所は未検。

¹³¹ 「一者損驚怖。謂、小乘衆生如所聞聲取以爲實、謗無大乘起如是心。如來說言阿羅漢果究竟涅槃。我畢竟取如是涅槃。是故羅漢不入涅槃如是驚怖。」(T no. 1519, 26: 6c10-13) 要するに、如来は阿羅漢果が究竟の涅槃と説いたため、自分たちは阿羅漢果を目指し涅槃を得たと思っていたが、自分たち(羅漢)が涅槃に入っていないことに驚怖することである。Cf. 2.1.1.

じ疑うが、後に佛に会うものは教えを信じ不愚法を成し、不愚法の人となる。彼らは修行ができなくても聞いて信じるのである。そうした彼らは不定種姓であり、真理を信じ修行し覚るために、彼等は真に二乗の聖である。以上のことから、一乗を信じないという、そのような道理はないこととなる。

最後に、「若遇餘佛至便得決了。」の一文に関する基の解釈を確認したい。基は再三にわたり、愚法の者が「仏が菩薩のみを教化すること」を知るためには、仏に会うことが必要である旨を述べる。しかしながら、佛の滅度の後は良縁にして善方便の誘いがない。そのために「若し實に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば是れ處あることなしなり」とはいえども、真に二乗の聖でありながら「仏が菩薩のみを教化すること」を聞かず、知らない者がいるのである。佛滅度の後でも、他の仏の教化に会えば「仏が但だ菩薩のみを化すること」を知ることができる。

ここで注目すべきは、趣寂の二乗であっても、仏に会う者は教えを信じ不愚法の人となり、そのとき彼らは不定種姓である。つまり、趣寂＝二乗の聖にも、法華經の観点からは、不定種姓（信、處）と定姓（不信、不處）の者がおり、前者は証入でき、後者の場合は、証入できない、ということになろうか¹³²。

2.5 小結

漢訳『法華經』の読みは Kashgar 写本にほぼ対応することから、Kashgar 写本の読みの内容を明確にするため、『法華經』注釈者たちが「方便品」五千起去に出る「増上慢」の特徴をどのように理解したかについて、長行箇所ならびに第 39 偈の内容を検討した。くわえて、五千人が去ったのちに、世尊が会座に残った者たちに増上慢の特徴を解説する「舍利弗，若我弟子，自謂阿羅漢辟支佛者，不聞不知諸佛如來但教化菩薩事，此非佛弟子，非阿羅漢，非辟支佛。又，舍利弗，是諸比丘比丘尼，自謂已得阿羅漢，是最後身，究竟涅槃，便不復志求阿耨多羅三藐三菩提，當知，此輩皆是増上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢，若不信此法，無有是處。」に関しても検討した。

注釈家ごとの解釈、並びに特筆すべき点をまとめると以下の通りである。「方便品」で五千起去する増上慢とは、

① 世親によれば、仏が自分たちを「誑かす」と驚怖し、加えて仏説を信じない者たちである。

¹³² 趣寂声聞が不愚法の人となる解釈に関しては、橘川 (2002) (2013) を参照。『法華玄讚』における声聞観に関しては水谷 (2016) を参照。

- ② 道生は、世尊が方便として説いてきた三乗の別に固執し阿羅漢を目指している者たちであり、彼等は世尊が菩薩のみを教化すること（=教化の対象となる人々はみな阿耨多羅三藐三菩提を目指す菩薩であること）を理解していないために、阿耨多羅三藐三菩提を目指さない、すなわち「過失の人」を指す。
- ③ 法雲は、盡智と無生智を得ていないのに得たと謂い、有餘涅槃と無餘涅槃を證していないのに證したと謂う者たちであると解釈する。したがって、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというのは、伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢〔果〕である。
- ④ 智顛・吉蔵・基の3名ともに、「道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、滅諦を證していないのに滅諦を證したと謂う」者、「比丘・比丘尼は四禪を得て四果（阿羅漢果）を得たと謂う」者と解釈する。増上慢が有する失に関しては、智顛と吉蔵が、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けないことと解釈する。39偈の「不自見其過」に関する注釈は、智顛が、〔五濁の〕障〔りがあること〕、〔小乗に固〕執〔すること〕、さらに〔未だ得ざるを得たりと謂う〕慢〔を生じること〕という三種の失により心が覆われ、そのような疵を隠し自らの徳を揚げ、省みない無慚の人、吉蔵は五千人には文字にとらわれる過失があり、自ら其の過を見ない愚人であると述べる。基『法華玄讚』には「不自見其過」の解釈を欠くため、智顛と吉蔵の解釈に拠ると、五千人が見ない「其の過」とは、小乗の教法（断常の教法）に執し、文字にとらわれることで義を知らず（中道の真味を失う）、自らそうした過失を省みず/見ず、増上慢を懐くことであると言えよう。
- ⑤ 「護惜其瑕疵」に出る「瑕疵」とは、吉蔵の解釈によると、心の内で小乗に執着し小乗を捨てないこと、身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、現在に増上慢であることを指す。
- ⑥ 増上慢の特徴に関する解釈は、智顛によると、究竟の涅槃（理一）を得ていないと知らず、増上慢を起し（行一を成さず）、一乘法（教一）を信じないという、すなわち、〔菩薩である〕仏弟子（人一）でない者を指す。吉蔵は、「小乗の増上慢」と「大乘の増上慢」の2種に分け、前者が五千起去する四衆であり、小乗の究竟を得ていないのに究竟を得たということから、小乗にも摂しておらず、さらにまた、〔仏は〕但だ菩薩を教化されることを聞かず知らず、大乘〔の教え〕にも迷うことから、大乘にも摂していない、すなわち仏弟子でもなく、内凡夫でもないと解釈する。なお、舍利弗などの三根の声聞は「大乘の増上慢」に分類される。基は、第四禪を得ている凡夫であるにもかかわらず、自分は真に二〔乗〕の聖にして、阿羅漢であり、最後身であり、究竟の涅槃〔を得ている〕といい、正

しい覚りを求めず、心を信に向けない者と解釈する。なお、趣寂声聞の中で増上慢でない者と増上慢の違いは、仏に遇い、『法華経』を信じることができるか否かであると言う。

- ⑦ 吉蔵は「不自見」の「見」を「知」と解釈する。
- ⑧ 長行と偈頌の関係に関して、道生は、「方便品」で五千起去が述べられる長行箇所と偈頌は対応関係にあると説明する。
- ⑨ 法雲は、五千起去の説明として長行箇所に出る「説此語時、會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等、即從座起禮佛而退。（略）世尊默然而不制止。」ならびに、偈頌の「比丘比丘尼、有懷増上慢。優婆塞我慢、優婆夷不信。如是四衆等、其數有五千。（略）斯人尠福德、不堪受是法。」は、阿難が釈尊在世当時の出来事を記したものと解釈する。
- ⑩ 既に知られているように、基の『法華玄讚』には吉蔵『法華義疏』の影響がみられる。

道生の解釈である、「過失の人」（阿耨多羅三藐三菩提を目指さない者）、ならびに法雲の解釈である、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというものは、伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢〔果〕であるという考えが、智顛・吉蔵・基にも引き継がれている。すなわち、「方便品」で釈尊の会座から退出する増上慢とは、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない者と言える。興味深いことに、法雲は、五千起去とは、釈尊在世当時の出来事を記したものであると解釈している。なお、道生が述べるように長行と偈頌が対応関係にあることを中国註釈家が認めているとすれば、道生も含めて誰一人として、長行（「有如此失」）と偈頌（「不自見其過」）の読みの不一致を指摘していない。羅什訳「有如此」は、サンスクリット語の *jñātvā* とは異なる表記であり、注釈家にとっては、長行と偈頌の内容に不一致があるとは考えにくいのであろうか。

3章 アビダルマ論書における三種菩提の解釈

第2章で明らかとなったように、羅什訳『妙法華』の読みである「不自見其過」に従い注釈した中国註釈家の解釈によると、増上慢とは、「未だ道諦（盡智・無生智）を得ていないのに得たと謂い、滅諦（有余涅槃・無余涅槃）を證していないのに證したと謂う」もしくは、「四禪を得て、四果（阿羅漢果）を得たと謂う」者を指すのであろう。すなわち、「方便品」で釈尊の会座から退出する増上慢とは、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない者である。

ところで、三乗に関して有部が示す伝統的理解は、声聞の覚りと仏の覚りを明確に分け、声聞が目指す覚り（阿羅漢果）は仏の覚りとは別であるとし、声聞は仏乗を志す必要がないという伝統があった。平川(1980)は、「大乘仏教で言う声聞乗とは説一切有部を指していたと考えてよいようである。」¹と記す。横超(1969)も、事実において自ら声聞乗を志す者があったかという点に関して、「三乗の差別を固執し、自ら阿羅漢となることを志す仏教の一派があった。それは説一切有部と名づけられる小乗の有力な一教団であったのである。」²と説明する。藤田(1969)は「『法華経』の主張する一乗は、まさしくこのような部派仏教、歴史的に言えば、恐らく説一切有部系の部派教団における三乗観を批判するところに、基盤を置いて説かれたものである。」³と述べる。

すなわち、『法華経』に説かれる一乗説が、説一切有部系の部派教団における三乗観を批判するところに基盤をおいて説かれていることは以上の点からも明らかである。このことは、「五千起去」の後、世尊が会座に残った者たちに対して、「舍利弗よ、私はただ一つの乗り物に関して、諸々の衆生に法を説く。すなわちこれは仏乗である。舍利弗よ、いかなる第二、あるいは第三の乗り物も存在しないのである。」⁴と語る内容からも確認できよう。

ところで、「五千起去」した増上慢に対して、「しかしまた一方、舍利弗よ、比丘、あるいは比丘尼の誰であれ、[自らを]阿羅漢であると考え、阿耨多羅三藐三菩提への誓願を持たず、『私は仏乗から絶たれている』と言ひ、『私の身体としての最後の涅槃はこのようなもの

¹ 平川(1980, p. 168).

² 横超(1969, p. 33).

³ 藤田(1969, pp. 388-389).

⁴ KN (p. 40, 13-15): *ekam evāhaṃ śāriputra yānam ārabhya sattvānāṃ dharmam deśayāmi yad idaṃ buddhayānam | na kiṃcīc chāriputra dviṭīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānam samvidyate |*

だ』と言うだろう。舍利弗よ、彼を増上慢であると知りなさい。」⁵と世尊が述べる内容からは、増上慢が「仏乗」 (*buddhayāna*) を知りながらもそれを自らの乗り物 (道) とせず、仏果である阿耨多羅三藐三菩提を求めない人々であるとわかる。加えて、世尊が増上慢のこうした考えを批判していることもみてとれる。

上記に挙げた増上慢の考えに関しては、藤田 (1969) が、出家者の目的とした解脱涅槃は声聞と仏の間で区別はないはずだが、「教化する者」である仏陀と、「仏陀の後から解脱を得る弟子」である声聞とでは何らかの差別を認めざるを得ず、この考えは部派仏教において特有の教義を形成し、その結果として声聞乗と仏乗との間の一線は越えがたいものとなり、声聞乗に進む弟子は阿羅漢果を得られても、仏乗に進み仏果は得られないという理解に至った⁶、と述べる点と共通するであろう。

以上の内容から、仏乗を知らながら仏果である阿耨多羅三藐三菩提を求めず「方便品」内で世尊から批判の対象となった増上慢とは、『法華経』が批判の対象とした説一切有部に代表される伝統教団の教理に従い、声聞としての理想である阿羅漢を目指し (あるいは阿羅漢であると自認し)、仏乗の究極である阿耨多羅三藐三菩提を目指さない人々を指すといえるだろう。そしてこのような増上慢は、『法華経』が推奨する一乗を聞かず会座から去るのである。

声聞乗と仏乗の間に明確な相違がある点に関しては、すでに、藤田 (1969)、木村 (1969)、西 (1975)、河村 (1975)、平川 (1989) (1991) が、『阿毘達磨大毘婆沙論』などを用いて、仏陀と声聞・独覚との相違について検討している⁷。

⁵ KN (p. 43,11-13): *api tu khalu punaḥ sārīputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vārhattvaṃ pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau praṇidhānam aparigṛhyocchinno 'smi buddhayānād iti vaded etāvan me samucchrayasya paścimakaṃ parinirvāṇaṃ vaded ābhimānikaṃ taṃ sārīputra prajānīyāḥ* / Cf. Kashgar ms. (folio 51b6- 52a3): *api tu khalu punaś sāradvatīputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vā arhatvaṃ me prāptam iti prajānīyād anuttarāyai samyaksaṃbodhāyai praṇidhānaṃ na pratigṛhṇīyā nistīrṇāśma iti vācam tāṣeyā <ni>śchandikā smeti buddhayāne na brūyāt etāvantaṃ me samucchrayaṃ paścimakaṃ etad evam eva parinirvāṇaṃ iti manyeya · adhimānika tvaṃ sāradvatīputra taṃ bhikṣur vā bhikṣuṇī vā saṃjāneyāsi ·*

⁶ 藤田 (1969, pp. 372-376).

⁷ 木村 (1969, pp. 111-133) は仏身観、河村 (1975, pp. 432-437) は仏身論を論ずる観点に立ち、平川 (1989, pp. 361-374) は大乘仏教の三乗思想にアビダルマ仏教の「三種菩提」が影響している点を明らかにすることを、平川 (1991) は西 (1975) を受けて説一切有部の菩薩論に関して検討することを目的としている。西 (1975, pp. 125-164) は『阿毘達磨大毘婆沙論』における三乗思想を詳細に検討

本章では、以上の先行研究をふまえ、『法華経』の一乗思想が批判の対象とする増上慢が、一乗の教説を聞かずに会座から去る理由を考えるため、以下の2点を検討する。

- ①『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下、『婆沙論』と略す）における声聞菩提、ならびに仏菩提の差異
- ②『阿毘達磨俱舍論』（以下、『俱舍論』と略す）における仏と声聞の差異

以上の検討を通して、阿毘達磨論書にみられる三種菩提、特に仏乗と声聞乗の相違に関して明確にすることを目的とする。

3.1 『婆沙論』における声聞菩提、ならびに仏菩提の検討

『婆沙論』（玄奘訳）には、声聞菩提、ならびに仏菩提に関する記述が巻14、31、39、48、55、66、82、83、96、127、131、および178の総計12巻に出る（巻131に出る内容は巻55と同様である）。以下では、『婆沙論』にみられる声聞菩提と仏菩提の記述内容を確認し、毘婆沙師が声聞と仏の菩提をどのように認識しているかを明らかにする。

している。しかしながらその結論は、「決して、説一切有部の教義が、声聞の阿羅漢となるのを最上の理想としていたのではなく、又、必ずしも二乗道をのみ勧めていないことを示すものと思う」と述べる。この点に関して平川(1991, p. 466)は「西博士が『婆沙論』の三乗説を詳しく研究せられ、有部に、仏陀の証悟を声聞や独覚の証悟から区別し、仏陀の証悟を高く見る説があることを明らかにせられた点は、学界にたいする大きな貢献であろう」と述べる。

3.1.1 名句文身（「多名身」⁸）を理解する際の三種の覚慧に関して

『発智論』に「多名身」の説明が出るが⁹、その議論がなされる理由に関して、『婆沙論』巻14では様々な説が挙げられる¹⁰。その説の中に三種菩提に関する記述がみられる。

「有説。爲欲建立三種菩提増上縁故。謂。若以上品覺慧覺名句文身。名佛菩提。若以中品覺慧覺名句文身。名獨覺菩。若以下品覺慧覺名句文身。名聲聞菩提。」

(T no. 1545, 27: 70a13-17)¹¹

有るが説く。「三種菩提の増上縁を建立せんと欲するが爲の故なり。謂く。若し上品の覺慧を以て名句文身を覺せば、佛菩提と名づく。若し中品の覺慧を以て名句文身を覺せば、獨覺菩提と名づく。若し下品の覺慧を以て名句文身を覺せば、聲聞菩提と名づく。」

以上の内容をまとめると、毘婆沙師は、名句文身という法を理解するための増上縁である覺慧¹²のレベルには上・中・下の違いがあり、その違いにより仏菩提・獨覺菩提・聲聞菩提という、得られる菩提に違いが生じると考えていることが分かる。

⁸ 名身とは2つの名の集まりをいい、多名身とは多くの名の集まりをいう。「問、名身者是何義。答、是二名聚集義。是故一名不名名身。問、多名身は何義。答、是多名聚集義。如一象二象不名多象身、要、衆多象名多象身。馬等亦爾。」(T no. 1545, 27: 71a3-6)

⁹ 『発智論』「云何多名身。答。謂。多名號。異語増語想等想假施設、是謂多名身。」(T no. 1544, 26: 920b15-16)

¹⁰ 「云何多名身。乃至廣説。問、何故作此論。答、是作論者意欲爾故。乃至廣説。」(T no. 1545, 27: 69c23-24)

¹¹ 『婆沙論』巻9に見られる巻14との対応箇所は以下の通りである。「復、有説者、以覺知名句味等法故、有三種菩提差別。其事云何。答曰。若増上慧覺知名等法、是名爲佛。若以中慧、名辟支佛。若以下慧、名曰聲聞。」(T no. 1546, 28: 57a8-11) (復た、「有るが説く」とは、名句味(=名句文)などの法を覺知するを以ての故に、三種菩提に差別あり。其の事いかん(云何)。答えて曰く。若し増上慧を[以て]名などの法を覺知せば、是れを名づけて佛と爲す。若し中慧を以てせば、辟支佛と名づく。若し下慧を以てせば、名づけて聲聞と曰う。)

¹² 注11に挙げた『婆沙論』の対応箇所に出る「名句味などの法を覺知するを以ての故に、三種菩提に差別あり。」とは、すなわち、「[菩提を得るにあたり] 名句味などの法を覺知する[際の慧に差別ある]を以ての故に、三種菩提に差別あり」と読むことができよう。これを参考に巻14の

すなわち、仏と二乗の覚慧の差異、ならびに三乗それぞれの覚慧により得られる菩提に関しても、三種の明確な違いを立てていることが分かる。

3.1.2 三乗の種子と三乗の菩提涅槃の関係、ならびに「仏と阿羅漢の解脱が異なる」旨の解釈

巻31では、仏の十八不共法の1つである「大悲」について説明する箇所、¹「三乗菩提涅槃」の語が出る。その内容とは、以下の通りである。

「復次、授諸有情増上義利故名大悲。謂、教衆生斷三惡行、修三妙行、種植尊貴富樂種子、感得尊貴大富樂果、形色美妙衆所樂見、膚體細軟光明清淨、或爲輪王、或作帝釋、或爲魔主、或作梵王、展轉乃至、或生有頂、或復、種植三乘種子、引得三乘菩提涅槃。如是皆、由大悲威力。」（T no. 1545, 27: 159b22-29）

復た次に、諸の有情に増上の義利を授くるが故に大悲と名づく。謂く、衆生に三惡行を斷じ、三妙行を修し、尊貴富樂の種子を種植せば、尊貴大富樂の果を感得し、形色美妙にして衆に樂見せられ、膚體細軟にして光明清淨となり、或は輪王と爲り、或は帝釋と作り、或は魔主と爲り、或は梵王と作り、展轉して乃至、或は有頂に生じ、或は復た、三乗種子を種植して、三乗菩提涅槃を引得せしめん。是の如きは皆、大悲の威力に由るなり。

諸々の有情に増上の義利を授けるために「大悲」という。例えば、三乗の種子を植え三乗の菩提涅槃を得させることは、大悲の威力によるものである。これらの内容から、毘婆沙師が、三乗の種子とそれに伴う三乗の菩提涅槃の関係を考えていることが分かる。

巻31では、經に「佛と阿羅漢の解脱は異なる」とある点に関して、各々の有情が同一の擇滅を証得するのか、あるいは異なる擇滅を証得するのかという問題が議論される。この議論に関して毘婆沙師は最終的に、有漏法の数だけ擇滅の数もあり、その1つ1つの有漏法について、有情たちは皆、四聖諦を考察（擇 *pratisamkhyā*）し、すなわちその特殊な智力（慧差別 *prajñāviśeṣa*）によって離繫（有漏法から離れること）が起こり、共に同一の擇滅の体（離繫

『婆沙論』の内容を考えた際、「三種菩提の〔差別とは、名句文身を覚慧する〕増上縁〔に差別ある〕を建立せんと欲するが爲の故なり」と理解することができるため、ここに出る「増上縁」とは「覚慧」を指すといえよう。

¹³**visamyoga*) を証得するとまとめる¹⁴。要するに、有漏法の1つ1つに関して離繫があり、最終的な離繫果としての解脱/涅槃 (=擇滅無為) は同一であるという理解であろうか。

ここで注目すべきは、経に、「如来と阿羅漢の解脱は異ならない」と出る、この内容について、2つの解釈が出される点である。その内容を以下に記す。

「問、契經所說復、云何通。如說。如來解脱與餘阿羅漢等解脱、無異。答、三乘身中解脱雖異、而善常同故、說無異。復次、此言、顯示一相續中有三乘道、同證解脱。謂、望他身所證解脱、雖各有異、而一身中有三乘性、同證解脱。隨依何乘引起聖道、皆、能證得此涅槃故。」 (T no. 1545, 27: 162b22-28) ¹⁵

問う、契經¹⁶の所説を復た、云何が通ぜんや。説くが如し。「如来の解脱と餘の阿羅漢等の解脱と、異なること無し。」と。答う、三乘身中の解脱は異なると雖も、善と常なるこ

¹³ 「問、已知擇滅離繫爲體。」 (T no. 1545, 27: 161c11)

¹⁴ 「有餘師說。諸有情類證擇滅時、各各別證。(略) 問、契經所說復云何通。如說、如來解脱與餘阿羅漢等解脱無異。(略) 應作是說。諸有情類普於一一有漏法中、皆共證得一擇滅體。前、說擇滅隨所繫事多少量故、由此、前說於理爲善。」 (T no. 1545, 27: 162b9-162c2) . Cf. 『俱舍論』 「擇滅即以離繫爲性。諸有漏法遠離繫縛、證得解脱名、爲擇滅。擇謂簡擇。即慧差別。各別簡擇四聖諦故、擇力所得滅名、爲擇滅。」 (T no. 1558, 29: 1c15-18)

¹⁵ 『阿毘曇毘婆沙論』 卷17の対応箇所は以下の通りである。「如来解脱、羅漢解脱。此經云何通者、以俱是常是善故。復有說者、以在一身中決定俱有故。所以者何。一切衆生、盡有三種菩提性。所謂佛辟支佛聲聞菩提。若從佛道去、亦證此法。若從辟支佛聲聞道去、亦證此法。是故言無差別。」 (T no. 1546, 28: 122c12-17)

¹⁶ 「契經」とは、『雜阿含經』 75 (T no. 99, 2: 19b21-c11)、*Saṃyutta-nikāya Sambuddho* (22-58, vol. III, pp. 65-66) を指す旨が『国訳一切經 毗曇部 (8)』 p. 399 に記されている。なお、『雜阿含經』 75 は、世尊が「比丘、如来應等正覺阿羅漢慧解脱有何差別 (T no. 99, 2: 19b28-29).」と質問し、最終的に世尊は、「如来應等正覺、未曾聞法、能自覺法、通達無上菩提、於未來世、開覺聲聞、而爲說法。謂、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八道。比丘、是名如来應等正覺。未得而得、未利而利、知道分別、道說道通道、復能成就諸聲聞、教授教誡。如是說正順、欣樂善法。是名如来羅漢差別。」 (T no. 99, 2: 19c3-c10) と答える。したがってこの經の趣旨は、如来と慧解脱した阿羅漢の類似点を述べた後、両者の差別を明らかにすることであろう。なお、*Saṃyutta-nikāya Sambuddho* にも同様の内容が記されている (*ko viseso ko adhippāyoso kiṃ nānākaraṇaṃ Tathāgatassa arahato sammāsambuddhassa paññāvimattena bhikkhunā ti ||...anuppannassa maggassa uppādetā asaṅjātassa maggassa saṅjānetā*

と同じが故に、異なること無しと説く。復た次に、此の言は、一相續中に三乗道ありて、同じく解脱を證することを顯示す。謂く、他身所證の解脱に望むれば、各異ありと雖も、一身中に三乗の性ありて、同じく解脱を證す。何の乘に隨依して聖道を引起するも、皆、能く此の涅槃を證得するが故なり。

以上の内容をまとめれば以下の2点に集約できる。

- ① 三乗それぞれが得る解脱は異なるが、その解脱が善と常である観点からは同じであるために、如来と阿羅漢の解脱は異なるない。
- ② 一相續（＝一身）中に三乗の道（＝性）があり、他の人が実際に得た解脱と比べた際は、それぞれが証得する解脱に相違はあるが、各自に三乗の性質があり、それら三乗のいずれの道によって聖道を行うにせよ、同じ一身中において証得される解脱（＝涅槃）という点では一たとえそれが仏乗の解脱であれ、阿羅漢等の解脱であれ一差異はない。

最終的な離繫果としての解脱/涅槃は同一であるという理解の中で、仏と阿羅漢の解脱が、解脱に至る道の相違、ならびに得られる解脱の相違を認めながらも、得られる解脱が善であり常住であるという点、あるいは自らの〔一身〕中に解脱（涅槃）を証得するという点では他と比較しても変わらないと考える人々がいることを示すといえよう¹⁷。

anakkhātassa maggassa akkhātā maggaññū maggavidū maggakovido || Maggānugā ca bhikkhave etarahi sāvaka viharanti pacchāsamannāgatā || Saṃyutta-nikāya, III, p.66, 4-6, 15-19)

¹⁷ Cf. 木村 (1969, pp. 112-113) は、「仏陀も羅漢も共に解脱者たる点において同一であるというについては各派一致する。...ただその異なるところは解脱に至るまでの道行、したがって解脱後における力用についてである。」と述べ、しかし例外として化地部の主張を記載する。原始經典において声聞と仏が達した解脱涅槃に区別がないことを説く教説について、藤田 (1969, pp. 373-374) は Udāna (p. 56) と Vinaya II (p. 239) などを挙げる。Li (2019, p. 322): among different schools, the Mahīśāsakas are alleged to have favored the equalization of the Buddha and his disciples, while schools such as the Dharmaguputaka and Sarvāstivāda held equivocal attitudes. *ibid.* pp. 23-49. 『異部宗輪論』には「説一切有部」の教義説明の中に、「佛と二乗の解脱は異ならず。三乗の聖道に各差別あり。（佛與二乗解脱無異。三乗聖道各有差別。T no. 2031, 49: 16b26-27）」と、「化地部」の教義説明の中に、「佛と二乗は皆、同一道同一解脱なり。（佛與二乗皆, 同一道同一解脱。T no. 2031, 49: 17a13）」と、「法藏部」の教義説明の中に、「佛と二乗の解脱は一と雖も、聖道は異なれり。

3.1.3 結跏趺坐にする検討

卷39では、世尊が、「苦行を修することは無義である」¹⁸と述べる理由を解説した後に、結跏趺坐の機能についての解説がなされる。すなわち、『発智論』に「結跏趺坐し、端身正願にして、對面の念に住す。」¹⁹の論が出る理由とは、『中阿含』に出る内容²⁰を分別するためであると述べ、上記の一文の中の「結跏趺坐」の効能を説明する²¹。この「結跏趺坐」という威儀の特性を説明する中で、「仏が昔菩提樹下において結跏趺坐し、二の魔軍を破す。謂く、自在天と及び諸の煩惱となり。」²²とあることから、ここに出る結跏趺坐とは、仏が菩提樹下において成道した際の威儀を想定していると思われる。

結跏趺坐の特性を示す中で仏菩提と二乗菩提の違いにも触れるが、その箇所は以下の通りである。

「復次、唯依此威儀、證得無上佛菩提故。謂、依餘威儀亦能證得二乘菩提、不能證得佛菩提故。」（T no. 1545, 27: 204b17-20）

（佛與二乗解脱雖一、而聖道異。T no. 2031, 49: 17a25）」と出る。なお、『妙法華』「方便品」には「今者世尊、何故慇懃稱歎方便、而作是言。佛所得法甚深難解。有所言說意趣難知、一切聲聞辟支佛所不能及。佛說一解脱義、我等亦得此法到於涅槃。而今不知是義所趣。（T no. 262, 9: 6b2-6）」とある。すなわち、『法華經』の会座にいる四衆は、解脱は一つであるという認識のもとに自分たちも涅槃に至ったが、今（『法華經』「方便品」の会座において）自分達（声聞・辟支佛）が得た解脱は佛が得た解脱と異なると言われ、その意味が理解できないという疑念を心に抱くのである。したがって、『法華經』の観点からは、佛と声聞の得る解脱涅槃は異なると分かる。

¹⁸ 「何故、世尊作如是說。修餘苦行無義俱耶。答、彼行、趣死、近死、至死、非如是苦行能超越死故。（略）尊者世友作如是說。如是苦行、能令衆生墮在生死、恒、受諸界諸趣諸生諸處衆苦故、說修彼與無義俱。」（T no. 1545, 27: 204a12-26）

¹⁹ 「結跏趺坐、端身正願、住對面念。」（T no. 1544, 26: 926c2-3）

²⁰ 「比丘、當學獨住遠離。在無事處、或至樹下空安靖處山巖石室露地穰積、或至林中、或在塚間、彼已在無事處、或至樹下空安靖處、敷尼師壇、結跏趺坐、正身正願反念不向。」（T no. 26, 1: 725b15-19）

²¹ 「又世尊說、結加趺坐、端身正願、住對面念。乃至廣說。問、何故作此論。答、爲欲分別契經義故。（略）由如是等種種因緣、是故、但說結如趺坐。」（T no. 1545, 27: 204a26-204b27）

²² 「謂、佛昔於菩提樹下、結加趺坐破二魔軍。謂、自在天及諸煩惱。」（T no. 1545, 27: 204b20-22）

復た次に、唯だ此の威儀に依るのみにして、無上佛菩提を證得するが故なり。謂く、餘の威儀に依りて亦た能く二乗菩提を證得するも、佛菩提を證得すること能はざるが故なり。

要するに、無上佛菩提を證得するには、苦行を捨て、結跏趺坐するのみであり、その他の威儀では二乗の菩提を證得することはできても、佛菩提は證得できない。この内容から、仏菩提と二乗菩提を得るには明確な差があることが分かる。

3.1.4 色・無色界の諸煩惱を蓋と立てない理由の説明

卷48では、諸々の煩惱の中で五蓋（貪欲蓋・瞋恚蓋・昏沈睡眠蓋・掉舉惡作蓋・疑蓋）という5つの煩惱に関する説明が出る。この五蓋とは、不善のもののみを指し²³、欲界の見所断と修所断の五部を自性とする²⁴。この5つは他の煩惱に比べて聖道と聖道の加行の善根を障る働きがあり²⁵、五蓋をさらに内外・自体・善惡に分けて十蓋とした際のそれぞれは、慧、菩提、ならびに涅槃を障るとされる²⁶。この五蓋を他の諸煩惱と比較して説明する中で、色・無色界の諸煩惱を蓋と立てない理由の説明が出るが、その際に三種菩提が挙げられる。その内容とは、以下の通りである。

「復次、蓋能障礙三道，三根，三種律儀，三種菩提，三慧，三蘊，三學，三修，三淨。色，無色界諸煩惱等，無如是能故不立蓋。（略）三種菩提者，謂，聲聞菩提・獨覺菩提・無上菩提。」（T no. 1545, 27: 251a19-25）

²³ 「何故，唯立不善爲蓋，非無記耶。答，障善法聚故，名爲蓋。由此，蓋者唯是不善。」（T no. 1545, 27: 251a29-251b2）

²⁴ 「有五蓋。謂，貪欲蓋・瞋恚蓋・昏沈睡眠蓋・掉舉惡作蓋・疑蓋。問，此五蓋以何爲自性。答，以欲界三十事爲自性。」（T no. 1545, 27: 249b14-16）

²⁵ 「問，何故名蓋。蓋是何義。答，障義・覆義・破義・壞義・墮義・臥義是蓋義。此中障義是蓋義者，謂，障聖道及障聖道加行善根故，名爲蓋。」（T no. 1545, 27: 249c1-3）

²⁶ 「問，佛說五蓋差別有十。云何分五爲十蓋耶。答，以三事故分五爲十。一内外故，二自體故，三善惡故。内外者，謂，有貪欲蓋緣内而起，有貪欲蓋，緣外而起故成二蓋。有瞋恚蓋，是瞋自體，有瞋恚蓋。是瞋因緣故成二蓋。自體者，謂，有昏沈蓋，有睡眠蓋，有掉舉蓋，有惡作蓋，二分成四。善惡者，謂，疑於善惡分成二蓋。故由三事分五，爲十。此十一一，能障通慧・菩提・涅槃故，名爲蓋。」（T no. 1545, 27: 250c24-251a3）

復た次に、蓋は能く三道・三根・三種律儀・三種菩提・三慧・三蘊・三學・三修・三淨を障礙す。色・無色界の諸煩惱等には、是の如き能なきが故に蓋と立てず。（略）三種菩提とは、謂く、聲聞菩提・獨覺菩提・無上菩提なり。

蓋は三種菩提などを障礙するが、色・無色界の諸煩惱にはそうした作用がないために、蓋とは立てないと説明される。すなわち、三種菩提とは、共通して蓋（貪欲蓋・瞋恚蓋・惛沈睡眠蓋・掉擧惡作蓋・疑蓋）により障礙されることが分かるが、ここでは三種類の菩提を区別した説明はみられない。

3.1.5 縁性を理解する際の「智」に関する説明

卷55では、「縁に実有の性なし」との主張に対して、毘婆沙師は、諸縁の性は実有であることを示すために4つの理由を挙げる。（以下の漢文ならびに書き下し中の改行、および①-④は筆者が便宜的に付したものである。）なお、同様の内容が卷131にも出るため、脚注に卷131の内容を記す。

「大徳説曰。諸師、隨想施設縁名、非實有性。爲遮彼執、顯實有縁故、作斯論。

- ① 若執諸縁無實性者、應一切法皆、無實性。四縁具攝一切法故。謂、因縁攝一切有爲法、等無間縁、除過去現在阿羅漢最後心心所法。攝餘過去現在一切心心所法、所縁縁増上縁、總攝一切法。
- ② 復次、若諸縁性非實有者、則一切法無甚深義。謂、若顯示一切法時、若不攝在²⁷諸縁觀察、則爲麁淺易可了知。若攝在縁而觀察者、則爲甚深過四大海、唯佛種智能究竟知。
- ③ 復次、若諸縁性非實有者、應不施設三種菩提。謂、以上智觀察縁性名佛菩提、若以中智觀察縁性名獨覺菩提、若以下智觀察縁性名聲聞菩提。
- ④ 復次、若諸縁性非實有者、覺慧應無三品轉義。謂、諸覺慧、下應常下、中應常中、上應常上。然諸覺慧、下可爲中、中可爲上。故諸縁性定實有。體有功能故。

²⁷ ここに出る「攝在」とは、『阿毘曇毘婆沙論』卷30の対応箇所に出る「以て」（*grhītvā）を指すか。Cf. 「復次、若縁無體者、一切諸法無甚深義。諸法、若不以縁相觀察、則淺近易知。若以縁相觀察諸法、則深過四海、唯佛智能知、非餘所知。」（T no. 1546, 28: 218c23-26）

由此尊者妙音説曰。若諸縁性非實有者、師應不能令弟子慧初劣後勝。弟子亦應常爲弟子不轉成師。然由諸縁性實有故、師令弟子慧得漸增、弟子有時得成師義。故諸縁性決定實有。」²⁸ (T no. 1545, 27: 283a27-283b22)

大徳説きて曰く。「諸師は、想に隨いて縁の名を施設するも、實有の性に非ず」と。彼の執を遮し、實有の縁を顯はさんが爲の故に、斯の論を作す。

① 若し諸縁に實性なしと執せば、應に一切法は皆、實性なかるべけん。四縁は具さに一切法を攝するが故に。謂く、因縁は一切の有爲法を攝し、等無間縁は、過去と現在との阿羅漢の最後の心・心所法を除く。餘の過去と現在との一切の心・心所法を攝し、所縁縁と増上縁とは、總じて一切法を攝す。

② 復た次に、若し諸縁の性にして實有に非ずんば、則ち一切法は甚深の義なからん。謂く、若し一切法を顯示せる時、若し諸縁を撰在せずして觀察せば、則ち麁淺と爲りて了知すべきこと易し。若し縁を撰在して觀察せば、則ち爲に甚深なること四大海を過ぎ、唯だ佛種智のみ能く究竟して知らん。

③ 復た次に、若し諸縁の性にして實有に非ずんば、應に三種菩提を施設すべからざらん。謂く、上智を以て縁性を觀察せば佛菩提と名づけ、若し中智を以て縁性を觀察せば獨覺菩提と名づけ、若し下智を以て縁性を觀察せば聲聞菩提と名づく。

④ 復た次に、若し諸縁の性にして實有に非ずんば、覺慧に應に三品轉の義なかるべけん。謂く、諸の覺慧にして、下は應に常に下なるべく、中は應に常に中なるべく、上は應に常に上なるべけん。然るに諸の覺慧は、下は中と爲るべく、中は上と爲るべし。故に諸縁の性は定んで實有なり。體に功能あるが故に。

此に由りて尊者妙音説きて曰く。「若し諸縁の性にして實有に非ずんば、師は應に弟子の慧をして初めは劣にして後は勝とせしむこと能はざるべけん。弟子は亦た應に常に弟子と

²⁸ 『婆沙論』卷 131 「尊者亦説。縁是、諸師假立名號、體非實有。亦、爲遮止如是所説、顯示諸縁體是實有。若諸縁性非實有者、則一切法皆非實有。以因縁攝一切有爲法、等無間縁、攝過去現在除阿羅漢最後心聚。餘心心所法、所縁縁増上縁、攝一切法故。又、若縁性非實有者、應不施設諸法甚深。謂、不依因縁觀察、則諸法性麁淺易知。若以因縁而觀察者、則甚深義過四大海、唯佛能知、非餘所測。又、若縁性非實有者、應不施設有三菩提。謂、以上智觀因縁故得佛菩提、以中智觀得獨覺菩提、以下智觀得聲聞菩提。又、因縁性非實有者、應不施設有三品慧。謂、下品慧應常下品、中應恒中、上應恒上。無實縁力令増減故。若爾、便無師徒、教習、又師徒性應無改轉。尊者妙音、亦作是説。若縁非實、師不應令弟子覺慧轉下作中、轉中作上。無修習縁令增長故。師徒教誨、應不得成。師應常師、弟子亦爾。由如是等所説理故、知縁自性決定實有。」 (T no. 1545, 27: 680c1-21)

爲りて轉じて師と成らざるべけん。然るに諸縁の性は實有なるに由るが故に、師は弟子の慧をして漸増することを得せしめ、弟子は時に師と成ることを得るの義あり。故に諸縁の性は決定して實有なり。」と。

縁の性質が実有であることを証明するために、以下の4点を挙げている。

- ① 四縁は一切法を摂するために、縁が実有でないと一切法も実有でないことになる。
- ② 縁の性質が実有でないと、一切法に甚深の、すなわち深遠な義がないことになる。
- ③ 上・中・下の三種の智により観察する対象である縁が実有でないと、それぞれの智に応じた菩提が得られず、三種菩提が成り立たないことになる。
- ④ 覚慧は下が中に、中が上になるが、覚慧にこのような三品転の機能（＝働き/實有の性質を持つ縁の力が増減する）があるということは、つまり、一切法である覚慧の性質が実有であるために三品が転じるという働きがある。²⁹

以上の内容に関して、「縁性実有」の議論の中で示される三種菩提に関して注目すべき点としては、以下の3点である。

- ① 一切法を顕示する際に、実有の性質を有する一切法（＝諸縁）ならば深遠であり、こうした深遠な諸縁は仏種智のみにより知ることができるとして、仏の智慧を一段高く置く。
- ② 実有である縁を観察する智のレベルには上・中・下の違いがあり、その違いにより仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という、得られる菩提に違いが生じる。
- ③ 覚慧のレベルは固定的でなく、下→中→上となる。

これは要するに、毘婆沙師が、三乗の智/覚慧のレベル（上・中・下）の差異、ならびに三乗菩提について明確な違いを立てているだけでなく、覚慧は下→中→上と転じることを認めていることが分かる³⁰。

²⁹ 覚慧が三品転する点に関しては『阿毘曇毘婆沙論』卷30を参照。Cf. 「復次、若縁無體者、則無上中下覺差別。若下覺者常是下覺、中覺常是中覺、上覺常是上覺。以觀縁相故、下覺可令中、中可令上。」 (T no. 1546, 28: 218c29-219a3)

³⁰ 河村(1975, p. 434)は「三種姓の施設は、現実に即して根の利鈍において施設するものであって、そこには転根の余地を残し、ねらうところは、修行を積むところの精進不放逸の修道上の目標としてみられたものでもあったことが知られるのである。」と述べる。西(1975, p. 134)は「唯佛種智能

3.1.6 出家を勧める理由に関して

卷 66 では、「出家を勧める人の恩に報いるのは難しい」と経に出ることに関して、在家の仏教徒に受戒を勧める人の恩に報いるのも難しいにもかかわらず、なぜ出家を勧めることのみ
に言及するのかが問われる。その回答として出家を勧める理由が列記され、その内容を要約す
れば、総じて在家では為すことが出来ないため、出家を勧める人に言及すると説明する³¹。

三種菩提に関しては、出家を勧める理由の 1 つに挙げられており、その内容を以下に記す。

「復次、勸出家者、即是、勸人如應、當得三種菩提、謂、聲聞菩提獨覺菩提無上菩提故、經偏
説。」（T no. 1545, 27: 343a18-343a20）

復た次に、出家を勧むる者は、即ち是れ、人に應じるが如く、當に三種菩提を、謂く、
聲聞菩提・獨覺菩提・無上菩提を得べきことを勧むるが故に、經に偏えに説けり。

すなわち、出家を勧める人とは、人に応じて、声聞菩提・独覚菩提・無上菩提という三種菩
提を得るべきであると勧める人であり、その恩に報いることは難しい。ここで注目すべきは、
「人に応じて」三種菩提を勧める、と述べられる点であろう³²。

3.1.7 梵福を生じる所作に関して

四無量に関して言及する中で、卷 82 の後半では、4 種の補特伽羅が等しく梵福を生じるの
か、第 4 補特伽羅である四梵住のみが梵福を生じるのかという議論がなされる。譬喩者が四梵
住のみ梵福を生じると説くことに対して、阿毘達磨諸論師は、4 種類ともに梵福を生じると主

究竟知」に着目し、これが「大乘諸經の抑小揚大の如く、抑二乗揚仏乘説をなしておるのであ
る。」と述べる。

³¹ 「如契經説。佛告苾芻。我實知見。有三種人、於諸有情、多有所作、其恩難報。假使盡形、以諸上妙衣服
飲食臥具醫藥、及餘資縁而供養之、亦不能報。（略）故經偏説勸人出家其恩難報。勸人受持近事戒等、
無如是事故、經不説。」（T no. 1545, 27: 342b16-343c5）

³² Cf. 西 (1975, pp. 133-134). 『阿毘曇毘婆沙論』には「勸人如應」は出ない。「復次、若教他出家、
則教他人三戒三身三學三修三淨三道三地三根三種菩提。」（T no. 1546, 28: 256b4-5）

張し、その理由を説明する³³。三乗菩提に関しては、第 1-3 補特伽羅が皆、無量の有情を饒益すると説明する際の具体的内容として示される。以下にその内容を示す。

「復次、饒益等故、皆生梵福。如修無量、爲欲饒益無量有情、如是、未立窣堵波處、爲佛舍利起窣堵波、亦爲饒益無量有情。謂、於是處、無量百千諸有情類、以諸香花寶幢幡蓋及伎樂等、諸供養具而供養之。由此、起善身語意業、或種豪族、多饒財寶、形貌端嚴、衆所愛敬、具大威德勝善種子、或種輪王、及天帝釋并魔王等諸善種子、或種聲聞・獨覺及佛菩提種子。如是饒益無量有情。如修無量爲欲饒益無量有情、如是未立僧伽藍處、爲佛弟子起僧伽藍、亦爲饒益無量有情。謂、（略）由此因縁、令施主等或種豪族、廣説乃至、或種聲聞獨覺及佛菩提種子。如是饒益無量有情。如修無量爲欲饒益無量有情、如是、和合佛弟子衆亦、爲饒益無量有情。謂、僧破已、應入見道得果盡漏、受持讀誦思惟解説三藏文義、住阿練若修不淨觀持息念等、所有善品皆不得成。應種三乗菩提種者、亦不能種。由此三千大千世界法輪不轉、乃至、淨居諸天亦、有異心現起。佛弟子衆還和合時、應入見道得果盡漏、乃至應種三乗種者皆、能成辦、由此、三千大千世界法輪復轉、乃至淨居諸天皆、無異心現起。如是饒益無量有情。饒益等故、皆生梵福。」（T no. 1545, 27: 426a15-426b16）

復た次に、饒益等しきが故に、皆梵福を生ず。無量を修するは、無量の有情を饒益せんと欲するが爲の如く、是の如く、未だ窣堵波を立てざる處に、佛舎利の爲に窣堵波を起すも、亦た無量の有情を饒益せんが爲めなり。謂く、是の處に於いて、無量百千の諸の有情の類は、諸の香花・寶幢・幡蓋及び伎樂等の、諸の供養の具を以て之れを供養す。此に由りて、善の身・語・意業を起し、或は豪族に〔生まれ〕、多饒の財寶を〔得て〕、形貌端嚴にして、衆に愛敬せられ、大威徳を具す勝れたる善の種子を種え、或は輪王、及び天帝釋並びに魔王等の諸の善の種子を種え、或は聲聞・獨覺及び佛菩提の種子を種ゆ。是の如く無量の有情を饒益す。無量を修するは無量の有情を饒益せんと欲するが爲の如く、是の如く未だ僧伽藍を立てざる處に、佛弟子の爲に僧伽藍を起すも、亦た無量の有情を饒益せんが爲なり。謂く、（略）此の因縁に由りて、施主等をして或は豪族の〔種子〕を種え、廣説して乃至、或は聲聞・獨覺及び佛菩提の種子を種ゆ。是の如く無量の有情を饒益す。無量を修するは無量の有情を饒益せんと欲するが爲の如く、是の如く、佛弟子衆を和合せるも亦た、無量の有情を饒益せんが爲なり。謂く、僧破し已れば、應に見道に入り果を得て漏を盡し、三藏の文義を受持・讀誦・思惟・解説し、阿練若に住し不淨觀・持息念等を修するも、所有の善品は皆な成ずることを得ざるべけん。應に三乗菩提の種を種えるべき

³³ 「佛説。有四補特伽羅、能生梵福。（略）由此、四種皆生梵福。」（T no. 1545, 27: 425c13-426c02）

も、亦た種ゆること能はず。此に由りて三千大千世界の法輪は轉ぜず、乃至、淨居の諸天も亦た、異心を現起するもの有り。佛弟子衆の還りて和合せる時、應に見道に入り果を得て漏を盡くし、乃至應に三乗の種を種ゆるべき者は皆、能く成辦し、此に由りて、三千大千世界の法輪は復び轉じ、乃至淨居の諸天も皆、異心を現起すること無し。是の如く無量の有情を饒益す。饒益等しきが故に、皆梵福を生ず。

第1補特伽羅である、未だ牽堵波を立てない所に仏舎利のために牽堵波を立てることに關しては、牽堵波を立てることにより無量百千の有情が供養をなし、その供養により有情たちは善なる身・語・意業を起し、声聞・獨覺・仏の菩提の種子を種える。要するに牽堵波を立てることは無量の有情を饒益することになる。

同様に、第2補特伽羅である、未だ僧伽藍を立てない処に仏弟子のために僧伽藍を立てることも、第3補特伽羅である仏弟子を再び和合させることも、それらにより無量の有情が三乗菩提の種を種えるために、無量の有情を饒益することになる。無量を修する(=四梵住)ことは無量の有情を饒益しようとすることであり、第1-3補特伽羅も無量の有情を饒益するため、4種の補特伽羅は皆、梵福を生じると述べる。

ここで注目すべきは、三乗菩提の種子を種えるという記述であり、阿毘達磨論師の間で種子説が認められているといえよう³⁴。

3.1.8 大悲の意義

卷83では、四無量の内の悲、特に大悲の義を説明する中で、三種菩提の種子、ならびに仏菩提と二乗の菩提の差異が挙げられる。大悲の義に関する説明は以下の通りである。

「復次、以大利益大安樂事、攝有情類故名大悲。謂、令有情修身語意三種妙行、感大尊貴多饒財寶形貌端嚴衆所愛敬、輪王帝釋魔王等果、及種三乘菩提種子。如是等事、皆由大悲。」(T no. 1545, 27: 428b15-19)

復た次に、大利益・大安樂事を以て、有情の類を攝するが故に大悲と名づく。謂く、有情をして身・語・意の三種の妙行を修せしめ、大いなる尊貴・多饒の財寶・形貌端嚴・衆に愛敬せられ、輪王・帝釋・魔王等との果を感ぜしめ、及び三乗菩提の種子を種えしむ。是の如き等の事は、皆大悲に由るなり。

³⁴ 西 (1975, p. 135)参照。

要するに、有情に身・語・意の三種の妙行を修めさせ、三乗の菩提の種子を種えさせること等は大悲に由るものであり、この義により大悲と名づけると説明する。

さらにまた、大悲と名づける理由に関して、二乗の菩提と比較して説明される。その内容は以下の通りである。

「復次、大價所得故名大悲。非如獨覺聲聞菩提，於一齋日以一搏食施與一人，發勝思願，便名樹彼菩提種子，由斯，展轉得彼菩提。大悲，要由經多時分，於一切處以一切種上妙樂具，施諸有情，乃至，身命都無憍惜，發勝思願，方名樹彼大悲種子。由斯，展轉乃得大悲。復次，大加行得故名大悲。非如聲聞菩提唯六十劫修加行得，獨覺菩提唯經百劫修加行得。如來大悲三無數劫，修習百千難行苦行，然後乃得故名大悲。復次，依大身住故名大悲。非如獨覺聲聞菩提依下劣身亦得現起。大悲，要依具三十二大丈夫相所莊嚴身。八十隨好間飾支體，身眞金色，圓光一尋觀無厭足。依如是身，方得現起故，名大悲。」（T no. 1545, 27: 428b19-428c5）

復た次に、大價の所得なるが故に大悲と名づく。獨覺・聲聞の菩提が、一齋日に於いて一搏食を以て一人の與に施し、勝思願を發すによりて、便ち彼の菩提種子を樹ゆと名づけ、斯に由りて、展轉して彼の菩提を得るが如きには非ず。大悲は、要ず多くの時分を経て、一切處に於いて一切種の上妙の樂具を以て、諸の有情に施し、乃至、身命をも都て憍惜すること無く、勝思願を發するに由りて、方に彼の大悲の種子を樹ゆと名づく。斯に由りて、展轉して乃ち大悲を得るなり。復た次に、大加行もて得るが故に大悲と名づく。聲聞菩提が唯だ六十劫のみの加行を修して得、獨覺菩提が唯だ百劫のみを経て加行を修して得るが如きには非ず。如來の大悲は三無數劫に、百千の難行苦行を修習し、然して後に乃ち得るが故に大悲と名づく。復た次に、大身に依りて住するが故に大悲と名づく。獨覺・聲聞の菩提が下劣身に依りても亦た現起することを得るが如きには非ず。大悲は、要ず三十二大丈夫相を具し莊嚴せらるる身に依る。八十隨好が支體の間を飾し、身は眞に金色にして、圓光一尋ありて觀るもの厭足すること無し。是の如き身に依りて、方に現起することを得るが故に、大悲と名づく。

上記の内容をまとめると、以下の3点に集約されよう。

- ① 獨覺と聲聞の菩提を得るためにそれぞれの種子をうえるが、そのためになす所作と、大悲の種子をうえるためになす所作の価値には違いがある。
- ② 聲聞菩提を得るには六十劫を修めるが、如來の大悲は三無數劫に百千の難行苦行を修習して得るといふ大加行である。

③ 独覚と声聞の菩提は下劣の身に拠っても起こるが、大悲は三十二大丈夫相を伴い莊嚴された大身に依る。

以上の説明を通して、二乗の菩提を得ることと大悲を得ることの間には差異があると示す。

これらの内容からも分かる通り、仏と二乗の菩提を得るために為すことには明確な差異が認められるだけでなく、毘婆沙師の間で三乗菩提の種子説が認められていることが分かる。

3.1.9 大善地法の1つである勤（精進）の説明

卷96では、菩提分法に関する説明がある。菩提分法とは「盡・無生智を説きて菩提と名づく。已に究竟して四聖諦を覺するが故なり。若し法にして此の究竟の覺に隨順し勢用増上するものなれば、此の中に説きて菩提分法と爲す。」³⁵と総説される。すなわち、盡智・無生智により四聖諦を覺るため、この二智は菩提と名づけることができ、この二智という究極の覺（菩提）に適合し、得ることを助ける法を菩提分法というのである。三乗菩提の語が出るのは、大善地法の内、信・精進・輕安・捨の4種のみを菩提分法とする理由が説かれる中にみられ、その内容とは以下の通りである。

「問、大善地法中、何故但立信精進輕安捨四種爲菩提分法耶。答、由此四種順菩提勝故、偏立爲菩提分法。謂、趣菩提信爲上首、將起衆行信爲初基故、立信爲菩提分法。精進遍策趣菩提行、令速趣向三乗菩提故、亦立爲菩提分法。輕安調適對治昏沈、助觀品勝、行捨平等對治掉擧、助止品勝。菩提分中止觀爲主故、俱立爲菩提分法。」（T no. 1545, 27: 498c11-19）

問う、大善地法の中、何が故に但だ信・精進・輕安・捨の四種のみを立てて菩提分法と爲すや。答う、此の四種は菩提に順ずること勝るに由るが故に、偏へに立てて菩提分法と爲す。謂く、菩提に趣くは信を上首と爲し、將に衆行を起こすは信を初基と爲すが故に、信を立てて菩提分法と爲すべし。精進は遍く菩提へ趣く行を策し、速やかに三乗菩提に趣向せしむるが故に、亦た立てて菩提分法と爲す。輕安は調適にして昏沈を對治し、觀品を助

³⁵ 「問、何故名爲菩提分法。菩提分法は何義耶。答、盡無生智説名菩提。已究竟覺四聖諦故。若法隨順此究竟覺勢用増上、此中説爲菩提分法。」（T no. 1545, 27: 496b18-21） Cf. 『阿毘曇毘婆沙論』 「何故名助道法。助道は何義。答曰。盡智無生智是菩提。此諸法隨順彼法、助彼法是彼法分勢用勝故、名助道法。」（T no. 1546, 28: 364c20-22）

くること勝り、行捨³⁶は平等にして掉擧を對治し、止品を助くること勝る。菩提分の中に止觀を主と爲すが故に、俱に立てて菩提分法と爲す。

信・精進・輕安・捨は菩提を得るに相応しい要素であるという点において勝れているため、菩提分法と定義される。すなわちこれら4種は、菩提を得ることを助けるのに適しているのである。詳細を以下にまとめる。

- ① 菩提に趣くのは信を第一とし、菩提に趣くために諸々の行をなすには信を基盤とする。
- ② 菩提に趣く行いをなさせ、速やかに三乗菩提に向かわせるのが精進である。
- ③ 心が輕やかである（輕安 *praśrabdhi*）ことにより心の落ち込み（昏沈 *styāna*）が對治され、それは觀（*vipaśyanā*）を助ける。
- ④ 心が平靜（捨 *upekṣā*）であることにより心の浮つき（掉擧 *auddhatya*）が對治され、それは止（*śamatha*）を助ける。

三乗菩提に関しては精進の特性を説明する中に見られる。すなわち、三乗菩提に向かうには精進が必要であることから、精進は三十七菩提分法の1つと定義される。この箇所では三種菩提を区別する説明はみられない。

3.1.10 四大種と四大種所造の色の説明

『発智論』に「大種所造處, 幾四二五三. 大造成不成, 成大對造四, 唯成所造四, 大種等七種依定滅, 住果, 此章願具說。」（T no.1544, 26: 981c10-13）という内容が出る³⁷。『発智論』でこのような論がなされる理由が卷127では説明され、その内の1つの説明である、法相に相応しい意義に関して明らかにする理由を述べる中³⁸に、三乗菩提との関係が挙げられる。その内容とは以下の通りである。

「有説. 若觀大種造色, 漸次能證佛獨覺聲聞三種菩提. 謂, 若以上智觀察彼者, 起上品身念住, 從此次起上品受念住, 次心, 次法, 次起雜緣, 次煖頂忍世第一法, 次起見道, 乃至, 起無學道,

³⁶ *saṃskāropekṣā*. Cf. 『国訳一切経 毗曇部（26下）』 p. 421, ならびに p. 430 脚注 93.

³⁷ Cf. 『国訳一切経 毗曇部（13）』 p. 240 脚注 1.

³⁸ 「有餘師説. 非但爲止他執顯自宗故而作此論. 但於法相相應義中, 應顯所明故, 作斯論。」（T no. 1545, 27: 662c3-6）

皆, 以上品. 爾時名爲上品善士, 證得無上正等菩提. 若以中智觀察彼者, 起中品身念住, 廣說乃至, 起無學道, 皆, 以中品. 爾時名爲中品善士, 證得中品獨覺菩提. 若, 以下智觀察彼者, 起下品身念住, 廣說乃至, 起無學道, 皆, 以下品. 爾時名爲下品善士, 證得下品聲聞菩提.」 (T no. 1545, 27: 662c10-21)

有るが説く。若し大種と造色とを觀ぜば、漸次に能く佛・獨覺・聲聞の三種菩提を證す。謂く、若し上智を以て彼を觀察せば、上品の身念住を起し、此れ従り次いで上品の受念住を起し、次いで心、次いで法、次いで雜縁を起し、次いで煖・頂・忍・世第一法、次いで見道を起し、乃至、無學道を起すに、皆、上品を以てす。爾時に名づけて上品の善士が、無上正等菩提を證得すと爲す。若し中智を以て彼を觀察せば、中品の身念住を起し、廣說して乃至、無學道を起し、皆、中品を以てす。爾時に名づけて中品の善士が、中品の獨覺菩提を證得すと爲す。若し下智を以て彼を觀察せば、下品の身念住を起し、廣說して乃至、無學道を起し、皆、下品を以てす。爾時に名づけて下品の善士が、下品の聲聞菩提を證得すと爲す。

四大種と四大種所造の色を觀察することで仏・獨覺・聲聞の菩提を証することができるといわれるが、觀察する智慧には上・中・下のレベルがある。その内容を以下にまとめる。

- ① 上智を以て觀察すれば上品の四念住、ならびに四善根、見道、無學道を起し、それはすなわち上品の善士が無上正等菩提を証する。
- ② 中智を以て觀察すれば全て中品の四念住などを起し、それはすなわち中品の善士が獨覺菩提を証する。
- ③ 下智を以て觀察すれば全て下智の四念住などを起し、それはすなわち下品の善士が聲聞菩提を証する。

以上の内容から、三種の菩提を証するには上・中・下という智慧のレベルに明確な差異があり、その智慧のレベルに応じて、菩提を証する過程（三賢・四善根・見道・無學道）においても上・中・下というレベルの差異があり、さらにまた、こうしたレベルの差異は本人の性質（善士**sat-puruṣa*）にも関連することが分かる。

ここで注目すべきは、三乗が共通して四念住・四善根を経て見道・無學道を起し菩提を得ると言われることである。これはすなわち、声聞も仏も同じ道を経て菩提を得ると見なされているのであろうか³⁹。

³⁹ Cf. 平川 (1989, pp. 365-366).

3.1.11 道智（比丘が菩提を成ずると知る智慧）の説明

『発智論』に「説くが如し。『此の苾芻は、即ち現法において、當に聖旨を辨ずべし。』此れは何の智なりや。答う、道智なり。此れは何において轉ずるや。答う、此れは無漏の根・力・覺支・道支の諸漏を永く盡くすを得るにおいて轉ず。此に由りて道智と名づく。」⁴⁰の議論がある。この内容に関して、「道智」のみを挙げ、「因智」⁴¹を挙げない理由を説明する際に、声聞菩提と無上正等菩提の違いを挙げる。その内容とは以下の通りである。

「有説. 無上菩提加行, 廣大, 三無數劫百劫乃成, 彼因可重. 是故説觀彼智. 聲聞菩提加行, 狹小. 謂, 極速者, 三生便得. 第一生下種, 第二生成熟, 第三生解脫. 因非可重故, 不説觀彼智.]」

(T no. 1545, 27: 895a14-18)

有るが説く。無上菩提の加行は、廣大にして、三無數劫百劫にして乃ち成ずるをもて、彼の因は重んずべし。是の故に彼を觀ずるの智を説く。聲聞菩提の加行は、狹小なり。謂く、極速の者は、三生にて便ち得。第一生に下種し、第二生に成熟し、第三生に解脫す。因は重んずべきに非ざるが故に、彼を觀ずる智を説かず。

過去に修した行に関して、声聞菩提を得るための行と無上正等菩提（＝仏菩提）を得るための行では、狹小・廣大と異なるために、過去の行を觀察する智慧（＝因智）を説かないと解釈している。この内容から、菩提を証する過程（因）において、声聞乘と仏乘に明確な差異があることが分かる。

⁴⁰ 「如説. 此苾芻, 即於現法, 當辨聖旨. 此何智. 答, 道智. 此於何轉. 答, 此於無漏根力覺支道支得諸漏永盡轉. 由此名道智.]」 (T no. 1544, 26: 1018a19-22)

⁴¹ 「因智」は過去に相異熟業を円満するか否かを觀察する智慧を指し、「道智」とは未来に無上正等菩提を得ることを觀察する智慧を指す。ここでは両者ともに世俗智とする。Cf. 「此即如來, 觀察慈氏前際, 相異熟業圓滿不圓滿智, 於因轉故, 説名因智. 及是, 觀察慈氏後際, 無漏根・力・覺支・道支, 得無上正等菩提, 智於道轉故, 説名道智. 然此二智, 俱是世俗智攝, 以非十六行相智故.]」 (T no. 1545, 27: 894c3-8)

3.1.12 考察

三乗菩提に関して『婆沙論』に出る 12ヶ所を検討してきた（巻 131 の内容は巻 55 と同様の
ため 11ヶ所）。その結果、『婆沙論』に出る三乗菩提に関する記述内容を整理すると、以下
の通りである。

1	名句文身という法を理解するための増上縁である覚慧のレベルには上・中・下の違 いがあり、その違いにより <u>仏菩提・独覚菩提・声聞菩提</u> という、得られる菩提に違 いが生じる
2	<ul style="list-style-type: none"> ・三乗の種子を植え三乗の菩提涅槃を得させることは、大悲の威力による ・『婆沙論』の立場からは、如来と阿羅漢の解脱に関して、有漏法の 1つ 1つに関す る最終的な離繫果としての解脱は同一と考える ・仏と阿羅漢の解脱が、解脱に至る道の違い、ならびに得られる解脱の違いを認め ながらも、得られる解脱が善であり常住であるという点、あるいは、自らの（一 身）中に解脱（涅槃）を証得するという点では他と比較しても変わらない、と考 える人々がいる
3	無上仏菩提を証得することができるのは結跏趺坐のみであり、 <u>その他の威儀では二 乗の菩提を証得することはできても、仏菩提は証得できない</u>
4	三種菩提は、共通して蓋（貪欲蓋・瞋恚蓋・惛沈睡眠蓋・掉擧悪作蓋・疑蓋）によ り障礙される
5	<ul style="list-style-type: none"> ・一切法を顕示する際に、一切法（＝諸縁）が実有の性質を有するならば深遠なも のであり、こうした深遠な諸縁は仏種智のみにより知ることができるとして、<u>仏 の智慧を一段高く置く</u> ・実有である縁を観察する智のレベルには上・中・下の違いがあり、その違いによ り<u>仏菩提・独覚菩提・声聞菩提</u>という、得られる菩提に違いが生じる ・覚慧のレベルは固定的でなく、下→中→上となる
6	人に応じて、声聞菩提・独覚菩提・無上菩提という三種菩提を得るべきであると勧 める
7	声聞・独覚・仏の菩提の種子を種えるという記述があることから、種子説が認めら れている
8	<ul style="list-style-type: none"> ・三乗の菩提の種子を種えさせること等は大悲に由るものである ・独覚と声聞の菩提を得るためにそれぞれの種子をうえるが、そのためになす所作 と、大悲の種子をうえるためになす所作の価値には<u>違いがある</u> ・声聞菩提を得るには<u>六十劫</u>を修めるが、如来の大悲は<u>三無数劫</u>に百千の難行苦行 を修習して得るという大加行である ・独覚と声聞の菩提は<u>下劣の身</u>に拠っても起こるが、大悲は三十二大丈夫相を伴い 莊嚴された<u>大身</u>に依る

9	三乗菩提に向かうには精進が必要であることから、精進は三十七菩提分法の1つである。
10	<ul style="list-style-type: none"> ・三種の菩提を証するには、<u>上・中・下</u>という智慧のレベルに明確な差異がある ・智慧のレベルに応じて、菩提を証する過程（三賢・四善根・見道・無学道）においても<u>上・中・下</u>というレベルの差異がある ・レベルの差異は<u>本人の性質（善士*<i>sat-puruṣa</i>）にも関連する</u>
11	過去に修した行に関して、声聞菩提を得るための行と無上正等菩提（=仏菩提）を得るための行では <u>その重さが異なる</u>

次に、上記の内容をカテゴリーごとに分類すると、以下のようになる。

智慧/覚慧のレベル	<ul style="list-style-type: none"> ・名句文身という法を理解する覚慧、ならびに実有である縁を観察する智には上・中・下というレベルの違いがある ・実有の性質を有する一切法（=諸縁）は奥深く、仏種智のみにより知ることができるとして、仏の智慧を一段高く置く ・覚慧のレベルは固定的でなく、下→中→上となる
菩提を証する過程	<ul style="list-style-type: none"> ・威儀（結跏趺坐という威儀のみが無上菩提を証得可能） ・種子をうえる所作（大悲の種子と二乗の種子をうえる所作の違い） ・加行（声聞菩提を得るには六十劫、如来の大悲は三無数劫に百千の難行苦行を修習して得るという大加行であること） ・菩提を証する過程（三賢・四善根・見道・無学道） ・過去に修した行の重さ <p>以上の点において、仏と二乗には差異がある</p>
本人の性質	<ul style="list-style-type: none"> ・仏の特性である「大悲」の面を強調する ・人に応じて、三種菩提を得るべきであると勧める ・声聞・独覚・仏の菩提の種子を種えるという種子説が説かれる ・独覚と声聞の菩提は下劣の身に拠っても起こるが、大悲は三十二大丈夫相を伴い莊嚴された大身に依る ・レベルの差異は本人の性質（善士*<i>sat-puruṣa</i>）にも関連する

上記の表からも明らかなように、『婆沙論』における三乗菩提に関する認識としては、以下の3点にまとめられる。

- ① 三乗の智/覚慧のレベルには上・中・下の差異がある。
- ② 智慧の差異に基づき菩提を証する過程にも差異が生じる。
- ③ 差異は本人の性質にも関係する。

これら3点を総合して、三乗菩提について声聞菩提・独覚菩提・無上菩提という明確な違いが立てられていることが分かる。なお、ここで注目すべきは、三乗の智/覚慧のレベルに上・中・下の差異があり、そのことが仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という三種の差異を生む点である。

ところで、『婆沙論』では、二乗菩提と仏菩提の差異を説明する際に、仏の持つ特性である「大悲」と関係づけていることが分かる。すなわち、二乗が仏の特性（十八不共法）を有していない点で、仏と明確に異なることを強調しているのであろうか。

最後に、「如来と阿羅漢の解脱は異なる」という内容について触れたい。毘婆沙師は『婆沙論』の中で2つの説、すなわち、仏と阿羅漢の解脱が、解脱に至る道の違い、ならびに得られる解脱の違いを認めながらも、①得られる解脱が善であり常住であるという点、②自らの（一身）中に解脱（涅槃）を証得する、という点では他と比較しても変わらない、と考える人々がいることを示している。この内容から、如来と阿羅漢の解脱の異同に関して様々な解釈がなされたことが分かる。

『婆沙論』では、智慧のレベルに応じて、菩提を証する過程（三賢・四善根・見道・無学道）にも上・中・下のレベルがあることも挙げている。ここに出る三賢・四善根・見道・無学道とは阿羅漢を証する過程であり、三乗共に阿羅漢を証する道を修める点では等しいが、阿羅漢果を得る過程にも智慧のレベルに基づく差異が設けられている⁴²。

要するに、如来と阿羅漢の解脱は、ある人々の見解からは共通する点もあるため異なるないともいえるが、三乗の慧に差異がある点からみれば、異なるともいえるだろう。

3.2 『婆沙論』以外のアビダルマ論書にみられる声聞菩提に関する説明について

次に、『施設論』ならびに『俱舍論』『俱舍釈論』『順正理論』『阿毘達磨藏頭宗論』に出る三種菩提に関する説明箇所を確認したい。

3.2.1 『施設論』に出る三種菩提について

『施設論』巻3では、菩薩が邊土ならびに西瞿陀尼洲に生じない理由が出る。その内容は以下の通りである。

⁴² 阿羅漢と如来の解脱ならびに智慧の異同に関する研究は、馬場 (2011)を参照。

「又問. 何因, 菩薩不生極邊國土, 及多賊難鄙惡之方. 答, 邊惡國土, 於戒於見, 而悉艱苦, 不與菩薩相似同等. 而菩薩者, 勤修諸善, 長養成熟, 現前勝妙果報克成. 是故, 菩薩決定於其大國中. 設有利根清淨衆生, 值遇菩薩大威德者, 然亦不能發起最上無漏善法, 所謂, 無上正等菩提・緣覺菩提・聲聞菩提到彼岸法, 及餘最上無漏善根。」 (T no. 1538, 26, 519c28-520a6)

又た問う。何の因ありて、菩薩は極邊の國土、及び賊難多き鄙惡の方に生ぜざるや。答う、邊惡の國土は、戒において見において、悉く艱苦にして、菩薩と相似同等ならず。而も菩薩は、勤めて諸の善を修して、長養・成熟し、現前の勝妙の果報を克成す。是の故に、菩薩は決定して其の大國中に生ず。設し利根清淨の衆生ありて、菩薩大威德者に值遇するも、然も亦た最上の無漏の善法、所謂、無上正等菩提・緣覺菩提・聲聞菩提・到彼岸法、及び餘の最上の無漏の善根を發起すること能はざればなり。

上記は菩薩が邊土に生じない内容であり、その中で「最上の無漏の善法、所謂、無上正等菩提・緣覺菩提・聲聞菩提」の言葉が出るが、この内容は菩薩が西瞿陀尼洲に生じない理由を述べる箇所でも同様に出る⁴³。ここでは、三種菩提を区別した説明は見当たらない。

3.2.2 『俱舍論』 『俱舍積論』 『順正理論』 『阿毘達磨藏頭宗論』 に出る三種菩提について

次に『俱舍論』 『俱舍積論』 『順正理論』 『阿毘達磨藏頭宗論』 を用いて三種菩提の内容を確認する（『順正理論』 『阿毘達磨藏頭宗論』 は『俱舍論』 と全く同様の内容のため、脚注に記載する）。

『俱舍論』 「道亦名爲菩提分法. 此有幾種. 名義云何. 頌曰, 覺分三十七. 謂, 四念住等. 覺謂, 盡無生. 順此故名分. 論曰, 經說覺分有三十七. 謂, 四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支. 盡無生智說名爲覺. 隨覺者別立三菩提. 一聲聞菩提, 二獨覺菩提, 三無上菩提. 無明睡眠皆永斷故, 及, 如實知已作已事, 不復作故, 此二名覺. 三十七法順趣菩提. 是故, 皆名菩提分法。」 (T no. 1558, 29: 132a27-132b8) ⁴⁴

⁴³ 「又問. 何因, 菩薩不生西瞿陀尼洲. 答, 西瞿陀尼洲人, 軟品根性, 所行愚鈍, 朴質種類, 不與菩薩相似同等. 菩薩大士大威德者, 勤修善, 長養成熟, 現前勝妙果報克成. 是故菩薩, 決定於其大國中. 設有利根清淨衆生, 值遇菩薩大威德者, 然亦, 不能發起最上無漏善法, 所謂, 無上正等菩提・緣覺菩提・聲聞菩提, 到彼岸法, 及餘最上無漏善根。」 (T no. 1538, 26: 520a17-24). Cf. 西 (1975, p. 193), 平川 (1991, p. 468).

⁴⁴ 『順正理論』 (T no. 1562, 29: 726c7-17); 『阿毘達磨藏頭宗論』 (T no. 1563, 29: 940c20-941a1)

道を亦た名づけて菩提分法と爲す。此れに幾くの種ありや。名義は云何。頌に曰く。覺分に三十七あり。謂く、四念住等なり。覺とは謂く、盡・無生なり。此れに順ずるが故に分と名づく。論に曰く、經に覺分を説くに三十七あり。謂く、四念住・四正斷・四神足・五根・五力・七等覺支・八聖道支なり。盡・無生智を説いて名づけて覺と爲す。覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。無明・睡眠との皆な永く斷ずるが故に、及び、如實に已に已⁴⁵の事を作し、復た作さずと知るが故に、此の二を覺と名づく。三十七法は菩提に順趣す。是の故に、皆な菩提分法と名づく。

punar apy eṣa mārḡo bodhipakṣyākhyāṃ labhate | saptatrimśadbodhipakṣā dharmāḥ | catvāri
smṛtyupasthānāni | catvāri samyakprahāṇāni | catvāra ṛddhipādāḥ | pañcendriyāni | pañca balāni |
sapta bodhyaṅgāni | āryāṣṭāṅgo mārḡaḥ iti | tatra

anutpādakṣayajñāne bodhiḥ

kṣayajñānamanutpādayajñānam ca | pudgalabhedenatistro bodhaya utpadyante⁴⁶ | śrāvakabodhiḥ
pratyekabodhir anuttarā samyakasambodhir iti | aśeṣāvidyāprahāṇāt | tābhyāṃ svārthasya
yathābhūtakṛtāpunahkartavyatāvabodhāc ca |

tādanulomyataḥ |

saptatrimśat tu tatpakṣyāḥ

bodher anulomatvād bodhipakṣyāḥ saptatrimśad utpadyante⁴⁷ | AKBh (pp. 382, 17-383, 6)

更にまた、この道は菩提分という名称を得る。三十七菩提分法である。四念住・四正勤・四神足・五根・五力・七覺支・聖八支道である。この点に関して、「菩提は無生・盡智に関する。」盡智・無生智は人の別により3種の菩提と言われる。声聞菩提・獨覺菩提・無上正等菩提である。無明を残り無く斷ずるからである。この2つ（盡智・無生智）により、自らの目的は、既になされ、そして再びなすべきことはないとあるがままたに覺知するからである。「一方また、それに順ずるから、三十七はそれに味方するもの（分、品）である。」菩提に順ずるから、三十七菩提分法と言われる。

⁴⁵ 「已」に改める。Cf. 『国訳一切經 毗曇部 (26下)』 p. 327. AKBhは「如實知已作已事」を *svārthasya yathābhūtakṛtā* と読む。

⁴⁶ AKBh (383, 1) に *utpadyante* とある。玄奘訳ならびにチベット訳 (P 43b6: *zhes bya ste*) に従い「言われる」と訳す。Cf. 櫻部, 小谷 (1999, p. 425).

⁴⁷ AKBh (383, 6) に *utpadyante* とある。玄奘訳ならびにチベット訳 (P 43b8: *zhes bya 'o*) に従い「言われる」と訳す。Cf. 櫻部, 小谷 (1999, p. 425).

『俱舍積論』「復次、此道或名覺助。覺助法有三十七品。謂、四種念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分。此中、偈曰、盡無生二智菩提。釋曰、是盡智無生智、由人差別故、成三種菩提。一聲聞菩提、二獨覺菩提、三無上正遍菩提。由無餘無明滅故、是已利如實能覺、已作不應更作故。偈曰、由順此、三十七覺助。釋曰、由彼法爲菩提生方便生住受用故、故三十七得覺助名。」(T no. 1559, 29: 283b28-283c7)

復た次に、此の道を或は覺助と名づく。覺助法に三十七品あり。謂く、四種念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分なり。此の中、偈に曰く。盡・無生の二智は菩提なり。釋して曰く。是の盡智・無生智は、人の差別に由るが故に、三種菩提を成ず。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上正遍菩提なり。無明滅の餘りなきに由るが故に、是に已⁴⁸の利を如實に能く覺し、已に作し應に更に作さざるべきが故なり。偈に曰く。此れに順ずるに由りて、三十七覺助なり。釋して曰く。彼の法に由りて菩提を生ぜんが爲に方便を生じ受用に住するが故に、故に三十七の覺助の名を得。

三種菩提に関しては、「盡・無生智を説いて名づけて覺と爲す。覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。」と説明がある。なお、この内容は、『俱舍論』だけでなく、『俱舍積論』『順正理論』『阿毘達磨藏頭宗論』にもみられる。特に、世親の『俱舍論』に対して正統有部の立場から論述した『順正理論』にも上記の内容がみられる点は興味深い。

ところで、『俱舍論』などでは、無漏智である盡智・無生智とは、無明を残り無く断じるために菩提であり、これらの智を覺する者の差異に基づき三種菩提が成り立つと述べられる。しかしながら、前節 3.1.9 で『婆沙論』に出る三十七菩提分法に関する説明箇所を確認したが、『婆沙論』では「盡・無生智を説きて菩提と名づく。已に究竟して四聖諦を覺するが故なり。若し法にして此の究竟の覺に隨順し勢用増上するものなれば、此の中に説きて菩提分法と爲す。」とあり、「覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。」の一文は出ない。

もともと、『婆沙論』においても、大善地法の1つである精進が菩提分法であることを説明する箇所に、「精進は遍く菩提へ趣く行を策し、速やかに三乘菩提に趣向せしむるが故に、亦た立てて菩提分法と爲す。」として三乘菩提に触れている。

したがって、『婆沙論』には出ないが『俱舍論』などにみられる「覺する者の別 (*pudgalabheda*) に隨いて三菩提を立つ」という一文は、『俱舍積論』において註釈がされて

⁴⁸ 前注 45 に同じ。

いないことから、何を根拠とした一文かは更なる検討が必要である。しかしながら、『俱舍論』、ならびに『順正理論』において、各人の智慧の差異により、三種菩提が明確に区別されていると記されていることが重要といえよう。

最後に、盡・無生智により四聖諦を覚るために、この二智を菩提と名づけるという点に触れたい。ここで無漏智である盡智・無生智を菩提と名づける際の菩提とは、四聖諦を覚ることから声聞菩提を指すと思われる。すなわち、三乗は共に声聞菩提である阿羅漢果を等しく得ているが、最終的に目指す菩提である声聞菩提・独覚菩提・仏菩提に関しては、各人の覚りに従い三種に区別されるということであろうか。

ここで、『俱舍論』の中で盡智を説いている「分別智品」に十八不共仏法に触れる箇所がある。『俱舍論』では十八不共法と盡智に関して、AKBh (p. 411, 8-9) に、*aṣṭādaśāveṇikās tu buddhadharmā balādayaḥ / ye buddhasyaiva bhagavataḥ kṣayajñāne bhāvanām gacchanti nānyasya*⁴⁹ (一方、力などの十八の仏の特性(仏法)は不共である。それらはほかならぬ仏・世尊の盡智において修習されるのであり、他の者の[盡智において]ではない)と述べられている。つまり、十八不共法が仏の盡智において修習されるが、他の者の盡智では修習されないということから、仏の卓越性を示していると言えよう。要するに、盡智において修習する際に、すでに三乗には明確な菩提の区別が存在するという事を示しているのであろう。

3.2.3 考察

『施設論』『俱舍論』『俱舍積論』『順正理論』ならびに『阿毘達磨藏頭宗論』に出る三種菩提について検討してきた。

『施設論』では、菩薩が邊土ならびに西瞿陀尼洲に生じない理由を説明する中で、三種菩提の語が出る。しかしながら、「最上の無漏の善法」として三種菩提(無上正等菩提・縁覺菩提・聲聞菩提)の語が出るのみであり、三種菩提を区別した説明はみられない。

次に、『俱舍論』『俱舍積論』『順正理論』ならびに『阿毘達磨藏頭宗論』に関しては、三十七菩提分法の説明箇所において三種菩提の語をみることができる。ここで注目すべきは、「盡・無生智を説いて名づけて覺と爲す。覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩

⁴⁹ 『俱舍論』「分別智品」：「頌曰、十八不共法。謂、佛十力等。論曰、佛十力四無畏三念住及大悲、如是合名爲十八不共法。唯於諸佛盡智時修、餘聖所無故、名不共。」(T no. 1558, 29:140a27-140b2) 『順正理論』「辯智品」にも『俱舍論』「分別智品」と同様の内容が出る。Cf. T no. 1562, 29: 746a11-16.

提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。」と出るこの内容は、『俱舍論』だけでなく、『俱舍論』に対して正統有部の立場から論述した『順正理論』にも同様の内容がみられることである。

しかしながら、上記の一文「覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。」は『婆沙論』にはみられない。『婆沙論』には「盡・無生智を説きて菩提と名づく。已に究竟して四聖諦を覺するが故なり。若し法にして此の究竟の覺に隨順し勢用増上するものなれば、此の中に説きて菩提分法と爲す。」⁵⁰と説明がある。三十七菩提分法に関する『婆沙論』と、『俱舍論』ならびに『順正理論』の認識が異なる可能性はあるが、注目することは、『俱舍論』ならびに『順正理論』において、各人の智慧の差異により、三種菩提が明確に区別されていると記されていることである。

最後に、三十七菩提分法の説明箇所「盡・無生智を説いて名づけて覺と爲す。」と出の際の、「盡智」と仏陀のみが有する十八不共法の関係について、『俱舍論』『順正理論』に見られる内容に触れたい。すなわち、「力などの十八の仏の性質（仏法）は不共である。それらはほかならぬ仏・世尊の盡智において修習されるのであり、他の者の〔盡智において〕ではない」と説明される箇所である。これは、十八不共法が仏の盡智において修習されることを示しており、要するに、仏と他の者では、盡智を得るという行道そのものに違いはないが、修習される内容に明確な差異があることを示しているといえよう。

すなわち、説一切有部を中心とする伝統教団においては、仏と二乗の行道に差異があるというよりは、同じ行道を修習したとしても、各人の智慧の差異により、得られる内容と得られる菩提に違いがあると考えていると言える。

3.3 『俱舍論』における仏と二乗の相違について

『俱舍論』冒頭では、まず初めに帰敬偈が述べられる。これは著者である Vasubandhu（世親）が、自らの著述の宣言をするものである。その意図は、自分の師である仏陀の偉大さを表明するため、どのような点において仏陀が優れているかという点を明らかにする。すなわち、仏の自利と利他という2つの側面から仏陀の優れた特徴を述べており、その中で仏と二乗の違いに触れている。

Vasubandhu が説明する仏陀の特質を確認するため、以下に帰敬偈を記す。

⁵⁰ 3.1.9 参照.

yah sarvathā sarvahatāndhakārah
saṃsārapaṅkāj jagad ujjahāra |
tasmai namaskṛtya yathārthaśāstre
śāstram pravakṣyāmy abhidharmakośam || 1 ||

śāstram praṇetukāmaḥ svasya śāstur mähātmyajñāpanārtham guṇākhyānapūrvakam tasmai
namaskāram ārabhate ||⁵¹ ya iti⁵² buddham bhagavantam adhiḥkṛtyāha ||⁵³ hatam asyāndhakāram
anena veti hatāndhakārah | sarveṇa prakāreṇa sarvasmin hatāndhakārah
sarvathāsarvahatāndhakārah | ajñānam hi bhūtārthadarśanapratibandhād andhakāram | tac ca
bhagavato buddhasya pratipakṣalābhenātyantam sarvathā sarvatra jñeye punaranutpattidharmatvād
dhatam | ato 'sau sarvathāsarvahatāndhakārah | pratyekabuddhaśrāvakā api kāmam sarvatra
hatāndhakārāḥ | kliṣṭasaṃmohātyantavigamāt | na tu sarvathā | tathā hy eṣāṃ buddhadharmeṣv
ativiprakṣṭadeśakāleṣu⁵⁴ artheṣu cānantaprabhedeṣu bhavaty evākliṣṭam ajñānam ||⁵⁵
ityātmahitapratipattisāmpadā saṃstutya punas tam eva bhagavantam parahitapratipattisāmpadā
saṃstauti saṃsārapaṅkāj jagad ujjahāreti | saṃsāro hi jagadāsaṅgasthānatvāt duruttaratvāc ca
paṅkabhūtaḥ | tatrāvamagnaṃ jagad atrāṇam anukampamāno bhagavān
saddharmadeśanāhastapradānair yathābhavyam abhyuddhṛtavān iti ||⁵⁶ ya evam
ātmaparahitapratipattisāmpadā yuktas tasmai namaskṛtyeti śirasā praṇipatya | yathārtham
aviparītam śāstīti yathārthaśāstā | anena parahitapratipattyupāyam asyāviṣkaroti |
yathābhūtaśāsanāc chāstā bhavann asau saṃsārapaṅkāj jagad ujjahāra⁵⁷ na tv
rddhivarapradānaprabhāveṇeti | tasmai namaskṛtya kiṃ kariṣyāmīty āha śāstram pravakṣyāmi |
śiṣyaśāsanāc chāstram | katamac chāstram ity āha abhidharmakośam || AKBh (1, 4-2, 1)

『すべての点において全ての闇を滅している方、輪廻の泥沼から人々をすくい出した方、
その真の師に敬礼して、私はアビダルマコーシャという論書を説こう。』

⁵¹ Ejima (1989, p. 1) に従い “||” を加える。

⁵² Ejima (1989, p. 1) に従い “|” を削除する。

⁵³ Ejima (1989, p. 1) に従い “||” を加える。

⁵⁴ Ejima (1989, p. 1): *kāleṣv*.

⁵⁵ Ejima (1989, p. 1): *ajñānam iti* |.

⁵⁶ Ejima (1989: 2) に従い “|” を加える。

⁵⁷ Ejima (1989, p. 2): *ujjahāra* |.

論書を造ろうとする者は、自らの師の偉大さを知らしめるために、彼（仏陀）に対して、
 「[ある]方」とは、仏陀・世尊に関して言う。彼[自身]の闇を滅している、あるいは、彼によって[闇が滅している]ので、「闇を滅している」のである。「すべての点において全ての闇を滅している」とは、あらゆる仕方で、すべてについて闇を滅しているということである。じつに、「闇」とは無知のことである。真実を見ることを妨げるのであるから。そして仏陀・世尊は[闇の]対治を獲得することにより、究極的に、すべての点において、すべての認識対象（所知）について、再生することのない性質のものなのであるから、それ（闇＝無知）は滅されている。それゆえ、その方（仏陀）は「すべての点において全ての闇を滅している」のである。独覚・声聞もまた、たしかに染汚の癡を究極的に離れているから、「すべてについて闇を滅している」。しかしすべての点においてではない。なぜなら、かれら（声聞・独覚）には、(1) 仏陀の特性について、(2) きわめて遠い場所と時について、および(3) 限らない差異を持つ事物については、不染汚な無知がまさにあるからである。

以上のように[pādaにより]、自利の行を完成していることをもって賞賛したのち、さらにまた、その同じ世尊を、利他の行を完成していることをもって賞賛する。「輪廻の泥沼から人々をすくい出した」と。なぜなら輪廻は、人々がしがみつく所であるから、また抜け出すことが難しいから、泥沼のようなものである。そこに沈んだ、救いのない人々を、憐れみをいだけ世尊は、正法の教示という手を差し伸べることにより、適切にすくい出された。

このように、自利利他の行の完成を具えられた方、「その方（仏陀）に敬礼して」とは、頭をもって敬礼して（頂礼）、である。真実に、不顛倒に教えるので、「真の師」である。これ（「真の師」の語）により、その（仏陀の）利他行の手段（＝真実に教えること）を明らかにする。「真の教師」であるその方は、真実に教えることにより、「輪廻の泥沼から人々をすくい出した」のであって、神通や、願いを叶える（与願の）力によってではない。「その方（仏陀）に敬礼して」何をするのかというなら、「私は論書を説こう。」と言う。弟子を教えるから論書である。いかなる「論書を」[説くの]かというなら、「アビダルマコーシャを」と言う。

「諸一切種諸冥滅，拔衆生出生死泥。敬禮如是如理師，對法藏論我當說。論曰。今欲造論，爲顯自師其體，尊高超諸聖衆故，先讚德方申敬禮。諸言所表，謂佛世尊。此，能破闇故稱冥滅。言，一切種諸冥滅者，謂滅諸境一切品冥。以諸無知，能覆實義及障眞見故，說爲冥。唯佛世尊得永對

治、於一切境一切種冥、證不生法故、稱爲滅。聲聞獨覺雖滅諸冥、以染無知畢竟斷⁵⁸故、非一切種。所以者何。由於佛法極遠時處、及諸義類無邊差別、不染無知猶未斷故。已讚世尊自利德滿、次當讚佛利他德圓。拔衆生出生死泥者、由彼生死、是諸衆生沈溺處故、難可出故、所以譬泥。衆生於中淪沒無救。世尊哀愍、隨授所應正法教手拔濟令出。已讚佛德。次申敬禮。敬禮如是如理師者、稽首接足故、稱敬禮。諸有具前自他利德故、云如是。如實無倒教授誠勗、名如理師。如理師言、顯利他德。能方便說如理正教、從生死泥拔衆生出。不由威力與願神通。禮如理師欲何所作。對法藏論我當說者。教誡學徒故稱爲論。其論者何。謂對法藏。(T no. 1558, 29: 1a8-1b1)

諸の一切種と諸の冥を滅し、衆生を抜き生死の泥を出でしむ。是の如き如理の師に敬禮して、對法藏論を我れ當に説くべし。論じて曰わく。今論を造らんと欲して、自師の其の體、尊高にして諸の聖衆を超ゆることを顯わさんが爲の故に、先ず徳を讃え方に敬禮を申ぶ。諸の言の表わす所は、謂く佛世尊なり。此れは、能く闇を破る故に冥を滅すと稱す。言く、「一切種諸冥滅」とは、諸境と一切品との冥を滅するを謂う。諸の無知は、能く實義を覆い及び眞見を障うるを以ての故に、説いて冥と爲す。唯だ佛世尊のみ永く對治するを得て、一切境と一切種との冥において、不生の法を證するが故に、稱して滅と爲す。聲聞・獨覺は諸の冥を滅すと雖も、染無知を畢竟して斷ざるを以ての故に、一切種〔の冥を滅する〕には非ず。所以はいかん。佛法と極遠の時と處と、及び諸の義の類の無邊の差別において、不染無知の猶を未だ斷ぜざるに由るが故なり。已に世尊の自利の徳の滿つることを讃え、次に當に佛の利他の徳の圓かなることを讃うべし。「拔衆生出生死泥」とは、彼の生死は、是れ諸の衆生の沈溺する處なるに由るが故に、出づべきことの難しきが故に、所以に泥に譬う。衆生は中において淪沒し救い無し。世尊は哀愍し、隨いて應ずる所の正法の教の手を授けて拔濟して出でしむ。已に佛の徳を讃う。次に敬禮を申ぶ。「敬禮如是如理師」とは、稽首し接足するが故に、敬禮と稱す。諸の具に前に自他利の徳を有するが故に、「如是」と云う。如實・無倒にして教授し誠勗するを、「如理師」と名づく。「如理師」と言うは、利他の徳を顯す。能く方便もて如理の正教を説き、生死の泥より衆生を抜き出でしむ。威力と願と神通とに由るにあらず。如理師を禮して何の所作を欲するや。「對法藏論我當説」とは、學徒を教誡するが故に論を爲すと稱す。其の論とは何ん。謂く對法藏なり。

まず、仏の自利に関しては、仏が闇 (*andhakāra*) に譬えられる無知 (*ajñāna*) を完全に滅している点を強調する。その一方で、声聞と獨覺は、すべてについて (*sarvatra*) 闇を滅すると

⁵⁸ Tには「未斷」とあるが、脚注に「[未] -三宮」とあり、内容の点からも「未」を除く。

いう点では染汚の癡 (*kliṣṭasammoha*) を滅しているが、すべての点 (*sarvathā*) ではないために、不染汚の無知 (*akliṣṭam ajñānam*) が残されている点を指摘する。この声聞と独覚に残される不染汚の無知とは、① 仏陀の特性 (*buddhadharma*)、② 極めて遠い場所と時 (*ativiprakṛṣṭadeśakāla*)、③ 限りない差異をもつ事物 (*arthas anantaprabhedah*) の3点に関する点であると説明されている。この点で、自利に関して声聞・独覚と仏の間には差異があると分かる⁵⁹。

次に、仏の利他に関しては、仏が輪廻の泥沼から人々をすくい出したことを挙げる。その際に注目すべきは、泥沼 (= 輪廻) の中に沈んだ人々に対して憐れみをいやく世尊は正法の教示という手を差し伸べることにより適切に救い出された、と述べられている点であろう。真実に教えることにより (*yathābhūtasāsanāc*)、泥沼に沈んだ人々をすくい出した (*samsārapaṅkāj jagad ujjahāra*) と述べられることから分かるように、正法の教示をなし真実に教えることが重要なのである。仏の利他に関する説明箇所では、声聞と独覚への言及はなされていないことから、利他 (= 真実に教えること) の特性は仏にのみあることが強調されているともいえよう。

以上の2点、すなわち自利と利他の両面からも分かる通り、二乗と仏には明確な違いがある。その内容をまとめれば以下の2点に集約される。

- ① 無明を滅する際にすべてについて (*sarvatra*) か、もしくはすべての点について (*sarvathā*) かの違いに基づく [二乗にのみある十八不共法などに関する] 不染汚無知の存在⁶⁰
- ② [仏にのみある] 利他の行 (= 真実に教法を説くこと)

Vasubandhu が、自らの著書の中で、まず初めに二乗と仏の間に差があることを示す点から、説一切有部が、仏と声聞には明確な違いがあることを認めていると理解できる。

⁵⁹ 佐々木 (2011) (2012) は、『婆沙論』に出る「不染汚無知」の説明を検討し、不染汚無知が仏陀と阿羅漢との差異を表すと述べる。

⁶⁰ 川崎 (1992, pp. 93-94) は『俱舍論』にみられる一切智に関して序偈の内容を検討し、「仏陀の一切智を『不染汚無知の永断』で定義づけている。」と述べる。

3.4 小結

『法華経』「方便品」において釈尊の会座から退出する増上慢が、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない者であるという点、さらにまた、『法華経』の一乗説が、説一切有部系の部派教団における三乗観を批判するところに基盤をおいて説かれている点に着目し、『婆沙論』『俱舎論』『施設論』『俱舎釈論』『順正理論』ならびに『阿毘達磨藏頭宗論』をもとに、仏と二乗（主として声聞乗）の差異を検討した。

その結果をまとめれば、以下の通りである。

- ① 三乗の智/覚慧のレベルには上・中・下の違いがある。
- ② 智慧の差異（上・中・下）に基づき、菩提（阿羅漢果）を証する過程（三賢・四善根・見道・無学道）にも違いがみられる。
- ③ 智慧の差異（上・中・下）に基づき、仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という三種の違いが生じる。
- ④ 如来と阿羅漢の解脱の異同に関して様々な解釈がなされた。すなわち、仏と阿羅漢の解脱が、解脱に至る道の違い、ならびに得られる解脱の違いを認めながらも、得られる解脱が善であり常住であるという点、加えて、自らの（一身）中に解脱（涅槃）を証得する、という点では他と比較しても変わらない、と考える人々がいる。
- ⑤ 『俱舎論』『俱舎釈論』『順正理論』ならびに『阿毘達磨藏頭宗論』には「盡・無生智を説いて名づけて覺と爲す。覺する者の別に隨いて三菩提を立つ。一に聲聞菩提、二に獨覺菩提、三に無上菩提なり。」という一文がある。この内容より、各人の智慧の差異により、三種菩提が明確に区別されていると分かる。特に、『俱舎論』に対して正統有部の立場から論述した『順正理論』にも上記の一文があることは興味深い。
- ⑥ 十八不共法に関して、『俱舎論』は、「それらはほかならぬ仏・世尊の盡智において修習されるのであり、他の者の〔盡智において〕ではない (*aṣṭādaśāveṇikās tu buddhadharmā balādayaḥ / ye buddhasyaiva bhagavataḥ kṣayañjāne bhāvanām gacchanti nānyasya*) と説く。すなわち、盡智を得るという行道そのものに違いはないが、修習される内容に明確な差異がある。『順正理論』にも同様の内容がみられる。
- ⑦ 『俱舎論』の著者である Vasuvandhu の帰敬偈の内容から、仏と二乗には、自利行と利他行の2点において違いがある。すなわち、自利の点では、不染汚の無知である仏陀の特性 (*buddhadharma*)、極めて遠い場所と時 (*ativiprakṛṣṭadesākāla*)、限りない差異をもつ事

物 (*arthas anantaprabhedah*) の3点があること、ならびに、利他行は仏のみの特性である。

説一切有部系の部派教団は、三乗の智/覚慧のレベルに上・中・下の差異があり、そのために菩提を証する過程にも差が生じ、結果として仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という三種の菩提の差が生じると考えている。しかしながら、得られる解脱が善であり常住であるという点、加えて、自らの(一身)中に解脱(涅槃)を証得する、という観点から、「如来と阿羅漢の解脱は異なる」と考える人々も存在した。もっとも、仏と二乗の間には、二乗の修得する盡智では得られない仏陀の特性 (*buddhadharma*)、ならびに利他行という決定的な差があり、この事実は『俱舍論』冒頭の帰敬偈に見られることから、説一切有部系の部派教団では周知の事実であることがうかがえる。

以上の内容から、説一切有部系の部派教団は、仏陀との決定的な差を自覚することにより、声聞乗を修習するとも言えるであろう。これはすなわち、『法華経』「方便品」の釈尊の会座から退出する増上慢が仏陀との決定的な差を自覚し、したがって声聞乗を修習するとも言えるであろうか。

結論

本論文は、SPの中で古層に位置する第2章 *Upāyakauśalya* の中でよく知られる五千起去の内容に着目した。これは、五千人の増上慢である比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷が、一乗説の詳細を聞かずに釈尊の会座から退出するという内容であり、SPの主要な教義である一乗説に関連する問題である。特に注目した箇所は、第39偈でKNが *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ*（この過失を見ながら）と読み、WTが同箇所を *apraśyanta imaṃ doṣaṃ*（この過失を見ていない）と校訂する点である。

SPが非難の対象とする増上慢 *abhimāna* (*adhimāna*)の定義とは、AKBhに *aprāpte viśeṣādhiḡame prāpto mayety abhimānaḡ*（勝れたものに対する證得が得られていないのに、私は獲得した、というのが増上慢である）とあり、この語義解釈は『瑜伽師地論』、『大乘五蘊論』、『*Vibhaṅga*』などに共通している。SPもこの語義解釈を用い、五千人の増上慢が会座を去る理由に、*yathāpīdam abhimānākuśalamūlenāprāpte prāptasaṃjñīno 'nadhiḡate 'dhiḡatasamjñīnaḡ*（獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐く）を挙げる。WTが、長行に出る五千起去の内容に関して「増上慢の人を称すとせば『自ら失無きものと考へて』なるか或は『自ら失あるを知らずして』なる意味を適当とす。」と述べるように、AKBhなどが定義する語義解釈が影響してか、「増上慢は自らの過失を知らず」と解釈することが一般的に理解されやすい。その反面、KNの読みである *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ*（この過失を見ながら）は、増上慢の語義解釈を根拠として考えた際に、経典の内容理解に少なからぬ矛盾が生じる可能性がある。

そこでまず第1章において、第39偈に見られるKNとWTの異読 (KN: *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ*, WT: *apraśyanta imaṃ doṣaṃ*)に関して、五千起去が記される長行 (KN, WT: *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā*)との整合性も含め、(1) 現存するサンスクリット諸写本、(2) チベット大蔵経・カンギユル、(3) 『妙法華』の諸版本ならびに日本古写経に伝承される諸写本、ならびに(4) 敦煌出土『法華経』写本の該当箇所を確認した。その結果、SP五千起去の長行と偈頌に見られる不一致、ならびにKNとWTの異読に関して2つの可能性が考えられた。

第一に、第39偈 *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ chidraśikṡāsamānvitāḡ*（欠点のある学習を具えている人々は、この過失を見ながら）の読みに関しては、当該箇所を欠く写本、ならびに異読を示すSTTAR (A.D. 1065)を除き、ネパール系写本、およびGilgit Bが *sampraśyanta* と読み、かつチベット語訳が *mthong gyur nas*（[これらの過失を]見ながら）の読みをとる。そして、第39偈に対応する長行箇所 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḡ parṡado 'pakraṅtāḡ*（彼らは自らに傷（欠陥）があることを知ったうえで、その大衆より去ったのである）に関しては、当該箇所を

欠く写本を除き、Kashgar 写本をも含むいずれの写本も *jñātvā* (知ったうえで) の読みを取り、加えてチベット語訳も *shes te* ([彼らは自らの傷を]知って) と読む。漢訳は「有如 [此失]」と読むためサンスクリットの読みである *jñātvā* と同様の用法かは疑問が残るが、『福州版大蔵経 (開元寺蔵)』は「有知 [此失]」([此の失] 知ること有りて) と読み、「有知」は *jñātvā* の読みに一致する。すなわち、第 39 偈を *sampaśyanta* で読んだ際、長行の *jñātvā* と内容が一致すると言えよう。加えて、第 39 偈内の *vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ* (諸々の傷 (欠陥) を隠しながら) の内容、すなわち、諸々の傷 (欠陥) を隠すということは、増上慢が自らに傷 (欠陥) があることを知っているとの解釈を裏づけることになる。そしてこれら三点の内容を総合して考えた際に、第 39 偈を *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* と読むことは可能である。

第二に WT の読み、すなわち *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* と校訂される読みについては、Kashgar 写本のみならず *svāni doṣāṇy apaśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) という興味深い異読がみられた。中央アジア出土諸写本と漢訳の読みが一致することは既に知られており、Kashgar 写本第 39 偈の読みも『妙法華』の「不自見其過」、『正法華』の「不自見瑕穢」に対応する。写本ならびに漢訳の成立年代の古さに着目したばあい、『正法華』の読みが一番古いことから、『正法華』の「不自見」に一致する Kashgar 写本の読みである *svāni doṣāṇy apaśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) が、現在に伝わるサンスクリット資料の範囲内では、もっとも古い読みであろう。したがって、長行 *jñātvā* の読みとは一致しないが、第 39 偈を「不自見其過 (不自見瑕穢)」の読みである *svāni doṣāṇy apaśyantās* と読むことも可能であろう。

しかしながら、諸写本が一致して伝える長行 *jñātvā* の読みは、第 39 偈 *sampaśyanta* (見ながら) の読みと解釈的に符合しており、加えて *sampaśyanta* の読みを持つ Gilgit 写本 (6 世紀初めの書写) は漢訳に次いで成立年代が古い。つまり、第 39 偈は、増上慢の語義解釈を反映させて考えれば、Kashgar 写本の読みに一致する漢訳「不自見」の読みが妥当であり、その一方で、長行との整合性に加えて第 39 偈内の一文である *vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ* (諸々の傷 (欠陥) を隠しながら) を考慮すれば、*sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* の読みも可能であろう。

第 2 章では、第 39 偈を Kashgar 写本の読みに一致する漢訳「不自見」で読んだ際の増上慢の特性を検討するため、『妙法華』の注釈書である Vasubandhu 著『妙法蓮華経優波題舎』、ならびに中国註釈家が著した『法華経』註釈書を用いて、増上慢が「得ていないのに得たと謂っている」また「証していないのに証したと謂っている」内容、見ない「過」、ならびに彼らが抱える「失」の内容を確認した。長行と偈頌の内容が対応しているか否かの問題に関しては、「方便品」で五千起去が述べられる長行箇所と偈頌は対応関係にある、と説明する道生の解釈に従い、両者を対応させて検討した。

まず、増上慢が得ていないのに得たというもの、證していないのに證したというものは、法雲、智顛、吉蔵ならびに基の共通理解として、伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢〔果〕を指す（法雲は、「盡智と無生智を得ていないのに得たと謂い、有餘涅槃と無餘涅槃を證していないのに證した」と、智顛・吉蔵・基は、「道諦を得ていないのに道諦を得たと謂い、滅諦を證していないのに滅諦を證した」、もしくは、「比丘・比丘尼は四禪を得て四果（阿羅漢果）を得た」と解釈する）。このような想いを懐く増上慢は、智顛と吉蔵の解釈に依れば、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない「失（*vraṇa*）」を有する。

第39偈の「不自見其過」に出る五千人が見ない「過」の内容とは（Kashgar 写本の読み *svāni doṣāṇy* にほぼ対応する「其過」）、智顛と吉蔵の解釈に拠ると（基はこの箇所を解釈を欠く）、小乗の教法に執し、文字にとらわれ、増上慢を懐くことである。なお、吉蔵は「不自見」の「見」を「知」と解釈しており、5千人の四衆は、前述の自からの過失を知らない（＝見ない）者たちと解釈できる。同39偈内の「護惜其瑕疵」に出る「瑕疵」に関して、吉蔵は、心の内で小乗に執着して小乗を捨てないこと、身口の行がないのに身口の行があると謂うこと、現在に増上慢であることと解釈する。

以上の内容からも明らかなように、「方便品」で釈尊の会座から退出する増上慢とは、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない者と言えり。この解釈は、道生が増上慢を「得失」の内の「失」に分類し、「自分が阿羅漢であると言ひ、佛が教化しようとする人はみな菩薩であるということを知らない者であり」と解釈する点に通じるであろう。注目すべきは、長行に出る伝統的なアビダルマ（論）における増上慢の解釈が、第39偈の「不自見」、「護惜其瑕疵」の解釈に影響を及ぼしていることである。

第3章では、『法華經』に説かれる一乗説が、説一切有部系の部派教団における三乗觀を批判する点に着目した。三乗に関して有部が示す伝統的理解は、声聞の覺りと仏の覺りを明確に分け、声聞が目指す覺り（阿羅漢果）は仏の覺りとは別であるとし、声聞は声聞乗を志すという伝統があった。『法華經』が批判の対象とする増上慢も、小乗に固執し、釈尊が一乗説の詳細を説く直前に退座する。そこで三乗觀に関して、SPが掲げる一乗説の立場から、増上慢と説一切有部系の部派教団が共に批判されるという点に着目し、三乗に関する伝統的理解を確認した。すなわち、仏と仏弟子である声聞がそれぞれ異なる菩提（一乗と三乗）を選ぶ背景を確認するため、三乗菩提に関して、『婆沙論』『施設論』『俱舍論』『俱舍釈論』『順正理論』ならびに『阿毘達磨藏頌宗論』を用いて検討した。

まず、佛との決定的な相違に関して、三乗の智/覚慧のレベルには上・中・下の差があり、この差に基づき、菩提（阿羅漢果）を証する過程（三賢・四善根・見道・無学道）にも差がみられ、その結果、仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という三種の別が生じる、と理解されていることが分かった。

なお、『婆沙論』では、二乗菩提と仏菩提の相違を説明する際に、仏の持つ特性である「大悲」と関係づけている。すなわち、二乗が仏の特性を有していない点で仏と明確に異なることを強調しているのであろう。この十八不共法に関して、『俱舍論』（『順正理論』にも同様の内容がみられる）は、「一方、力などの十八の仏法は不共である。それらはほかならぬ仏・世尊の盡智において修習されるのであり、他の者の〔盡智において〕ではない (*aṣṭādaśāveṇikāstu buddhadharmā balādayaḥ/ye buddhasyaiva bhagavataḥ kṣayaññāne bhāvanām gacchanti nānyasya*) と説く。加えて、Vasuvandhu は AKBh の帰敬偈において、仏の特性

(*buddhadharma*) などに対して二乗は不染汚な無知があると説明し、仏と二乗の自利行における違いを強調する。さらに佛の利他行として、「泥沼（＝輪廻）の中に沈んだ人々に対して憐れみをいさぐ世尊は、真実に教えることにより (*yathābhūtasāsanāt*)、泥沼から人々を救い出した (*samsārapaṅkāj jagad ujjahāra*) 」と説明する。この際、二乗には何ら触れていないことから、仏のみが利他行を有するのであろう。

上述の内容からも分かる通り、説一切有部系の部派教団は、三乗の智/覚慧のレベルに上・中・下の相違があり、そのために菩提を証する過程にも差が生じ、結果として仏菩提・独覚菩提・声聞菩提という三種の菩提が生じると考えている。この点に加えて、仏の特性

(*buddhadharma*)、ならびに利他行に関して、仏とは決定的な相違があり、この事実は『俱舍論』冒頭の帰敬偈で述べられることから、説一切有部系の部派教団では周知の事実であると言えよう。すなわち、SP が批判の対象とする説一切有部系の部派教団は、上記に挙げた仏との相違を知り、それ故に声聞乗を修習するのであろう。これはすなわち、釈尊の会座から退出する増上慢が、仏と自分たちとの決定的な相違を知る者である、とも言えようか。

SP 第 2 章 *Upāyakaṣālya* において一乗説を聞かずに退座する増上慢に関して、『俱舍論』などに共通する「増上慢」の語義解釈が影響することから、WT が校訂に際して用いた漢訳『法華経』の「不自見」の読み、すなわち、「増上慢は自らの過失を見ず（＝知らず）」の読みは、一般的に理解され易い。小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思ひ、それに加えて、この小乗の果を究極のものとして大乘の法（一乗説）を受けない者である増上慢は、一般的に考えれば、自らのこのような過失を見ない（＝知らない）者であろう。加えて漢訳『法華経』の成立年代が現存する SP 資料内では最も古いことから、第 39 偈を「不

自見其過」、すなわちこの読みに対応する Kashgar 写本の *svāni doṣāṇy apaśyantās*（自らの諸々の過失を見ていない）と読むことは理に適う。

一方で、KN の読みである *sampaśyanta imam doṣam* は、ネパール系写本、ならびに Gilgit 写本（Gilgit B）に記されるが、写本年代が漢訳に比較して新しいこと、ならびに増上慢の語義解釈を考えた際に *sampaśyanta* の箇所が理解しにくいという問題が生じる。しかしながら、SP が一乗説の立場から批判する説一切有部系の部派教団は、『婆沙論』『俱舍論』において仏と声聞の違いを明確に記している。これはすなわち、声聞が仏との相違を知るために仏乗ではなく声聞乗を目指すとも考えられるだろう。そして、このような背景が影響したならば、KN の読みである *sampaśyanta imam doṣam* も解釈としては可能であろう。

SP は、大別してネパール系写本ならびに Gilgit 写本と、中央アジア出土諸写本という 2 系統が存在する。2 系統の写本が第 39 偈の増上慢の特性に関して異なる読みを示す理由は定かではない。しかしながら本論文における以上の考察は、ネパール系写本ならびに Gilgit 写本の読みを持つ KN の *sampaśyanta imam doṣam*、ならびに漢訳の読み「不自見」に対応する Kashgar 写本の *svāni doṣāṇy apaśyantās* の読みに関して、それぞれの系統が増上慢に関する異なる解釈を背景に SP の読みを伝えた可能性があることを示唆するものである。

参考文献

[一次文献]

漢訳資料

『中阿含經』：瞿曇僧伽提婆訳 T 1, no. 26.

『雜阿含經』：求那跋陀羅訳 T 2, no. 99.

『妙法蓮華經』：鳩摩羅什訳 T 9, no. 262.

『正法華經』：竺法護訳 T 9, no. 263.

『添品妙法蓮華經』：闍那崛多訳 笈多訳 T 9, no. 264.

『持世經』：（四卷）鳩摩羅什訳 T 14, no.482

『大智度論』：龍樹菩薩造・鳩摩羅什訳 T 25, no.1509

『妙法蓮華經憂波提舍』：婆藪槃豆訳, 菩提留支共曇林訳 T 26, no. 1519.

『施設論』：法護訳, 惟淨 T 26, no. 1538.

『阿毘達磨毘婆沙論』：迦多衍尼子造, 玄奘訳 T 26, no. 1544.

『阿毘達磨大毘婆沙論』：五百大阿羅漢造, 玄奘訳 T 27, no. 1545.

『阿毘曇毘婆沙論』：迦旃延子造, 五百羅漢訳, 浮陀跋摩共道泰等訳 T 28, no. 1546.

『阿毘達磨俱舍論』：世親造, 玄奘訳 T 29, no. 1558.

『阿毘達磨俱舍釋論』：婆藪槃豆造, 真諦訳 T 29, no. 1559.

『瑜伽師地論』：弥勒説, 玄奘訳 T 30, no. 1579.

『大乘五蘊論』：世親造, 玄奘訳 T 31, no. 1612.

『阿毘達磨順正理論』：衆賢造, 玄奘訳 T 29, no. 1662.

『阿毘達磨藏頭宗論』：衆賢造, 玄奘訳 T 29, no. 1663.

『法華經義記』：法雲撰 T 33, no. 1715.

『妙法蓮華經玄義』：智顗説 T 33, no. 1716.

『法華玄義釋籤』：湛然述 T 33, no. 1717.

- 『妙法蓮華經文句』：智顛說 T 34, no. 1718.
- 『法華玄論』：吉藏撰 T 34, no. 1720.
- 『法華義疏』：吉藏撰 T 34, no. 1721.
- 『法華遊意』：吉藏造 T 34, no. 1722.
- 『妙法蓮華經玄贊』：窺基撰 T 34, no.1723.
- 『法華論疏』：吉藏撰 T 40, no. 1818.
- 『天台四教義』：（諦觀錄） T 46, no. 1931.
- 『異部宗輪論』：世友造, 玄奘訳 T 49, no. 2031.
- 『法華傳記』：（僧詳） T 51, no. 2068.
- 『妙法蓮花經疏』：竺道生撰『新纂大日本續藏經』 27, no. 577.
- 『法華統略』：吉藏撰『新纂大日本續藏經』 27, no. 582.
- 『法華論記』：佛書刊行會（編）『大日本仏教全書 25 智證大師全集第一』 名著普及会, 1978.
- 『大正新脩大藏經』：高楠順次郎・渡辺海旭（編）『大正新脩大藏經』 100 卷. 東京：大正一切經刊行会, 1924-1932.
- 『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 8）』：木村泰賢訳『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 8）』大東出版社, 1930.
- 『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 13）』：木村泰賢・西義雄・坂本幸男訳, 奈良弘元校訂『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 13）』大東出版社, 1932.
- 『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 26 下）』：西義雄訳・解説、河村孝照校訂『國譯一切經 毗曇部（印度撰述部 26 下）』大東出版社, 1935.
- 『國譯一切經 法華部全（印度撰述部 28）』：馬田行啓訳, 坂本幸男解説, 日比宣正校訂『國譯一切經 法華部全（印度撰述部 28）』大東出版社, 1928.
- 『昭和新纂國譯大藏經』：昭和新纂國譯大藏經編輯部（編）『昭和新纂國譯大藏經 經典部第一卷』 名著普及會, 1929.

サンスクリット資料

- Buescher, Hartmut, ed. 2007. *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Edgerton, Franklin. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Volume I: Grammar. New Haven: Yale University Press.
- . 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Volume II: Dictionary. New Haven: Yale University Press.
- Ejima, Yasunori, ed. 1989. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu: Chapter 1: Dhātunirdeśa (Bibliotheca Indologica et Buddhologica I)*. Tokyo: The Sankibo.
- von Hinüber, Oskar. 1982. *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. Tokyo: The Reiyūkai.
- Jiang, Zhong-xin, ed. 1997. 『旅順博物館所蔵梵文法華經断簡：写真版及びローマ字版』創価学会, 旅順博物館. [創価学会「法華經写本シリーズ」1].
- . 2006a. *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapuṇḍarīkasūtram: Kept in the Potala Palace in Tibet: A Romanized Text. Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region III (1)*. Beijing: China Tibetology publishing house, Institute of Asia-Pacific Studies, Chinese Academy of Social Sciences.
- . 2006b. *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapuṇḍarīkasūtram: Collected in the Norbulingga of Tibet Written in A.D. 1065: A Romanized Text. Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region III (2)*. Beijing: China Tibetology publishing house, Institute of Asia-Pacific Studies, Chinese Academy of Social Sciences.
- . 2006c. *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapuṇḍarīkasūtram: Collected in the Norbulingga of Tibet Written in A.D. 1067: A Romanized Text. Sanskrit texts from the Tibetan Autonomous Region III (3)*. Beijing: China Tibetology publishing house, Institute of Asia-Pacific Studies, Chinese Academy of Social Sciences.
- Kern, Hendrik and Nanjio, Bunyiu, eds. 1908-1912. *Saddharmapuṇḍarīka (Bibliotheca Buddhica X)*. St. Pétersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.
- Kudo, Noriyuki, and Vorobyova-Desyatovskaya, Margarita I. 2007. “A Newly Identified Fragment of the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* Kept in the St.Petersburg Branch of the Institute of Oriental

- Studies [1 Plates].” In: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 10: 57-66.
- Li, Xuezhong and Steinkellner, Ernst, eds. 2008. *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, No.4. Beijing-Vienna: China Tibetology Research Center and Austrian Academy of Sciences.
- Lokesh Chandra. 1976. *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra: Kashgar Manuscript* (Śata-Piṭaka Series, 229). New Delhi: The International Academy of Indian Culture (rpt. 1977 published by the Reiyūkai).
- Mizufune, Noriyoshi, ed. 2013. 『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本 (SI P/5 他) : 写真版』 創価学会, IOM RAS. [創価学会「法華經写本シリーズ」13].
- Pradhan, Prahlad, ed. 1967. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Tibetan Sanskrit Works Series 8. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute. (2nd ed., 1975).
- Темкин, Э.Н. 1994. “Неизвестные санскритские Фрагменты из Центральной Азии.” *St. Petersburg Journal of Oriental Studies*, 5: 415-448.
- Г. М. Бонгард-Левин, М. И. Воробьева-Десятовская. 1985. “Саддхармапундарика-сутра.” *Памятники индийской письменности из Центральной Азии., 1 (Bibliotheca Buddhica 33), Памятники письменности Востока 73-1: 77-160*. Москва: Издательство “Наука.”
- . 1990. “Саддхармапундарика-сутра.” *Памятники индийской письменности из Центральной Азии., 2 (Bibliotheca Buddhica 34), Памятники письменности Востока 73-2: 269-276*. Москва: Наука.
- Toda, Hirofumi. 1979 「*Saddharmapuṇḍarīkasūtra* Gilgit Manuscripts (Groups B and C) 」 『徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学) 』 14: 249-304.
- . 1981. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Tokushima: Kyōiku Shuppan Center.
- . 1988. 「*Saddharmapuṇḍarīkasūtra* Gilgit Manuscript (Tucci's collection) Group C」 『徳島大学教養部 倫理学科紀要』 15: 1-19.
- . 1996. 「A Classification of the Nepalese Manuscripts of *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (13) 」 『徳島大学総合科学部 人間社会文化研究』 3: 1-52.

- . 1997. “*Saddharmapuṇḍarīka* Manuscript Fragments in the Āśā Archives, Kathmandu, Nepal.” In: *Bauddhavidyāsudhākaraḥ: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday*, 657-671. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- . 1998. 「*Saddharmapuṇḍarīkasūtra* Romanized Text. I (1.1-5.6), (6.6-8.9), II. (29.1-30.8), (33.5-34.6), (36.1-36.8), (36.11-37.2), (37.6-38.1), (38.8-39.6)」 『徳島大学総合科学部 研究報告書』 5:1-52. 徳島：教育出版センター
- . 2002. “*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*.” Jens Braarvig (ed.), *Manuscripts in the Schøyen Collection III, Buddhist Manuscripts*. vol. II: 69-95, Oslo: Hermes Publishing.
- Toda, Hirofumi, and Matsuda, Kazunobu. 1991. 「Three Sanskrit Fragments of *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* from the Cecil Bendall Manuscript Collection in the National Archives, Kathmandu」 『徳島大学教養部 倫理学科紀要』 20: 21-35.
- Tsukamoto, Keisyo et al., eds. 1978. 『梵文法華經写本集成；2』 梵文法華經刊行会.
- Tsukamoto, Keisyo et al., eds. 1988. 『法華經梵文写本集成：ローマ字本・索引；2』 梵文法華經研究会.
- Watanabe, Shōkō, ed. 1975. *Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit, Part Two: Romanized Text*. Tokyo: The Reiyūkai.
- Wille, Klaus. 2000. *Fragments of a Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra from Khādaliq*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華經写本シリーズ」3].
- . 2001. “The Sanskrit *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* fragment in the Mannerheim collection (Helsinki) [1 plate].” In: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 4: 43-52.
- 荻原雲来・土田勝弥 [編] 1934-1935. 『改訂 梵文法華經』 聖語研究会.
- 小槻晴明 2003. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No. 414): Romanized Text*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華經写本シリーズ」5].
- . 2007. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland (No. 6): Romanized Text*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華經写本シリーズ」7].
- . 2010. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add.1684): Romanized Text*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華經写本シリーズ」10].

- 2014. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Asiatic Society, Kolkata (No. 4079): Romanized Text*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華経写本シリーズ」14].
- 2019. *A Critical Edition of the Sanskrit Lotus Sutra Based on Gilgit-Nepalese Manuscripts (C3 Collated Text)*. Tokyo: Soka Gakkai. [創価学会「法華経写本シリーズ」17].
- 水船教義 2011. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or.2204): Romanized Text*. Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華経写本シリーズ」11].

パーリ資料

- Cone, Margaret. 2001-2020. *A Dictionary of Pāli*. Bristol: The Pali Text Society.
- La Vallée Poussin, Louis de and Thomas, E.J., eds. 1916. *MahāNiddesa*. London: the Pali Text Society by Humphrey Milford.
- Rhys-Davids, C.A.F., ed. 1904. *The Vibhaṅga: Being the second book of the Abhidhamma Piṭaka*. London: the Pali Text Society by Henry Frowde.
- Feer, Léon, ed. 1960. *Samyutta-nikāya: Part III Khandha-vāgga*. London: the Pali Text Society.
- Trenckner, V, Dines Andersen, Helmer Smith, and Hans Hendriksen. 1924–2011. *A Critical Pāli Dictionary*. Copenhagen: The Royal Danish Academy/Bristol: The Pali Text Society.

チベット大蔵経・カンギユル

chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa (*Abhidharmakośabhāṣya*) by Vasubandhu. Tr. Jinamitra and dPel
brtsegs

D: sDe dge Kanjur. D no. 4090, ku26b1-khu95a7.

P: Peking Kanjur. P no. 5591, gu27b6-ngu109a8.

dam pa'i chos pad ma dkar dam pa'i chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen po'i mdo
(*saddharmapuṇḍarīka nāma mahāyāna sūtra*)

Co ne Kanjur (C): No.754, mdo sde, ja 1b1-212b6. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=4&coll=con e&rkts=113>.

IHa sa Kanjur (H): No. 116, mdo sde, ja 1b1-285b2. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=4&coll=lhasa&rkts=113>

Neyphug (Np): No. Np016-001, mdo Ma 1b1-270b7. Accessed December 2, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ma&beg=23&coll=neyphug&rkts=113>

Peking Kanjur (P): No. 781, mdo sna tshogs, chu 1b1-205a5. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affichekq2.php?vol=068&beg=1>

Phug brag Kanjur: No. F94, mdo sde, ja 149a3-407a8. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=340&coll=phugbrag&rkts=113>

——— : 鈴木隆泰 2008 「ブダク写本『法華経』第2章「方便品」」 『山口県立大学学術情報』 1:51-71.

sDe dge Kanjur (D): No.113, mdo sde, ja 1b1-180b7. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=2&coll=derge&rkts=113>

Shelkar (London) Kanjur (Z): No. 172, mdo, ma 1b1-278a6. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ma&beg=4&coll=shelkar&rkts=113>

sNar thang Kanjur (N): No. 101, mdo sde, ja 1-281b5. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=2&coll=narthatang&rkts=113>

Stog Palace Kanjur (S): No.141, mdo sde, ma 1b1-269b4. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ma&beg=16&coll=stog&rkts=113>

Ulanbator Kanjur (V): No.191, mdo sde, ma 1b1-229b7 国際仏教学大学院大学附属図書館蔵

Urga Kanjur (U): No. 113, mdo sde, ja 1b1-180b7. Accessed November 26, 2020.

<https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/digit/affiche0.php?vol=mdo%20ja&beg=2&coll=urga&rkts=113>

rnal 'byor spyod pa'i sa las gshi bsdu ba (*yogācāryabhūmau Vastusamgrahaṇī*) by Ārya Asaṅga.

Prajñāvarman, Jinamitra and Ye shes sde.

D: sDe dge Kanjur. D no. 4039, tshi127a4-335a7.

P: Peking Kanjur. P no. 5540, 'i143a1-382a5.

日本古写経に伝承される諸写本、および諸版本

『永楽北蔵』：整理委員會編 『永楽北蔵』 北京：綫装書局，2000.

『應縣木塔遼代秘蔵』：山西省文物局 中国歴史博物館 [共]主編 『應縣木塔遼代秘蔵』 北京：文物出版社，1991.

『乾隆大蔵経』：(唐)玄奘等譯 『乾隆大蔵経』 臺北：新文豊出版，1991.

『興聖寺一切経』：国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所所蔵.

『洪武南蔵』：『洪武南蔵』 成都：四川省佛教協會，1999.

『高麗大蔵経 再雕版』：東國大學校 『高麗大蔵経』 東國文化社.

『高麗大蔵経 初雕版』：中国社会科学院历史研究所 『高麗大蔵経初刻本輯刊：域外漢籍珍本文庫編纂出版委員會編』 重慶：西南師範大學出版社，北京：人民出版社，2012

『思溪版大蔵経』：国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所所蔵.

『磧砂大蔵経 北京版』：易行 『磧砂大蔵経』 北京：綫装書局，2005.

『宋磧砂大蔵経』：延聖院大蔵経局編 『宋版磧砂大蔵経』 台北：新文豊出版，1987.

『中華大蔵経』：中華大蔵経編輯局編 『中華大蔵経』 北京：中華書局出版，1985.

『趙城金蔵』：『趙城金蔵』 北京：北京圖書館出版社，2008.

『七寺一切経』：国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所所蔵.

『福州版大蔵経（開元寺蔵）』：国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所所蔵.

『房山石経』：中国佛教协会，中国佛教图书文物館編 『隋唐刻経』 北京：华夏出版社，2000.

敦煌出土写本

- 『英國國家圖書館藏敦煌遺書』(S.): 上海師範大學, 英國國家圖書館合編; 方廣錫, (英) 吳芳思主編『英國國家圖書館藏敦煌遺書』桂林: 广西师范大学出版社, 2011-2017.
- 『甘肅藏敦煌文獻 1-2』(敦研): 樊錦詩他『敦煌研究院藏敦煌文獻』蘭州: 甘肅人民出版社, 1999.
- 『甘肅藏敦煌文獻 4-5』(甘博): 初師寶他『甘肅省博物館藏敦煌文獻』蘭州: 甘肅人民出版社, 1999.
- 『俄藏敦煌文獻』(Φ): 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所, 俄羅斯科學出版社東方文學部, 上海古籍出版社編『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻』上海: 上海古籍出版社, 莫斯科: 俄羅斯科學出版社東方文學部, 1992.
- 『國家圖書館藏敦煌遺書』(BD): 中國國家圖書館編; 任繼愈主編『國家圖書館藏敦煌遺書』北京: 北京圖書館出版社, 2005-2012.
- 『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』(上圖): 上海古籍出版社, 上海圖書館編『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』上海: 上海古籍出版社, 1999.
- 『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』(上博): 上海古籍出版社, 上海博物館編『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』上海: 上海古籍出版社, 1993.
- 『世界民間藏中國敦煌文獻 1』(CXZ): 《世界民間藏中國敦煌文獻》編輯委員會著『世界民間藏中國敦煌文獻』北京: 中國書店, 2014.
- 『浙藏敦煌文獻』(浙江): 浙藏敦煌文獻編纂委員會編『浙藏敦煌文獻』杭州: 浙江教育出版社, 2000.
- 『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』(津藝): 上海古籍出版社, 天津市藝術博物館編『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』上海: 上海古籍出版社, 1996-1998.
- 『敦煌卷子』(中圖): 國立中央圖書館藏『敦煌卷子』台北: 石門圖書, 1976.
- 『敦煌秘笈 影片冊』(羽): 武田科學振興財團杏雨書屋 編集, 武田科學振興財團, 大阪, 2009-2013.
- 『敦煌寶藏 散』(散): 本公司編輯部, 新文豐出版.
- 『北京大學圖書館藏敦煌文獻』(北大): 北京大學圖書館, 上海古籍出版社編『北京大學圖書館藏敦煌文獻』上海: 上海古籍出版社, 1995.
- 『法藏敦煌西域文獻』(P.): <http://idp.bl.uk/>

[二次文献]

- Apple, James B. 2015. “Candrakīrti and *Lotus sutra*.” *Bulletin of the Institute of Oriental Philosophy* 31: 97-122.
- . 2016. “The *Lotus Sutra* in Tibetan Buddhist History and Culture. Part 1.” *Bulletin of the Institute of Oriental Philosophy* 32: 129-143.
- Bechert, Heinz. 1976. [Foreword on Lokesh Chandra 1976] in: *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra: Kashgar Manuscript* (Śata-Piṭaka Series, 229). 1976, 3-9.
- Brought, John. 1954. “The Language of the Buddhist Sanskrit Texts.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 16-2: 351-375.
- Burnouf, Eugène. 1973. *Le Lotus de la Bonne Loi: traduit du Sanskrit: accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au Bouddhisme*. Paris: Imprimerie Nationale.
- Burrow, T. 1937. *The Language of the Kharoṣṭhi Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: the university press.
- Dutt, Nalinaksha, revised. 1953. *Saddharmapuṇḍarīkasūtram: with N. D. Mironov's Readings from Central Asian MSS (Bibliotheca Indica: a collection of Oriental works, work no. 276)*. Calcutta: Asiatic Society.
- Edgerton, Franklin. 1946. “Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit.” *Journal of the American Oriental Society* 66-3: 197-206.
- Eimer, Helmut. 1992. *Ein Jahrzehnt Studien zur Überlieferung des tibetischen Kanjur*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien.
- Ejima, Yasunori et. al. 1985-1993. *Index to the Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Sanskrit, Tibetan, Chinese, (梵藏漢法華經原典總索引)*, Vol. 1, Tokyo: The Reiyūkai.
- Habata, Hiromi. 2007. *Die zentralasiatischen Sanskrit-Fragmente des Mahāparinirvāṇa-Mahāsūtra : kritische Ausgabe des Sanskrittextes und seiner tibetischen Übertragung im Vergleich mit den chinesischen Übersetzungen*. Marburg: Indica et Tibetica.
- von Hinüber, Oskar. 2014. “A *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* Manuscript from Khotan: The Gift of a Pious Khotanese Family.” *The journal of Oriental Studies* 24: 134-156.
- Kaneko, Ryotai, Matsunami, Yoshihiro, and Saito, Kojun. 1979. “A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Toyo Bunko.” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 37: 159-191.

- Karashima, Seishi. 1992. *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra in the light of the Sanskrit and Tibetan Versions* 法華經漢訳の研究 (*Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* III). Tokyo: The Sankibo Press.
- . 1997. “漢譯佛典の語言研究 附篇：佛典漢語三題：關於語氣詞“婆”、關於貝多、關於罽寶。”『俗語言研究』4: 29-49.
- . 1998. *A glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典 (*Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* I). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Sōka University.
- . 2001. “Who Composed the Lotus Sutra? – Antagonism between wilderness and village monks –.” In: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 4: 143-179.
- Karashima, Seishi and Nattier, Jan. 2005. “Qiuluzi 秋露子, An Early Chinese Name for Śāriputra.” In: *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 8: 361-376.
- Kasamatsu, Sunao 2016. “Saddhp *samādāpana*- / *samādāpana*:- A Re-examination of the Kashgar manuscript.” In: ‘Guiding Lights’ for the ‘Perfect Nature’: Studies on the Nature and the Development of Abhidharma Buddhism: *A commemorative Volume in Honor of Prof. Dr. Kenyo Mitomo for his 70th Birthday: Indian, South-East Asian and Tibetan Studies*, 434-421, Tokyo: Sankibo Busshorin.
- Kern, Hendrik., trans. 1884. *The Saddharma-puṇḍarīka, or, The lotus of the true law*. Oxford: Clarendon Press.
- Li, Channa. 2019. “Challenging the Buddha’s Authority: A Narrative Perspective of Power Dynamics Between the Buddha and His Disciples.” PhD diss., Universiteit Leiden.
- Mochizuki, Kaie, and Kim, Byungkon, eds. 2020. *Bibliography of the Studies on the Saddharmapuṇḍarīkasūtra (1844-2020) Lotus Sutra Studies I*. Yamanashi: The International Institute for Nichiren Buddhism of Minobusan University.
- Monier-Williams, Monier. 1899. *A Sanskrit English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*. Oxford: The Clarendon Press. (rpt.1956).

- Nishi, Yasutomo. 2019. *Saddharmapuṇḍarīka: Central Asian (Kashgar Manuscript) and Gilgit-Nepalese (Kern- Nanjio 's edition) Recensions of Transcription in Roman Script: Word Index*. Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 1, Tokyo: Chuo Academic Research Institute.
- Norman, K. R. 1968. *The Elders' Verses I Theragāthā*. (Pali Text Society Translation Series 38). London: Pali Text Society (rpt. Oxford 1995).
- Ruegg, D. Seyfort. 2004. "Aspects of the Study of the (Earlier) Indian Mahāyāna." *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 27-1: 3-62.
- . 1989. "Allusiveness and Obliqueness in Buddhist Texts: Saṃdhā, Saṃdhi, Saṃdhyā and Abhisam̐dhi." *Dialectes dans les Littératures Indo-Aryennes* (Publications de l'Institut de Civilisation Indienne fascicule 55), édité par Colette Caillat. Paris: 295-328.
- Sander, Lore. 1968. *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland Supplementband 8). Wiesbaden.
- Speijer, J.S. 1973. *Sanskrit Syntax*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Vaidya, Paraśurāma Lakshmana., ed. 1960. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra (Buddhist Sanskrit Texts, no. 6.)*. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vogel, Claus. 1974. *The Dated Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen 1. Philologisch-historische Klasse, Jahrgang, Nr. 5. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Yuyama, Akira. 2000. *Eugène Burnouf: the Background to his Reserach into the Lotus Sutra*. Tokyo : The International Research Institute for Advanced Buddhology Soka University.
- . 1970. *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. Oriental Monograph Series, 5. Canberra: Centre of Oriental Studies in association with Australian National University Press.
- Young-ho Kim. 1990. *Tao-sheng's Commentary on the Lotus Sūtra: A Study and Translation*. Albany: State University of New York Press.
- 石田智宏 2006 「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」 『東洋文化研究所所報』 10: 1-28.
- 伊藤瑞叡 1992 「法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その二）」 『印仏研』 41-1: 24-29.

- 1993a 「法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その一）」『日蓮教学研究』20: 637-661.
- 1993b 「法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その四）」『法華文化研究』19: 67-72.
- 1994 「常不輕菩薩品における常不輕菩薩と上慢の四衆」『立正大学大学院紀要』10: 1-16.
- 1995 「法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その五）」『法華文化研究』21: 9-17.
- 1996 「法華經における上慢の四衆との関係より見たる菩薩行（その三）」『印仏研』45-1: 30-37.
- 2007 『法華經成立論史：法華經成立の基礎的研究』平楽寺書店.
- 2009 「法華成立における常不輕菩薩品の一つの意義」『大崎学報』165: 1-14.
- 岩松浅夫 2010 「梵文『法華經』「方便品」第 29 偈について：和訳と解釈をめぐって」『創価大学人文論集』22: 37-72.
- 2011 「『法華經』「方便品」の一二の偈頌について：テキスト校訂の問題を中心に」『印仏研』59-2: 942-935.
- 横超慧日 1969 『法華思想』平楽寺書店.
- 大竹晋 2011 『法華經論；無量寿經論；他（新国訳大蔵經；14. 釈經論部；18）』大蔵出版社.
- 奥野光賢 1987 「吉蔵の『法華論』の抛用をめぐって：特に四種声聞授記を中心に－」『駒澤大學佛教學部論集』18: 374-387.
- 2000 「吉蔵における『四種声聞義』再考」『駒澤短期大學佛教論集』6: 153-176.
- 2002 『仏性思想の展開：吉蔵を中心とした『法華經』受容史』大蔵出版.
- 2005 「[研究動向] 天台と三論：『法華文句の成立に関する研究』刊行二十年に因んで」『駒澤短期大學佛教論集』11: 139-157.
- 金子良太 1977 「K ダッシュ梵文「法華經」餘話」『東洋文庫書報』8: 78-86.
- 辛嶋静志 1997 「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」『佛教研究；国際佛教徒協會』26: 157-176.

荻谷定彦 1979 「法華經方便品の声聞観」 『株橋先生古稀記念：法華思想と日隆教学』：497-526, 東方出版.

—— 1983 『法華經一仏乗の思想：インド初期大乘仏教研究』 東方出版.

川崎信定 1992 『一切智思想の研究』 春秋社.

河村孝照 1975 『有部の仏陀論』 山喜房佛書林.

菅野博史 1994 『中国法華思想の研究』 春秋社.

—— 1996 『法華義記（法華經注釈書集成 2）』 大蔵出版.

—— 1998 『法華統略（法華經注釈書集成 6）』 大蔵出版.

橘川智昭 2002 「慈恩教学における法華經観」 『佛教學』 44: 23-53.

—— 2013 「理仏性と行仏性（第1回学術大会テーマ 東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と変容）」 『東アジア仏教学術論集』 1: 163-179.

木村泰賢 1969 『小乗仏教思想論』 大法輪閣.

小槻晴明 2008. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Société Asiatique (No. 2): Romanized Text.* Tokyo: Sōka Gakkai. [創価学会「法華經写本シリーズ」 8].

五島清隆 1981 「大乘經典に見る破僧伽」 『印佛研』 30-1: 118-119.

坂本幸男・岩本裕 訳 1962 『法華經；上』 岩波書店.

——(1991)1997 『法華經；上 ワイド版岩波文庫 41』 岩波書店.

櫻部健・小谷信千代 訳 1999 「賢聖品」 法蔵館.

佐々木宣祐 2011 「所知障の研究：『婆沙論』の不染汚無知説」 『印佛研』 60-1: 402-398.

——2012 「所知障の研究：不染汚無知の内容」 『印佛研』 61-1: 390-386.

佐藤密雄 1972 『律蔵（仏典講座；4）』 大蔵出版.

末光愛正 1986 「『法華玄賛』と『法華義疏』」 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 17: 28-40.

——1990 「吉蔵の成仏不成仏観（7）」 『駒澤大學佛教學部論集』 21: 341-356.

——1991 「吉蔵の成仏不成仏観（8）」 『駒澤大學佛教學部研究紀要』 49: 107-122.

勝呂信静 1970 「インドにおける法華經の注釈的解釈」 『法華經の成立と展開（法華經研究 III）』 365-392, 平楽寺書店.

- 2009『法華經の思想と形成』山喜房佛書林.
- 田村芳朗・藤井教公 訳 1988『法華經；上』大蔵出版.
- 中国仏教思想研究会 訳 1976「道生撰妙法蓮花經疏対訳」『三康文化研究所年報』9: 139-203.
- 戸田宏文 1980「[rev.] *Saddharmapuṇḍarīka* Manuscripts found in Gilgit, edited and annotated by Shoko WATANABE, with the preface by P.Bapat」『宗教研究』54-1: 106-112.
- 1984「法華經の成立：梵文写本の諸様相」『東洋学術研究』106 (23-1): 141-181.
- 中村瑞隆 訳 1995『法華經：現代語訳；上』春秋社.
- 西義雄 1975『阿毘達磨の研究』国書刊行会.
- 野沢佳美 1999「宋版大蔵經と刻工作：附・宋版三大蔵經刻工一覽（稿）」『立正大学文学部論叢』110: 29-53.
- 馬場紀寿 2011「阿羅漢の智慧と仏陀の智慧：初期仏典から大乘仏典へ」『印佛研』59-2: 885-879.
- 平井勝栄 1985『法華文句の成立に関する研究』春秋社.
- 平川彰 1980「開三顯一の背景とその形成」『法華經の思想と基盤（法華經研究Ⅷ）』: 133-177, 平楽寺書店.
- 1989『初期大乘と法華思想（平川彰著作集 6）』春秋社.
- 1991『原始仏教とアビダルマ仏教（平川彰著作集 2）』春秋社.
- 1993『二百五十戒の研究 I（平川彰著作集 14）』春秋社.
- 藤田宏達 1969「一乗と三乗」『法華思想』352-405, 平楽寺書店.
- 布施浩岳 1934『法華經成立史』大東出版社.
- 松田和信 2011「アフガニスタン写本から見た大乘仏教」『大乘仏教とは何か（シリーズ大乘仏教 1）』152-184, 春秋社.
- 松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義 訳 1975『法華經；I（大乘仏典；4）』中央公論社.
- 松本史郎 2009「『法華經』の形成に関する一視点」『駒澤大學佛教學部研究紀要第』67: 344-340.
- 水谷香奈 2016「慈恩大師基の教学における人間観について」『日本佛教學會年報』82: 186-207.

参考文献

水野弘元 1964 『改訂版・パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』 山喜房佛書林.

三友健容 1980 「アビダルマ仏教における声聞成仏論と法華経」 『法華経の思想と基盤（法華経研究Ⅷ）』 281-322, 平楽寺書店.

望月良晃 1988 「『法華経』にあらわれた誹謗者の諸例」 『大乘涅槃経の研究：教団史的考察』 : 25-47, 春秋社.

望月海淑 1993 「法華経方便品の『敬信』の語をめぐって」 『法華経の受容と展開』 : 67-87, 平楽寺書店.

諸橋轍次 1966-1968 『大漢和辞典』 大修館書店.

Appendix A: The translation of the Kashgar ms.

It is well-known that the Central Asian manuscripts and Gilgit-Nepalese manuscripts have quite different recensions¹ with regard to how to convey *Saddharmapuṇḍarikasūtra* (hereafter, SP). Moreover, Kern emended using the Nepalese mss. and the Kashgar ms. in his edition in spite of the fact that both mss. are located in different places. Despite the fact that this edition contains at least two different branches, Nepalese and Kashgar, KN (H. Kern and B. Nanjio edition, hereafter, KN) is a widely used SP text².

In the following sections, I attempt to translate to English the reading of the Kashgar ms., which constitutes a different branch among the manuscripts of SP, from the beginning of the second chapter to verse 41. Through these translations, I expect to clarify how to understand the arrogant people who are described in the second chapter and the doctrine of the one-vehicle, a primary doctrine of SP, which relates to the understanding of arrogant people.

My method for translating the Kashgar ms. is that principally, I follow the Kashgar ms.'s folios.³ Additionally, KN and C3 ms. are cited, parallel to the Kashgar ms. Furthermore, two Chinese translations (Miao fa lian hua jing, hereafter 『妙法華』, and Zheng fa hua jing, hereafter 『正法華』) and four Tibetan translations (sDe dge, Peking, London, and Stog Palace) corresponding to those readings of the Kashgar ms. are also shown.

Abbreviations

< >	omission of (part of) an akṣara without gap in the manuscript
{ }	superfluous (part of an) akṣara
BHS	Buddhist Hybrid Sanskrit
ms. (mss.)	manuscript (manuscripts)
Nom.	Nominative
Acc.	Accusative
Ins.	Instrumental
Dat.	Dative
Gen.	Genitive
Abl.	Ablative
Loc.	Locative

¹ Bechert (1976, forward of the *Saddharma-Puṇḍarika-Sūtra* Kashgar manuscript edited by Lokesh Chandra, pp. 5-6) notes that it is well known from the hitherto published Central Asian fragments of *Saddharmapuṇḍarika* that these manuscripts represent a quite different recension of the textual tradition of the Sūtra as compared with the text found in the Nepalese and Gilgit manuscripts. Cf. Karashima (1992).

² The details are written in the introduction 0.2.1.

³ KN's translation is *The Saddharma-puṇḍarika, or, The lotus of the true law*. trans. Hendrik Kern. Japanese translations are: *Hokekyo jyō*. trans. Yukio Sakamoto and Yutaka Iwamoto; *Hokekyo I*. trans. Yoshihiro Matsunami, Gazin Nagao, and Teruyoshi Tanji; *Hokekyo Gendaigoyaku jyō*. trans. Zuiryū Nakamura.

Voc.	Vocative
sg.	Singular
du.	Dual
pl.	Plural

The number in parentheses following a verse indicates the number referred to in the Kern-Nanjio edition.

36a1	atha	khalu	bhagavān	smṛtaḥ				
KN	atha	khalu	bhagavān	smṛtimān				
C3 ⁴	atha	khalu	bhagavāṃ	smṛtimā<ṃ>				
2	saṃprajānas	tataḥ	samādher	vyatthāsīd ⁵	dhyutthāya ⁶	ca	bhagavān	āyusmamtaṃ ⁷
KN	saṃprajānas	tataḥ	samādher	vyutthito	vyutthāyāyusmantam			
C3	saṃprajānaṃs	tataḥ	samādhe<r>	vyutthitaḥ	vyutthāy'āyusmantam			
3	śāradvatīputram ⁸	āmantrayāmāsa	·	gaṃbhīraṃ ⁹	śāradvatīputra	buddhajñānaṃ	durdr-	
KN	śāriputram	āmantrayate sma ¹⁰		gambhīraṃ	śāriputra		durdr-	
C3	sāriputram	āmantrayāmāsa		gambhīraṃ	sāriputra		durdr-	
4	śaṃ	duranubodhaṃ	śāradvatīputra	buddhajñānaṃ	taṃ	tathāgatenārhatā	sa-	
KN	śaṃ	duranubodhaṃ		buddhajñānaṃ		tathāgatair arhadbhiḥ	sa-	
C3	saṃ	duranubodhaṃ		buddhajñānaṃ		tathāgatair arhadbhiḥ	sa-	

⁴ This C3 ms. was edited by Haruaki Kotsuki 小槻晴明 and published in 2019. In his edition, words, phrases, signs or numbers in () are portions the editor has supplied where necessary. Letter(s) (*akṣara(s)*), word(s), phrase(s), sign(s) or number(s) that the copyist failed to write is/ are supplied in < > by the editor. Letter(s) (*akṣara(s)*), word(s), phrase(s) or sign(s) in « » indicates/ indicate the portion amended or supplied by the copyist on or between the lines, or in the margin. Letter(s) (*akṣara(s)*), word(s), phrase(s) or sign(s) in { } indicates/ indicate the superfluous portion deleted by the editor. Letter(s) (*akṣara(s)*), word(s), phrase(s) or sign(s) in { { } } indicates/ indicate the portion cancelled and deleted by the copyist. Letter(s) (*akṣara(s)*), word(s), phrase(s) or sign(s) in [] indicates/ indicate the damaged portion restored by the editor.

⁵ I presume that this form is s-aorist 3 sg. Cf. BHS (p. 236): *samavāsthāsīt* is categorized as aorist. Toda (1981, p. 1): *vyatthāsīd* is s- Aorist, 3rd sg.

⁶ Only the Kashgar ms. has *dhyutthāya*. *dhyu* and *vyu* are not similar letters. However, the pronunciation is somewhat similar. Here, I read *vyuttāya* instead of *dhyutthāya*. Cf. D ja12b5; P chu14b1; S ma19a6; Z ma20a7: *bzhengs nas*. 『妙法華』 T. no. 262, 9, 5b25: 爾時世尊, 從三昧安詳而起. 『正法華』 T. no. 263, 9, 68a1: 於是, 世尊從三昧覺. Toda (1981, 19): *dhyutthāya*.

⁷ BHS (p. 19, 2.64): There is much confusion in writing between the anusvara sign, which I transliterate *m*, and both *m* and *n*, especially final, but also in medial position before consonants.

⁸ *śāradvatīputra* is the same as *śāriputra*. Cf. D ja12b5: *shā ridrata 'i bu*; P chu14b2: *shā ra dva ti 'i bu*; S ma19a6: *shā ri 'i bu*; Z ma24a7: *shā ri 'i bu*. Seishi Karashima and Jan Nattier (2005, pp.361-376) investigated why *śāradvatīputra* appears in the Kashgar ms., and they concluded that *śāradvatīputra* was coined in Northwest Indian and subsequently spread to Central Asia.

⁹ See note 7.

¹⁰ Only B ms. reads *āmantrayate sma*, and Kern might choose this usage in spite of the fact that other mss. use *āmantrayāmāsa*.

5	myaksambuddhena ¹¹	pratividdham ¹²	durvijñeyam tat	sarvaśrāvakaṣṭakabuddhais	tat kasya heto-
KN	myaksambuddhaiḥ	pratibuddham	durvijñeyam	sarvaśrāvakaṣṭakabuddhaiḥ	tat kasya heto-
C3	myaksambuddhaiḥ	pratividdham	durvijñeyam	sarvasrāvakaṣṭakabuddhaiḥ	tat kasya heto-
6	r	anekabuddhakoṭīnayutaśatasahasraparyupāsītāvino ¹³	hi	śāradvatīputra	tathā-
KN	ḥ	bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasraparyupāsītāvino	hi	śāriputra	tathā-
C3	ḥ	bahubuddhakoṭīnayutasatasahasrapa<r>yupāsītāvino	hi	śāriputra	tathā-
7	gatā	arhantas	samyaksambuddhā	bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasracīrṇacaritā-	
KN	gatā	arhantaḥ	samyaksambuddhā	bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasra ¹⁴ cīrṇacaritā-	
C3	gatā	arhantaḥ	saṃmyaksambuddhā :	bahukalpakoṭīnayutasatasahasracīrṇacaritā-	
36b1	vino ¹⁵	nuttarāyāṃ ¹⁶	samyaksambodhau		
KN	vino	'nuttarāyāṃ	samyaksambodhau		
C3	vi<no>	'nuttarāyāṃ	samyaksambodhai		

[Translation]

Then, Bhagavat, who was thoughtful and perfectly wise, arose from that meditation. So, having risen [from that meditation], Bhagavat addressed the venerable Śāradvatīputra. “Oh, Śāradvatīputra! The Buddha’s wisdom is profound, difficult to see, and difficult to understand. Oh, Śāradvatīputra! The Buddha’s wisdom, penetrated by the Tathāgata-arhat-samyaksambuddha, ought to be difficult to understand by all practitioners (*śrāvakas* and *pratyekabuddhas*). What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! Indeed, the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas worshipped many Buddhas, who were hundreds of thousands of myriads of *koṭis*. And they practiced austerity with regard to supreme and complete enlightenment under many Buddhas, who were hundreds of thousands of myriads of *koṭis*.¹⁷

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 5b25-28

爾時世尊從三昧安詳而起，告舍利弗。諸佛智慧甚深無量。其智慧門難解難入，一切聲聞辟支佛所不能知。所以者何。佛曾親近百千萬億無數諸佛，盡行諸佛無量道法，

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68a1-4

於是世尊從三昧覺，告賢者舍利弗。佛道甚深，如來至真等正覺。所入之慧難曉難了，不可及知雖聲聞緣覺。從本億載所事歸命，無央數劫造立德本，奉遵佛法，

¹¹ KN has a pl. form, and the Kashgar ms. has a sg. form. Except for the Kashgar ms., all mss. use a pl. form. Cf. Tsukamoto et al. (1988, pp. 4-5).

¹² *pratividdha* is the Bhūte Kṛdanta (past passive participle) of *prati√vidh* or *prati√vyadh*. Cf. Only B ms. and N2 ms. use *pratibuddham*. However, *pratibuddham* is not used in any of the mss. D ja12b5; P chu14b2; S ma19a7; Z ma20b1: *thugs su chud pa* | 『妙法華』 T. no. 262, 9, 5b26: 其智慧門。『正法華』 T. no. 263, 68a2: 如來至真等正覺所入之慧。Karashima (1998, p. 360): 入 means enters, penetrates (intellectually), comprehends.

¹³ *-āvin* is an active past participle of Pāli.

¹⁴ It should be *sahasra*. Cf. Dutt (1953, p. 23) emended from *kahasra* to *sahasra*.

¹⁵ See note 13.

¹⁶ Toda (1981, p. 19): *'nuttarāyāṃ*. Cf. BHSD (p. 32): Loss of initial vowels in *saṃdhi*.

¹⁷ This practice seems to be the difference between the *śrāvaka*-vehicle and the Buddha-vehicle.

[Tibetan translation] D ja12b4-7; chuP 14b1-4; S ma19a5-b2; Z ma20a7-b3

de nas bcom ldan 'das dran pa dang ldan zhing mkhyen bzhin du ting nge 'dzin de las bzhengs so || bzhengs nas tshe dang ldan pa (S ba) shā ridrata'i bu (P shā ra dva ti'i bu, S, Z shā ri'i bu) la bka' stsal pa | (Z ||) shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams kyis thugs su chud pa | sangs rgyas kyī (Z om. kyī) ye shes ni zab pa (S, Z |) mthong bar dka' ba (S, Z |) rtogs par dka' ba ste | nyan thos dang rang sangs rgyas thams cad kyis shes par dka'o (D, P, S dka'o) || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams ni | sangs rgyas bye ba khrag khrig brgya stong mang po la bsnyen bkur mdzad mdzad pa | sangs rgyas bye ba khrag khrig brgya stong mang po la (S, Z |) bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang (P pyang) chub tu spyod (P sbyod) pa spyad spyad pa |

Fol. 36b1-37a2 (KN. 29. 5-9)

36b1	tena ¹⁸	ta<d> ¹⁹	duradhigamaṃ	śāradvatīputra	buddhajñānaṃ	kṛtavīryā ²⁰	kṛ-
KN			dūrānugatāḥ			kṛtavīryā	
C3			dūrānugatā			kṛtavī<r>yā	
2	tacaryāḥ	śāradvatīputra	tathagatā	arhantaḥ	samyaksambuddhā	āścaryādbhutadharma-	sama-
KN						āścaryādbhutadharma-	
C3						āca (s.e./ r. āscar-)	yādbhutadharmmasama-
3	nvāgatāḥ	śāradvatīputra	tathagatā	arhantaḥ	samyaksambuddhā . ²¹		durvijñeyadharmajñā-
KN	nvāgatā					durvijñeyadharmasamanvāgatā	durvijñeyadharmānujñā-
C3	nvāgatā :						durvijñeyadharmmajñā-
4	nāvino ²²	durājñā {na} nam ²³	sandhābhāṣitaṃ ²⁴	śāradvatīputra			tathāgatānām-
KN	tāvinaḥ	durvijñeyam		śāriputra	saṃdhābhāṣyam		tathāgatānām
C3	tāvino	durvijñeyam		sāriputra	sa { {ma} } ndhābhāṣyam		tathāgatānā<m

¹⁸ In my opinion, *tena* is the answer to the question of *tat kasya hetor* in Fol. 36a5-6.

¹⁹ Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): When a word ends with the same consonant as the first of the following word, one consonant is often dropped out. Toda (1981, p. 19): *ta(d)*.

²⁰ *kṛtavīryā* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p.19): *kṛtavīryā(h)*.

²¹ Toda (1981, p.19): *samyaksambuddhā* .

²² The letters *na* and *ta* have similar forms, so *nāvino* should be *tāvino*, the same principle as in note 13. Cf. Toda (1981, p. xiii): the following groups of characters often are not clear and can hardly be distinguished; *ta*, *na*, *bha*. Toda (1981, p.19): *nāvino*.

²³ I assume that *durājñānanam* should be *durājñātam* for two reasons. One is that *na* is ancillary, so *durājñānam* is more appropriate than *durājñānanam*. The other is that the letters *na* and *ta* have similar forms, so *durājñānam* should be *durājñātam*. Because the subject is *sandhābhāṣitaṃ*, passive tense ought to be used for the verb form. See note 22. Toda (1981, p.19): *ājñā [na] nam*.

²⁴ I translate *sandhābhāṣitaṃ* as [the mysterious intention of] someone's allusive speech. Cf. Ruegg (1989, pp. 295-328). BHSD (p. 557): this form seems to occur only in SP, while the ger. *sandhāya* is more widespread; *saṃdhi*, however, seems to be used, tho rarely, in the same sense, and once in Lañk text has *saṃdhyā-bhāṣya*, q.v., clearly in this same mg., and prob. error for *saṃdhā*.

5	m ²⁵	arhatā ²⁶	samyaksaṃbuddhānām	tat kasya heto ^{·27}	svapratyayaṃ	śāradvatīputra	tathāga-
KN		arhatām	samyaksaṃbuddhānām	tat kasya hetoḥ	svapratyayān		
C3		a>rhatām	samyaksaṃbuddhānām	tat kasya hetoḥ	svapra{ {ā} }tyayām		
6	tā	arhantaḥ	samyaksaṃbuddhā	dharman ²⁸	saṃprakāśayanti ²⁹	nānā{nā} ³⁰	vidhaupāyakaśalya ³¹ jñā-
KN				dharmān	prakāśayanti	vividhopāyakaśalyajñā-	
C3				dharmā<m>	saṃprak<<ā>>sayanti	vividhopāyakaśalyajñā-	
7	nadarśanahetukāraṇārambaṇa ³²	niruktivijñaptibhir			me śāradvatīputra	satvānām	dharmam saṃ-
KN	nadarśanahetukāraṇanirdeśanārambaṇaniruktiprajñaptibhis						
C3	nadarsanahetukāraṇārambaṇaniruktivijñaptibhiḥ						
37a1	prakāśitaṃ	tais tair ³³	upāyakaśalyaiḥ	śāradvatīputra tathāgatās	tatra tatra	lagnān satvān	pari-
KN		tais tair	upāyakaśalyais		tasmimṣ tasmiml	lagnān sattvān	pra-
C3		tais tair	upāyakaśalyaiḥ		tasmim tasmim	lagnān satvām	pra-
2	mocayaṃti ³⁴ ·						
KN	mocayitum						
C3	mocayanti						

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Because that Buddha's wisdom is difficult to obtain. Oh! Śāradvatīputra! The

²⁵ Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): The manuscript has a special use of nasals, e. g. double nasals nn, ṃn, ṃṃ, ṃṃ, ṃṃ, ṃṃ, ṃṃ, ṃṃ, for a single nasal. Burrow (1937, p. 18): An anusvara is usually inserted before n, m after short vowels. Habata (2007, p. lxxv): Auch nach langem Vokal.

²⁶ *arhatā* is BHS Gen. pl. Cf. Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): Anusvāra is often omitted but many wrong Anusvāra are found. The same is the case with Visarga. Habata (2007, p. lxxv, § 50): Der Anusvāra fehlt häufig im Auslaut vor anlautenden Konsonanten wie im Mittelindischen. BHSG (p. 20, 2.71): Furthermore, as in Pali and Pkt., a final nasal may be lost. Toda (1981, p.19): *arhatā(m)*.

²⁷ The mark · has two meanings; one is as a period. The other is Visarga (:) which lacks one dot. Additionally, Visarga (:) is never present before the · mark. I assume that there are two ways of thinking about *tat kasya heto* ·; one is that · is a period mark. The other is that the mark · is : (Visarga), and it is possible to read *tat kasya hetoḥ*. Cf. Habata (2007, p. lxxv, § 52): Der Visarga wird durch zwei Punkte geschrieben. Dieses Zeichen wird auch als Satzzeichen gebraucht, was in der Transkription durch Doppelpunkt dargestellt wird. Es gibt ein anderes Satzzeichen, das in den Handschriften durch einen hochgestellten Punkt geschrieben und in der Transkription durch Semikolon dargestellt wird.

²⁸ *dharman* is BHS Acc. pl.

²⁹ See note 7.

³⁰ *nānā* means various, so I assume that the copyist mistakenly wrote it as *nānānā*. Toda (1981, p.19): *nā[nā]nā*.

³¹ BHSG (p. 35, 4.51): Like Pali (Geiger 67), BHS very often keeps unchanged, with hiatus, two adjoining vowels in the seam of compounds; and a fortiori between separate words.

³² See note 7.

³³ Toda (1981, p. 19): *tai*.

³⁴ See note 7.

Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, who performed a heroic deed and undertook practice³⁵, ultimately obtained the dharma, which was marvelous and wonderful. Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas understood the dharma, which should be difficult to understand. Oh, Śāradvatīputra! The [mysterious intention of] Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas' allusive speech is difficult to understand. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas proclaim the dharmas, which has firm conviction in themselves. Oh, Śāradvatīputra! I proclaimed the dharmas to sentient beings by means of numerous kinds of skillfulness which were supreme knowledge, causes, reasons, authorities, interpretations, and proclamations. Oh, Śāradvatīputra! With every single skillfulness, the Tathāgatas completely release sentient beings attaching to numerous things.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 5b29-5c3

勇猛精進, 名稱普聞, 成就甚深未曾有法, 隨宜所說, 意趣難解. 舍利弗, 吾從成佛已來, 種種因緣, 種種譬喻, 廣演言教, 無數方便, 引導衆生, 令離諸著.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68a4-7

慇懃勞苦精進修行, 尚不能了道品之化. 又舍利弗, 如來觀察人所緣起, 善權方便, 隨誼順導. 猗靡現慧各爲分別, 而散法誼用, 度群生.

[Tibetan translation] D ja12b7-13a3; P chu14b4-7; S ma19b2-6; Z ma20b3-7

yun ring po nas rjes su zhugs pa | brtson 'grus mdzad mdzad pa ste | ngo mtshar dang rmad du byung ba'i chos dang ldan zhing shes par dka' ba'i chos rnams mkhyen pa'i phyir ro || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams kyi ldem por dgongs te bshad pa ni shes par dka'o (S, Z dka' ba'o) || de ci'i phyir zhe na | rang gis rig pa'i chos rnams thabs mkhas pa dang | ye shes mthong ba dang | rgyu (S, Z rgyud) dang | (P, S, Z om.) gzhi dang | (P, S, Z om.) dmigs pa dang | nges pa'i tshig dang | rnam par rig byed sna tshogs rnams (P, S om. rnams) kyis yang dag par ston te | thabs mkhas pa de dang de dag (S, Z | de bdag) gis sems can de dang de la chags pa rnams rab tu 'grel ba'i phyir ro ||

Fol. 37a2-37b2 (KN. 29. 10- 30. 1)

37a2	mahopāyakośalya ³⁶ jñānadarśanapārami ³⁷ prāptāḥ	śāradvatīputra	tathagatā
KN	mahopāyakaūśalyajñānadarśanaparamapāramitāprāptāḥ	śāriputra	tathāgatā
C3	mahopāyakaūśalyajñānadarśanaparamapāramiprāptoḥ	sāriputra	tathāgatā

³⁵ In my opinion, performing a heroic deed and undertaking practice mean to worship many Buddhas and practice austerity under many Buddhas, who were hundreds of thousands of myriads of *koṭis*. And through these acts, it is possible to obtain the dharma, which is marvelous and wonderful.

³⁶ BHS (p. 28, 3.78): o for au.

³⁷ K, Pk, C3-6, P1-2, T4, A1-2, and D1: *pārami*. Cf. BHSD (p. 341): (in Pali used both as in BHS, *pāramippatta*, *pāramiṃ-gata*, Childers, and, usually in the form *pāramī*, as equivalent to BHS *pāramitā* 2; BHS seems to use it only once in this latter sense; seems clearly deriv. in secondary -a, fem. ī from *parama*), mastery, supremacy; usually in vss; in LV 414.19 (vs) read *ṣaḍi pārami te*, the six supremacies (= paramita 2) are thine (see § 19.24).

3	arhantaḥ samyaksambuddhā ³⁸ · peśalā ³⁹ asaṃga ⁴⁰ pratibhānā ⁴¹	apratihatajñānadarśanā ⁴² a-
KN	arhantaḥ samyaksambuddhāḥ	asaṃgāpratihatajñānadarśana-
C3	arhantaḥ samyaksambuddhā	asaṃgāpratihatajñānadarśana-
4	prameya ⁴³ śāradvatīputra tathāgata ⁴⁴ · tathāgatajñānadarśanena aprameyas ⁴⁵ ta-	
KN		
C3		
5	thāgato ⁴⁶ balavaiśāradyāveṇake ⁴⁷ ndriyabodhyaṃga ⁴⁸ dhyānavimokṣasamāpattibhir	adbhuta-
KN	balavaiśāradyāveṇikendriyabalabodhyaṃgadhyānavimokṣasamādhisamāpattiyadbhuta-	
C3	balavaiśāradyāveṇikendriyabalabodhye<ṃ>gadhyānavimokṣasamādhisamāpattiyadbhuta-	
6	dharma ⁴⁹ samanvāgatāḥ śāradvatīputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā	vividhadharma-
KN	dharma samanvāgatā	vividhadharma-
C3	dharma samanvāgatā :	vividhadharma-

³⁸ *samyaksambuddhā* is BHS Nom. pl.

³⁹ *peśalā* does not appear in KN and other mss.

⁴⁰ See note 7.

⁴¹ *pratibhānā* is BHS Nom. pl.

⁴² Toda (1981, p. 19): *apratihatajñānadarśanā* .:

⁴³ *aprimeya* is BHS Nom. pl.

⁴⁴ *tathāgata* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 19): [*śāradvatīputra tathagata* ·].

⁴⁵ *aprimeyas* is BHS Nom. pl and *darśanena aprimeyas* is the same as in note 31. Toda (1981, p.19): *aprimeya* [*s*] *tathāgatobalavaiśāradyāveṇakendriyabodhyaṃgadhyānavimokṣa(samādhi)samāpattibhir*.

⁴⁶ *tathāgato* is BHS Nom. pl.

⁴⁷ *āveṇaka* ought to be *āveṇika* because *ā-veṇi* plus ka-suffix forms *āveṇika*. BHSD (p. 108): especially used of the eighteen *āveṇika* buddhadharma of a Buddha. AKBh (p.411, 8-10): *aṣṭādaśāveṇikās tu buddhadharmā balādauah | ye buddhasyaiva bhagavataḥ kṣayajñāne bhāvanām gacchanti nānyasya | katame 'ṣṭādaś | daśa balāni catvāri vaiśāradyāni trīṇi smṛtyupasthānāni mahākaraṇā ca |* *Indriya* (The Princeton Dictionary of Buddhism, p. 373): faith, effort, mindfulness, concentration, and wisdom. *Bodhyaṃga* (ibid., p. 139): seven qualities attained at the point of realizing the path of vision: mindfulness, investigation of factors, energy, rapture, tranquility, concentration, and equanimity. *Dhyāna*: ibid., p. 256 and Nakamura (1995), p.242. *Vimokṣa* (ibid., p. 972): the eight grades are (1) the perception of material form while remaining in the subtle-materiality realm; (2) the perception of external material forms while not perceiving one's own form; (3) the development of confidence through contemplating the beautiful; (4) passing beyond the material plane with the idea of "limitless space," one attains the plane of limitless space, the first level of the immaterial realm; (5) passing beyond the plane of limitless space with the idea of "limitless consciousness," one attains the plane of limitless consciousness; (6) passing beyond the plane of limitless consciousness with the idea "there is nothing," one attains the plane of nothingness; (7) passing beyond the plane of nothingness one attains the plane of neither perception nor nonperception; and (8) passing beyond the plane of neither perception nor nonperception one attains the cessation of consciousness.

⁴⁸ See note 7.

⁴⁹ *dharma* is BHS Acc. pl. Toda (1981, p.19): *dharma(bhiḥ)*.

7	saṃprakāśakā	mahāāścaryaprāptāḥ ⁵⁰	śāradvatīputra	tathāgatā arhanta<ḥ> ⁵¹	samyaksambuddhāḥ	pe<śalā> ⁵²
KN	saṃprakāśakāḥ	mahāāścaryādbhutaprāptāḥ	śāriputra	tathāgatā arhantaḥ	samyaksambuddhāḥ	
C3	saṃprakāśakā :	mahāasca<ṛ>yādbhutaprāptāḥ	sāriputra	tathāgatā arhantaḥ	saṃnyaksambuddhā	

37b1 asaṃgapatibhānā⁵³ · apratihatabalavaiśāradyā vividhadharmasamprakāśakā āścarya⁵⁴-

KN

C3

2 prāptāḥ

KN

C3

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas have attained the supremacy of great skillfulness and supreme knowledge. Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgatas have numerous purities, intelligence without attachment, and constant supreme knowledge. Countless Tathāgatas thoroughly followed the wonderful dharmas by means of the Tathāgata's supreme knowledge and [eighteen] distinctive Buddha qualities which are [ten] powers and [four] Buddha's fearlessnesses, [five] spiritual faculties, [seven] branches of enlightenment, [four] meditations, [eight] liberations, and a state of deep concentration produced through the practice of meditation (*samāpatti*). Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, who have obtained something great and marvelous, proclaim numerous dharmas. Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, who have purity, intelligence without attachment, the Buddha's confidence based on constant power, and have obtained something marvelous, proclaim numerous dharmas.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 5c3-9

所以者何。如來方便知見波羅蜜皆已具足。舍利弗，如來知見廣大深遠，無量·無礙·力·無所畏·禪定·解脫·三昧，深入無際，成就一切未曾有法。舍利弗，如來能種種分別，巧說諸法，言辭柔軟，悅可衆心。舍利弗，取要言之，無量無邊未曾有法佛悉成就。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68a7-9

以大智慧·力·無所畏·一心·脫門·三昧，正受，不可限量。所說經典不可及逮，而如來尊較略說耳。

[Tibetan translation] D ja13a3-5; P chu14b7-15a3; S ma19b6-20a3; Z ma20b7-21a4

shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam ni (S, Z |) thabs

⁵⁰ *mahāāścarya* is not a regular Sanskrit saṃdhi because there are two *ā*. However, according to the rule of hiatus, this is acceptable. See note 31.

⁵¹ See note 26. Toda (1981, p. 19): *arhanta(h)*.

⁵² The manuscript has only *pe*. Upon reading of folio 37a3 and Toda (1981, p. 19), I add *śalā*. Toda (1981, p. 19): *pe(śalā)*.

⁵³ See note 40 and 41.

⁵⁴ See note 31.

mkhas pa chen po dang | ye shes mthong ba dam pa'i pha rol tu byon pa'o || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam ni | (S, Z om.) chags pa med cing thogs pa med pa'i ye shes mthong ba dang | stobs dang (S, Z |) mi 'jigs pa dang (S, Z |) ma 'dres pa dang (S, Z |) dbang po dang (S, Z |) stobs dang (P, S, Z |) byang chub kyi yan lag dang (P, S, Z |) bsam gtan dang | rnam par thar pa dang (S, Z |) ting nge 'dzin dang (S, Z |) snyoms par 'jug pa dang | rmad du byung ba'i chos (S, Z rnam) dang ldan te | chos rnam pa sna tshogs yang dag par ston pa'o || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam ni ngo mtshar chen po brnyes pa'o ||

Fol. 37b2-38a1 (KN. 30. 1-30. 6)

37b2	śāradvatīputra	tāvad	eva	bhāṣitaṃ	bhavatu ·	paramāścaryaprāptāḥ	śāradvatīputra
KN	alam śāriputra	etāvad	eva	bhāṣitaṃ	bhavatu	paramāścaryaprāptāḥ	śāriputra
C3	alam śāriputra	etāvad	etad	bhāṣitaṃ	bhavatu :	paramāsc<r>yaprāptāḥ	śāriputra
3	tathāgatā	arhamtaḥ ⁵⁵	samyaksaṃbuddhās	tat kasya heto · ⁵⁶	tathāgata	eva	śāradvatīpu-
KN	tathāgatā	arhantaḥ	samyaksaṃbuddhāḥ		tathāgata	eva	śāripu-
C3	tathāgatā	arhantaḥ	saṃmyaksaṃbuddhāḥ		tathāgata	eva	śāripu-
4	tra tathāgatasya dharmam ⁵⁷	deśayed yān dharmās ⁵⁸	tathāgata	eva	jānīte ⁵⁹ .	sarvadharmā ⁶⁰	api
KN	tra tathāgatasya dharmam	deśayed yān dharmāṃs	tathāgato		jānāti	sarvadharmān	api
C3	tra tathāgatasya dharmam	deśayed yān dharmāns	tathāgato		jānāti	sarvadharmān	api
5	śāradvatīputra	tathāgata	eva	deśayati	tathāgata	eva	jānīte ⁶¹
KN	śāriputra	tathāgata	eva	deśayati	sarvadharmān	api	tathāgata
C3	śāriputra	tathāgata	eva	desayati	sarvadharmān	api	tathāgata
							ye ca ta ⁶²
							dharmā
							ya-
							ye ca te
							dharmā
							ya-
							dharṣā : [ya]-
6	thā ca te dharmā	yādṛśās ca te dharmā	yallakṣaṇās ca te dharmā	yatsvabhāvās ca te dharmā	ye ca		
KN	thā ca te dharmā	yādṛśās ca te dharmā	yallakṣaṇās ca te dharmā	yatsvabhāvās ca te dharmāḥ	ye ca		
C3	thā ca te dharmā :	yādṛśās ca te dharmā :	yallakṣaṇās ca te dharmā :	yatsvabhāvās ca te dharmmā :	ye ca		
7	yathā ca yādṛśās ca yallakṣaṇās ca ·	yatsvabhāvās	ca te dharmās	teṣu dharmeṣu tathā-			
KN	yathā ca yādṛśās ca yallakṣaṇās ca	yatsvabhāvās	ca te dharmā iti	teṣu dharmeṣu tathā-			
C3	yathā ca yādṛśās ca yallakṣaṇās ca	yatsvabhāvā{{yā}}s	ca [te] dharmā iti				

⁵⁵ See note 7.

⁵⁶ Only the Kashgar ms. has *tat kasya heto* . 『妙法華』 has the reading 「所以者何」, and this is the same meaning of *tat kasya hetoḥ* . Cf. the same as in note 27.

⁵⁷ Following note 7, *dharmam* is *dharmān* (BHS Acc. pl.). Toda (1981, p.19): *tathāgata eva śāradvatīputra tathāgatasya dharmam deśayed yān dharmā(m)s tathāgata eva jānīte*.

⁵⁸ *dharmās* is BHS Acc. pl. Toda (1981, p.19): *dharmā(m)s*.

⁵⁹ The Kashgar ms. uses *Ātmanepada* (*jānīte*).

⁶⁰ *sarvadharmā* is BHS Acc. pl. Toda (1981, p.19): *sarvadharmā(m)*. See note 31.

⁶¹ See note 59.

⁶² *ta* is BHS Nom. pl.

38a1 gata eva pratyakṣo parokṣa⁶³ ity
KN gata eva pratyakṣo 'parokṣah ||
C3

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Only that much should be what I have said (= Let what is said just be). Oh! Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas obtained something supreme and marvelous. What is the reason for it? Oh! Śāradvatīputra! Only the Tathāgata will impart the dharmas to the Tathāgata, which only the Tathāgata knows. Oh, Śāradvatīputra! Only the Tathāgata also dictates all dharmas, which only the Tathāgata knows. [That is to say,] what those dharmas are, what those dharmas look like, what kind of dharmas they are, what characteristics those dharmas have, and of what nature those dharmas are. [In other words,] what, how, what kind of, what characteristics, and of what nature those dharmas are. The Tathāgata alone has the witness and clearly understands with regard to those dharmas.”

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 5c9-13

止舍利弗，不須復說。所以者何。佛所成就，第一希有難解之法，唯佛與佛乃能究盡，諸法實相。所謂，諸法如是相，如是性，如是體，如是力，如是作，如是因，如是緣，如是果，如是報，如是本末究竟等。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68a9-12

大聖所說得未曾有巍巍難量。如來皆了諸法所由，從何所來，諸法自然。分別法貌，衆相，根本，知法自然。

[Tibetan translation] D ja13a5-13b1; P chu15a2-6; S ma20a3-7; Z ma21a4-b1

shā ri'i bu de tsam gyis bshad pa chog par gyis zhig || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams ni ngo mtshar mchog brnyes (Z bsnyes) pa ste | shā ri'i bu de bzhin gshegs pas chos gang mkhyen pa'i chos de yang de bzhin gshegs pas de bzhin gshegs pa nyid la 'chad do || shā ri'i bu chos thams cad kyang de bzhin gshegs pa nyid ston to || chos thams cad kyang de bzhin gshegs pa nyid kyis mkhyen te (S, Z |) chos de dag gang yin pa dang | chos de dag ji lta bu yin pa dang | chos de dag ci 'dra ba dang | chos de dag gi mtshan nyid gang yin pa dang | chos de dag gi ngo bo nyid ci yin pa dang | chos de dag gang yin pa dang | ji lta bu yin pa dang (S, Z |) ci 'dra ba dang | mtshan nyid gang yin pa dang (P, S, Z |) ngo bo nyid ci yin pa yang mkhyen to ||

⁶³ See note 16. Toda (1981, p. 20): *'parokṣa*. I presume that 『正法華』 reads *aparokṣa* as 自然. Tibetan translation, *mkhyen to*, might mean *'parokṣa*. 『妙法華』 does not have this Sanskrit sentence, *teṣu dharmeṣu tathāgata eva pratyakṣo parokṣa ity*, or I assume that Kumārajīva might translate this sentence based on his understanding as 十如是.

Fol. 38a1-38b1 (KN. 30. 7-31. 2)

38a1	atha	khalu	bhagavāṃs	tasyā<ṃ> ⁶⁴	velāyāṃm ⁶⁵	idam	evārthaṃ	bhūyaso ⁶⁶	mātra-
KN	atha	khalu	bhagavān			etam	evārthaṃ	bhūyasyā	mātra-
C3	atha	khalu	bhagavān			etam	evārtha<ṃ>	bhūyasyā	mātra-

2	yā	saṃdaśayitukāma ⁶⁷				imā	gāthā	abhāṣata	aprimeyā	mahāvīrā	loke
KN	yā	saṃdarśayamānas	tasyāṃ	velāyāṃ		imā	gāthā	abhāṣata	aprimeyā	mahāvīrā	loke
C3	yā	sandesayamānas	tasyāṃ	velāyāṃ		imā	gāthā	abhāṣate	aprimeyā	mahā[v]īrā	loke

3	samarumānuṣe ·	na śakyam		sarvasatvebhīr	jñātum		lokavināyakāḥ 1	balā	vimokṣā	ye
KN	samerumānuṣe	na śakyam	sarvaśo		jñātum	sarvasattvair	vināyakāḥ 1	balā	vimokṣāś	ca ye
C3	sa[marumā]nuṣ[e]	na sa[kya]	/// /// [vaso		jñā]tum	sarvasattvair	vināyakāḥ (1)	balā	vimokṣā	ye

4	teṣāṃ	vaiśāryāś	ca yādṛśāḥ	yādṛśā	buddhadharmās	ca na śakyam	jñātu {ṃ} ⁶⁸	kenacit 2	pūrvam	ni-
KN	teṣāṃ	vaiśāryāś	ca yādṛśāḥ	yādṛśā	buddhadharmās	ca na śakyam	jñātu	kenacit 2	pūrve	ni-
C3	teṣāṃ	vaiśāryāś	ca yādṛśā :	yādṛśā	buddhadharmās	ca na śakyam	jñātu	kenacit (2)	pūrve	ni-

5	ṣevitā	caryā	buddhakoṭṭina ⁶⁹	sāntike ⁷⁰ ·	gaṃbhīrās ⁷¹	caiva	sūkṣmās ⁷²	ca	durvijñeyā ·	sudurdṛśā 3	ta-
KN	ṣevitā	caryā	buddhakoṭṭina	antike	gaṃbhīrā	caiva	sūkṣmā	ca	durvijñeyā	sudurdṛśā 3	ta-
C3	ṣevitā	ca<r>yā	buddhakoṭṭina	antike	gaṃbhīrā	caiva	sūkṣū(?)	ca	durvijñeyā	sudu<r>dṛśā (3)	ta-

⁶⁴ See note 26. Toda (1981, p.20): *tasyā(ṃ)*.

⁶⁵ See note 25.

⁶⁶ BHSD (p. 411): *bhūyasya, syā, so, bhūyosya*, with *mātrayā* (instr. of Skt. *mātrā*).

⁶⁷ BHSG (p. 21, 2. 87): Forms of *darś-*, Mindie *dass-* (or *damś*), appearing as *daś-* with single *ś*. Toda (1981, p. 20): *saṃda(r)śayitukāma*. N1 ms. reads *samdasayānas*.

⁶⁸ Due to the meter (v), *ṃ* should be omitted. Toda (1981, p.20): *jñātu [ṃ]*. Cf. Edgeton (1946, p. 200): Or, when a short syllable is required, a final nasal consonant may be dropped (with shortening of the vowel if it was long); or a final nasal vowel denasalized. K. R. Norman (1995, §43. pp. li-lii): The shortening of nasalized vowels. In a number of words a nasalized vowel is to be scanned as short. This is shown in O by the omission of the anusvara, although this is, of course, on guide to the actual pronunciation of a short nasalized vowel.

⁶⁹ *buddhakoṭṭina* is BHS Gen. pl. See note 36.

⁷⁰ BHSD (p. 591): Pāli *sāntike, kā*; of which this may well be a secondary Sktization; but it reveals the true origin of the M Indic form.

⁷¹ See note 7. *gaṃbhīrās* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 20): *gaṃbhīrā [ś]*.

⁷² *sūkṣmās* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 20): *sūkṣmā [ś]*.

學佛道業，果應至道場，猶如行慈愍。使我獲斯慧如十方諸佛，諸相普具足。衆好亦如是。

[Tibetan translation] D ja13b1-4, P chu15a6-15b2; S ma20a7-b4; Z ma21b2-6

de nas bcom ldan 'das kyis (S, Z om. kyis) don de nyid rgyas par ston cing (S, Z /) de'i tshes tshigs su bcad pa 'di dag bka' stsal to || lha mir bcas pa'i 'jig rten na || *dpa' bo* (**Z dpa'o) chen po dpag med pa || nram 'dren sems can thams cad kyis || nram pa kun tu shes mi nus || de dag stobs dang rnam thar dang || 'jigs med gang dag ci 'dra dang || sangs rgyas chos rnam ci 'dra ba || sus kyang shes par mi nus so || sangs rgyas bye ba'i (P ba) gang dag na || zab cing shin tu phra ba dang || rig dka' mthong bar dka' ba yi (S, Z yin) || spyod pa dag ni sngan chad bsnyen || bskal pa bye ba bsam yas su || spyod pa de dag spyad pa yi || 'bras bu de ni ci 'dra ba || byang chub snying por ngas mthong ngo || de ni 'jig rten rnam 'dren pa || gzhan dag dang (P na) ni ngas kyang de || ci lta yin dang ci 'dra dang || de yi mtshan nyid ci 'dra shes||

Fol. 38b1-39a2 (KN. 31. 2-14)

38b1	na taṃ	darśayitum śakyam	vyāhāro sya ⁷⁹	na vidyate ·	nāpi	sap ⁸⁰ tādrśa ⁸¹	satvaḥ	kaści ⁸²		
KN	na tad	darśayitum śakyam	vyāhāro 'sya	na vidyate	nāpy	asau tādrśaḥ		kaścit		
C3	na ta	darsiyitum sa[ky]am	vyā{vyā}hāro 'sya	na vidyate	nāpy	asau tādrśaḥ		kascit		
2	<l>lokesmi ⁸³	vidyate 6	yasya tad ⁸⁴	bhāṣayed	dharmam	bhāṣitam	vā	vijānayet ⁸⁵	anyatra bodhis-	
KN	sattvo	loke asmi	vidyate 6	yasya taṃ	deśayed	dharmam	deśitam	cāpi	jānīyāt	anyatra bodhis-
C3	satvā	lokasmi	vidyate (6)	yasya tad	desayed	dharmam	desitam	vā	vijānīyāt	anyatra bodhis-
3	tvebhir ⁸⁶	adhimuktīya ⁸⁷	ye sthitāḥ 7	ye pi	bhavanti sugatāna ⁸⁸			śrāvakā ⁸⁹ ·	kṛtādhikārāḥ ⁹⁰	
KN	ttvebhyo	adhimuktīya	ye sthitāḥ 7	ye cāpi		te lokaviduṣya	śrāvakāḥ		kṛtādhikārāḥ	
C3	tvebhyo	adhimuktau hi	ye sthitāḥ (7)	ye cāpi		te lokaviduṣya	srāvakāḥ		kṛtādhikārāḥ	

⁷⁹ See note 16.

⁸⁰ The letter form of *p* and *s* look similar, so *sap* might be *sas*. When it is compared to the form *sas tādrśa* of folio 35a5, it could be possible to read it as *sas tādrśa*, not *sap tādrśa*. Cf. Toda (1981, p. xli): *sap* (r. *sas*).

⁸¹ *tādrśa* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p.20): *tādrśa(h)*.

⁸² See note 19.

⁸³ *lokesmi* is BHS Loc. sg. Toda (1981, p. 20): (*l*) *lokesmi*.

⁸⁴ BHSG (p. 114, 21.11): The Nominar ending *-ṃ* (*-m*) replaces *-d* (*-t*), as commonly in M Indic. Instances are very numerous, in most texts chiefly in verses, but also occasionally in prose, and not only in Mv.

⁸⁵ *jānīyāt* is the correct form of Optative 3 sg. However, *vijānayet* might be Optative 3 sg. I assume that the copyist knew the way to add *na* to the ninth type verb ($\sqrt{jñā}$). In addition, the copyist also knew how to construct the Optative form based on his knowledge according to the rule of the fourth type verb, so he added *ya* (*jānaya*). Finally, the copyist constructed the Optative form by changing *jānaya* to *vijānayet*.

⁸⁶ BHSD (p. 41): (2) except; in Skt, and Pali hardly used except as preposition (with abl. in Skt., Pali *aññatra* also with instr. and gen.) ... In BHS I have noted a single case, not wholly certain, of *anyatra* as preposition with instr.

⁸⁷ *adhimuktīya* is BHS Loc. sg.

⁸⁸ *sugatāna* is BHS Gen. pl.

⁸⁹ *śrāvakā* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 20): *śrāvakā* ·.

⁹⁰ BHSD (p. 12): *kṛtādhikāra* is very common and in BHS most often refers to services performed for present or past Buddhas.

4	sugatena varṇitāḥ	kṣīṇāsravā antimadehadhāriṇo	na teṣa ⁹¹	<viṣa>yo ⁹²	sti ⁹³	jināna ⁹⁴	jñā-		
KN	sugatānuvarṇitāḥ	kṣīṇāsravā antimadehadhāriṇo	na teṣa	viṣayo	'sti	jināna	jñā-		
C3	sugatānuvarṇitāḥ	kṣīṇāsravā anti {ṁ} madehadhāriṇo	na teṣa	viṣayo	'sti	jināna	jñā-		
5	ne ⁹⁵ (8)	sacaiva sarvā m ⁹⁶ aya ⁹⁷	lokadhātum	pūrṇo	bhavec	chārisubhāna ⁹⁸	sarvaśaḥ	ekībhavitvā	
KN	ne 8	sacaiva sarvā iya	lokadhātu	pūrṇā	bhavec	chārisutopamānām		ekībhavitvā-	
C3	ne (8)	sa caiva satvā iya	lokadhātū	pūrṇā	navec	chārisutopamānām		ekībhavitvā-	
6	anucintayinsu ⁹⁹	sugatasya jñānaṁ na te	śakya {ṁ} ¹⁰⁰	jñātum 9	sacaiva	ca	tvatsadrśebhi ¹⁰¹	pa-	
KN	nuvicintayeyuḥ	sugatasya jñānaṁ na hi	śakya	jānitum 9	sace ¹⁰²	ha	tvamsadrśakehi	pa-	
C3	na tu	cintayeyuḥ	sugatasya jñānaṁ na taiḥ	sakya	jānitum (9)	sace	ha	tvatsadrśakehi pa-	
7	ṇḍitai . ¹⁰³	pūrṇā	bhavet ¹⁰⁴	sarvā	daśa ddiśāni ·	ye cāpi mahyaṁ imi ¹⁰⁵	anyi ¹⁰⁶	śrāvakās	tebhi-
KN	ṇḍitaiḥ	pūrṇā	bhaveyur	daśa pi ddiśāyo	ye cāpi mahyaṁ imi	śrāvakā	'nye		
C3	ṇḍitaiḥ	pūrṇā	bhaveyu	ddasa viddisāyāḥ	ye cāpi mahyaṁ imi	srā<va>kā	'nye		

⁹¹ *teṣa* is BHS Gen. pl.

⁹² Due to the meter and context, I add *viṣa*. Toda (1981, p.20): (*viṣa*)yo.

⁹³ See note 16.

⁹⁴ *jināna* is BHS Gen. pl.

⁹⁵ According to Nordturkistanische Brāhmī, Typ a (Schrifttypus V) and Nordturkistanische Brāhmī, Typ b (Schrifttypus VI), it is possible to read as *jñā* of *jñāne*. Cf. Sander (1968, Tafel 29).

⁹⁶ BHS (p. 35, 4. 59): m as saṁdhi-consonant. This is much commoner than any of the others, and occurs more or less everywhere, tho more commonly in verses than in prose.

⁹⁷ Due to the meter (v), *aya* is more appropriate than *ayaṁ*. Cf. BHS (p. 20, 2.72): Loss of final nasal occurs in many endings, usually m.c.

⁹⁸ BHS (p. 526): *śārisuta*= prec. (only in vss). *chārisubhāna* is BHS Ins. sg.

⁹⁹ *anucintayinsu* might be the i-Aorist (type 4) of Pāli, which is the same as iṣ-Aorist of Sanskrit. I assume that this sentence is an if-clause, but in this sentence, the aorist form might also be suitable grammatically. Cf. BHS (p. 160, 32. 85): optative forms used as aorists. Toda (1981, p. xlix):3rd pl. iṣ-Aorist.

¹⁰⁰ Due to the meter (v), it is more appropriate to use *śakya* than *śakyaṁ*. Toda (1981, p. 20): *śakya [ṁ]*.

¹⁰¹ *tvatsadrśebhi* is BHS Ins. pl. According to the compound rule, *tvatsadrśa* is a correct form, so the Kashgar ms. and C3 ms. have a more appropriate form than KN which has *tvamsadrśa*. I assume that *tvamsadrśa* might be constructed in the Nepalese ms. Cf. BHS (p. 19, 2. 67): In this same place Senart notes the frequent occurrence of *t* for anusvara (or BHS *n*) before *s*, which he nowhere accepts in his edition, writing always *n* (for either *n* or *t* of mss.), or *m*.

¹⁰² BHS (p. 549): *sace* = *sace(t)*.

¹⁰³ *paṇḍitai* is BHS Ins. pl. Toda (1981, p. 20): *paṇḍitai* ·

¹⁰⁴ BHS (p. 129, 25. 4): There is widespread confusion in BHS about person and number, usually in that 3 sg. forms are used for any person and either number. This usage perhaps started with the optative and aorist, where—largely by phonetic loss of endings—confusion set in in Middle Indic.

¹⁰⁵ *imi* is BHS Nom. pl.

¹⁰⁶ *anyi* is BHS Nom. pl.

39a1	ḡ ¹⁰⁷	ca pūrṇā bhavi ¹⁰⁸	evam eva (10)	ekībhavitvāna ¹⁰⁹	pi ¹¹⁰	sarvi ¹¹¹	te	yadi	anucintayeyu . ¹¹²	sugatasya jñā-
KN	teṣām	pi pūrṇā bhavi	evam eva 10	ekībhavitvāna	ca		te 'dya sarve		vicintayeyuḥ	sugatasya jñā-
C3	teṣām	pi pūrṇā bhavi	evam eva (10)	ekībhavitvāna	ca		te 'dya sarve		vicintayeyuḥ	sugatasya jñā-
2	nam	na śakta : ¹¹³	sarve sahitā pi ¹¹⁴ jñātu<ṃ> ¹¹⁵				bhāvāprameyaṃ			sugatasya jñānam 11
KN	nam	na śakta	sarve sahitā pi jñātum		yac	cāprameyaṃ	mama	buddhajñānam 11		
C3	nam	na sakya	sarve sahitā 'pi jñātum		yācāprameyaṃ		maya	jñātu buddham (11)		

[Translation]

- (6)-(7) It (= the fruit) is not possible to convey. This discourse does not exist. No such manner of sentient being, who will either convey or understand the dharma, which was conveyed [by the Buddhas], exists in the world at all except for Bodhisattvas, who stand in their strong confidence. (*Pathyā*¹¹⁶)
- (8) There are also the *Sugatas*' disciples (*śrāvakas*), who follow [the Buddha], are praised by the *Sugata*, are free from depravities, and who are in the last stage of their existences. [But] their range [of wisdom] is not [the same] in reference to the Buddha's wisdom. (*Indravamśā*¹¹⁷, *Vamśasthā*, *Indravamśā*, *Upendravajrā*¹¹⁸)
- (9) If this whole world were entirely filled with the like of Śāriputra, having joined together, and they were to consider [the *Sugata*'s wisdom], they would not be able to understand the *Sugata*'s wisdom. (*Upendravajrā*, *Indravamśā*, *Indravajrā*, *Indravajrā*¹¹⁹)
- (10) Moreover, if all ten directions were filled with wise people like you, and, even if these who were my other disciples (*śrāvakas*) were filled with these [ten directions] like this [situation], (*Vamśasthā*, *Indravajrā*¹²⁰, *indravamśā*, *indravajrā*)
- (11) having joined together, and even if all of them were to consider the *Sugata*'s wisdom, even along with everyone, they would not be able to understand the *Sugata*'s infinite true knowledge. (*Indravamśā*,

¹⁰⁷ *tebhis* is BHS Ins. pl.

¹⁰⁸ The subject in this sentence is pl. form, so *bhavi* (3 sg. optative) might be not appropriate for the verb form. However, because of the meter (v), the form *bhavi* is necessary here instead of *bhave* (3 pl. optative). Cf. all other mss. have *bhavi*. Tsukamoto et al (1988, p. 44). BHSG (p. 141, 29,7): it may be shortened to *i* in verse, almost invariably where meter requires a short syllable. Ibid. (p. 26, 3.60): in other cases *e* seems more or less clearly to occur as metrical lengthening for *i*.

¹⁰⁹ *ekībhavitvāna* is BHS Gerund.

¹¹⁰ See note 16. Toda (1981, p. 20): '*pi*.

¹¹¹ *sarvi* is BHS Nom. pl.

¹¹² *anucintayeyu* · should be *anucintayeyuḥ* due to the meter (-). I assume that · might be Visarga (:). Toda (1981, p.20): *anucintayeyu* ·. See note 27.

¹¹³ Because of the meter (v), *śakta* is more appropriate than *śaktaḥ*. *śakta* is BHS, Nom. pl. Toda (1981, p.20): *śakta* ·.

¹¹⁴ See note 16.

¹¹⁵ *jñātum* is more appropriate than *jñātu* due to the infinitive form. Moreover, concerning the meter, *jñātum* is acceptable due to *Indravamśā*, v-v --v v-v --. Cf. Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography), ibid. p.20: *jñātu(m)*.

¹¹⁶ (verse 6cd) *nāpi sap tādṛśa satvaḥ kaści lokesmi vidyate*: -v-- v--- -v-- v-v- (*śa* is -).

¹¹⁷ *ye pi bhavanti sugatāna śrāvakā*: --v --v v-v -v- (*pi* and *ti* are -).

¹¹⁸ *na teṣa <viṣa>yo sti jināna jñene*: v-v vv(-)-v v-v --.

¹¹⁹ *sugatasya jñānam na te śakyam jñātum*: vv(-)-v --v v-v -- (*te* is v and *m* of *yam* is an extra letter).

¹²⁰ *pūrṇā bhavet sarvā daśa ddiśāni* ·: --v --v v-v -v (*vā* is v).

*Indravajrā*¹²¹, *Upeṇḍravajrā*, *Indravajrā*)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 5c25-6a6

是法不可示。言辭相寂滅。諸餘衆生類，無有能得解。除諸菩薩衆信力堅固者。諸佛弟子衆，曾供養諸佛，一切漏已盡，住是最後身，如是諸人等，其力所不堪。假使，滿世間皆如舍利弗，盡思共度量，不能測佛智。正使，滿十方皆如舍利弗，及餘諸弟子，亦，滿十方刹，盡思共度量，亦復不能知。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68a24-68b8

其身不可見。亦無有言說。察諸群黎類，世間無與等。若說經法時，有能分別解其惟有菩薩，常履懷信樂。假使，諸佛弟子之衆，所作已辦，如安住教，盡除疾病，執御其心，不能達彼。若干種慧設令於斯，佛之境界，皆以七寶充滿其中，以獻安住，神明至尊，欲解此慧，終無能了。正使，十方諸佛刹土，諸明哲者悉滿其中，及吾現在，諸聲聞衆一切具足，亦復如是。一時普會共思惟之計安住慧，無能及知佛之智慧無量若斯。欲知其限莫能逮者。

[Tibetan translation] D Ja13b4-7; P Chu15b2-6; S ma20b5-21a3; Z ma21b6-22a5

de ni bstan du mi nus te || de ni brjod du yong med do || mos pa la ni gang gnas pa || byang chub sems dpa'
ma gtogs par || gang la chos de bstan pa dang || bstan pa dag kyang shes pa yi || de 'dra'i sems can su yang
ni || 'jig rten dag na yod ma yin || gang dag 'jig rten mkhyen pa'i nyan thos pa || lhag par byas pa bde bar
gshegs pas bsngags || zag zad tha ma'i lus 'dzin de dag gi || yul ni rgyal ba'i ye shes 'di la med || gal te 'jig
rten de (S, Z 'di) dag thams cad du || shā ri'i bu *dang 'dra bas gang* (S, Z gang 'dra bar de) gyur te || gcig
tu 'dus par gyur nas rnam (P nam) bsams kyang || de dag bder (S, Z bde) gshegs ye shes shes mi nus || gal
te khyod dang 'dra ba'i mkhas rnam kyis || phyogs rnam bcu (S, Z bcur) char gang bar gyur pa dang ||
gang yang nga yi nyan thos 'di gzhan rnam || de dag gis kyang de bzhin gang gyur te || de dag thams cad
gcig tu deng 'dus nas || bde bar gshegs pa'i ye shes rnam (P rnam) bsams kyang || ji (S, Z ci) tsam tshad
med ye shes ngas shes pa || thams cad 'dus pas shes par mi nus so ||

Fol. 39a2-39b1 (KN. 32. 1-32. 8)

39a2 pratyekabu-
KN pratyekabu-
C3 pratyekabu-

¹²¹ *anucintayeyu · sugatasya jñānam*: vv(-)-v --v v-v -- (yu · is -).

Appendix A: The translation of the Kashgar ms.

3	ddhānam ¹²²	anāsravāṇāṃ	tīkṣṇendriyāṇāṃ	timadeha ¹²³	dhāriṇāṃ ¹²⁴	daśa ddiśā ¹²⁵	sarva ¹²⁶	bhaveyu ¹²⁷
KN	ddhāna	anāsravāṇāṃ	tīkṣṇendriyāṇāṃ	timadehadhāriṇāṃ		diśo daśa	sarva	bhaveyu
C3	ddhāna	anāsravāṇāṃ	tīkṣṇendriyā	<ṇā>{ma}	ntimadehadhāriṇāṃ	diso dasaḥ	pūrṇa	bhaveyu sarve
4	pūrṇā	yathā	ṇāḍānāṃ	vanaveṇunā ¹²⁸	vā (1) 2	ekībhavitvā	anucintayeyur	mamā ¹²⁹ -
KN	pūrṇā	yathā	ṇāḍānāṃ	vanaveṇunāṃ	vā 12	ekībhavitvāna	vicintayeyur	mamā-
C3		yathā	ṇāḍānāṃ	vanaveṇunāṃ	vā (12)	ekībhavitvānu	vicintayeyuḥ	mamā-
5	gradharmasya	pradeśamātram ¹³⁰	kalpāna ¹³¹	koṭīnayūtāna ¹³²	cintay ¹³³	na tasya bhūtaṃ	parijāni ¹³⁴	a-
KN	gradharmāṇa	pradeśamātram	kalpāna	koṭīnayūtān		anantān	na tasya bhūtaṃ	parijāni
C3	gradharmāṇa	pradesamātram	kalpānakoṭīnayūtān			anamtāt	na tasya antaṃ	parijoti
6	rtham 13	navayānasamprasthita ¹³⁵	bodhisatvāḥ	kṛtādhikārā ¹³⁶	bahubuddhakoṭiṣu	·	suniścītā-	
KN	rtham 13	navayānasamprasthita	bodhisattvāḥ	kṛtādhikārā	bahubuddhakoṭiṣu		suviniścītā-	
C3	rtham (13)	navayānasamprasthita	bodhisatvāḥ	kṛtādhikārā	bahubuddhakoṭiṣu		suviniscitā-	

¹²² *pratyekabuddhānam* is BHS Gen. pl. Speijer (1973, p. 91, 123. 6): Verbs of fulness, repletion, satisfaction are often constructed with a genitive.

¹²³ See note 7.

¹²⁴ See note 25.

¹²⁵ *ddiśā* is BHS Nom. pl. Cf. Toda (1981, p. 20): *ddiśā(h)*.

¹²⁶ Because of the meter (v), *sarva* is more appropriate than *sarve*.

¹²⁷ Toda (1981, p. 20) reads *taveyu*. I read this as *bhaveyu* because *ta* and *bha* look similar. Cf. BHSD (p. 133, 26.18): principally optative u occurs very commonly, and by no means only when in verses the meter requires a short final.

¹²⁸ *vanaveṇunā* is BHS Gen. pl. Toda (1981, p. 20): *vanaveṇunā(m)*.

¹²⁹ According to Turkistanischer Gupta-Typ (Schrifttypus III), it is possible to read as *mā* of *mamā*. Cf. Sander (1968, Tafel 30). Toda (1981, p. 20): *mamāgradharmasya*. Tsukamoto et al. (1988, p. 47): all Nepalese mss. and Gilgit mss. are *mamāgra*.

¹³⁰ See note 25.

¹³¹ *kalpāna* is BHS Gen. pl.

¹³² *koṭīnayūtāna* is BHS Gen. pl.

¹³³ Toda (1981, p. xlvihi): iṣ-Aorist. Cf. BHS (p. 160, 32. 85, p. 176, 35. 50).

¹³⁴ Toda (1981, p. xlvihi): iṣ-Aorist.

¹³⁵ *samprasthita* is BHS Nom. pl.

¹³⁶ See note 90.

7	rthā	bahudharmadeśakās ¹³⁷	teṣāṃ pi ¹³⁸	pūrṇā	bhavi ¹³⁹	mā daśa ddiśa ¹⁴⁰	14	naḍāna ¹⁴¹	veṇūna ¹⁴²	va ¹⁴³	nityakālam acchidra ¹⁴⁴
KN	rthā	bahudharmabhāṇakās	teṣāṃ pi	pūrṇā		daśimā diśo bhavet 14		naḍāna	veṇūna	ca	nityakālam acchidra-
C3	rthā :	bahudharmabhāṇakās	teṣāṃ pi	pūrṇā		daś' imā diśo bhavet (14)		naḍāna	veṇūna	ca	nityakālam acchidra-
39b1	pūrṇo bhavi ¹⁴⁵	sarvalokaḥ	ekībhavitvā	anucintayeyur ye ¹⁴⁶	dharma ¹⁴⁷	sākṣā ¹⁴⁸	sugatena sprṣṭāḥ ¹⁴⁹	15			
KN	pūrṇo bhavi	sarvalokaḥ	ekībhavitvāna	vicintayeyur yo	dharma	sākṣāt	sugatena dṛṣṭaḥ 15				
C3	pūrṇo bhavi	sarvaloke	ekībhavitvāna	vicintayeyuḥ yo	dha<r>ma	sākṣāt	sugatena dṛṣṭa (15)				

[Translation]

- (12) If all ten directions were filled with *Pratyekabuddhas*, who are free from toxicants, have keen sense organs, and maintain the last stage of their existence, like a sort of reed or new-bamboo forest, (*Indravajrā, Indravamśā, Upendravajrā, Upendravajrā*)
- (13) having joined together, they could consider a part of my (= the Buddha's) best dharma. They considered [a part of the Buddha's best dharma] for myriads of *koṭis* of aeons, [however], they had not understood that true purpose. (*Indravajrā, Upendravajrā, Indravamśā, Upendravajrā*)
- (14) Bodhisattvas proceed with a newly-acquired vehicle, follow many Buddhas for *koṭis*, investigate [the purpose] thoroughly, and teach many dharmas. If these ten directions were filled with them, (*Indravajrā¹⁵⁰, Vaṃśasthā, Vaṃśasthā, Indravamśā,*)
- (15) and the whole world was always densely filled with many manner of reeds or bamboo, having gathered together, they (= Bodhisattvas) would consider the dharmas which are clearly possessed by the *Sugata*. (*Upendravajrā, Indravajrā, Indravajrā, Indravajrā*)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6a7-15

辟支佛，利智，無漏最後身，亦滿十方界，其數如竹林，斯等共一心，於億無量劫欲思佛實智，莫能知少分。新發意菩薩，供養無數佛，了達諸義趣，又能善說法，如稻麻竹葦充滿十方刹，一心以妙智，於恒河沙劫，咸皆共思量，不能知佛智。

¹³⁷ BHSD (p. 278): dharma-deśaka. *preacher of the law*; =the much commoner dharma-*bhāṇaka*; in BHS, too, not common, despite the frequency of dharma-*deśanā*.

¹³⁸ BHSD (p. 344): pi= Pali id., Skt. and BHS api.

¹³⁹ BHSG (p. 32, 4.14): Initial *i* dropped after vowel. See note 108. Toda (1981, p.20): *bhav' imā*.

¹⁴⁰ *ddiśa* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p.20): *ddiśa(h)*.

¹⁴¹ *naḍāna* is BHS Gen. pl.

¹⁴² *veṇūna* is BHS Gen. pl.

¹⁴³ BHSD (p. 466): often written *ca* in mss.

¹⁴⁴ *acchidra* is BHS Acc. sg. as adverb.

¹⁴⁵ Due to the meter (v), *bhavi* is more appropriate than *bhave*. See note 108.

¹⁴⁶ *ye* is BHS Acc. pl.

¹⁴⁷ *dharma* is BHS Acc. pl.

¹⁴⁸ *sākṣā* is BHS Abl. sg. Toda (1981, p.20): *sākṣā(t)*.

¹⁴⁹ Only the Kashgar ms. uses *sprṣṭāḥ*. *sprṣṭāḥ* is BHS Acc. pl.

¹⁵⁰ *navayānasamprasthita bodhisatvāḥ*: vv(-)-v --v v-v --.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68b9-22

諸緣一覺，無有衆漏諸根，通達總攝其心，假使十方悉滿中人，譬如甘蔗若竹蘆葦，悉俱合會，而共思惟，欲察知佛所說解法，於億那術劫載計念，未曾能知及法利誼。新學發意諸菩薩等，假使，供養無數億佛，講說經法，分別其誼，復令是等周滿十方，其數譬如稻麻叢林，在諸世界滋茂不損，悉俱合會，而共思惟世尊所明，觀諸法本不可思議，無數億劫如江河沙不可限量，心無變異超越智慧欲得知者，非其境界。

[Tibetan translation] D Ja14a1-3; P Chu15b7-16a2; S ma21a3-7; Z ma22a5-b2

zag pa med par gyur pa'i rang sangs rgyas || dbang po mo ba (S, Z ba'i) tha ma'i lus 'dzin pas || ji ltar smyig (P, S, Z smig) dang 'dam bu'i tshal bzhin du || phyogs bcu thams cad gang bar gyur pa dag || gcig tu 'dus nas rnam par bsams (S bsam) byas kyang || nga yi chos kyi mchog gi phyogs tsam yang || bskal pa bye ba khrag khrig mtha' yas su || de yi yang dag don ni yong (P yod, S, Z yongs) mi shes || byang chub sems dpa' theg par gsar zhugs pa || sangs rgyas bye ba mang la bya ba byas || shin tu nges don chos smra mang po rnams || de dag gis kyang phyogs bcu gang gyur te || smyig (P, S smig, Z smigs) dang 'dam bu bzhin du 'jig rten kun || bar mtshams med par rtag tu gang gyur la || gcig tu 'dus nas rnam par sems byed cing || shes rab phra bas gzhan du mi sems par ||

Fol. 39b2-40a1 (KN. 32. 9-16)

39b2	anucintayitvā	bahukalpakoṭī ¹⁵¹	gaṃgā ¹⁵²	yathā vālika ¹⁵³	aprameyā ¹⁵⁴	ananyacittā	nipu-
KN	anucintayitvā	bahukalpakoṭyo	gaṅgā	yathā vālika	aprameyāḥ	ananyacittāḥ	sukha-
C3	anucintayitvā	bahukalpakoṭyo	gaṃgā	yathā vālika	aprameyā	ananyacintā	sukha-
3	nāya ¹⁵⁵	prajñayā	teṣāṃ pi ¹⁵⁶	atra	viṣayo na vidyate 16	avivartikāś ca	bahubodhisatvā
KN	māya	prajñayā	teṣāṃ pi	cāsmīn	viṣayo na vidyate 16	avivartikā	ye bhavi bodhisattvā
C3	māya	prajñayā	teṣāṃ ṣi	cātra	viṣayo na vidyate (16)	avivartikā	ye bhavi bodhisattvā
4	anāpakā ¹⁵⁷	syur	yatha ¹⁵⁸	gaṃgavālikā ¹⁵⁹	ananyacittā	nipuṇāya prajñayā	teṣāṃ pi ¹⁶⁰ a-
KN	anāpakā		yathariva	gaṅgavālikāḥ	ananyacittāś	ca vicintayeyus	teṣāṃ pi cā-
C3	anāpakā		yatha-r-iva	gaṃgavālikā	ananyavicittās	ca vicittayeyuḥ	teṣāṃ pi cā-

¹⁵¹ koṭī is BHS Acc. pl.

¹⁵² See note 7.

¹⁵³ vālika is BHS Acc. pl.

¹⁵⁴ aprameyā is BHS Acc. pl.

¹⁵⁵ All Nepalese mss. and Gilgit ms. use *sukhamāya*. Cf. BHSD (p. 596): *sukhama*, MIndic for Skt. *sūkṣma*.

¹⁵⁶ See note 138.

¹⁵⁷ *anāpakā* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p.20): *anāpakā(ḥ)*.

¹⁵⁸ Due to the meter (v), *yatha* is more appropriate than *yathā*. Edgerton (1946, p. 199, 28) mentions the meter of BHS that naturally long vowel may be shortened metri causa.

¹⁵⁹ See note 7.

¹⁶⁰ See note 138.

5	tra	viṣayo na vidyate 17	gambhīra ¹⁶¹	dharmā	nipuṇā	mi ¹⁶²	buddhā ·	atarkikāḥ sarva ¹⁶³	anāsravā-	
KN	smin	viṣayo na vidyate 17	gambhīra	dharmā	sukharmā	pi	buddhā	atarkikāḥ sarvi	anāsravā-	
C3	smim	viṣayo na vidyate (17)	gambhīra	dharmāḥ	sukhumā	'pi	<bu>ddhā	atarkikāḥ sarvi	anāsravā-	
6	ś ca ·	aham eva	jānāmi ha ¹⁶⁴	yādṛśās		te	ye cā ¹⁶⁵	jinā loki ¹⁶⁶	daśadiśasmin ¹⁶⁷ (18)	yaḥ śā-
KN	ś ca	ahaṃ ca	jānāmiha	yādṛśā	hi	te	ye vā	jinā loki	daśa ddiśāsu 18	yaṃ śā-
C3	s ca	ahaṃ ca	jānāmi 'ha	yādṛśā	h<<i>>	te	ye cā	jinā loki	dasaddisāsu 18	yaṃ sā-
7	riputra {;}	sugataḥ prabhāṣati ¹⁶⁸ ·	adhimuktisaṃpannu ¹⁶⁹	bhavāhi ¹⁷⁰	tatra ·	ananyathāvādi ¹⁷¹	ji : ¹⁷² -			
KN	riputra	sugataḥ prabhāṣate	adhimuktisaṃpanna	bhavāhi	tatra	ananyathāvādi	ji-			
C3	riputra :	sugataḥ prabhāṣate	adhimuktisaṃpanna	bhavesi	tatra	a<na>nyathāvādi	ji-			
40a1	nā	vināyikaś ¹⁷³	cireṇa pi ¹⁷⁴	bhāṣati ¹⁷⁵	uttamārtham (19)					
KN	no	maharṣī	cireṇa pi	bhāṣati	uttamārtham 19					
C3	no	maharṣī	cireṇa pī	bhāṣati	uttamārtha<ṃ> (19)					

[Translation]

- (16) Having considered [these dharmas], they gave their undivided thought to [the Buddha's dharmas] with their skillful wisdom for many *koṭis* of aeons which are like the innumerable sand of the Ganges. However, concerning [the Buddha's dharma], their range [of wisdom] would not exist [in the Buddha's dharmas]. (*Indravajrā*, *Indravajrā*¹⁷⁶, *Vaṃśasthā*, *Indravāṃśā*¹⁷⁷)
- (17) There will be not a few, but many Bodhisattvas who are like the sand of the Ganges, do not fall back [on the path of enlightenment], and have given their undivided thought [to the Buddha's dharma] with their skillful wisdom. Concerning [the Buddha's dharma], their range [of wisdom] would not exist [in

¹⁶¹ Due to the meter (v), *gambhīra* is more appropriate than *gambhīrā*. *gambhīra* is BHS Nom. pl. See note 7.

¹⁶² *mi* is BHS Ins. of *aham*.

¹⁶³ Because of the meter (v), *sarva* (BHS Nom. pl.) is more appropriate than *sarve*.

¹⁶⁴ See note 139. Toda (1981, 20): *jānām' iha*.

¹⁶⁵ Due to the meter (-), *ca* is more appropriate than *cā*.

¹⁶⁶ *loki* is BHS Loc. sg., and due to the meter (v), *loki* is more appropriate than *loke*.

¹⁶⁷ *daśadiśasmin* is BHS Loc. sg. See note 77. Toda (1981, p.20): *daśa(d)diśasmin*.

¹⁶⁸ The Kashgar ms. uses *Parasmaipada*.

¹⁶⁹ *saṃpannu* is BHS Acc. sg.

¹⁷⁰ *bhavāhi* is BHS Imperative 2 sg. Cf. BHS (p. 140, 30.6).

¹⁷¹ *ananyathāvādi* is BHS Nom. pl.

¹⁷² Here, : does not have any meaning because the copyist wrote : in order to fill up a space in the 7th line.

¹⁷³ *vināyikaś* is BHS Nom. pl. Despite the fact that *vināyika* is not a correct word, it is acceptable as having the same meaning as *vināyaka*, which means leader, because *vaināyika* is synonymous with *vaināyaka*, and *vināyika* looks similar to *vaināyika*. Cf. only the Kashgar ms. reads *vināyika*.

¹⁷⁴ See note 16.

¹⁷⁵ See note 104.

¹⁷⁶ *gaṃgā yathā vālika aprameyā* :: --v --v v-v -- (*a* is -).

¹⁷⁷ *teṣāṃ pi atra viṣayo na vidyate*: --v --v v-v -v- (*ra* is -).

the Buddha's dharma]. (*Indravajrā*¹⁷⁸, *Vaṃśasthā*, *Vaṃśasthā*, *Indravajrā*¹⁷⁹)

(18) The profound skillful dharmas that are understood by me (= the Buddha) are beyond comprehension and free from toxicants. Now, I understand exactly what kinds of dharmas they are, so do the sages in ten directions of the world. (*Indravajrā*, *Upeṇdravajrā*, *Indravajrā*¹⁸⁰, *Indravajrā*)

(19) Therefore, may Śāriputra possess strong confidence in what the *Sugata* explains! The *Jinas*, who are the leaders and have not spoken falsely in all their years, also explain the supreme purpose. (*Indravajrā*¹⁸¹, *Vaṃśasthā*, *Upeṇdravajrā*¹⁸²)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6a16-23

不退諸菩薩其數如恒沙，一心共思求，亦復不能知。又告舍利弗，無漏不思議甚深微妙法，我今已具得。唯我知是相。十方佛亦然。舍利弗當知，諸佛語無異。於佛所說法，當生大信力。世尊法久後，要當說真實。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68b23-c1

無數菩薩，皆不退轉，無崖底劫如恒邊沙，一心專精悉共思惟，此之等類亦不堪任。諸佛聖明不可及逮，一切漏盡，非心所念。獨佛世尊能解了知分別十方諸佛世界。告舍利弗，安住所說。唯佛具足解達知彼最勝導利，悉暢了識，說無上誼以來久遠。

[Tibetan translation] D Ja14a3-6, P Chu16a2-5; S ma21a7-b4; Z ma22b2-6

bskal pa bye ba mang po dpag med pa || gang gā'i bye ma snyed du bsam (S, Z bsams) byas kyang || chos gang bde par gshegs pas mngon gzigs pa || 'di la de dag rnams kyi yul med do || phyir mi ldog pa'i byang chub sems dpa' gang || mi nyung gang-gā'i bye ma snyed rnams kyis || gzhan du mi sems rnam par bsams byas kyang || 'di (S, Z de) la de (P 'di) dag gi yang yul med do || zab cing shin tu phra ba'i chos rtogs shing || rtog pa med la thams cad zag med pa || phyogs bcu'i 'jig rten rgyal ba de dag dang || ngas ni 'di na de dag ci (S, Z ji) 'dra shes || gzhan min gsung ba rgyal ba drang srong che || yun ring dus na mchog gi don 'chad kyis || bde bar gshegs pas gang bstan (Z add. pa) de la ni || mos pa phun sum tshogs byos (P 'byor) shā ri'i bu ||

¹⁷⁸ *avivartikāś ca bahu bodhisatvā*: vv(-)-v --v v-v -- (ca is -).

¹⁷⁹ *teṣāṃ pi atra viśayo na vidyate*: --v --v v-v -v- (ra is -).

¹⁸⁰ *aham eva jānāmi ha yādṛśās te*: vv(-)-v --v v-v --.

¹⁸¹ *adhimuktisaṃpannu bhavāhi tatra* :: vv(-)-v --v v-v -v.

¹⁸² *cireṇa pi bhāṣati uttamārtham*: v-v --v v-v -- (pi is -).

40a1	āmamtrayāmi ¹⁸³	imi ¹⁸⁴	mahya ¹⁸⁵	śrāvakā ¹⁸⁶	·	pra-							
KN	āmantrayāmi	imi		sarvaśrāvakān		pra-							
C3	āmantrayāmī	imi		sarvasrāvakām		pra-							
2	tyekabodhāya ¹⁸⁷	ime ¹⁸⁸	sthitā ¹⁸⁹	narā ¹⁹⁰	·	saṃsthāpitā ¹⁹¹	ye ¹⁹²	maya ¹⁹³	nirvṛtīya ¹⁹⁴	ye ¹⁹⁵	mocitā ¹⁹⁶	duḥka-	
KN	tyekabodhāya	ca ye	'bhīprasthitāḥ			saṃsthāpitā	ye	mama	nirvṛtīya		saṃmokṣitā	duḥka-	
C3	tyekabodhāya	ye	prasthitā	narāḥ		sa<ṃ>sthāpitā	ye	mayi	ni {vr}rvrtau	hi	saṃmohitā	duḥka-	
3	paraṃparāya ¹⁹⁷ 20	upāyakaśalya ¹⁹⁸	mametad ¹⁹⁹ agram	yenāha ²⁰⁰		bhāṣāmiha ²⁰¹	dharma ²⁰²				loke ·	tahiṃ <tahiṃ> ²⁰³	
KN	paraṃparātaḥ 20	upāyakaśalya	mametad agram			bhāṣāmi	dharmam	bahu yena	loke	tahiṃ	tahiṃ		
C3	paraṃparātaḥ (20)	upāyakaśalyu	mam' etad agram			bhāṣāmi	dharmam<ṃ>	bahu yena	loke	tahiṃ	tahiṃ		
4	lagna ²⁰⁴	pramocayāmi	trayaś ²⁰⁵	ca	yānāny	upadarśayāmīti 21	atha	khalu	tasyām			parīśadi	
KN	lagna	pramocayāmi	trīṇī	ca	yānāny	upadarśayāmi 21	atha	khalu					
C3	lagna	pramocayāmī	trīṇī	ca	yānāny	upadarsayāmi (21)	atha	khalu			tatra	parśadi	

¹⁸³ See note 7 and 31.

¹⁸⁴ *imi* is BHS Acc. pl, and due to the meter (v), *imi* is more appropriate.

¹⁸⁵ *mahya* is BHS Ins. of *aham*, and due to the meter (v), *mahya* is more appropriate.

¹⁸⁶ *śrāvakā* is BHS Acc. pl.

¹⁸⁷ *bodha*= *bodhi*. Cf. BHSD (p. 402).

¹⁸⁸ *ime* is BHS Acc. pl.

¹⁸⁹ *sthitā* is BHS Acc. pl.

¹⁹⁰ *narā* is BHS Acc. pl.

¹⁹¹ *saṃsthāpitā* is BHS Acc. pl.

¹⁹² *ye* is BHS Acc. pl.

¹⁹³ *maya* is BHS Ins. of *aham*.

¹⁹⁴ *nirvṛtīya* is BHS Loc. sg.

¹⁹⁵ *ye* is BHS Acc. pl.

¹⁹⁶ *mocitā* is BHS Acc. pl.

¹⁹⁷ *duḥkhaṃparaṃparāya* is BHS Abl. sg.

¹⁹⁸ *upāyakaśalya* is BHS Acc. sg.

¹⁹⁹ BHSG (p. 33): Loss of final vowels in saṃdhi. Toda (1981, p.21): *mam' edad*.

²⁰⁰ *aha* is BHS Nom. of *aham*, and due to the meter (v), *aha* is more appropriate.

²⁰¹ Toda (1981, p.21): *bhāṣām' iha*. See note 139.

²⁰² *dharma* is BHS Acc. sg.

²⁰³ All mss. read *tahiṃ* twice. I assume that the missing *tahiṃ* (BHS Loc. sg.) in the Kashgar ms. is an oversight, so, I add one more *tahiṃ* to follow the correct meter (*Upendravajrā*). Toda (1981, p. 21) also uses *tahiṃ* twice.

²⁰⁴ *lagna* is BHS Abl. sg.

²⁰⁵ *trayas* is BHS Acc. pl.

5	ye	te		mahāśrāvakāḥ	kṣīṇāsravā :	arhantaḥ	ājñāta-kaunḍinyapramukhā		dvādaśa va-
KN	ye	tatra parśatsaṃnipāte		mahāśrāvakā			ājñāta-kaunḍinyapramukhā	arhantaḥ kṣīṇāsravā	dvādaśava-
C3	ye	te		mahāśrāvakā			ājñāta-kaunḍinyuprabhṛtaya	arhantaḥ kṣīṇāsravā :	dvādaśa va-
6	śībhūtasahasrāṇi ²⁰⁶	ye	cānye	śrāvakayānikā	vā	bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikāni			
KN	śībhūtaśatāni	ye	cānye	śrāvakayānikā		bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikā			
C3	śībhūtasatāni	ye	cānye	śrāvakayānikā :		bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikā :			
7	ye	cā ²⁰⁷	pratyekabuddhayānasamprasthitā ²⁰⁸		sarveṣāṃ	teṣāṃ		etad	abhavat ²⁰⁹
KN	ye	ca	pratyekabuddhayānasamprasthitāḥ			teṣāṃ	sarveṣāṃ	etad	abhavat
C3	ye	ca	pratyekabuddhayānasamprasthitāḥ			teṣāṃ	sarveṣāṃ	etad	abhavat

[Translation]

(20) I tell [my doctrine] to these *śrāvakas*, those people who were led to *pratyekabodhi* by me (= the Buddha), those who were kept in *nirvāṇa* by me, and those who were freed from continuous suffering [by me]. (*Indravamśā*²¹⁰, *Indravamśā*, *Indravajrā*, *Indravajrā*)

(21) This (= teaching) is my supreme skillful means. By means of this, I proclaim the dharma in the world here. I show three vehicles and liberate [sentient beings] from attachment regarding this and that (= such and such). (*Upeṇḍravajrā*, *Indravajrā*, *Upeṇḍravajrā*, *Upeṇḍravajrā*²¹¹)

Then, in the assembly, there were 12,000 powerful people who were great disciples (*śrāvakas*), those without depravities, arhats, and *ājñāta-kaunḍinya* as a representative. There were also others who had a *śrāvaka*-vehicle, or who were *bhikṣus*, *bhikṣuṇīs*, *upāsakas*, and *upāsikās*, and those who approached the path of *pratyekabuddha*-vehicle. All of them had the following thought.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6a24-6b1

告諸聲聞衆及求緣覺乘。我令脫苦縛，逮得涅槃者，佛以方便力，示以三乘教，衆生處處著，引之令得出。爾時大衆中，有諸聲聞漏盡阿羅漢阿若憍陳如等千二百人，及發聲聞辟支佛心比丘比丘尼優婆塞優婆夷，各作是念。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68c2-10

佛今日告諸聲聞衆緣覺之乘。如所立處捨置已逝，入泥日者，所可開化各各得度。佛有尊法善權方便，猶以講說法化世間，常如獨步多所度脫，以斯示現真諦經法。爾時大衆會中，一切聲聞阿羅漢等，諸漏已盡知本際黨千二百衆，及弟子學比丘比丘尼清信士清信女諸聲聞乘，各各興心念。

²⁰⁶ Toda (1981, p.21): *dvādaśa vaśībhūtasahasrāṇi*.

²⁰⁷ Toda (1981, p.21): *cā(nye)*. However, all mss. use *ca*. Cf. Tsukamoto et al. (1988, p. 69).

²⁰⁸ *saṃprasthitā* is BHS Nom. pl.

²⁰⁹ See note 104.

²¹⁰ *āmaṃtrayāmi imi mahya śrāvakā*: the meter is --v --v v-v -v- (*mi* is -).

²¹¹ *trayaś ca yānāny upadarśayāmi iti*. The meter is v-v --v v-v -v.

[Tibetan translation] D Ja14a6-14b1; P Chu16a5-16b1; S ma21b4-22a1; Z ma22b6-23a3

nyan thos pa ni 'di dag thams cad dang || rang sangs rgyas su mi gang zhugs pa dang || mya ngan 'das la ngas ni gang bkod cing || sdug bsngal rgyud (S, Z rgud) las yang dag dkrol (S, Z bkrol) la bsgo (P bsko'o) || gang phyr 'jig rten du ni chos mang bshad || de dang de la chags pa rab dgrol (S, Z. bkrol) zhing || theg pa gsum dag nye bar bstan pa ni || de dag nga yi thabs mkhas mchog yin no || de nas 'khor de na kun shes *kau (P ko) ṅdi* (**S kou'di, Z kou di) nya la sogs pa nyan thos chen (D chan) po gang dag dgra bcom pa (S, Z |) zag pa zad pa (S, Z |) dbang dang ldan par gyur pa (S, Z |) stong nyis brgya dang | (S, Z om. |) gzhan yang gang dag nyan thos kyi theg pa la zhugs pa'i dge slong dang | dge slong ma dang | dge bsnyen dang (S, Z |) dge bsnyen ma dag dang | gang yang rang sangs rgyas kyi theg pa la zhugs pa de dag thams cad 'di snyam du sems te |

Fol. 40a7-40b6 (KN. 33. 7-33. 11)

40a7 ko hetu²¹² kaḥ pra-
KN ko nu hetuḥ
C3 ko nu {{ha}} hetuḥ

40b1 tyayaḥ²¹³ kiṃ nidānaṃ kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavān a{bo}dhimātraṃ²¹⁴ upāyakaūsalyaṃ tathāgatānāṃ
KN kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavān adhimātraṃ upāyakaūsalyaṃ tathāgatānāṃ
C3 kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavān adhimātraṃ upāyakaūsalyaṃ tathāgatānāṃ

2 saṃvarṇayaṃti²¹⁵ · gambhīrāś²¹⁶ ca me²¹⁷ dharmā hy abhisambuddhā iti saṃvarṇayaṃti²¹⁸ · durvejñeyaṃ²¹⁹ du-
KN saṃvarṇayati | gambhīraś cāyaṃ mayā dharmo 'bhisambuddha iti saṃvarṇayati | durvijñeyaś ca
C3 saṃvarṇayati | gambhīras cāyaṃ dharmo 'bhisambuddha iti | saṃvarṇayati | durvijñeyas ca

3 rāj<ñ>ā{na}naṃ²²⁰ sarvaśrāvakaṃpratyekabuddhair iti saṃdarśayati · durāj<ñ>ā{na}naṃ²²¹ sandhābhā-
KN sarvaśrāvakaṃpratyekabuddhair iti saṃvarṇayati |
C3 sarvasrāvakaṃpratyekabuddher iti saṃvarṇayati |

²¹² *hetu* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 21): *hetu(h)*.

²¹³ *Jihvāmūṭiya*.

²¹⁴ All mss. read *adhimātraṃ*. I assume that the copyist mistakenly wrote *abodhimātraṃ* because *bodhi* was a common Skt. word. However, due to the context, *adhimātraṃ* seems to be more appropriate in this sentence. Toda (1981, p. 21): *a{bo}Jdhimātraṃ*. Tsukamoto et al. (1988, p. 70).

²¹⁵ As per note 26, because the subject is 3 sg., and the correct form is *saṃvarṇayati*. Toda (1981, p. 21): *saṃvarṇayaḥ Jti*.

²¹⁶ See note 7.

²¹⁷ *me* is BHS Ins. of *aham*.

²¹⁸ See note 26. Toda (1981, p. 21): *saṃvarṇayaḥ Jti*

²¹⁹ It is possible to read this as *durvijñeyaṃ* according to the Nordturkistanische Brāhmī, Type a (Schrifttypus V). Cf. Sander (1968, Tafel 32).

²²⁰ See note 23. Toda (1981, p. 21): *durāj(ñ)ā{na}naṃ*.

²²¹ See note 23. Toda (1981, p. 21): *durāj(ñ)ā{na}naṃ*.

4	ṣiṭaṃ tathāgatānāṃ saṃvarṇayati ·	yad	idānīm	bhagavatā ekaika ²²²	vimukti-
KN		yathā	tāvad	bhagavatā ekaiva	vimukti-
C3		yadā	tāvat	bhagavatā ekaiva	vimukti-
5	r ākhyātā sarvaśrāvakaṃpratyekabuddhasamyaksambuddhānāṃ tat katham			vayaṃ nirvāṇa-	
KN	r ākhyātā			vayaṃ api	
C3	r ākhyātā			vayaṃ api	
6	prāptā buddhadharmāṇāṃ lābhina ²²³ ·	ato vayaṃ	asya	bhagavato bhāṣitasyārtham <na jā>nāmahe ²²⁴ ·	
KN	buddhadharmāṇāṃ lābhino nirvāṇaprāptāḥ		asya ca vayaṃ	bhagavato bhāṣitasyārtham na jānīmah	
C3	buddha[dharmāṇā]ṃ lābhino nirvāṇaprāptā		asya vayaṃ	bhagavate bhāṣitasyārtham ājānīmah	

[Translation]

“What is the cause, what is the idea, what is the primary cause, and what is the reason why Bhagavat supremely praises the skillful means of the Tathāgatas? Why does he (= the Buddha) praise the fact that the dharmas, which are realized by me, are indeed profound? Why does he consider the fact that it (= the skillful means of the Tathāgatas) is difficult to conceive and difficult to perceive by all disciples (*śrāvaka-pratyekabuddhas*)? Why does he praise the fact that the [mysterious intention of] Tathāgats’ allusive speech is difficult to perceive? Since it is said by Bhagavat now that the liberation of every *śrāvaka-pratyekabuddha-samyaksambuddhas* is singler, how have we attained *nirvāṇa*? How have we obtained the quality of Buddha-dharmas? Because of this (= the Buddha’s statement), we do not understand the meaning of Bhagavat’s teaching.”

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6b1-6

今者世尊何故，慇懃稱歎方便，而作是言。佛所得法甚深難解，有所言說意趣難知，一切聲聞辟支佛所不能及。佛說一解脫義，我等亦得此法到於涅槃。而今不知是義所趣。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68c11-14

世尊何故，慇懃諮嗟善權方便。宣暢如來深妙經業，致最正覺慧不可及，聲聞緣覺，莫能知者。如今世尊乃演教，於是佛法無逮泥洹。雖說此經，吾等不解誼之所趣。

[Tibetan translation] D Ja14b1-4; P Chu16b1-3; S ma22a1-4; Z ma23a3-6

bcom ldan 'das kyis de bzhin gshegs pa rnam kyis thabs mkhas pa cher bsngags pa dang | chos zab mo de yang mngon par rdzogs par sangs rgyas so zhes gsung zhing (S, Z |) nyan thos dang | (P, S, Z om. |) rang sangs rgyas thams cad kyis shes par dka'o zhes gsungs pa'i rgyu ni gang | (S, Z om. |) gzhi ni ci zhig | (S, Z ||) 'di ltar bcom ldan 'das kyis rnam par grol ba gcig go || (P, S, Z om. ||) zhes bka' stsal to (S te |, Z te ||) || bdag cag rnam kyang sangs rgyas kyis chos rnam rnyed par 'gyur zhing (P |) mya ngan las 'das pa *thob pa* (S, Z ma) yin mod kyis | bcom ldan 'das kyis gsungs pa de'i don bdag cag gis ma rig go snyam mo ||

²²² *ekaika* is BHS Nom. sg. and it means single. Cf. Monier-Williams (p. 230).

²²³ *lābhina* is BHS Nom. pl.

²²⁴ I read <na jā>nāmahe because of the content. In general, *jānīmahe* (*ātmanepada*, 1, pl) is the correct verb form. I assume that the copyist thought that *jānāmahe* was the correct form for *ātmanepada*, 1, pl. of √jñā because he only knew to add *na* in constructing the 9th type’s verb form. Cf. BHSG (p. 213): *jānātha*. Toda (1981, p. 21): (*na jā*)nāmahe. K: *ta dānīmah*, Pk and N1: *nā jānīmahe*, and C3: *ājānīmah*.

40b6	atha						
KN	atha						
C3	atha						
7	khalv āyusmāñ ²²⁵	cchāradvatīputras	tāsām catasṛṇām pariśadām	vicikitsākathamkathī ²²⁶			ceta-
KN	khalv āyusmāñ	śāriputras	tāsām catasṛṇām parśadām	vicikitsākathamkathām		viditvā	ceta-
C3	khalv āyusmām	cchāriputras	tāsām catasṛṇām parśadām	vicikitsā[ka]tham/[kath]ā[ṃ]		viditvā	ceta-
41a1	saiva ceta<ḥ>samparivitarkam ²²⁷		ājñāyātmānam ²²⁸	ca dharmasamśayaprāptam	tasyām velāyām bhagavanta-		
KN	saiva cetaḥparivitarkam		ājñāyātmānā	ca dharmasamśayaprāptas	tasyām velāyām bhagavanta-		
C3	saiva cetaḥparivitarkam		ājñāya ā(?)tmanā	ca dharmasamśayaprāptaḥ	tasyām velāyām bhagavanta-		
2	m etad avocat	ko bhadanta	bhagavan	hetuḥ kaḥ pratyayo yad bhagavān adhimātram	punaḥ punas	ta-	
KN	m etad avocat	ko	bhagavan	hetuḥ kaḥ pratyayo yad bhagavān adhimātram	punaḥ punas	ta-	
C3	m etad avocat	k[o	bhagava]m	hetuḥ kaḥ pratyayaḥ yad bhagavān adh[i]mā[tra]m	[pu]naḥ punas	ta-	
3	thāgatānām upāyakausalajñānadarśanam	dharmadeśanām	samvarṇayasi ²²⁹ .	gambhīram ²³⁰	ca	me ²³¹	dharma-
KN	thāgatānām upāyakausalajñānadarśanadharmadeśanām		samvarṇayati	gambhīraś	ca	me	dharmo
C3	thāgatānām upāyakausalajñānadharmadesanām		samvarṇayati	[ga]mbhīran	na {r}	me	dharmmā-
4	m abhisambodham iti	durvijñeyam ca me	sandhābhāṣyam	iti	punaḥ <punaḥ> ²³²	samvarṇayasi ·	na
KN	'bhisambuddha iti	durvijñeyam ca	samdhābhāṣyam	iti	punaḥ punaḥ	samvarṇayati	na
C3	bhisambuddha iti	durvijñeyam ca	sandhābhā[ṣya]m		punaḥ punaḥ	samvarṇayati	na
5	ca me bhagavataḥ	sāntikād ²³³	evārūpaṃ ²³⁴	dharmaparyāyam	śrutapūrvam	imā	bhagavāms ²³⁵ catasrah
KN	ca me bhagavato	'ntikād	evamrūpo	dharmaparyāyaḥ	śrutapūrvah	imāś ca	bhagavams catasrah
C3	ca me bhagavato	'ntikād	evamrūpo	dharmapa<r>yāyaḥ	srutapūrva	imā	bhagavams catasrah

²²⁵ According to Frühe turkistanische Brāhmī (Schrifttypus IV), it is possible to read this as *ñcchā*. Toda (1981, p.21): *āyusmāñ*. Cf. Sander (1968, Tafel 29).

²²⁶ *kathamkathī* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 21): *kathamkathī(ṃ)*.

²²⁷ See note 26. Toda (1981, p.21): *ceta(ḥ)samparivitarkam*. Cf. all other mss. read *cetaḥsamparivitarkam*. Tsukamoto et al. (1988, p. 75).

²²⁸ Toda (1981, p. 21): *ājñāy' ātmānam*.

²²⁹ I think that the subject of this sentence is Bhagavat (3 sg.), so the suitable form of the verb is *samvarṇayati*. However, the Kashgar ms. uses the *samvarṇayasi*. There might be two possibilities here; one is a mistake by the scribe, and the other is that the use of a 2nd person verb form is a substitute for the 3rd person. Cf. BHS (p. 130, 25.29): A special case is the use of 2-person verbs with the nom. of the stem *bhavant*, regularly used with 3-person verbs but as a substitute for the 2-person of direct address: *mā bhavanto viśīdatha* Mv i. 108.1.

²³⁰ See note 7.

²³¹ *me* is BHS Ins.of *aham*.

²³² Toda (1981, p. 21): *punaḥ (punaḥ)*. The other manuscripts use *punaḥ punaḥ*, except for C4 ms. I read *punaḥ* twice according to the reading of 41a2. Cf. Tsukamoto et al. (1988, p.78).

²³³ See note 70.

²³⁴ BHS (p. 157): = Skt. *evamrūpaṃ*.

²³⁵ *bhagavāms (catasrah)* is BHS Voc. sg.

6	pariṣado	vicikitsam āpannāḥ kathamkathī ²³⁶ prāptā ²³⁷ ·	tat sādhu bhagavad ²³⁸	bhāṣatu	sugato	ya-
KN	parṣado	vicikitsākathamkathāprāptās	tat sādhu bhagavān	nirdiśatu		ya-
C3	parṣadaḥ	vicikitsākatha<m>kathāprāptāḥ	tat sādhu bhagavān	ni<r>disatu		yu-
7	t sandhāya ²³⁹	bhagavān	gambhīrasya ²⁴⁰ tathāgatadharmasya	punaḥ punaḥ saṃvarṇanam ²⁴¹	karoti ·	
KN	t saṃdhāya	tathāgato	gambhīrasya tathāgatadharmasya	punaḥ punaḥ saṃvarṇanām	karoti	
C3	t sandhāya	tathāgato	gambhīrasya tathāgatadha<r>masya	punaḥ punaḥ sa[m]varṇanām	karoti	

[Translation]

Then the venerable Śāradvatīputra, with [his] mind, having understood the thought of mind that those four kinds of assembled people doubted and had doubts about, and he himself was becoming doubtful about [the Buddha's] dharma (= teaching), at that time, told Bhagavat about this thought. “Oh, Buddhist mendicant! Oh, Bhagavat! What is the cause and what is the proof of why Bhagavat repeatedly and supremely praises the instruction of the dharma, which is the skillful means and supreme knowledge of the Tathāgatas? Why do you also repeatedly praise the fact that I realized that the profound dharma and [the mysterious intention of] my allusive speech is difficult to conceive? Also, previously, I have never heard such a unique (manner of) dharma in the presence of Bhagavat. Oh, Bhagavat! Those four kinds of assembly become doubtful and have doubt. Oh, Bhagavat! May *Sugata* clearly explain this (= teaching) in which Bhagavat repeatedly praises the profound dharma of the Tathāgata with the [mysterious intention of Bhagavat's] allusive speech.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6b7-12

爾時，舍利弗知四眾心疑，自亦未了，而白佛言。世尊，何因何緣，慙懃稱歎諸佛第一方便甚深微妙難解之法。我自昔來，未曾從佛聞如是說。今者四眾咸皆有疑。唯願世尊，敷演斯事。世尊何故慙懃稱歎甚深微妙難解之法。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68c14-18

賢者舍利弗，見四部眾心懷猶豫，欲為發問決其疑網冀并被蒙，前白佛言。唯然世尊，今日如來何故，獨宣善權方便以深妙法速最正覺道德巍巍不可稱限。

[Tibetan translation] D Ja14b4-7; P Chu16b3-8; S ma22a4-b2; Z ma23a6-b4

de nas tshé dang ldan pa shā ri'i bus 'khor bzhi po de dag som nyi (S, Z nyid) dang the tshom (S, Z tsom) za bar rig ste (S, Z |) sems kyi mnam par rtog (D rtogs) pa sems kyis shes nas | bdag nyid kyang chos la the tshom za bar gyur te (S, Z |) de'i tshé bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to || bcom ldan 'das 'di ltar bcom ldan 'das kyis de bzhin gshegs pa rnam kyi thabs mkhas pa mkhyen pa'i chos bstan pa yang dang yang bsnags pa mdzad pa dang | chos zab mo ngas mngon par rdzogs par sangs rgyas so zhes bgyi ba dang | ldem por dgongs te bshad pa yang shes par dka'o zhes yang dang yang gsungs (P, S, Z gsung) pa'i rgyu gang lags (S, Z |) rkyen gang lags | bdag gis bcom ldan 'das las (P om. las) chos kyi mnam grangs 'di lta bu

²³⁶ *kathamkathī* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p.21): *kathamkathī(m)*.

²³⁷ *prāptā* is BHS Nom. pl.

²³⁸ *bhagavat* might be Voc. sg. I assume that the copyist wrote *bhagavan*, which was Voc. sg, but the next copyist thought of *bhagavan* as *bhagavat* because *n* and *t* look similar. Consequently, the copyist wrote *bhavaḡad* because of the saṃdhi rule.

²³⁹ *sandhāya* is BHS Ins. sg. See note 7.

²⁴⁰ See note 7.

²⁴¹ The letter looks like *bha*, so it could be *saṃvarṇabham*. However, the letter *bha* and *na* look similar, so it is possible to read *saṃvarṇanaṃ*. BHSD (p. 540): *saṃvarṇana* means praise. Toda (1981, p. 21): *saṃvarṇabham*.

sngon (S, Z sngan) chad ma thos te | (P om. |) bcom ldan 'das 'khor bzhi po 'di dag kyang the tshom dang som nyi 'tshal na | (S, Z om. |) de bzhin gshegs pas ci la dgongs te (S, Z |) de bzhin gshegs pa'i (S, Z pas) chos zab mo yang dang yang gsung (Z gsungs) ba mdzad (P mjad) pa de (S, Z |) bcom ldan 'das kyis legs par bshad du gsol |

Fol. 41b1-7 (KN. 34. 5-14)

41b1	nirdiśatu bhagavā ²⁴²	tasya gabhīrasya ²⁴³	tathāgatasandhābhāṣya ²⁴⁴	saṃvarṇanaprayojanam				
	KN							
	C3							
2	atha khalv āyuṣmāṃ ²⁴⁵	cchāradvatīputras	tasyāṃ velāyāṃ ²⁴⁶	imā gāthā abhāṣata :	cirasyādya			
	KN	atha khalv āyuṣmāṃ	śāriputras	tasyāṃ velāyāṃ	imā gāthā abhāṣata	cirasyādya		
	C3	atha khalv āyuṣmā<ṃ>	cchāriputraḥ	ta[syāṃ] velāyāṃ	imā gāthā abhāṣata	cirasyādya		
3	na<rā>dityo ²⁴⁷	īdṛśī ²⁴⁸	ku<ru>te ²⁴⁹	kathām	balā vimokṣā dhyānās ca aprameyā mi ²⁵⁰ sparśitā ²⁵¹ . (22)	bodhima-		
	KN	narāditya	īdṛśīm	kurute	kathām	balā vimokṣā dhyānās ca aprameyā mi sparśitāḥ 22	bodhima-	
	C3	narādityo	īdṛśīm	kurute	kathām	balā vimokṣā dhyānās ca aprameyā mi sparśitāḥ (22)	bodhima-	
4	ṇḍaṃ ca kīrtesi	pr̥cchakas te na vidyate ·	sandhābhāṣyaṃ ²⁵²	ca kīrtesi ·	na ca tvāṃ ka-			
	KN	ṇḍaṃ ca kīrtesi	pr̥cchakas te na vidyate	saṃdhābhāṣyaṃ	ca kīrtesi	na ca tvāṃ ka-		
	C3	ṇḍaṃ ca kīrttesi	pr̥cchakas te na vidyate	sandhābhāṣyañ	ca kīrttesi	na ca tvā<ṃ> ka-		
5	ści ²⁵³	vidyate · (23)	ap̥cchato ²⁵⁴ vyāharase ²⁵⁵	caryāṃ	varṇesi	ātmanaḥ	jñānādhigama ²⁵⁶	varṇe-
	KN	ści	pr̥cchati 23	ap̥cchito vyāharasi	caryāṃ	varṇesi	cātmanaḥ	jñānādhigama
	C3	sci	pr̥cchati (23)	ap̥cchito vyāharas[i]	ca<ṣ>yāṃ	varṇnesi	v' ātmanaḥ	jñānādhigamaṃ

²⁴² *bhagavā* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 21): *bhagavā(ṃ)*.

²⁴³ See note 26. Toda (1981, p. 21): *ga(ṃ)bhīrasya*.

²⁴⁴ I follow Toda's reading. Toda (1981, p. 21): *tathāgatasandhābhāṣya(sya)*. Only the Kashgar ms. has this sentence: *nirdiśatu bhagavā tasya gabhīrasya tathāgatasandhābhāṣya saṃvarṇanaprayojanam*. About *sandhābhāṣya*, see note 7.

²⁴⁵ *āyuṣmāṃ* is Acc. sg. See note 25 and 225. Toda (1981, p. 21): *āyuṣmā(ṃ)ṃ*.

²⁴⁶ See note 25.

²⁴⁷ Toda (1981, p. 21): *na(rā)dityo*. *narāditya* is more appropriate than *narādityo* due to *saṃdhi*.

²⁴⁸ *īdṛśī* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 21): *īdṛśī(ṃ)*.

²⁴⁹ Toda (1981, p. 21): *ku(ru)te*.

²⁵⁰ *mi* is BHS Ins. of *aham*.

²⁵¹ *sparśitā* is BHS Nom. pl.

²⁵² See note 7.

²⁵³ Due to the meter (v), *kaści* is more appropriate than *kaścid*. Cf. Edgerton (1946, p. 199-200, 29).

²⁵⁴ Tsukamoto et al (1988, p. 86): Pk and B read *ap̥cchati*.

²⁵⁵ *vyāharase* is an *Ātmanepada*.

²⁵⁶ *jñānādhigama* is BHS Acc.sg. Due to the meter (v), *jñānādhigama* is more appropriate than *jñānādhigamaṃ*.

6	si ·	gambhīraṃ ²⁵⁷ ti ²⁵⁸	prabhāṣasi ²⁵⁹ (24) saṃśayaaprāpta ²⁶⁰	adya me ²⁶¹	vaśībhūtā hy	anāsravā ²⁶² ·	ye ca prasthi-
KN	si	gambhīraṃ ca	prabhāṣase 24	adyeme saṃśayaaprāptā	vaśībhūtā	anāsravāḥ	
C3	si	gambhīraṃ ca	prabhāṣase (24)	adya 'me saṃśayaaprāptā :	vaśībhūtā	anāsravā :	
7	ta ²⁶³	nirvāṇaṃ	kim idaṃ	bhāṣate jina ²⁶⁴ 4 (=25)			
KN		nirvāṇaṃ prasthitā ye ca	kim etad	bhāṣate jinaḥ 25			
C3		nirvāṇaṃ prasthitā ye ca	kim etad	bhāṣate jinaḥ (25)			

[Translation]

May Bhagavat specify the purpose of praise of the profound [mysterious intention of] Tathāgata's allusive speech." Then, at that time, the venerable Śāradvatīputra recited the following stanzas.

- (22) After a long time, today, the man who relates to the sun makes such a speech that the innumerable [ten] powers, [eight] liberations, and [four] meditations are clearly perceived by me (= Buddha). (*Pathyā*²⁶⁵)
- (23) Moreover, you praise the supreme place (= result in Buddha gayā) [even though] nobody exists who asks you [about the result in the supreme place]. Furthermore, you admire [the mysterious intention of] the allusive speech, even though nobody exists who inquires you about it. (*Pathyā*)
- (24) You speak [even though] nobody is asking.²⁶⁶ You praise your own practice. You praise the accomplishment of wisdom. You explain that it is profound. (*Vīpulā*: Bha or *Pathyā*²⁶⁷)
- (25) Today, those who have obedient power, are without depravities, and are approaching the *nirvāṇa* are becoming doubtful about the reason why *Jina* says this (speech). (*Pathyā*²⁶⁸)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6b13-22

爾時舍利弗欲重宣此義，而說偈言。慧日大聖尊，久乃說是法。自說得如是力無畏三昧禪定解脫等不可思議法。道場所說法，無能發問者。我意難可測，亦無能問者。無問而自說，稱歎所行道。智慧甚微妙，諸佛之所得。無漏諸羅漢及求涅槃者，今皆墮疑網，佛何故說是。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68c18-27

時舍利弗以偈頌曰。樂慧聖大尊，久宣如是教，力脫門禪定，所奉無央數。讚揚佛道場，無敢發問者。獨諮嗟真法無能啓微妙顯現大聖法。自歎譽其行，智慧不可限，欲分別深法。今鄙等懷疑，說道諸漏盡，

²⁵⁷ See note 7.

²⁵⁸ *ti* equals *iti*. Cf. BHSD (p. 253).

²⁵⁹ See note 168.

²⁶⁰ Due to the meter (v), *saṃśayaaprāpta* is more appropriate than *saṃśayaaprāptā*.

²⁶¹ KN (p. 34, 13) and WT (p. 33, 9): *adyeme*. K: *adye*. PK, C3, and N1: *adya me*. I assume that the initial *i* drops, as in note 139, so I can read it as *adya ime*. Toda (1981, p. 21): *adyame*.

²⁶² *anāsravā* is BHS Nom. pl.

²⁶³ Due to the meter (v), *prasthita* is more appropriate than *prasthitā*.

²⁶⁴ *jina* is BHS Nom.sg. Toda (1981, p. 21): *jina(h)*.

²⁶⁵ *cirasyaḍya na<rā>dityo īdṛṣī ku<ru>te kathām balā vimokṣā dhyānās ca aprameyā mi sparsitā · : v--v v-- --v-v v-v- v-v- v--v v--v v-v- (ṣā is v)*

²⁶⁶ It is possible to read *aprcchato* as Abl., so, the translation might be "You speak because nobody is asking."

²⁶⁷ *aprcchato vyāharase caryāṃ varṇesi ātmanaḥ jñānādhigama varṇesi · gambhīraṃ ti prabhāṣasi: v-v- -vv- ---- v-v- --vv v--v ---v v-vv.*

²⁶⁸ *saṃśayaaprāpta adya me vaśībhūtā hy anāsravā · : -v-- v--- v--- v-v- (ya is -).*

其求無爲者皆聞佛所讚。

[Tibetan translation] D Ja14b7-15a3; P Chu16b8-17a3; S ma22b2-5; Z ma23b4-7

de nas tshe dang ldan pa shā ri'i bus de'i tshe tshigs su bcad pa 'di dag gsol to || stobs dang rnam thar bsam gtan dag || dpag tu med pa ngas thob ces || ring nas mi yi nyi ma yis (S, Z yi)|| deng gdod dka' mchid 'di 'dra mdzad || khyod la zhu ba ma mchis par || byang chub snying po'ang brjod pa mdzad || khyod la su yang (S, Z 'ang) mi zhu bar || ldem (D sdem) por dgongs te bshad pa brjod || ma zhus par ni gsung mdzad de || nyid kyi spyod pa bsngags pa mdzad || ye shes brnyes pa brjod mdzad cing || zab mo dag kyang rab bshad pas || dbang ldan gyur cing zag med pa || mya ngan 'das par (S, Z pa) gang bzhugs (S, Z zhugs) rnams || rgyal ba ci zhid gsung snyam ste || de ring 'di dag the tshom 'gyur (P, S, Z gyur) ||

Fol. 41b7-42a7 (KN. 35. 1-12)

41b7	pratyekabodhi ²⁶⁹	prārthenti ²⁷⁰	bhikṣavas	tatha ²⁷¹	bhikṣuṇī ²⁷²	devā nāgās ca
KN	pratyekabodhi	prārthenti	bhikṣuṇyo bhikṣavas	tathā		devā nāgās ca
C3	pratyekabodhim	prārthentā	bhikṣuṇyo bhikṣavas	tathā		devā nāgās ca
42a1	yakṣās ca gandharvā<tha> ²⁷³	mahoragāḥ 5 (=26)	samālapanti anyonyaṃ prekṣanti ²⁷⁴	dvipadottamam	kathaṃka-	
KN	yakṣās ca gandharvās ca	mahoragāḥ 26	samālapanto anyonyaṃ prekṣante	dvipadottamam	kathaṃka-	
C3	yakṣās ca gandharvā 'tha ca	mahoragāḥ (26)	samālapanto anyonyaṃ prekṣante	dvipadottamam	kathaṃka-	
2	thī ²⁷⁵	vicinteti ²⁷⁶	vyākuruṣva · mahāyaśā ²⁷⁷ 6 (=27)	yāvanti	śrāvakā	adya sugatasyeha sarvaśa ²⁷⁸ · aha-
KN	thī	vicintētā	vyākuruṣva mahāmune 27	yāvantaḥ	śrāvakāḥ	santi sugatasyeha sarvaśaḥ aha-
C3	thī	vicintētā	vyākuruṣva mahāmune (27)	yāvantaḥ	srāvakā	asti sugatasyeha sarvvasaḥ aha-
3	m atra pāramīprāpto ²⁷⁹	nirdiṣṭo smi ²⁸⁰	maharṣiṇā 7 (=28)	mamāpi saṃśayo hy atra svake	jñāne nararṣabha	
KN	m atra pāramīprāpto	nirdiṣṭaḥ	paramarṣiṇā 28	mamāpi saṃśayo hy atra svake	sthāne narottama	
C3	m atra pāramitāprāptau	nirdiṣṭa<ḥ>	paramasoṣiṇā (28)	mamāpi saṃśayo hy atra svake	sthāne narottama	

²⁶⁹ *pratyekabodhi* is BHS Acc.sg.

²⁷⁰ Kern (1884, p. 36) translates it “those who aspire to the enlightenment of Pratyekabuddhas,” so it is possible to think that *prārthenti* is present 3, pl. On the contrary, it is also possible to think of *prārthenti* as a present participle, neuter, Nom. pl., and the translation is “those who are wishing for the awakening of *pratyekabuddha*.” Cf. BHSG (p. 103, 18.18): Nom. pl. masc. -ntā, *dhārenti*.

²⁷¹ Due to the meter (v), *tatha* is more appropriate than *tathā*.

²⁷² *bhikṣuṇī* is BHS Nom.pl.

²⁷³ Toda (1981, p. 21): *gandharvā(ś ca)*. K, Pk, C3, and N1 use *gandharvātha*. I read *gandharvātha* because these mss. are older Nepalese mss. *atha* means moreover.

²⁷⁴ See note 7 and 168.

²⁷⁵ *kathaṃkathī* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 21): *kathaṃkathī(ṃ)*.

²⁷⁶ See note 26. Toda (1981, p. 21): *vicinte(ṃ)ti*.

²⁷⁷ *mahāyaśā* is BHS Voc. sg. Cf. BHSG (p. 50, 8. 27).

²⁷⁸ *sarvaśa* is BHS Nom. sg.

²⁷⁹ The Chinese translation 『妙法華』 : Buddha addresses the fact that I (śāriputra) am the best one (=chief). (T no. 262, 9, 6b27: 佛說我第一). See note 37.

²⁸⁰ See note 16. Toda (1981, p. 21): 'smi.

4	{n}kin ²⁸¹	nirdiṣṭā mama nirvāṇe atha caryā	mi ²⁸²	darśitā 8 (=29)	pramuñca ²⁸³	ghoṣaṃ	giridum̐dubhisvara ²⁸⁴	
KN	kiṃ	niṣṭhā mama nirvāṇe atha caryā	mi	darśitā 29	pramuñca	ghoṣaṃ	varadundubhisvarā	
C3	kiṃ	niṣṭhā mama nirvāṇe atha ca<r>yā	'pi	darsitā (29)	pramuñca	ghoṣaṃ	varadundubhisvarā	
5	udāharasva yatha ²⁸⁵	eṣa dharma ²⁸⁶ ·	sthitā ime	putra ²⁸⁷	jīnasya	orasā ²⁸⁸	avalokayantī ²⁸⁹ ca	
KN	udāharasva yatha	eṣa dharmah	ime sthitā	putra	jīnasya	aurasā	vyavalokayantaś ca	
C3	udāharasva yatha	eṣa dharma :	ime sthitāḥ	putra	j<i>nasya	orasā :	vyavalokayantas ca	
6	kṛtājālī ²⁹⁰	jīnam (30)	devās ca nāgās	tatha ²⁹¹	yakṣa ²⁹²	kinnarā ²⁹³ ·	koṭisahasrā yatha ²⁹⁴	gamgavālikāḥ ²⁹⁵
KN	kṛtāñjalī	jīnam 30	devās ca nāgās	ca	sayakṣarākṣasāḥ		koṭisahasrā yatha	gaṅgavālikāḥ
C3	kṛtāmjalī	jīnam (30)	devās ca nāgās	ca	sayakṣarākṣasāḥ		koṭisahasrā yatha	gamgavālikā :
7	ye cāpi prārthenti	imāgrabodhim	sahasry ²⁹⁶	aśīti ²⁹⁷	paripūrṇa	ye sthitāḥ 10 (=31)		
KN	ye cāpi prārthenti	samagrabodhiṃ	sahasraśītiḥ		paripūrṇa	ye sthitāḥ 31		
C3	ye cāpi prārthenti	mama agrabodhim	sahasra	'śītiḥ	paripūrṇa	ye sthitāḥ (31)		

[Translation]

(26-27) In just this way, those who wish for the awakening of *pratyekabuddha*, *bhikṣus*, *bhikṣuṇīs*, gods, snakes, *Yakṣas*, *Gandharvas*, and the great serpents talk with each other, gaze at the greatest man who has two feet and consider their doubts [about what the Buddha said]. The great renowned one! Please declare [the meaning]. (*Pathyā*²⁹⁸, *Pathyā*)

(28) As many *śrāvaks* of *Sugata* from all directions, today, here, I (Śāradvatīputra) am the best one (= chief) indicated by Buddha. (*Pathyā*²⁹⁹)

(29) The king of humans! Then, indeed, I also have doubts about my own wisdom. Is the practice, which

²⁸¹ See note 7. Toda (1981, p. 21): [n]kin.

²⁸² mi is BHS Acc of *aham*.

²⁸³ See note 7.

²⁸⁴ See note 7. BHSD (p. 211): I am doubtful of *-giri-*, which seems to stand for a form of *gir(ā)*, speech, words, and suggest *em*, to *-gira-*, m.c. for *-girā*, see prec.

²⁸⁵ See note 158.

²⁸⁶ *dharma* is BHS Nom. sg. *yatha eṣa dharma* is read as an adverb.

²⁸⁷ Due to the meter (v), *putra* (BHS Nom. pl.) is appropriate.

²⁸⁸ BHSD (p. 160): =Pali id., Skt. *aurasa*. See note 36.

²⁸⁹ Due to the meter (-), *avalokayantī* is more appropriate than *avalokayanti*.

²⁹⁰ *kṛtājālī* is BHS Nom. pl. See note 26. Toda (1981, p. 21): *kṛtā(m)jail*.

²⁹¹ See note 271.

²⁹² Due to the meter (v), *yakṣa* (BHS Nom. pl.) is more appropriate than *yakṣāḥ*.

²⁹³ *kinnarā* is BHS Nom. pl.

²⁹⁴ See note 158.

²⁹⁵ See note 7.

²⁹⁶ BHSD (p. 588): *sahasrī*.

²⁹⁷ Toda (1981, p. xlv): *aśīti* is Nom.

²⁹⁸ *pratyekabodhi prārthenti bhikṣavas tatha bhikṣuṇī* : --v- v--- -v-- v-v- (*bhi* is -).

²⁹⁹ *aham atra pāramīprāpto nirdiṣṭo smi maharṣiṇā*: vv(-)-v- v--- ---v v-v-.

- was explained [by the Buddha] to me at that time, defined with regard to my *nirvāna*? (*Pathyā*³⁰⁰)
- (30) May one who has a speech like a large kettledrum release [your] voice! May you declare this dharma just like that! These, *Jina*'s own sons, are standing, and those with palms joined in prayer are gazing at *Jina*. (*Vaṃśasthā*, *Upeṇḍravajrā*³⁰¹, *Vaṃśasthā*, *Indravamśā*³⁰²)
- (31) In this manner, thousands of *koṭis* gods, snakes, *Yakṣas*, *Kinnaras* are like the sand of the Ganges. Moreover, those who are eager to set out these supreme enlightenments and fully eighty thousand [people] are staying. (*Indravamśā*, *Indravamśā*, *Indravajrā*, *Vaṃśasthā*³⁰³)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6b23-6c4

其求緣覺者，比丘比丘尼，諸天龍鬼神及乾闥婆等，相視懷猶豫，瞻仰兩足尊。是事爲云何。願佛爲解說。於諸聲聞衆，佛說我第一。我今自於智疑惑不能了，爲是究竟法，爲是所行道。佛口所生子，合掌瞻仰待。願出微妙音，時爲如實說。諸天龍神等，其數如恒沙。求佛諸菩薩，大數有八萬。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 68c28-69a13

其求緣覺者，比丘比丘尼，諸天龍鬼神捷沓摩休勒，及餘諸等類，心各懷猶豫，請問兩足尊。大德願解說。一切諸聲聞，安住所教化，大聖見歎譽。我獨度無極，鄙意在沈吟，不能自決了究竟至泥洹。今復聞此說。唯願演分別。雷震音現說。如今所發教，猶若師子吼。最勝諸子等，歸命皆叉手欲聞正是時。願爲分別說。諸天龍衆，鬼神眞陀，無數百千如江河沙。而悉僉曰。供養世尊，咸欲發問於尊佛道。

[Tibetan translation] D J15a3-6; P Chu17a3-7; S ma22b5-23a3; Z ma23b7-24a6

rang rgyal byang chub gang 'tshal ba || dge slong de bzhin dge slong ma || lha dang klu dang gnod spyin dang || lto 'phye (P phye) che dang dri za dag || the tshom 'tshal zhing rnam sems te || de dag phan tshun gtam mchi zhing || rkang gnyis mchog la rab blta (P, S, Z lta) na || thub pa chen po lung bstan gsol || bde bar gshegs pa'i nyan thos rnam || 'di na ji snyed mchis pa kun || de yi nang na bdag mchog ces || drang srong mchog gis bstan lags na || mi yi gtso bo nyid kyi gnas || 'di la bdag kyang the tshom 'tshal || mya ngan 'das mthar bdag *phyir tam* (S, Z phyin gtam) || 'on te bdag la spyod bstan tam (S, Z gtam) || rnga mchog dbyangs kyis rab tu gsung phyung ste || chos 'di ji lta lags pa bshad du gsol || rgyal sras thugs sras mchis pa 'di dag rnam || thal mo sbyar bar (S, Z ba) bgyis nas rgyal la (S, Z ba) lta || lha dang klu dang gnod spyin srin por bcas || bye ba stong phrag gang gā'i (S, Z ganggā'i) bye ma snyed || byang chub mchog 'di 'tshal pa gang lags pa || brgyad khri tshang bar gang mchis de dag dang ||

Fol. 42a7- 42b7(KN. 35. 13-36. 5)

42a7 rājāna³⁰⁴ ye ma-
 KN rājāna ye ma-
 C3 rājāna ye ma-

³⁰⁰ (29cd) *nkin nirdiṣṭā mama nirvāṇe atha caryā mi darśitā*: ---- v--- -vv(-)-- v-v- (*ma* is -).

³⁰¹ *udāharasva yatha eṣa dharmā* :: v-v --v v-v -v (*va* is -).

³⁰² *avalokayantī ca kṛtājālī jinam*: vv(-)-v --v v-v -v-.

³⁰³ *sahasry aśīti paripūrṇa ye sthitāḥ*: v-v --v v-v -v (*ti* is -).

³⁰⁴ Due to the meter (v), *rājāna* (BHS Nom. pl.) is more appropriate than *rājānā*.

42b1	hipati ³⁰⁵	cakravartino ³⁰⁶	ya	āgatā ³⁰⁷	kṣetrasahasrakoṭibhi ³⁰⁸	kṛtāmjali ³⁰⁹	sarvi ³¹⁰	sthitā ³¹¹	sagora-
KN	hipati	cakravartino	ye	āgatāḥ	kṣetrasahasrakoṭibhiḥ	kṛtāñjalī	sarvi		sagaura-
C3	hipati	cakravartino	ye	āgatāḥ	kṣetrasa«ha»srakoṭibhiḥ	kṛtāmjalī	sarvi		sagaura-
2	vā ³¹² ·	kathaṃ nu caryām		paripūrayema iti (32)	evam ukte bhagavāmn ³¹³	āyūṣmantam ³¹⁴	śāra-		
KN	vāḥ sthitāḥ	kathaṃ nu caryām		paripūrayema 32	evam ukte bhagavān	āyūṣmantam	śāri-		
C3	vā sthitāḥ	kathaṃ nu ca<r>yā<m>		paripūrayema iti (32)	evam ukta bhagavān	āyūṣmantam	sāri-		
3	dvatīputram	etad avocat	alaṃ	śāradvatīputra	kiṃ	tavānenārthena	bhāṣitena ·		
KN	putram	etad avocat	alaṃ	śāriputra	kim	anenārthena	bhāṣitena		
C3	putram	etad avocat	alaṃ	sāriputra	kim	anenārthena	bhāṣitena		
4	tat kasya heto ³¹⁵	saṃtrāsam	āpatsyaṃtīha ³¹⁶	śāradvatīputrāyaṃ	sadevako loko	smi-			
KN	tat kasya hetoḥ	uttrasiṣyati		śāriputrāyaṃ	sadevako loko	'smi-			
C3	tat kasya hetoḥ	uttrasiṣyati		sāriputrāyaṃ	sadevako loka	asmi-			
5	nn ³¹⁷	arthe vyākryamāṇe ·	dvir ³¹⁸	apy āyūṣmāṃ ³¹⁹	cchāradvatīputro	bhagavāntam ³²⁰	adhyeṣati ³²¹ sma ·	bhā-	
KN	nn	arthe vyākryamāṇe	dvaitīyakam	apy āyūṣmāñ	śāripuro	bhagavāntam	adhyeṣate sma	bhā-	
C3	nn	arthe vyākryamāṇe	dvaitīyakam	apy āyūṣmān	sāripuro	bhagavāntam	adhyeṣate sma	bhā-	

³⁰⁵ Toda (1981, p. 22): *mahipavi*. *vi* and *ti* look similar, so I read it as *mahipati* which means the lords of the earth. Because of the meter (v), the ending *i* is suitable, and based on the BHS, *mahipati* is BHS Nom. pl. Cf. BHS (p. 81, 10.189): Nom. acc. pl. *-i*, is much less common than *ī*. It occurs, however, not infrequently, in metrically in different positions.

³⁰⁶ Toda (1981, p. 22): *cakravartino*.

³⁰⁷ *āgatā* in BHS Nom. pl. *ya āgatā* is the same as in note 31.

³⁰⁸ *kṣetrasahasrakoṭibhi* is BHS Ins. pl. Cf. Speijer (1973, p. 46, §62). Toda (1981, p. 22): *kṣetrasahasrakoṭibhi(h)*.

³⁰⁹ *kṛtāmjali* is BHS Nom. pl. See note 7.

³¹⁰ *sarvi* is BHS Nom. pl.

³¹¹ *sthitā* is BHS Nom. pl.

³¹² *sagoravā* is BHS Nom. pl. *o* and *au* are equal in the Kashgar ms. See note 36.

³¹³ See note 25. Toda (1981, p. 22): *bhagavā[m]ḥ*.

³¹⁴ See note 7.

³¹⁵ *heto* is BHS Gen. sg. Toda (1981, p. 22): *tat kasya heto(h)*.

³¹⁶ See note 26. Toda (1981, p. 22): *āpatsya[m]ḥ*.

³¹⁷ See note 16. Toda (1981, p. 22): *'sminn*.

³¹⁸ *dvir* is read as adverb. Cf. BHS (p. 70, §10.20).

³¹⁹ See note 7.

³²⁰ See note 7.

³²¹ See note 168.

6	ṣatu	bhagavāṃ ³²²	bhāṣatu	sugatedam	artham	yam sandhā ³²³	bhagavān	gambhīrasya ³²⁴	tathā-
KN	ṣatām	bhagavān	bhāṣatām	sugata	etam	evārtham			
C3	ṣatām	bhagavām	bhāṣatām	sugata :	etam	evārtha<m>			
7	gatajñānasya punaḥ punaḥ saṃvarṇanam karoti ·					tat kasya heto . ³²⁵			
KN						tat kasya hetoḥ			
C3						tat kasya hetoḥ			

[Translation]

(32) The kings, who are the lords of the earth, and the *Cakravartins*, who came [here] in the manner of thousands of *koṭis* of fields, have their hands in prayer. Everyone is standing and respects [and thinks], “how are we to fulfill the practice?” (*Indravamśā*³²⁶, *Vamśasthā*, *Vamśasthā*³²⁷, *Upendravajrā*)

When they are addressed like this [by Śārdvatīputra], the Buddha said to the venerable Śārdvatīputra the following words: “Oh, Śārdvatīputra! It is enough to explain what my purpose is. What is the reason for it? Oh, Śārdvatīputra! While the meaning is being explained, here, the people along with the gods will tremblingly fall to the ground.” Venerable Śārdvatīputra also asked the Buddha a second time. “May Bhagavat describe! Oh, *Sugata*! Please explain this purpose, why the Buddha praises [the mysterious intention of] the allusiveness of the profound wisdom of Tathāgata repeatedly. What is the reason for it?”

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6c5-10

又諸萬億國，轉輪聖王至，合掌以敬心，欲聞具足道。爾時佛告舍利弗。止止不須復說。若說是事，一切世間諸天及人皆當驚疑。舍利弗重白佛言。世尊，唯願說之，唯願說之。所以者何。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69a13-20

國主帝王，轉輪聖王，悉共同心。億百千姪一切恭敬叉手，而立，德何因盛衆行具足。爾時世尊，告舍利弗。且止且止用問此誼。所以者何。諸天世人聞斯說者，悉當恐怖。時舍利弗，復重啓曰。唯願大聖，如是誼者，加哀說之。所以者何。

[Tibetan translation] D J15a6-b1; P Chu17a7-b2; S ma23a3-7; Z ma24a6-b2

sa bdag 'khor los (P lo) sgyur ba'i rgyal po gang || bye ba stong gi zhing nas lhags pa dag || spyod pa ji ltar yongs su rdzogs bgyi zhes || thams cad thal mo sbyar te gus par mchis || de skad ces gsol pa dang | (P ||) bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri'i bu la 'di skad ces bka' stsal to || shā ri'i bu don 'di bshad pas ci zhig bya | (P ||) de ci'i phyir zhe na | (P ||) shā ri'i bu don 'di bshad na lha dang bcas pa'i 'jig rten 'di (P om. adi) dang ngas par 'gyur ro || yang tshe dang ldan pa shā ri'i bus bcom ldan 'das la lan gnyis su gsol ba btap pa | don 'di nyid bcom ldan 'das bshad du gsol | (P ||) bde bar gshegs pa bshad du gsol | (P, Z ||) de ci'i slad

³²² See note 7.

³²³ *sandhā* is BHS Acc. sg. See note 7. Toda (1981, p. 22): *yamsandhā(ya)*.

³²⁴ See note 7.

³²⁵ See note 27.

³²⁶ *rājāna ye mahipati cakravartino*: --v -vv(-)v v-v -v-.

³²⁷ *kṛtāmjali sarvi sthitā sagoravā*: the meter is v-v --v v-v -v- (*li* is -). Cf. Edgerton (1946, 45).

du zhe na | (P ||)

Fol. 42b7-43a7 (KN. 36. 5-11)

42b7 santi :³²⁸ {||}³²⁹

KN santi

C3 santi

43a1 khalu bhagavāṃ³³⁰ tasyāṃ pariṣadi bahūni prāṇasātāni³³¹ · bahūni prāṇasahasrāṇi³³² bahūni

KN bhagavaṃs tasyāṃ parṣadi bahūni prāṇiśātāni bahūni prāṇisahasrāṇi bahūni

C3 bhagavan tasyāṃ parṣadi bahūni prāṇisātāni bahūni prāṇisahasrāṇi bahūni

2 prāṇasātasahasrāṇi³³³ bahūni prāṇakoṭinayutaśatasahasrāṇi³³⁴ ye pūrvabuddhadarśāvina .³³⁵

KN prāṇiśātasahasrāṇi bahūni prāṇikoṭinayutaśatasahasrāṇi pūrvabuddhadarśāvini

C3 prāṇisātasahasrāṇi | bahūni prāṇikoṭīniyutasatasahasrāṇi pūrvabuddhadarsīvinaḥ

3 prajñāvantas te bhagavato bhāṣitam abhiśraddadhāsyamti³³⁶ · adhimokṣyamty³³⁷ avakalpayiṣyamti³³⁸ · te

KN prajñāvanti yāni bhagavato bhāṣitaṃ śraddhāsyanti

C3 prajñāvantaḥ ye bhagavato bhāṣitaṃ saddhāsyanti |

4 pattīyīṣyamty³³⁹ udgrhīṣyamti³⁴⁰ atha khalv āyuṣmāṇṇ³⁴¹ cchāradvatīputro bhagavantam a<na>yā³⁴²

KN pratīyīṣyanti udgrahīṣyanti || atha khalv āyuṣmāṇ śāripuro bhagavantam anayā

C3 pattīyīṣyanti udgrahīṣyanti || atha khalv āyuṣmāṇ cchāripuro bhagavantam anayā

³²⁸ Kern reads *santi* in the next sentence.

³²⁹ Despite the fact that there is a *dvi daṇḍa*, which indicates the end of the sentence, after *santi*, *santi khalu* works as “then there are.” The scribe might have thought that this was the end of the sentence because of the presence of the verb *santi* here. However, *dvi daṇḍa* is a mistake because the verb, *santi*, was placed at the beginning of the sentence in order to emphasize this verb in the sentence.

³³⁰ *bhagavāṃ* is BHS Voc. sg.

³³¹ BHSD (p. 391): Skt. only *prāṇin*.

³³² Toda (1981, p. 22): *prāṇasahasrāṇi*. See note 331.

³³³ Toda (1981, p. 22): *prāṇasahasrāṇi*. See note 331.

³³⁴ See note 331.

³³⁵ See note 13 and 27. *darśāvina* is Nom. pl. in the case that · is :.

³³⁶ See note 7 and BHSG (p. 216).

³³⁷ See note 7.

³³⁸ See note 7.

³³⁹ See note 7. Cf. *pattiyati* means trusts (Dictionary of Pāli, p. 180).

³⁴⁰ See note 7.

³⁴¹ See note 25 and 225. Toda (1981, p. 22): *āyuṣmāṇṇ*.

³⁴² On account of the meaning (this), I add *na*. Cf. Toda (1981, p. 22): *a(na)yā*.

5	gāthayā abhāṣata	vispaṣṭa ³⁴³	bhāṣāhi ³⁴⁴	narendrarājā ³⁴⁵	santīha parṣad ³⁴⁶	bahuprāṇa ³⁴⁷⁻
KN	gāthayādhyabhāṣata	vispaṣṭu	bhāṣasva	jināna uttamā	santīha parṣāya	sahasra prāṇinām
C3	gātha {ā}yā 'dhyabhāṣata	vispaṣṭa	bhāṣasva	narendrarājā	santīya parṣāya	sahasra prāṇinām
6	koṭayah śraddhā ³⁴⁸	prasannāḥ sugate ³⁴⁹	sagoravā ³⁵⁰	jñāsyā<ṃ>ti ³⁵¹	ye dharmam udāhṛtaṃ te (33) a-	
KN	śrāddhāḥ	prasannāḥ sugate	sagauravā	jñāsyanti	ye dharmam udāhṛtaṃ te 33 a-	
C3	sraddhāḥ	prasannāḥ sugate	sagauravā :	jñāsyahi	ye dharmam udāhṛtan te (33) a-	
7	tha khalu bhagavāṃ ³⁵²	dvir ³⁵³	apy āyuṣmaṃtaṃ ³⁵⁴	śāradvatīputram	etad avocat	
KN	tha khalu bhagavān	dvaitīyakam	apy āyuṣmantam	śāriputram	etad avocat	
C3	tha khalu bhagavāṃ	dvaitīyakam	apy āyuṣmantam	sāriputram	etad avocat	

[Translation]

Oh, Bhagavat! Then, in this assembly, there are many hundreds of sentient beings, many thousands of sentient beings, many hundred thousands of sentient beings, and many hundred thousand myriad *koṭis* of sentient beings. Those who previously met Buddha are wise and they will believe, apply zealously, and put faith in the speech of Buddha. They will believe and comprehend it.” Then, Venerable Śārdvatīputra recited to Buddha by means of this stanza.

(33) May the king of God among men explain [the meaning] clearly. In this assembly, there are many *koṭis* of sentient beings. Those who have pure faith and respect for the Buddha will understand the dharma explained by you. (*Indravajrā, Indravamśā, Indravamśā, Indravajrā*³⁵⁵)

Then, Bhagavat also said to the venerable Śārdvatīputra the following a second time.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6c10-16

是會無數百千萬億阿僧祇衆生，曾見諸佛。諸根猛利智慧明了，聞佛所說，則能敬信。爾時舍利弗欲

³⁴³ *vispaṣṭa* is BHS Acc. sg.

³⁴⁴ *bhāṣāhi* is BHS Imperative 2 sg. See note 229.

³⁴⁵ Pk, C1-3, P3, T3, 6, 8, A2, 3, N1, and D1: *narendrarājā*. K, C4-6, B, R, P1, 2, T2, 4, 5, 7, 8, A1, and N2: *jināna uttamā*. Cf. Tsukamoto et al (1988, 112). There is 法王無上尊 in 『妙法華』, and this Chinese translation might be close in meaning to *jināna uttamā*. In contrast, there is 人中王 in 『正法華』, and this Chinese translation seems to mean a *narendrarājā*.

³⁴⁶ Toda (1981, p. xxxviii): Loc, sg. f.

³⁴⁷ Due to the meter (v), here this is *bahuprāṇa* (BHS Nom. pl.). See note 331.

³⁴⁸ *śraddhā* is BHS Nom. pl. Cf. Toda (1981, p. 22): *śraddhā(h)*.

³⁴⁹ *sugate* is BHS Acc. sg.

³⁵⁰ See note 36 and 312.

³⁵¹ Because of the meter (-), I add *ṃ*. The same as note 26. Toda (1981, p. 22): *jñāsyā(ṃ)ti*.

³⁵² See note 7.

³⁵³ See note 318.

³⁵⁴ See note 7.

³⁵⁵ *jñāsyā<ṃ>ti ye dharmam udāhṛtaṃ te*: --v --v v-v -- (*ṃ of yaṃ* is added because of the meter).

重宣此義，而說偈言。法王無上尊，唯說，願勿慮。是會無量衆，有能敬信者。佛復止舍利弗。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69a20-27

於此衆會有無央數，億百千載蚊行喘息蝸蜚蠕動群生之類。曾見過佛知殖衆德，聞佛所說，悉當信樂，受持奉行。時舍利弗以偈頌曰。願人中王，哀恣意說。此出家者衆庶億千，恭肅安住，欽信慧誼。斯之等類，必皆欣樂。於時世尊，歎舍利弗。

[Tibetan translation] D J15b1-4; P Chu17b2-6; S ma23a7- b4; Z ma24b3-7

bcom ldan 'das 'khor 'di (S, Z de) na srog chags brgya phrag mang po | (P ||) srog chags stong phrag mang po | (P ||) srog chags brgya stong phrag mang po | srog chags bye ba khrag khrig brgya stong phrag (P om. phrag) mang po sngon gyi sangs rgyas mthong ba (S, Z |) shes rab dang ldan pa gang dag || (S, Z om. ||) bcom ldan 'das kyis bshad pa la dad pa dang (S, Z |) yid ches pa dang (S, Z |) 'dzin par 'gyur ba mchis so || de nas de'i (P om. de'i) tshe tshe dang ldan pa shā ri'i bus tshigs (Z tshig) su bcaḍ pa 'di gsol to || srog chags stong nmams 'khor na mchis pa dag || dad dga' bde bar gshegs la gus pa ste || khyod kyis (P kyī) chos bstan de dag 'tshal bar 'gyur || mi dbang rgyal po gsal bar bshad du gsol || de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri'i bu la lan gnyis su yang 'di skad ces bka' stsal to ||

Fol. 43a7-44a1 (KN. 36.11-37.7)

43a7 alaṃ śāradvatīpu-
KN alaṃ śāripu-
C3 alaṃ śāripu-

43b1 trānenaivārthena bhāṣitena utraśiṣyati³⁵⁶ · śāradvatīputrāyaṃ sadevako lo-
KN trānenārthena prakāśitenottraśiṣyati śāriputrāyaṃ sadevako lo-
C3 trānenā<r>thena prakāśitena | utraśiṣyati śāriputrāyaṃ sadevako lo-

2 ko smiṃn³⁵⁷ arthe vyākṛyamāṇe³⁵⁸ adhimānaprāptāś³⁵⁹ ca bhikṣavo smiṃn³⁶⁰ arthe mahāprapātaṃ pra-
KN ko 'sminn arthe vyākṛyamāṇe 'bhimānaprāptāś ca bhikṣavo mahāprapātaṃ pra-
C3 ka asminn a<r>the vyākṛyamāṇe adhimānaprāptāś ca bhikṣavo mahā(omission)

³⁵⁶ *uttrasta* (Skt.); *uttasta*, *utrasta* (Pāli); *utrasta* (Gāndhārī). *utraśiṣyati* is BHS future 3 pl. Cf. BHS (p. 136, 28.3): Third singular *ati* based on Sanskrit third plural *anti*. See note 104. Toda (1981, p. 22): *u(t)traśiṣyati*. Gandhari.org – Gāndhārī Language and Literature.

³⁵⁷ See note 7 and 16. Toda (1981, p. 22): *'smiṃn*.

³⁵⁸ Cf. BHS (p. 29, 3.95).

³⁵⁹ Pāli: *adhimāna*; Skt.: *abhimāna*. See introduction 0.2.4.1. See note 31.

³⁶⁰ See note 7 and 16. Toda (1981, p. 22): *'smiṃn*.

3	patsyaṃty ³⁶¹	atha khalu bhagavāṃs	tasyāṃ velāyāṃm ³⁶²	imā ³⁶³	gāthā ³⁶⁴	abhāṣata alaṃ mi ³⁶⁵	dha-	
KN	patiṣyanti	atha khalu bhagavāṃs	tasyāṃ velāyāṃ	imāṃ	gāthāṃ	abhāṣata alaṃ hi	dha-	
C3	tiṣyanti	atha khalu bhagavān	tasyāṃ velāyāṃ	imā	gāthā	abhāṣata alaṃ mi	dha-	
4	rmeṇa	prabhāṣitena	sūkṣmam	idaṃ jñānam atarkikañ ³⁶⁶	ca ³⁶⁷ ·	adhimānaprāptā ³⁶⁸	bahu ³⁶⁹ sa-	
KN	rmeṇiha	bhāṣitena	sūkṣmaṃ	idaṃ jñānam atarkikaṃ	ca	abhimānaprāptā	bahu sa-	
C3	rmeṇa hi	bhāṣitena	sūkṣmaṃ	idaṃ jñānam atarkitañ	ca	adhimānaprāptā	bahu sa-	
5	nti bālā	nirdiṣṭadharmasmi ³⁷⁰	kṣipaṃty ³⁷¹	ajānakāḥ (34)	atha khalv	āyuṣmāṃñ ³⁷²	cchāradvatīpu-	
KN	nti bālā	nirdiṣṭadharmasmi	kṣipe	ajānakāḥ 34	traitīyakam apy	āyuṣmāñ	śāripu-	
C3	nti bālā :	nirdiṣṭadarmmasmi	kṣipe	ajānakāḥ (34)	tetrīyakam apy	āyuṣmāṃ	cchāri[pu]-	
6	tras tṛr ³⁷³ api	bhagavantam adhyeṣati ³⁷⁴	sma ·	bhāṣatu	bhagavāṃ ³⁷⁵	bhāṣatu	sugatedam	artha ³⁷⁶
KN	tro	bhagavantam adhyeṣate	sma	bhāṣatām	bhagavān	bhāṣatām	sugata etam	evārtham
C3	tro	bhagavantam adhyeṣate	sma	bhāṣatām	bhagavān	bhāṣatān	sugata <eta>m	artha<m>
7	matsadr̥śānām ³⁷⁷ hi	bhagavān ³⁷⁸	asyāṃ	pariṣadi	bahūni śatasahasrāṇi ³⁷⁹	saṃvidyaṃ-		
KN	mādr̥śānām	bhagavann	iha	parṣadi	bahūni prāṇiśatāni	saṃvidyante		
C3	mādr̥śānām	<bha>ga[va]nn	iha	parṣadi	bahūni satāni	saṃvidyante		

³⁶¹ See note 7.

³⁶² See note 25.

³⁶³ *imā* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 22): *imā(m)*.

³⁶⁴ *gāthā* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 22): *gāthā(m)*.

³⁶⁵ *mi* is BHS Gen. of *aham*.

³⁶⁶ See note 7.

³⁶⁷ According to the Turkistanischer Gupta-Typ (Schrifttypu III), it can be read as *ñca*. Toda (1981, p. 22): *ca*. Sander (1968, Tafel 29).

³⁶⁸ See note 359.

³⁶⁹ *bahu* is BHS Nom. pl. Because of the meter (v), *bahu* is more appropriate than *bahavas*.

³⁷⁰ *nirdiṣṭadharmasmi* is BHS, Loc. sg. Due to the meter (v), *nirdiṣṭadharmasmi* is more appropriate than *nirdiṣṭadharmasmin*. Toda (1981, p. 22): *nirdiṣṭadharmas mi*.

³⁷¹ See note 7 and 168.

³⁷² See note 25. Toda (1981, p. 22): *āyuṣmā[m]ñ*.

³⁷³ *tṛr* is equivalent to *trir*. Cf. BHSG (p. 29, 3.94).

³⁷⁴ See note 168.

³⁷⁵ See note 7.

³⁷⁶ *artha* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 22): *artha(m)*.

³⁷⁷ Tibetan and Chinese translate "similar to me (=śāradvatīputra)." Cf. Speijer (1973, pp. 45-46, §61): the similarity is to the function of an instrument; the Gen. has a concurrent construction as equality, likeness, and identity.

³⁷⁸ *bhagavān* is BHS Voc. sg.

³⁷⁹ Toda (1981, p. 22): (*prāṇa*)śatasahasrāṇi.

44a1 ti³⁸⁰.
KN
C3

[Translation]

“Oh, Śāradvatīputra! It is enough to explain just this purpose. They will be frightened. Oh, Śāradvatīputra! While the meaning is being explained, these people including gods become arrogant. And while the meaning (is being explained), *bhikṣas* will fall down the steep bank.” Then, at that time, Bhagavat proclaimed this stanza.

(34) It is enough for me to explain the dharma (I have explained the dharma enough). This knowledge is subtle and beyond [your] comprehension. There are many foolish people who become arrogant. Those who are ignorant throw away [things, issues] with respect to the dharma declared [by me]. (*Upemdravajrā*, *Indravajrā*³⁸¹, *Indravajrā*³⁸², *Indravamśā*)

Then, the venerable Śāradvatīputra also requested Bhagavat a third time. “May Bhagavat explain. Oh, *Sugata*! Please explain this meaning. Oh, Bhagavat! Since many hundred thousands [of sentient beings], like me (= Śāradvatīputra), exist in this assembly.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6c16-22

若說是事，一切世間天人阿修羅，皆當驚疑。增上慢比丘將墜於大坑。爾時世尊，重說偈言。止止不須說。我法妙難思。諸增上慢者，聞必不敬信。爾時舍利弗重白佛言。世尊，唯願說之。唯願說之。今此會中，如我等比百千萬億，

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69a27-b5

如是至三，告曰勿重。諸天世人悉懷慢恣，比丘比丘尼墜大艱難。世尊以偈告舍利弗。且止且止。用此為問。斯慧微妙，眾所不了。假使吾說，易得之誼，愚癡闇塞，至懷慢恣。賢者舍利弗復白佛言。唯願大聖，以時哀說。無央數眾，

[Tibetan translation] D J15b4-7; P Chu17b6-18a1; S ma23b4-24a1; Z ma24b7-25a4

shā ri'i bu don 'di bshad pas ci zhig bya | (P, S, Z ||) shā ri'i bu don 'di bshad na lha dang bcas pa'i 'jig rten 'di dang ngas par 'gyur te | (Z ||) dge slong lhag pa'i nga rgyal can du gyur pa rnam (S, Z ||) g-yang sa chen por lhung bar 'gyur ro || de nas bcom ldan 'das kyis de'i tshe tshigs su bcad pa 'di dag bka' stsal to || nga yi chos 'di bshad pas chog || ye shes 'di phra brtag mi nus || byis pa mang 'khod nga rgyal can || nga yis (S, Z yi) chos bshad mi shes spong (Z spongs) || de nas tshe dang ldan pa shā ri'i bus (S, Z |) bcom ldan 'das la lan gsum du yang gsol ba btab pa (S, Z |) don 'di nyid | (P, S, Z om. |) bcom ldan 'das bshad du gsol | (P, S, Z ||) bde bar gshegs pa bshad du gsol | (P, S, Z ||) bcom ldan 'das 'khor 'di na bdag dang 'dra ba brgya phrag mang du mchis so ||

³⁸⁰ See note 7 and 168.

³⁸¹ *sūkṣmam idaṃ jñānam atarkikañ cā* ∴ --v --v v-v -- (ma is -).

³⁸² *adhimānaprāptā bahu santi bālā*: vv(-)-v --v v-v --.

44a1	anyāni	ca bhagavan bahūni prāṇasātāni ³⁸³	bahūni prāṇasahasrāṇi ³⁸⁴	bahūni prā-
KN	`nyāni	ca bhagavan bahūni prāṇīśātāni	bahūni prāṇisahasrāṇi	bahūni prā-
C3	anyāni	ca bhagavan bahūni prāṇīśātāni	bahūni prāṇisahasrāṇi	bahūni prā-
2	ṇasatasahasrāṇi ³⁸⁵	bahūni prāṇakoṭīśatasahasrāṇi ³⁸⁶	yāni bhagavatā	pūrvabhave-
KN	ṇīśatasahasrāṇi	bahūni prāṇīkoṭīśayutaśatasahasrāṇi	yāni bhagavatā	pūrvabhave-
C3	ṇīśatasahasrāṇi	bahūni pāṇīkoṭī[īniyu]śatasahasrāṇi	yāni bhaga[va]tā	pūrvabhave-
3	ṣu paripācitāni tāni	bhagavato bhāṣitam abhiśraddadhāsyamti ³⁸⁷	te adhimokṣyamty ³⁸⁸	ava-
KN	ṣu paripācitāni tāni	bhagavato bhāṣitaṃ śraddhāsyanti		
C3	ṣu paripācitāni	bhagavato bhāṣitaṃ sraddhāsyanti		
4	kalpayiṣyamti ³⁸⁹ te	pattīyiṣyamti ³⁹⁰	udgrahīṣyamti ³⁹¹ .	teṣāṃ tad bhaviṣyati
KN		pratīyiṣyanti	udgahīṣyanti	teṣāṃ tad bhaviṣyati
C3		pattīyiṣyanti	(omission)	teṣāñ ca tad bhaviṣyati
5	dīrgharātram arthāya hitāya sukhāyety	atha khalv āyusmāñ	cchāradvatī-	
KN	dīrgharātram arthāya hitāya sukhāyety	atha khalv āyusmāñ	śāri-	
C3	dīrgharātram arthāya hitāya sukhāyety	atha khalv āyusmāṃ	cchāri-	
6	putras tasyāṃ velāyāṃ ³⁹²	imāṃ ³⁹³	gāthā abhāṣata	bhāṣāhi ³⁹⁴ dharmam dvīpadottamā ³⁹⁵
KN	putras tasyāṃ velāyāṃ	imā	gāthā abhāṣata	bhāṣasva dharmam dvīpadānam uttamā
C3	putra tasyāṃ velāyā<m	imā>	gāthā abhāṣata	bhāṣasva dharmma<m> dvīpadānam uttamā

³⁸³ See note 331.

³⁸⁴ See note 331.

³⁸⁵ See note 331.

³⁸⁶ Toda (1981, p.22): *prāṇakoṭī(nayuta)śatasahasrāṇi*. See note 331.

³⁸⁷ See note 7 and 336.

³⁸⁸ See note 7 and 337.

³⁸⁹ See note 7 and 338.

³⁹⁰ I assume that *pattīyiṣyamti* was written mistakenly by the scribe, and the correct writing might be *pattīyiṣyamty*. Toda (1981, p.22): *pattīyiṣyam[ti]ty*. See note 7 and 339.

³⁹¹ See note 7 and 340.

³⁹² See note 25.

³⁹³ See note 26, and *imāṃ* is BHS Acc. pl. Cf. Toda (1981, p.22): *imā[ṃ]*.

³⁹⁴ See note 229.

³⁹⁵ Due to the meter (-), *dvīpadottamā* (BHS Voc. sg.) is more appropriate than *dvīpadottama*.

7	mune ³⁹⁶ adhyeṣako	haṃ ³⁹⁷	tava	jyeṣṭhaputraḥ	saṃtīha ³⁹⁸ bhoḥ	prāṇasahasry ³⁹⁹	analpakā ye
KN		ahaṃ	tvam adhyeṣami	jyeṣṭhaputraḥ	santīha	prāṇīna sahasrakotyo	ye
C3		ahaṃ	tvam adhyeṣami	jeṣṭhaputraḥ	santīha	prāṇīna sahasrakotyo	ye
44b1	śraddadhiṣyaṃti ⁴⁰⁰	te dharma ⁴⁰¹	bhāṣitaṃ ⁴⁰² (35)				
KN	śraddadhāsyanti	te dharma	bhāṣitam 35				
C3	sraddadhāsyanti	te dharmma	bhāṣitam (35)				

[Translation]

Oh, Bhagavat! Moreover, those who are many other hundreds of sentient beings, many thousands of sentient beings, many hundred thousands of sentient beings, and many hundred thousand myriad *koṭis* of sentient beings are those who are helped to mature by Bhagavat in a former life. They will believe Bhagavat's teaching. They will zealously apply [it] and will be ready. They will believe and hold [Bhagavat's teaching]. For a long time, for them, it will be for wealth, benefit, and happiness." Then, at that time, venerable Śāradvatīputra recited these stanzas.

(35) Oh, the supreme one who has two feet! Please explain the dharma. I am your most excellent son who seeks [the instruction] of the sage. Bho! Here, there are many thousands of sentient beings who will believe the dharma taught by you. (*Indravamśā, Indravajrā, Indravamśā, Indravamśā*⁴⁰³)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6c23-28

世世已曾從佛受化。如此人等必能敬信，長夜安隱多所饒益。爾時舍利弗欲重宣此義，而說偈言。無上兩足尊，願說第一法。我為佛長子。唯垂分別說。是會無量眾，能敬信此法。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69b5-11

昔過世時曾受佛教，以故今者思聞聖音。聞者則信多所安隱，冀不疑慢。時舍利弗以偈頌曰。我佛長子。今故啓勸。願兩足尊，哀為解說。今有眾生無數億千，悉當信樂聖尊所詔。

[Tibetan translation] D J15b7-16a2; P Chu18a1-5; S ma24a1-5; Z ma25a4-b1

bcom ldan 'das srog chags brgya phrag mang po (S, Z |) srog chags stong phrag mang po (S, Z |) srog chags brgya stong phrag mang po (S, Z |) srog chags bye ba khrag khrig brgya stong phrag mang po (S, Z gang) dag (S, Z ||) bcom ldan 'das (S, Z kyis) sngon gyi srid pa dag na (S, Z |) yongs su smin par mdzad pa gzhan dag kyang mchis te | (P ||) bcom ldan 'das kyis bshad pa la dad par 'gyur (S, Z |) yid ches par 'gyur (S, Z |)

³⁹⁶ *mune* is BHS Gen. sg.

³⁹⁷ *haṃ* is BHS Nom. of *ahaṃ*. Toda (1981, p.22): '*haṃ*.'

³⁹⁸ See note 7.

³⁹⁹ *prāṇasahasry* (*analpakā*) is BHS Nom. pl. Toda (1981, p.22): *prāṇasahasry*. See note 296 and 331.

⁴⁰⁰ See note 7. Toda (1981, p. xlviii): -iṣya- with thematic presents minus thematic vowel. Cf. BHS (p. 148, 31.1).

⁴⁰¹ Due to the meter (v), *dharma* (BHS Acc. sg.) is more appropriate than *dharmam*.

⁴⁰² See note 25.

⁴⁰³ *ye śraddadhiṣyaṃti te dharma bhāṣitaṃ*: the meter is --v --v v-v -v- (*ted* is v).

'dzin par 'gyur ro || de yang de dag gi yun ring po'i don dang sman pa dang bde bar 'gyur ro || de nas tshe dang ldan pa shā ri'i bus de'i tshe tshigs su bcaḍ pa 'di dag gsol to || rkang gnyis rnam kyī mchog gis chos bshad gsol || khyod la sras kyī thu (S, Z thub) bo bḍag gsol pa || 'di na srog chags bye ba stong mchis pa || de dag khyod kyis chos bshad 'di dad 'gyur ||

Fol. 44b1-7 (KN. 38. 4-10)

44b1	ye ca tvayā pūrve{tace} ⁴⁰⁴ bhaveṣu	nityaṃ paripācitāḥ	satva ⁴⁰⁵	<su> ⁴⁰⁶ dī-
KN	ye ca tvayā pūrvabhaveṣu	nityaṃ paripācitā	sattva	sudī-
C3	ye ca tvayā pūrvabhaveṣu	nityaṃ paripācitā[h]	satva	sudī-

2	rgharātram	te pi ⁴⁰⁷	sthitāḥ	sarvi ⁴⁰⁸ ha kṛtva ⁴⁰⁹ aṃjalī ⁴¹⁰	te śraddadhīṣyaṃti ⁴¹¹	te dharmam etat (36)	asmadvidhā
KN	rgharātram	kṛtāñjalī te pi	sthitātra	sarve	ye śraddadhīṣyanti	tavaita dharmam 36	asmāḍṛṣā
C3	rgharātram	kṛtāñjalī te 'pi	sthitā 'tra	sarve	ye sraddadhīṣyanti	te dharmam eta{da}t (36)	asmāḍṛṣā

3	dvādaśa ⁴¹² me ⁴¹³	sahasrā	ye cānyī ⁴¹⁴	prārthenti ⁴¹⁵ ha ⁴¹⁶ agrabodhim ⁴¹⁷	tāṃ ⁴¹⁸	paśyamānaḥ sugata ⁴¹⁹	pra-
KN	dvādaśime	śatāś ca	ye cāpi te	prasthita agrabodhaye	tān	paśyamānaḥ sugataḥ	pra-
C3	dvādabh' ime	satās ca	ye cāpi 'me	prasthita agrabodhaye	tāṃ	pasyamānaḥ sugataḥ	pra-

⁴⁰⁴ *tace* seems to be *bhave* due to the similarity of the letters. If so, the scribe mistakenly wrote *bhave* twice. Cf. Toda (1981, p. 22): *pūrve [tace] bhaveṣu*.

⁴⁰⁵ Due to the meter (v), *satva* (BHS Nom. pl.) is more appropriate than *satvāḥ*.

⁴⁰⁶ I add *su* because of the meter (v) and content.

⁴⁰⁷ See note 16. Toda (1981, p. 22): *'pi*.

⁴⁰⁸ *sarvi* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 22): *sarv' iha*. See note 139.

⁴⁰⁹ Due to the meter (v), *kṛtva* (BHS Gerund) is more appropriate than *kṛtvā*.

⁴¹⁰ *aṃjalī* is BHS Acc. sg. See note 7 and 31. Toda (1981, p. 22): *aṃjalī(m)*.

⁴¹¹ See note 7 and 400.

⁴¹² *dvādaśa* is BHS Nom. pl.

⁴¹³ See note 139. Toda (1981, p. 22): *'me*.

⁴¹⁴ *anyi* is BHS Nom. pl.

⁴¹⁵ See note 270. Toda (1981, p. 22): *prārthent' iha*.

⁴¹⁶ See note 139.

⁴¹⁷ See note 31.

⁴¹⁸ See note 7.

⁴¹⁹ Toda (1981, p. 22): *sugata(h)*.

4	bhāṣatu	teṣāṃ ca harṣa ⁴²⁰	janayāmi <a>grām ⁴²¹ (37) ⁴²²	atha khalu bhagavāṃs trī ⁴²³	apy āyu-
KN	bhāṣatām	teṣāṃ ca harṣam	paramaṃ janetu 37	atha khalu bhagavāṃs traitīyakam	apy āyu-
C3	bhāṣatām	seṣā<m> ca harṣa<m>	parama<m> janetu : (37)	atha khalu bhagavāṃs traitayakam	apy āyu-
5	ṣmataḥ śāradvatīputrasyādhyeṣaṇām	viditvāyusmaṃtaṃ ⁴²⁴	śāradvatīputra-		
KN	ṣmataḥ śāriputrasyādhyeṣaṇām	viditvāyusmantam	śāriputra-		
C3	ṣmataḥ śāriputrasyādhyeṣaṇā<m>	viditvā āyusmaṃta<m>	sāriputra-		
6	m etad avocat	yad idānī ⁴²⁵	tvam śāradvatīputra	yāvat traitīyakam api tathā-	
KN	m etad avocat	yad idānīm	tvam śāriputra	yāvat traitīyakam api tathā-	
C3	m etad avocat	yad idānī<m>	tvam sāriputra	yāvat tretīyakam api tathā-	
7	gatam adhyeṣasi ·	evam adhyeṣantas ⁴²⁶	te haṃ ⁴²⁷	śāradvatīputra	kiṃ vakṣyāmi ·
KN	gatam adhyeṣase	evam adhyeṣamāṇam	tvāṃ	śāripatru	kiṃ vakṣyāmi
C3	gatam adhyaiṣakam	(omission 38.9-10)	tvā<m>	sāripatru	<kiṃ> vakṣāmi

[Translation]

- (36) Moreover, for a long time, sentient beings who have always been helped to mature in a former life by you are all standing as well. Having joined palms in prayer here, they will believe in your dharma. (*Indravajrā*⁴²⁸, *Indravajrā*⁴²⁹, *Indravamśa*, *Indravajrā*⁴³⁰)
- (37) Furthermore, others who are those 12,000, like us, wish to set forth on a supreme bodhi here. Oh, *Sugata*! Please explain while looking at them. And I cause them to produce supreme happiness. (*Indravajrā*, *Indravajrā*, *Indravamśa*⁴³¹, *Indravajrā*⁴³²)

Having understood the third entreaty of venerable Śāradvatīputra, then, Bhagavat also answered this to venerable Śāradvatīputra. “Oh, Śāradvatīputra! Today, since you have asked for the Tathāgata up to three times, Śāradvatīputra, what should I tell for you who are asking like this?”

⁴²⁰ Due to the meter (v), *harṣa* (BHS Acc. sg.) is more appropriate than *harṣam*. Toda (1981, p. 23): *harṣa(m)*.

⁴²¹ See note 31. Due to the meter (v), I add *a*. Toda (1981, p. 23): *janayāmi (a)gram*.

⁴²² Toda (1981, p. 23) omits ||.

⁴²³ See note 373.

⁴²⁴ See note 7.

⁴²⁵ *idānī* is M Indic for *nīm*. Cf. BHS (p. 114). Toda (1981, p. 23): *idānī(m)*.

⁴²⁶ *adhyeṣantas* is Vartamāne Kṛdanta, BHS Gen. sg. Cf. BHS (p. 104, 18. 69): strong stem used for weak. Toda (1981, p. 23): *adhyeṣa[n]tas*.

⁴²⁷ *haṃ* is BHS Nom. of *aham*. Toda (1981, p. 23): *'haṃ*.

⁴²⁸ *ye ca tvayā pūrve{tace}bhaveṣu nityam*: --v --v v-v -- (ve is v).

⁴²⁹ *paripācitāḥ satva <su>dirgharātram*: vv(-) -v -v v-v -- (su is added because of the meter).

⁴³⁰ *te śraddadhīṣyamti te dharmam etat*: --v --v v-v -v (te is v).

⁴³¹ *tām paśyamānaḥ sugata prabhāṣatu*: --v --v v-v -vv (ta is -).

⁴³² *teṣāṃ ca harṣa janayāmi <a>grām*: --v --v v-v -- (ṣa is -, and a is added because of the meter).

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 6c29-7a6

佛已曾世世教化如是等, 皆一心合掌, 欲聽受佛語. 我等千二百, 及餘求佛者. 願爲此衆故, 唯垂分別說. 是等聞此法, 則生大歡喜. 爾時世尊告舍利弗. 汝已慇懃三請. 豈得不說.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69b11-17

會致本德, 決諸疑網, 往古長夜, 曾被訓誨. 是等叉手, 恭肅側立. 必當欽樂於斯法誼. 我之等類千二百人, 及餘衆黨, 求尊佛道. 假令見聞, 安住言教, 尋當歡喜, 興發大意. 于時世尊見舍利弗三反勸助, 而告之曰. 爾今慇懃所啓至三. 安得不說.

[Tibetan translation] D J16a2-5; P Chu18a5-8; S ma24a5-b2; Z ma25b1-5

sngon gyi srid pa rnam su khyod kyis gang || yun ring rtag tu sems can smin mdzad pa || de kun thal mo sbyar te 'di na mchis || de dag chos 'di la ni dad par 'gyur || bdag 'dra brgya phrag bcu gnyis 'di dag dang || gang dag byang chub mchog tu zhugs pa dag || de la gzigs nas bde (S, Z bder) gshegs rab bshad de || de dag dga' ba mchog kyang bskyed du gsol || de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri'i bus lan gsum du (D om. du) gsol ba btab pa (P par) mkhyen nas | tshe dang ldan pa shā ri'i bu la 'di skad ces bka' stsal to || shā ri'i bu 'di ltar de bzhin gshegs pa la lan gsum gyi bar du gsol ba 'debs na | shā ri'i bu de ltar gsol ba 'debs pa la (S, Z om. la) khyod la ji skad byas |

Fol. 44b7-45a7 (KN. 38. 10-39. 3)

44b7 te-
KN te-
C3 te-

45a1	na hi tvam	śāradvatīputra	śṛṇu sādhu ca suṣṭhu	ca manasikuru ⁴³³	bhāṣiṣyāmīti ⁴³⁴	samana-
KN	na hi	śāriputra	śṛṇu sādhu ca suṣṭhu	ca manasikuru	bhāṣiṣye 'ham te	samana-
C3	na hi	sāriputra	ṣṛṇu sādhu ca suṣṭu	ca manasikuru	bhāṣiṣye 'han te	samana-

2	ntarabhāṣitā ceyam	bhagavatā vāg	atha khalu tāvac caiva tasyām	pariṣadi	adhimāni-
KN	ntarabhāṣitā ceyam	bhagavatā vāg	atha khalu tataḥ	parṣada	ābhimāni-
C3	ntarabhāṣitā ceyam	bhagavatā vāk	atha khalu tataḥ	parṣada	ādhimāni-

3	kānām ⁴³⁵	bhikṣubhikṣuṇyupāsikopāsikānām		pañcamātrāṇi ⁴³⁶	prānasahasrāny ⁴³⁷	utthāyā ⁴³⁸
KN	kānām	bhikṣūṇām bhikṣuṇīnām upāsakānām upāsikānām		pañcamātrāṇi	sahasrāny	utthāyā-
C3	kānām	bhikṣūṇām bhikṣuṇīnām upāsakānām upāsikānām ca		pa<ṃ>camātrāṇi	sahasrāṇi	utthāy' ā-

⁴³³ BHSD (p. 418).

⁴³⁴ See note 168.

⁴³⁵ See note 359.

⁴³⁶ See note 7.

⁴³⁷ See note 331.

⁴³⁸ Toda (1981, p. 23): *utthāy' ā*.

4	sanebhyas	te bhagavata ⁴³⁹	pādaḥ śirobhir ⁴⁴⁰ vaṃḍitvā ⁴⁴¹	tadaḥ ⁴⁴² pariṣado pakrā ⁴⁴³	yathā tv	adhimā-
KN	sanebhyo	bhagavataḥ	pādaḥ śirasābhivanditvā	tataḥ parṣado 'pakrāmanti sma	yathāpīdam	abhimā-
C3	sanebhyo	bhagavataḥ	pādaḥ sirobhir vanditvā	tataḥ parṣado 'pakrāmanti sma	yathā 'pīdam	adhimā-
5	nikā ⁴⁴⁴	akuśalamūlavanta ⁴⁴⁵ · aprāpte	prāptasamjñina ⁴⁴⁶	anadhigate	adhigatasamjñinas	te ā-
KN	nākuśalamūlenāprāpte		prāptasamjñino	'nadhigate	'dhigatasamjñinaḥ	ta ā-
C3	nakusalamūlenāprāpte		prāptasamjñina	anadhigate	adhigatasamjñinaḥ	ta ā-
6	tmānaṃ samvraṇaṃ ⁴⁴⁷	jñātvā sacchidraṃ te	tataḥ pariṣado prakrāntā ⁴⁴⁸	bhagavāṃś ca tuṣṇībhāvenā-		
KN	tmānaṃ savraṇaṃ	jñātvā	tataḥ parṣado 'pakrāntāḥ	bhagavāṃś ca tūṣṇībhāvenā-		
C3	tmānaṃ savraṇaṃ	jñātvā	tataḥ parṣadā 'pakrāntā :	bhagavāṃś ca tūṣṇībhāvenā-		
7	dhivāsīt ⁴⁴⁹	atha khalu bhagavāṃ ⁴⁵⁰ punar apy	āyusmaṃ ⁴⁵¹	śāradvatīputram	āmantrayati ⁴⁵² sma ·	
KN	dhivāsayati sma	atha khalu bhagavān	āyusmantam	śāripuṭram	āmantrayate sma	
C3	dhivāsayati sma	atha khalu bhagavān	āyusmantam	sāripuṭram	āmantrayāmāsa	

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Therefore, indeed, may you listen! Concentrate the mind well and excellently! I am going to speak.” And, after this speech was given by Bhagavat, then, to begin with, in the assembly, five thousand sentient beings of monks, nuns, *upāsakas*⁴⁵³, and *upāsikas* who were arrogant, having stood up from [their] seats, having bestowed praise upon the feet of Bhagavat with [their] heads, they left the assembly because those who were arrogant had bad roots. They had the belief that they had attained a level which they had not attained. They had the belief that they had understood things which they had not understood. Having understood that they had their own flaw and defect, they left the assembly. However, Bhagavat accepted with silence. Then, again, Bhagavat also said to the venerable Śāradvatīputra.

⁴³⁹ See note 27.

⁴⁴⁰ *śiro* is Gāndhārī language for a head. Cf. Gandhari.org – Gāndhārī Language and Literature.

⁴⁴¹ See note 7.

⁴⁴² Burrow (1937, §14, 15, and 19). Habata (2007, § 38): *t* und *d* werden in der zentralasiatischen Überlieferung manchmal verwechselt.

⁴⁴³ See note 16. Toda (1981, p. 23): 'pakrā(manti sma).

⁴⁴⁴ See note 359.

⁴⁴⁵ *mūlavanta* is BHS Nom. pl.

⁴⁴⁶ See note 27.

⁴⁴⁷ See note 26. Toda (1981, p. 23): *saḷm̄ḷvraṇaṃ*.

⁴⁴⁸ *prakrāntā* is BHS Nom. pl. I assume that while the copyist was writing this sentence, he might mistakenly have written *prakrāntā*, which means go forward, because *prakrāntā* and *pakrāntā* look very similar. Toda (1981, p. 23): 'p[ḷr]akrāntā.

⁴⁴⁹ *tuṣṇī* might be commonly used in the Kashgar ms. Cf. Nishi (2019, p. 104).

⁴⁵⁰ See note 7.

⁴⁵¹ *āyusmaṃ* is BHS Acc, sg. Toda (1981, p. 23): *āyusmaṃ(tam)*.

⁴⁵² See note 168.

⁴⁵³ The Kashgar ms. reads *upāsika*, but this might be *upāsaka*.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7a6-12

汝今諦聽。善思念之。吾當爲汝分別解說。說此語時，會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等，即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及增上慢，未得謂得，未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。爾時佛告舍利弗。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69b17-22

諦聽諦聽。善思念之。吾當解說。世尊適發此言，比丘比丘尼清信士清信女五千人等，至懷甚慢，即從坐起稽首佛足捨衆而退。所以者何。慢無巧便，未得想得，未成謂成。收屏蓋藏衣服臥具摩何而去。世尊默然亦不制止。

[Tibetan translation] D J16a5-7; P Chu18a8-b4; S ma24b2-6; Z ma25b5- 26a2

shā ri'i bu de'i phyir legs par rab tu nyon la yid la zung zhig dang ngas khyod la bshad do || (S, Z |) bcom ldan 'das kyis de skad ces (P om. skad ces) bka' stsal ma thag tu | 'khor de nas dge slong dang (S, Z |) dge slong ma dang (S, Z |) dge bsnyen dang (S, Z |) dge bsnyen ma lhag pa'i nga rgyal can lnga stong stan las langs te | bcom ldan 'das kyis (S, Z kyis) zhabs gnyis (D, S, Z om. gnyis) la mgo pos phyag 'tsal nas (S, Z te) 'khor de nas dong ngo || 'di ltar lhag pa'i nga rgyal (S, Z can) gyis dge ba'i rtsa ba ma thob par ni thob par 'du shes || (S |, Z om. ||) khong du ma chud par ni khong du chud par 'du (S, Z om. 'du) shes pa de dag rang gi skyon shes te | 'khor de nas dong ba la bcom ldan 'das kyis cang mi gsung bar gyur pas gnang ngo || de nas bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa shā ri'i bu la 'di skad ces bka' stsal to ||

Fol. 45a7- 46a1 (KN. 39. 3-9)

45a7 ni-
KN ni-
C3 ni-

45b1	ṣpalāpā ⁴⁵⁴	me sāradvatīputra	pariṣat ⁴⁵⁵	apalāpā ⁴⁵⁶ hy	apagataphalgu ⁴⁵⁷ .	śuddhāsāre ⁴⁵⁸	prati-
KN	ṣpalāvā	me sārīputra	parṣad		apagataphalguḥ	śraddhāsāre	prati-
C3	ṣpralāvā	me sārīputra	parṣad		apagadaphalguḥ	sraddhāsāre	prati-

⁴⁵⁴ BHSD (p. 337): *palāva* or *palapa* (= Pali).

⁴⁵⁵ *pariṣat* should be *pariṣad* because of the saṃdhi. I assume the reason the scribe wrote *pariṣat* is that the letters *ta* and *da* look slightly similar, so this might be a mistake of the scribe.

⁴⁵⁶ *apalāpā* is BHS Nom. pl.

⁴⁵⁷ *apagataphalgu* is BHS Nom. pl.

⁴⁵⁸ Toda (1981, p. 23): *śuddhā sāre*.

Appendix A: The translation of the Kashgar ms.

2	ṣṭhitā ⁴⁵⁹	sādhu sādhu	śāradvatīputraiteṣāmm ⁴⁶⁰	adhimānikānām ⁴⁶¹	prakramaṇam ⁴⁶²	tena hi tvam	śāradva-
KN	ṣṭhitā	sādhu	śāriputraiteṣām	ābhimānikānām ato	'pakramaṇam	tena hi	śāri-
C3	ṣṭhitā	sādhu	sāriputrai<te>ṣām	ādhimānikānām	prakramaṇam	tena hi	sāri-
3	tīputra śṛṇu	sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru	bhāṣyāmy ⁴⁶³	etam arthaṃ	sādhu bhagavāṃm ⁴⁶⁴	ity ā-	
KN	putra		bhāṣiṣya	etam artham	sādhu bhagavann	ity ā-	
C3	putra		bhāṣiṣye	etam artha<m>	sādhu bhagavān	ity ā-	
4	yuṣmāṃṇ ⁴⁶⁵	cchāradvatīputro	bhagavantaḥ ⁴⁶⁶	pratyaśroṣīd ⁴⁶⁷	bhagavāṃs tam	etad avocat	kadāci-
KN	yuṣmāṃṇ	śāriputro	bhagavataḥ	pratyaśrauṣīt	bhagavān	etad avocat	kadāci-
C3	yuṣmāṃṇ	sāriputro	bhagavataḥ	pratyasrauṣad	bhagavān	etad avocat	kadāci-
5	t kathaṃcic	chāradvatīputra	tathāgataivaṃrūpām	dharmadeśanām kathayati	tadyathāpi ⁴⁶⁸ nāma	śā-	
KN	t karhicic	chāriputra	tathāgata evaṃrūpām	dharmadeśanām kathayati	tadyathāpi nāma	śā-	
C3	n karhacic	chāriputra	tathāgata evaṃrūpām	dharmadesanām kathayati	tad yathā <'pi nāma>	sā-	
6	radvatīputra udumbaraṃ ⁴⁶⁹	puṣpaṃ	kadācit kathaṃcic	saṃdrśyaty ⁴⁷⁰	evam eva śāradvatīputra	tathā-	
KN	riputrodumbarapuṣpaṃ		kadācit karhicic	saṃdrśyate	evam eva śāriputra	tathā-	
C3	riputra udurṣarapuṣpām		kadācit karhacic	saṃdrśyate	evam eva sāriputra	tathā-	
7	gato pi ⁴⁷¹	kadācit kathaṃcid	evarūpām ⁴⁷²	dharmam deśanām ⁴⁷³	kathayati	śraddadhatha ⁴⁷⁴	me śāradvatīputra pattī-
KN	gato 'pi	kadācit karhicid	evaṃrūpām	dharmadeśanām	kathayati	śraddadhata	me śāriputra
C3	gato 'pi	kadācit karhacid	evaṃrūpām	dharmadesanām	kathayati	śraddadhatha	me sāriputra

46a1 yathā⁴⁷⁵ me śāradvatīputra

KN

C3

⁴⁵⁹ *pratiṣṭhitā* is BHS Nom. pl.

⁴⁶⁰ See note 25.

⁴⁶¹ See note 359.

⁴⁶² See note 448. Toda (1981, p. 23): *prakrramaṇam*.

⁴⁶³ The scribe might have thought that *bhāṣyāmy* is the future form because he thought that adding *sya* indicated the future form. Toda (1981, p. 23): *bhāṣ[ya]ṅmy*.

⁴⁶⁴ See note 7. *bhagavān* is BHS Voc. sg

⁴⁶⁵ See note 25. Toda (1981, p. 23): *yuṣmā[ṃ]ṅṇ*.

⁴⁶⁶ *bhagavantaḥ* is BHS Gen. sg. See note 213. Toda (1981, p. 23): *bhagava[n]ṭaḥ*.

⁴⁶⁷ BHS (p. 235): Aor, *aśroṣīt*.

⁴⁶⁸ Toda (1981, p. 23): *tad yathā 'pi*.

⁴⁶⁹ See note 7.

⁴⁷⁰ See note 168.

⁴⁷¹ See note 16. Toda (1981, p. 23): *'pi*.

⁴⁷² See note 234.

⁴⁷³ Toda (1981, p. 23): *dharmā[ṃ]ṅdeśanām*.

⁴⁷⁴ *śraddadhatha* is BHS Imperative 2 pl.

⁴⁷⁵ *pattīyathā* is BHS Imperative 2 pl. BHSD (p. 317): *pattīyati*, often parallel with forms of *śrad-dhā*.

[Translation]

“Oh, Śāradvatīputra! My assembly is free from the chaff because people who deny [what I said] are worthless and departed. They (remaining disciples) have remained in the pure core (=samādhi)⁴⁷⁶. Oh, Śāradvatīputra! Very good! It is very good that those arrogant people went away (= the leaving of those arrogant people is good). Oh, Śāradvatīputra! Therefore, may you listen! Concentrate the mind well and excellently! I am going to teach the purpose.” “Oh, Bhagavat! good!” Venerable Śāradvatīputra gave an ear to Bhagavat. Bhagavat said the following. “Oh, Śāradvatīputra! At some time, in some way, the Tathāgata teaches this kind of instruction of the dharma. Oh, Śāradvatīputra! Just as if one sees *Udumbara* flower at some time, in some way, Oh, Śāradvatīputra! just in such a manner, the Tathāgata also teaches this kind of instruction of the dharma at some time, in some way. Oh, Śāradvatīputra! Believe me! Oh, Śāradvatīputra! Trust me!

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7a12-17

爾時佛告舍利弗。我今此眾無復枝葉，純有貞實。舍利弗，如是增上慢人，退亦佳矣。汝今善聽。當為汝說。舍利弗言。唯然世尊，願樂欲聞。佛告舍利弗。如是妙法，諸佛如來時乃說之，如優曇鉢華華時一現耳。舍利弗，汝等當信佛之所說。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69b22-26

又舍利弗，眾會辟易有竊去者。離廣大誼聲味所拘。又舍利弗，斯甚慢者退亦佳矣。如來云何說此法乎。譬靈瑞華時時可見，佛歎斯法久久希有。爾等當信如來誠諦所說深經。

[Tibetan translation] D J16a7-16b3; P Chu18b4-7; S ma24b6-25a3; Z ma26a2-6

shā ri'i bu nga'i 'khor shin *te ma* (S, Z tu mu) med par gyur te | (P ||) shā ri'i bu snying po ma yin pa med par gyur la (S, Z |) dad pa'i snying po la gnas te (S, Z |) lhag pa'i nga rgyal can de (P om. de) dag dong ba yang (S, Z pa yang) legs so || shā ri'i bu de lta bas na de'i don bshad do || bcom ldan 'das legs so zhes gsol nas | shā ri'i bu bcom ldan 'das kyi lta nyan pa dang | bcom ldan 'das kyi 'di skad ces bka' stsal to || shā ri'i (P ra'i) bu de bzhin gshegs pa ni brgya la res 'ga' zhis 'di lta bu'i (S, Z bu yi) chos bstan pa gsung ngo || 'di lta ste dper na | udumbāra'i (P udumbara'i, S, Z udumwāra'i) tshal la me tog (S, Z om. la me tog) ni brgya la res 'ga' 'byung ngo || shā ri'i bu de bzhin du de bzhin (P om. du de bzhin) gshegs pa yang brgya la res 'ga' zhis chos bstan pa 'di lta bu gsung ngo || shā ri'i bu nga la yid ches par gyis shig (S, Z |)

Fol. 46a1-46b1 (KN. 39. 9-40. 3)

46a1	bhūtavādir ⁴⁷⁷	ahaṃ	śāradvatīputra	ananyathāvādir ⁴⁷⁸	ahaṃ	śā-
KN	bhūtavādy	aham asmi tathāvādy aham asmy		ananyathāvādy	aham asmi	
C3	bhūtavādy	aham asmi tathāvādy aham asmy		ananyathāvādy	aham asmi	

⁴⁷⁶ Cf. BHSD (p. 530).

⁴⁷⁷ *bhūtavādir* is BHS Nom. sg.

⁴⁷⁸ *ananyathāvādir* is BHS Nom. sg.

2	radvatīputra	duranubodhaṃ	śāradvatīputra	tathāgatānām ⁴⁷⁹	arhatāṃ	samyaksambuddhānām	sandhā-	
KN		durbodhyaṃ	śāriputra	tathāgatasya			saṃdhā-	
C3		durbodhyaṃ	sāriputra	tathāgatasya			sandhā-	
3	bhāṣitaṃ	tat kasya hetoḥ	nānāniruktir ⁴⁸⁰	nānānirdeśanānāabhilāpyanidarśanebhi-				
KN	bhāṣyam	tat kasya hetoḥ	nānāniruktinirdeśābhilāpanirdeśanai-					
C3	bhāṣyam	tat kasya hetoḥ	nānāniruktinirdeśābhilāpanidarsanai-					
4	r ⁴⁸¹	me ⁴⁸²	śāradvatīputra	vividhopāyakausalāyāsatasahasraiḥ	satvānām	dharmam	saṃprakāśi-	
KN	r	mayā	śāriputra	vividhair upāyakausalāyāsatasahasrair		dharmah	saṃprakāśi-	
C3	r	me	sāriputra	vividhair upāyakausalāyāsatasahasraiḥ		dharmmas	saṃprakāśi-	
5	tam	atarkyavacaram	tac chāradvatīputra	dharmam	tathāgatavijñeyam	tac chāradvatīputra	dharmam	tat kasya
KN	taḥ	atarko 'tarkāvacaṣas			tathāgatavijñeyah	śāriputra	saddharmah	tat kasya
C3	ta<ḥ>	atarkyo 'tarkyāvacaṣah			tathāgatavijñeyah	sāriputra	sa dharmah	tat kasya
6	hetor	ekakṛtyena	śāradvatīputraikakaraṇīyena	tathāgatau ⁴⁸³	rhām ⁴⁸⁴	samyaksambuddho	loke utpa-	
KN	hetoh	ekakṛtyena	sāriputraikakaraṇīyena	tathāgato	'rhan	samyaksambuddho	loka utpa-	
C3	heto	ekakṛtyena	sāriputra ekakaraṇīyena	tathāgato	'rha<ṃ>	saṃmyaksambuddhau	loka utpa-	
7	dyate	mahākṛtye<na> ⁴⁸⁵	mahākaraṇīyena	kata<ma>m ⁴⁸⁶	etac	chāradvatīputra	tathāgatasyaikakṛtyam	ekakaraṇī-
KN	dyate	mahākṛtyena	mahākaraṇīyena	katamac	ca	śāriputra	tathāgatasyaikakṛtyam	ekakaraṇī-
C3	padyata	mahākṛtyena	mahākaraṇīyena	katamac	ca	sāriputra	tathāgatasya ekakṛtyam	ekakaraṇī-
46b1	yaṃ	mahākṛtyam	mahākaraṇīyam	yenaikakṛtyena	tathāgato	rhām ⁴⁸⁷	samyaksambuddho	loke utpadyate ·
KN	yaṃ	mahākṛtyam	mahākaraṇīyam	yena kṛtyena	tathāgato	'rhan	samyaksambuddho	loka utpadyate
C3	yaṃ	<mahākṛtyam>	mahākaraṇīyam	yena kṛtyena	tathāgato	'rhan	saṃyaksambuddhau	loka utpadyate

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! I am the one who speaks the truth. Oh, Śāradvatīputra! I am the one who does not speak falsehoods. Oh, Śāradvatīputra! The allusive speech of the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas is difficult to perceive. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! I completely proclaimed the dharma for sentient beings through various hundred of thousands of skillful means which are different etymological interpretations, descriptions, and examples which can be put in words (=expressions). Oh, Śāradvatīputra! This dharma is a rooster crowing, which cannot be comprehended [by ordinary people]. Oh,

⁴⁷⁹ See note 25. Interestingly, only the Kashgar ms. has a plural form. On the other hand, other mss. have a singular form. Cf. Tsukamoto et al. (1988, p. 151).

⁴⁸⁰ *niruktir* is BHS Ins. sg. Toda (1981, p. 23): *nānānirukti [r]nānānirdeśanānā-abhilāp [y]anidarśanebhi*.

⁴⁸¹ With regard to *nānāabhilāpya*, see note 31.

⁴⁸² *me* is BHS Ins. of *aham*.

⁴⁸³ See note 36. I assume that the ending *au* of *tathāgatau* might be the ending *o* because it is very common for *au* and *o* to be used interchangeably in the Central Asian ms. Therefore, I read *tathāgatau* as *tathāgato*.

⁴⁸⁴ *rhām* is Nom. sg. See note 7 and 16. BHSG (p. 104, 18.76). Toda (1981, p. 23): *'rhām*.

⁴⁸⁵ I assume that the scribe dropped *na* because of an oversight, and mistakenly wrote *mahākṛtye*. Toda (1981, p. 23): *mahākṛtye(na)*.

⁴⁸⁶ I assume that the scribe dropped *ma*, so the correct writing was *katamac*. Cf. Toda (1981, p. 23): *kata(ma)m*.

⁴⁸⁷ See note 484. Toda (1981, p. 23): *'rhām*.

Śāradvatīputra! This dharma is to be understood by the Tathāgata. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! The Tathāgata-arhat-samyaksambuddha appears in the world for the sole purpose and the single aim, which are the great purpose and the great aim. Oh, Śāradvatīputra! What are the Tathāgata's sole purpose and sole aim, which are the great purpose and the great aim? For this single reason, the Tathāgata-arhat-samyaksambuddha appears in the world.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7a17-23

言不虛妄。舍利弗，諸佛隨宜說法意趣，難解。所以者何。我以無數方便種種因緣譬喻言辭，演說諸法，是法非思量分別之所能解，唯有諸佛乃能知之。所以者何。諸佛世尊，唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗，云何名諸佛世尊，唯以一大事因緣故出現於世。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69b26-69c1

誼甚微妙，言輒無虛。若干音聲現諸章句，各各殊別，人所不念。本所未思如來悉知。所以者何。正覺所興世嗟歎一事為大示現皆出一原。

[Tibetan translation] D J16b3-7; P Chu18b7-19a4; S ma25a3-b1; Z ma26a6-b4

nga ni bden par smra ba'o || nga ni yang dag par smra ba'o || nga ni gzhan ma yin par smra ba'o || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa'i ldem por dgongs te bshad pa'i don khong du chud par dka'o || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu ngas nges pa'i tshig dang bstan pa dang (S, Z |) brjod pa dang (S, Z |) dpe sna tshogs dang (S, Z |) thabs la mkhas pa rnam pa brgya stong dag gis chos rab tu bshad pa ni brtag tu med cing rtog ge'i spyod yul ma yin pa'i phyir te | shā ri'i bu chos de ni de bzhin gshegs pas mkhyen par bya ba'o || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu bya ba gcig dang byed pa gcig dang (S, Z |) bya ba chen po dang (S, Z |) byed pa chen po'i phyir || (P |, S, Z om. ||) bya ba gang dang byed pa gang gis (P om. bya ba gang dang byed pa gang gis) de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ba'i phyir ro || shā ri'i bu de bzhin gshegs pa'i bya ba gcig po dang (S, Z |) byed pa gcig po dang (S, Z |) bya ba chen po dang (S, Z |) byed pa chen po dang (S, Z |) bya ba gang dang (S, Z |) byed pa gang gis de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ba gang zhe na |

Fol. 46b2-7 (KN. 40. 3-8)

46b2		tathāgatajñānadarśanasamādapanahetunimittam ⁴⁸⁸	satvānām	tathāgato rhām ⁴⁸⁹	samyaksambuddho loke utpa-
KN	yad idaṃ	tathāgatajñānadarśanasamādāpanahetunimittam	sattvānām	tathāgato 'rhan	samyaksambuddho loka utpa-
C3	yad idaṃn	tathāgatajñānadarsanasam«ā»dāpanahetunimittam	satvānām	tathāgato 'rhan	saṃmyaksambuddho loka utpa-
3	dyate · (1)	tathāgatajñānadarśanapratibodhanahetunimittam ⁴⁹⁰	satvānām	tathāgato rhām ⁴⁹¹	samyaksambuddho
KN	dyate	tathāgatajñānadarśanasamdarśanahetunimittam	sattvānām	tathāgato 'rhan	samyaksambuddho
C3	dyate	tathāgatajñānadarsanasandarsanahetunimittam	satvānām	tathāgato 'rhan	saṃmyaksambuddho

⁴⁸⁸ *samādapana* (Pāli) equals *samādāpana*. Cf. BHSD (p. 567) and Kasamatsu (2016). About *jñāna*, see note 95.

⁴⁸⁹ See note 484. Toda (1981, p. 23): 'rhām

⁴⁹⁰ *pratibodhana* means awakening, explanation, and the like. C3, C4: *sandarsana*, N1: *saṃdarśana*, K and Pk do not have *saṃdarśana* or *pratibodhana*.

⁴⁹¹ See note 484. Toda (1981, p. 23): 'rhām

4	loke utpadyate (2)	tathāgatajñānadarśanāvātāraṇahetunimittam ⁴⁹²	satvānām	tathā-	
KN	loka utpadyate	tathāgatajñānadarśanāvātāraṇahetunimittam	sattvānām	tathā-	
C3	loka utpadyate	tathāgatajñānadarsanāvātāraṇahetunimittam	satvānām	tathā-	
5	gato rhām ⁴⁹³	samyaksaṃbuddho loka utpadyate 3	tathāgatajñānadarśanabuddhyāpanahetunimi-		
KN	gato 'rhan	samyaksaṃbuddho loka utpadyate	tathāgatajñānapratibodhanahetunimi-		
C3	gato 'rhan	saṃmyaksaṃbuddho loka utpadyate	tathā[ga]tajñānadarsanapratibodhanahetunimi-		
6	ttam ⁴⁹⁴	satvānām	tathāgato rhām ⁴⁹⁵	samyaksaṃbuddho loka utpadyate 4	tathāgatajñānadarśanamārgāva-
KN	ttam	sattvānām	tathāgato 'rhan	samyaksaṃbuddho loka utpadyate	tathāgatajñānadarśanamārgāva-
C3	ttam	satvānā<m>	tathāgato 'rha<m>	saṃmyaksaṃbuddho loka utpadyate	tathāgatajñānada[ršana]mārgāva-
7	tāraṇahetunimittam	satvānām	tathāgato rhām ⁴⁹⁶	samyaksaṃbuddho loka utpadyate 5	
KN	tāraṇahetunimittam	sattvānām	tathāgato 'rhan	samyaksaṃbuddho loka utpadyate	
C3	tāraṇahetunimittam	satvānām	tathātato 'rha<m>	saṃmyaksaṃbuddho loka utpadyate	

[Translation]

(1) The Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appears in the world in order for sentient beings to be led (encouraged) to Tathāgata's supreme knowledge. (2) The Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appears in the world in order for sentient beings to be awakened about Tathāgata's supreme knowledge. (3) The Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appears in the world in order for sentient beings to deeply understand Tathāgata's supreme knowledge. (4) The Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appears in the world in order to cause sentient beings to become enlightened about Tathāgata's supreme knowledge. (5) The Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appears in the world in order to cause sentient beings to follow the path of Tathāgata's supreme knowledge.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7a23-27

諸佛世尊，欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛之知見故出現於世。欲令衆生悟佛知見故出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c1-5

以用衆生望想果應勸助此類，出現于世。黎元望想希求佛慧，出現于世。蒸庶望想如來寶決，出現于世。以如來慧覺群生想，出現于世。示寤民庶八正由路使除望想，出現于世。

[Tibetan translation] D J16b7-17a3; P Chu19a4-19b1; S ma25b1-7; Z ma26b4-27a3

de ni sems can mams de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba yang dag par 'dzin du gzud pa'i rgyu'i phyir | de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ngo || sems can

⁴⁹² See note 95.

⁴⁹³ See note 484. Toda (1981, p. 23): 'rhām

⁴⁹⁴ *buddhyāpana* means causing one to become enlightened or awake. Cf. BHSD (p. 401).

⁴⁹⁵ See note 484. Toda (1981, p. 23): 'rhām

⁴⁹⁶ See note 484. Toda (1981, p. 23): 'rhām

rnams la de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba yang dag par bstan pa'i rgyu'i phyir | de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ngo || sems can rnams (S, Z la) de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba la zhugs pa'i rgyu'i phyir | (P ||) de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ngo || sems can rnams de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba (S, Z ba'i) khong du chud par bya ba'i rgyu'i phyir | (P ||) de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ngo || sems can rnams de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba'i lam du gzud pa'i rgyu'i phyir | de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'jig rten du 'byung ste |

Fol. 46b7- 47a7(KN. 40. 8-13)

46b7 idam ta-
KN idam ta-
C3 idam ta-

47a1	c chāradvatīputra	tathāgatasyaikakṛtyam	ekakaraṇīyaṃ ⁴⁹⁷	mahākaraṇīyam ekakṛtyam ⁴⁹⁸	ekapra-
KN	c chāriputra	tathāgatasyaikakṛtyam	ekakaraṇīyaṃ mahākṛtyam	mahākaraṇīyam	ekapra-
C3	c chāriputra	tathāgatasy <ekakṛtyam>	ekakaraṇīyaṃ mahākṛtyam	mahākaraṇīyam	ekam pra-

2	yojanaṃ tathāgata{ta}sya ⁴⁹⁹	loke prādurbhāvāya	iti hi śāradvatīputra	yat tat	tathāgata-
KN	yojanaṃ	loke prādurbhāvāya	iti hi śāriputra	yat	tathāgata-
C3	yojanaṃ	loke prādurbhāvāya	iti hi sāriputra	yat	tathāgata-

3	syaikakṛtyam ekakaraṇīyaṃ	mahākṛtyam mahākaraṇīyam	ekakṛtyam ⁵⁰⁰	ekapra{tya}yojanaṃ ⁵⁰¹
KN	syaikakṛtyam ekakaraṇīyaṃ	mahākṛtyam mahākaraṇīyaṃ		
C3	syaikakṛtyam eka<ka>raṇīyaṃ	mahākṛtyam mahākaraṇīyaṃ		

4	taṃ tathāgata ⁵⁰² ·	karoti ·	tat kasya hetoḥ	bodhisatvasamādāpaka ⁵⁰³ ·	evāhaṃ śāradvatīputra ⁵⁰⁴ bu-
KN	tat tathāgataḥ	karoti	tat kasya hetoḥ	tathāgatajñānadarsanasamādāpaka	evāhaṃ sāriputra
C3	tat tathāgataḥ	karoti	tat kasya hetoḥ	tathāgatajñānadarsanasamādāpaka	evāhaṃ sāriputra

⁴⁹⁷ Toda (1981, p. 24): *ekakaraṇīyaṃ (mahākṛtyam)*.

⁴⁹⁸ Toda (1981, p. 24): [*ekakṛtyam*].

⁴⁹⁹ I assume that the extra *ta* is a mistake of the scribe. Cf. Toda (1981, p. 24): *tathāgata{ta}sya*.

⁵⁰⁰ Toda (1981, p. 24): [*ekakṛtyam*].

⁵⁰¹ According to the folio 47a1-2 (*prayojanaṃ*), I read *prayojanaṃ* here. Toda (1981, p. 24): *ekapra{tya}yojanaṃ*.

⁵⁰² *tathāgata* is BHS Nom. sg.

⁵⁰³ Only the Kashgar ms. has *bodhisatvasamādāpaka evāhaṃ śāradvatīputra*, and this reading matches the Chinese translation, which is 但教化菩薩 in 『妙法華』 and 教諸菩薩 in 『正法華』 . Cf. Nakamura 中村 (1995, 245-246). *samādāpaka* equals *samādāpaka*.

⁵⁰⁴ Toda (1981, p. 24): *śāradvatīputra* (1). Cf. Toda (ibid.) puts (2) after the first *śāradvatīputra* of folio 47a6.

5	ddhajñānasamdarśakavatāraka ⁵⁰⁵	evāhaṃ śāradvatīputra (1) ⁵⁰⁶	buddhajñānadarśanāvātāraka	evāhaṃ
KN	tathāgatajñānadarśanasamdarśaka	evāhaṃ śāriputra	tathāgatajñānadarśanāvātāraka	evāhaṃ
C3	tathāgatajñānadarsanasandarsaka	evāhaṃ sāriputra	tathāgatajñānadarsanāvātāraka	evāhaṃ
6	śāradvatīputra (2)	buddhajñānadarśanapratibodhaka	evāhaṃ ⁵⁰⁷ śāradvatīputra (3) · buddhajñānadarśana {na} ⁵⁰⁸ buddhyāpaka	
KN	śāriputra	tathāgatajñānadarśanapratibodhaka		
C3	sāriputra	tathāgatajñānadarsana {m}pratibodhaka		
7	evāhaṃ śāradvatīputra (4)	buddhajñānadarśanamārgāvātāraka	evāhaṃ śāradvatīputra 5	
KN	evāhaṃ śāriputra	tathāgatajñānadarśanamārgāvātāraka	evāhaṃ śāriputra	
C3	evāhaṃ śāriputra	tathāgatajñānadarsanamārgāvātāraka	evāhaṃ śāriputra	

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! This is the Tathāgata's sole purpose and sole aim, which are the great aims. The sole purpose is the sole aim of the Tathāgata for the sake of appearing in the world. Oh, Śāradvatīputra! Indeed, the Tathāgata accomplishes his sole aim which is the sole purpose, which is the Tathāgata's sole purpose and the sole aim, which are the great purpose and the great aim. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who encourages Bodhisattvas. (1) Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who causes [Bodhisattvas] to penetrate and show the knowledge of the Buddha. (2) Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who causes [Bodhisattvas] to comprehend the supreme knowledge of the Buddha. (3) Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who causes [Bodhisattvas] to realize the supreme knowledge of the Buddha. (4) Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who causes [Bodhisattvas] to become enlightened about the supreme knowledge of the Buddha. (5) Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who causes [Bodhisattvas] to follow (penetrate) the path of the supreme knowledge of the Buddha⁵⁰⁹.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7a27-7b1

舍利弗，是為諸佛以一大事因緣故，出現於世。佛告舍利弗。諸佛如來，但教化菩薩。諸有所作常為一事。唯以佛之知見，示悟衆生。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c5-8

以故當知。正覺所興悉為一誼。以無極慧，而造大業。猶一空慧。以無蓋哀興出于世。如佛所行，所化利誼，亦復如是，而為說法。教諸菩薩現真諦慧。

⁵⁰⁵ About *saṃdarśakavatāraka*, see BHS (p. 33, 4.21, 4.22): loss of final vowels in *saṃdhi*. Toda (1981, p. 24): *buddhajñāna(darśana)saṃdarśaka [vatāraka]*.

⁵⁰⁶ I put (1) after *buddhajñānasamdarśaka vatāraka evāhaṃ śāradvatīputra*, and added (2) (3) and (4) in the same way.

⁵⁰⁷ Toda (1981, p. 24): *ecāhaṃ*.

⁵⁰⁸ I assume the extra *na* is a mistake of the scribe. Toda (1981, p. 24): *buddhajñānadarśana [na]*.

⁵⁰⁹ KN (1884, p. 40, 15-22): And it is achieved by the Tathāgata. For Sāriputra, I do show all creatures the sight of Tathāgata-knowledge; I do open the eyes of creatures for the sight of Tathāgata-knowledge, Sāriputra; I do firmly establish the teaching of Tathāgata-knowledge, Sāriputra; I do lead the teaching of Tathāgata-knowledge on the right path, Sāriputra.

[Tibetan translation] D J17a3-6; P Chu19b1-5; S ma25b7-26a4; Z ma27a3-7

shā ri'i bu de ni de bzhin gshegs pa'i bya ba gcig po dang (S, Z |) byed pa gcig po dang (S, Z |) bya ba chen po dang (S, Z |) byed pa chen po dang (S, Z |) 'jig rten du 'byung ba'i dgongs (S, Z dgos) pa gcig pa'o || shā ri'i bu de ltar de bzhin gshegs pas bya ba gcig po dang (S, Z |) byed pa gcig po dang (S, Z |) bya ba chen po dang (S, Z |) byed pa chen po (P pod) de de bzhin gshegs pas (S, Z pa) mdzad do || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu nga ni de bzhin gshegs pa'i (Z pas) ye shes mthong ba yang dag par 'dzin du 'jug pa'o || shā ri'i bu nga ni de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba yang dag par ston pa'o || shā ri'i bu nga ni de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba la 'jug par byed pa'o || shā ri'i bu nga ni de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba khong du chud par byed pa'o || shā ri'i bu nga ni de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba'i lam la (S, Z du) 'dzud pa'o ||

Fol. 47a7-48a3 (KN. 40. 13- 41. 4)

47a7 ekam evāhaṃ śāra-
KN ekam evāhaṃ śāri-
C3 ekam evāham sāri-

47b1	dvaṭīputra	yānam ārabhya satvānām	dharmam deśayāmi yad idam buddhayānam ·	nāsti	kiñcid ⁵¹⁰ anyac	chāradvatī-
KN	putra	yānam ārabhya sattvānām	dharmam deśayāmi yad idam buddhayānam	na	kiñcic	chāri-
C3	putra	yānam ārabhya satvānān	dharmam<m> deśayāmi yad idam buddhayānam	na	kiñcic	chāri-

2	putra dvitīyaṃ yāna ⁵¹¹	ṭṭīyaṃ vā	śāradvatīputra yānam	na	saṃvidyate : ⁵¹²	evam evaitac chāradvatī-
KN	putra dvitīyaṃ	vā	ṭṭīyaṃ vā yānam		saṃvidyate	
C3	putra dvitīyaṃ	<vā>	ṭṭīyaṃ vā yānam		saṃvidyate	

3	putra yānam yad idam buddhayānam tat kasya hetoḥ	sarvatraiṣāṃ ⁵¹³	śāradvatīputra	dharmānām	dharmatā daśa-
KN		sarvatraiṣā	śāriputra		dharmatā daśa-
C3		sarvatraiṣā	sāriputra		dharmmatā da{{ā}}sa-

4	su dikṣu loke sarvabuddhakṣetreṣu	tat kasya hetoḥ	ye ⁵¹⁴	te śāradvatīputratīte ⁵¹⁵	dhvany ⁵¹⁶	abhūva ⁵¹⁷
KN	digloke	tat kasya hetoḥ	ye 'pi	te śāriputratīte	'dhvany	abhūvan
C3	disi loke	tat kasya hetoḥ	ye 'pi	te sāriputratīte	'dhvany	abhūvat

5 daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā
KN daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā
C3 dasasu dikṣv aprameyāṣv asaṃkhyeyāsu lokadhātuṣu tathāgato arhantaḥ sammyaksambuddhā

⁵¹⁰ See note 7.

⁵¹¹ *yāna* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 24): *yāna(m)*.

⁵¹² : is a period.

⁵¹³ See note 26. Toda (1981, p. 24): *sarvatraiṣā[m]*.

⁵¹⁴ Toda (1981, p. 24): *ye ('pi)*.

⁵¹⁵ See note 505.

⁵¹⁶ See note 16. Toda (1981, p. 24): *'dhvany*.

⁵¹⁷ *abhūva* is Root Aorist 1, du. The subject is 3, pl (*tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā*), so the correct form should be *abhūvan*. Toda (1981, p.24): *abhūva(n)*.

6	bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukapāya ⁵¹⁸	mahato janakāyasyā-		
KN	bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai	mahato janakāyasyā-		
C3	bahujānahitāya bahujānasukhāya lokānukampāyai	mahato janakāyasyā-		
7	rthāya hitāya sukhāya	devānām ca manuṣyāṇām ca	yair	nānābhīrīrīhāranānānīrīdeśavi-
KN	rthāya hitāya sukhāya	devānām ca manuṣyāṇām ca	ye	nānābhīrīrīhāranīrīdeśavi-
C3	<r>thāya hitāya sukhāya	devānāñ ca manu {manu}ṣyāṇāñ ca	ye	nānābhīrīrīhāranīrīdesavi-
48a1	vidhahetukāraṇanidarśanārambaṇanānīrīrīktyupāyakaūsalyebhir ⁵¹⁹	nānādhīmuktikānām ⁵²⁰		
KN	vidhahetukāraṇanidarśanārambaṇanīrīrīktyupāyakaūsalyair	nānādhīmuktānām		
C3	vidhahetukāraṇanīdarsanārambaṇanīrīrīktyupāyakaūsalyai<r>	nānādhīmuktānām		
2	satvānām	nānādhātṽśāyānām ⁵²¹	anekadhātṽśāyānām satvānām dhātṽśāyām	viditvā yathādhā-
KN	sattvānām	nānādhātṽśāyānām	āśāyām	viditvā
C3	satvānām	nānādhātṽśāyānām	āśāyām	viditvā
3	tvāśāyānām satvānām	dharmam deśitavantas		
KN		dharmam deśitavantaḥ		
C3		dharman desitavantaḥ		

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! I convey the dharma about the only one-vehicle, which is this Buddha-vehicle, to sentient beings. Oh, Śāradvatīputra! There are not any others, neither the second nor the third vehicle. Oh, Śāradvatīputra! [The second or the third] vehicle does not exist. Oh, Śāradvatīputra! Like this, this is the vehicle which is the Buddha-vehicle. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! Those dharmas always contain that state of being dharma (*dharmatā*) in the ten directions of the world which are all Buddha's domains. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! In the past time, those Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas who were in the ten directions which are uncountable and innumerable regions existed for the sake of the benefit and the happiness of many living beings, for the sake of compassion for the people, and for the sake of the wealth, the benefit, and the happiness of many sets of people who were gods and humans. Having known the thought of sentient beings, that sentient beings had many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities, they (the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas in the past) described the dharma to sentient beings who have thoughts like these [many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities] by means of diverse manners of earnest wishes and descriptions, and skillful means which were different kinds of explanations which were various fundamental ideas, examples, reasons, and causes.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b2-6

舍利弗，如來但以一佛乘故為衆生說法。無有餘乘若二若三。舍利弗，一切十方諸佛法亦如是。舍利

⁵¹⁸ *lokānukapāya* is Pāli, Dat, sg. and a lack of *ṃ* is the same in note 26. Toda (1981, p.24): *lokānuka(ṃ)pāya*.

⁵¹⁹ *ārambana* is the same as in note 7. *upāyakaūsalyebhir* is BHS Ins. pl.

⁵²⁰ Pāli, *adhimuttika*. Cf. BHSD (p. 14).

⁵²¹ See note 7.

弗，過去諸佛，以無量無數方便種種因緣譬喻言辭，而為衆生演說諸法。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c8-12

以佛聖明而分別之，轉使增進，唯大覺乘。無有二乘況三乘乎。十方世界諸佛世尊，去來現在亦復如是。以權方便若干種教，各各異音開化一切，而為說法。

[Tibetan translation] D J17a6-b3; P Chu19b5-20a2; S ma26a4-b2; Z ma27a7-b6

shā ri'i bu nga yang theg pa gcig la (D, S, Z las) brtsams te (S, Z |) sems can rnams la chos ston pa 'di lta ste | (S, Z om. |) sangs rgyas kyi theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyi mthar thug pa ste | (S, Z om. |) theg pa gnyis sam gsum zhes bya ba gang yang med do || shā ri'i bu phyogs bcu'i 'jig rten thams cad na yang chos nyid ni 'di'o || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gang dag 'das pa'i dus na (S, Z |) phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams dpag tu med (S, Z cing) grangs med pa rnams su byung ste | sems can mos pa tha dad pa dang | khams dang bsam pa tha dad pa rnams kyi bsam pa mkhyen nas (P, S, Z |) skye bo mang po la phan pa dang | (P om. |) skye po mang po la bde ba dang | (P om. |) 'jig rten la snying brtse ba dang | (P om. |) skye bo phal po che dang (S, Z |) lha dang mi rnams kyi don dang (S, Z |) phan pa dang bde ba'i phyir sna tshogs mngon par bsgrub pa bstan pa dang (S, Z |) rgyu dang gzhi dang dpe dang (S, Z |) dmigs pa dang (P, S, Z |) nges pa'i tshig dang (S, Z |) thabs la (P om. la) mkhas pa rnam pa sna tshogs kyis (S, Z |) chos bstan pa'i sangs rgyas bcom ldan 'das de dag thams cad kyang | (S, Z om. |)

Fol. 48a3-7 (KN. 41. 4-7)

48a3	te pi ⁵²²	sarve śāradvatīputra	buddhā bhagavanta	ekam e-
KN	te 'pi	sarve śāriputra	buddhā bhagavanta	ekam e-
C3	te 'pi	sarve sāriputra	buddhā bhagavanta<h>	ekam e-

4	va yānam ārabhya :	satvānām	dharmam deśitavanto yad idaṃ buddhayānam	sarvajñajñānaparyavasā-
KN	va yānam ārabhya	sattvānām	dharmam deśitavanto yad idaṃ buddhayānam	sarvajñātāparyavasā-
C3	va yānam ārabhya	satvānām	dharmman desitavante yad idaṃ buddhayānam	sarvvajñātāpa<r>yantasā-

5	nam eva satvānām dharmam deśitavanto	yad idaṃ tathāgatajñānadarśanasamādāpanam ⁵²³	eva satvānām
KN	naṃ	yad idaṃ tathāgatajñānadarśanasamādāpanam	eva sattvānām
C3	naṃ	yad idaṃ tathāgatajñāna<da>rsanasamādāpanam	eva satvānām

6	dharmam deśitavantas	tathāgatajñānadarśanasamdarśanam	eva tathāgatajñānāvātāraṇapratibodhanam ⁵²⁴	e-
KN		tathāgatajñānadarśanasamdarśanam	eva tathāgatajñānadarśanāvātāraṇam eva tathāgatajñānadarśanapratibodhanam	e-
C3		tathāgatajñānadarsanam	eva tathāgatajñānadarsanāvātāraṇam eva <tathāgatajñānadarsanapratibodhanam	e-

⁵²² See note 16. Toda (1981, p. 24): 'pi.

⁵²³ See note 488.

⁵²⁴ Toda (1981, p. 34): *tathāgatajñā(nadarśa)nāvātāraṇapratibodhanam*.

7	va tathāgatajñānamārgāvatāraṇam ⁵²⁵	eva satvānām	dharmam deśitavanto
KN	va tathāgatajñānadarsanamārgāvatāraṇam	eva sattvānām	dharmam deśitavantaḥ
C3	va> tathāgatajñānadarsanamārgāvatāraṇam	eva satvānām	dharman desitavanto

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! All of these Buddhas and Bhagavats also described the dharma about the only one-vehicle to sentient beings. They (all Buddhas and Bhagavats in the past) described the dharma which was this Buddha-vehicle, which was truly the last knowledge of omniscience, to sentient beings. They explained this dharma, which truly led to the Tathāgata's perception, to sentient beings. They described the dharma, which truly showed the Tathāgata's supreme knowledge, truly caused [sentient beings] to realize and penetrate the Tathāgata's knowledge, and truly caused [sentient beings] to follow (penetrate) the path of the Tathāgata's knowledge, to sentient beings.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b6

是法皆爲一佛乘故。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c12

皆興大乘。佛正覺乘諸通慧乘。

[Tibetan translation] D J17b3-5; P Chu20a2-5; S ma26b2-6; Z ma27b6-28a2

shā ri'i bu theg pa gcig la (D las) brtsams nas (S, Z |) sems can rnams la chos bstan te (S, Z |) de yang 'di ltar sangs rgyas kyi theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyi mthar thug pa ste | gang 'di sems can rnams de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid yang dag par 'dzin du 'dzud (S, Z 'dzug) pa (S, Z nyid) | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid ston pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid la 'jug par byed pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid khong du chud par byed pa | sems can rnams de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid (Z thong du chud par byed pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid) kyi lam du 'jug par byed pa'i chos ston te |

Fol. 48a7-49a1 (KN. 41. 7-14)

48a7	yair api śāradvatīputra	satvās ⁵²⁶	teṣām
KN	yair api sārīputra	sattvais	teṣām
C3	yair api sārīputra	satvais	teṣām

⁵²⁵ Toda (1981, p. 34): *tathāgatajñāna(darśana)mārgāvatāraṇam*.

⁵²⁶ I assume that the scribe might have correlated *satvās* and *te sarve* when he read this sentence. Therefore, *satvās* is used instead of *sattvais*.

48b1	pūrvakānām	tathāgatānām ⁵²⁷	arhatām	samyaksaṃbuddhānām	antikāt	sa dharma ⁵²⁸	śrutaḥ te 'pi ⁵²⁹	sarve nutta-		
KN	atītānām	tathāgatānām	arhatām	samyaksaṃbuddhānām	antikāt	saddharmaḥ	śrutas te 'pi	sarve 'nutta-		
C3	atītānām	tathāgatānām	arhatām	saṃmyaksaṃbuddhānām	antikāt	sa dharmaḥ	srutaḥ te 'pi	sarve 'nutta-		
2	rāyām ⁵³⁰	samyaksaṃbodher	lābhino	babhūvu ⁵³¹	ye 'pi ⁵³²	te śāradvatīputra	bhaviṣyamty ⁵³³	anāgate	dhvani ⁵³⁴	daśasu
KN	rāyāḥ	samyaksaṃbodher	lābhino	'bhūvan	ye 'pi	te śāriputrānāgate	'dhvani	bhaviṣyanti		daśasu
C3	rāyāḥ	saṃmyaksaṃbodher	lābhino	'bhūvan	ye 'pi	te śāriputrā<nā>gate	'dhvani	bhaviṣyanti		dasasu
3	dikṣv	aprameyeṣv	asaṃkhyeyesu ⁵³⁵	lokadhātuṣu	tathāgatā	arhantaḥ	samyaksaṃbuddhā			bahujanahitā-
KN	dikṣv	aprameyeṣv	asaṃkhyeyesu	lokadhātuṣu	tathāgatā	arhantaḥ	samyaksaṃbuddhā			bahujanahitā-
C3	di {r}kṣv	aprameyāṣv	asaṃkhyeyāsu	lokadhātuṣu	tathāgatā	arhantaḥ	saṃmyaksaṃbuddhā	:		bahujanahitā-
4	ya	bahujanasukhāya	lokānukampāya ⁵³⁶	mahato	janakāyasyārthāya	hitāya				
KN	ya	bahujanasukhāya	lokānukampāyai	mahato	janakāyasyārthāya	hitāya				
C3	ya	bahujanasukhāya	lokānukampāyai	mahaṃto	janakāyasyārthāya	hitāya				
5	sukhāya	devānām ⁵³⁷	ca ⁵³⁸	manuṣyānām	ca ·	yair	nānābhīnīrharānānānīrdeśavi	vidhahetukāra-		
KN	sukhāya	devānām	ca	manuṣmānām	ca	ye ca	nānābhīnīrharānīrdeśavi	vidhahetukāra-		
C3	sukhāya	devānāñ	ca	manuṣyānāñ	ca	ye	nānābhīnīrharānīrdesavi<vi>	dhahetukāra-		
6	ṇanidarśanārambaṇa ⁵³⁹	nā<nā> ⁵⁴⁰	nirūkty ⁵⁴¹	upāyakośalyebhi ⁵⁴² .		nānādhimuktikānām ⁵⁴³	satvānām	nānā-		
KN	ṇanidarśanārambaṇaniruktyupāyakośalyair					nānādhimuktānām	sattvānām	nānā-		
C3	ṇanidarsanārambaṇaniruktyupāyakośalyaiḥ					nānādhimuktānām	satvānām	nānā-		

⁵²⁷ See note 25.

⁵²⁸ *dharma* is BHS Nom. sg. There is a possibility to read *sadharmā* which means the “true dharma.” However, I read it as *sa dharma* which means “the dharma” because the Chinese translation of 『妙法華』 reads 「法」, but not 「妙法」. Toda (1981, p. 24): *dharma(h)*. Cf. Folio 49a6 and 50a5 have *taṃ dharmam/dharma*.

⁵²⁹ See note 16. Toda (1981, p. 24): *'pi*.

⁵³⁰ *nuttarāyām* is BHS Gen. sg. See note 16. Toda (1981, p. 24): *'nuttarāyām*.

⁵³¹ *babhūvu* might be *babhūvuḥ*. See note 26. Toda (1981, p.24): *babhūvu(h)*.

⁵³² See note 16. Toda (1981, p. 24): *'pi*.

⁵³³ See note 7.

⁵³⁴ See note 16. Toda (1981, p. 24): *'dhvani*.

⁵³⁵ The letter form looks like *yeyāsu*, but according to the Frühe turkistanische Brāhmī and Nordturkistanische Brāhmī Typ a and b, it is possible to read this letter as *ye*. Cf. Sander (1968, Tafel 36).

⁵³⁶ See note 7 and 518.

⁵³⁷ See note 25. Toda (1981, p. 24): *devānā[ṃ]ñ*.

⁵³⁸ See note 367. Toda (1981, p. 24): *ca*.

⁵³⁹ See note 7.

⁵⁴⁰ I add *nā* because I assume this is an oversight of the scribe. Toda (1981, p. 24): *nā(nā)*.

⁵⁴¹ Because folio 48a1, 49b4 (*nānānirukty*), and folio 50b2 (*nānārukty*) indicate that *nirūkty* might be a scribal error.

⁵⁴² *upāyakośalyebhi* is BHS Ins. pl. See note 36.

⁵⁴³ See note 520.

7	dhātvāśayānām	anekadhātvāśayānām	satvānām dhātvāśayam	viditvā yathādātvāśayānām satvānām
KN	dhātvāśayānām		āśayam	viditvā
C3	dhātvāśayānām		āśayam	viditvā

49a1	dharmam	deśayiṣyati ⁵⁴⁴ .
KN	dharmam	deśayiṣyanti
C3	dharmam	deśayiṣyanti

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! By which sentient beings, the dharma has been heard in the presence of those past Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas. All of them also became those who attained supreme enlightenment. Oh, Śāradvatīputra! Moreover, in the future time, those Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, who are in the ten directions which are uncountable and innumerable regions, will exist for the sake of the benefit and the happiness of many living beings, for the sake of compassion for the people, and for the sake of the wealth, the benefit, and the happiness of many sets of people who are gods and humans. Having known the thought of sentient beings, that sentient beings had many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities, they (the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas in the future) will describe the dharma to sentient beings who have thoughts like these [many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities] by means of diverse manners of earnest wishes and descriptions, and skillful means which are different kinds of explanations which are various fundamental ideas, examples, reasons, and causes.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b6-9

是諸衆生從諸佛聞法，究竟皆，得一切種智。舍利弗，未來諸佛當出於世，亦以無量無數方便種種因緣譬喻言辭，而爲衆生，演說諸法。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9.

_____.

[Tibetan translation] D J17b5-18a1, P Chu20a5-b1; S ma26b6-27a4; Z ma28a2-b1

shā ri'i bu 'das pa'i de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas de dag las (S, Z la) sems can gang dag gis (S, Z |) chos de thos pa de dag thams cad kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par gyur to || shā ri'i bu ma 'ongs pa'i dus na (S, Z |) phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams dpag tu med grangs med pa rnams su de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gang dag 'byung ba | sems can mos pa tha dad pa dang (P, S, Z |) bsam pa (P bsam pa tha dad pa) dang (S, Z |) khams tha dad pa rnams kyi bsam pa mkhyen nas | skye bo mang po la phan pa dang (S |, Z om. skye bo mang po la phan pa dang) skye bo mang po la bde ba dang (S, Z |) 'jig rten la snying brtse ba dang (S, Z |) skye bo phal po che dang (S, Z |) lha dang mi rnams kyi don dang phan pa dang (S, Z |) bde ba'i phyir sna tshogs mngon par bsgrub pa bstan pa dang (S, Z |) rgyu dang gzhi dang dpe dang dmigs pa dang (S, Z |) nges pa'i tshig dang (S, Z |) thabs mkhas pa rnam pa sna tshogs kyis chos ston par 'gyur ba'i sangs rgyas bcom ldan 'das de dag thams cad kyang |

⁵⁴⁴ See note 26. Toda (1981, p. 25): *deśayiṣya(m)ti*.

49a1	te pi ⁵⁴⁵	sarve śāradvatīputra	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sa-
KN	te 'pi	sarve śāriputra	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sa-
C3	te 'pi	sarve sārīputra	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sa-
2	tvānām	dharmam deśaiṣyati ⁵⁴⁶ .	yad idaṃ buddhayānam sarvajñānāparyavasānam eva satvānām dharmam deśa-
KN	ttvānām	dharmam deśaiṣyanti	yad idaṃ buddhayānam sarvajñātāparyavasānam
C3	tvānām	dharmam deśaiṣyanti	yad idaṃ buddhayānam sarvajñātāpa<r>yavasānam
3	yiṣyaṃti ⁵⁴⁷	yad ida ⁵⁴⁸	<ta>thāgatajñānadarśanasamādāpanam ⁵⁴⁹ eva satvānām dharmam deśaiṣyaṃti ⁵⁵⁰ tathā-
KN		yad idaṃ	tathāgatajñānadarśanasamādāpanam eva sattvānām tathā-
C3		yad idaṃ	tathāgatajñānadarsanasamādāpanam eva satvānām tathā-
4	gatajñānadarśanasamdarśanam	eva tathāgatajñānāvātāraṇapratibodhanam ⁵⁵¹	eva tathāga -
KN	gatajñānadarśanasamdarśanam	eva tathāgatajñānadarśanāvātāraṇam eva tathāgatajñānadarśanapratibodhanam	eva tathāga-
C3	gatajñānadarsanasam	eva tathāgatajñānadarsanāvātāraṇam eva tathāgatajñānadarsanapratibodhanam	eva tathāga-
5	tajñān<amārg>āvatāraṇam ⁵⁵²	eva satvānām dharmam deśaiṣyaṃti ⁵⁵³ .	ye pi ⁵⁵⁴ te śāradvatīputra satvā-
KN	tajñānadarśanamārgāvatāraṇam	eva sattvānām dharmam deśaiṣyanti	ye 'pi te śāriputra sattvā-
C3	tajñānadarsanamārgāvatāraṇam	eva satvānām dharmam deśaiṣyanti	ye 'pi te śāriputra satvā-
6	s teṣām anāgatānām tathāgatānām ⁵⁵⁵	arhatām samyaksambuddhānām	antikāt taṃ dharmam śroṣyaṃ-
KN	s teṣām anāgatānām tathāgatānām	arhatām samyaksambuddhānām	antikāt taṃ dharmam śroṣyan-
C3	s teṣām anāgatānām tathāgatānām	arhatām sammyaksambuddhānām	antikāt taṃ dharmam śroṣyan-
7	ti ⁵⁵⁶ .	te pi ⁵⁵⁷ sarve nuttarāyāṃḥ ⁵⁵⁸	samyaksambodher lābhino bhaviṣyati ⁵⁵⁹
KN	ti	te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ	samyaksambodher lābhino bhaviṣyanti
C3	ti	te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ	sammyaksambodheḥ lābhino bhaviṣyanti

⁵⁴⁵ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'pi.

⁵⁴⁶ See note 26. Toda (1981, p. 25): deśaiṣya(m)ti.

⁵⁴⁷ See note 7.

⁵⁴⁸ See note 26. Toda (1981, p. 25): ida(m).

⁵⁴⁹ See note 488. I add *ta* on account of the context. Toda (1981, p. 25): *ta)thāgatajñānadarśanasamādāpanam*.

⁵⁵⁰ See note 7.

⁵⁵¹ Toda (1981, p. 25): *tathāgatajñā(nadarśa)nāvātāraṇapratibodhanam*.

⁵⁵² I add *amārg*. Cf. Folio 48a7. Toda (1981, p. 25): *tathāgatajñā(nadarśanamārgā) [nā]vatāraṇam*.

⁵⁵³ See note 7.

⁵⁵⁴ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'pi.

⁵⁵⁵ See note 25.

⁵⁵⁶ See note 7.

⁵⁵⁷ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'pi.

⁵⁵⁸ See note 16 and 26. Cf. Toda (1981, p. 25): 'nuttarāyā [m]ḥ.

⁵⁵⁹ See note 26. Toda (1981, p. 25): bhaviṣya(m)ti.

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! All of these Buddhas and Bhagavats will also explain the dharma about the only one-vehicle to sentient beings. They (all Buddhas and Bhagavats in the future) will describe the dharma which is this Buddha-vehicle, which is truly the last knowledge of omniscience, to sentient beings. They will explain this dharma, which truly leads to the Tathāgata's supreme knowledge, to sentient beings. They will explain the dharma, which truly shows the Tathāgata's supreme knowledge, truly causes [sentient beings] to realize and penetrate the Tathāgata's knowledge, and truly causes [sentient beings] to follow (penetrate) the path of the Tathāgata's knowledge, to sentient beings. Oh, Śāradvatīputra! They, sentient beings, who will listen to the dharma in the presence of those future Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, all of them also will become those who attain supreme enlightenment.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b9-11

是法皆爲一佛乘故。是諸衆生從佛聞法，究竟皆得一切種智。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9.

[Tibetan translation] D J18a1-4; P Chu20b1-5; S ma27a4-b1; Z ma28b1-5

shā ri'i bu theg pa gcig la (D, S, Z las) brtsams nas (S, Z |) sems can rnam la chos ston par 'gyur te | de yang 'di ltar sangs rgyas kyi theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyi mthar thug pa ste | gang 'di sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid yang dag par 'dzin du 'jug pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid ston pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid la 'jug par byed pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid khong du chud par byed pa | sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid kyi lam du 'jug par byed pa'i chos ston par 'gyur te || (S, Z |) shā ri'i bu ma 'ongs pa'i de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas de dag las (P ||) sems can gang dag chos (S, Z 'di) nyan pa de dag thams cad kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par 'gyur ro ||

Fol. 49a7- 49b7 (KN. 42. 1-42. 6)

49a7 ye pi⁵⁶⁰ te śāradvatīputrai-{-} ⁵⁶¹

KN ye 'pi te śāriputrai-

C3 ye 'pi te sārīputra

49b1	tarhi pratyutpanne dhvani ⁵⁶²	daśasu dikṣv asaṃkhyeyeṣu ⁵⁶³	lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksam-
KN	tarhi pratyutpanne 'dhvani	daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu	lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksam-
C3	etarhi pratyutpanne 'dhvani	dasasu dikṣv aprameyeṣv asa<ṃ>khyeyāsu	lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ sammyaksam-

⁵⁶⁰ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'pi.

⁵⁶¹ Here, · does not have any connotation because the copyist wrote · in order to fill up a space at the end of the 7th line.

⁵⁶² See note 16. Toda (1981, p. 25): 'dhvani.

⁵⁶³ Toda (1981, p. 25): a(prameyeṣv a)samkhyeyeṣu.

2	buddhās tiṣṭhamti ⁵⁶⁴	dhṛyamti ⁵⁶⁵	yāpayamti ⁵⁶⁶ .	bahujanahitāya bahujanasukhāya lokā-
KN	buddhās tiṣṭhanti	dhriyante	yāpayanti dharmam ca deśayanti	bahujanahitāya bahujanasukhāya lokā-
C3	buddhāḥ tiṣṭhanti	dhriyamte	yāpayanti dharmmañ ca deśayanti	bahujānahitāya bahujānasukhāya lokā-
3	nukampāya ⁵⁶⁷	mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya	devānām ca manuṣyāṇām ca	
KN	nukampāyai	mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya	devānām ca manuṣyāṇām ca	
C3	nukampāyai	mahato janakāyasyārthāya <hitāya sukhāya>	devānāñ ca manuṣyāṇām ca	
4	yair	nānābhinirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanāraṃbaṇanānāniruktyupā-		
KN	ye	nānābhinirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanāraṃbaṇaniruktyupā-		
C3	ye	nānābhinirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanāraṃbaṇaniruktyupā-		
5	yakauśalyebhi ⁵⁶⁸ .	nānādhimuktikānām ⁵⁶⁹	satvānām	nānādhātṽśayānām anekadhātṽśayā-
KN	yakauśalyair	nānādhimuktānām	sattvānām	nānādhātṽśayānām
C3	yakauśalyaiḥ	nānādhimuktānām	satvānām	nānādhātṽśayānām
6	nām satvānām dhātṽśayam	viditvā yathādhātṽśayānām satvānām	dharmam deśayamti ⁵⁷⁰ .	te pi ⁵⁷¹ sa-
KN	āśayam	viditvā	dharmam deśayanti	te 'pi sa-
C3	āśayam	viditvā	dharman deśayanti	te 'pi te
7	rve śāradvatīputra	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya satvānām	dharmam deśayamnti ⁵⁷² .	
KN	rve śāriputra	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sattvānām	dharmam deśayanti	
C3	sāriputrā	buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya satvānām	dharman deśayanti	

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Furthermore, at this time, in the present time, those Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas who are in the ten directions which are innumerable regions dwell, exist, and cause [sentient beings] to approach [the dharma] for the sake of the benefit and the happiness of many living beings, for the sake of compassion for the people, for the sake of the wealth, the benefit, and the happiness of many sets of people who are gods and humans. Having known the thought of sentient beings, that sentient beings have many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities, they (the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas in the present) describe the dharma to sentient beings who have thoughts like these [many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities] by means of diverse manners of earnest wishes and descriptions, and skillful means which are different kinds of explanations which are various fundamental ideas, examples, reasons, and causes. Oh, Śāradvatīputra! All

⁵⁶⁴ See note 7.

⁵⁶⁵ See note 7 and 168.

⁵⁶⁶ See note 7. Kern (1884, p. 42) translates *yāpayanti* as existing.

⁵⁶⁷ See note 7 and 518.

⁵⁶⁸ *upāyakauśalyebhi* is BHS Ins. pl. About *āraṃbaṇa*, see note 7. Toda (1981, p.25): *nānābhinirhāra(nānā)nirdeśavividhahetukāraṇanidarśanāraṃbaṇanānāniruktyupākauśalyebhi*.

⁵⁶⁹ See note 520.

⁵⁷⁰ See note 7.

⁵⁷¹ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'pi.

⁵⁷² See note 25. Toda (1981, p. 35): *deśaya [ṃ]nti*.

of these Buddhas and Bhagavats also explain the dharma about the only one-vehicle to sentient beings.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b11-14

舍利弗, 現在十方無量百千萬億佛土中諸佛世尊, 多所饒益安樂衆生. 是諸佛亦, 以無量無數方便種種因緣譬喻言辭, 而爲衆生演說諸法.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9.

_____.

[Tibetan translation] D J18a4-7; P Chu20b5-21a1; S ma27b1-6; Z ma28b5-29a3

shā ri'i bu da ltar byung ba'i dus na (S, Z |) phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams dpag tu med grangs med pa dag na de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gang dag bzhugs te (S, Z |) 'tsho zhing gzhes pa | sems can mos pa tha dad pa dang (S, Z |) khams dang (S, Z |) bsam pa tha dad pa rnams kyi bsam pa mkhyen nas | skye bo mang po la phan pa dang (S, Z |) skye bo mang po la bde ba dang (S, Z |) 'jig rten la snying brtse ba dang (S, Z |) skye bo (Z la) phal po che dang (S, Z |) lha dang mi rnams kyi don dang (S, Z |) phan pa dang (S, Z |) bde ba'i phyir (S, Z |) sna tshogs mngon par bsgrub pa bstan pa dang (S, Z |) rgyu dang gzhi dang dpe dang dmigs pa dang (S, Z |) nges pa'i tshig dang (D, S, Z |) thabs mkhas pa rnam pa sna tshogs kyis chos ston pa'i sangs rgyas bcom ldan 'das de dag thams cad kyang | shā ri'i bu theg pa gcig las brtsams nas (S, Z |) sems can rnams la chos ston te |

Fol. 49b7- 50a6 (KN. 42. 6- 11)

49b7 yad idaṃ buddhayānaṃ

KN yad idaṃ buddhayānaṃ

C3 yad idaṃ buddhayānaṃ

50a1 sarvajñājnānaparyavasānaṃ eva satvānāṃ dharmāṃ deśayaṃti⁵⁷³ · yad idaṃ tathāgatajñānadarśa-

KN sarvajñātāparyavasānaṃ

yad idaṃ tathāgatajñānadarśa-

C3 sarvajñātāpa<r>yavasāna<m>

yad idaṃ tathagatajñānadarsa-

2 nasamādapanam⁵⁷⁴ eva satvānāṃ dharmāṃ deśayaṃti⁵⁷⁵ tathāgatajñānadarśanasamdarśanam eva tathā-

KN nasamādāpanam eva sattvānāṃ

tathāgatajñānadarśanasamdarśanam eva tathā-

C3 nasamādāpanam eva satvānāṃ

tathāgatajñānadarsana<samdaršana>m eva : tathā-

3 gatajñānāvātāraṇapratibodhanam⁵⁷⁶ eva tathāgatajñānamārgāvātāraṇapratibodhanam e-

KN gatajñānadarśanāvātāraṇam eva tathāgatajñānadarśanapratibodhanam e-

C3 gatajñānadarśanāvātāraṇam eva tathāgatajñānadarsanapratibodhanam e-

⁵⁷³ See note 7.

⁵⁷⁴ See note 488.

⁵⁷⁵ See note 7.

⁵⁷⁶ Toda (1981, p. 25): *tathāgatajñā(nadarśa)nāvātāraṇapratibodhanam*.

4	va ⁵⁷⁷	tathāgatajñānamārgāvatāraṇam ⁵⁷⁸	eva satvānām	dharmam deśayati ⁵⁷⁹ ·	ye pi ⁵⁸⁰	te śāradvatīpu-
KN	va	tathāgatajñānadarśanamārgāvatāraṇam	eva sattvānām	dharmam deśayanti	ye 'pi	te śāripu-
C3	va	tathāgatajñānadarsanamārgāvatāraṇam	eva satvānān	dharman desayanti	ye 'pi	te sāripu-
5	tra satvās	teṣām pratyutpa<n>nānām ⁵⁸¹	tathāgatānām arhatām samyaksambuddhānām antikāt taṃ dharmā ⁵⁸²			śr-
KN	tra sattvās	teṣām pratyutpannānām	tathāgatānām arhatām samyaksambuddhānām antikāt taṃ dharmam			śr-
C3	tra satvāḥ	teṣām pratyutpannānām	tathāgatānām arhatām sammyaksambuddhānām antikāt taṃ dharmā<m>			śr-
6	ṇvamti ⁵⁸³	te pi ⁵⁸⁴	sarve nuttarāyāḥ ⁵⁸⁵	samyaksambodher ⁵⁸⁶	lābhino bhaviṣyati ⁵⁸⁷ ·	
KN	ṇvanti	te 'pi	sarve 'nuttarāyāḥ	samyaksambodher	lābhino bhaviṣyanti	
C3	ṇvanti	te 'pi	sarve 'nuttarāyāḥ	sammyaksambodhe<r>	lābhino bhaviṣyanti	

[Translation]

They (all Buddhas and Bhagavats in the present) explain the dharma which is this Buddha-vehicle, which is truly the last knowledge of omniscience, to sentient beings. They explain this dharma, which truly leads to the Tathāgata's supreme knowledge, to sentient beings. They explain the dharma, which truly shows the Tathāgata's supreme knowledge, truly causes [sentient beings] to realize and penetrate the Tathāgata's knowledge, truly causes [sentient beings] to realize and penetrate the path of the Tathāgata's knowledge, and truly causes [sentient beings] to follow (penetrate) the path of the Tathāgata's knowledge, to sentient beings. Oh, Śāradvatīputra! They, sentient beings, who listen to the dharma in the presence of those present Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas, all of them also will become those who attain supreme enlightenment.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b14-16

是法皆爲一佛乘故。是諸衆生，從佛聞法，究竟皆得一切種智。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9.

_____.

[Tibetan translation] D J18a7-18b3; P Chu21a1-5; S ma27b6-28a3; Z ma29a3-7

de yang 'di ltar sangs rgyas kyi theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyi (S, Z om. kyi) mthar thug pa ste | gang 'di sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid yang dag par 'dzin du 'jug pa | (S, Z om.) de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid ston pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid

⁵⁷⁷ Toda (1981, p. 25): *[tathāgatajñāna(darśana)mārgāvatāraṇapratibodhanam eva]*.

⁵⁷⁸ Toda (1981, p. 25): *tathāgatajñāna(darśana)mārgāvatāraṇam*.

⁵⁷⁹ See note 26. Toda (1981, p. 25): *deśaya(m)ti*.

⁵⁸⁰ See note 16. Toda (1981, p. 25): *'pi*.

⁵⁸¹ I assume that the lack of *n* of *pratyutpanna* is an oversight. Toda (1981, p. 25): *pratyutpa(n)nānām*.

⁵⁸² *dharmā* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 25): *dharmā(m)*.

⁵⁸³ See note 7.

⁵⁸⁴ See note 16. Toda (1981, p. 25): *'pi*.

⁵⁸⁵ See note 16. Toda (1981, p. 25): *'nuttarāyāḥ*.

⁵⁸⁶ Toda (1981, p. 25): *samyaksambodherr*.

⁵⁸⁷ See note 26. Toda (1981, p. 25): *bhaviṣya(m)ti*.

la 'jug par byed pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid khong du chud par byed pa | sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid kyi lam du 'jug (P ||) par byed pa'i chos ston te | shā ri'i bu da ltar gyi de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang (Z yang) dag par rdzogs pa'i sangs rgyas de dag las | (S, Z om. |) sems can gang dag chos nyan pa de dag thams cad kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par 'gyur ro ||

Fol. 50a6- 51a1 (KN. 42. 12-43. 1)

50a6 aham api śāradpatīputraitarhi
KN aham api śāriputraitarhi
C3 aham api sārīputra etarhi

7 pratyutpanne dhvani⁵⁸⁸ śākyamunis⁵⁸⁹ tathāgato rhām⁵⁹⁰ samyaksambuddho bahujanahitāya bahujanasukhāya lo-
KN tathāgato 'rhan samyaksambuddho bahujanahitāya bahujanasukhāya lo-
C3 tathāgato 'rha<ṃ> sammyaksambuddho bahujanahitāya bahujanasukhāya lo-

50b1 kānukampāya⁵⁹¹ mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyāṇām ca nā-
KN kānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyāṇām ca nā-
C3 kānukampā {kā}yai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāñ ca manuṣyāṇāñ ca nā-

2 nābhīnirhāratānānirdeśavividhahetukāraṇanidarśanārambaṇanānā<ni>⁵⁹²ruktyupāyakośalyebhiḥ⁵⁹³ nā-
KN nābhīnirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanārambaṇaniruktyupāyakauśalyair nā-
C3 nābhīnirhāranirdeśavividhahetukāraṇanidarśanārambaṇaniruktyupāyakausalīḥ nā-

3 nādhimuktikānām⁵⁹⁴ satvānām nānādhātvāśayānām⁵⁹⁵ anekadhātvāśayānām satvānām nānādhātvā-
KN nādhimuktānām sattvānām nānādhātvā-
C3 nādhimuktānām satvānām nānādhātvā-

4 śayaṃ⁵⁹⁶ viditvā yathādhātvāśayānām satvānām dharmam deśayīyāmi⁵⁹⁷ aham api śāradvatī-
KN śayānām āsayam viditvā dharmam deśayāmi | aham api śāri-
C3 sayānām āsayam viditvā dharmam deśayāmi | aham api śāri-

⁵⁸⁸ See note 16. Toda (1981, p. 25): 'dhvani.

⁵⁸⁹ Only the Kashgar ms. uses the word *śākyamuni*.

⁵⁹⁰ See note 484 and 16. Toda (1981, p. 25): 'rhām.

⁵⁹¹ See note 7 and 518.

⁵⁹² I add *ni* because the same appears in folio 48a1 and 49b1.

⁵⁹³ *upāyakośalyebhiḥ* is BHS Ins. pl. About the reading of *tānānirdeśa*, I assume that the copyist wrote *ta* and *na* incorrectly because these letters look similar. Therefore, the correct writing might be *nānānirdeśa*. With regard to *ārambaṇa*, see note 7. About *upāyakośalya*, see note 36. Toda (1981, p. 25): *nā nābhīnirhāratānānirdeśavividhahetukāraṇanidarśanārambaṇanānā(ni)ruktyupāyakośalyebhiḥ*.

⁵⁹⁴ See note 520.

⁵⁹⁵ See note 25.

⁵⁹⁶ Toda (1981, p. 25): [*nānā*]dhātvāśayam.

⁵⁹⁷ Toda (1981, p. 25): *deśa* [yīṣ]yāmi.

5	putraikam eva yānam ārabhya satvānām	dharmam deśayāmi yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñajñānaparyava-
KN	putraikam eva yānam ārabhya sattvānām	dharmam deśayāmi yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñatāparyava-
C3	putra ekam eva yānam ārabhya satvānām	dharman desayāyi yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñatāpratisaraṇam
6	sānam eva satvānām dharmam deśayāmi ·	yad idaṃ tathāgatajñānadarśanasamādāpanam ⁵⁹⁸ eva satvānām
KN	sānam	yad idaṃ tathāgatajñānadarśanasamādāpanam eva sattvānām
C3		yad idaṃ <tathagata>jñānadarsanasamādāpanam eva satvānām
7	dharmam deśayāmi ·	tathāgatajñānadarśanasamdarśanam eva tathāgatajñānāvātāraṇam ⁵⁹⁹
KN		tathāgatajñānadarśanasamdarśanam eva tathāgatajñānadarśanāvātāraṇam
C3		tathāgatajñāna<darsana>sam«da»rsanam eva tathāgatajñānadarsanāvātāraṇam
7	eva ⁶⁰⁰	satvānām
KN	eva tathāgatajñānadarśanapratibodhanam eva tathāgatajñānadarśanamārgāvātāraṇam eva sattvānām	
C3	eva tathāgatajñānadarsanapratibodhanam eva tathāgatajñānadarsanamārgāvātāraṇam eva satvānām	
51a1	darmaṃ deśayāmi ·	
KN	darmaṃ deśayāmi	
C3	darman desayanti	

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Furthermore, at this time, in the present time, I am *śākyamuni*, who is the Tathāgata-arhat-samyaksambuddha, having known the various thoughts of sentient beings, that sentient beings have many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities, I (*śākyamuni*) [will] describe the dharma to sentient beings who have thoughts like these (many intentions, different kinds of wills, and numerous propensities) by means of diverse manners of earnest wishes and descriptions, and skillful means which are different kinds of explanations which are various fundamental ideas, examples, reasons, and causes for the sake of the benefit and the happiness of many living beings, for the sake of compassion for the people, for the sake of the wealth, the benefit, and the happiness of many sets of people who are gods and humans. Oh, Śāradvatīputra! I also explain [now] the dharma about the only one-vehicle to sentient beings. I explain [now] the dharma which is this Buddha-vehicle, which is truly the last knowledge of omniscience, to sentient beings. I explain [now] this dharma, which truly leads to the Tathāgata's supreme knowledge, to sentient beings. I explain [now] the dharma, which truly shows the Tathāgata's supreme knowledge and truly causes [sentient beings] to penetrate the Tathāgata's knowledge, to sentient beings.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b16-21

舍利弗，是諸佛但教化菩薩。欲以佛之知見示衆生故，欲以佛之知見悟衆生故，欲令衆生入佛之知見故。舍利弗，我今亦復如是。知諸衆生有種種欲深心所著，隨其本性，以種種因緣譬喻言辭方便力，而爲說法。

⁵⁹⁸ See note 488.

⁵⁹⁹ Toda (1981, p. 25): *tathāgatajñā(nadarśa)nāvātāraṇa(pratibodhana)m*.

⁶⁰⁰ Toda (1981, p. 25): (*tathāgatajñānadarśanamārgāvātāraṇam eva*).

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c12-16

又舍利弗，斯衆生等悉更供養諸過去佛，亦曾聞法，隨其本行獲示現誼。吾見群生本行不同，佛觀其心所樂若干，善權方便造立報應，而講法誼。

[Tibetan translation] D J18b3- 7; P Chu21a5- b2; S ma28a3-b2; Z ma29a7-b6

shā ri'i bu da (D, P de) ltar de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas nga (P de) yang (S, Z |) sems can mos pa tha dad pa dang (S, Z |) khams dang (S, Z |) bsam pa tha dad pa rnam kyī bsam pa mkhyen nas | skye bo (P po) mang po la *phan pa* (S, Z *bde ba) dang (P, S, Z |) skye bo mang po la *bde ba* (S, Z *phan pa) dang (S, Z |) 'jig rten la snying brtse ba dang (S, Z |) skye bo phal po che dang (S, Z |) lha dang mi rnam kyī don dang (S, Z |) phan pa dang (S, Z |) bde ba'i phyir | sna tshogs mngon par bsgrub pa bstan pa dang (S, Z |) rgyu dang gzhi dang dpe dang dmigs pa dang (S, Z |) nges pa'i tshig dang (S, Z |) thabs mkhas pa rnam pa sna tshogs kyis chos ston to || shā ri'i bu nga yang theg pa gcig las (P la) brtsams nas (S, Z |) sems can rnam la chos ston te | 'di ltar sangs rgyas kyī theg pa thams cad mkhyen pa nyid kyī (D kyis) mthar (P thar) thug pa ste | gang 'di'i (S, Z 'di) sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid yang dag par 'dzin du 'jug pa dang (D, S, Z om. dang) | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid ston pa dang (D, S, Z om. dang) | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid la 'jug par byed pa | de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid khong du chud par byed pa | sems can rnam de bzhin gshegs pa'i ye shes mthong ba nyid kyī lam du 'jug par byed pa'i chos ston te (P son te) |

Fol. 51a1-7 (KN. 43. 1- 5)

51a1	ye pi ⁶⁰¹	te śāradvatīputra	satvā	etarhi mamemaṃ dharmam śṛṇvanti te pi ⁶⁰²	sarve nuttarā-
KN	ye 'pi	te śāriputra	sattvā	etarhi mamemaṃ dharmam śṛṇvanti te 'pi	sarve 'nuttarā-
C3	ye 'pi	te sāriputra	satvā	etarhi imam evaṃ rūpaṃ dharma<ṃ> śṛṇvanti te 'pi	sarve 'nuttarā-
2	yāṃ ⁶⁰³	samyaksaṃbodher ⁶⁰⁴	lābhino bhaviṣyaṃti ⁶⁰⁵	tad anenāpi te śāradvatīputra	paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ ·
KN	yāḥ	samyaksaṃbodher	lābhino bhaviṣyanti	tad anenāpi śāriputra	paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ
C3	yāḥ	saṃmyaksaṃbodheḥ	bhāsino bhaviṣyanti	tad anenāpi sāriputra	pa<r>yāyeṇaivaṃ veditavyaṃ
3	yathā nāsti dvitīyasya yānasya kvacid api	daśasu dikṣu loke prajñapti ⁶⁰⁶	kutaḥ punaḥ ⁶⁰⁷	ṭṭ-	
KN	yathā nāsti dvitīyasya yānasya kvacid	daśasu dikṣu loke prajñaptiḥ	kutaḥ punas	ṭṭ-	
C3	yathā nāsti dvitīyasya yānasya kvacid	dasadisi loke prajñaptiḥ	kutaḥ punaḥ	ṭṭ-	

⁶⁰¹ See note 16. Toda (1981, p. 26): 'pi.

⁶⁰² See note 16. Toda (1981, p. 26): 'pi.

⁶⁰³ See note 16. *nuttarāyāṃ* is BHS Gen. sg.

⁶⁰⁴ Toda (1981, p. 26): *samyaksaṃbodherr*.

⁶⁰⁵ See note 7.

⁶⁰⁶ *prajñapti* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 26): *prajñapti(h)*.

⁶⁰⁷ See note 26. Toda (1981, p. 26): *puna[h]s*.

4	tīyasyaiti ⁶⁰⁸ .	api tu khalu punaḥ ⁶⁰⁹	śāradvatīputra	yadā tathāgatā arhantaḥ samya-		
KN	tīyasya	api tu khalu punaḥ	śāriputra	yadā tathāgatā arhantaḥ samya-		
C3	tīyasya	api tu khalu punaḥ	sāriputra	yadā tathāgatā arhantaḥ sammya-		
5	ksambuddhāḥ paṃcasu ⁶¹⁰	kaṣāyeṣu lokeṣv	anuttarāyāṃ ⁶¹¹	samyaksambodhim abhisambhotsyati ⁶¹²	kalpakaṣā-	
KN	ksambuddhāḥ				kalpakaṣā-	
C3	ksambuddhāḥ				kalpakaṣā-	
6	yeṣu	satvakaṣāyeṣu	kleśakaṣāyeṣu	dr̥ṣṭikaṣāyeṣu	āyuskaṣāyeṣu	vā upapatsyaṃ-
KN	ye votpadyante	sattvakaṣāye vā	kleśakaṣāye vā	dr̥ṣṭikaṣāye	vāyuskaṣāye	votpadyan-
C3	yeṣu vā utpadyante	satvakaṣāyeṣu vā	lesakaṣāyeṣu vā	dr̥ṣṭikaṣāyeṣu	vā āyuskaṣāyeṣu	vā utpadyan-
7	tī ⁶¹³ .					
KN	te					
C3	te					

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Moreover, all of those sentient beings who listen to this (my) dharma at present should obtain supreme enlightenment. Oh, Śāradvatīputra! This very thing (what I say) is also to be known to you through this way. Namely, in the ten directions in the world, there is no teaching of the second-vehicle at all. Moreover, how is [the teaching of] the third-vehicle? Oh, Śāradvatīputra! However, when the world is five degenerations, the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas will attain supreme enlightenment. They will appear in the degeneration of the eon or degeneration of sentient beings or degeneration of defilements or degeneration of views or degeneration of life spans.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b21- 24

舍利弗, 如此皆, 爲得一佛乘一切種智故. 舍利弗, 十方世界中, 尚無二乘, 何況有三. 舍利弗, 諸佛出於五濁惡世. 所謂, 劫濁 · 煩惱濁 · 衆生濁 · 見濁 · 命濁.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c16- 20

皆, 爲平等正覺大乘至諸通慧道德一定. 無有二也. 十方世界等無差特, 安得三乘. 又舍利弗, 設如來說衆生瑕穢一劫不竟, 今吾興出於五濁世. 一曰塵勞, 二曰凶暴, 三曰邪見, 四曰壽命短, 五曰劫穢濁.

[Tibetan translation] D J18b7- 19a2; P Chu21b2- 5; S ma28b2-5; Z ma29b6-30a2

shā ri'i bu sems can gang dag da ltar nga la 'di ltar chos nyan pa de (P 'di) dag thams cad kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par 'gyur ro || shā ri'i bu rnam (Z rnam) grangs 'dis kyang 'di

⁶⁰⁸ See note 31.

⁶⁰⁹ The cross mark is written above the : (Visarga). However, I assume that a Visarga is necessary for *punaḥ* because a *puna* without Visarga does not make any sense. Toda (1981, p. 26): *puna(h)*.

⁶¹⁰ See note 7.

⁶¹¹ *anuttarāyāṃ* is BHS Gen. sg. Toda (1981, p. 26): *anuttarā [yā]ṃ*.

⁶¹² See note 26. Toda (1981, p. 26): *abhisambhotsya(m)ti*.

⁶¹³ See note 7 and 168.

ltar rig (P rag) par bya ste | 'di ltar phyogs bcu'i 'jig rten gang na yang theg pa gnyis su (P |) gdags pa yang med na (S, Z |) gsum du (S, Z om. du) lta ga la yod | (P ||) 'on kyang de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas mams (D, S, Z nam) bskal pa'i snyigs ma las (P la) byung ngam (S, Z |) sems can gyi snyigs ma'am | nyon mongs (P yongs) pa'i snyigs ma'am | lta ba'i snyigs ma'am | tshe'i snyigs ma las (P las) byung na (S, Z nas) |

Fol. 51a7- 51b6 (KN. 43. 5- 10)

51a7	yadā śāradvatīputra tathāgatā arhataḥ ⁶¹⁴	samyaksambuddhā :	evamrūpeṣu	kalpasamkṣobhakaṣā-		
KN			evamrūpeṣu śāriputra	kalpasamkṣobhakaṣā-		
C3			evamrūpeṣu sārīputra	kalpasamkṣobhakaṣā-		
51b1	yeṣūtpatsyaṃti ⁶¹⁵	bahumaleṣu satveṣu	lubdheṣv alpakuśalamūleṣu	līnacittasamntāneṣu ⁶¹⁶	tadā	
KN	yeṣu	bahusattveṣu	lubdheṣv alpakuśalamūleṣu		tadā	
C3	yeṣu	bahumaleṣu satveṣu	lubdheṣv alpakuśalamūleṣu		tadā	
2	śāradvatīputra	tathāgatā m ⁶¹⁷	arhantaḥ samyaksambuddhā upāyakośalyena ⁶¹⁸	tem ⁶¹⁹	evaikaṃ buddhayānaṃ	
KN	śāriputra	tathāgatā	arhantaḥ samyaksambuddhā upāyakośalyena	tad	evaikaṃ buddhayānaṃ	
C3	sārīputra	tathāgatā	arhantaḥ sammyaksambuddhā upāyakośalyena	tam	evaikaṃ buddha {ā}yānaṃ	
3	triyāna ⁶²⁰ nirdeśena	satvānāṃ	nirdiśaṃti ⁶²¹	tatra śāradvatīputra	ye ime śrāvakā vā	arhantā ⁶²²
KN	triyānanirdeśena		nirdiśanti	tatra śāriputra	ye śrāvakā	arhantaḥ
C3	triyāna {m} ni<r>desena		nirdisanti	tatra sārīputra	ye srāvakā	arhantaḥ
4	vā	pratyekabuddhā vā imā ⁶²³	kriyāṃ ⁶²⁴	tathāgatasya nirdiśato	buddhayānasamādapa-	
KN		pratyekabuddhā vemāṃ	kriyāṃ	tathāgatasya	buddhayānasamādapa-	
C3		pratyekabuddhā vā imāṃ	kriyāṃ	tathāgatasya	buddhayānasamādapa-	

⁶¹⁴ *arhataḥ* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 26): *arha(m)taḥ*.

⁶¹⁵ See note 7.

⁶¹⁶ See note 25. Toda (1981, p. 26): *līnacittasa [m]ntāneṣu*.

⁶¹⁷ See note 96. Toda (1981, p. 26): *tathagatā-m-arhantas*.

⁶¹⁸ See note 36.

⁶¹⁹ This is a scribal error.

⁶²⁰ See note 373.

⁶²¹ See note 7.

⁶²² *arhantā* is BHS Nom. pl.

⁶²³ *imā* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 26): *imā(m)*.

⁶²⁴ Toda (1981, p. 26): *kriyāṃ*.

5	nīm ⁶²⁵	na śṛṇvaṃti ⁶²⁶	nāvataṃti ⁶²⁷	<na> budhyaṃti ⁶²⁸	na te śāradvatīputra	tathāgatasya śrāvakā vedi-
KN	nām	na śṛṇvanti	nāvataranti	nāvabudhyanti	na te śāriputra	tathāgatasya śrāvakā vedi-
C3	naṃ	na śṛṇvaṃti	nāvataranti	nāvabudhyanti	na te śāriputra	tathāgatasya śrāvakā vedi-

6	tavyā	nāpi te	arhaṃto ⁶²⁹ veditavyā	nāpi te	pratyekabuddhā	veditavyāḥ
KN	tavyā	nāpy	arhanto	nāpi	pratyekabuddhā	veditavyāḥ
C3	tavyāḥ					

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! When the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas appear in periods like these which are degenerations of violent eons, in which sentient beings cling to mind-continuity, have less good nature, are greedy, and have much impurity of mind ⁶³⁰, oh, Śāradvatīputra, then, the Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas [will] explain the only one Buddha-vehicle through the skillful means, which is the explanation of the three-vehicle, to sentient beings. Oh, Śāradvatīputra! At that time, those disciples (*śrāvaks*) or Arhats or *Pratyekabuddhas* who are not enlightened, do not comprehend, and do not listen to this act of Tathāgata's instruction which leads to the Buddha-vehicle, oh, Śāradvatīputra, it is not to be acknowledged that they are disciples (*śrāvaks*) of the Tathāgata, nor are they Arhats, nor are they *pratyekabuddhas*.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b24- 29

如是舍利弗劫濁亂時，衆生垢重，慳貪嫉妬，成就諸不善根故，諸佛以方便力，於一佛乘分別說三。舍利弗，若我弟子，自謂阿羅漢辟支佛者，不聞不知諸佛如來但教化菩薩事，此非佛弟子，非阿羅漢，非辟支佛。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c21-24

爲此之黨本德淺薄慳貪多垢故，以善權現三乘教，勸化聲聞及緣覺者。若說佛乘終不聽受不入不解，無謂如來法有聲聞及緣覺道深遠諸難。

[Tibetan translation] D J19a2-5, P Chu21b5-8; S ma28b5-29a2; Z ma30a2-6

shā ri'i bu 'di lta bur bskal pa dang (S, Z |) 'khrul pa'i snyigs ma dang (S, Z |) dri ma mang po dang (S, Z |) brkam pa'i sems can dge ba'i rtsa ba chung ba de'i tshe | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams thabs mkhas pas sangs rgyas kyi theg pa geig po de las theg pa gsum du bshad de bstan to || shā ri'i bu de lta gang nyan thos sam (S, Z |) dgra bcom pa'am | (D om. |) rang sangs rgyas rnams de bzhin gshegs pa'i bya ba sangs rgyas kyi theg pa yang dag par 'dzin du 'jug pa la (P om. la)

⁶²⁵ See note 488. The scribe might think that *samādapanīm* is a feminine form.

⁶²⁶ See note 7.

⁶²⁷ See note 7.

⁶²⁸ See note 7. I put *na* before *budhyaṃti* because of the context. Cf. 『妙法華』 reads 不知, 『正法華』 reads 不解, Tibetan reads *khong du chud par mi byed pa*. Toda (1981, p. 26): (*na*) *budhyaṃti*.

⁶²⁹ See note 7.

⁶³⁰ Sanskrit *bahumala* means having much dross (Monier-Williams, p.725), so I translate dross as an impurity of mind.

mi nyan mi 'jug (S, Z ||) khong du chud par mi byed pa de dag ni | (S, Z om. |) sh'a ri'i bu de bzhin gshegs pa'i nyan thos ma yin par *rig par* (Z ra) bya'o || dgra bcom pa yang ma yin (S, Z |) rang sangs rgyas kyang ma yin par rig par bya'o ||

Fol. 51b6- 52b1(KN. 43. 11- 44. 2)

51b6	api tu khalu pu-							
KN	api tu khalu pu-							
C3	api tu khalu pu-							
7	naś śāradvatīputra	yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vā arhatvaṃ ⁶³¹	me prāptam iti				prajāñīyād anuttarā-	
KN	naḥ śāriputra	yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vārhattvaṃ					pratiñāñīyād anuttarā-	
C3	naḥ sārīputra	yaḥ kascid bhikṣur vā bhikṣuṇī vā <upāsako vā upāsikā vā> arhatvaṃ					pratiñāñīyād anuttarā-	
52a1	yai	samyaksambodhāyai ⁶³²	prañidhānam	na pratigrhṇīyā ⁶³³	nistūrṇāsmā ⁶³⁴	iti vācam tāṣeyā ⁶³⁵	(ni)śchandikā ⁶³⁶	
KN	yām	samyaksambodhau	prañidhānam	aparigrhyocchinno				
C3	yām	samyaksambodhau	prañidhānam	aparigrhya	unmatto			
2	smeti ⁶³⁷	buddhayāne na ⁶³⁸	brūyāt	etāvantam	me samucchrayam	paścimakam etad evam eva	parinirvāṇa-	
KN	'smi	buddhayānād iti	vaded	etāvan	me samucchrayasya	paścimakam	parinirvāṇa-	
C3	'smi	buddha { {ā} }yā<nā>d iti	vadet	etāvat	me samucchraya { {ā} }sya	paścimakam	parinirvāṇa-	
3	m iti	manyeya ⁶³⁹	adhimānika ⁶⁴⁰	tvaṃ	śāradvatīputra taṃ bhikṣur ⁶⁴¹	vā bhikṣuṇī ⁶⁴² vā	sañjāneyāsi ⁶⁴³	ta-
KN	m	vaded	ābhimānikam	taṃ	śāriputra		prajāñīyāḥ	ta-
C3	m	vaded	ābhimānikam	taṃ	sāriputra		jāñītha	ta-

⁶³¹ About *vā arhatvaṃ*, see note 31.

⁶³² Kern reads *anuttarāyām samyaksambodhau* as Loc. However, the Kashgar ms. reads *anuttarāyai samyaksambodhāyai* as Dat. Cf. Speijer (1973, p. 58, §79): Yet, if it be wanted to express the destination of a real going or moving, the accusative or locative are commonly preferred, although the dative may be used.

⁶³³ BHSD (p. 211): Pres. opt. *nigrhṇīyā* Mv i.348.18. Toda (1981, p. 26): *pratigrhṇīyā(n)*.

⁶³⁴ I read *nistūrṇāsmā* as *nistūrṇā sma iti* which means we are accomplished. Toda (1981, p.26): *nistūrṇā 'sma*.

⁶³⁵ The letter *ta* and *bha* look similar, so it must be *bhāṣeyā*, which means he or she will say. Cf. BHSG (p. 142-143, 29, 23): *eyā* is Optative 3 sg. Toda (1981, p. 26): *tāṣeyā(n)*.

⁶³⁶ I add *ni* due to the content.

⁶³⁷ I read *(ni)śchandikāsmeti* as *(ni)śchandikā sma iti*. Toda (1981, p.26): *(ni)śchandikā 'smeti*.

⁶³⁸ Toda (1981, p.26): *buddhayānena*. Cf. KN (p. 43, note 7): O. Probably to r. *niśchando 'smi buddhayāna* (Loc. c.) *iti*.

⁶³⁹ *manyeya* is BHS Optative 3 sg.

⁶⁴⁰ *adhimānika* is BHS Acc. sg. See note 359. Toda (1981, p. 26): *abhimānika(m)*.

⁶⁴¹ *bhikṣur* is BHS Acc. sg.

⁶⁴² *bhikṣuṇī* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 26): *bhikṣuṇī(m)*.

⁶⁴³ *jāneyāsi* is BHS Present 2 sg. Cf. BHSD (p. 213).

4	t kasya hetor	asthānam ⁶⁴⁴	etac chāradvatīputrānavakāśo	yo	bhikṣur arhā ⁶⁴⁵	kṣīṇāsraṇaḥ saṃmu-
KN	t kasya hetoḥ	asthānam	etac chāriputrānavakāśo	yad	bhikṣur arhan	kṣīṇāsraṇaḥ saṃmu-
C3	t kasya heto	asthānam	etac chāriputra anavakāśo	yad	bhikṣur arhan	kṣīṇāsraṇaḥ saṃmu-
5	khībhūtasya	tathāgatasyemaṃ	dharmanirdeśaṃ	śrutvā na śraddadhātavyaṃ ⁶⁴⁶	anyata ⁶⁴⁷ nedaṃ sthānaṃ vidyate ·	sthāpa-
KN	khībhūte	tathāgata imaṃ	dharmaṃ	śrutvā na śraddadhāt		sthāpa-
C3	khībhūte	ta<thāgate> imaṃ	dharmma<ṃ>	srutvā na sraddhadhyāt		sthāpa-
6	yitvā śāradvatīputra	parinirvṛtasya tathāgatasya	<tat kasya> ⁶⁴⁸ hetor	na hi te śāradvatīputra	śrāva-	
KN	yitvā	parinirvṛtasya tathāgatasya	tat kasya hetoḥ	na hi te śāriputra	śrāva-	
C3	yitvā	parinirvṛtasya tathāgatasya	tat kasya hetoḥ	na hi te śāriputra	srāva-	
7	kās tasmim ⁶⁴⁹	kāle tathāgataparinirvṛte	imeṣāṃ ⁶⁵⁰	evārūpāṇāṃ ⁶⁵¹	sūtrāṃtānāṃ ⁶⁵²	dhārakā vā
KN	kās tasmin	kāle tasmin samaye parinirvṛte tathāgata	eteṣāṃ	evaṃrūpāṇāṃ sūtrāntānāṃ		dhārakā vā
C3	kās tasmim	kāle stasmim samaye parinirvṛte tathāgate	imeṣāṃ	evaṃrūpāṇāṃ sūtrāntānān		dhārakā :
52b1	deśakā vā vācakā vā	bhaviṣyamty ⁶⁵³				
KN	deśakā vā	bhaviṣyanti				
C3	desakā vā	bhaviṣyanti				

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! Moreover, any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī* who will proclaim “I have achieved the state of being Arhat,” who will not take a vow for the sake of the supreme enlightenment, who will make the statement “we are accomplished (we are perfect),” who will not say concerning the Buddha-vehicle “we are free from desire,” who will think “this much is my last birth. Thus, this is the *parinirvāṇa*.” Oh, Śāradvatīputra! You know that *bhikṣu* or *bhikṣuṇī* is arrogant. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! Having listened to this dharma teaching of Tathāgata who stands face to face, it is impossible that *bhikṣu* who is Arhat and who is free from defilement is not to be believed [this dharma teaching of Tathāgata]. This state (*bhikṣu* or *bhikṣuṇī* is not to be believed that) is not known elsewhere, oh, Śāradvatīputra, aside from the case when the Tathāgata has entered *parinirvāṇa*. What is the reason for it? Oh, Śāradvatīputra! Indeed, at that time when the Tathāgata entered *parinirvāṇa*, these disciples (*śrāvaks*) will not become those who preserve or teach or recite these kinds of *Sūtra*.

⁶⁴⁴ BHSD (p. 85): *asthānam* often followed by the synonym *anavakāśo*.

⁶⁴⁵ See note 26 and 484. Toda (1981, p. 26): *arhā(ṃ)*.

⁶⁴⁶ See note 25.

⁶⁴⁷ *anyata* is BHS Nom. sg.

⁶⁴⁸ I add *tat kasya* because of the content. Toda (1981, p. 26): (*tat kasya*).

⁶⁴⁹ See note 7.

⁶⁵⁰ *imeṣāṃ* is BHS Gen. pl.

⁶⁵¹ See note 234.

⁶⁵² See note 25. Habata (p. Ixii, §43): Nach *r* sind Konsonanten manchmal verdoppelt. Diese Verdoppelung nach *r* wird von Pāṇini 8,4,46 gelehrt und kommt oft in Inschriften und Handschriften vor (vgl. AiGr I § 98). Toda (1981, p. 26): *sū [t] trā [ṃ] ntānāṃ*.

⁶⁵³ See note 7.

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7b29-7c7

又舍利弗，是諸比丘比丘尼，自謂已得阿羅漢，是最後身，究竟涅槃，便不復志求阿耨多羅三藐三菩提，當知此輩皆是增上慢人。所以者何。若有比丘實得阿羅漢，若不信此法，無有是處。除佛滅度後現前無佛。所以者何。佛滅度後，如是等經，受持讀誦解義者，是人難得。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 69c24-70a1

若比丘比丘尼，已得羅漢自己達足，而不肯受無上正真道教，定為誹謗於佛乘矣。雖有是意佛平等訓，然後至于般泥洹時，諸甚慢者乃知之耳。所以者何。又諸比丘為羅漢者，無所志求諸漏已盡，聞斯經典而不信樂，若滅度時，如來面現諸聲聞前大聖滅度不以斯行。令受持說方等頌經。

[Tibetan translation] D J18a5-18b1; P Chu21b8-22a4; S ma29a2-6; Z ma30a6-b3

shā ri'i bu yang dge slong ngam dge slong ma la la dgra bcom par khas 'che zhing | bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu smon lam yongs su mi 'dzin te | nga ni sangs rgyas kyi theg pa bcad pa'o (S, Z ||) zhes zer zhing nga'i lus 'di tha ma mya ngan las 'da' ba'o zhes zer ba ni | shā ri'i bu de lhag pa'i nga rgyal can du shes par bya'o || de ci'i phyir zhe na | *shā ri'i bu dge slong* (* S, Z de bzhin gshegs pa) dgra bcom pa zag pa zad pa de | de bzhin gshegs pa mngon sum du gyur te | (P om. |) chos 'di thos nas dad par mi 'gyur ba'i go skabs med cing gnas ma yin te | de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las 'das pa ni ma gtogs so || de ci'i phyir zhe na | shā ri'i bu de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las 'das pa de'i tshe | mdo sde (S, Z om. sde) 'di lta bu 'di 'dzin pa'am (P, S, Z |, S, Z pa dang) 'chang ba'i nyan thos mi 'byung ste |

Fol. 52b1-7 (KN. 44. 2- 45. 8)

52b1	anyeṣu punaḥ śāradvatīputra	tathāgateṣv arhaṃsu ⁶⁵⁴	sa-
KN	anyeṣu punaḥ śāriputra	tathāgateṣv arhatsu	sa-
C3	anye<ṣu> punaḥ sārīputra	tathāgateṣu <arhatsu>	sa-

2	myakṣambuddheṣu teṣv evarūpeṣu ⁶⁵⁵	dharmeṣu	nissamśayā bhaviṣyamti ⁶⁵⁶	yathā ekam ⁶⁵⁷	evaitad yā-
KN	myakṣambuddheṣu		niḥsamśayā bhaviṣyanti		
C3	mmyakṣambuddheṣu		ni<ḥ>samśayā bhaviṣyanti		

3	naṃ yad idaṃ tathāgatayānaṃ	śraddadhātu ⁶⁵⁸	me śāradvatīputra	pattīyathā ⁶⁵⁹	vakalpayathā ⁶⁶⁰
KN	imeṣu buddhadharmeṣu	śraddadhādhvaṃ	me śāriputra	pattīyatāvakaḥ	payata
C3	imeṣu dharmmeṣu	sraddadhatha	me sārīputra	pattīyathācakalpayatha	

⁶⁵⁴ *arhaṃsu* is BHS Loc. pl. Cf. BHS (p. 19, 2.67).

⁶⁵⁵ See note 234.

⁶⁵⁶ See note 7.

⁶⁵⁷ See note 31.

⁶⁵⁸ *śraddadhātu* is Imperative 3 sg. However, *śraddadhātu* can be used here because this statement is a request for śāradvatīputra. Cf. BHS (p.129, 25.7).

⁶⁵⁹ *pattīyathā* is BHS Imperative 2 pl.

⁶⁶⁰ *avakalpayathā* is BHS Imperative 2 pl.

4	dhimucyatā ⁶⁶¹ ·	na hi śāradvatīputra	tathāgatānā ⁶⁶²	mṛṣāvādaṃ	saṃvidyate ·	eka-
KN		na hi śāriputra	tathāgatānām	mṛṣāvādaḥ	saṃvidyate	eka-
C3		na hi sārīputra	tathāgatānām	mṛṣāvādaḥ	saṃvidyate	eka-
5	m evaitac	chāradvatīputra	yānaṃ yad idaṃ buddhayānaṃ ity	atha khalu bhagavān	idaṃ evārthaṃ bhū-	
KN	m evedaṃ	śāriputra	yānaṃ yad idaṃ buddhayānaṃ	atha khalu bhagavān	etaṃ evārthaṃ bhū-	
C3	m evedaṃ	sārīputra	yānaṃ yad idaṃ buddhayānaṃ	atha khalu bhagavān	idaṃ evā<r>thaṃ bhū-	
6	yaso ⁶⁶³	mātrayā saṃdarśayitukāmas	tasyā ⁶⁶⁴	velāyām imā gāthā abhāṣata	adhimānaprā-	
KN	yasyā	mātrayā saṃdarśayamānas	tasyām	velāyām imā gāthā abhāṣata	athābhīmānaprā-	
C3	yasyā	mātrayā sandarsayamānas	tasyām	velāyām imā gāthā abhāṣata	adhimānaprā-	
7	ptā ⁶⁶⁵ ye bhikṣubhikṣuṇīś ⁶⁶⁶ ca · upāyakā ⁶⁶⁷ ·	upāsikās ca aśraddhā ⁶⁶⁸	sahasrāḥ pañcāno<pa>makāḥ ⁶⁶⁹ (1) (38)			
KN	ptā ye bhikṣubhikṣuṇyupāsakāḥ	upāsikās ca aśraddhāḥ	sahasrāḥ pañcanūnakāḥ 38			
C3	ptā ye bhikṣu bhikṣuṇyo 'tha upāsakā	upāsikās ca asraddhāḥ	sahasrā pañca 'tunakāḥ (38)			

[Translation]

Oh, Śāradvatīputra! However, they will not be doubtful about these kinds of dharma under other Tathāgata-arhat-samyaksambuddhas. Oh, Śāradvatīputra! Just so, please believe, trust, put faith in, and earnestly devote [yourself] to this (my) Tathāgata-vehicle, which is just the only one-vehicle. Oh, Śāradvatīputra! No lying of Tathāgata is known (Tathāgata is not known to lie). Oh, Śāradvatīputra! That is the only one-vehicle which is this Buddha-vehicle.” Then on that occasion, Bhagavat recited these stanzas wishing to convey this very purpose with a higher degree [of understanding].

(38) Monks, nuns, *upāsakas*, and *upāsikās* who are arrogant and unfaithful are not less than five thousand. (*Vipulā*; Ma⁶⁷⁰)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7c7-13

若遇餘佛，於此法中便得決了。舍利弗，汝等當一心信解受持佛語。諸佛如來言無虛妄。無有餘乘唯一佛乘。爾時世尊，欲重宣此義，而說偈言。比丘比丘尼，有懷增上慢。優婆塞我慢，優婆夷不信。如是

⁶⁶¹ *adhimucyatā* might be *adhimucyatām* (Imperative, 3 sg.), and it can be used here for the same reason explained in note 658.

⁶⁶² *tathāgatānā* is BHS Gen. pl. Toda (1981, p.26): *tathāgatānā(m)*.

⁶⁶³ *bhūyaso* is Abl., and Abl. and Ins. are interchangeable. See note 66. Cf. Speijer (1886, p. 75, §102).

⁶⁶⁴ See note 26. Toda (1981, p.26): *tasyā(m)*.

⁶⁶⁵ See note 359.

⁶⁶⁶ *bhikṣuṇīś* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 26): *bhikṣu bhikṣuṇīś*.

⁶⁶⁷ *upāyaka* might be a mistake of *upāsakā*.

⁶⁶⁸ *aśraddhā* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 26): *aśraddhā(h)*.

⁶⁶⁹ *anomakāḥ* might be *anopamakāḥ*, which means muchless. Cf. BHSD (p. 37). Toda (1981, p. 26): *pañca 'nomakāḥ*.

⁶⁷⁰ *adhimānaprāptā ye bhikṣubhikṣuṇīś ca · upāyakā · upāsikās ca aśraddhā sahasrāḥ pañcāno<pa>makāḥ*: vv(-)-v- ---v vv-v v-v- v-v- vv(-)--v ---- v-v- (*bhi* is -, *no* is v, and *pa* is -)

四衆等, 其數有五千.

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 70a2-6

尋於異佛, 至眞等正覺決其狐疑. 然後於彼乃當篤信. 如來言誠正有一乘, 無有二也. 世尊頌曰. 比丘比丘尼, 心懷甚慢恣. 諸清信士女, 五千人不信.

[Tibetan translation] D J18b1-3; P Chu22a4-7; S ma29a6-b3; Z ma30b3-6

shā ri'i bu de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gzhan dag la (D, S, Z las) chos 'di la the tshom (S tsom Z tshoms) med par 'gyur ro || shā ri'i bu nga la dad par gyis shig (S, Z ||) yid ches par gyis shig (S, Z ||) rtogs par gyis shig (P, S, Z ||) shā ri'i bu de bzhin gshegs pa rnams la brdzun (P. rdzun) du smra ba med de | shā ri'i bu theg pa 'di ni (P. om. ni) gcig tu zad de (S, Z |) 'di lta ste (S, Z |) sangs rgyas kyi theg pa'o || de nas bcom ldan 'das don de nyid rgyas par ston cing (S, Z |) de'i tshes tshigs su bcad pa 'di dag bka' stsal to || nga rgyal can gyi dge slong dang || dge slong ma dang dge bsnyen dang || dge bsnyen ma rnams ma dad pa || lnga stong las ni mi nyung ba ||

Fol. 52b7- 53a3 (KN. 45. 8- 14)

52b7	svāni		doṣā-
KN	sampaśyanta ⁶⁷¹	imam	doṣa-
C3	sampasyantā	imam	doṣa-

53a1	ny apaśyantās ⁶⁷²	chidraśīlā ⁶⁷³	samantataḥ	vraṇās ⁶⁷⁴	ca bahu rakṣantāḥ ⁶⁷⁵	prakrāntā ⁶⁷⁶	bālubuddhayaḥ ⁶⁷⁷	2 (=39)	ete
KN	m	chidraśīkṣāsamanvitāḥ		vraṇāms	ca parirakṣantaḥ	prakrāntā	bālabuddhayaḥ 39		
C3	m	cchidrasikṣāsamanvitāḥ		prāṇāms	ca parirakṣantaḥ	prakrāntā	bālabuddhayaḥ (39)		

⁶⁷¹ WT (p. 41, 1): *apaśyanta*.

⁶⁷² *apaśyantās* is BHS Nom, pl.

⁶⁷³ *chidraśīlā* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 27): *chidraśīlā(h)*.

⁶⁷⁴ *vraṇās* is BHS Acc. pl. Toda (1981, p. 27): *vrraṇā(m)ś*.

⁶⁷⁵ *rakṣantāḥ* is BHS Nom, pl.

⁶⁷⁶ Toda (1981, p. 27): *prakrrāntā*.

⁶⁷⁷ BHSG (p. 26, 3.57): a is sometimes changed to u after (and perhaps before) labial consonants.

2	kaśāṭra ⁶⁷⁸ pariśāyāṃ	ddhvaṃsaṃti ⁶⁷⁹ jinabhāṣitaṃm ⁶⁸⁰	tat teṣāṃ kuśalaṃ nāsti	yena dharmāṃ śruṇed ⁶⁸¹ imam (3) (40) śuddhāś ⁶⁸² ca ni-
KN	parśatkaṣaṭu tāṃ jñātvā	lokanātho 'smi dhvaṃsi tān	tat teṣāṃ kuśalaṃ nāsti	śṛṇuyur dharmā ye imam 40 śuddhā ca ni-
C3	pari{ {vā} }vāraḥkaṣaṭāṃ jñātvā	lokanātho 'sma dhvaṃsayi	nan teṣāṃ kuśalaṃ nāsti	śṛṇuyur dharmā yen' imam (40) suddhā ca ni-
3	ṣpalāpās ⁶⁸³	ca parśāṃ ⁶⁸⁴ saṃgho mi ⁶⁸⁵ susthitam	phalgu ⁶⁸⁶ vyapagatāḥ	sarvāḥ ⁶⁸⁷ śuddhā ⁶⁸⁸ sāre pratiṣṭhitā · 4 (41)
KN	ṣpalāvā	ca susthitā pariśan mama	phalgu vyapagatā	sarvā sārā ceyam pratiṣṭhitā 41
C3	ṣpalāvā	ca saṃsthitā pariśā ma<ma>	phalguvyapagatā	sarvā sādha ceyam pratiṣṭhitā (41)

[Translation]

(39) Those who have completely faulty precepts (conduct) are not seeing their own defects. And those who have childish perceptions are greatly protecting [their] flaws, and they are moving away. (*Pathyā*)

(40) Those who are impure of the assembly are ruined. It has been taught by *Jina* that they have no virtue, with which one might hear this dharma. (*Pathyā*⁶⁸⁹)

(41) They (remaining disciples) are pure and free from the chaff. My assembly *Samgha* is well established. All worthless people departed. Those who are pure remained in the center [of the assembly]. (*Pathyā*)

[Chinese translation] T. no. 262, vol. 9, 7c14-18

不自見其過。於戒有缺漏，護惜其瑕疵。是小智已出。衆中之糟糠，佛威德故去。斯人尠福德，不堪受是法。此衆無枝葉，唯有諸貞實。

[Chinese translation] T. no. 263, vol. 9, 70a7-12

不自見瑕穢。奉誠有缺漏，多獲傾危事，而起愚駭意，反行求雜糅。悉無巧方便。諸佛最勝禪。緣此得聞法，供養清淨慧，衆會儼然住。一切受恩教，逮志立見要。

⁶⁷⁸ *kaśāṭra* might be *kaṣaṭu* because Kashgar letter *u* and *ra* look similar. *kaśāṭra* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 27): *kaśāṭra*.

⁶⁷⁹ See note 7. *ddhvaṃsaṃti* might be *dhvaṃsaṃti*, and *{d}dhvaṃsaṃti* means decay, perish, and being ruined. Moreover, there is a possibility that *ddhvaṃsaṃti* is *uddhvaṃsaṃti*, which means to insult, but *ud* is an extra syllable. Cf. Kern (1884, p. 44) translates the Sanskrit word *dhvaṃsi* as exclaimed. On the other hand, WT (p. 41) emends it to *'dhivāsayi*. The folio 45a7 (the prose part) which relates to this sentence reads *dhivāsīt*, which means Bhagavat accepted. Toda (1981, p. 27): *{d}dhvaṃsaṃti*.

⁶⁸⁰ See note 25.

⁶⁸¹ The scribe might have thought that *śruṇed* is the verb form as an Optative, 3, sg. like $\sqrt{bhū}$.

⁶⁸² *śuddhāś* is BHS Nom. sg. Toda (1981, p. 27): *śuddhā[ś]*.

⁶⁸³ *niṣpalāpās* is BHS Nom. sg. See note 454. Toda (1981, p. 27): *niṣpalāpā[ś]*.

⁶⁸⁴ *parśā* equals *pariśā* (Skt. *parśad*). *parśāṃ* is BHS Nom. sg. Cf. BHSD (p. 337). Toda (1981, p. 27): *parśā[m]*.

⁶⁸⁵ *mi* is BHS Gen. sg.

⁶⁸⁶ *phalgu* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 27): *phalgu[r]hyapagatā* ∴.

⁶⁸⁷ *sarvāḥ* is BHS Nom. pl. Toda (1981, p. 27): *sarvā* ∴.

⁶⁸⁸ *śuddhā* is BHS Nom. pl.

⁶⁸⁹ (40ab): *ete kaśāṭra pariśāyāṃ ddhvaṃsaṃti jinabhāṣitaṃm*: --v- vvv(-)-- --vv v-v-.

[Tibetan translation] D J18b3-5; P Chu22a7-22b1; S ma29b3-5; Z ma30b6-31a2

bslab pa zhig ral (P dral) ldan pa rnams || nyes pa 'di (P de) dag mthong gyur nas || skyon rnams yongs su
sbed pa'i phyir || byis pa'i blo can de dag dong (P don) || gang gis chos 'di nyan par 'gyur ba yi || de dag la
ni dge ba de med (P byed) de || 'khor gyi snyigs (S, Z snying) ma nyid du mkhyen nas su || 'jig rten mgon
po ngas kyang bstsal (S, Z bsal) ba (P pa) yin (S, Z yi) || nga yi 'khor ni legs par 'khod || shun pa med cing
dag pa ste || snying po ma yin kun med gyur (P 'gyur) || 'di dag snying po (S, Z por) rab tu gnas ||

Appendix B: Some grammatical features of the Kashgar ms.

The Kashgar ms. has numerous BHS words and grammatical patterns compared to KN. In other words, the Kashgar ms. might have more specific grammar rules¹. The different forms of verbs and nouns found between the Kashgar ms. and KN are listed below.

1. a form of verb

Folio	The Kashgar ms.	KN	Translation (of the Kashgar ms.)	
36a2	vyatthāsīd	vyutthito	rose	I presume that <i>vyatthāsīd</i> is s-aorist 3 sg. Cf. BHS (p. 236): <i>samavāsthāsīt</i> is categorized as aorist. Toda (1981, p. 1): <i>vyatthāsīd</i> is s-Aorist, 3 rd sg.
36a2	dhyutthāya	vyutthāyā	having risen	Only the Kashgar ms. has <i>dhyutthāya</i> . <i>dhyu</i> and <i>vyu</i> are not similar letters. However, the pronunciation is somewhat similar. Here, I read <i>vyuttāya</i> instead of <i>dhyutthāya</i> . Cf. D ja12b5; P chu14b1; S ma19a6; Z ma20a7: <i>bzhengs nas</i> . 『妙法華』 T. no. 262, 9, 5b25: 爾時世尊, 從三昧安詳而起. 『正法華』 T. no. 263, 9, 68a1: 於是, 世尊從三昧覺. Toda (1981, 19): <i>dhyutthāya</i> .
36a3	āmantrayāmāsa	āmantrayate sma	addressed	Kashga ms. is periphrastic perfect. Only B ms. reads <i>āmantrayate sma</i> , and Kern might choose this usage in spite of the fact that other mss. use <i>āmantrayāmāsa</i> .

¹ Brough (1954, p.364) notes, “Indeed, it was largely due them that scholars first started seriously to investigate Buddhist Sanskrit as such. It was on the basis of fragments of a Central Asian version of the *Saddharma-puṇḍarīka*, differing in numerous details from the known Nepalese recension, that Lüders suggested that many of the Sanskrit Buddhist texts started off their career in a much more Prakritic form, and that they had subsequently been gradually Sanskritized by generations of scribes, in differing ways in different scribal traditions.

36a5	pratividdham	pratibuddham	penetrated	<i>pratividdha</i> is the Bhūte Kṛdanta (past passive participle) of <i>prati√vidh</i> , <i>prati√vyadh</i> . Cf. Only B and N2 use <i>prativibuddham</i> . However, <i>pratibuddham</i> is not used in any of the mss. D ja12b5; P chu14b2; S ma19a7; Z ma20b1: <i>thugs su chud pa</i> 『妙法華』 T. no. 262, 9, 5b26: 其智慧門. 『正法華』 T. no. 263, 68a2: 如來至真等正覺所入之慧. Karashima (1998, p. 360): 入 means enters, penetrates (intellectually), comprehends.
36a6 36a7-36b1 36b3-4 43a2	paryupāsītāvino caritāvino jñānāvino darśāvina	paryupāsītāvino caritāvino jñātāvinaḥ darśāvīni	worshipped practiced the austerity understood met	- <i>āvin</i> is an active past participle of Pāli.
36b6 37a1-2 40a1 42a1 42a4 43a3/44a3 43a3/44a3 43a3/44a3-4 43a4/44a4 43a4/44a4 43b2-3 43b5 43b7-44a1 44a7 44b1,2	saṃprakāśayānti parimocayānti āmaṃtrayāmi (verse) prekṣānti (verse) pramuṃca (verse) abhiśraddadhāsyānti adhimokṣyānti avakalpayiṣyānti pattīyīṣyānti udgrhīṣyānti prapatsyānti kṣipānti (verse) saṃvidyānti saṃti (verse) śraddadhīṣyānti (verse)	saṃprakāśayanti pramocayitum āmaṃtrayāmi prekṣante pramuñca śraddhāsyanti _____ _____ pratīyīṣyanti udgrahīṣyanti prapatiṣyanti kṣipe saṃvidyante santi śraddadhāsyanti	proclaim release tell gaze release will believe will apply zealously will put faith will believe will comprehend will fall throw away exist there are believe	BHSG (p. 19, 2.64): There is much confusion in writing between the anusvara sign, which I transliterate <i>m</i> , and both <i>m</i> and <i>n</i> , especially final, but also in medial position before consonants.

45a4 48b2/51a2/ 52b1, 2 49a2-3, 3, 5 49a6-7 49b2 49b2 49b2 49b6/ 50a1, 2 50a5- 6/51b5 51a6- 7/51b1 51b3 51b5 51b5 53a2	vamditvā bhaviṣyamty(i) deśayiṣyamti śroṣyamti tiṣṭhamti dhṛyamti yāpayamti deśayamti śṛṇvamti upapatsyamti/utpatsy amti nirdiśamti avataramti budhyamti ddhvamsamti (verse)	vanditvā bhaviṣyanty _____ śroṣyanti tiṣṭhanti dhriyante yāpayanti deśayanti/ _____ śṛṇvanti utpadyante / _____ nirdiśanti avataranti budhyanti dhvamsi	having praised will be will explain will listen to dwell exist approach describe listen to will appear explain comprehend are enlightened are ruined	
37a2 42a3	pāramiprāptāḥ pāramīprāpto (verse)	pāramitāprāptāḥ pāramīprāpto	supremacy I am the best one	BHSD (p. 341): (in Pali used both as in BHS, <i>pāramippatta</i> , <i>pāramiṅ-gata</i> , Childers, and, usually in the form <i>pāramī</i> , as equivalent of BHS <i>pāramitā</i> 2; BHS seems to use it only once in this latter sense; seems clearly deriv. in secondary -a, fem. ī from <i>parama</i>), mastery, supremacy; usually in vss; in LV 414.19 (vs) read <i>ṣaḍi pārami te</i> , the six supremacies (= paramita 2) are thine (see § 19.24).
37b4, 5 41b5	jānīte vyāharase (verse)	jānāti vyāharasi	know speak	The Kashgar ms. uses <i>Ātmanepada</i> .

38a2	saṃdaśayitukāma	saṃdarśayamānas	wishing to convey	BHSG (p. 21, 2. 87): Forms of <i>darś-</i> , Mindie <i>dass-</i> (or <i>dams</i>), appearing as <i>daś-</i> with single <i>ś</i> . Toda (1981, p. 20): <i>saṃda(r)śayitukāma</i> . N1 reads <i>samdasayānas</i> .
38a4/39a2 38b6	jñātum (verse) śakyaṃ (verse)	jñātu śakya	to know able to	Due to the meter (<i>v</i>), <i>ṃ</i> should be omitted. Cf. Edgerton (1946, p. 200): Or, when a short syllable is required, a final nasal consonant may be dropped (with shortening of the vowel if it was long); or a final nasal vowel denasalized. K. R. Norman (1995, §43. pp. li- <i>lii</i>): The shortening of nasalized vowels. In a number of words a nasalized vowel is to be scanned as short. This is shown in O by the omission of the anusvara, although this is, of course, on guide to the actual pronunciation of a short nasalized vowel.
38b2	vijānayet (verse)	jāniyāt	will understand	<i>jāniyāt</i> is the correct form of Optative 3 sg. However, <i>vijānayet</i> might be Optative 3 sg. I assume that the copyist knew the way to add <i>na</i> to the ninth type verb ($\sqrt{jñā}$). In addition, the copyist also knew how to construct the Optative form based on his knowledge according to the rule of the fourth type verb, so he added <i>ya</i> (<i>jānaya</i>). Finally, the copyist constructed the Optative form by changing <i>jānaya</i> to <i>vijānayet</i> .
38b4 42a3 43b2 45a4	(na teṣa yo) sti (verse) (nirdiṣṭo) smi (verse) (bhikṣavo) smiṃn (pariṣado) pakrā	na teṣa viṣayo 'sti nirdiṣṭaḥ bhikṣavo _____ (parṣado) 'pakrāmanti	don't have this range I indicated being leave	BHSG (p. 32): Loss of initial vowels in <i>saṃdhi</i> .
38b6	anucintayinsu (verse)	vicintayeyuḥ	[if] they were to consider	<i>anucintayinsu</i> might be the i-Aorist (type 4) of Pāli, which is the same as iṣ-Aorist of Sanskrit. I assume that this sentence is an if-clause, but in this sentence, aorist form might also be suitable grammatically. Cf. BHSG (p. 160, 32. 85): optative forms used as aorists. Toda (1981, p. xlix): 3 rd pl. iṣ-Aorist.

38b7 40a1 40a7	bhavet (verse) bhāṣati (verse) abhavat	bhaveyur bhāṣati abhavat	Optative, 3 pl. Present, 3 pl. Imperfect, 3 pl.	BHSG (p. 129, 25. 4): There is widespread confusion in BHS about person and number, usually in that 3 sg. forms are used for any person and either number. This usage perhaps started with the optative and aorist, where- largely by phonetic loss of endings- confusion set in in Middle Indic.
39a1 39a7 39b1	bhavi (verse) bhavi (verse) bhavi (verse)	bhavi _____ bhavi	if (these ten directions) were (filled with)	The subject in this sentence is pl. form, so <i>bhavi</i> (3 sg. optative) might be not appropriate for the verb form. However, because of the meter (v), the form <i>bhavi</i> is necessary here instead of <i>bhave</i> (3 pl. optative). Cf. all other mss. have <i>bhavi</i> . Tsukamoto et al (1988, p. 44). BHSG (p. 141, 29,7): it may be shortened to <i>i</i> in verse, almost invariably where meter requires a short syllable. Ibid. (p. 26, 3.59): in other cases <i>e</i> seems more or less clearly to occur as metrical lengthening for <i>i</i> .
39a1 43a2 45a5	anucintayeyu · (verse) darśāvina · prāptasamjñina ·	vicintayeyuḥ darśāvīni prāptasamjñino	were to consider met they had the belief that they had attained	The mark · has two meanings; one is as a period. The other is Visarga (:) which lacks one dot. Additionally, Visarga (:) is never present before the · mark. Cf. Habata (2007, p. lxxv, § 52): Der Visarga wird durch zwei Punkte geschrieben. Dieses Zeichen wird auch als Satzzeichen gebraucht, was in der Transkription durch Doppelpunkt dargestellt wird. Es gibt ein anderes Satzzeichen, das in den Handschriften durch einen hochgestellten Punkt geschrieben und in der Transkription durch Semikolon dargestellt wird.
39a2	jñātu (verse)	jñātuṃ	to understand	<i>jñātuṃ</i> is more appropriate than <i>jñātu</i> due to the infinitive form. Moreover, concerning the meter, <i>jñātuṃ</i> is acceptable due to <i>Indravamśā</i> , v-v --v v-v --. Cf. Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography), ibid. p.20: <i>jñātu(m)</i> .
39a5	cintayī (verse)	_____	[they] considered	Toda (1981, p. xlvi): iṣ-Aorist. Cf. BHSG (p. 160, 32. 85, p. 176, 35. 50).

39a5	parijāni (verse)	parijāni	understood	Toda (1981, p. xlviii): iṣ-Aorist.
39b1	sprṣṭāḥ (verse)	drṣṭāḥ	possessed	Only the Kashgar ms. uses <i>sprṣṭāḥ</i> .
39b7 41b6 42a1 42b5 43b5 43b6 43b7-44a1 45a1 45a7 45b6 49b2 51a6-7	prabhāṣati (verse) prabhāṣasi (verse) prekṣamti (verse) adhyeṣati sma kṣipamty (verse) adhyeṣati sma saṃvidyamti bhāṣiṣyāmi āmantrayati sma saṃdrīsyaty dhryamti upapatsyamti	prabhāṣate prabhāṣase prekṣante adhyeṣate sma kṣipe adhyeṣate sma saṃvidyante bhāṣiṣye āmantrayate sma saṃdrīsyate dhriyante utpadyante	explain explain gaze asked throw away requested exist I am going to speak said see exit will appear	The Kashgar ms. uses <i>Parasmaipada</i> .
40b2 42a2 42b4 43a6 43b1 48b2 49a1,2 49a7/50a6 50a4 51a5 52b4	saṃvarṇayamti vicinteti (verse) āpatsyamti jñāsyati (verse) utrasiṣyati babhūvu deśaiṣyati bhaviṣyati deśayati abhisambhotsyati adhimucyatā	saṃvarṇayati vicintētā utrasiṣyati jñāsyanti utrasiṣyati 'bhūvan deśaiṣyanti bhaviṣyanti deśayanti _____ _____	Present, 3 sg. Present, 3 pl. Future, 3 sg. Future, 3 pl. Future, 3 pl. Perfect, 3 pl. Future, 3 pl. Future, 3 pl. Present, 3 pl. Future, 3 pl. Imperative, 3 sg	Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): Anusvāra is often omitted but many wrong Anusvāra are found. The same is the case with Visarga. Habata (2007, p. lxxv, § 50): Der Anusvāra fehlt häufig im Auslaut vor anlautenden Konsonanten wie im Mittelindischen. Edgerton (1953b, p. 20, 2.71): Furthermore, as in Pali and Pkt., a final nasal may be lost.

40b2	durvejñeyam	durvijñeyas	difficult to conceive	It is possible to read this as <i>durvijñeyam</i> according to the Nordturkistanische Brāhmī, Type a (Schrifttypus V). Cf. Sander (1968, Tafel 32).
40b6	nāmahe	jānīmaḥ	understand	I read <i>jānāmahe</i> because of the content. In general, <i>jānīmahe</i> (<i>ātmanepada</i> , 1, pl) is the correct verb form. I assume that the copyist thought that <i>jānāmahe</i> was the correct form for <i>ātmanepada</i> , 1, pl. of √jñā because he only knew to add <i>na</i> in constructing the 9 th type's verb form. Cf. BHS (p. 213): <i>jānātha</i> . Toda (1981, p. 21): (<i>na jā</i>) <i>nāmahe</i> . K: <i>ta dānīmaḥ</i> , Pk and N1: <i>nā jānīmahe</i> , and C3: <i>ājānīmaḥ</i> .
41a3 43a5/ 44a6	(bhagavān...) saṃvarṇayasi bhāṣāhi (narendrarājā/ dvīpadottamā) (verse)	(bhagavān...) saṃvarṇayati bhāṣasva (jināna uttamā/ dvīpadānam uttamā)	Bhagavat...praises explain	I think that the subject of this sentence is Bhagavat (3 sg.), so the suitable form of the verb is <i>saṃvarṇayati</i> . However, the Kashgar ms. uses the <i>saṃvarṇayasi</i> . There might be two possibilities here; one is a mistake by the scribe, and the other is that the use of a 2 nd person verb form is a substitute for the 3 rd person. Cf. BHS (p. 130, 25.29): A special case is the use of 2-person verbs with the nom. of the stem <i>bhavant</i> , regularly used with 3-person verbs but as a substitute for the 2-person of direct address: <i>mā bhavanto viṣṭadatha</i> Mv i. 108.1.
41b5	apṛcchato (verse)	apṛcchito	nobody is asking	Tsukamoto et al (1988, p. 86): Pk and B read <i>apṛcchati</i> . It is possible to read <i>apṛcchato</i> as Abl., so, the translation might be “You speak because nobody is asking.”
41b7 44b3	prārthenti (verse) prārthenti (verse)	prārthenti prasthita	those who wish for wish for	Kern (1884, p. 36) translates it “those who aspire to the enlightenment of Pratyekabuddhas,” so it is possible to think that <i>prārthenti</i> is present 3, pl. On the contrary, it is possible to think of <i>prārthenti</i> as a present participle, neuter, Nom. pl., and the translation is “those who are wishing for the awakening of <i>pratyekabuddha</i> .” Cf. BHS (p. 103, 18.18): Nom. pl. masc. -ntā, <i>dhārenti</i> .

42b7	santi : khalu	santi khalu	then, there are	Despite the fact that there is a <i>dvi daṇḍa</i> , which indicates the end of the sentence, after <i>santi</i> , <i>santi khalu</i> works as “then there are.” The scribe might have thought that this was the end of the sentence because of the present of the verb <i>santi</i> . However, <i>dvi daṇḍa</i> is a mistake because the verb, <i>santi</i> , was placed at the beginning of the sentence in order to emphasize this verb in the sentence.
43a3/ 44a4	abhiśraddadhāsyamti	śraddhāsyanti	will believe	BHSG (p.216).
43b1	utrasiṣyati	uttrasiṣyati	frightened	<i>uttrasta</i> (Skt.); <i>uttasta</i> , <i>utrasta</i> (Pāli); <i>utrasta</i> (Gāndhārī).
44b1,2	śraddadhīsyamti (verse)	śraddadhāsyanti	believe	Toda (1981, p. xlviii): -iṣya- with thematic presents minus thematic vowel. Cf. BHSG (p. 148, 31.1).
44b1 49b7 52a5	bhāṣitam (verse) deśayamti śraddadhātavyamm	bhāṣitam deśayanti śraddadhyāt	it is taught explain should believe	Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): The manuscript has a special use of nasals, e. g. double nasals nn, ṃn, ṣn, ṣṃ, ṣṃṃ, ṣṃṣ, ṣṃṣṃ, ṣṃṣṃṣ, for a single nasal. Burrow (1937, p. 18): An anusvara is usually inserted before n, m after short vowels. Habata (2007, p. lxv): Auch nach langem Vokal.
45a6	prakrāntā	'pakrāntāḥ	left	I assume that while the copyist was writing this sentence, he might mistakenly have written <i>prakrāntā</i> , which means go forward, because <i>prakrāntā</i> and <i>pakrāntā</i> look very similar. Toda (1981, p. 23): <i>'p[r] akrrāntā</i> .
45b3	bhāṣyāmy (etam)	bhāṣiṣya (etam)	I am going to teach	The scribe might have thought that <i>bhāṣyāmy</i> is the future form because he thought that adding <i>sya</i> indicated the future form. Toda (1981, p. 23): <i>bhāṣ[ya]jāmy</i> .
45b4	pratyaśroṣīd	pratyaśrauṣīt	gave an ear	BHSG (p. 235): Aor, <i>aśroṣīt</i> .

47b4	abhūva	abhūvan	there were	<i>abhūva</i> is Root Aorist 1, du. The subject is 3, pl (<i>tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā</i>), so the correct form should be <i>abhūvan</i> . Toda (1981, p.24): <i>abhūva(n)</i> .
52a1	pratigrhṇīyā	aparigrhya	will take	BHSD (p. 211): Pres. opt. <i>nigrhṇīyā</i> Mv i.348.18.
52b3 52b3-4	śraddadhātu adhimucyātā	śraddadhādhvaṃ _____	Imperative, 3 sg. Imperative, 3 sg	<i>śraddadhātu</i> and <i>adhimucyātā</i> can be used because the statement is a request for śāradvatīputra. Cf. BHSG (p.129, 25.7).
53a2	ddhvaṃsaṃti (verse)	dhvaṃsi	are ruined	<i>ddhvaṃsaṃti</i> might be <i>dhvaṃsaṃti</i> , and { <i>d</i> } <i>dhvaṃsaṃti</i> means decay, perish, and being ruined. Moreover, there is a possibility that <i>ddhvaṃsaṃti</i> is <i>uddhvaṃsaṃti</i> , which means insult, but <i>ud</i> is an extra syllable. Cf. Kern (1884, p. 44) translates the Sanskrit word <i>dhvaṃsi</i> as exclaimed. On the other hand, WT (p. 41) emends it to <i>'dhivāsī</i> . The folio 45a7 (the prose part) which relates to this sentence reads <i>dhivāsīt</i> , which means Bhagavat accepted. Toda (1981, p. 27): [<i>d</i>] <i>dhvaṃsaṃti</i> .
53a2	śruṇed (verse)	śṛṇuyur	Optative, 3, sg.	The scribe might have thought that <i>śruṇed</i> is the verb form as 3, sg. like √ <i>bhū</i> .

2. a form of noun

36a2/42b2/ 43a7/44b5 36a3/38a5/ 39b5/40b2 /41a3/41a7 /41b6/42b 6	āyusmaṃtaṃ gaṃbhīraṃ/ gaṃbhīrās/ gaṃbhīrasya	āyusmantam gaṃbhīraṃ/ gaṃbhīrā/ gaṃbhīrasya	venerable profound	BHSG (p. 19, 2.64): There is much confusion in writing between the anusvara sign, which I transliterate <i>m</i> , and both <i>m</i> and <i>n</i> , especially final, but also in medial position before consonants.
--	---	--	---------------------------	--

36b7/48a1/ 48b6/49b4 /50b2	āraṃbaṇa	āraṃbaṇa	fundamental ideas	
37a3/37b1 37a5 37b3 37b4	asaṃga bodhyaṃga arhaṃtaḥ dharmam	asaṅga bodhyaṅga arhantaḥ dharmam	without attachment constituents of bodhi Arhat dharman (BHS, Accusative, pl.)	
39a3 39b2/39b4 /42a6	aṃtima gaṃgā/ gaṃga	antima gaṅgā/ gaṅga	last stage gaṅgā (river)	
41a7/41b1, 4/42b6	sandhā	saṃdhā	allusiveness speech	
42a4 42a4	kin giridum̐dubhisvara	kiṃ varadundubhisvarā	Is...? one who has a speech like a large kettledrum	
42b1 42b5 42b5 42b6/43a7/ 43b6/45a7	kṛtāṃjali āyuṣmāṃ bhagavaṃtam bhagavāṃ	kṛtāṅjalī āyuṣmāñ bhagavantam bhagavān	have hands in prayer venerable Bhavagat Bhavagat	
43b2 43b2	(loko) smiṃn (arthe) (bhikṣavo) smiṃn (arthe)	(loko) 'sminn (arthe) _____	in the world is being	
43b4 44b2 44b3 45a3/51a5 45b3 45b6	atarkikañ (ca) aṃjalī tāṃ paṃca bhagavāṃn (ity) udum̐baraṃ	atarkikaṃ (ca) _____ tān pañca/ _____ bhagavann (ity) udumbara	beyond comprehension palms in prayer them five Bhagavat Udumbara	

46a6/ 46b1,2,3,5, 6,7/50a7 47b1 48a2 48b4/49b2 -3/50b1 48b5 51b6 52a7	(tathāgatau) rhām kiñcid (anyac) nānādhātvāśayānām (aneka) anukampāya devānāmñi arhamto tasmim	(tathāgato) 'rhan kiñcic (chāriputra) nānādhātvāśayānām (āśayam) anukampāyai devānām arhanto tasmin	Arhat any other different kinds of wills for the sake of compassion of gods Arhats that	
36a3	śāradvatīputram	śāriputram	Śāriputra	<i>śāradvatīputra</i> is the same as <i>śāriputra</i> . Cf. Seishi Karashima and Jan Nattier (2005, pp.361-376) investigated why <i>śāradvatīputra</i> appears in the Kashgar ms., and they concluded that <i>śāradvatīputra</i> was coined in Northwest Indian and subsequently spread to Central Asia.
36a4-5	tathāgatenārhatā samyaksambuddhena	tathāgatair arhadbhiḥ samyaksambuddhaiḥ	by Tathāgata-arhat- samyaksambuddha	KN has a pl. form, and the Kashgar ms. has a sg. form. Except for the Kashgar ms., all mss. use a pl. form. Cf. Tsukamoto et al. (1988, pp. 4-5).
36b1 38a1 38b1 39a1 39a2 40a1	(caritāvino) nuttarāyām (pratyakṣo) parokṣa (vyāhāro) sya (verse) (ekībhavitvāna) pi (verse) (sahitā) pi (verse) (cireṇa) pi (verse)	(caritāvino) 'nuttarāy ām (pratyakṣo) 'parokṣaḥ (vyāhāro) 'sya (ekībhavitvāna) ca (sahitā) pi (cireṇa) pi	supreme witnesses and clearly understand this discourse and even also	BHSD (p. 32): Loss of initial vowels in samdhi.

42b4-5 43b2 44b2 48a3/48b1/ 49a1,7/ 49b6/50a6/ 51a1 45b7 46a6/46b1, 2,3,5,6,7/5 0a7 47b4 48b1-2/ 51a1-2 48b2/49a5, 7/50a4/51a 1 48b2 49a7 49b1/50a7 50a6	(loko) sminn (loko) smiṃn (te) pi (verse) (te) pi (tathāgato) pi (tathāgato) rhāṃ (atīte) dhvany (sarve) nuttarāyāṃ (ye) pi (anāgate) dhvani (sarve) nuttarāyāṃḥ (pratyutpanne) dhvani (sarve) nuttarāyāḥ	loko 'sminn (loko) 'sminn/ _____ (te) 'pi (te) 'pi (tathāgato) 'pi (tathāgato) 'rhan (ātīte) 'dhvany (sarve) 'nuttarāyāḥ ye 'pi ___/ (anāgate) 'dhvani (sarve) 'nuttarāyāḥ (pratyutpanne) 'dhva ni/_____ (sarve) 'nuttarāyāḥ	this is being also also also Arhat time supreme also time supreme time supreme	
36b1 38b1	ta (duradhigamaṃ) kaści (lokesmi) (verse)	_____ (dūrānugatāḥ) kaścit (sattvo loke)	that something	Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): When a word ends with the same consonant as the first of the following word, one consonant is often dropped out.
36b4 40b3	durājñānaṃ durāj<ñ>ā{na}ṃ	durvijñeyam _____	difficult to understand	I assume that <i>durājñānaṃ</i> should be <i>durājñātaṃ</i> for two reasons. One is that na is ancillary, so <i>durājñānaṃ</i> is more appropriate than <i>durājñānaṃ</i> . The other is that the letters <i>na</i> and <i>ta</i> have similar forms,

36b5 37a7 38a1 41a1 41b1 42a6 44a6 45a6 47b3 47b6 49a3 49a7 51a3 52a4 52b6	arhatā arhanta tasyā cetasamparivitarkam gabhīrasya kṛtājālī (verse) imām samvraṇam sarvatraiṣām lokānukapāya ida nuttarāyāmḥ punaḥ arhā tasyā	arhatām arhantaḥ _____ cetaḥparivitarkam _____ kṛtāñjalī (verse) imā savraṇam sarvatraiṣā lokānukampāyai idaṃ 'nuttarāyāḥ punas arhan tasyām	Genitive, pl. Nominative, pl Locative the thought of mind profound have hands in prayer Accusative they had their own flaw that for the sake of compassion for the people Accusative Genitive moreover Arhat Locative	Toda (1981, p. xiii, § 2. Orthography): Anusvāra is often omitted but many wrong Anusvāra are found. The same is the case with Visarga. Habata (2007, p. lxxv, § 50): Der Anusvāra fehlt häufig im Auslaut vor anlautenden Konsonanten wie im Mittelindischen. BHS (p. 20, 2.71): Furthermore, as in Pali and Pkt., a final nasal may be lost.
36b5 37b3 42b7 43a2 45a4	tat kasya heto · tat kasya heto · tat kasya heto · darśāvina · bhagavata ·	tat kasya hetoḥ _____ tat kasya hetoḥ darśāvīni bhagavataḥ	what is the reason for it? what is the reason for it? what is the reason for it? met of Bhagavat	The mark · has two meanings; one is as a period. The other is Visarga (:) which lacks one dot. Additionally, Visarga (:) is never present before the · mark. Cf. Habata (2007, p. lxxv, § 52): Der Visarga wird durch zwei Punkte geschrieben. Dieses Zeichen wird auch als Satzzeichen gebraucht, was in der Transkription durch Doppelpunkt dargestellt wird. Es gibt ein anderes Satzzeichen, das in den Handschriften durch einen hochgestellten Punkt geschrieben und in der Transkription durch Semikolon dargestellt wird.
36b6 37a4 37a7	vidhaupāyakauśalya (darśanena) aprameyas mahāścarya	vividhopāyakauśalya _____ mahāścarya	kinds of skillfulness countless great and marvelous	BHS (p. 35, 4.51): Like Pali (Geiger 67), BHS very often keeps unchanged, with hiatus, two adjoining vowels in the seam of compounds; and a fortiori between separate words.

37b1	(samprakāśakā) āścarya	_____	marvelous	
37b4 40a1	(sarvadharmā) api (āmaṃtrayāmi) imi (verse)	(sarvadharmān) api (āmaṃtrayāmi) imi (verse)	also these	
42b1 43b2	(ya) āgatā (verse) (vyākṛyamāṇe) adhimānaprāptās	(ye) āgatāḥ (vyākriyamāṇe) 'bhi mānaprāptās	came these people become arrogant	
44b2	kṛtva aṃjalī (verse)	_____	having joined palms in prayer	
44b3	ha agrabodhim (verse)	prsthita agrabodhaye	supreme bodhi	
44b4	(janayāmi) gram (verse)	paramaṃ janetu	supreme	
46a3 51a4 51b7 52b2	nānābhilāpya ṛṭṭiyasyaiti (vā) arhatvaṃ (yathā) ekam	abhilāpa ṛṭṭiyasya vārhattvaṃ _____	various descriptions ṛṭṭiyasya iti the state of being Arhat the only	
37a2/48b6/ 50b2/51b2 38a5 42a5 42b1- 2/43a6 46a6	mahopāyakośalya/up- āyakośalya buddhakoṭīna (verse) orasā (verse) sagoravā (verse) tathāgatau (rhām)	mahopāyakauśalya buddhakoṭīna aurasā sagauravā tathāgato ('rhan)	great skillfulness <i>koṭis</i> Buddhas own respect Tathāgata	BHSG (p. 28, 3.78): o for au.
38a5 41a5	(buddhakoṭīna) sāntike (verse) (bhagavataḥ) sāntikād	(buddhakoṭīna) antike (bhagavato) 'ntikād	in the presence of (Gen.) in the presence of	BHSD (p. 591): Pāli <i>santike, kā</i> ; this may well be a secondary Sktization, but it reveals the true origin of the M Indic form.

38a7 39b6	buddhā daśadiśe (verse) daśadiśasmin (verse)	anye lokanāyakāḥ daśa ddiśāsu	the Buddhas, who exist in ten directions in ten directions	BHSG (p. 21, 2. 79): Common in many texts is <i>daśad-diśā-</i> (<i>-diśi</i> , etc.); the mss. and editions show inconsistencies, but the overwhelming weight of evidence proves that when a long syllable is required in this combination, even if the mss. read <i>daśa-di</i> , doubling of the <i>d</i> is to be assumed.
38b2	tad (verse)	taṃ	that	BHSG (p. 114, 21.11): The Nominal ending <i>-ṃ</i> (<i>-m</i>) commonly replaces <i>-d</i> (<i>-t</i>), in M Indic.
38b2-3	anyatra bodhisatvebhir (verse)	anyatra bodhisattvebhyo	except for Bodhisatvas	BHSD (p. 41): (2) except; in Sanskrit and Pāli, except is hardly ever used as a preposition (with abl. in Skt., Pali <i>aññatra</i> also with instr. and gen.) ... In BHS, Edgerton has noted a single case, not wholly certain, of <i>anyatra</i> as preposition with instr.
38b3/ 39a6	kṛtādhikārāḥ (verse)	kṛtādhikārāḥ	those who follow/ services performed for (the Buddha)	BHSD (p. 12): <i>kṛtādhikāra</i> is very common and in BHS most often refers to services performed for present or past Buddhas.
38b4-5 46b2,4	jñāne (verse) jñāna	jñāne jñāna	wisdom wisdom	According to Nordturkistanische Brāhmī, Typ a (Schrifttypus V) and Nordturkistanische Brāhmī, Typ b (Schrifttypus VI), it is possible to read as <i>jñāne/jñāna</i> . Cf. Sander (1968, Tafel 29).
38b5 51b2	sarvā-m-aya (verse) tathāgatā-m arhantas	sarvā iya tathāgatā arhantaḥ	this whole Tathāgata-arhats	BHSG (p. 35, 4. 59): <i>m</i> as saṃdhi-consonant. This is much commoner than any of the others, and occurs more or less everywhere, tho more commonly in verses than in prose.
38b5	aya (verse)	iya	this	Due to the meter (<i>v</i>), <i>aya</i> is more appropriate than <i>ayaṃ</i> . Cf. BHSG (p. 20, 2.72): Loss of final nasal occurs in many endings, usually m.c.
38b5	chārisubhāna (verse)	chārisutopamānām	the like of Śāriputra	BHSD (p. 526): <i>śārisuta</i> = prec. (only in vss).

38b6	tvatsadr̥śebhi (verse)	tvam̐sādr̥śakehi	like you	<i>tvatsadr̥śebhi</i> is BHS Ins. pl. According to the compound rule, <i>tvatsādr̥śa</i> is a correct form, so the Kashgar ms. and C3 ms. have a more appropriate form than KN which has <i>tvam̐sādr̥śa</i> . I assume that <i>tvam̐sādr̥śa</i> might be constructed in the Nepalese ms. Cf. BHS (p. 19, 2. 67): In this same place Senart notes the frequent occurrence of <i>t</i> for anusvara (or BHS <i>n</i>) before <i>s</i> , which he nowhere accepts in his edition, writing always <i>n</i> (for either <i>n</i> or <i>t</i> of mss.), or <i>m̐</i> .
39a4-5	mamāgra (verse)	mamāgra	my best	According to Turkistanischer Gupta-Typ (Schrifttypus III), it is possible to read as <i>mā</i> of <i>mamā</i> . Cf. Sander (1968, Tafel 30). Toda (1981, p. 20): <i>mamāgradharmasya</i> . Tsukamoto et al. (1988, p. 47): all Nepalese mss. and Gilgit mss. are <i>mamāgra</i> .
39a7	dharmadeśakās (verse)	dharmabhāṇakās	preacher of the law	BHSD (p. 278): dharmadeśaka. <i>preacher of the law</i> ; =the much commoner dharmabhāṇaka; in BHS, too, not common, despite the frequency of dharmadeśanā.
39a7 39b6 40a3 41b6 44b2 44b3 44b3	(bhavi) mā (verse) (jānāmi) ha (verse) bhāṣāmiha (verse) adya me (verse) (sarvi) ha (verse) (dvādaśa) me (verse) (prārthenti) ha (verse)	daśimā jānāmiha bhāṣāmi adyeme sarve dvādaśime _____	these here tell today here those here	BHSG (p. 32, 4.14): Initial <i>i</i> dropped after vowel.
39b2-3 39b4 39b5	nipuṇa (verse) nipuṇa (verse) nipuṇa (verse)	sukhama _____ sukharma	skillful	All Nepalese mss. and Gilgit ms. use <i>sukhamāya</i> . Cf. BHSD (p. 596): <i>sukhama</i> , MIndic for Skt. <i>sūkṣma</i> .

39b7-40a1 49a7-49b1	ji : nā (verse) śāradvatīputrai · tarhi	iinn śāriputraitarhi	Jinas at this time	: or · does not have any connotation because copyist wrote : or · in order to fill up a space in the 7 th line.
40a1	vināyikaś (verse)	maharṣī	leaders	Despite the fact that <i>vināyika</i> is not a correct word, it is acceptable as having the same meaning as <i>vināyaka</i> , which means leader, because <i>vaināyika</i> is synonymous with <i>vaināyaka</i> , and <i>vināyika</i> looks similar to <i>vaināyika</i> . Cf. only the Kashgar ms. reads <i>vināyika</i> .
40b7/ 41b2	āyusmāñ cchāradvatīputras	āyusmāñ śāriputras	venerable śāradvatīputra	According to Frühe turkistanischo Brāhmī (Schrifttypus IV), it is possible to read this as <i>ñcchā</i> . Toda (1981, p.21): <i>āyusmāñ</i> . Cf. Sander (1968, Tafel 29).
41a5 45b7 52a7 52b2	evarūpām evarūpām evarūpāñām evarūpeṣu	evamrūpo evamrūpām evamrūpāñām _____	such a this kind of kinds of kinds of	BHSD (p. 157): = Skt. <i>evamrūpaṃ</i> .
41a6	bhagavad	bhagavān	Bhagavat!	<i>bhagavat</i> might be Voc. sg. I assume that the copyist wrote <i>bhagavan</i> , which was Voc. sg, but the next copyist thought of <i>bhagavan</i> as <i>bhagavat</i> because <i>n</i> and <i>t</i> look similar. Consequently, the copyist wrote <i>bhavagad</i> because of the saṃdhi rule.
42a4	giridūṃdubhisvara (verse)	varadundubhisvarā	a speech like a large kettledrum	BHSD (p. 211): I am doubtful of <i>-giri-</i> , which seems to stand for a form of <i>gir(ā)</i> , speech, words, and suggest <i>em</i> , to <i>-gira-</i> , m.c. for <i>-girā</i> , see prec.
42a7 44a7	sahasry aśīti (verse) sahasry (verse)	sahasraśītiḥ sahasrakotyo	eighty thousand thousand	BHSD (p. 588): <i>sahasrī</i> . Toda (1981, p. xlv): <i>aśīti</i> is Nom.
42b5/43a7	dvir	dvaitīyakam	second time	Cf. BHSG (p. 70, §10.20).

43a1/44a1	prāṇaśatāni	prāṇīśatāni	hundreds of sentient beings	BHSD (p. 391): Skt. only <i>prāṇin</i> .
43a1/44a1	prāṇasahasrāni	prāṇīśahasrāni	thousands of sentient beings	
43a2/44a1-2	prāṇaśatasahasrāni	prāṇīśatasahasrāni	hundred thousands of sentient beings	
43a2	prāṇakoṭīnayutaśatasahasrāni	prāṇīkoṭīnayutaśatasahasrāni	hundred thousand myriad koṭis of sentient beings	
43a5-6	bahuprāṇakoṭayaḥ (verse)	sahasra prāṇinām	many <i>koṭis</i> of sentient beings.	
44a2	prāṇakoṭīśatasahasrāni	prāṇīkoṭīnayutaśatasahasrāni	hundred thousand koṭis of sentient beings	
44a7	prāṇasahasry (verse)	prāṇīna sahasrakotyo	thousands of sentient beings	
45a3	prāṇasahasrāṇy	sahasrāṇy	thousands of sentient beings	
43a5	narendrarājā (verse)	jināna uttamā	the king of gods among men	Pk, C1-3, P3, T3, 6, 8, A2, 3, N1, and D1: <i>narendrarājā</i> . K, C4-6, B, R, P1, 2, T2, 4, 5, 7, 8, A1, and N2: <i>jināna uttamā</i> . Cf. Tsukamoto et al (1988, 112). There is 法王無上尊 in 『妙法華』, and this Chinese translation might be close in meaning to <i>jināna uttamā</i> . In contrast, there is 人中王 in 『正法華』, and this Chinese translation seems to mean a <i>narendrarājā</i> .
43a5	parśad (verse)	parśāya	in assembly	Toda (1981, p. xxxviii): Loc, sg. f.
43b2,4(verse)/52b6(verse)	adhimāna	*bhimāna/ abhimāna	arrogant	Pāli: <i>adhimāna</i> ; Skt.: <i>abhimāna</i> . See introduction 0.2.4.1.

45a2-3,4-5/45b2/52a3	adhimānika	ābhimānikaṃ	arrogant	
43b4 48b5	ca (verse9 ca	ca ca	and and	According to the Turkistanischer Gupta-Typ (Schrifttypu III), it can be read as <i>ñca</i> . Toda (1981, p. 22): <i>ca</i> . Sander (1968, Tafel 29).
43b6/44b4 51b3	ṭṛṛ tryāna	traifīyakam triyāna	third time three- vehicle	<i>ṭṛṛ</i> is equivalent to <i>trir</i> . Cf. BHS (p. 29, 3.94).
44b6	idānī	idānīm	today	<i>idānī</i> is M Indic for <i>nīm</i> . Cf. Edgerton (1953a, p. 114).
45a4	śīrobhir	śīrasā	with [their] heads	<i>śīro</i> is Gāndhārī language for a head. Cf. Gandhari.org – Gāndhārī Language and Literature
45a4	tadaḥ	tataḥ	from that	Burrow (1937, §14, 15, and 19). Habata (2007, § 38): <i>t</i> und <i>d</i> werden in der zentralasiatischen Überlieferung manchmal verwechselt.
45a6	tuṣṇībhāvena	tūṣṇībhāvenā	with silence	<i>tuṣṇī</i> might be commonly used in the Kashgar ms. Cf. Nishi (2019, p. 104).
45b1 53a3	palapa palāpās (verse)	palāva palāvā	chaff chaff	BHSD (p. 337): <i>palāva</i> or <i>palapa</i> (= Pali).
46a2	tathāgatānāmm arhatām samyaksambuddhānām sandhābhāṣitaṃ	tathāgatasya samdhā- bhāṣyam	the allusive speech of the Tathāgata-arhat- samyaksambuddhas	Only the Kashgar ms. has a plural form. On the other hand, other mss. have a singular form. Cf. Tsukamoto et al. (1988, p. 151).
46b2/48a5/ 49a3/50a2/	samādapana	samādāpana	instructing, incitement	<i>samādapana</i> (Pāli) equals <i>samādāpana</i> . <i>samādapaka</i> equals <i>samādāpaka</i> . Cf. BHSD (p. 567) and Kasamatsu (2016).

50b6/51b4 -5 47a4	samādapaka	samādāpaka	one who encourages	
46b3	pratibodhana	saṃdarśana	awakening, explanation	<i>pratibodhana</i> means awakening, explanation, and the like. C3, C4: <i>sandarsana</i> , N1: <i>saṃdaśana</i> , K and Pk do not have <i>saṃdarśana</i> or <i>pratibodhana</i> .
47a5 47b4	saṃdarśakavatāraka śāradvatīputratīte	saṃdarśaka śāriputrātīte	cause to penetrate in the past	BHSG (p. 33, 4.21, 4.22): loss of final vowels in saṃdhi.
47b6/48b4 /49b2-3/ 50a7-50b1	lokānukampāya	lokānukampāyai	for the sake of compassion	<i>lokānukapāya</i> is Pāli, Dat, sg.
48a1/48b6/ 49b5/50b2 -3	nānādhimuktikānāṃ	nānādhimuktānāṃ	have various strong faiths	<i>adhimuktika</i> : Pāli <i>adhimuttika</i> . Cf. BHSD (p. 14).
48b1	sa dharma	saddharma	the dharma	<i>dharma</i> is BHS Nom. sg. There is a possibility to read <i>sadharna</i> which means the “true dharma.” However, I read it as <i>sa dharma</i> which means “the dharma” because the Chinese translation of 『妙法華』 reads 「法」, but not 「妙法」. Toda (1981, p. 24): <i>dharmā(h)</i> . Cf. Folio 49a6 and 50a5 have <i>taṃ dharmāṃ/dharma</i> .
48b3	asaṃkhyeyesu	asaṃkhyeyesu	innumerable	The letter form looks like <i>yeyāsu</i> , but according to the Frühe turkistanische Brāhmī (Schrifttypus IV), Nordturkistanische Brāhmī Typ a (Schrifttypus VI) and b (Schrifttypus V), it is possible to think that the letter is <i>ye</i> . Cf. Sander (1968, Tafel 36).

52a7	sūtrāṃntānām	sūtrāntānām	kinds of Sūtra	Habata (p. lxii, §43): Nach r sind Konsonanten manchmal verdoppelt. Diese Verdoppelung nach r wird von Pāṇini 8,4,46 gelehrt und kommt oft in Inschriften und Handschriften vor (vgl. AiGr I § 98).
52b7	pañcāno<pa>makāḥ (verse)	pañcanūnakāḥ	less than five thousand	<i>anmakāḥ</i> might be <i>anopamakāḥ</i> , which means muchless. Cf. BHSD (p. 37). Toda (1981, p. 26): <i>pañca</i> 'nomakāḥ.
53a1	bālubuddhayaḥ (verse)	bālabuddhayaḥ	childish intelligence	BHSG (26, 3.57): <i>a</i> is sometimes changed to <i>u</i> after (and perhaps before) labial consonants.

3. Conclusion

First, pertaining to grammatical usage, there are some BHS verb terms in the Kashgar ms. which are not identified in Edgerton's dictionary (BHSG). For instance, it is challenging to determine the correct Sanskrit form for *vyatthāsīd* (folio 36a2), *vijānayet* (folio 38b2), *anucintayinsu* (folio 38b6), and *jānāmahe* (folio 40b6). Moreover, there is an interesting rule that the second-person verb form is used for the third-person verb form ((*bhagavān*) *saṃvarṇayasi*: folio 41a3 and *bhāṣāhi* (*narendrarājā/ dvipadottamā*): folio 43a5 and 44a6). Furthermore, the Kashgar ms. uses *utrasīyati* (folio 43b1) which might be influenced by *utrasta* (Gāndhārī language). Finally, there is a notable point that the term *prativeddha* (folio 36a5) which means penetrate matches 入 which signifies penetrate or comprehend as used in 『正法華』.

Next, regarding nouns, there are some particular conventions described in the Kashgar ms. For instance, hiatus (*vidhaupāyakaśalya*: folio 36a6), the revelation of the true origin of the M Indic form (*sāntike*: folio 38a5, *sāntikād*: 41a5), usage of the common phrase in BHS (*kṛtādhikārāḥ*: 38a3 and 39a6, *deśakās*: 39a7), Pāli form (*adhimāna*: folio 45b2, *samādapana*: folio 46b2), and the specific form of the Kashgar ms. (*dvir*: 42b5, *trr*: 43b6 and 44b4).

Finally, about the orthography, *mā* and *ñca* in Turkistanischer Gupta-Typ (Schrifttypus III), *ñchā* and *ye* in Frühe turkistanische Brāhmī (Schrifttypus IV), *ye*, *vi*, and *jñā* in Nordturkistanische Brāhmī Typ a (Schrifttypus V), and *ye* and *jñā* in Nordturkistanische Brāhmī Typ b (Schrifttypus VI) are used in the Kashgar ms.

Appendix C: Some distinctive features of the Kashgar ms.

These are some distinctive features in comparing the Kashgar ms. and KN. In order to clarify the differences between both mss., some sentence-level differences are listed.

1. The name of *śāradvatīputra*

śāriputra is the most well-known disciple of the Buddha. However, *śāradvatīputra*¹ appears in the Kashgar ms. instead of *śāriputra* which is commonly used in KN.

Seishi Karashima and Jan Nattier (2005) investigated why *śāradvatīputra* appears in the Kashgar ms. They concluded that *śāradvatīputra* was coined in Northwest Indian and subsequently spread to Central Asia.²

Because of this fact, the Kashgar ms., - the so-called Central Asian ms. found near Khotan, might use *śāradvatīputra*, as one of the distinct features of the Kashgar ms.

2. Five or six statements about the Tathāgata's sole purpose (Folio 47a4- 7, KN. 40. 11-13)

After five thousand arrogant people left the assembly, the well-known statement of the Tathāgata's sole purpose and the single aim, which are the Tathāgata-arhat-samyaksaṃbuddha appearing in the world, was taught³. To begin with, five purposes were proclaimed in Folio 46b2-7, and the numbers 3, 4, and 5 were written after each purpose⁴. By virtue of these numbers, it is logical to conclude that there are five purposes for the Tathāgata appearing in the world.

¹ Folio 38b5 (verse 9) of the Kashgar ms.: *chārisu*. Cf. D ja12b5: *shā ridrata'i bu*; P chu14b2: *shā ra dva ti'i bu*; S ma19a6: *shā ri'i bu*; Z ma24a7: *shā ri'i bu*.

² Seishi Karashima and Jan Nattier (2005, pp. 368): It is probable that this version of the name was coined in Northwest India in the course of the Sanskritisation of the language of Buddhist texts, and subsequently spread to Central Asia. The popularity of the form *śāradvatīputra* in those areas seems to have been reflected in certain Chinese translations, where its translation as Qiuluzi 秋露子 began to appear by the mid-3rd century, as described above.

³ Folio 46a6-46b1: *ekakṛtyena śāradvatīputraikakaraṇīyena tathāgatau rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate mahākṛtye<na> mahākaraṇīyena katam etac chāradvatīputra tathāgatasyaikakṛtyaṃ ekakaraṇīyaṃ mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyaṃ yenaikakṛtyena tathāgato rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate .*

⁴ *tathāgatajñānadarśanasamādapanahetunimittam satvānāṃ tathāgato rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate (1) · tathāgatajñānadarśanapratibodhanahetunimittam satvānāṃ tathāgato rhāṃ samyaksambuddholoke utpadyate (2) tathāgatajñānadarśanāvātāraṇahetunimittam satvānāṃ tathāgato rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate 3 tathāgatajñānadarśanabuddhyāpanahetunimit- tam satvānāṃ*

The purpose for the Tathāgata appearing in the world is again addressed in Folio 47a4-7. The sentences are as follows.

[Kashgar ms.] bodhisatvasamādapaka · evāhaṃ śāradvatīputra buddhajñānasamdarśakavatāraka
evāhaṃ śāradvatīputra buddhajñānadarśanāvatāraka evāhaṃ śāradvatīputra
buddhajñānadarśanapratibodhaka evāhaṃ śāradvatīputra · buddhajñānadarśananabuddhyāpaka
evāhaṃ śāradvatīputra buddhajñānadarśanamārgāvatāraka evāhaṃ śāradvatīputra 5

[KN] tathāgatajñānadarśanasamādāpaka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanasamdarśaka evāhaṃ
śāriputra tathāgatajñānadarśanāvatāraka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanapratibodhaka evāhaṃ
śāriputra tathāgatajñānadarśanamārgāvatāraka evāhaṃ śāriputra |

According to the above statements of the Tathāgata’s purpose in the Kashgar ms. and KN, both have five purposes, but at the beginning of the statement, an additional phrase is seen in the Kashgar ms. To begin with, in the Kashgar ms., there is the statement of the Buddha; *bodhisatvasamādapaka · evāhaṃ śāradvatīputra* (Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who leads (encourages) Bodhisattvas).⁵ This statement only appears in the Kashgar ms.,⁶ and it coincides with the Chinese translations, which are rendered 但教化菩薩⁷ (I only encourages Bodhisattva(s)) in *Miaofa lianhua jing* and 教諸菩薩⁸ (I teach Bodhisattvas) in *Zhengfahua jing*.

tathāgato rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate 4 tathāgatajñānadarśanamārg- āvatāraṇahetunimittam satvānāṃ tathāgato rhāṃ samyaksambuddho loke utpadyate 5

⁵ Nakamura 中村 (1995, p. 245) notes, “「教菩薩法」を趣旨とするこの経では、人・天・三乗のすべてを菩薩とし、諸法実相の仏知見に悟入せしめるため、仏陀は世に出現されたとするこの語は重要であると考えられる (I am the only one who teaches a Bodhisattva (私こそは菩薩を教化するものである) is thought important in this text (Lotus sūtra) because the main purpose of this text is Kyōbosappō (教菩薩法). In addition, this expression means that all of the sentient beings, gods, and people who are categorized in three vehicles are Bodhisattva, and the Buddha appears in the world in order for them to be led to Buddha-knowledge which is Shohōjissō (諸法実相)).” He inserts the sentence in his translation, “私こそは菩薩を教化するものである (I am the only one who teaches a Bodhisattva).” However, the Kashgar ms.’s sentence, *bodhisatvasamādapaka · evāhaṃ śāradvatīputra*, is not seen the translation of Sakamoto 坂本 (1991, p. 91) and Matsunami 松濤 (1975, p. 52). Cf. Nakamura 中村 (1995, p. 40).

⁶ Tsukamoto et al. (1988, p. 167). Cf. KN (p. 40) does not mention the Kashgar ms.’s reading.

⁷ T. no. 262, 9, 7a29.

⁸ T. no. 263, 9, 69c8.

Two distinct features can be illuminated by the Buddha's statement found in the Kashgar ms. First of all, the Central Asian mss. and Chinese translations correspond to each other, as Karashima (1992) already noted.⁹ Furthermore, the Kashgar ms. obviously indicates that the only people whom the Buddha encourages are Bodhisattvas. Presumably, this statement by the Buddha, "I am the only one who encourages Bodhisattvas" is consistent with the sayings of the Mahāyāna sūtra that "everyone is Bodhisattvas."

3. The present preacher; śākyamuni (Folio 50a6- 50b1, KN. 42. 12-13)

[Kashgar ms.] aham api śāradpatīputraitarhi pratyutpanne dhvani śākyamunis tathāgato rhām samyaksambuddho bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca ·

[KN] aham api śāriputraitarhi tathāgato 'rhan samyaksambuddho bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca

The Kashgar ms. is the only one in which the Buddha appearing in the present calls himself *śākyamuni*.¹⁰ In fact, *śākyamuni* is the only historical Buddha who has existed in the real world for the benefit and happiness of many living beings. Only the Kashgar ms. uses *śākyamuni* in order to indicate who the present Buddha is.

4. The interpretation of the characteristics; *adhimānika* (Folio 51b6- 52a3, KN. 43. 10-12)

[Kashgar ms.] api tu khalu punaś śāradvatīputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vā arhatvaṃ me prāptam iti prajānīyād anuttarāyai samyaksambodhāyai¹¹ prañidhānaṃ na pratigrhṇīyā¹² nistīrṇāsmā¹³

⁹ Karashima (1992, pp. 253-260).

¹⁰ Cf. Tsukamoto et al. (1988, p. 205).

¹¹ Kern reads *anuttarāyāṃ samyaksambodhau* as Loc. However, the Kashgar ms. reads *anuttarāyai samyaksambodhāyai* as Dat. Cf. Speijer (1973, p. 58, 79): Yet, if it be wanted to express the destination of a real going or moving, the accusative or locative are commonly preferred, although the dative may be used.

¹² BHSD (p. 211): Pres. opt. *nigrhṇīyā* Mv i.348.18. Toda (1981, p. 26): *pratigrhṇīyā(n)*.

¹³ I read *nistīrṇāsmā* as *nistīrṇā sma (smaḥ)* which means that we are accomplished. Toda (1981, p.26): *nistīrṇā 'sma*.

iti vācam tāṣeyā¹⁴ <ni>śchandikā¹⁵ smeti¹⁶ buddhayāne na brūyāt etāvantaṃ me samucchrayaṃ paścimakaṃ etad evam eva parinirvāṇam iti manyeya · adhimānika¹⁷ tvam śāradvatīputra taṃ bhikṣur vā bhikṣuṇī vā saṃjāneyāsi ·

[KN] api tu khalu punaḥ śāriputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣuṇī vārhattvaṃ pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksambodhau praṇidhānam aparigṛhyocchinno 'smi buddhayānād iti vaded etāvan me samucchrayasya paścimakaṃ parinirvāṇaṃ vaded ābhimānikaṃ taṃ śāriputra prajānīyāḥ |

This is about the characteristics of the arrogant people that the Kashgar ms. describes, and it says, “Oh, Śāradvatīputra! Moreover, any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī* who will proclaim ‘I have achieved the state of being Arhat,’ who will not take a vow for the sake of the supreme enlightenment, who will make the statement ‘we are accomplished,’ who will not say concerning the Buddha-vehicle ‘we are free from desire,’ who will think ‘this much is my last birth. Thus, this is the *parinirvāṇa*.’ Oh, Śāradvatīputra! you know that *bhikṣu* or *bhikṣuṇī* is arrogant.” In this statement, there are five aspects of arrogance: any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī* who: (1) proclaims “I have achieved the state of being Arhat,” (2) does not take a vow for the sake of the supreme enlightenment, (3) makes the statement “we are accomplished,” (4) does not say concerning the Buddha-vehicle “we are free from desire,” and (5) thinks “this much is my last birth. Thus, this is the *parinirvāṇa*.”

The explanations of the characteristics of arrogance in the Kashgar ms. and KN are basically similar. However, two (nos. 3 and 4) of the five aspects have different explanations. The aim here is to clarify the differences between the Kashgar ms. and KN through the two statements, “we are accomplished,” and “the Buddha-vehicle.”

First, the Kashgar ms. addresses the statement, “we are accomplished” (folio 52a1). Presumably, they think that they are perfect. On the other hand, *nistīrṇāśma* (we are accomplished) is not seen in KN.¹⁸

¹⁴ The letter *ta* and *bha* look similar, so it must be *bhāṣeyā*, which means heshe will say. Cf. BHS (p. 142-143, 29, 23): *eyā* is Optative 3 sg. Toda (1981, p. 26): *tāṣeyā(n)*.

¹⁵ I add *ni* due to the content.

¹⁶ I read *(ni)śchandikāsmeti* as *(ni)śchandikā sma iti*. Toda (1981, p.26): *(ni)śchandikā 'smeti*.

¹⁷ *adhimānika* is BHS Acc. sg. Toda (1981, p. 26): *adhimānika(m)*.

¹⁸ KN (p. 43, note 7): *nistīrṇā sma iti vācam bhāṣeyā śchandikā smeti* O. Probably to r. *niśchando 'smi buddhayān* (Loc. c.) *iti*

Secondly, there are the explanations about the Buddha-vehicle. The Kashgar ms. says, “[any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī*] will not say concerning the Buddha-vehicle ‘we are free from desire’” (folio 52a1-2). I assume that this is because arrogant disciples thought that they have already achieved their goal which is the state of being Arhat. In other words, according to the Buddha’s view, arrogant disciples will not say anything from the standpoint of the Buddha-vehicle because they have different perspectives in terms of achieving *parinirvāṇa*. On the other hand, KN says, “and saying ‘I am standing too high for the Buddha-vehicle.’” (Kern 1884, p.43. 8-9).

In conclusion, the explanations of the characteristics of arrogant people in the Kashgar ms. and KN are basically similar, in spite of the fact that the way these terms are explained is slightly different. The point is that *nistīrṇāśma* (we are accomplished) is not seen in KN or any other mss.¹⁹ With regard to the meaning of arrogance, AKBh explains: *aprāpte viśeṣādhiḡame prāpto mayety abhimānaḡ*²⁰ (Arrogance means [they believe] “I have achieved the goal (level, thing) concerning the acquisition of the distinct object, which [actually] was not achieved.”). In other words, arrogant people might think that they are perfect because they think that they have achieved the acquisition of a distinct object which they have not achieved. However, in reality, they are not perfect from the standpoint of SP. The expression *nistīrṇāśma* illuminates the characteristics of arrogant people clearly in the Kashgar ms. and through this expression, it is easy to understand the characteristics of arrogant people. Moreover, the Buddha’s suggestion, [any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī*] will not say in terms of the Buddha-vehicle “we are free from desire,” apparently suggests that the goal of the arrogant people and Buddha-vehicle are totally different from the aspect of the Buddha’s view of SP. By means of this Buddha’s suggestion, it is implied that the arrogant people have not achieve the Buddha-vehicle.

5. The relationship between verse 39 and the prose part (Folio 52b7- 53a1, KN. 44. 9-10)

[Kashgar] svāni doṣāṇy apaśyantās chidraśīlā samantataḡ vraṇās ca bahurakṣantāḡ prakrāntā bālubuddhayaḡ 2 (*Pathyā*)

[KN] sampaśyanta²¹ imaḡ doṣaḡ chidraśīkṣāsamanvitāḡ vraṇāḡś ca parirakṣantaḡ prakrāntā bālabuddhayaḡ || 39 || (*Pathyā*)

¹⁹ Cf. Tsukamoto et al. (1988, p. 223).

²⁰ AKBh (p. 285, 2-3).

²¹ WT (p. 41): *apaśyanta*.

As I mentioned in the first chapter, the Kashgar ms. states *svāni doṣāṇy apaśyantās*, which means [they] are not seeing their own defects. On the contrary, KN states *saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ* which means [they] are seeing this defect. The Kashgar ms. and KN have the same meter (*Pathyā*).

In the prose section of the Kashgar ms., there is a relevant sentence: *te ātmānaṃ saṃvraṇaṃ jñātvā sacchidraṃ te tataḥ pariśado prakrāntā*²² (Having understood that they had their own flaw and defect, they left the assembly). Commonly, the prose and verse content correspond in the sūtra.²³ Due to this fact, it could be implied that *vraṇa* and *chidra* in the prose and *doṣa* in verse 39 are synonymous. However, in the literal sense, the meanings of *apaśyantās* in verse 39 and *jñātvā* in the prose are completely opposite.

the prose section of KN, there is a relevant sentence: *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā tataḥ parśado 'pokrāntāḥ*.²⁴ Concerning the prose section of KN, except for *sacchidraṃ te* found in the Kashgar ms., the content of KN is the same as in the Kashgar ms. In other words, *vraṇa* in the prose and *doṣa* in verse 39 are synonymous but not exactly the same. Additionally, the meaning of *saṃpaśyanta* in verse 39 and *jñātvā* in the prose are also synonymous but might not be equivalent.²⁵

All things considered, in KN, there is no contradiction between verse 39 and the relevant prose. However, in the Kashgar ms., this is not the case. To clarify, the Kashgar ms. uses *apaśyantās* in verse 39 and *jñātvā* in the prose. The first chapter of my thesis focuses on the issue that opposite usages are seen in the verse as apposed to the prose in the Kashgar ms.; this, in spite of the fact that it is a well-known fact that verse and the prose correspond to each other.¹

6. The relationship between verse 40 and prose (Folio 53a1-2, KN. 44. 11-12)

[Kashgar] ete kaśātra pariśāyāṃ ddhvamsaṃti jinabhāṣitaṃ tat teṣāṃ kuśalaṃ nāsti ye na dharmāṃ śruṇed imam

[KN] parśatkaṣaṭu tāñ jñātvā lokanātho 'smi dhvamsi tān | tat teṣāṃ kuśalaṃ nāsti śṛṇuyur dharmā ye imam || 40 ||

²² Folio 45a5-6.

²³ See the second chapter, 2.2.2 and 2.3.2.

²⁴ KN (p. 39,1).

²⁵ See the second chapter, 2.4.2.1. (2).

ddhvamsaṃti found in the Kashgar ms. means decay, perish, and be ruined. Kern replaced *ddhvamsaṃti* to *dhvaṃsi* and translated it as exclaimed (1884, p. 44). I assume that Kern read *ddhvamsaṃti* in a different way, and therefore, *dhvaṃsi* was used.²⁶ Moreover, in order to make the verse correspond with the prose section, WT emended *dhvaṃsi*, which was used by Kern, to *'dhivāsai* because the prose section (folio 45a7) uses *dhivāsīt* (Bhagavat accepted) (1934, 41).²⁷

As I mentioned in 1.3.5, the prose and verse are usually related to each other. Therefore, there are three possibilities for thinking about the usage of *ddhvamsaṃti* found in the Kashgar ms.: (1) it can be emended as *dhvaṃsi* because a scribe made a mistake, or (2) *'dhivāsai* should be used because the prose and verse might be related to each other, as WT already emended the text, or (3) despite the fact that Kern and WT did not use *ddhvamsaṃti* in their editions, there is a possibility that *ddhvamsaṃti* found in the Kashgar ms. is acceptable in verse 40 because the prose and verse might not correspond. Alternatively, there may be a different understanding of arrogant people in the Kashgar ms.²⁸ In other words, those of the assembly who are impure (=the arrogant people) are ruined after they left the assembly, therefore, *ddhvamsaṃti* might be used in the Kashgar ms.

2. Conclusion

Through the above analyses, there may therefore be some terms of the Kashgar ms. which have few sentence-level differences when compared to KN.

First, to provide some examples: (1) *śāradvatīputra* instead of *śāriputra* is used for the well-known disciple's name, (2) using the word “*śākyamunī*” as a means to express the Present Buddha, (3) expounding the characteristics of arrogant people stated as *nistīrṇāśma* (We are accomplished) and *(ni)śchandikā smeti buddhayāne na brūyāt* ([any *bhikṣu* or *bhikṣuṇī*] will not say in terms of the Buddha-vehicle that “we are free from desire”), and (4) *sacchidraṃ* ([they] had a defect) of the Kashgar ms.'s prose part corresponding to verse 39, these unique additional pieces of information contribute to the understanding of the textual content, but do not in any case affect the content of the Kashgar ms.

²⁶ KN (p. 44, note 8): *dhaṃsanti jinabhāṣitam* O. Cf. C3, C4: *dhvansayi*, K, Pk, N1: *dhvaṃsayi*. Tsukamoto et al. (1988, p. 239).

²⁷ WT (p. 41). Cf. folio 45a7: *dhivāsīt*.

²⁸ S ma29b4; Z ma31a1: 'jig rten mgon po ngas kyang bsal ba yi ||

Next, some readings reinforce the fact that the Chinese translations and the Central Asian mss. correspond with one another. For instance, in a literal way, there are correspondences between the following (1) the Kashgar ms.'s reading: *bodhisatvasamādapaka · evāhaṃ śāradvatīputra* (Oh, Śāradvatīputra! I am the only one who leads (encourages) Bodhisatvas), and the Chinese translations: 但教化菩薩 (I only encourage Bodhisatva(s)) and 教諸菩薩 (I teach Bodhisatvas), and (2) the Kashgar ms.'s reading: *apaśyantās* ([they] are not seeing), and the Chinese translations: 不自見 ([they] do not see).

However, some readings do not strengthen the case that the prose and verse are related to one another. For example, literally, *jñātvā* (having understood) found in the prose section does not match *apaśyantās* ([they] are not seeing) in verse 39 found only in the Kashgar ms. Additionally, *ddhvaṃsaṃti* (they (arrogant people) are ruined) in verse 40 of the Kashgar ms. does not correspond to *dhivāsīt* (Bhagavat accepted) used in the prose section. In short, if *apaśyantās* or *ddhvaṃsaṃti* were employed, there would be a contradiction between the meaning of the prose and verse in the Kashgar ms.

Moreover, *apaśyantās* ([they] are not seeing [their own defects]) in verse 39 is seen only in the Kashgar ms. Despite the fact that *apaśyantās* literally matches the Chinese translation 不自見 ([they] do not see [a defect]) and *apaśyantās* is the distinct feature of the Kashgar ms., this word would recharacterize the arrogant people's conduct if *apaśyantās* were literally utilized in the text instead of *sampaśyanta* ([they] are seeing [this defect]) which is found in KN and other Nepalese mss.

Similarly, in verse 40, if *ddhvaṃsaṃti* (they (arrogant people) are ruined) found in the Kashgar ms. were used in place of *dhvaṃsi* (the Lord exclaimed) or *'dhivāsai* (the Lord granted), *ddhvaṃsaṃti* could have some influence on the issue of whether the arrogant people would be ruined after they left the assembly.

In conclusion, some apparent sentence-level differences are seen in the Kashgar ms., but these terms do not essentially affect the textual content. In fact, some of the terms found in the Kashgar ms. are useful to understand the context. However, there are two interesting facts, namely, that the only the Kashgar ms. has unique readings, *apaśyantās* and *ddhvaṃsaṃti*. According to Fuse (1934), the verse of chapter two *Upāyakauśalya* is the oldest part in SP. In other words, we have to be careful in considering emending the words found in verse as a means to make the prose and verse correspond, in spite of the well-known fact that the prose and verse are related. Verses 39 and 40 prompt two suggestions: (1) it is necessary to think of the relationship between the prose and verse, and (2) in the

case of the context from the beginning to verse 41, the Kashgar ms. might have different interpretations in describing which describe the arrogant people's habits when compared to other mss.

Word Index to Sanskrit text (the Kashgar ms. and KN)

The Sanskrit words, numbers and marks of the Kashgar ms. are listed on the left side. In addition, the folio number of the Kashgar ms. as well as the word and the pagination that belongs to KN are listed on the right side. Please note that the words and the pagination are enclosed in parentheses.

Words whose forms are unclear or unusual (verb)

anucintayinsu	38b6 (anucintayeyuḥ 31,10)
aprcchato	41b5 (aprcchito 34,11)
abhiśraddadhāsyamti; śraddadhīsyamti	43a3 (śraddhāsyanti 36,7);44a3 (śraddhāsyanti 37,10); 44b1 (śraddadhāsyanti 38,3);44b2 (śraddadhāsyanti 38,5)
abhūva	47b4 (abhūvan 40,16)
utrasiṣyati	43b1 (utrasiṣyati 37,1)
<jā>nāmahe	40b6 (jānīmaḥ 33,11)
ddhvamsamti	53a1-2 (dhvamsi 44,11)
dhyutthāya	36a2 (vyutthāyā 29,1)
prakrāntā	45a6 ('pakrāntāḥ 39,2)
pratigrhṇīyā	52a1 (aparigrhya 43,12)
pratyaśroṣīd	45b4 (pratyaśrauṣīt 39,6)
bhāsyāmy	45b3 (bhāsiṣya 39,5)
vyatthāsīd	36a2 (vyutthito 29,1)

Words whose forms are unclear or unusual (noun)

tuṣṇībhāvena	45a6 (tūṣṇībhāvena 39,2)
pañcāno<pa>makāḥ	52b7 (pañcanūnakāḥ 44,8)
vināyikaś	40a1 (maharṣī 32,16)
śirobhir	45a4 (śirasā 38,14)
sa dharma	48b1 (saddharmaḥ 41,8)

令和 2 年（西暦 2020 年）度 博士学位論文（国際仏教学大学院大学）

Saddharmaṇḍarīkasūtra 第 2 章 *Upāyakaśālyā*

における *ābhimānika*（増上慢）の研究

富永曜照